365+　【3分間のショートストーリー】

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３６５＋　【３分間のショートストーリー】

【Ｎコード】
Ｎ８２３４Ｐ

【作者名】
いとかなし

【あらすじ】
【サンロクゴ・プラス】……３６５話＋αの１話完結型ショートストーリーです。
詩あり、小説あり、ラノベあり……ジャンルは様々なんでもありの短編集です。
１話約３分程度の物語。お気軽に読んでください。
（Ｒ指定はございませんが、どちらかというと大人向けです）

００１　恋人たちの輝き

イルミネーション輝く夜の街で、美智（みち）は俯いた。
三か月付き合っている彼氏は、会社の大プロジェクトに関わっているらしく、週末のデートもドタキャンされたばかり。ようやくこぎつけた今日のデートも、連絡なしに待ち合わせの時刻を過ぎている。
目の前に続く並木通りは、“恋人たちの輝き”と題されたイベントがあるらしく、多くのカップルが自分とは対照的に笑顔を見せる。
別れの文字が頭をよぎった――。
でも彼のことを思い出せば、嫌いになれない自分がいる。
（あと、五分待とう……）
美智は腕時計を見つめながら、ガードレールに腰を下ろす。
五分前も、そう思ったばかりだ。
その時、美智の携帯電話が震えた。メールである。
“ごめん！　やっぱり今日も残業から抜けられなそう。あとでまた連絡する。”
たったそれだけのメール。
自分の惨めさに、美智は涙を堪えて顔を上げた。
ちらつく雪が、自分の身の上を凍えさせるようだ。
「わあ！」
その時、街全体が暖かくなるような錯覚を覚え、どこからともなく歓喜の声が上がった。
見ると、並木に付けられたイルミネーションが、倍以上の明るさを見せ、周りのビル街から明かりが消えている。
地上だけが明るさを見せる中で、美智の目に、こちらへ一直線に走ってくる男性の姿が映った。

「美智！」
そう呼ばれ、美智の目から涙が溢れる。
なぜこんなにも、彼を求めてしまうのだろう――。
「美智。遅くなってごめん。寒かったよな……」
ためらいもなく。彼の手が美智の手を包む。
「どうして……仕事は？」
やっと出た言葉に、彼は優しく微笑んだ。
「仕事だよ」
そう言って、彼は輝く街を示した。
たった十五分間、この通りに面したビル街を暗くし、並木に取り付けられたイルミネーションを倍以上の明るさで輝かせる、それが彼の携わった仕事であった。
「いつも仕事ばかりで待たせてごめん。でも、俺は美智のことが大好きだよ。だから結婚しよう。ずっと一緒にいたいんだ」
そう言いながら、彼が差し出したのは、イルミネーションに負けないくらい、輝く宝石（いし）の指輪だった。
美智の目から、更に涙が溢れる。
「……はい」
遥か先まで続く光の道は、未来へ続くバージンロードにも見えた。

００２　旅の途中

カイは歩き続けた。
ある時は灼熱の砂漠を、ある時は無数の人ごみの中を、脇目も振らずに歩き続けた。
きっかけはなんだっただろう。家族との些細な喧嘩――。今のカイには、怒りしかない。

「み、ず……」
やがてカイは力尽き、倒れた。
もう長い間、食べることも飲むこともしていなかったことに気付く。
（ここはどこだろう。僕はどうしてここにいるのだろう……）
力尽きたカイは、初めて振り返った。
するとそこには、果てしなく広がるごちそう。見なれた家と、暖かなベッドがある。
「ああ。僕はどうして歩き続けていたのだろう。僕にはあんなにも暖かな家が、帰る場所があったのに……」
目が覚めると、カイは海の家の軒先で眠っていたことに気付いた。
「やっと振り返ってくれたのね、貝（カイ）。一緒に帰りましょう」
そう言って、ヤドカリがカイを背負う。
夕日の眩しさが、二人を包んだ。

００２　旅の途中（後書き）

本来、ヤドカリの貝は殻ですが、作中の貝は生きているのか、友達なのか、妄想なのか、なんなのか……解釈は読み手次第です。

００３　白紙に戻そう

モノ書きは、今日も筆を走らせる。

頭の中は宇宙のように、無限の世界を繰り広げているのに、なぜだか世に送り出すことが出来ない。

それでも、やっと、物語が走り始める。

だがモノ書きは、その筆を止める。

そしてゴシゴシと、原稿用紙を擦り始めた。

「白紙に戻そう」

人生が終わったわけではない。物語はまた走り出すだろう。

モノ書きは、今日も筆を走らせる。

傍らには、小さくなった消しゴム。

「今日もやろう、相棒よ」

傍らには、使い古した何本かの筆。

「今日もやろう、相棒よ」

モノ書きは、今日も筆を走らせる。

００４　きもだめし（前書き）

※ほんの少しホラー要素を含みます。

００４　きもだめし

三丁目の空き家には、幽霊が出るという噂。
待ち合わせ時間は、夕飯を食べてから。クラスメイトの数人が、あの家の前で待っている。
「少し早く来すぎたか」
僕は幽霊屋敷と呼ばれるその家の前で、クラスメイトを待った。
でも、待てども待てども、一人も来ない。
「あいつら、怖気づいたんだな」
だいぶ時間が過ぎた頃、僕はそう悟って、一番近いクラスメイトの家を訪れた。
でも、何度呼び鈴を鳴らしても、誰も出てこない。
「家族で出かけたのかな……他の子の家へ行ってみよう」
僕はそのまま、もう一人のクラスメイトの家を訪れた。
そこは明かりがついていたので、僕はそっと、庭から家の中を覗く。
見なれたクラスメイトの顔がある。でも、外へ出かける様子はない。
「おかしいな。約束は今日じゃなかったっけ」
僕は諦めて、家へと戻っていった。だが、どうもおかしい。
「僕の家、どこだっけ……」
無意識に向かった先は、三丁目のあの空き家。
「そうだ、ここが僕の家だったんだ」
一家心中で誰もいなくなった空き家は、幽霊屋敷と呼ばれている。
今も子供の影が、うろついているという。

００５　ぬくもり

温もりが、指先から伝わった。

「……」

無言の緊張が、辛うじて触れ合っている二人の指と指に走る。

温もりが、緊張が、指先から伝わった。

「……」

彼の指先が、彼女の頬に触れる。

温もりが、緊張が、息づかいが、指先から伝わった。

「……」

二人の唇が、初めて合わさった。

温もりが、唇から伝わった。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

００６　行列が出来始める料理店

「うまい！」
滝のような汗を流しながら、小太りの男は食べ続ける。
店にはまばらな客しかいない。
「うまい、か……？」
他の客が、首を傾げながら料理をつまむ。
まずくて有名な店――。
自分の舌で確認しても、お世辞にも美味しいとは言えない。
「うまい！　おかわり！」
だが、小太りの男は、更に注文を続ける。
流行らない料理店の主人も、あまりの注文に追いつかない。
「うまい、かな……」
「あの人が食べてるの、注文してみようよ」
どんなにうまいものなのか、一人の客が、小太りの男と同じものを注文してみた。
やがてやってきた料理に、客たちは顔を見合わせる。
見た目はお世辞にも、美味しそうには見えない。
「た、食べてみよう」
それを口に運んだ。
お世辞にも、美味しいとはいえない。
「うまい！　追加注文！」
小太りの男は、更に注文を重ねる。
一向に食べ終わる気配のない小太りの男を尻目に、客たちは首を傾げて帰っていく。
「うまかった、か……？」
「客寄せじゃないの？　サクラ」
「それにしては、うまそうに食べていたぞ」
客たちは、首を傾げる。

「うまかった、か……？」
「そういえば、よく覚えていない」
「もう一度、食べてみようか」
客たちは、首を傾げる。
「うまかった、か……？」
「あの人、見かけない顔だったね」
「グルメ雑誌のお忍び取材かもしれない」
根も葉もない噂だけが、ご近所中を駆け巡る。
「ああ、ごちそうさま」
店の材料がなくなったと同時に、小太りの男がやっとそう言った。
料理店の主人も、ほっと胸を撫で下ろす。
小太りの男は、会計を済ませ、背を向けた。
「食った、食った。三日ぶりの食事だ。何食べてもうまい！」
料理店の主人は、あんぐりと口を開ける。
空腹は最大の調味料――とは、よく言ったものだ。
だが次の日から、店の前には行列が出来始めるようになった。
「うまいのか？」
「まずいよ！」
「うまいんだろう？」
「まずすぎて、笑っちゃうよ！」
「うまくないのか？」
「どうしてあんなにまずくなるの？」
「あのまずさ、癖になる」
違った意味で、店は大反響。
やがて店主の腕も上がり、店の味も美味く落ち着いたとか。

007　KISSの隙間で

唇が重なる。舌が絡まる。なんて甘い声――。
愛しい人に呼ばれる自分の名前が、なぜこんなにも胸が高鳴るのか。
まるでその人の宝物のように、私の名前が大切にされて輝いている。
「朝までこうしてて」
「ああ」
真っ白なシーツの上で、私たちはただキスを繰り返した。
時間が止まればいいなんて瞬間、本当はあんまりない。だけど今だけは、このまま時間が止まって欲しい。離れたくない。朝なんて、来なければいいのに――。
だけど、時間は止まらない。朝はやって来る。
「部長」
朝になれば、魔法が解ける。
今日もまた、上司と部下という、無機質な関係――。

008　あいつはだあれ？

あいつは潔癖症。
あいつは綺麗好き。
あいつは掃除じょうず。

だけど――

あいつは気まま。
あいつは自分勝手。
あいつは散らかし放題。

あいつはだあれ？

あいつは風。

あいつはだあれ？

春風、北風、つむじ風。

今日も木の葉を集めてる。
と、思ったら、今度は垣根を壊したよ。

耳元で、あいつがささやく。
身近な噂話も、遠い異国の話も、あいつはなんでも知っている。

あいつはだあれ？

あいつは――。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

009　女ゴロシ

俺の名前は、拓也。親から授かったこの顔で、女の子にはモテる。とっかえひっかえやったって、女は俺に文句なんか言わない。だって俺に嫌われるのが嫌なんだ。

でも、同じ年にも年下にも、もう飽きた。従順なだけでは、俺の退屈は紛れやしない。

俺の理想は一筋縄にはいかない、そう、優子さんみたいな人がいい。

彼女は俺の一番近しい女性だ。恋愛に、年の差なんて関係ないだろ。

「駄目よ、たっくん。また女の子に片付けさせて。ちゃんとお片付けなさい」

幼稚園の教室で、彼女が俺を怒鳴りつけた。

俺を叱るやつなんて、親でもそうそうないのに。

でも、そんな彼女だからこそ、俺は惹かれているに違いない。

「優子先生。おっきくなったら、絶対俺と結婚してよね」

今はチビの俺だけど、十年後を待っていてほしい。

010　プリマドンナ

今日も広いフロアに、トウシューズの軽やかな足音と、クラシックの音楽が響く。
「アン、ドゥー、トロワ。アン、ドゥー、トロワ……」
いつも誰よりも早く来て、いつも誰よりも遅く帰るのは、努力家のアンナ。
アンナはお姫様を夢見て、バレエを始めた。
「アン、ドゥー、トロワ。アン、ドゥー、トロワ……」
みんなが帰ったフロアで、アンナは鏡を見つめる。
年頃の娘ではあるが、その体系はバレエを始めても細くならず、初心者の小太りで、発表会にも出してもらえない。お姫様など、夢のまた夢だ――。
それでもアンナは、練習を続ける。
「アン、ドゥー、トロワ。アン、ドゥー、トロワ……」
プリマドンナを思い浮かべて、アンナは軽やかに舞う。
一人きりのフロアは、アンナには広過ぎるわけでもない。
「あれ。まだ残っていたの？　熱心だね」
そこにやってきたのは、ロシュ。いつも王子様役をしている。
アンナとは、しゃべることも初めての、雲の上の存在である。
「お姫様の踊りだね。僕が相手しようか」
そう言うのと同時に、ロシュはアンナに手を差し出す。
筋肉質なロシュと、ぷにぷにとしたアンナの手が触れ合った。

なんて不格好な二人だろう――。だが、アンナは幸せだった。
（ロシュと踊っている。しかも私はお姫様だ……夢にまで見た、プリマドンナになれる……）
「そこでターンして。大丈夫、僕が支えるから」
ロシュの言葉に、アンナは無言で応える。

「……無言のままだね。でもいいよ。今だけは、王子と姫なんだから。さあ、お姫様」
夢見心地とはこのことだ。
アンナはうっとりと、ロシュを見つめる。
やがて、ロシュはおもむろに、アンナの腰を掴んだ。
とっさに、アンナは足を踏ん張らせる。
「リフトだよ。いくよ」
「キャア！」
初めてのリフト。アンナの体は強張って、持ち上がりはしなかった。

気がつくと、アンナは踊っていたはずのフロアで横になっていた。
いつの間に寝ていたというのか。すべては夢だったのだ――。
アンナは微笑む。夢でも幸せだった。
「アンナ」
そこにやってきたのは、ロシュであった。
アンナは、何度も瞬きをする。
「大丈夫かい？　急に倒れたんだ。はい、水」
差し出された水を無言で受け取るものの、アンナはロシュから目が逸らせない。
「どうかしたの？」
「私……」
「リフトしようとしたら、失敗してね。ごめん、突然で怖かったよね」
優しいロシュの顔が、そこにある。
「私……？」
ふと、自分の顔が鏡に映った。
恋をする自分の顔は、いつもより痩せて見える。
「アンナ？」
「私、太ってるから……」

アンナの言葉に、ロシュは吹き出すように笑った。
「どこが？　大丈夫。またリフトに挑戦しよう。また踊ろう」
そう言ったロシュに、アンナは微笑む。
（そうだ、私は人より太っていると自分で思っていただけ。たとえ少しくらい太っても、それを改善する努力だってしてこなかった。練習量は誰より多い自分は、何を卑屈になることがあるというの。ロシュともう一度躍るために、お姫様になるために、これからも頑張ろう。そして諦めなければいいじゃない）
アンナの笑顔は輝き、更に練習に磨きをかけた。
たちまちアンナの体は筋肉質に絞られ、次の発表会には念願のお姫様という座を手に入れたのは、彼女自身の努力の賜物である――。

011　神だのみ

古都・京都――。
地方からの中学二年生が、今日もこの町に訪れている。
「次どこだっけ？」
「金閣寺だよ」
「うおー。テンション上がる！」
班に分かれての自主行動で、少年少女が寺や神社を回る。

「ごめん、私ちょっと、受付行ってくるね」
一人の少女が、そう言って受付へ向かう。
「また？　三宅さん、さっきも寄ったじゃん。受付」
「御朱印してもらうんだって」
「ゴシュイン？」
その時、そばにいた少年が、無言で受付に隣接した売店へと向かう。
「おい、斉藤？」
「僕も売店でちょっと買い物。三宅は連れてくから、先に金閣寺行っていいよ」
斉藤と呼ばれた少年は、売店へと向かっていく。
残された生徒たちは、渋々そこから去っていった。
「三宅」
「斉藤君？　あ、ごめんね。待たせちゃって」
「いいよ。みんなは先に行かせたし。僕も買い物」
「そう」
三宅と呼ばれた少女は、班を乱している自分に苦笑する。
「終わった？　行こっか」
「うん」
二人は見知らぬ地、二人きりで歩き始める。

地元では、取りたてて仲が良いわけでもなかった。
「渋いね。御朱印なんて」
斉藤が笑う。
「あ……おじいちゃんの影響で。集めるの、癖になってて」
「いいんじゃない？　僕も祖父からもらったことあるよ」
斉藤の言葉に、三宅は微笑んだ。
「斉藤君は？　なに買ったの？」
「僕は御守り。家族みんなに」
「うん。私もさっき買ったよ」
ゆったりとした波長が、二人の間に流れているように見える。
斉藤は、買ったばかりのお守りを、鞄に入れる。
「御守りも、いろいろあるのな。自分の分も買っちゃった」
「本当？　あ、学業の？」
「ううん。恋愛成就の縁結び」
鞄に入れる前に一つだけ取り出しておいた御守りを、三宅に見せる。
「え！　あ、斉藤君、勉強出来るもんね」
「そんなことはないけど、実力で出来ることは、神様には頼まないんだ。恋愛は、よくわかんないから、神様にすがる！」
歯を見せて笑う斉藤に、三宅も吹き出した。
「あ、見えた、見えた。金閣寺」
「わあ。すごい！」
「あいつらも発見。合流しよう」
「うん」
二人は、班の仲間に合流する。
そこからの帰り道、今度はみんなで寄った売店で、三宅は斉藤と同じ御守りを買った。

012　チビとのんちゃん

チビは雑種の子犬。
小っちゃいから、チビ。安易だけど、みんなに愛されている。
チビが遠藤家にやってきたのは、冬も終わりかけの、まだ寒い日だった。

「駄目、のんちゃん！　野良犬は噛むかもしれないから、触っちゃ駄目よ」
まだチビが公園で暮らしていた頃、のんちゃんはママに叱られても、チビに近付くのをやめなかった。
「犬ならパパにお願いしてみよう。近くにペットショップあるし、飼ってもらえるかもしれないよ？」
「やだ！　この子がいい！」
「わがまま言わないの。駄目なものは駄目！」
無理やり抱きかかえられ、のんちゃんはチビから引き離された。

数日後、同じ公園に行っても、チビの姿はなかった。
のんちゃんは、チビに会えるのを楽しみにしていたので、残念で仕方がない。
「あ、チビ！」
だが帰りかけの公園、のんちゃんは近所の小学生にいじめられている、チビを発見した。
「やめろー！」
一目散に駆け出したのんちゃんは、倍以上大きい体の小学生に、体当たりをする。
「チビ、逃げて！」
そう言うのんちゃんに、チビは逃げようとしない。
今度はのんちゃんの周りで吠え始め、小学生を威嚇した。

「チビ……」

やがて、一瞬見失っていたママが、のんちゃんを助けに来た。

のんちゃんはチビを抱きしめ、ママを見つめる。

「絶対面倒みるから、チビを飼って。このままじゃチビ、また苛められちゃうよ！　それにチビ、のんちゃんを守ってくれたよ」

のんちゃんの熱意に負け、ママは小さく頷いた。

その日から、遠藤家にはチビがいる。

のんちゃんとは、片時も離れない相棒。

013　スクープ

俺は報道カメラマン。事件を追って、西東。だけど最近、事件がない。

「葛西さん、見ましたよ。この間の、痴漢逮捕の記事」

後輩の記者に言われ、俺は鼻で笑う。

「あれは運がよかった。たまたま居合わせた電車で、痴漢が逮捕されたんだから。でも俺はな、本当はそんなチンケな事件は相手にしないんだよ」

「まあそうですよねえ。数年前に葛西さんが撮ったスクープ、火災現場の消防士の勇姿、今でも目に焼きついてますよ」

後輩に過去の栄光を引き合いに出されたが、俺は悪い気はしない。あの時も偶然に居合わせたスクープ写真が撮れたが、それを超える写真はまだ撮れない。

「見てろよ。俺のカメラマン魂は、あれで終わりじゃない。あっと言わせるスクープを撮ってやるからな」

「ハハ。期待してますよ」

愛想笑いを含み、後輩は去っていった。後輩と言っても、今では出世して俺より上の立場だが――。

「葛西！」

その時、俺は部長に呼ばれて、部長のデスクへ向かった。

「はい、なんでしょう、部長」

部長の浮かない顔に、俺は悪い話だと感じ、身構える。

「実はな。ちょっと言いにくいんだけど……おまえが担当しているコーナー、打ち切ることになった」

「ええ！」

俺は驚いた。時事ネタを武器に、俺は街の声を直接聞いて、撮って、記事にしていたはずだ。

「ど、どうして……」

「まあ、新しい時代ということだ。若い者に、新しい時事ネタのコーナーを任せることにした。おまえの担当コーナーが、一番反響が薄いんだ。悪いと言ってるわけじゃない。だが、わかってくれ」

俺は返事もなしに、ただふらふらと会社を出て行った。ショックだった。

「スクープ……スクープがあれば……」

俺は家に帰ると、過去の自分が書いた記事を読み返した。決して面白くないわけではない。だがもう一度、数年前のような大スクープを撮りたい。そして、俺は名を馳せる。

考えが固まり、俺は真夜中の湖へ向かった。

辺りに人影などなく、真の闇が迫っている。

だが、俺はそんなことに恐怖を感じることもなく、ただ黙々とカメラをセットした。

「よし。俺はこれで、名を馳せることが出来る……」

ためらいもなく、俺は俺自身に火をつけた。

カメラのシャッター音が鳴り響く中で、真夜中に俺の最期の炎が上がった。

０１４　死体の森（前書き）

※少しホラー要素を含みます。

０１４　死体の森

森の奥深くに、一人の男がいた。その男は、悔やんでも悔やみきれず、ただ罪の意識だけを持ち、途方に暮れていた。

「死にたい……」

だが男には、首を吊るロープも、体を燃やす炎も、自身を切り刻むナイフも持っていない。

その時、一人の女が、男の前へやってきた。

「ちょうどよかった。何か……自殺出来る物をお持ちではありませんか？」

男の言葉に、女もまた表情もなく、ロープを差し出した。

「私も死ぬつもりで来たんです」

「それはよかった。あなたからもらったこのロープで、私は晴れて死ぬことが出来ます。あなたに会えて本当によかった。さようなら」

そう言って、男は命を絶った。

急に、女は怖くなった。

たった今まで生きていた男の死を前に、女はふと、何かに気付いた。

そこには、今まで生きていた男だけではなく、他の見知らぬ男女の首吊り死体が、近くの森じゅう、無数に並んで吊られているのに気が付いたのだ。

「キャ――！」

女は我に返って後ずさる。近くに絶壁があることも知らずに――。

体が落ちかかったところで、女は間一髪、崖から落ちることから逃れた。だが、片側に背負っていたリュックは、崖の下に落ちてしまった。

女は途方に暮れた。

あのロープを男にあげなければ、自分は死ねていただろう。自分だけ生き残ってしまったことも、男を殺したのが自分である錯覚に

も思え、女は罪の意識に捉われた。

「死にたい……」

だが女には、首を吊るロープも、体を燃やす炎も、自身を切り刻むナイフも持っていない。

その時、一人の男が、女の前へやってきた。

０１５　Ｇ宇宙戦争（前書き）

※昆虫のＧが苦手な方はスルーしてください。

０１５　Ｇ宇宙戦争

宇宙暦・九万一年。
新型の宇宙船から、船員たちが一つの星を見つめている。
「あれが地球か。昔はあそこにヒトという種族が支配していたなんて、歴史教育の嘘っぱちもいいとこだ」
「見ろよ、あの星。ヒトが滅茶苦茶にしたなれの果て。昔は青い星だったというが、それも本当か嘘かはわからない。薄汚れた色で、住めたものではない」
「そんな歴史が繰り返さないために、優れた能力を持つ我々が支配する。ヒトなんて、元々弱すぎる種族だったのに、知能だけは程々にあっただけの滅びゆく種族。我々の敵ではない」
「地球にいた頃、我々とは天敵だったらしいぞ」
「ごきぶり、と言われていたそうだ」
カサカサと、話し声が絶えなかった。

０１６　クラリネット壊しちゃった

「ドとレとミとファとソとラとシの音が出ない」

「は？」

「だから！　ドとレとミとファとソとラとシの音が出ない！」

「当たり前でしょ。電子クラリネットなんだから。ほら、スイッチ入れて」

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

017　生命の灯火

「お母さんなんて知らない！」
些細な喧嘩だったけど、私は怒りに震えて自分の部屋へと戻っていった。
思春期や反抗期だけでは片付けられない苛立たしい思いが、毎日自分の中を走っている。

目を閉じると、私は真っ白な世界にいた。きっと夢である。
辺り一面には、ろうそくの絨毯。でも天井も床も白いから、最初はろうそくだってわからなかった。
「君、どうしてこんなところに……」
中学生の私よりも、五歳くらい若いと見られる一人の子供が、私に気付いて駆け寄った。
駆け寄ったというより、飛んできた。その子の背中には、小さな羽根があったのだ。
「あなた、天使？」
私はあるだけの知識から、そう判断して尋ねる。
「そうだよ。君は人間だろう？」
「どうしてわかるの？」
「羽根がないもの」
「ああ、そうか」
納得した途端、私は天使に手を引っ張られた。
「とにかく帰ろう。早くここから出なくちゃ」
「どうして？」
「君が住む世界とは違う。長居してたら、こっちの住人になってしまうよ」
「別にいいわ。お母さんと喧嘩したの。もう帰りたくない」
私の言葉に、天使は少し悲しそうな、怒ったような、そんな複雑

な顔をする。
「とにかく、君のろうそくを探して」
「ろうそく？　この中にあるの？」
「そうだよ。これは人間たちの、命の灯火。長さが違うのは、その人たちの命の長さだよ」
それを聞いて、私は息を呑んだ。
そして、何かに導かれるように、私はろうそくのじゅうたんを歩く。
「あった……」
ろうそくの炎の中に、私の顔が見えた。私のろくそくだ。
だが、極端に短く、もうすぐ消えそうだ。
「短い……」
「死期が迫っているんだよ。早く君の世界に帰さなくちゃ」
自分のろうそくを持って、私は天使に促されるまま、立ち上がる。
だがその時、私は一つのろうそくに釘付けになった。
ろうそくの炎の中には、お母さんの顔が浮かんでいる。
「お母さん！」
お母さんのろうそくもまた、短くなっている。
「どうして？　お母さんは、こっちの世界にはいないのに！」
天使にすがるように、私は涙目で叫ぶ。
「……早く戻るんだ！　君だって、こんなところにいたくないだろう？」
「うん。私、帰りたい。お母さんに、謝ってもいないもの！」
気がつけば、私は自分の寝室で目を覚ました。
だが、目の前にはお母さんがおり、その手は私の首を絞めている。
「お、母さん……ごめん、なさい……」
苦しさにもがきながらも、私はそう口にした。
お母さんは涙を流しながら、私を抱きしめる。
「ごめんなさい。ごめんなさい……」
今度はお母さんが、私にそう謝った。

「うちは貧乏で、あんたも反抗期、私も育児ノイローゼ気味で、どうしたらいいのか……いっそ二人で死ねたらと思ったけど、ごめんね……ごめんね……」

「思いつめさせてごめんなさい、お母さん！　私も、ごめんなさい……！」

和解した私たち親子の間に、ろうそくの蝋の匂いがかすかに匂った。

その日から、私はいつ終わるかわからないろうそくの炎を心に映して、出来るだけ親孝行を心がけている。

あれから五十年経った今でも、私たち親子は元気に生きている――。

０１８　スター誕生

顔はまあまあ、体系も普通。
得意なことといえば、声がデカイこと、態度がデカイこと、とりあえず慕ってくれる仲間が多く、カリスマ性はあることくらい――。
「はい、もう一度最初から！　ファイブ、シックス、セブン、ハイ！」
なぜかダンスのレッスン中。
なんとなくスカウトされた事務所で、なんとなくのユニットを組まされた。
調子に乗って、知り合いに言いまくってしまったため、ここでユニットから降ろされるわけにはいかない。
「オイ、君！」
キタ！　俺は委縮して、ダンスの先生の前に立つ。
「ハイ！」
「君、全然駄目。ダンスやったことないにしても、もう少し覚えられるでしょ」
「ハイ！　すみません！」
俺は持ち前の大きな声で、そう返事をする。いい返事くらいしか、今の俺に取り柄はない。
「あのね、君。返事ばかり良くても駄目なんだよ」
「ハイ！」
「だからね……」
「ハイ！　頑張ります！」
「ああ、そう……まあいいや。頑張って」
ダンスの先生が、諦めたように背を向ける。
今日のレッスン終了後、俺はもう一度、先生に呼ばれた。
「君はね、光るものはあるんだけど、どうもダンスは出来ないらしい。もう君は踊らなくてよろしい」

「え！」

ショックで他に言葉も出ない。

だが俺は、すぐに拍子抜けすることになる。

「君はソロでデビューしなさい。今一緒にやっている子たちは、バックダンサーで付けることに決めたから」

俺という、スター誕生の瞬間――。

019　未来予知

「あっ……」
僕は思わずそう声を上げた。
目の前では、小さな子供が蹲いて転んでいる。
「ふう……」
僕は溜息をついて、その場を通り過ぎた。
予知能力――というまでには、あまりにもおこがましいほど小さい能力。僕にはそれがある。
ほんの一瞬先の未来が見えるだけ。それだけで、運命の流れというものを変えられたことは一度もない。
さっきだって、子供が蹲いて転ぶことがわかったけれど、どうすることも出来なかった。
あまりにも小さな能力、だが変えられない未来に、僕はいい加減、うんざりしている。

「どうかしたの？」
目の前の女性がそう尋ねた。
この間恋人になったばかりの女性だが、この小さな能力でも妨げになって、長く人と付き合ったことはない。
「あ、いや……」
「無口なんだね。この間の合コンで会った時は、楽しく盛り上げてたのに。なんか、うまく人と付き合ってるみたい」
よく言われる言葉だ。僕は付かず離れず、いい距離を保っての人付き合いが得意である。
「そんなことないよ。今度、遊園地でも行こうか」
「すごい！　ちょうど一緒に行こうと思ってたの。遊園地の優待券もらったから」
そう言って、彼女は遊園地のチケットを見せる。

僕は頷いて笑った。
「じゃあ行こう……」
そう言いかけたところで、僕の顔は引きつった。
今日、彼女は死ぬ。たぶん、帰り道、車にはねられる。
「……」
「どうかしたの？　顔が真っ青」
「……今日、泊まれる？」
僕はとっさにそう言った。
初めてのデートでそんなことを言われ、彼女は少し驚いた様子だ。
「え……」
「泊まりじゃなくてもいい。朝まで飲むだけでも。ちょっと……相談があるんだ」
僕は出来るだけ話を長引かせようと考えた。
本当なら、彼女を近くのホテルにでも泊まらせたかったが、怪訝な顔をしている彼女に、とりあえず飲み明かすだけでもよいと思ったのだ。
朝方まで二人で飲むことに成功したが、彼女は何度も腰を上げる。
「そろそろ帰ろう。明日も仕事だし」
「そんなこと言わないで、もうちょっと。もうちょっと明るくなるまで待とう」
僕が見た未来は、暗がりの中で死ぬ彼女。せめて朝まで待たなければ。
だが彼女は、遂にしびれを切らして外へと出て行った。
「待ってよ！　今、外に出ると危ないんだ！」
彼女の背中を追いかけて、僕は走った。
すると、僕は何かにはねられて、地面に叩きつけられる。
「キャー！」
悲鳴とともに、彼女が僕に駆け寄る。
光を失いかけた僕の目に、続けてひかれた彼女の姿が映った。

運命は変えられない。
僕が死ぬことは、想定外だったけれど――。

０２０　女芸人の苦悩

今日も私たちは、一瞬の笑いに命を掛ける。
「イタタタタ……！　何すんだよ、バカヤロウ！」
鼻フックを掛けられて、涙目になりながら、私は罵声を浴びせる。
逆に、お客さんは笑ってくれている。どんなに辛い仕事でも、私にとっては、それが一番の幸せ。

仕事が終わって、私たちは飲み屋に出かける。
「さっきの鼻フックだけどさ、遠慮しすぎだよ。もっと鼻の穴全開にしてくんないとさ、お客さん、もっと笑い取れたはずだよ」
飲み会に乗じた反省会の始まり。
「ええ？　結構引っ張ったけどなあ」
「ダメダメ、あんなの。ストッキング被りもさあ、今日のストッキング、あんまりいいやつじゃなかったよね」
「そうそう、伸びすぎてびっくり！　あれじゃあ、すげー遠くまで行かないと、顔引っ張られないじゃんね。思わず手で引っ張っちゃったわよ」
「あはは。私も」
私たちは、大きな口を開けて笑う。
「ああ、でも。男欲しい～！」
反省会が終われば、恋愛話に花が咲く。

０２１　ネジの妖精

ネジの妖精は、今日もネジを巻く。休みはない。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ……」

どこからともなく、別のネジの妖精がやってきた。

「交代の時間よ。休んで」

「ありがとう」

休みをもらったネジの妖精は、自分の家へ戻っていく。

その間、別のネジの妖精に出会った。

「おつかれさま。お休みかい？」

「そうだよ。交代の時間さ」

「いいなあ、交代の人がいて。僕はずっと一人でネジ巻き」

「僕は時計のネジ巻きが仕事だもの。交代がいなければ、働き詰めさ。君も休んでいるように見えるけど、お休みの時間かい？」

「僕はずっと休んでる。ヒトのネジ巻きが仕事だからね。僕の好きな時間に働くのさ」

ヒトのネジ巻きの妖精は、気まぐれな性格のようだ。

勤勉なネジ巻きの妖精ならば、規則正しいヒトが出来上がるだろう。

だけど気まぐれなネジ巻きの妖精ならば、ぽけっとしたヒトが出来上がるだろう。

ネジの妖精は、今日もネジを巻く。休みは――。

022　ミュージシャンの家探し

「職業はミュージシャン。家を探しているんです」
カジュアルファッションで、一人の男が不動産屋へ入る。
「ミュージシャン……収入は安定されているんですか？　どこかの事務所に入っているとか……」
「いえ。僕はフリーのミュージシャンです。収入は……そうだなあ。今は安定しているけど、そりゃあこの世界、どうなるかわかりませんよ」
その日、彼の家は見つからなかった。

次の日、彼はスーツ姿で、不動産屋へ入る。
「職業はミュージシャン。家を探しているんです」
名刺代わりに差し出したのは、有名アーティストのコンサート写真。彼の姿が映っている。
「どんな家をお探しですか？　どうぞお座りくださいませ」
人は第一印象で決まる。

０２３　駆け落ち

東京駅のホームに、二人の若い男女がやってきた。
思いつめた様子で、小さめの旅行バッグを手に、夜行列車に乗り込む。
「慎二……」
不安げにそう呼ぶ女性に、慎二と呼ばれた男性は、静かに微笑む。
「大丈夫だよ。真実」
二人は手を繋ぎ、無口に戻った。
反対された恋、二人は今日、駆け落ちを実行する。
「早くここから出たい……」
「ああ。何処か遠くへ行こう。一刻も早く……」
しかし、発車時刻になっても、一向に電車は動く気配を見せない。
その時、前の車両から、見なれた顔が見えた。
女性・真実の父親である――。
「お父さん……」
真実は震えて、慎二に抱きついた。
だが、それを父親は許さない。
「話は後だ。早く降りろ！」
有無も言わさず、二人は父親に列車から引きずり降ろされた。
「嫌！　お父さんがどんなに反対したって、私は慎二が好きなの！　もう嫌よ。慎二と一緒にいられないなら、死んだほうがいい！」
真実の言葉に、父親の平手が飛ぶ。
「娘の幸せを願わない父親がどこにいる？　この男は、おまえにはふさわしくない。それだけだ。愛だけじゃ、何も出来ないんだよ！」
慎二は俯き、拳を握った。
慎二は若いが、最近まで結婚しており、実の子供までいる。職業も安定していない。
でも二人の間には、愛がある。いや、愛しかない。

「お願いします！」
突然、慎二は、コンクリートのホームに土下座した。
「確かに、僕は最近まで結婚していて、子供もいます。だけど、真実さんを愛しています。僕も離れたくありません。でも、お父さんの気持もわかります。僕も一応、父親の端くれですから……どうかチャンスをください！　結婚歴は変えられませんが、きちんと働きます。お父さんが納得してくださるまで、結婚はしません。だからどうか、お付き合いだけは許して下さい！」
「私からも、お願いします！」
公衆の面前で頭を下げる二人だが、父親の目は冷ややかなものだ。
「口では何とでも言えるだろう。一年だ。一年でおまえの生活をきちんと形にしろ。それまで、真実は家から出さん」
「お父さん！」
「真実と会う時は……家で会いなさい。我々家族と一緒に食事をし、会話をし、人間として認められるまで、家に通いなさい」
「ありがとうございます！」
慎二はもう一度、深々と頭を下げる。
交際を禁じられたわけではない。今まで取り付くシマもなかった真実の父親にしては、大きな前進と言えよう。
「もうやめなさい。私が苛めているようにみえるじゃないか。だが、駆け落ちは許さん」
「……はい。申し訳ありませんでした」
心を入れ替えたように、慎二は頷いた。
真実は不安げな表情を向けているものの、腹を決めた様子の慎二に、自分も気を落ち着かせようと思った。
「帰るぞ、真実」
それ以上何も会話の出来なかった二人だが、永遠の別れは避けられたはずだ。
慎二の目に映った真実の父親の背中は、大きく切なく見えた。
それは、小さな子の父親である慎二にとって、未来を示す先人に

も思えた。

024　チェンジ

鏡を見て、真子は自分の顔に触れる。
「はあ……」
溜息しか出てこない。
メイクをしてなんとか外に出られるものの、なんて貧相な顔立ちだろう。そう思うと、表情はどんどん暗くなる。
「笑え、ブサイク……でも、もっと肌が綺麗だったら……化粧が上手だったら、背が高ければ、髪にツヤがあったら……」
不平不満はいくらでも出てくる。
「メイクをしたままのこの自分が、最低ラインだったらいいのにね……」
真子はおもむろに、鏡に触れた。
すると、辺りが一瞬、眩いばかりに光る。
「うん、今日も綺麗」
その時、目の前にいる鏡に映った自分が、自分の意志とは関係なくしゃべり始めた。
「今日もメイクばっちりだし。かわいい、かわいい。ようし、今日も仕事頑張るぞ！」
そう言って、鏡に映った自分は去っていった。
（鏡の中の私に、私を乗っ取られた?!）
真子の頭はこんがらがりながらも、無意識のままに職場へと向かっていく。
だが、なんだかいつもより気分がよく、明るい気持ちでいる。
「おはようございます！」
元気よく挨拶した真子に、会社の人間は少しぽかんと見ていた。
「あ、ああ、おはよう……どうしたの？　何かいいことでもあったのかい？」
「いいえ」

果たして、鏡の中の真子が真子を乗っ取ったのか、真子が無意識に変わろうとしているのか、そこまではわからない。

だが、前よりも周りの反応が良くなったこと、真子の気持ちがいつも前向きであることは、真子の望んだ世界である。

そしてここにいるのは確実に、前とは違う、新しい自分――。

０２５　車掌さん

電車の中。病院の待合室のように静かだった車内は、大きな駅に着いたと同時に、その静けさから一気に放り出される。

大声で話す女子高生。

音を出してゲームしている小学生。

イヤホンの音楽が漏れている青年。

携帯の着メロが鳴り響いている中年女性。

車内にゴミをポイ捨てする中年男性。

数え上げたらキリがないくらい、車内は騒然とマナー違反の嵐が起こる。

その時、車内アナウンスが流れた。

『え～、駆け込み乗車はおやめください。また、携帯電話、ゲーム機など、音の出るものは予め電源をお切りいただくか、マナーモードに設定の上、通話はご遠慮ください』

「ウゼー」

「遠慮って強制じゃないっしょ？　うちら遠慮しないし」

「ってか、マジ、ウゼー」

大声で話していた女子高生たちが、そう言った。

その時、またしてもアナウンスが流れる。

『はい、今、ウゼーと言った女子高生の皆さん、大声で話すのはおやめください。あと、近くでチカンが狙ってますから気をつけて。あ、二両目の紳士、車内はゴミ箱じゃありませんよ。ゴミは拾ってください。一両目、七両目でイヤホンから音漏れしている皆様は、聞こえないフリしても駄目です。あとでイヤホン耳から引っこ抜きにまいりますからね～』

今日も車掌さんは、大忙しだ。

０２６　不良少年

校舎の裏で、煙が上っていた。
それを見つけた教師は、すぐさま怒鳴り声を上げる。
「こら！　何やってんだ！」
その声に慌てて、生徒たちが振り返った。そこには、数人の男女がいる。
ここは小学校。まだみんな小学生たちだ。
「おまえたち。何をやってるんだ！」
ある者は煙草を吸い、ある者はポリ袋を持っている。どこからどう見ても、不良だ。
「先生、何かの間違いだよ」
「そうだよ。べつに僕ら、悪いことしてるわけじゃないし」
悪びれた様子もなく、生徒たちはそう反論する。
「悪いことしてるわけじゃない？　じゃあその手に持ってるのはなんだ！」
逆上した様子で、教師が尋ねた。
「これ？　これは電子タバコ。お父さんのを借りたんだ。水蒸気だから害もないし、もちろん本物の煙草じゃないよ」
「私が持ってるのは、煙草チョコだよ」
「こっちのポリ袋はアロマの匂いが入ってるの。超いい匂いで落ち着くよ」
ぶちっと、神経が切れた音がした。
教師は怒りに震え、大きく息を吸う。
「馬鹿モノが――！」
物凄い勢いで、教師の檄が飛ぶ。
「うわあ！　なんだよ。べつに悪いことじゃないって――」
「学校にそんなもんを持ってくること自体いけないだろうが！　それに紛らわしいことをするんじゃない。大人になったら、それが本

物に変わる危険性もあるんだ。何を考えてるんだ、最近のガキは！」

軽い反抗期を迎えた小さな不良たちは、こうして延々と説教を食らった。

そして法律違反でなくとも、モラルは考えねばならないという教訓を知ることとなる――。

027　オリジナルカクテル

女性はグラスを見つめていた。
グラスの中には、溶けかかった氷が浮かび、時に音を立ててバランスを崩す。そんな光景を眺めているのに慣れてしまい、女性はただただ、グラスを見つめている。
「新しいのお作りしましょうか？」
バーテンダーが、見かねてそう声をかけた。グラスの中の水割りは、溶けた氷にずいぶん薄まって見える。
「ああ……そうね。新しいの、もらえる？」
「はい」
バーテンダーは、赤い液体の入ったグラスを、女性に差し出した。
「え？」
頼んでいた水割りではなかったため、女性は首を傾げてバーテンダーを見つめる。
「こちらは私からです。カクテルの名前は、愛のリンゴ。アダムとイブが楽園を追い出された禁断の果実も、あなたには愛を与えてくれる、魔法の果実になってくれるはずです」
にっこりと微笑むバーテンダーに、女性は思わず顔をほころばせる。
「ありがとう……失恋して、この先どうしようかと思っていたんだけど、なんだか前向かなきゃって気になったわ。過去の恋愛を忘れないと、新しい恋愛も寄ってこないわよね」
「ええ。このカクテルは、あなたを愛で包んでくれますから、この先きっといいことがありますよ。保証します」
しばらくして、女性は上機嫌でバーを出ていった。
「おい、いいのか？　保証するなんて言って……それにそのカクテル、この間は黄金のリンゴって名前じゃなかったっけ？」
店じまいのバーで、他の店員がバーテンダーに尋ねる。

バーテンダーは、不敵に笑ってグラスを磨く。
「カクテルだけであんなに前向きになれたんだ。放っておいても幸せはやってくるよ。前を向いていればね」
「はあ。そういうものか？」
「そういうものだよ。それから、このカクテルのベースはトマトジュース。トマトはフランス語で愛のリンゴ、イタリア語で黄金のリンゴ。愛に飢えた人にはフランス語で、愛に満ちた人にはイタリア語で名前をつけてる。どっちにしても、同じカクテルさ」
「結局は、本人次第ってことだな？」
「そういうこと」
今日もバーテンダーは、ロマンを売る。

０２８　秘めた想い

妹が兄に憧れるなんて話は結構耳にするけど、姉が弟に恋してるなんて話、少なくとも私の周りにはない。私以外には――。

私の名前は、坂崎良子。一歳年下の明を意識したのは、明が中学生になった頃だろうか。

明も思春期で、同じ学校に通う姉の私を避けるようになっていた。後で聞いたら、学校の友達にからかわれるからという理由。

私も同じく思春期で、明がうざったい時期でもあった。

そんなお互い避けてた頃、私は風呂上がりの明に、一瞬心を奪われた。

「風呂空いたよ」

たった一言、固まっている私に言って去っていく明の体は、私より小さかった弟ではなく、もはや逞しい男性の体つきをしていたからである。

その理由は、明が体育会系の部活に入っていたからに他ならないが、すでにその頃、声変わりも始まっていた明に、私は異性として意識した。

それが異常なことだとは思ったけれど、それからの私は、意識を失くすどころか、ますます明を意識しだすようになった。

だけど残念ながら、私たち姉弟は、正真正銘の兄弟である。親も離婚経験なんてないし、遊んでいたという話も聞いたことがない。なにより明は、私によく似ている。

それでも私の意識が、明から離れることはなかった。

五月晴れの下、おとぎ話の世界のような場所に、私は降り立った。

「姉ちゃん。来てくれたんだ」

そう言って出迎えた明は、もう思春期で避けている明ではなく、

私に満面の笑みを向けてくれる。今日は一段と格好が良い。
「当たり前でしょ。弟の晴れ姿、姉として見ないとね」
「ありがとう」
そこに、従業員と思しき男性が、部屋に入ってきた。
「坂崎様。そろそろお時間です」
「はい。じゃあ、姉ちゃんも行って」
「そうね……」
チャペルの鐘が鳴る。
バージンロードの先にいる明は、優しい笑みで新婦を出迎える。
もちろん、それは私ではない。
私は親族席に座り、その光景を、ただただじっと見つめていた。

愛してる、という言葉を口に出すのも許されぬまま、私の気持ちを知らぬまま、明は他の女性（ひと）のものになった。
もう、私の知っている明はいない。

029　ストリートミュージシャン

深夜の商店街に、歌声が響く。拙いギター、耳ざわりな声。
それでも彼は、歌い続ける。
「ありがとうございました……」
あれだけ大声で歌っていた直後、か細い声で彼は礼を言った。
人通りもあれば、目の前には居酒屋から出てきてたむろしている若者もたくさんいる。だが、彼の歌に耳を傾ける者も、もちろん彼のギターケースに金を入れる者もいない。
それでも彼は、歌い続ける。
「最後の曲にしよう……」
また彼は、独り言のようにそう言って、ギターを爪弾きはじめる。
「ねえ」
その時、一人の少女が声をかけてきた。
彼は驚き、ギターを弾く手を止める。
「え？」
「ねえ、それ弾かせて」
少女はそう言って、彼のギターを指差す。
「駄目だよ」
「いいじゃない。ちょっとだけ」
そう言って、少女は奪うように彼からギターを受け取ると、突然、早弾きを始める。
そばにいた人たちが、驚いてこっちに目を向けた。
「上手い……」
彼は目を丸くして、少女を唖然と見つめた。
やがて人だかりが出来て、少女は彼にギターを差し出す。
「楽しかった。ありがとう」
「……これだけ人集めといて、返すのかよ」
彼は少しむっとして、少女に言い放った。少女に嫉妬しているの

だ。

だが少女は、歯を見せてにっこりと笑う。

「私は前座よ。華のないあなたのためにお客さんを集めてあげただけ。大丈夫、自信持ってやりなさいよ。あなたの曲はいいと思うよ」

そう言って、少女は立ち上がった。

「さっきの曲、弾いて」

とっさの少女からのリクエストに、彼はもう反論すら浮かばないようで、無言のままギターを弾き始める。

少女が集めた客は、もう帰ろうとはしなかった。

初めて掴んだ客がいるという感触に、彼は満足して一曲を終えた。それと同時に、拍手が沸き起こる。

「あ、ありがとうございます！」

いつになく大声で、彼はそうお辞儀をした。だが、大勢いる客の中に、もはや少女の姿はなかった。

あれから数年が経ち、彼はホームグラウンドのようなその場所に降り立った。変わらない夜の商店街は、新しいストリートミュージシャンたちが何組か見える。

彼は腰を下ろし、ギターを鳴らし始めた。途端に客が集まる。

「おい、あれって……本物？」

客たちがざわめき始めた。今でこそトップミュージシャンになった彼を、この街で知らない者はいない。

「サインください。今日はどうしてここへ？」

曲が終わるや否や、彼はたちまち客に囲まれ、サインをせがまれた。

彼は優しく微笑み、それに応じる。

「ここは僕の原点なんです。ここである人に会わなければ、今の僕はここにいない。恩返しも含めて、今日は……」

そう言った彼の目に、見覚えのある少女が立っていた。たった一度しか会ったことのない、彼にとっては幸運の少女である。

あの日、少女のおかげで客を掴み、マスコミ関係の目に止まったのは、彼の実力だけではない幸運が重なったことである。

「あ……」

彼が少女に声をかけようとしたその時、少女は笑って去っていった。

声にならず、客に囲まれている彼は、少女を目で追うだけで何も出来ない。

だが、遠く消えた少女は、かすかに見える新しいストリートミュージシャンの輪に入り、ギターでも弾いているようだった。

彼は静かに笑い、何曲か弾いてその場を後にする。やがて途絶えかけた商店街の隅で、人だかりを見つけた。その中心には、ストリートミュージシャンがいる。

「いい声だ……」

彼はそう言って、ストリートミュージシャンを覗く。

やがてライブが終わり、消えかけた人だかりを見計らって、彼はストリートミュージシャンに声をかけた。

「ここではいつもやってるの？」

「え？　あ、はい……」

ぶっきらぼうなストリートミュージシャンが返事する。彼はキャップを被っているせいか、まだ面が割れていないようである。

「もしかして、さっきここに、飛び込みで女の子がギター弾いてなかったかな？」

「え？　はい、弾いてました」

何かの運命を見ているかのように、彼の口元が緩んだ。今度は自分が役目を果たすべきなのだと思う。

「君、事務所に入ってみる気はないかい？　推薦するよ」

彼と少女の、奇跡のお話……。

０３０　空の少年

人は空に憧れるもの。この少年もまた、空に魅せられた一人である。

「カロル。今日はやめておいたほうがいい。今日はこのまま強風になる」

仲間にそう言われ、少年・カロルは出来上がったばかりの自作飛行機から振り向く。

まだ飛行機というものが主流になっていない時代の話である。

「なに言ってるんだ、ニーチャ。今日はいい風だ」

まるで自然と友達かのように、木々の匂いを嗅いでカロルが言った。

仲間のニーチャは、不安げな顔を浮かべる。

「でも心配だよ。この間の六号機だって、飛びあがった途端、空中分解したじゃないか」

「あれは失敗作だったんだよ。今回は緻密な計算して作っただろ」

「廃材でね……」

空に魅せられたカロル、カロルの手伝いを続けるニーチャ、二人は友達で同志でもある。

「まったく心配症だな、ニーチャ。危険はつきもの。危険なことにチャレンジしなきゃ、文明は開かれないぞ。僕自身もね」

「わかった……でも気をつけて」

「大丈夫。もし空で死ねたら本望だよ」

「カロル！」

ニーチャの心配をよそに、カロルは大きな空を見つめて微笑む。

「見ろよ、ニーチャ。この広い空を。誰もいないんだぜ」

この世になんの未練もないかのように、時々カロルは不敵に微笑む。

ニーチャは、カロルの腕を掴んだ。カロルがどこかへ行ってしま

うような気がしてならない。
　そんなニーチャに、カロルは微笑む。
「僕には家族がいないから、こんな馬鹿なことが出来るのかもしれないな。ニーチャにはいつも本当に感謝してるよ。僕が変人扱いされてても、変わらず付き合って手伝ってくれた」
「僕はカロルの友達だ。当たり前だろ。君が死んだら悲しむ人はたくさんいる」
「たくさんはいない。でも、もし僕が死んだら、ニーチャが思い出してくれよな」
「カロル！」
「冗談、冗談。さあ、行くか。離れてろよ、ニーチャ。安全を確かめたら乗せてやるから」
　高い丘の上から海を見つめ、カロルはエンジンを掛ける。かき集めたパーツは、見た目にも飛びそうにない。
「ぼ、僕はいいよ……でも気をつけて」
「ああ」
　爆音が響くエンジン音に耳を塞いで、ニーチャは後ずさりする。
「ニーチャ。グッドラック」
　敬礼して、カロルは丘の上から飛行機を走らせる。
　すべるように崖へと向かう飛行機。もちろん、カロルに恐怖心がないわけではない。この間の試作品は、ものの見事に空中分解。飛ぶというより先に、壊れて落ちていった。その前の試作品は飛ぶ前に壊れた。
「今度こそ……」
「飛べ！」
　そんなニーチャの声が聞こえた次の瞬間、カロルの乗った飛行機は、崖の上から海へ目掛けて飛び立っていた。
「飛んだ……！」
　心もとないおもちゃのような操作にも応え、飛行機は旋回する。
「ニーチャ、飛んだよ！」

田舎町の青い空に、初めての物体が輝く。少年の夢が現実になった瞬間だった。

「本当に、飛んでるんだ……」

ニーチャの笑顔が輝いたのも束の間、飛行機は空の上で火を噴き、黒煙を吐き出した。

「カロル！」

カロルは空の上からニーチャを見つめた。悲痛に歪む友達の顔が、カロルの胸を締めつける。

「ああ、ニーチャ……僕は馬鹿だったのかな。君にそんな顔をさせて……飛ぶことよりも大切なことが、僕にもあったのに……」

カロルが後悔にうちひしがれながらも、そのまま飛行機は海へと真っ逆さまに落ちていく。

真っ青になって、ニーチャは崖の側にある階段から、浜へと駆け下りていった。

「カロル！　カロル！」

何度も叫ぶ中で、壊れた木造飛行機の破片が浜へと流れつく。

目を凝らして、ニーチャはその破片の間から、カロルの姿を見出そうとした。

「カロル――！」

ニーチャの声にならない声が響く。

「やっぱり……止めておけばよかった。僕が止めてたら、カロルは……」

その時、ニーチャの目に、遥か遠くの沖で手を振るカロルの姿が映った。

「カロル……？」

「ニーチャ！」

「カロル！」

臆病なニーチャが、海の中へと走っていく。

そしてカロルは、無事に戻ってきた。

「やれやれ。また失敗しちゃったな」

「もう嫌だよ、カロル！　こんな思いをするのはもう嫌だ。絶対なんてないんだよ。たとえ落ちない飛行機が出来ても、もうやめて！」
ニーチャの悲痛な叫びに、カロルは優しく微笑み、そして頷いた。
「ああ、もうやめるよ、ニーチャ。さっき僕は、空とひとつになれたんだから」
あまりのニーチャの悲しみに、カロルも諭してそう言った。
まだ遠い憧れの空。それを見つめ、カロルは微笑む。
「僕の夢は叶ったよ、ニーチャ。今度はニーチャの夢を叶える番だ。ニーチャがやめろって言うならもうやめる」
「僕の夢は、カロルとずっと友達でいられることだ」
「ああ。もちろんだ」
二人は友情を確かめ合うように、拳骨を合わせる。
「今日は最高の日だよ、ニーチャ。僕の夢が叶った。大切なものにも気付いた」
空に憧れた少年は、その後、ニーチャとともに生きていく。憧れた空よりも大切な友を、失わないために――。

０３１　失恋レストラン

（次にあのドアが開いたら、諦めて帰ろう――）

とあるレストラン。女性一人の客が、窓際の席からドアを見つめている。長い溜息が、遠くまで聞こえるようだった。

女性は誰かと待ち合わせしているはずで、二人分の予約を入れていた。だが、メールで断られてもいた。

（あの人は来ない――私、きっぱりふられたのに。未練たらしい嫌な女……）

断りの連絡があったにも関わらずここへ来たのは、予約の取りづらいこのレストランを無理して予約したこと、そして誘った相手を待っていたかった。

一人で行った女性を、レストランのボーイは快く迎えてくれ、一人分の料理を並べてくれた。何も聞かれないことが、少し恥ずかしくもある。

デザートまでゆっくりと食べ終えながら、女性は何度も携帯電話を開く。だが、着信履歴も何もない。

（次にあのドアが開いたら……）

その時、レストランの出入口のドアが開いた。

入ってきたのは、来るはずだった男性――と、その妻である。

女性は息を飲みつつ、自分の惨めな人生に笑い、立ち上がった。

男性もこちらに気付きながらも、目を逸らして案内される席へと向かっていく。

（馬鹿な女……）

女性は自分を呪いながら、足早に歩く男性へと向かっていった。

目を逸らす男性。寄り添う妻。

男性とすれ違いざまに、女性は男性の頬を殴り、男性の手に何かを持たせ、何事もなかったかのように歩き出した。

男性の妻からすれば、あまりに突然のことで、何が起きたかもわ

からなかったようである。
（とんだ失恋レストランだわ……）
だが、なぜか清々しい気持ちを覚え、女性はレストランを後にした。
男性の手に握られていたものは、女性が食べた料理の請求書であった。

032　不可解な街

旅人の男は、世界中を旅している。ある時は断崖絶壁、ある時は近代的な街。さまざまな危険をかいくぐって、ちょっとやそっとのことでは驚きはしない。

「じゃあ、だんな。不可解な街には行ったことがあるかい？」

休憩に寄ったとある田舎町で、男はそんな情報に笑った。

「不可解な街？　なんだい、それは」

「誰も行ったことのない街さ」

「それじゃあ俺も行けないな」

「どうしても行きたいなら、コブレスの店へ行きな。なにかいいヒントがあるかもしれない。前にも旅人を案内していた」

そう言われ、探究心が疼いたように、男は紹介された店へと向かった。そこは古びた本屋である。

「コブレスの店っていうのはここでいいのかい？」

男がそう尋ねると、中にいた老人がにやりと笑う。

「そうだよ、旅の方。不可解な街にでも行きたいのかい？」

「ああ。さっきそこの店で聞いてね。あんたは何か知ってるのか？」

「そうだな。知っているかもしれないし、知らないかもしれない」

「何か知ってるなら、話してくれ」

老人はまたも、にやりと笑う。

「話すことなど何もない。だが、行きたければ行くがいい」

「誰も行ったことがないんだろう？　行きたくても話を聞かねば行けない」

「私は行ったことがないから話すことなど何もない。だが、行きたければ行くがいい」

「何を言っているのかさっぱりわからんね……面白い話をありがとうよ」

男がそう言って店を出ようとした瞬間、外の様子はすっかり変わ

っていた。
慌てて振り返ると、出たばかりのドアは遥か遠くにあり、老人も遠くでただ笑っている。
「なんだここは！」
「おまえさん、行きたかったんだろう？」
老人の声とともに、すっかり店らしきところは何もなくなっていた。
「じゃあ、ここが不可解な街！」
男の額から、冷汗が伝う。
あたりは何もなく、人一人いない。
「ここはなんだ。何処なんだ！　誰もいないのか！」
返事もないので、男はただただ歩き始める。
だが、行けども行けども、砂嵐が舞う平原だ。周りは建物の廃墟らしいものもあるが、壊れてしまっていて何もない。死んだ街だ。
「行けども行けども同じ平原……誰か……せめて水でも飲まねば死んでしまう！」
その時、遠くに井戸があることを発見した。男は急いで駆け寄る。
「ありがたい。水だ！」
井戸の水をたらふく飲んで、男はその場に座り込む。砂嵐が行く手を阻み、先も見えない。
「せめてこの砂嵐が止めばな……」
男がそう言った途端、砂嵐が止んだ。
「……どういうことだ？」
不思議に思って、男は立ち上がる。砂嵐は止んだものの、辺りはただの廃墟の平原だ。
「待てよ。水が飲みたいと思えば井戸があり、砂嵐が止んで欲しいと願えば止む……では祈ろう。元の世界に戻りたい！」
男は真っ直ぐな瞳で、目の前を見据えた。
すると、ドアのようなものが遠くに見え、どんどん近付いてくる。
やがて開いたドアの向こうに、さっきまで一緒にいた老人の顔が見

えた。
「見えた！　そのまま消えるなよ！」
必死の形相で、男は老人目掛けて走り始める。老人は、まだ笑っていた。
「おかえり」
滝のような汗を流した男は、気がつくと老人の店で仰向けに倒れていた。
「爺さん……なんだ、この店は。さっきの廃墟は……あれが不可解な街なのか？」
「戻ってきたあんたならわかるだろう？　あそこが何処なのか……」
諭したように云う老人に、男もにやりと笑う。
「ああ、知ってる。あそこは俺の心の中だ」
その答えに、老人は大きく頷いた。
「そうだ。ある者は迷いに自分を見失い、ある者は望みばかり膨れ上がり、強欲に負けてその世界から抜け出せなくなった」
「じゃあ、帰ってきた俺は強いってことなのかな」
「それはわからん。だが、己を信じて進むが良い」
老人にそう言われ、男は立ち上がり、老人の店を出ていった。もう、元の街に戻っている。
「ありがとうよ、爺さん。おかげで迷いが吹っ飛んだ。俺はまだまだ世界を回り、世界を見る」
「気をつけろ。世の中には、不可解なものがたくさんある」
「知ってるよ。忠告ありがとう」
晴れ晴れとした顔で去っていく男は、さっきよりも強くなっていた。

０３３　思い出の本屋

中学三年生の秋。
「山田？」
不意に自分の名字を呼ばれ、私は驚いて振り向いた。
今は日もすっかり暮れた夜。塾の帰りに寄った本屋で、私はなんの心の準備もしていなかったのだ。
「土井……」
私が応えた。目の前には、同じクラスの男子がいる。
普通にしゃべったことのある程度で、どちらかといえばブ男に近いのだが、学校以外で会ったことに驚き、互いに顔が赤くなった。
「こんなところで何やってんだよ」
「あんたこそ……」
「俺は塾の帰り」
「私も……」
お互いよそよそしく、だが意識をして、また笑った。
「月水金は塾なんだ。そこの教室」
土井の言葉に、私は頷く。
「私は火金日で、向こう側の塾」
「へえ……ま、気をつけて帰れや。じゃあな」
まったく意識していなかった男子。だが、まだ恋人もいたことのない私は、こんな夜に異性と二人きりで話すことも初めてで、少し照れた。

その日から、私たちは約束するでもなく、同じ時間に何度もその本屋へ出向いていた。私たちは塾のない日さえ、まるでその時間を楽しんでいるかのように、本屋へ足を運ぶ。
でも、まだ中学生。なかなか素直になれない。
「またいた」

土井の言葉に、私は顔を赤らめながらも、目を逸らす。
「あんたもね。私は参考書を探してるの」
「俺は漫画買いに来ただけだよ」
そんな会話が何度も続いている。最近、この本屋は私たちのおかげで売り上げが上がっているはずだ。そのくらい、私たちは来ていた。

やがて受験シーズンになり、私たちは本屋に向かう足を遠ざけざるを得なかった。そしてそのあまま、ささやかな本屋デートも幕を閉じたのである。

それから十年後。あれから、私たちは会っていない。違う高校になったし、卒業まで何度か会話したものの、告白などという二文字が出たことはなかった。
「ママ。ご本買って」
私はそう言われ、手を引いていた娘に笑いかけ、思い出の本屋へ向かう。
「山田？」
レジにいたのは、懐かしい瞳を向ける、土井の姿だった。

０３４　超能力マジシャン

「ワン、トゥー、スリー」
手のひらのコインが消える。
「タネがあるんだよ」
知ったかぶりの子供が大声でそう言ったので、俺は苦笑した。
「もちろん。マジックだからね。じゃあもう一度。ワン、トゥー、スリー」
何もなかった手のひらに、コインが現れる。
「おおー」
子供たちは首を傾げながらも、目の前で起こるタネ仕掛けの奇跡に心奪われているようだった。
俺はそんな職業に空しくなりながらも、今日の仕事を終えた。

普通のマジシャンなら、タネを見せないようにするだろう。イリュージョンとして、大がかりなことをする人も少なくない。
だが俺は違う。簡単なマジックが出来ればいい。そうでないと、途端に化け物扱いされてしまう。
俺の意思によって動くコップ、浮くジャケット。タネも仕掛けもないその能力を隠すように、俺は俺の力を見て見ぬ振りをした。

035　メール世代

『付き合って』
『いいよ』
『別れよ』
『バイバイ』
無機質に響く携帯電話の操作音とともに、今も無数の電波が飛び交っている。
『まだ？』
『ごめん、ちょっと遅れる』
『先に行ってる』
『後から行くよ』
駅前の広場には、今日もさまざまな人がたむろしている。
「好きです。付き合ってください！」
そんな時、広場にそんな声が響いた。
『うわ、すごいよ』
『マジ、ウケる』
『どうする？』
『どうなる？』
ハートに届いた告白は、そこにいた誰の心をも貫く。
「はい……」
恥ずかしそうに返事をした相手。二人はそのまま去っていった。
『おめでとう！』
『やるじゃん！』
『すごいもん見ちゃった！』
『よくやった！』
その日、ネット上の各方面で盛り上がったのは言うまでもない。
『今はまだ真似出来ないかもしれないけど……やっぱ心は伝わったかも』

そのうち数人は、現代病ともいえるネット離れに成功する。

０３６　無菌室の子どもたち

遠い未来、何度目かの人類の危機が訪れている。
年々子供たちは減り続け、それもまた深刻な状況に陥った。
子供が生まれても、少しの抗体も持たないままで、空気中のウイルスに死んでしまうのだ。
そのため、子供は生まれてすぐに無菌室に入れられる。子供の頃だけではない。一生だ。
「おはよう、ベン」
今日も子供の母親は、宇宙服のような防護服を着て、我が子に会いに行く。生まれてから一度も、その手で直に触れたことはない。
そして、これからもだ。
子供たちは小さな無菌の個室へ入れられ、一生を過ごす。人と肌で触れ合うことはない。
もちろん、何度も抗体ワクチンを打っているが、効き目はない。
将来子どもも望めないが、人口受精でなら可能。だが、その子供も弱く、生きられる可能性は極めて低い。
「おはよう、ママ。昨日は新しい本をありがとう。面白かったよ。またたくさん持ってきて」
屈託のない笑顔は、いつの時代の子供もそうだ。
子供に防護服を着せて外へ出させた例もいくつかあるが、極端に弱い子供たちは、太陽の光はもちろんのこと、月明かりにまで敏感に反応し、大やけどを負った。そのため、無菌室からの出入りは禁じられている。子供たちは一生、この小さな部屋から出ることはない。
「今日もあなたが読みたいと言っていた本を持って来たわ。先生が、あなたは優秀だって褒めてくださったのよ」
「本当？　嬉しい」
無菌室の中でも、授業は行われる。一人一人に教師がつくのだ。

とはいえ、将来の就職口などはほぼない。
この絶望しきった世の中で、大人たちは落胆し、未来に怯えていた。
“ベン。手に入れた？”
夜、誰もいなくなった無菌室で、ベンの脳裏にそんな声が聞こえ、立ち上がった。
隣の無菌室も透けていて、隣同志の子供とは少なからず交流がある。
“もちろんだよ。これさ”
ベンもそう念じて答える。
大人たちは知らない。この弱き子供たちに、こんな能力があることを。
“それだけあれば十分だね。ベン、決行するよ”
近くには、積み上がった本がある。何日も掛けて溜めてきた、母親が持ってきてくれる本の山である。
“うん。やっと自由だね”
“みんなを起こせ。一緒に行こう”
ベンは念じるように、本の山に手を当てる。すると、たちまち火の手が上がった。
“燃えろ、燃えろ！”
こんな能力もまた、彼らの秘めた能力である。
たちまちセンサーが反応し、セキュリティの利いた無菌室のドアも一斉に開いた。
だが、すぐに作動するはずのスプリンクラーが反応しない。それもそのはず、他の仲間たちが事前に壊しておいたのだ。
子供たちは自由を求め、鍵のかかった無菌室から外へと走り出す。
テレパシーで会話の出来る彼らは、連携もよく取れていた。
「外だ！」
憧れの外。まだ見ぬ世界。思わず子どもたちは叫んだ。
初めて見る世界に、日の出がやってくる。

「太陽だ。あれが……」

ベンがそう呟いた瞬間、何百人という子どもたちは、日の出とともに太陽の熱で燃えて死んだ。

だが、後悔などない。

「綺麗だな……外って……」

一生閉じ込められた生活など考えたくなかった。少なからず彼らは、満足していた。

037　無敗の侍

「聞いたかい。無敗の侍が江戸にも来たってよ」
「もちろん聞いたよ。山賊が壊滅したってな」
「お上にも楯ついたそうだよ」
「すげえなあ」
江戸の酒場は大盛り上がりで、最近噂である無敗の侍の話題で持ちきりである。まるで英雄伝説のように、その雄姿は風に乗って飛んでいた。
その時、見なれない客が入ってきた。常連客が息を飲む。
「見ろよ、侍だ。まさかあいつじゃねえべ？」
声を顰めて、常連客が言った。
侍は刀は下げていてもひょろひょろで、とても戦いそうには見えない。その上、頼りなさげな気の抜けた顔をしている。
「いんや。案外ああいうのが、戦となると顔つき変わるんじゃないか？」
「そうか？　俺は百姓出の担がれた侍もどきかと思うがなあ」
その時、人相の悪い連中が入ってきた。そして侍を見つけると、駆け寄る。
「やっと見つけたぞ！　なめたまねしやがって」
侍は冷や汗をかいているようだったが、深呼吸をして立ち上がる。
「おっと、ここからは出さねえぜ。すべての出入口は仲間に塞がせてもらった」
「ちょっと、やめとくれよ。うちで喧嘩おっぱじめようってのかい」
酒場のおかみが、迷惑そうに言った。
「その通りだ。店に迷惑をかけるわけにはいかない。外へ出よう」
冷静に、侍がそう言った。
だが、男たちは行く手を塞ぐ。
「そうはさせねえよ。おかみ、悪いがすぐに終わるからよ」

男たちがそう言った瞬間、侍は刀を振りかざし、そのまま出入口まで走っていった。

急なことと、凶器を手に向かってくる侍に、出入口を塞いでいた男たちも、とっさに身をよける。

「あいつ、やりやがった！」

「すげえぞ！　やっぱり無敗の侍じゃないか！」

常連客が拍手をする。

「あ！　あの人、お代まだじゃないか！」

おかみが言った。

「この状況下で金なんか払ってられるかよ。許してやれよ、おかみ」

そこに、人相の悪い男たちが振り向く。

「あの男は侍なんかじゃない。盗賊だよ。逃げ足の早いね。あんたらも気をつけな。うちは宿代、飲み代、全部踏み倒されたんだ」

おかみと常連客が顔を見合わせた。

無敗の侍……逃げ足の早い侍だ。

０３８　あいつ

この恋を、いったい誰に相談出来る？

僕の目は、いつもあいつを追っている。ずっと一緒にいるあいつ。危なっかしくて、馬鹿みたいに笑う、太陽みたいなあいつ。

あいつは僕の手を引っ張って、外へ連れ出す。

ある時はサッカー。ある時はドッジボール。ある時は……。

「おい。大丈夫か？」

不注意でボールが当たった僕に、あいつは心配そうにそう尋ねた。

「大丈夫だよ」

「でも、顔色悪くね？」

なんの用心もしないあいつは、僕の体に触れる。一瞬にして火照る気がした。

「大丈夫だって。でももう休む」

僕はあいつの手を逃れて、グラウンドの片隅に座った。

それでも僕の目は、いつもあいつを追っている。

この恋を、いったい誰に相談出来る？

男同士、同性のあいつを――。

039　隠しごと

今日も妻は、夫を責め立てる。
「またキャバクラ行ったでしょ」
「仕事でね」
「どうして黙ってるのよ」
「仕事だから、いちいち言うことでもないだろう」
「この間は嘘吐いて行ってたわね。浮気でもしてるんじゃないの？」
「してないよ。大体、済んだ話を持ち出すなよ。君がそうやって言うからだろう？」
同じような会話が、この家だけではなくて、少なからず繰り広げられているはずだ。
やっと妻の小言が終わり、夫は溜息をつきながらテレビの前に座る。くだらないバラエティ番組を見つめながら、安い酒で喉を潤す。
妻はそんな夫を尻目に、風呂場へと入っていった。
「浮気してるかって聞くやつほど、浮気してるんだよ」
テレビタレントの言葉に、夫はびくっとして振り向いた。
「まさか、な」
夫は酒に手をつけるが、なんだか耳に焼きついている。
「いやいや。うちの妻に限って……」
夫は放置された妻の携帯電話に手を掛けるが、思い留まって俯いた。
「これはいかん。他に何か……」
今度は、夫は妻が使っている机に向かう。引き出しに手を掛けるが、それも思い留まった。
「いかんいかん、これでは泥棒と同じ……」
そうは言っても、やはり気になる。
夫は思い切って、一番上の引き出しを開けた。だが、文具が入っている以外に、怪しいものは何もない。

「やっぱりな。何もあるわけがない」
安心して、夫はリビングへと戻っていった。
テレビは点けっぱなしだが、面白くない番組にうんざりしたように、夫はそばに投げ出してあったカタログに手を伸ばす。普段は妻以外には見ないものだが、暇つぶしにはいいだろう。
そんなカタログの間に、数枚のホストクラブの名刺が挟まっていた。
「ホストクラブ……」
夫の疑惑と怒りが、一気に湧き上がる。

一方、妻は風呂場で、夫の携帯電話をチェックしていた。夫と違って、罪悪感はまるでないらしい。
履歴に残った女の名前に、妻は嫉妬心で狂った。
「また飲み屋の女の子ね。やっぱりじゃない。最低！」

その夜、同一の立場となった夫婦のバトルが開催されたのは、言うまでもない。

０４０　妖精の少年

小さい頃、私は妖精に出会った。

羽根を持った小さな人間。その中の一人、少年・ジェイクとは一番仲が良かったが、私は子供心にも、住む世界が違うことを理解していたし、大きくなるにつれて、この記憶はなくなるものだとわかっていた。

その年、小学生最後の夏、今年も私は祖父母の家に遊びに来た。

「ナナ！」

森の入り口で、私の名を呼ぶ声がする。ジェイクである。

この森を見つけたのも、ジェイクの声が聞こえたからである。

「おはよう、ジェイク。今日はなにして遊ぶ？」

妖精の森は、一年に一度帰省する祖父母の家で見つけた。裏庭の茂みの側に、家の敷地を囲む壁がある。その一角に子供一人が入れるくらいの穴があり、私は茂みの中を通って、その穴から外へ出た。外はまるで別世界。雑草が生え放題の広い空き地だが、子供の私を隠すほどの草があったし、ジェイクがいなくても大冒険出来る場所でもあった。

私たちは散歩したり、昼寝したり、他の妖精たちと話をしたり、ジェイクが話す冒険の話を聞いたりと、毎日を過ごしている。

「はい。今日はおみやげ」

そう言って、ジェイクが差し出したのは、小さな赤い野いちごだった。

私はお礼を言って、それを頬張る。酸っぱいが、感動した。

「ナナ。今年もそろそろ帰っちゃうんだろう？」

ジェイクの言葉に、私は頷く。今日の午後、祖父母の家から帰るのだ。

「うん……」

「また一年会えないのか……」
「そうだね。来年からは中学生だし。でも、来られる時は来るようにするよ、ジェイク」
「うん。でも、今年だって僕のことを忘れかけてたじゃないか。一年もしたら忘れてしまう」
そう言ったジェイクに、私は頷く。確かに去年会った以来、一年してからジェイクのことを忘れかけていた。毎日、学校などで頭がいっぱいになっていたせいだろう。
「忘れないよ。ジェイクのことも、今日食べた野いちごのことも。だからジェイクも、ナナのこと忘れないでね」
「僕は忘れないよ。一時だって忘れない」
「じゃあ、指きり」
私は小指を差し出し、ジェイクは両手で私の小指につかまった。

その日から、私はジェイクに会っていない。

もちろん、次の年も祖父母の家へ行った。ジェイクを忘れてもいなかった。
だが、すでにジェイクと出会った空地には新しい家が建っている。
「あそこに妖精がいたの！　ジェイクも、他の妖精もたくさんいたの！」
泣き叫ぶ私に、両親も祖父母も、頭のおかしい子だという認識しかなかったと思う。
「ジェイク……」
その夜、私は泣きながら夢を見た。ぼやけているが、ジェイクの声がする。
「悲しまないで、ナナ。僕はいつだって、君のそばにいるんだから」
そう言うジェイクに、私は辺りを見回す。
「でもジェイク、ぼやけて見えないわ。そこにいるの？　ジェイク」
「姿は見えなくても、君は僕を覚えていてくれた。これからも、き

っと覚えていて。たとえ君が忘れても、僕は忘れないよ」
「私だって忘れないよ。ジェイク」
夢なのか現実なのか、私がジェイクの声を聞いたのも、それが最後だった。

祖父母の家の隣にある空き地は、すっかり別の家が建った。
私も中学生になり、祖父母の家へ足を運ぶ機会も少なくなっていく。
そしてそれから十数年後。私はやんちゃ盛りの娘を連れて、祖父母の家へと久々に足を運ぶ。
「懐かしい……」
「ママ。早くおばあちゃんのところに行こう」
「そうね」
急かす娘は、ひいおばあちゃんが大好きだ。
私はジェイクのことを忘れてはいないが、おとぎ話を口にする年頃でもないため、今はもう娘にすら話すこともない。

夕飯時、庭先で遊んでいた娘が、意気揚々と帰ってきた。
「ママ！　ジェイクに会ったよ」
娘の言葉に、私は驚きを隠せない。
「いつ？　どこで！」
「今もそこにいるよ」
娘は、池のほとりにある大きな石を指差した。
「……おばあちゃんのお手伝いして来て」
私は娘にそう言うと、ジェイクがいるという石の前へ向かった。
だが、誰もいない。何も見えない。
「……そこにいるの？　ジェイク」
返事がないからか、私の目から涙が溢れる。私は泣き崩れるように、その場にしゃがみ込んだ。
「ジェイク……」

（いるよ、ナナ。僕はここに）
ジェイクの声は、ナナには聞こえない。
それでもナナは、口を開く。
「ごめんなさい。私にはもう、あなたが見えないみたい……」
（わかってるよ。だって僕はずっとここにいる。何度か君とも会ったけれど、もう君は僕には気付かない）
「あなたの声も聞こえない……」
（でも、こうして話しているじゃないか。それに君は僕を覚えていてくれた。それだけで十分さ）
「私の代わりに、娘と遊んであげてね……」
（もちろんさ。もう遊んだよ）
その時、家の窓が開き、娘が顔を覗かせた。
「ママ！　夕飯出来たよ」
「今行くわ」
私はそう言って、涙を拭う。
「行かなきゃ……ジェイク。元気でね」
（君もね……）
立ち上がって、私は家へと向かう。
「ナナ！」
その時、はっきりと、ジェイクの声が聞こえ、私は振り向いた。
だが、その姿は見えない。
「ジェイク……ありがとう」
それからもジェイクは私を、そして私の娘を、ずっと見守っていてくれたに違いない。

041　ロボット

僕はロボット。まだ人間とは程遠いロボット。体は寸胴、手足も短い。
そんな僕らでも、決められごとがたくさんある。
ひとつ、にんげんを傷つけてはいけない。
ひとつ、にんげんに逆らってはいけない。
数えきれないほどの制約があるけれど、僕らは決められた仕事をやるだけ。

「おりこうさん」
こんな僕でも、褒めてくれる人がいる。
みいちゃん。僕が仕える家の娘。まだ小さいが、僕のことが大好きなみいちゃん。僕もみいちゃんが大好きだ。
人間を好きになってはいけないという制約はあっただろうか……。
僕のコンピューター頭脳にそんな疑問がよぎったが、僕は仕事もこなしているし、人間を傷つけたりしない。大好きなみいちゃんを、傷つけるもんか。

ある日のこと、僕は突然、電源を切られた。
物も考えられない。こう思っているのは、少しばかりの充電が残っているためだろう。辛うじて、僕の思考は動いていた。
みいちゃん……僕はどうなるのかな。

「リコールですって。高いお金出して買ったのにね」
お母さんの言葉に、僕は絶望した。
どうして、いやだ、僕は暴走なんかしないのに。

だけど、僕の意見が聞き入れられることはない。僕は人間に仕える

身。ただ黙って、みいちゃんとも離れることになるのだろう。
やがて、充電が切れようとしていた。

「嫌だ！　返さないで！」
みいちゃんの泣き叫ぶ声が聞こえ、僕はなんだか暖かい気持ちになった。この気持ちは、どの説明書にも載っていない。
僕はロボットだけど、愛されていたよね。みいちゃん……。
君に会えて、僕は……。

そこで、僕はすべての機能を停止した。

悲しい悲しい物語……。
でも、それは終わりじゃなかった。
どのくらいの月日が流れているのだろう。それを知る術を、僕は知らない。
だけど目の前には、知っているような、知らないような女の人が、僕の電源を入れていた。
「小さい頃、大好きな掃除機があってね。リコールになっちゃって残念だったけど、こうしてリサイクル素材を使った二代目が出てきてくれて本当に嬉しい」
ああ、みいちゃんだ――。

僕はこれからも、人間に仕える。
いつか終わりが来ても、もう悲しくなんかないよ。
こうして一時でも、君の側にいられたんだから。君の役に立てたんだから。

だけど、人間たちに一つだけ言わせてくれるなら嬉しい。
少しでも長く、僕らを大事にして……。

０４２　友達以上、恋人未満

会いたくない、会いたくない、会いたい……。
次、会う時が、別れの時――。

私と俊哉は、幼馴染み。時に友達、時に恋人。そんな中途半端な関係のまま大人になり、気がつけば、俊哉は大学の同級生とデキ婚。
私たちは、永遠に友達の関係になった。
それなのに――。

ある日、私は中学の同窓会で、久々に俊哉と再会した。
「おう、遥」
私の名前を呼ぶ俊哉。変わらない笑顔。変わらない声。
その夜、私たちは恋人同士に戻った。

なぜそうなってしまったのか。いや、お互いにそうなりたかった感情が、その時むき出しになったに違いない。
罪悪感がなかったというわけではないが、その時はもう無我夢中で、自分たちのことしか考えていなった。

それからまた、私たちは中途半端な関係。友達以上、恋人未満。
どうして私たちが結ばれなかったの？　運命に問い質してみたくもなるけど、現実からは逃れられない。

「妻に気付かれたみたいだ……」
ある日、俊哉が暗い顔でそう言った。
「……私たち、別れるの？」
私はそう尋ねる。
「嫌だよ。おまえは俺と別れたいの？」

「でも……」

私たちに、答えはない。ただ好き合っているのに、許されない関係――。

それから、私は一人でいろいろ考えた。

きっと俊哉は、家族と別れられないだろう。でも私とも別れれば、もう友達にすら戻れないかもしれない。きっと俊哉は選べない。でもきっと、俊哉は今までも、そんな恋愛を経験してる。出会いと別れを経験してる。

私は一人、決意した。

次、会う時が、別れの時――。

０４３　殻を打ち破れ

どれだけ好きって言ったら、相手に伝わるかな……。
それとも、誰にも好きって言わなければ、この恋は叶うかな……。

そんなことを思って早一年。私、戸田さくらの片想いは、一向に成就しない。

片思いの相手は、同じ予備校に通う佐藤君。明るくて人気がある。学校とはまた違うこの場所は、私に思わぬ出会いをもたらしてくれた。

「さくらちゃん。この問題わかる？」

私を見つけるなり、佐藤君がそう言って近付いてくる。それは、私がこの中じゃ優等生と認識されているからだろう。

彼に名前で呼ばれ始めたのは最近のこと。みんなで一緒に飲みに行ったのがきっかけだ。

「どこ？　ああ、この問題難しかったよね」

色気のない話題だ。でも、こんなことじゃないと彼とは話せない。

彼から彼女の話を聞いたことはないが、モテそうな風貌に、私は半ば諦めている部分もある。

「ねえ。佐藤君って、彼女いるの？」

ハッとした時はもう遅かった。心の中の声が出てしまっていたかのように、私は思わぬ話題を振って後悔した。

「いないよ」

だが思いのほか、佐藤君は即答でそう言った。

「え？」

「いないって。俺、モテないもん」

「嘘だ！」

「本当。なに？　それ、期待していいの？」

突然、佐藤君はいたずらな目で私を射抜く。

私は恥ずかしさのあまり、顔を背けた。
「なに言ってんの。ちょっと気になっただけ。みんなも……言ってたしさ」
そう言ってはぐらかしているところに、先生が入ってきた。
ドキドキしている心臓の音、聞かれているかと思った――。

その日の帰り、佐藤君を見ると、別の女の子に声をかけられ、楽しげに話しているのが見えた。
私は何も出来ない自分に腹を立てながら、帰り支度を始める。
「やるよね、あの子」
帰り際、仲の良い女友達が、佐藤君のほうを指差して言った。
「え？」
「今日、告るらしいよ。佐藤に」
それを聞いて、私は頭が真っ白になる。だが、どうせ何もしない。自分の殻さえ破れない臆病者だということを、私は子供の頃から知っている。
私は時が止まったかのように、佐藤君を見つめた。積極的な女の子が同時に目に映り、羨ましさを感じる。
「駄目だ……」
唇を結んで、私はそう呟いた。
道は自分で切り拓くものだろう、そう悟ったのだ。いや、初めから知っていた。知っていたけれど出来なかった。今もまだ、足がすくむ。
「後悔する前に逃げちゃ駄目だ……」
私は佐藤君のもとへと駆け寄った。

０４４　醜い世界の中で

「動くな！」
外国人の兵士に銃を向けられ、私はその場に立ちすくみ、両手を上げた。
「よし、そのまま歩け」
見知らぬ言葉で何かを指示されたが、わからない。
「歩くんだ。さっさとしろ！」
銃口で背中を叩かれ、私は前へと歩き始める。きっとこのまま殺されるのだろう。
その時、後ろのほうで大きな爆発音が聞こえた。あの音は知っている。地雷だ。
私たちの住む町は戦禍に覆われ、今ここにあるのは恐怖、不安、絶望など、プラスのことなど少しもない。
ああ私の死は、私を捕らえた兵士の手柄になるだろうか。それともただ、名も知れぬ大勢の中で虫けらのように殺され、私が生きていたことなどわからないように、辱められ、いたぶられ、殺されるのだろうか。たぶん、後者のほうだろう。
「空……」
死を悟って、私は空を見上げた。
戦争が始まってから、空を見るのが怖くなった。空から爆弾が降ってくる。
「あ……」
次の瞬間、世界のすべてが光に包まれた。
私は物を考えることさえ失い、その光に呑まれていった。もちろん、私を捕らえた兵士も、地雷で傷を負ったであろう人間も、すでに死んでいる者たちも――。
ボタン一つで他国から打ち込まれるミサイル。それに比べれば、

人の手で捕らえられ、そのまま死んでいたほうが幸せだったのだろうか。それとも、一瞬で死ねる爆弾のほうが幸せだったのだろうか。

私の死は、同じ国民の死は、敵の兵士の死は、同じものなのか？

結局私たちは、存在そのものを焼きつくされた。残っていたのは、焼きついた人の影だけである。

生物を殺して生かされている人間。その人間が、人間同士争い合うのは何故なのか。なんのために生きるのか、なんのために死んでいくのか。なんのために戦うのか。そんな意味を、私は問いたい。

０４５　花火の夜に

その日、彼女の美しい顔が、僕の胸に焼きついた。
同級生――。まだ高校生の僕らは、周りの友達のように軽々しく手なんか繋げる性格でもない一方で、思春期特有の好奇心や焦りを抑えきれずにいた。
「花火やろっか」
夏祭りの縁日を抜け、海辺に出た僕は、コンビニで買っていた花火を見せて言う。彼女はただ、恥じらうように無言で頷いた。
彼女といると、ドキドキする。言葉なんかいらないくらい、ただ存在が僕の隣にあればいい。あわよくば、その笑顔を独り占めにしたい。
浜辺に着くと、用意していたマッチやらで種火をつくり、彼女と同じ花火を持つ。
花火は美しく、その手先から火花を散らしている。
「綺麗だね」
やっと、彼女がそう言って笑った。
その顔は本当に綺麗で、僕は一瞬にして心を鷲掴みにされる。
「う、うん。本当に……」
気の利いた言葉も見つからず、僕はただ花火を見つめる。
「最後だね」
あっという間に終わった花火で、残ったのは線香花火だけ。
「やる？　線香花火」
僕がそう尋ねると、彼女は怪訝な顔をして僕を見つめた。
「やらないの？」
「あ、いや、やるけど……派手な方が好きだからさあ」
「そう？　私、好きだよ。線香花火」
彼女の「好き」という言葉にドキッとしながら、僕は慌てて笑う。
「僕も好きだよ。線香花火」

取り繕うように言った僕を見透かすように、彼女は苦笑する。
「はい、どうぞ」
焦っている僕に対して、彼女は落ち着いた様子で、僕に線香花火を渡してくれた。
二人して、その儚げな火花を見つめる。
「綺麗……」
思わず、僕はそう言っていた。線香花火なんて、こんなにじっくり見たことはないかもしれない。だけど今見る線香花火は、今にも落ちそうな火の玉の周りに、美しいまでの火花が広がっている。
僕らは何本かある線香花火を、何度も見つめていた。
やがて終わった花火に、辺りが静まり返る。急に雰囲気が良くなったようで、僕はここぞとばかりに、彼女に顔を近づけようとした。
「帰ろっか」
僕がしようとしていることに気付いたのかはわからないが、彼女がそう言って立ち上がったので、僕は仕方なく諦め、二人で花火の後片付けをする。
「じゃあ、帰ろう」
すべての片付けを終えて僕がそう言った時、彼女の笑顔が見えた。
「今日はありがとう」
そう言いながら、彼女は手を差し出してきた。
まるで握手のようにその手を取り、僕らは歩き出す。
行きと変わらず言葉数は少なかったが、僕たちは確実に進展しているように感じていた。
その時、近くで一発の花火が上がった。
「わあ！」
思わず、僕らは叫ぶ。
たった一発の花火に照らされた彼女の顔が、温かかい光に包まれるように輝いていた。
「……好きだよ」
やがて自然に出た言葉に、彼女の顔が更に輝く。

僕らはそこで、幼くも優しいキスをした。

０４６　金庫の中（前書き）

※ホラー要素を含みます。

０４６　金庫の中

男の職業は、元は鍵師だった。男に開けられない鍵はない。家も金庫も、鍵のあるものなら何もかも――。

ふと住宅街を物色中、男はゴミ捨て場で足を止めた。

「兄ィ？」

傍らで、いつの間に子分のようになっていた青年が、首を傾げている。

「金庫だ」

ゴミ捨て場には、古めかしい金庫がそのまま捨てられている。ダイヤル式と鍵を合わせたものだ。

男に、金庫を開けたい欲求が起こる。

「おい。開いてるか確かめろ」

青年にそう言うと、青年は金庫の取っ手を掴んだ。だが、開いていない。

「開いてないよ。でも、こんなの兄ィならすぐ開くっしょ」

「いや、これは結構難関だ。ずいぶん古い。これだけ古けりゃ、持ち主すら開けられないかもな。おい、車持って来い」

「持って帰るの？」

「一応な。ま、入ってなかったらそれでいいじゃないか。でも、よくある話、遺産で残った金庫、ダイヤル番号も鍵もなく、開ける術がなくて捨てる人間はたくさんいるんだ。遺産がない人間ならなおさら。このタイプ、並の技師じゃ開かねえぞ」

二人は閑静な住宅街のゴミ捨て場から、重い金庫を担いでアジトへと向かっていった。

着くなり金庫に手をかけた男は、変わらぬワクワク感を抱く。この気持ちだけは、他の誰にもわからないかもしれない。

だが、金庫は思ったより手強かった。男は意地になって、飲まず食わずでダイヤルを回す。もちろん特殊な器具も使うが、手ごたえ

はまったくない。
「兄ィ……ちょっと休んだら？」
青年はそう言って、コンビニでこしらえた軽食を差し出す。
「そうだな。ありがとう。おまえは先休んでいい」
「うん……じゃあ、おやすみっス」
青年が去り、一人きりになった男は、サンドウィッチやおにぎりを頬張りながら、何度も金庫に手をかける。
「うーん、どうしたもんかな。もっと手強い金庫だってあったはずだが、こんなに時間がかかるとは……俺の腕も落ちたかな」
その時、カチッと、今までにない感触が手に伝わった。
「お？　お、おお！」
慌てて手に持っていた食料を皿に戻し、男は金庫にすがりつく。あとは鍵穴に鍵を通すだけだ。
こちらはお手のものだった。逸る気持ちを抑え、器具で鍵穴をなぞる。
「よっしゃ。遂に開いたぞ！」
男はそう言って、金庫の取っ手に手をかけた。
見た目は大きいサイズでもない金庫だが、鉄製のためか、年代物のためか、物凄い重い。
「くそ。開け！」
渾身の力を込め、男は全体重をかけてドアを開いた。
「う、うわあああああ！」
男は驚いた。中に何も入っていないかと思った。入っているならば、紙切れや小銭に似た金属であるかと思った。
だが、中にあったのは――。
「て、て、手？！」
手だ。人間の手首である。それ以外は、何も入っていない。
「なんてこった、やっちまった！　とんでもねえ金庫だった！」
男は焦っている中で、いろいろなことを考えた。
このままゴミ捨て場に戻せば、指紋や科学捜査から自分の足取り

が掴まれるかもしれない。誰かに見られていたかもしれない。かといって、警察署の前に捨てるわけにもいかない。

「やっぱり山奥か海の底にでも、どっかに捨ててくるか……」

それが一番だと思った。

「よし、夜明け前にあいつを起こして、すぐに……」

その時、開いていたはずの金庫の扉が、勢い良く閉まった。そのスピードは人為的、もしくはおかしな重力が働いたとしか思われない速さで、気配もなく、男に逃げる隙すら与えなかった。

「う……わあああああああああああああああああああああああああああああ！」

男の手は、金庫の中へと呑み込まれていた。

０４７　雷鳴ったらヘソ隠せ（前書き）

※少しホラー要素を含みます。（見る人から見たらコメディ要素でもあります）

047　雷鳴ったらヘソ隠せ

ゴォーン！

まるで大砲に撃たれたかのような凄まじい音が鳴り響く。夜というのに、昼間より明るい光が何度も走った。雷雨である。

「ママー！」

あまりに異様な雰囲気に、子供たちは泣きながら母親にすり寄った。

「怖いよ」

「大丈夫、大丈夫よ。ほら、どんどん雨も弱くなって、そろそろ止むわよ。布団に入りなさい。そばにいてあげるから」

「うん……」

子供たちは母親に見守られ、布団に入った。

「ちゃんとパジャマの裾、ズボンに入れるのよ。おヘソ出したら、雷さまにおヘソ取られちゃうんだからね」

「えー。やだ、怖い！」

「ちゃんとしまってれば大丈夫よ。ほら、目をつぶって」

「はーい」

安心したように、子供たちは眠りにつく。

やがて、雷も収まった。

「止んだみたいね……」

母親は子供たちが眠ったのを確認すると、子供部屋から出ていった。

「そろそろ私もお風呂入って寝なきゃ」

そう言って、母親は脱衣所に向かっていく。

「ママ……トイレ……」

その時、またも子供の声がして、母親が振り向いた。

「あら。また起きちゃったの？」

振り向いた母親の姿に、子供は絶叫した。

「ぎゃーーーーー！」

母親の腹に、ヘソはなかった。

０４８　咲きはじめの百合（前書き）

※百合要素を含みます。

０４８　咲きはじめの百合

いつからだろう、亜衣のことを誰にも渡したくないって思ったのは――。

「百合？　どうかしたの？」

そう呼ばれ、私は我に返った。

「亜衣……」

目の前にいるのは、亜衣。私の親友。中学校からの友達で、この三年間ずっと一緒にいた。

親友だと思っていた私はつい最近、亜衣への自分の気持ちに気付いてしまった……。

（好きなの、亜衣……）

口から溢れ出しそうな言葉を止めて、私は笑う。

「何かあった？　ぼうっとしちゃって。帰ろ？」

「うん」

私は立ち上がると、亜衣とともに学校を出て行く。

辛い、逃げ出したい……この気持ちに気付いてから、ずっとそんなことを思ってる。

この気持ちに気付いたのは、中学最後の体育祭の時だ。いつも明るくて元気な亜衣に、男子の一人が告白をした。単なる友達を取られたくないという独占欲かもしれないと思ったけど、私は今も、亜衣にドキドキしてる。触れたいと思ってる。

そんな自分が汚くも感じてる、今――。

「もう、百合ったら！　本当にどうしたのよ。もしかして、受験ノイローゼ？　元気出してよ」

亜衣は何の危機感も持たずに、私を心配してくれる。私に笑いかけてくれる。

「ごめん、本当になんでもないの」

「本当？　心配だなあ」

「……亜衣こそ、受験勉強大丈夫？　今日も塾なんでしょ？」
「うん、私馬鹿だから勉強しないとね。高校も、百合と一緒のところに行きたいし。ね？」
「うん……」
もし、私が亜衣に告白したら、この笑顔も何もかも、失ってしまうのかな……。

毎日毎日、私は悩んだ。日増しに強くなる恋心。
「百合。帰ろ」
「ごめん。他に約束あるから……」
次第に私は、亜衣を避けるようにまでなっていた。
「百合。何があったか知らないけど、私が何かしたなら謝るよ。だから許して」
亜衣はそう言ったけど、私は目を伏せる。
「ごめん、亜衣……亜衣は何も悪くないの。悪いのは……」
それ以上何も言えず、私は学校を飛び出した。
辛い、いっそ告白して楽になってしまおうと何度も思ったが、未来だけでなく過去を失くすかもしれないと思うと、怖くて出来るわけがない。
義務教育でなかったら、私は学校をやめているかもしれない。それほどまでに、追い詰められていた。

それから数ヶ月後。私は亜衣とは別の高校を受験し、春から他市の女子校に通うことになる。
「私……嫌われちゃったみたいだね。残念だけど……私にとって百合は、ずっと友達だと思ってるよ。学校が離れたって、ずっと……」
卒業式の日にも、亜衣はそんな優しい言葉をかけてくれた。ずっと無視し続けていた私に、亜衣はどうしてそんな言葉をかけてくれたのか。それなのに私は……と思うと、自分に腹が立って仕方がない。

私は泣きながら、思わず亜衣を抱きしめる。
「ごめん。ごめんね、亜衣……ごめんね……」
「百合……本当、どうしちゃったの？」
私の腕の中で、亜衣も泣いた。
「ごめんね、亜衣……大好きだよ。でも……だから、一緒にはいられないんだ……！」
そう言って、私は亜衣から離れると、そのまま学校を後にした。

それから私たちは、別々の高校へ通い始める。
あの時、幼い私には、そうすることしか出来なかった。だけど今も、亜衣は私の隣で笑いかけてくれている――。

０４９　自分は自分

いつもこうだ――。気が付けば、いつも僕は怒られている。
「悪さばっかりして！」

いつもこうだ――。気が付けば、いつも僕は褒められている。
「また満点！　あなたは頭がいいわね」

なぜだ、誰だ、僕じゃない、僕はやってない、僕は誰だ！

「……あなたが犯人ですね？」

いつもこうだ――。僕は僕に支配されている。
僕でない僕が何かをやったとしても、僕は僕であるために、その罪を償いたい。

「はい、僕がやりました」

僕がそう言った時、初めて、僕はもう一人の自分と同化出来た気がする。
あれから僕は、一度も表に出ていない。いや、僕はずっと一人だっただけだ。

０５０　待ちぼうけ

少女はその場所で、何度も何度も腕時計に目をやる。待ち合わせ時間から、三十分が経とうとしている。

不運にも携帯電話を忘れてしまい、連絡しようにも、いつ来るかわからないために、ここから離れるわけにはいかない。

「遅いな……一時間待って来なかったら帰るからね」

ぼそっとそう言って、少女は空を見上げる。ネオンが輝く街が、ぼんやり見える。涙にかすむと同時に、ピントが合わない。

「もう。出来ることなら掛けたくないのに……」

そう言うと、少女は鞄から眼鏡を取り出して掛けた。

途端、目の前に知っている少年の顔があった。少年はガードレールに寄り掛かりながら、何度も時計を見つめている。

「日野君！」

少女が駆け寄ると、少年はムッとした顔で立ち上がる。

「遅いよ」

そう言った少年に、少女は静かに口を開いた。

「……眼鏡、どうしたの？」

「デートだから……かけてない」

その言葉に、少女は笑う。少女もまた、同じ気持ちで過ごしていたのだ。少年が、目の前にいることも気付かずに――。

「とりあえず、コンタクトでも作りに行く？」

二人は笑いながら、繁華街へと消えていった。

051　私のパパ

中学生の萌は、最近出来た彼氏と交換日記をしている。
「今日は授業でやったバレーボールで、突き指しちゃった。ぼうっとしてたのはね、キヨ君を見ていたからだよ……」
そう書いたところで、萌は恥ずかしさに目を細めた。
「もう、やだー。恥ずかしい！」
一人でそう呟きながら、萌は後ろにある気配に気付き、ハッとする。
するとそこには、仁王立ちで恐ろしい顔をした、父親の姿がある。
「パパ！」
「何が恥ずかしいだ！　こっちのほうが恥ずかしいわ。まったく、中学生で色気づきやがって。俺はな、絶対に交際なんか認めないぞ！　何がキヨ君だ。今度の日曜デートだってな、絶対阻止するからな！」
そう言っている父親は、まるで頑固な子供のように口を曲げている。
「もう、パパ！　勝手に日記読んだのね。サイテー！」
「ああ、最低で結構だ。当たり前だろ、萌。この世に生まれてたった十四年、それなのにおまえは学生の本分である学業に専念もせず、男にうつつを抜かすっていうのか。そんなの父さん、絶対に認めないからな」
父親はそう言うと、おもむろに机の上の交換日記を奪い取り、真っ二つに引きちぎった。
「ああ！」
「少しはこれで思い知れ」
その時、萌の目から涙が零れ落ちた。
「も、萌……」
「ううっ、ひどい……」

「うっ……も、もとはといえば、おまえが悪いんだからな。そりゃあパパも少しは悪いとは思うけど、でも……」
「出てって！　パパなんて大っ嫌い！」
萌がそう叫ぶと、父親の顔も崩れた。
「ひどい……そんな言い方ないだろ。萌の馬鹿――！」
そう言って去っていく父親に、萌は呆気に取られる。
「逆ギレ、子供……もう、本当許せない！」
しばらくして、部屋がノックされ、今度は母親がやってきた。
「ママ！　ひどいんだよ、パパってば」
「聞いたわ。パパも反省してるから、許してあげて。それに、私だって心配よ。まだ萌は中学生なんだし」
「でも……」
「パパね、部屋に閉じこもっちゃって、夕飯もまだなのに食べようともしないのよ。あの食い意地の張ったパパがね。萌のこと大事だからしたことなんだから、萌も許してあげて」
「……うん……」
まだ納得は出来なかったが、小さい頃から父親に大事にされてきたことだけはわかっている。
「私も言い過ぎたかも。パパに謝ってくる」
萌はそう言うと、父親の部屋を訪ねた。
「パパ……」
だが、そう言っても返事はない。
萌がそっと部屋のドアを開けると、部屋の中は真っ暗で、唯一ついたテレビには、萌の小さい頃の姿が映った、ホームビデオが動いている。
「パパ……」
テレビの前のベッドで眠ってしまっている父親に、萌は静かに近付いた。
「ごめんね、パパ。私もパパの気持ち考えてなかった。でも……破るなんてひどいよ。でも私のこと考えてのことだもんね……」

その時、父親ががばっと起き上がり、萌の肩を掴む。
「許してくれるのか？」
「う、うん」
「よかった！」
父親は泣きながらそう言って、萌をしっかりと抱きしめた。
「もう、パパってば過保護なんだから。でもわかってるよ。私もパパのこと大好きだもん」
「萌――！」
その週末、萌のデートに父親がついてきたのは、言うまでもない。
「ちょっと、パパ。帰ってください」
「嫌です。だってパパのこと大好きだって言ったでしょう？　絶対に交際は認めないっていうのは撤回してないからね」
「もう！」
萌と父親の、浮き沈みの激しい死闘の日々は、これからも続く――。

052　シロの家族

シロは雑種の子犬。公園の片隅で生まれた。一番遅く生まれて小さく、雑種というのに真っ白だった。

父親は知らない。だが母親はいつも優しく、シロと兄弟たちに乳を飲ませる。

「おなかすいた……」

事あるごとにミルクを強請る兄弟たちに、母親はそっと微笑んだ。

「もうお乳が出ないの……栄養つけるために、何か食べ物探してくるね。ここから動いちゃ駄目よ。猫に襲われたら大変」

母親はそう言うと、よろよろと草むらから出ていった。

途端、母親の悲鳴が聞こえ、シロは兄弟たちと草むらから顔を覗かせる。

すると、人間の子供が、母親を苛めていた。

「お母さん！」

「来ちゃ駄目！」

母親の言葉に身がすくんだが、人間の子供はシロたちの存在に気付き、近付いてくる。

（おい。こっちに子犬がいるぞ。汚ねえ）

「逃げて！」

母親の声が聞こえ、シロは兄弟たちと一目散に走り出した。

「誰か助けて！」

シロの小さな体では、全速力で走っても子供に追いつかれてしまう。

その時、シロの目の前に、大きな猫が立ちはだかった。

「猫だ！」

母親に猫は危険だと教えられていたシロだが、勇敢な唸りは上げられても、その場に身をすくませる。

「どいてな」

猫はそう言うと、追ってきた人間の子供の前まで歩き、身を震わせて威嚇し始めた。
人間の子供は互いに目配せすると、その場から静かに去っていく。
「シロ！」
その時、シロの母親がやってきた。傍らには兄弟たちがおり、みんな無事だったようだ。
「お母さん」
「シロ、猫から離れなさい」
そう言われ、シロは猫を見つめた。
猫は横目でシロを見つめ、優しく微笑みかけている。
「お母さんが呼んでるよ。行ってやんな」
猫の優しさを感じ、シロは数歩前へ歩いた。
「お母さん。この人が僕を助けてくれたんだ」
シロの言葉に、母親はまだ警戒心を取っていない顔をしている。
その時、猫は母親のもとへ歩いていき、仰向けになった。警戒心などまるで感じさせない。
「ぼうやたちにミルクを分けてやるよ。私も最近、子供を失くしたんだ」
その言葉に、母親の警戒心も解けていった。
やがて誰とも言わず、シロの兄弟たちが猫の乳を吸い出した。シロは母親を見つめる。
「分けていただきなさい」
母親は頷きながらそう言ったので、シロも猫のもとへと向かった。
その日から、シロには母親が二人出来た。

０５３　追憶の人

淡い夢でも、あなたを愛していいですか。
もう会えなくても、あなたを想っていいですか。

僕の恋は、一生叶わない。
ただ一度だって、その想いが報われたこともない。
それでも僕はこの恋を、諦められずにいる。

「翔くん」

母さんの声が聞こえる。

「翔くん」

母さんの足音が聞こえる。

「翔くん」

母さんの顔が見える。
いや、僕の脳裏に思い浮かんでいるだけだ。

僕は母さんに恋をした。実の母親ではない。
父さんの恋人に、僕は恋をした。
年も何もかも違うあの人に、僕は恋をした。

「さようなら」

高校を卒業したその年、ただそれだけを書いて、僕は家を出た。

僕の想いは秘められたまま、彼女に気付かれることはないだろう。
報われない想いだとは思わない。それ以前に、終わらない恋だ。
だって、どんなことをしたって、忘れられなかったから――。

親にしてみればまだ子供。いつか僕は、連れ戻されるだろうか。
だけど母さん、次に会う時はきっと、あなたの理想の息子になって会えるだろう。

僕はあなたを困らせない。だから今は、僕に時間をください。
あなたと真正面から、向き合える時間を――。

０５４　ラブ・レター

鞄の中にはラブ・レター。
それも年季の入った、しわくちゃなラブ・レターがある。
私は何度も、彼にその手紙を渡そうとした。

朝一番、彼の机の中に入れておいたこともある。
でも、待っている間に思い直し、それを出した。

放課後、部活終わりの彼を待っていたこともある。
でも、結局渡す勇気はなかった。

バレンタインも、誕生日も、いくつかきっかけはあったのに、私には勇気がない。
きっともう言えない。たとえ明日が、卒業式だったとしても――。

「付き合ってください！」

乾いた風の中で、そんな声が響いた。
私の目の前には、彼がいる。彼が手を差し出している。

「……う、受け取ってください！」

私は目をしっかりとつぶりながら、恥ずかしさを堪え、逆に手を差し出した。
その手には、年季の入ったラブ・レターが握られている。

「え……読んで、いいの？」

もはや何も言えない私に、彼はその手紙を受け取り、読み始める。
私はもう、恥ずかしさにこの場から消えたくなった。
だけど彼は、思いのほか、明るい表情で私の手を取る。
「付き合おう」
彼の照れた笑顔が、私の心を揺さぶる。
「は、はい……」
緊張しながらも、私はそう言って頷いた。
自分からは言い出せなかったけれど、彼は私を選んでくれた。
夢が叶った瞬間だ。

０５５　ストーカーの末路

電話、尾行、やれることはなんでもやった。
僕がこんなに愛しているのを、彼女も知っているはずだ。
だけど彼女は、僕の良さをわかろうとしない。

「なんでわからないんだ！　君は僕のものだろ？　君を一番愛しているのは僕なのに！」

僕はそう言って、彼女の髪を掴む。彼女は泣き叫び、助けを乞うた。
その時、僕は視線に気づいて振り返る。誰だ。

「警察を呼んだわ。逃げなさい」

女の声がした。
“逃げろ”という言葉に反応し、僕は無意識に彼女から離れ、一目散に駆け出す。

その日から、僕の周りに女の姿があった。
電話が鳴り止まず、尾行され、時には僕の出したゴミまで漁られた。
なんなんだ、この女は。この女のせいで、彼女に電話する暇もない。彼女に会う暇もない。

しばらく経ったある日、女がいなくなった。
僕はしきりに、女の姿を探した。でも、電話も繋がらない。住所もわからない。
もしかしたら、僕と女はお似合いなのかもしれないと思うように

なったのは、僕が異常だからだと思うだろうか。

だがその夜、僕は殺された。

「なんでわからないのよ！　あんたは私のものでしょ？　あんたを一番愛しているのは私なのに！」

殺される直前、僕は僕がストーカーだということを知った。

０５６　流される男

「迎えに来て」
「コーヒー買ってきて」
「食事よりカラオケがいいな」

なんだろう。僕は彼女の、ただ都合のいい男？
僕にだって意思がないわけじゃない。頼まれれば断れない性格ではあるけれど、なんだか彼女を喜ばせたくて、それが嬉しさに変わっている僕がいる。
でも、僕にもプライドがある。そうそう彼女の言いなりにはなりたくない。

「映画行かない？」
今日こそ主導権を握ろうと、僕は彼女にそう誘いをかけた。
「いいよ」
彼女はあっさりＯＫ。
「このＳＦ映画でいいかな。観たかったんだ」
「ええ？　今は洋画より邦画じゃない？」
「そ、そうかな……」
僕はひるんだが、今日は僕が主導権を握ると決めている。
「そうだよ。こっちの刑事モノがいいな」
「いや、今日は僕が誘ったんだから、僕の観たいものにしない？」
彼女は一瞬考えて、溜息をつく。
「いいけど……私、ぶっちゃけこの間、それ観たんだよね」
それを聞いて、僕はがっくり来た。
誰と観たんだ。そんなことは聞けない。彼女は僕の恋人ではないから。でも、すでに観たと言っている彼女に、二度も見せるのは忍びない。

「わかった……じゃあ、こっちの刑事モノにしようか……」

結局今日も、僕は流されるまま。

だけど惚れた弱みというやつか、僕は彼女を嫌いになれない。

０５７　おばけさん

僕はおばけ。どうしておばけかは知らない。
人間だって、どうして人間かなんて知らないだろ？　それとおんなじ。

僕はおばけ。人間を少し驚かすのが好き。
でも、怖がらせたりはしないよ。本当は、人間と話したいんだ。

「おばけ……？」

僕と目が合う女の子がいた。
墓参りに来ていた女の子で、名前をキョウという。

「君は僕が見えるの？」
「うん、見えるよ」

その日、僕は初めて人間の友達が出来た。

キョウは墓場近くのおばあちゃんの家に帰省しており、あと何日かで帰ってしまうらしい。

「それまで一緒に遊ぼうよ。キョウ、一人で遊んでたの」

キョウに連れられ、僕はキョウのおばあちゃんの家へ向かった。
そこで僕は、おばけになる前のことを思い出した。

「ここは……僕の家だ」

僕の言葉が理解出来ず、キョウはきょとんとしている。
僕の記憶が、だんだんと思い出される。

そこで、僕は一人の老婆と出会った。

「ヨウ……」

老婆は、僕の娘である。
でも彼女に、僕の姿は見えない。

「そうか、僕はキョウに出会い、ここに連れて来てもらうために、今日まで生きていたんだね」
「おばけさん！　からだが透けてるよ！」

キョウの言葉に、僕は静かに笑みを零す。

「ありがとう、キョウ。僕はこの世に未練がなくなったみたいだ。どうして今日まで忘れていられたんだろう……あの子の元気な姿が見られて、そして君に会えて、本当に嬉しいよ」

そして僕は、キョウの前から姿を消した。

「キョウちゃん？」

おばあちゃんが、庭先で佇むキョウに声をかける。

「おばあちゃん！　おばけさんがいなくなっちゃった！」

泣きながら抱きつくキョウに、おばあちゃんは庭先を見つめる。
ふと、暖かな視線のようなものを感じた。

「そう……でもそのおばけさんは、きっといいおばけさんね。悪い気分がまったくしないもの」
「うん。優しかったよ」
「キョウちゃんが立っていたところにね、大きなひまわりが咲いているでしょう？」
おばあちゃんの言葉に、キョウは涙を拭いて、庭先を見つめる。
その先には、大きなひまわりが誇らしげに咲いていた。
「うん……」
「あのお花はね、おばあちゃんのお父さんが植えてくださったのよ。だからあの場所が好きな人に、悪い人はいないの。だってお父さんが守ってくださっているんだもの」
「おばあちゃん……」
「だから、たとえおばけさんが消えてしまっても、キョウちゃんの胸の中で生き続けて、きっと守ってくれるわね」
「うん！」

キョウの元気な声が聞こえた。その声は、幼いころの娘の声を思い出す。
僕は守るよ。あの大きなひまわりのような、温かい心を持って――。

058　ダンサー

休日のビル街に、大音量の音楽が響く。
カラフルで身軽なファッションの若者たちが、まるでジプシーのように舞う。
「沙羅。ちょっと休憩しよ」
最後まで踊っていた少女はそう言われ、水を飲んで階段へと座り込んだ。
若者たちはここで踊りを磨く。休日出勤のサラリーマンや、家族連れで出かける人々が、時に見てはいけないようなものを見る目で、足早に通り過ぎる。それでもやめられないのは、人に見てもらいたいから。この場所が好きだからである。
でも、みんなそれぞれが抱えている悩みが、少しずつ影を落とす。
「早くプロになりてえな」
「ああ。次の大会には絶対勝つ。じゃないと、親も納得させられないし」
「おまえ、サビのところもっと回転増やせんじゃねえの」
「それは無理だよ、今のでギリギリ。おまえこそ、その後のジャンプ、もっと高く飛べよ」
そんな仲間の声が、沙羅と呼ばれた少女にも響く。
ギスギスした仲間は嫌だが、沙羅自身も焦りがないわけではない。だが歯をむき出し、失敗する度に衝突する仲間を見て、沙羅は居たたまれない気持ちにもなった。
沙羅はふと、ビル群の中にそびえる高層マンションを見つめた。上の方は風が強いらしく、ベランダに干された洗濯物が今にも飛びそうになっている。
「どうしたの？　沙羅。ぼうっとしちゃってさ」
仲間の声に我に返って、沙羅は繕うように笑った。
「ううん。あれ」

沙羅はそう言って、高層マンションのベランダを指差す。
「マンションがどうかしたの？」
「あの洗濯物、まるで踊ってるみたい」
不思議なまでの沙羅の言葉に、仲間たちは一斉にベランダの洗濯物を見つめる。
「あっははは。確かに。沙羅、変なこと考えるなあ」
「そうかな……？」
「でもわかる。激しいダンスだな。俺らも負けちゃいらんねえ」
風に煽られるように、一同は立ち上がる。
「もう一度、最初からやろう。納得いくまでじっくりと」
「おう！」
今日も休日のビル群に、キラキラした夢を背負った、若者たちが舞う。

059　ハッピーバースデイ

君が生まれた日、僕は柄にもなく必死に走って病院へ向かった。
僕は父親で、彼女が母親。そして君が生まれてきた。

君の小さな手が、僕のごつごつした指を握る。それだけで感動したんだ。
僕はどうして、君に触れるのが怖かった。だって壊しそうなくらい儚い幼子だもの。

でも君は強く育った。まるで自分の分身のように、彼女の分身のように、生まれてきてくれたことだけが幸せ。そして僕の宝物だ。
それはいつまで経ってもね。

今日は僕の誕生日。僕の両親も、そうして僕を愛してくれたのだろう。そしてこの愛を、僕が受け継ぎ、君が受け継ぎ、そして新しい生命に受け継がれていくはずだ。
なんと美しい連鎖なのだろう。
僕はキャンドルの向こうに映る、嫁いでゆく君の姿を見つめながら、そんなことを思っていた。

060　たったひとつの香り

「あ……」
人ごみの中、私はふと振り返った。
「どうかした？」
先を歩く女友達の声で我に返り、私は小走りで近付く。
「ごめん」
「まーた、愛しのカレ？」
「……ごめん……」
あの人と、同じ香水だった――。ただ、それだけ。それだけなのに、私は何度も振り向いた。
彼とは一度だけ会っただけの人。満員電車を降りた朝の駅で、気分が悪かったのを助けてくれた。名前も言わずに行ってしまったので、私の気持ちは宙ぶらりんのまま……。
「よし、そんなに言うなら、確かめに行こう」
「え？」
友達に手を引っ張られて、私たちは近くの百貨店へと入っていった。連れて行かれたのは、香水専門店。
「ここ？」
「そう。匂いで思い出すことがあるかもしれないって思ったのよ。ハイ、どんな匂いだった？」
友達に言われて、私は香水のテスターを嗅ぐ。店員さんも交えての、匂い探しが始まった。
「うーん、もう少しフローラルっていうか、なんだろう……」
「じゃあ、こういうのかな？」
「あ、これ！」
私は突然、そう叫んでしまった。彼の匂いだ。
「これを買うお客様は、学生さんが多いですよ」
店員さんの言葉に、私たちは頷いた。これで一つ情報が得られた

というわけだが、肝心の人が見つからない。
「でもこれだと思うんだけど、もう少し違うような……」
「香水というのは、香りに段階があるんです。同じ香水をつけても、最後に香る香りはその人だけの香りになるんですよ」
「じゃあ私が思っている香りって、その人だけの……」
「そうかもしれませんね」
そんな話を聞いて、私たちは百貨店を後にした。私は思わずその香水を買った。
「でもさ、もし愛しのカレを見つけたとしても、どうするつもり？香水まで買っちゃって」
いきなり現実に戻した友達に、私は空を見上げる。
「……いいの。彼女がいても覚悟は出来てる。なによりお礼が言いたいし、ためらいもせず助けてくれたことが人として素敵。なんかこの匂い嗅いでると、私まで勇気もらえるって感じで……」
その時、人ごみの中で、私はふとすれ違う人と目が合った。
「見つけた……」
思わずぼそっと言った私は、目の前にいる男性の腕を掴んだまま、目が逸らせない。
「同じ香りがする」
男性が、静かにそう言った。
「あ、あなたを探していたんです！」
人目もはばからず、私は彼にそう言った。

０６１　世紀末の少女

世紀末、人はノストラダムスの大予言によって、恐怖の瞬間を待っていた。

「なーんだ。結局なんも起こらないんじゃない」

冷めた目で歩きながらそう言い放った少女は、路地裏へと入っていく。

「ちょーだい」

路地裏に立っていた青年に、少女はおもむろに手を差し出す。

「金で払う？　体で払う？」

「もちろん体で」

「来いよ」

青年に手を取られ、少女は路地裏の更に奥へと連れて行かれる。

「先にちょうだいよ」

少女の言葉に、青年は白い粉の入った袋を見せた。

「あとでやるから、さっさと脱げ」

「いいけど。ねえ、あんたはノストラダムスの大予言、信じてた？」

「は？　おまえ、馬鹿じゃねえの？」

「あんたは利口なの？」

「おまえよりはな」

少女の口元が僅かに緩み、不気味な笑みを浮かべる。

「あたしが馬鹿なら、もっと馬鹿になれればよかった。そしたら何も考えず、楽に死ねたのかも」

「おまえ、死にたいの？」

「そうね。生きてる意味より、死ぬ意味のほうが大きいと思わない？　なんだかとても美しい」

「……変わってるな」

「よく言われる」

皮肉に笑った少女に、青年は空を見上げた。真っ暗な路地裏、高

いビルの谷間から見えるその空は、なんとも高く狭い。
「どうせ死ぬなら、こんな狭いところじゃなく、デカいことして死ねよ」
「そうね。ノストラダムスは予言が当たらなくても、こんなに人に恐怖を与えたし」
「じゃあ、おまえはどんな予言をする？」
青年の言葉に、少女は真っ直ぐと前を見据えた。
「愛や平和を望んでも、破滅より遥かに難しいのかもね」
「は？」
「あたしの望みなんて、ちっぽけなことで叶えられたのに……」
少女の脳裏に、喧嘩ばかりしている大人たちが浮かぶ。
少女の非行に、母親を責める父親。家庭を顧みない父親を、少女のせいにする母親。
「あたしが悪いのなら、あたしがいなくなればいいだけなのに、あたしはどうして生きてるんだろうね……」
そう言った少女の前で、青年は白い粉の入った袋を燃やした。
「おまえのせいで、とんだ大損だ」
青年の言葉に、少女が笑う。
「自分で燃やしたんじゃない」
「ああ、そうだ。だから俺はおまえに売るものは何もない。おまえもここにいる意味もない。さっさと家へ帰りな」
「……嫌よ。あの家に私の居場所なんかないんだから」
「それでも帰れ。いいか、ノストラダムスは馬鹿じゃない。でも人とずば抜けて違うことをする人間は、変人とみなされる。おまえもおんなじ変人だ。だから望むことは望めばいい。それが叶わないのは誰のせいでもない、自分のせいだ。自分で何かを掴む実感を得てみな」
よくわからない理屈をこねられながらも、少女は苦笑し、立ち上がる。わけがわからなくても、背中を押すきっかけにはなっていた。
「帰る」

少女はそう言って、数日ぶりに家へと帰った。
両親の喧嘩がなくなっていたわけではない。少なからず自分も怒られた。
「ねえ、お父さん、お母さん。私も二人が望むような子になれるよう努力するから、二人も喧嘩なんかやめてくれない？」
たったそれだけの言葉を言うのに、どれだけの時間がかかっただろう。
少女の望みは、少女自身の手で掴まれた瞬間だった。

０６２　バスの君

バスはいつも緊張する。あまりバスに乗る習慣のない私は、今日もたくさんの小銭を事前に用意して臨んだ。高校生にもなったのに恥ずかしいことだとは思っていても、未だ慣れていないのだから仕方がない。

バスに乗るのは、月一回の乗馬レッスンの時のみ。そこで彼と出会った――。

彼というのは、決まって同じ時間に乗って来る男性。制服からして、隣町の高校だ。

私は終点まで乗るので、その少し手前で降りる彼とは、ほとんどずっと一緒。一番後ろに座ると、彼の姿をずっと見られるので、それこそずうっとドキドキしていた。

だけどその日、彼はいつもの停留所で降りなかった。終点に近付くバスは、すでにほとんどの人が降り、運転手さんを除いては私たちしかいない。

結局、終点になり、彼は私とともに終点で終りた。

「たまに会いますよね？」

人気のない終点の停留所で、彼が私にそう言った。軟派な人なのかと思って力を入れたが、その笑顔はなんとも優しい。

「は、はい……」

思えば中学の時から女子校に通っていたため、知らない男性としゃべるのは初めてかもしれない。

「もしかして、この先の乗馬クラブの会員さん？」

「え？　どうしてわかるんですか？」

私が驚いていると、彼もまた驚く。

「だって、こんなところまで来るなんて、用があるなら乗馬クラブかゴルフでしょ。小奇麗な格好してるし」

バスの終点のその場所は、確かに乗馬クラブかゴルフ場しかない。
「じゃあ、あなたも乗馬クラブに？」
「まさか。そんな高級なスポーツ出来ないよ。この先の農家、親戚がやってるんだ。時々、野菜もらいにいく。今日も親に頼まれててね」
「そうなんですか……」
「じゃ、頑張って。行ってらっしゃい」
彼の笑顔に見送られ、私はそれ以上何も言えず、乗馬クラブへと入っていった。

その帰り、バス停で待つ私は驚いた。こちらへ走ってくる男性は、紛れもなく彼である。
「あれ？　今、帰り？」
まるでもう友達のように話しかけてくる彼の手には、たくさんの野菜がある。
「は、はい……」
その時、バスがやってきたので、私たちは会話を止めてバスへと乗り込んだ。
でも彼は、私の前の席に座り、そのまま話しかけてくる。
「これ、やるよ。家で食べて」
「え、いえ、いいです」
「遠慮すんなよ。はい」
手早く分けられた袋の中には、ごつごつした野菜が入っている。
せっかく彼がそうしてくれたのに、私は頑なに首を振った。
「本当にいいです。お母さんになんて説明したらいいかわからないし、土もついてるし、知らない人から物をもらっちゃいけないし……」
「ハハハ。箱入りだな」
彼は怒るというより呆れた顔をして、差し出した手を止める。そして中からきゅうりを取り出すと、半分にして私に差し出した。

「腹に収めりゃ問題ないだろ。それに、野菜ってのは土がついてるもんなの。高級スーパーじゃそんなもんないかもしれないけど、こっちのが栄養いっぱいでうまいに決まってんだろ。きゅうりはさっき洗ったし、うまいよ」

自らも美味しそうに食べる彼。本当言うと、きゅうりは苦手だったのだが、これ以上の拒否は出来ないと思い、私は目を瞑ってきゅうりを一口かじった。

「おいしい……」

思わず私の口から、そんな言葉が漏れていた。

「だろ？　これはうちの農家が愛情たっぷりに育てた、我が子同然の野菜だからな。食わず嫌いしてたら損するよ」

その言葉を素直に受け入れて、私は一気にきゅうりを食べる。

「今度……お手伝いしちゃ駄目ですか？　野菜とか、採ってみたい……」

よくそんな大胆な言葉が出たと思ったが、私はそう言っていた。

「いいけど……大丈夫？　あんた、お嬢様だろ。それこそ土とかつくよ」

「だ、大丈夫です。ちゃんと汚れてもいい服で行きます。思えば野菜を作っているところなんて見たことないし、それに……もっとあなたとお話がしたいです」

勢いづいて言った私の頭に、彼の手が触れる。

「俺は大歓迎。俺ももっとあんたと話がしたい」

彼が教えてくれることは新鮮なことばかりで、私の世界にはなかったものばかり。

私たちは、週末ごとに会うようになっていった。まるで恋人のように――。

０６３　やさしいきもち

この気持ちはなんというの？
愛とか恋とか、そんな言葉では片付けられない。
付き合えなくてもいい、というのは嘘になる。でも、君を困らせたくない。
側にいられるだけで幸せだという気持ちに、人は出会えることが難しいという。

でも、僕は出会った。
べつに誰もが認める女性でもなく、ごく普通の女性。それでも、僕にとってはトクベツな存在なんだ。

たとえ君が結婚しても、たとえ僕に恋人が出来ても、僕の一番はいつも君であるだろう。
それがなぜかはわからない。

愛とか恋とか、そんな言葉では片付けられない。
この気持ちはなんというの？

064　おりん

おりんは十五歳。たった十五年の人生を、濁流に呑まれて終えた。
両親はなく、近所の畑仕事を手伝いながら、逞しく生きていた。

その年、村にある暴れ川がたびたび氾濫するので、人々は苦渋の決断をすることになる。
「神さんに、お供えしよう……」
それは、人柱を立てるという決断だった。

その夜、おりんのもとに、村の代表者たちが集まった。
「他の娘は嫁ぎ先が決まっている者ばかり。親兄弟もおまえさんより多い。言いにくいことだが……」
人柱は、神の怒りを鎮めるために、人が生きながらにして死ぬことを意味する。
「わかりました。おら、神さんのもとへ行きます」
二つ返事で承諾したおりんに、村人たちも少し拍子抜けした。だがおりんは、すでに覚悟を決めた顔をしている。
「おらには家族もないし、今まで人の役にあまり立ってこなかったと思う。神さんのもとへ行けるなら、おら本望だ」
村人たちはおりんに感謝し、次の日の朝、川の中に太い柱を立てた。昼にはまた、嵐が来るらしい。

川の中に立てられた柱に、早速おりんが括りつけられる。その深さは胸のあたりまであり、嵐が来ればひとたまりもない。
「みんなには家族がいるんだ。仕事があるんだ。でもおらには、守るべき家族もいねえ。神さん、おらの命なんていらないかもしれないけど、どうか勘弁して嵐を止めてくれ……」
ぶつぶつと祈りながら、おりんは勢いが増す川の下流を見つめる。

「母ちゃん……怖いね……」
やがて、おりんは静かにそう言った。

かつて、おりんにも家族がいた。だが、父は事故で亡くなり、そして母は五年前の嵐で、おりんと同じ人柱となって死んだ。
そんな母親が見た最後の風景を見つめながら、おりんは不思議と笑みを零す。
こんな風習は嫌だと思ったが、村人を責めようとは思わない。なにより今は、やっと家族同じところへ行けることが嬉しくも感じた。
「おら、やっと一人じゃなくなるんだ……」
鉄砲水のような濁流が、おりんを包んだ。次の瞬間にはもう、打ち込んだ柱すらなくなっていた。

おりんは死んだが、次の日も嵐は止まなかった。
やがて、村中の娘たちが人柱にされ、村の代表者たちの娘の番になると、その風習も消えた。
「こんな馬鹿げたことはやめよう」
そんな判断に、娘を殺された家族は口を揃えて代表者たちに詰め寄る。
「なぜもっと早く言ってくれなかった！　おらの娘は死んだんだぞ！」
「自分の娘の番になったらこれか！　人柱になったって、川は氾濫し続けているじゃないか！」
風習は消えたが、生き残っていた娘たちも、争いの中で殺された。
村から、娘が消えた。

065　未来のスナイパー

どれくらい走っただろう。俺はやっと手に入れた安息の場所で、呼吸を整え、握られた銃に新しい弾を装弾する。

西暦三ＸＸＸ年、何度目かの戦争で人類はほぼ絶滅したものの、俺はまだ生きている。

さして生きることに執着していたつもりはないが、こうして生きるために殺す道具を持っているのだから、よほど生きたいらしい。

「キャー！」

人の悲鳴が聞こえ、同時にバリバリと骨を砕く音が聞こえた。

人類はいつの時代も血なまぐさいが、人間同士で争っていた時代など、今となっては信じられない。なんと愚かな行為だろう。

俺は呼吸を整え、安息の場所から走り出した。

途端、目の前に巨大な虫が君臨するように立っていた。

いつからか、突然変異で生まれた虫は、あっという間にこの星を征服した。やつらのエサは人間であり、人間が作った兵器など、やつらの生命力には敵わない。

それでも俺は、戦うだろう。生きることに執着しているわけではないのなら、それは男の性というものか。

俺は生きる。人類が滅亡する、最後の瞬間まで――。

０６６　異国の街にて

彼女にフラれた夏、僕は失恋のショックを癒すため、大した準備もせずに外国へと旅立った。商社に勤めているので金はあるし、彼女のいる日本じゃない何処に行ければそれでよかった。

北欧の国で、僕は何するでなく公園のベンチに座ったまま、ただその街並みを眺める。見なれた日本じゃないために、その風景は動く美術のように新鮮で美しい。

「――――？」

突然、間近で女性がそう話しかけてきた。だが、異国の言葉で何もわからない。

だか彼女は、諦めることなく身振り手振りで僕を見つめる。

僕は持っていた電子辞書を開こうとしたが、彼女のジェスチャーを見てひらめく。

「ここにずっといるから、どうしたのって聞いてるの？」

今度は僕が異国の言葉だったので、彼女は首を傾げた。

僕は自分を指差して言った。

「ケン」

「ケン？」

「そう、ケン」

彼女は嬉しそうに笑い、今度は自分を指差す。

「エレナ」

「エレナ」

名前だけわかっただけなのに、僕らは意気投合していた。

ジェスチャーだけでも伝わるものだ。エレナは近くのレストランのウエイトレスをしており、年は二十三歳。長時間ただ座っているだけの僕を見て、声を掛けてくれたらしい。日本語を教えてあげる

と、とても喜んだ。
異国の地で、異国の人と触れ合う機会があるとは思ってもみなかった。だって僕はただ、傷心旅行に来ただけなのだから。
「ケン。アリガトウ」
食事を共にした後、覚えたての日本語で、エレナはそう言った。
僕は頷き、ありがとうとエレナの国の言葉で返す。
それから僕らは、その場で別れた。会う約束もしなかったのは、明日には帰るからだ。これ以上の情などいらない。

ホテルに戻った僕は、財布がないことに気がついた。
「やられた！」
そう思ったが、カード類は別の場所に持っていたので無事である。財布には小銭程度しか入っていなかったから諦めがつくが、パスポートが一緒だったことを思い出し、僕は顔面蒼白でホテルを飛び出した。
思えば、僕が女性に声を掛けられるはずがなかったんだ。でも彼女は、いい紛らしになってくれた。金はその代償と思えば、高くはない。だが、パスポートは別である。
ホテルを出たところで、目の前にはエレナがいた。
「エレナ……！」
エレナは眉をひそめ、僕のパスポートと財布を差し出す。
「エレナ……？」
そう言ったところで、エレナは涙を溜めて僕に抱きついた。何が起こったのか、僕は少し身構えたままわからない。
その時、慌てた様子の警察が、エレナの手を掴んだ。その様子から、エレナが観光客目当ての泥棒だということを悟った。
僕は警官を静止して、エレナを庇う姿勢を取ったので、警官は静かに去っていった。
「ケン……」
庇った僕に何度も頭を下げながら、エレナは僕の体を掴む。まる

で日本に帰らないでと言っているようだ。言葉はわからなくとも、彼女が僕のパスポートを盗ったのは、僕にまた会いたかったから、そう思うことにした。

僕はエレナを宥めながら、小指を差し出す。エレナは首をかしげながらも、自分も小指を出した。やがて絡んだ小指同士、上下に動かす。

「また会おう、エレナ」

僕はエレナに日本の住所を教えると、涙に濡れたエレナを置いて、静かにホテルへ戻った。

それから僕は、日本に戻った。

日本では、僕が失恋したのを知っている人たちから慰めの連絡が入ったが、その頃にはすっかり傷も癒えており、エレナとの一日が輝いて残る。

それからエレナには会っていない。でも、年に一度届くクリスマスカードには、変わらぬエレナの笑顔が映っており、僕の心は異国へと馳せる。

067　遠距離恋愛

高校三年生の冬、やっと叶った念願の恋が遠距離恋愛になるなんて、思ってもみなかった。

「早瀬」

土屋君の声が聞こえる。私は嬉しいながらも、今考えていた不安と寂しさに、複雑な表情をして笑う。

「どうかした？」

「ううん」

「ごめん、遅くなって。帰ろう」

「うん」

私たちは、分厚い雪の覆った放課後の学校を出ていく。

土屋君には、秋に私から告白をした。初めての彼氏。まだ付き合って三か月の彼は、この雪国を出て、近畿地方へ旅立つ。そちらの大学を受けるというのだ。

それほどまでに強い意志を持つ彼とは反対に、私は親が勧めるまま地元の大学を受けることになっている。一緒についていこうとも思ったが、そんな安易な考えを親が許してくれるはずもない。

「土屋君は、どうしてあっちの大学受けるんだっけ……」

私の言葉に、土屋君は笑う。

「教わりたい教授がいるんだ。それにもともと親があっちの出身だから、俺にも合ってるし。親戚の家があるから、そこから通わせてもらうことになりそう」

「そうなんだ……」

「早瀬はこっちの短大受けるんだよな？」

「うん……」

「離れ離れになるな……」

そっと言った土屋君の腕を私は静かに掴んだ。

土屋君は私の不安を察するように、反対側の手で私の頭を撫でる。

「大丈夫。ちゃんと好きだから……俺、離れてたって浮気なんかしないし、それより早瀬のほうが心配」
「え？」
「女子大だろ？　そういうのってモテそうじゃん。合コンとか派手にしてたら怒るよ」
「そ、そんなことしないよ」
ムキになった私に微笑み、土屋君は静かに私の唇にキスをした。
「ごめん、遠くに行って……でも、俺の夢でもあるんだ。一緒に連れて行きたいけど、それが無理なら我慢出来る。外国に行くわけでもないし、出来るだけ会えるようにする。だからそんな悲しい顔しないで……俺から告白したわけじゃないからかもしれないけど、ちゃんと好きだよ」
放課後の帰り道、私たちはそっと抱き合う。
不安はいっぱいあるけれど、どうしようもないこともある。だけど今、それを乗り越えられる気がした。

068　姉妹

美穂は十六歳。華の女子高生とは違い、どちらかというと地味なタイプである。

自宅である団地に戻ってくると、同じ階で少年とすれ違った。背が高く、顔もそこそこ良い、と美穂は観察をしたが、すぐに我に返ってお辞儀をする。

「こんにちは……」

そう言った美穂に、少年も会釈する。

「こんにちは」

たったそれだけを交わし、少年は去っていく。

美穂は家のドアを開けた。

「あら、美穂。おかえり」

ドアの向こうで、少女が麦茶を飲んでいる。一つ年上の姉、美也である。

「ただいま……」

「卓巳に会った？」

「うん、そこで……」

それだけを交わし、美穂は部屋へと入っていく。

さっきの少年・卓巳は、美也の彼氏だ。何度か家にも来ており、家族公認の仲である。

狭い団地では、美穂の独立した部屋はない。美也と同じ部屋のため、さっきまでここに卓巳が来ていて、ましてキスの一つでもしていたのかと思うと、なんだか汚らわしいような、羨ましいような、そんな気にさせられる。

「美穂。麦茶飲む？」

そこに、姉の美也がやって来た。聞いてはいるものの、すでに美穂のコップを持っている。

「うん、もらう……」

美穂は麦茶を受け取りながら、美也を見つめた。
同じ姉妹とは思えないほど、美也は垢抜けている。自分は自信がなく、そんな実の姉にすら目を合わせることが出来ない。
「美穂……」
そこに、美也がそう呼んだ。
「……何？」
素直になれず、卑屈な様子で美穂は返事をする。
「お化粧しよっか」
突然、美也はそう言って、有無も言わさず美穂を椅子に座らせる。
「ちょっと、お姉ちゃん。いいよ」
「いいじゃん、遊びの一環でしょ。そんなおどおどしてちゃ駄目。お姉ちゃんに任せな」
そう言って腕まくりをし、美也は美穂の髪を巻く。そして自分のメイク道具を机に広げては、美穂の顔に塗りたくった。
「ほら。出来たよ、美穂」
鏡に映った美穂。ナチュラルメイクだったが、そこにはいつもと違う自分がいた。
「……」
少し照れながらも、声も出ない美穂に、美也は微笑む。
「美穂は私の可愛い妹だもん。前みたいに、一緒にショッピングとかも行きたいし、遊びに行きたいよ」
美也の言葉に、美穂は目を泳がせる。
いつからか、何もかも比べられる美也を避けるようになっていたのは事実である。
「……お姉ちゃん、メイク教えて。ちゃんと覚えたら……一緒に出かけよう」
「うん！　じゃあこのメイク道具、全部あげちゃう」
抱きついてくる美也が、素直に可愛いと思えた。そして自分を愛してくれている美也に、美穂は妹として返したいと思う。
週末、ショッピングに出かける二人は、近所でも評判の美人姉妹

になっていた。

069　肉食系男子

草食系男子なんか流行ってたけど、俺は断然、肉食系。
十七歳――。せっかくの遊び時。青春を満喫しなきゃもったいない。周りの男どもだって、考えていることはみんな同じ。モテたい、ヤリたい、アソビたい。それだけだろ。

どうせ付き合うなら、可愛い子のほうがいい。ブランドバッグを下げるように、街じゅうの男どもに見せびらかしたくなるくらい。そんなの、女だって同じだろ。

それを手に入れるためなら、少しくらいの努力も惜しまない。筋トレだってバイトだって、まだガキと言われる年でも一人で生きてくくらいの甲斐性持たなきゃ、女なんてついてこない。ただモテたいって言ってるだけの男と一緒にするなよ。

「おまえ、また彼女変えたんだって？　もったいないな、あんな可愛い子を」
友達がそう言った。
「お古でよければ紹介するけど？」
「うわ、鬼畜。なんでおまえだけ、そんなモテんだよ」
「女だって俺みたいなやつわかって寄って来てんだよ。俺もブランドバックと同じ」
冷めた目で、俺は煙草を吸った。煙草の味がうまいなんて思わないけど、きっと親とか社会とか、つまらない世界か何かに対するささやかな反抗なんだろうな。
「ブランドバックね。流行がコロコロ変わるってやつ」
友達の言う通り、一通り食いまくった俺の後に、地味な友達がモテ始めた。

それでも俺は、冷めた場所から脱せずに、また本当の恋すら出来ずに生きていくのだろう。肉食系のまま、ただ獲物を探す。

それでもちょっとは信じてるんだ。真実（ほんとう）の恋ってやつをね。

０７０　草食系男子

自分がそうだとは思っていなかったが、よく草食系男子なんて言われる。

べつに女の子に興味がないわけじゃないし、今まで一人も彼女がいなかったわけでもない。でも基本的にはモテないし、特に好きな子もいないし、なんかそういうのにがっつくのって、面倒くさいなんて思ってしまう。

「きーむら君」

クラスメイトの森岡が声をかけてくる。同じ図書委員ということもあり、最近よく話しかけてくる女子だ。ちなみに、僕を草食系男子なんて言い始めたのも彼女。

「なに？」

「今日、放課後空いてない？　ちょっと付き合って欲しいんだけど」

「空いてるけど、何？」

「図書室の本の入れ替え。先生に頼まれちゃって」

「……わかった、いいよ」

「よかった！　ありがとう。じゃあ、放課後に図書室によろしく！」

そう言って、森岡は去っていく。

断れない性格もあったが、一人でやるには重労働の仕事ということはわかっていたため、断れるはずもない。それをわかっていて言い出すのだから、女の子っていうのは恐ろしいとも思った。

それでも放課後、僕は図書室へ向かった。

「ありがとうね、森岡さん、木村君。他のクラスの子なんて、全然手伝おうとしてくれないんだから」

「いいんですよ、先生」

森岡は、調子のいい笑顔を見せる。

「じゃあ、このダンボールの中の本、順番にあそこの空いた本棚に

入れていって」
「はーい」
元気よくそう言った森岡は、数冊の本を持って踏み台に乗る。
僕は新しい本の入ったダンボール箱を、森岡のいる本棚の側へと運んだ。
「わっ」
突然、森岡がバランスを崩しそうになったので、僕はとっさにそれを止めた。
「あっぶないなー」
思わずそう言いながら、僕は森岡の上に降りそうになっていた本を食い止め、棚に戻す。
「……好き」
未だ僕に寄りかかっていた森岡が、静かにそう言った。
僕は驚いて、森岡を見つめ、そして苦笑する。
「なに言ってんの？　こんなベタなシチュエーションで、簡単に好きとか言うなよ」
こんなことが琴線に触れたというのか。僕は少し森岡にがっかりした。もちろん、好きと言われたのは驚いたし嬉しい。でも、周りのカップルみたいに、簡単に付き合って簡単に別れるとか、そういう関係は考えられなかった。
「違う！　たった今、好きになったわけじゃない……私、ずっと木村君のこと好きだったんだよ」
いつになく真剣な様子の森岡に、さっきまで冷静だった僕の顔は、一気に真っ赤になる。そしてさっきまで周りのカップルを小馬鹿に思っていた僕は、それに反するように森岡に興味が湧いていた。
「僕も……嫌いじゃないけど……」
うわずってそう言った僕に、森岡も真っ赤な笑顔を見せる。可愛いと思った。
その日、僕らは一緒に学校から帰った。

071　DV

あれは些細な喧嘩だったと思う。僕は妻の純と大喧嘩をし、そのまま純は家を飛び出していった。着の身着のまま、持って出たのは置いてあったバックのみ。その中に入っていたものは、財布くらいなものだろう。携帯電話すら、リビングに置きっぱなしである。

「ぎゃーぎゃー」

泣き叫ぶ赤ん坊の娘をあやしながら、僕は溜息をついた。

「すぐ帰ってくるだろう……」

だがその日、純は帰って来なかった。

次の日、僕は仕方がないので近くに住む両親に娘を預けた。両親は純を気に入っていなかったから、ますます小言を繰り返す。でも、娘を一人きりには出来るはずもなく、僕は会社へと出勤する。

その日、営業の外回りで自宅近くを通った僕は、ふと気になって自宅マンションへと戻った。こんな時間に帰るなんて初めてのことである。

ドアを開けるなり、驚き、怯えた様子の純がいた。まさに家を出ようとしていたところらしく、純の手にはボストンバッグが下げられている。

「純、おまえ！」

僕は純の首根っこを捉まえ、リビングへと引きずり戻した。

「やめて！　叩かないで！」

叩くより先に言った純に逆上し、僕は彼女の頬を叩く。腹を蹴る。それでも怒りは収まらない。

「よくも僕に恥をかかせやがって！　お母さんがまた怒ってたぞ。赤ん坊残して何やってんだ！」

僕の言っていることは正論のはずだ。なのに、なぜ純はこうも僕

に逆らうのか。
「やめて！」
僕を止めようと立ち上がった純を振り払い、その拍子に純はテーブルの角に頭をぶつけ、ぐったりとなった。頭からは血が流れ出しているのがわかり、やっとそこで僕は我に返った。
「じゅ、純……ごめん。ごめんよ」
「救急車、呼んで……」
「うん……いや、待てよ。おまえ、この状況をどう言うつもりだ？」
まるで僕が悪者みたいじゃないかと思った。
そんな僕を睨みつけて、純はゆっくりと立ち上がる。
「じゃあ、一人で行くわ……」
僕は放心状態で、純が出ていくのを止めることすら出来なかった。

その日のうちに、とある機関の人が数人やってきた。
「純さんを保護しています。あなたのやっていることは立派なＤＶ、ドメスティックバイオレンスなんですよ」
聞けば、夫や恋人の暴力から逃れるための支援施設に、純は世話になっているらしい。
「ちょ、ちょっと待ってください。僕だけが悪いんですか？　原因はあいつなのに！」
「原因はどうあれ、弱者に手を上げるということは犯罪なんですよ」
「犯罪って……そんな大げさな。僕こそ被害者ですよ。そりゃあ、思わず手が出たことは謝ります。でも、あいつの……純の言葉だけで僕を加害者にしないでください」
「それはもちろんです。あなたの言い分は大いに聞きます。しかし、あなたの暴力は今回が初めてではありませんね？　純さんの体には、治りかけの痣が無数にありました。他にも言葉の暴力、医師の診断でも、人為的な傷だということわかりました」
僕は純に対する怒りがこみ上げてくるのを、ぐっとこらえた。
そして僕は今日、犯罪者になった。こんなに身近に潜んでいたこ

とに、僕は少しも気付かなかったんだ。僕自身の狂気に――。

072　いもうと

章太（しょうた）は床についた小さな妹の手を握り、歯を食いしばった。
いくら冬とはいえ、妹の手は氷のように冷たく、血の通っている人間とは思えない。
「明子。しっかりせえ」
思えば生まれてからのほとんどを布団の上で過ごしている妹は、章太に力なく笑う。
「だいじょぶよ。兄ちゃん……」
不治の病に侵された妹。そんな妹を気遣って、妹の体調がいい時には、あやとりやおはじきで遊んだ。だがそれももう、何ヶ月も前になる。日に日に妹が弱っていくのを、章太はただじっと見つめていることしか出来ない。
「明子。ご本でも読んでやろか。それとも水でも飲みたいか」
「……あやとり」
かすれた声で、妹が答えた。
「よっしゃ。新技覚えたんやで」
章太はそう言って、棚から紐を取り出す。二人あやとりは出来ないので、章太は一人で出来るあやとりを勉強していた。
「ほら、ホウキやろ。ほんでもって東京タワー。あとな、一人あやとりもめっちゃ早く出来るようになったんやで」
「すごい……」
その時、妹が大きく咳をしたので、章太は慌てて近付く。
「明子。大丈夫か？　落ちつけ」
「うん、ごめんね、お兄ちゃん……」
「ええから、落ちつき」
体をさすり、水を飲ませ、妹はやっと落ち着きを取り戻した。
「お兄ちゃん。もう一回やって。東京タワー」
「あ？　うん、ええで」

章太はあやとりで東京タワーを作って見せる。
「ええな、東京タワー。一度でいいから行ってみたいわ……」
「あほう。そんなん、俺かて行ったことあらへんもん。俺も行きたいわ」
「うん。一緒に行けたらええね」
「ああ、明子が大きくなったら、絶対に兄ちゃんが連れてったるからな。それまでに、明子は元気になること。俺は旅費を稼がなな」
「うん。ええな、行けたらええな」
そう言って、妹は静かに眠りについた。もう、妹が目を覚ますことはなかった。

あれから二十年。章太は東京を見下ろす場所にいた。東京タワーのてっぺんである。
「章太。大丈夫か？」
「はい、順調ですよ」
章太は今、東京タワーにつけられたライトを交換する仕事をしている。たった一本のワイヤーが命綱。だが章太にとってこの仕事は、危険はあるものの誇りを持ち、そして妹に会える場所のような気がした。
「見てるか、明子。展望台よりええ景色やろ。兄ちゃん、おまえを連れて来れたかな」
章太の手首には、古ぼけてボロボロになった紐が巻かれている。それは、かつて妹と交わしたあやとりの紐であった。

０７３　白衣の天使

セクハラ、パワハラ、そんな簡単な言葉で片付けてられることなど、この職場には存在しない。キツイ、キタナイ、キケン、クサイ、キュウジツナイ。きっとそんな５Ｋ以上の苦労も抱えている。みんな結婚して、早く仕事を辞めたいとも思ってる。それでもここで働くのは、やっぱり「看護師」という仕事に、誇りを持っているから――。

「看護婦さーん」

看護師と統一された今も、そう呼ぶ人が多数だ。差別用語と言われても、私もどちらかというと、そっちのほうがしっくりきてる。

「どうされました？」

「新聞買ってきてくれない？　遠くて面倒なんだよ」

「そうしてあげたいのは山々なんですけど、今は忙しい時間ですし、それに売店まで行くのに運動になりますよ。頑張って自分で行きましょう」

小さく溜息を漏らして、私は隣のベッドへ向かう。患者さんはナーバスになっているので出来るだけ聞いてあげたいけれど、時間的に余裕がないのも事実。無理なものにお断りはする。

「こんにちは。お加減いかがですか？」

隣のベッドの人は、あまりしゃべらない。

「大丈夫です……」

それだけを言って外を見たので、私は新しい点滴に変えて病室を出た。

途端、廊下を猛スピードで人を乗せた担架が走ってゆく。死と隣り合わせの危険な職場。一方で、患者さんの小さなお願いなどもあり、そのギャップに慣れるまでに少し時間がかかった。

「ねえ、明日非番でしょ。ごはん行かない？」
そういう言葉は患者さんにもあったり、逆に医師からの誘いもある。いちいち気にしていたら身が持たない。
「すみません。洗濯物とか溜まっちゃってるんで、明日はゆっくりさせてもらいます」
それでも、私は結婚していないからもっているのかもしれない。子供がいたら、きっと想像を遥かに上回る苦労があるはずだ。

夜中、病院に隣接した看護師寮で、携帯電話が鳴る。
「急患が三つも入って間に合わないんだ。今すぐ来て！」
そんなこともしょっちゅうだ。
早朝に勤務する早番、昼間の勤務の中番、夜中の勤務の遅番、それ以外にもいくつかあるシフトの中で、私たちはただ決められた時間に行くだけでなく、ローテーションで回っているため、生活リズムに追いつかず、体が悲鳴を上げている。それでも人の命のために、私たちは体を奮い立たせる。そうしなければやっていけない。

「本当にありがとう。お世話になりました」
退院が決まった人が、満面の笑みで握手してくる。
私たちがこの職場でやっていこうと思えるのは、きっとこの笑顔が見れた瞬間。
この仕事には誇りがある。そして今日も、多くの命が輝きを――。

０７４　敵国の恋人

敵対する者同士が恋に落ちるというのは、古代の昔からあったこと。ここにいるラミスとエマもまた、そんな苦境に立たされていた。

ラミスはとある小国の王子で、エマは敵対する隣国の娘だ。身分すら低い。

そんな二人が出会ったのは、戦を終えて帰る途中のことだった。

「美しい森だな。戦に勝ったら、我が国のものになる」

ラミスは馬に跨り、そう言って今日の寝床を探す。

「ラミス様。あんなところに小屋があります。狭いでしょうが、今夜の寝床に致しましょうか」

「そうだな。雨風が凌げる場所のほうがいいというものだ」

ラミスの命により、家臣の一人が先に小屋へと向かう。小屋の奥には、老婆が一人横たわっている。

「どうだ？　誰かいたのか？」

「はい、ラミス様。老婆が一人おります」

命じるより先に、家臣は剣を剥き出しにしている。敵国の老婆など、一撃で倒せるだろう。

「誰ですか！」

その時、ラミスたちの後ろで叫んだのは、エマであった。

長い赤毛が逆光に輝き、闘志に燃えた茶色の瞳は、奥に恐怖を兼ね備えている。

だがすぐに、エマはラミスの家臣に捕えられた。

「……ここの娘か」

ラミスの言葉に、エマは口を開く。

「そうです。おばあちゃんには手を出さないでください！」

「おい、聞いたか。じゃあおまえには手を出していいというわけか」

家臣たちが、いやらしく笑う。

だが、ラミスを睨みつけるエマに、ラミスは小さく息を吐く。
「……離してやれ」
「しかし、ラミス様」
「手荒な真似をしてすまなかった。行こう」
ただそれだけを言って、ラミスは家臣とともに家を後にした。
エマは慌てて老婆に駆け寄るが、何もされていない老婆に安心し、去っていくラミスの背中を見つめた。

その夜、ラミスはエマの家の前にある、小さな湖のほとりで休息を取った。家臣たちは少し離れたところで、火を囲んでいる。
ただ一人になりたかったこともある。家臣たちからも見えるし、ラミスは散歩するように湖のほとりを歩いた。
エマの家の近くに差し掛かった時、ちょうどエマが家から出てきた。ラミスに気付きながらも、急いで湖に水を汲みに行く。
「あの……さっきはすまなかったね」
去り際のエマに、ラミスはそう声をかけた。
「……もう、ここへは来ないでください。おばあちゃんも怖がります」
「ああ……大丈夫。みなにもそう言っておいた。今夜はあちら側で休ませてもらうよ。少し賑やかになるかもしれないが、君たちに危害は及ばせないから安心してくれ」
「……じゃあ、さっきは本当に助けてくださったのですね。隣国の方とお見受けしますのに、どうして……」
エマの質問に、ラミスは一瞬答えられなかった。どうしてだろうと思い込んで間もなく、その意思を受け入れることにする。
ラミスは足下に咲いていた小さな野の花を摘むと、膝立ちでエマに差し出す。
「どうやら君に惚れたらしい、という答えでは迷惑か？」
不器用なまでの言葉に、エマは驚きつつもその花を受け取った。
またひとつ、辛く儚い恋が始まる。

075　なりたい自分

メガネに三つ編み、冴えない顔。同じ格好してても、可愛い子は可愛いでしょ。

大根足に太い腕。そんな体を露出するほうが、きっと世間に怒られる。

たった十年ちょっとの人生でも、すでに勝ち組負け組っていうのは出来ていて、いつからか卑屈になっている、自分。

「じゃあとりあえず、なりたい人になってみる？」

親友に腕を引っ張られ、私はメガネを外し、髪を下ろした。それだけでもう、違う自分がいる気がする。

「ダメダメ。もっと変わらなきゃ」

放課後の教室、まだクラスメイトが残っている前で、私はスカートの丈を短くされ、上まで閉められていたシャツのボタンを二つも開けられた。

その光景を面白がって、他の女子たちが自分のメイク道具を持って私の周りに集まる。私はスタイリストがついた女優のように、その体を預けた。

「やだ、こんなスカート丈。パンツ見えちゃうよ」

「ダイジョウーブ。女子高生のパンツなんか見えて当然。ほら、背筋伸ばす」

「でも、大根足……」

「出してりゃ減ってくる。気にしない、気にしない。世界は十代のうちらのもんよ」

親友の言葉通り、私はそれだけで世界を手に入れた気さえしていた。だって目の前の自分は、明らかにさっきまでと違う。

でも私は、やっと浮いていた自分の存在を周りに染まることで、個性というものを失った。それが結果的によかったのかは、わからないけれど――。

０７６　ある男の人生

昨晩未明、一人の男が殺された。薬物学科の大学教授であり、死因は青酸カリによる中毒死。争った形跡や外部からの侵入ではないことから、身内の犯行と思われた。自殺の可能性も消えてはいないが、奇しくも明日は男の誕生日。数日前に高級ゴルフクラブを購入している点も含めて、自殺の可能性はないと考えられた。

容疑者として挙げられたのは、男の妻である。妻は男と別居中で、男の飼う犬の世話に一日一度来る以外は、別の場所に暮らしている。

「彼女にはアリバイがある」

取り調べをする中で、刑事が眉をしかめて言った。

男の死亡推定時刻、妻は友人宅で友人とともに映画を鑑賞していたのである。

「もう一度、現場を洗おうか」

刑事は死亡現場に戻ると、部屋を見渡した。

遺体はリビングの床に倒れており、第一発見者は隣に住む夫婦で、男の異常を吠えて訴えた犬に、様子を見に来たのがきっかけだ。

リビングのテーブルには麦茶があり、青酸カリはその麦茶に混入されていたものと考える。

また机の上には、買ったばかりの高級ゴルフクラブが置かれていた。自分のために買った物だが、リボンが結ばれている。きっと明日の誕生日に、初めて使うつもりだったのだろう。

「私は青酸カリなんて知りません。どうやって手に入れるというのですか」

妻は取調室で、そう言った。

確かに、一般人が手に入れられるものではないが、男は薬物学科の大学教授である。どこからか入手していたものを、妻が知っていたとも限らない。

「ベタに氷、かな？」
刑事の言葉に、妻の顔が曇った。
「氷に青酸カリを入れて凍らせておいて、それをご主人が麦茶に入れて飲む……こうすれば、何処にいても殺せるというわけです」
「確かに……別居していたとはいえ、あの人は料理が出来ないから、料理は私が作っていました。もちろん氷も……でも、私は知りません。それに、もしお客様にお出しするかもしれない氷に毒なんて入れるわけがありません」
「なるほどね……」
「とんだ誕生日だわ……」
妻がぼそっとそう言った。
「そうですね。旦那さん、無念でしょうね」
「違います。私の誕生日です」
「え？　奥さん、旦那さんと一日違いなんですか？」
「ええ。まあ主人は誕生日を喜ぶタイプじゃありませんでしたし、他人の誕生日だって祝いもしませんでしたけど……でもやっぱり、女にとってはいくつになっても特別な日じゃないですか。今日も友達と、唯一の趣味のゴルフに行く予定でおりましたのに……」
その時、現場を見ていた刑事が取り調べ室に戻ってきた。
「事件解決！　犯人は旦那さん本人だ」
一同は目を見開く。
「え、じゃあ自殺だっていうんですか？　でも……」
「遺書が見つかったんだよ。というより、あなたへのプレゼントです」
そう言って、刑事はリボンの結ばれた高級ゴルフクラブを妻に手渡した。
「奥さん、ここを見てください」
刑事が指差したのは、ゴルフクラブに結ばれたリボンである。そこには、“Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ，　ｍｙ　Ｗｉｆｅ．　Ｇｏｏｄ－ｂｙｅ，　ｍｙ　Ｌｉｆｅ”と書かれていた。

更には、しばらく使われていなかったはずの地下室で、青酸カリが保管されているのが見つかった。地下室は暗室になっており、現像したばかりの古いフィルムが見つかった。

「奥さん、地下室はしばらく使っていなかったんですかね？」

「ええ、主人は写真が趣味でしたから、以前は古いカメラで撮影しては地下室で現像していました。足腰が弱ってからは地下室には入っていないと思いますし、最近はデジタルカメラになっていましたし……」

「たぶん、青酸カリはその古いカメラに必要だったものでしょう。おそらく旦那さんは、何らかの用があって地下室に入ったのでしょう。そのきっかけが、掃除だったのか、たまに入りたくなったのかはわかりません。でもその拍子に、未だ現像していないフィルムを見つけたようです」

「写真、ですか？」

不安げな妻の目の前に、刑事は数枚の写真を取り出す。それはまだモノクロの古ぼけた写真で、夫婦がまだ若かりし頃の写真であった。

「ああ、懐かしい……」

思わず言った妻に、刑事も頷く。

「そう。旦那さんもその懐かしさを思ったのでしょう。そしてまた、旦那さん自身の人生を振り返ったのかもしれない。ゴルフクラブは写真を現像したより後に買いました。そのリボンに書かれたメッセージから察するに、すでに自殺することを決められていたのでしょう」

やがてその地下室から、正式な遺書が見つかった。

若かりし写真を見て、自分の人生を振り返り、冷静になったこと。離婚したがる妻を解放出来ず、自分がいなくなったほうが良いと思い立ったことなどが綴られ、たまたま身近にあった劇薬で自殺を図ることにしたと推測出来た。

「馬鹿ね、あなた……どうして最後まで、一人で勝手に決めるのか

しら……最初で最後の誕生日プレゼントがこれだなんて……あんまりだわ」

妻は冷めきった目に光を取り戻し、涙を流した。若かりし写真で笑う若夫婦は、こんな日が来ることなど夢にも思わず、屈託のない笑顔を向けている――。

077　ある男の人生・2

年甲斐もなく、恋をした。

五十を過ぎても結婚出来ず、中小企業の平社員という冴えない生活。恋人がいた時期もあったが、それも何年前の話だろう。

「こんにちは、平泉さん」

彼女が笑ってそう声をかけてくれる。彼女は取引先の事務員さんで、名前を玲子さんという。年は三十四歳で、バツイチの子持ち。

五十になってバツ一つないこんな私を相手してくれるわけもないが、その笑顔に日々癒されている。

「こんにちは、玲子さん。お茶もらえるかな」

私はそう言って、いつもの会議スペースに座る。名前で呼んでいるのは、事務所に同じ名字の人がいるからだ。

「はい、どうぞ。まだみなさんいらっしゃってないですから、ゆっくりしていってくださいね」

今日は打ち合わせがあるが、少し早く来てしまったので、私は会議スペースで先にレジュメを広げさせてもらう。

「あの、平泉さん。ちょっとご相談があるんですけど、いいですか？」

突然、彼女がそう言ったので、私は驚きながらも嬉しさに頷いた。

「ええ、どうぞ。僕に出来ることなら」

「たぶん出来ます。それがあの……これなんですけど」

彼女が差し出したのは、子供用のおもちゃである。機械仕掛けになっているようだが、見た目にも線が切れている。

「子供の宝物なんですけど、電池入れても動かなくて……平泉さん、機械系得意でいらっしゃるから、もしかしたらと思って……」

小さな事務所の暇な時間、彼女の申し出に、私は笑った。

「ええ、たぶん大丈夫。線を繋げば動くと思いますよ。でも、今日は道具も何もないから、宿題にさせてもらってもいいですか？」

「ええ、ぜひお願いします。ああ、よかった。うちの事務所の人はやってもらえなそうで……平泉さんなら、優しいからきっとと思っていたんです。よろしくお願いします」

彼女の嬉しそうな顔を見れただけで、やる気が出るというものだ。

私はその日、そのおもちゃを家へと持ち帰り、線を繋いだ。簡単な作業だったためすぐに直ったので、聞いておいた彼女の携帯電話に電話を掛けてみる。

『え、もう直ったんですか？　すごい』

「暇なんで、今から届けましょうか」

『いえ、それは悪いですよ』

「でも、今度事務所に行くのはいつになるかわからないし。玲子さんの家、事務所の近くでしたよね？　届けますよ」

『じゃあ……お願いしちゃおうかしら』

「ええ、じゃあ近付いたら電話します」

私は意気揚々と、おもちゃを持って玲子さんの家を目指した。自転車で三十分の道のり、楽しいことしか浮かばない。

「ああ、あのマンションかな」

電話で聞いていたマンションを当て、私は彼女の部屋を訪ねる。

「もう、本当にすみません！　でも助かりました。ほら、おじさんにお礼言いなさい」

彼女の言葉に、傍らにいた小さな男の子が、宝物のおもちゃを受け取ってお辞儀をした。

「おじちゃん、ありがとう。パパ！　直ったよ！」

すると、男の子はそう言って、奥へと走っていく。奥から青年が、ペコリと頭を下げた。

「すみません、子供がいて慌ただしくて」

「いや。それより、旦那さんいたんだね」

「いえ、まだ籍は入れてないんですが、あの子も懐いているのでそろそろとは思ってるんですけど」

「そうなんだ。おめでとう」

どうせこんな落ちだろうとは思っていた。私は今までと変わらないように笑顔を繕い、そう言った。

「ありがとうございます。お茶でもと言いたいところなんですけど、子供がいて落ち着かないと思うので……これ、お礼です。本当にありがとうございました！」

彼女が差し出したのは、一本の缶ビール。私はそれを受け取って、彼女のマンションを後にした。

いや、最初から下心があったわけではない。そう言い聞かせ、私は自転車に乗りながら缶ビールを口にする。

帰り道、偶然居合わせた警官に、飲酒運転を注意された。散々な恋である。

078　バカップル

「れみ。手、動いてない」
「ごめん、竜ちゃん」
昼下がりの中庭で、少女は箸を少年の口へ持っていく。
「次、竜ちゃん。あーん」
「あーん」
少年の掴む箸が少女の口に入ろうとした瞬間、それは零れて落ちた。
「あ、悪い」
「もう、竜ちゃんってば。ひどい」
「もともと箸苦手だって言ってるだろ」
「れみ、全然食べてないんだけど」
「ハイハイ、今あげるからねー」
そう言って、少年は口移しで少女にごはんを運ぶ。
「やだ、汚い」
「本当にそう思ってる？」
「ううん。竜ちゃんのならいい」
クラスメイトたちは、そんな光景を教室から眺め、そして目を逸らす。
「ドのつくバカップル」
「ありゃあ迷惑行為で金取れると思うよ」
冷めたクラスメイトとは反対に、バカップルの熱は上がる一方だった。

079　動物と少年

少年は、休み時間になる度に図書室へと訪れていた。その光景をじっと見つめていたのは、少年のことが好きな、沙耶だ。

ある日の放課後、沙耶は思い切って、少年に声をかけた。

「いつも何読んでるの？」

突然の沙耶の問いかけに驚きながら、少年は口を開く。

「図鑑」

ただそれだけを言って、少年は本に目を落とす。

「わあ。アザラシに北極熊。可愛い……」

思わず言った沙耶の顔を、少年は珍しそうに覗き込んだ。

「……この本、借りたいの？」

まだ小学生。恋愛という言葉を悟るには早い。でも沙耶はめげなかった。

「ううん。でも、一緒に見てもいい？」

「いいけど……」

少年から了承を得て、沙耶は少年の前に座る。本の内容は、北極の様子などが写真付きで描かれているものだ。

「アザラシの赤ちゃん、可愛い……」

いちいち写真に反応して沙耶が言うので、少年は小さく息を吐く。

「……アザラシのお母さんは、赤ちゃんを産んでから一生懸命育てるんだ。泳ぎ方の練習をさせたり、時には北極熊からだって身を挺して守るんだよ」

「へえ。すごい」

「でもある一定の期間が過ぎると、突然、赤ちゃんの前から姿を消すんだ」

「え……」

その言葉は、小学生の沙耶にはショッキングに聞こえた。それでも少年は、冷静に話を続ける。

「赤ちゃんは何時間も泣き続けて、やがて海の中に入り、自分で餌を取るようになるんだよ。まあ、テレビの受け売りだけど……」
「……すごいね。赤ちゃんなのに、親離れするんだ」
「牛も馬の赤ちゃんは、数時間で立つ。それに比べて人間って、親離れするのに果てしなく時間がかかるよね。なんだかそれを考えると、動物の美しさがよくわかるんだ」
レベルの違いに、沙耶はそれ以上、少年に近付くことは出来なかった。
十数年経った今、少年は動物学者として活躍していると聞いた。

080　ケータイがないっ！

（（（（（；゜；Д；゜；）））））　カタカタカタカタカタカタカタカタ

「ヤバイ！　ケータイ忘れた！」

亜美は真っ青になる。

すでに駅まで来てしまい、家に戻れば遅刻は確実。今日は彼氏とのデートだというのに、携帯がないということだけで冷や汗が伝う。

（゜、Д゜）　ウワァァァン！

「ううっ。ダ、ダイジョーブだよネ。昔の人は携帯なんかなかったっていうし……」

ちらりと目に入る公衆電話。もはや掛け方すらわからない。というより、彼氏の電話番号もうろ覚え。

亜美はちょっとした冒険にでも出かけるように、腹を括って電車へと乗り込んだ。

カカッテコイ！　　Ш（゜Д゜）Ш　ゴルァ！！

「よっしゃ、もう行くしかない。電子マネーもあるし、一応小銭もちゃんとある。目指すは五駅先。行ける、よね……？」

携帯電話がないだけ。それだけで不安ばかりが募るのは、もはや携帯世代のサガである。電話やメールだけでなく、携帯マネーにテレビや音楽、携帯なしなど考えられない。

ふと、バッグの中には携帯電話の電池式充電器が入っていた。
「電池あるのに本体ないなんて、サイアクだお……ｏｒｚ」

それでもなんとか待ち合わせの駅に着き、待ち合わせ場所を見回す。もともと彼氏が時間通りに来た試しはないので待たされるのには慣れているのだが、今日は勝手が違う。

コネ――――（。д。;）――――!!

「もぉ、どーしよ。ドタキャンもたまにあるし、今日携帯にメールあってもわかんないよ。親に代わりに部屋にある携帯見てもらう…？　イヤイヤ、ぜってー無理。つーか……時間もわかんねぇー！」

（（（（（（（（（（（・ω・）つブーン

「亜美！」
彼氏の声に、亜美は涙目になった。

ウァーン・。・（ノД｀）ヽ（。Д。）ナクナ

「なによ、どした？」
意味もわからず宥める彼氏に、亜美は携帯を忘れたことを説明する。

（＊、∀、＊）

「なんだよ、何事かと思った。でも、怖かったんだな。よしよし」
「うわぁぁぁぁぁん！」

チュッ　＊　^）（。・―・。）　ポッ

「もう大丈夫だよ」
「うん、よかった。会えて……」
二人は手を繋ぐと、静かに歩き始めた。

ァレゝ∪τるょ･･＊ ｡:･･｡･･:･（´＋･ω･人･ω･＋､）･･＊ ｡:･･｡･･｡

二人の絆は、今日でより深まったのかもしれない。

081　7時56分発のバスで

僕の家は田舎で、ラッシュ時にも一時間二本しかバスが来ない。小さな町、隣近所はみんな知り合いで、僕は中学校に間に合うギリギリのバスに乗る。

それが、毎朝七時五十六分発に出るバスだ。この時間にもなると、都会へ向かうサラリーマンはとっくに出ているし、この路線はどのみちあまり人が利用しない。

（そろそろだ……）

僕は一番後ろの席から、身を乗り出すようにして外を見つめた。すると、目当ての女子が乗って来た。名前も知らない、可愛い子。制服からして、僕が通う中学の途中にある、お嬢様学校の生徒だ。

（おはよう……）

声には出せないものの、僕はそう言って彼女を見つめる。彼女もまた、同じ時間のバスに乗る僕を知っている様子で、目が合えば会釈する。でも、ただそれだけの関係だ。

（きっかけが欲しい）

そう思ったその時、彼女は座ろうとした拍子に、ポケットから何かを落とした。生徒手帳である。

（チャンス！）

決して近くに落ちたわけではないが、僕は慌てて立ち上がる。だが、すでにそばにいた女性に拾われ、お礼を言う彼女がいる。

（きっかけ……そうだ、きっかけがないなら、作ればいい）

僕はポケットを探る。でも、ポケットにはもちろんハンカチなんか入っていないし、生徒手帳も持ち歩いていない。鞄からわざわざ何かを取り出して落とすなんて、そんな間抜けなことも出来ない。

と、その時、僕は胸ポケットに何かがあるのを感じ、それを指で掴んだ。

しかし次の瞬間、バスが急ブレーキを踏んだ。

辛うじて何かを掴んでいた僕の指は、その拍子に思い切り振られ、あろうことか彼女の頭にぶつかった。
「あっ！」
彼女は無言でそれを拾うと、苦笑してこちらに近付いてきた。
「はい、飴」
「え、飴？」
初めて聞いた彼女の声。でも僕は、取り出したものが飴ということに驚いた。
「ごめん。でもなんで飴なんて入ってたんだろう……」
飴を入れた記憶がない。しかもその触り具合から、かなり溶けていて昔の物だと推定される。
僕は柄にもなく飴を持っていたことを先に恥じ、そして彼女にぶつけてしまったことを謝った。
「いえ」
それだけを言って、彼女の降りる停留所に着き、彼女は降りて行った。
（はあ……玉砕）
と、その時、僕の座るすぐ傍に、生徒手帳が置いてあるのを発見した。
僕は彼女がやってきた拍子にまた落としてしまったのだと気付き、慌てて立ち上がる。
でも、すでにバスは動き出しており、彼女の姿は遠くにあった。
（まあ、また明日会うだろう……）
僕はそう思うと同時に、手帳の中身が気になりだす。
そして悪いと思いながらも、その手帳を静かに開いた。
（石坂萌子……）
しっかりと彼女の名前を記憶する。中学一年生ということは、僕より一つ年下である。
手帳には何も書かれていないが、間にメモ帳のようなものが挟まっているのがわかった。

『バスにいつも乗っているあなたへ』

冒頭の文に、僕はドキッとして辺りを見回す。まるで挑戦状のような錯覚を覚えた。

『いつも一緒に乗っているあなたを、ずっと見ていました。もっとあなたのことが知りたいです。お友達になってくれませんか？』

もしかしたら、彼女は故意にこれを落としたのだろうか？　もしかして、未だバスに乗っている他の誰か宛かもしれない。

だが、僕の他に学生はおらず、僕だと思いたい気持ちもあって、異常に舞い上がった。

（彼女も、僕と同じ気持ち……？）

次の日、同じバスに乗ってきた彼女は、僕に気付かないふりをして座る。

なんだがそれがじれったくて、僕は真っ直ぐに彼女のもとへと歩いて行った。

「これ、昨日落としたよね？」

「あ……すみません」

彼女は頬を染め、僕の顔を見ない。

僕は彼女の手紙が僕宛だったと確信し、彼女の前に座った。

しばらく無言のまま時が過ぎ、やがて僕は後ろを振り向く。

「僕と友達になってもらえませんか？」

その言葉を聞いて、彼女は自分の口元を押さえ、驚いている。

「……はい」

か細い彼女の声が聞こえ、僕は初めての告白の成功に喜んだ。

「実は、ずっと見てたんだ。この七時五十六分発のバスに乗るのが、

楽しかった」

僕の言葉に頬を染めたまま、彼女はそっと頷く。

僕たちは明日もこのバスに乗る。七時五十六分発の、愛を乗せるバスに。

082　ぴよぴよぴよ

ぴよぴよぴよ

めんどりのコッコが、ひよこを三羽産みました。

ぴよぴよぴよぴよ

めんどりのクックは、ひよこを四羽産みました。

ぴよぴよぴよぴよぴよぴよぴよぴよ

あちこちで、ひよこが生まれ、カーソン農場のにわとり小屋では、全部で四十七羽も生まれました。

ピーピーピー

他にもカーソン農場には、カルガモとアヒルを育てています。カルガモ小屋では今年、赤ちゃんカルガモが十八羽生まれました。アヒル小屋では今年、赤ちゃんアヒルが九羽生まれました。

ピッピー

次の日、にわとり小屋のひよこは、十二羽が隣の養鶏場に引き取られ、そのうち三羽はまた別の家へ引き取られて行きました。

そのまた次の日、残ったひよこのうち七羽が脱走し、行方がわからなくなりました。

ガーピーガーピー

一週間後、カルガモの赤ちゃんは、六羽を残して六羽ずつカルガモ農法の農場に引き取られていきました。

そしてアヒルの赤ちゃんは、五羽引き取り手が見つかり、一般家庭に引き取られました。

それから数日後、引き取られたカルガモの赤ちゃんのうち、二羽がやんちゃで困って、引き戻されました。

さて、今年のカーソン農場には、全部合わせて何羽のぴよぴよが残ったでしょう。

０８２　ぴよぴよぴよ（後書き）

答え：４０羽。（……のはず）

０８３　ハート作戦

「彼女に好きだって伝えたいんだけど……なかなかいざとなると言えないんだよね……」
大学構内の昼下がり、一人の青年がそう言った。
相手にしているのは、同じサークル仲間の女子。
「で、なんで私にそんなこと聞くの？」
「そりゃあ、君は一通りの経験はありそうだし、俺はそんなに女友達いないからさ、こういうこと話せるのって、砕けた感じの君だけなんだよね」
「ま、いいけど」
「ご教授お願いします！」
そう言って、青年は賄賂とばかりに学食のメニューを差し出す。
「じゃ、アイスコーヒー」
「それだけでいいの？」
「太らせようっていうの？　で、本題に入るけど、要は好きっていうのを伝えればいいだけじゃない」
「そんな簡単に言うなよ……」
「簡単よ。でも、後でどうなっても責任は取らないわよ」
「それはわかってるよ。そんなに簡単って言うなら、早く教えてくれ！」
机に手をついて頭を下げる青年に、女子は両手でハートマークを作って見せる。
「……なにそれ。そんなの彼女の前でやれって言うの？」
「違うわよ。普段のメールでいいから、文末にでもハートマーク入れてみれば？　遊んでるヤツなら深く考えないけど、ウブな感じのあんたなら、少しはわかってくれるんじゃない？　どうであれ、ハートマーク入れるなんて、好意のしるしでしかないんだから」
「なるほど！」

青年はすぐに携帯電話を開く。
「普通の文面でいいんだよな？」
「うん。いつも通りでいいと思うよ」
「よし、じゃあ送信！」

しばらくして、返事が届いた。
『キモイ』
真っ白な灰になったような青年に、女子は奪うようにその携帯を見た。

どうして返事くれないの？　返事ぐらいくれたっていいじゃん。俺、何かした？
今度映画でも観に行こうよ。その後は食事→最後にはホ○ルでも。なんつって。
とにかく行こーよ。行こーよ。二人で会いたいー。
行ってくんないとどうなるかわかんないよ？　マジで（ハート）

「あんた……そりゃ、フラれるわ」
女子はそう言って立ち上がると、大きなため息をついた。
「キモイ」
そう言って、女子は去っていく。
人は見かけによらない。そして彼はまだ、何が悪いのかすらわかっていない……。

０８４　不思議な体験

ふわふわふわ。
空を飛んだことはないけれど、飛べたらいいな、なんて思ってる。
ふわふわふわ。
なんだか気持ちがいい。心地がいい。このままずっと、ここにいたい。

私はあまりの心地よさに浸り、やがてやっと目を見開いた。
すると、そこは自宅の屋根の上。

「うわっ。なに、夢？」

私は辺りを見回し、そして自分の体を見る。透き通っていて浮いている。

「やだ、怖い……」

そう言いながらも、心地が良いのは変わらない。
私は自分の部屋のベランダへ行く。すると窓をすり抜けられ、自分の部屋に入ることが出来た。
そこで私は、ドキッとする。

私のベッドでは、誰かが眠っている。いや。私だ。
触れても同化は出来ないし、向こうはピクリとも動かない。私の精神がここにあるからだろうか。

「どうしよう……夢だ、夢だ。覚めろ、覚めろ！」

半ば泣きながら、私は目を閉じたり開けたりして、じたばたと転げ回る。

さっきまで感じていた心地よさも、不安に負けて感じない。

「美玖。起きなさい！」

お母さんの声で、私はビクッとした。と同時に、今まで分裂していた精神が肉体に戻る。

私の肉体は、汗でぐしょぐしょになっていた。

「お母さーん！」

私は慌てて起き上がると、お母さんに抱きついた。

０８５　天井のシミ（前書き）

※ホラー要素を含みます。

085　天井のシミ

ある日、僕は寝る前に、布団に寝転がりながら漫画を読んでいた。
夢中になって読んでいたその本は、異世界のバトル漫画。現実離れした話が面白くて、僕は時間も忘れて読みふける。

やがて読み終わり、僕は体を伸ばして天井を見上げた。
「あんなところにシミなんかあったっけ……」
見ると天井には、十円玉くらいの黒いシミがある。
何年か前に雨漏りもしたし、古い家だからそういうこともあるだろう。
僕はそう考えて、電気を消して眠った。

数日後、僕は天井のシミのことなんかすっかり忘れて、また漫画を読んでいた。
そして夜中になって読み終わると、ふと天井を見上げる。
「嘘だろ！」
思わず僕がそう言ったのは、この間は十円玉くらいだったシミの大きさが、直径十センチくらいまで大きくなっている。
「明日にでも母ちゃんに言っておこう」
僕は独り言を言って、眠った。

「あんたが言ってたシミだけど、天井だったわよね？」
次の日、学校から帰るなり、朝のうちにそう言っていた僕をつかまえて、母親がそう言った。
「うん、そう。十センチくらいデカいの」
「ええ？　本当？」
「なに、もっとデカくなってた？」
「ううん。私にはわからなかったけどね」

「え？　嘘だろ。あんなデカいのに……」
僕はそう言って、自分の部屋へと向かい、天井を見上げる。
だが、母親が言う通り、そこにはシミひとつない。
「あれ？　おかしいな……」
「ほら、ないでしょう？」
「布団がこの辺だから、確かにあの辺にあったと思うんだけど……」
「前に雨漏りした時に天井は補修してあるんだから、そんなの今更出ないと思うけどね」
母親は、まるで僕が嘘を言っているかのように言い放ち、去っていった。
「本当におかしいな……光の加減で見えなくなってるとか？　下から見るといいとか？」
だがどんな角度から見ても、あのシミは見つからなかった。
「寝る前だったから、ボケてたのかな……そういや、数日であんなデカくなるわけでもないしな」
僕は何となく説明をつけて、机の前に座る。
宿題はすぐに終わってしまったので、また大好きな漫画を読み始めた。
「そういえばあのシミ、この漫画に出てくる異世界の入口みたいだ。ククククク……」
現実世界とごっちゃになり、僕は変な楽しみ方をする。

その日の夜、僕は寝ようと布団を敷いたその瞬間、急に辺りが暗くなったので上を見上げた。
すると、目の前には天井全体を覆うほどのシミ、いや影がある。
「うわぁぁぁ――――！」
僕は発狂したようにそう叫び、そしてそのシミに呑まれていった。

086　ペアルック

とある住宅の一室で、固まるように正座する少年が一人。
彼の名は、聡（さとし）。今日は彼女である美々（みみ）の家に来たものの、美々の要求に応えかねているところだった。
「ねえ、聡。お願いだからこれ着て？　嫌なの？」
美々が差し出したのは、派手なハートマーク柄のTシャツ。それだけならいいのだが、目の前の美々は同じTシャツを着ている。ペアルックというやつだ。
「いや、嫌っていうか……」
聡の顔が引きつる。
学校でも可愛いと評判の美々を落としたまではよかったが、夢見がちな美々に、過去にも度々困らせる要求が何度かあった。だが、今回ばかりは聞きたくない要求である。
「せっかくお揃い買ったのに……彼氏とペアルックで街を歩くの、美々の夢だったのに……」
美々の嘘泣きはいつもだ。嘘だとわかっていても、それすら可愛くてつい許してしまう。
いつもならここで聡が折れるのだが、今日は本当に嫌な要求だったらしい。
「ごめん、無理！」
勢いで、聡はそう言った。
「なんでそんなに……そんなに嫌なこと？」
未だ嘘泣きを続ける美々に、聡はプツリと切れたように、静かにうなだれた。
「……いい加減にしろよ。嫌なものは嫌だよ。知らないヤツに見られても恥ずかしいし、知ってるヤツから見られたら冷やかされるっつーか、ドン引きされるに決まってんだろ。これだけは聞けない！」
そう言ったところで、美々のビンタが飛んだ。

「イタ……」
「着るの！」
美々も切れたように、恐い目で聡を見つめる。
その気迫に押され、聡は口を開いた。
「ハイ……」
結果、ペアルックの二人が街へ出かけたのは、言うまでもない。

087　あまのじゃく

おまえさんは、だあれ。

わしの名は、あまのじゃく、ではない。

おまえさんは、いつもこの道を通っているのかね？

わしは、この道を通ったことなど、今日が初めてのことじゃ。

おまえさん、どこへ行く。

わしは、まだここにおろうかのう。

おまえさんは、隣の村まで行くのかね？

わしの寝床は、この森の奥などではないよ。

おまえさん、明日もここに来るのかね？

わしは明日、異国の地にでも行っておるじゃろう。

おまえさんは、わしのことが恐ろしいと言うんじゃね？

だけども、わしは、おまえさんのことが嫌いだし、好きじゃあない。

０８８　僕と勇者と姫君と

僕はただの村人で、毎日小さな村で魔術を売っているのです。この商売は、僕の先祖から代々続くものでございます。
でも、ここ数年は魔物が減り、勇者も減り続けているため、インチキなマジシャンなんかが、僕の魔術を買っていきます。

ガランゴロローーン。と、大きな鈴の音が鳴り、僕はテレビを見ていた店の奥から、店へと顔を出しました。
「すごい音だな、店主」
ドアに括りつけられたドアベルに、客と見られる男性が、苦笑して言いました。重そうな武具を身にまとったその風貌からして、インチキなマジシャンではない。久しぶりの勇者のお客だと、僕は息巻きました。
そしてまた、男性の傍らには、美しい女性が立っています。
「お客さん、何をお探しですか？」
「どんな魔術を売っている？　強い魔術が欲しいのだが」
男性の要求に、僕は高レベルな魔術を見せました。僕の得意技は、炎を使った技なのです。店で売っているカードには、僕や代々伝わってきた魔術が封じ込められているため、それを合わせれば術が使え、レベルアップも出来ます。
「なるほど、すごいな」
「お値段はこちらになります」
提示した額は、高レベルだけあり高価なものです。
「ふ……む。では、こちらの姫君にも扱える魔術はあるか？」
男性にそう言われ、僕は女性を見つめました。
「どこかの姫様なのですか？」
「はい。これから捕えられた父上を、この勇者と取り戻しに行くのです」

僕の問いかけに、姫君はそう答えられました。姫君というだけあって、気品のある顔立ちと雰囲気を持っておられます。
「それは大変だ。魔術を使うには、ある程度のレベルが必要です。レベルに合わないと、体がもちません。お二人のレベルを測らせていただいてもよろしいでしょうか？」
僕はそう言って、男性に判断を仰ぎます。
男性は少し考えた後、両手を広げて頷いた。
「もちろんだ。魔術に負けて自分が燃え尽きては元も子もない。さあ、計ってくれ」
その答えに、僕はレベル測定器を二人にかざしました。
するとどうしたことだろう。姫君はともかく、勇者であるはずの男性のレベルも、普通の人間レベルしかないのです。
「あれ、壊れたのかな……」
首を傾げ、僕は測定器を叩きました。
「壊れたのですか？　では、私があなたを測定してみましょう。あなたは魔術が使える分、普通の人間よりはレベルが上のはずだ」
「そうですね、お願いします」
男性の言葉に頷いて、僕は測定器の前に立ちました。
すると、男性と姫君が歓喜の声を上げたのです。
「どうかなされましたか？」
僕の問いかけに、男性は僕に測定の結果を見せました。
「レベル５９……」
普通の人間は、レベル２０が平均です。僕はまだ若く、魔術売りとしてそれなりに鍛えているので、そのレベルになったのでしょう。勇者ともなれば、レベル９９が当たり前です。
ちなみにさっき、男性はレベル２７、姫君はレベル２８でした。
姫君のほうがレベルが上というのも、納得出来ません。
「あれ。僕のレベルはいつもそのくらいだから、壊れてはいないのか……？」
疑問に思っている僕の手を、男性と姫君が同時に取りました。

「君、勇者になってくれ！」
僕はめまいに似た驚きを覚え、目の前の二人を見つめます。
「なにをおっしゃるんですか！　僕はただの村人です」
「もったいないことを言いなさるな。君はもっと鍛えれば勇者にだってなれる。一緒に僕らと……いや、僕らを守るために戦ってくれ！」
「お願いします！　父上を助けて！」
涙目の姫君にも訴えかけられ、僕は目を泳がせ、そして壁際まで追い詰められました。
次の日、僕は再三に渡る説得に無理やり了承させられ、気が付けば勇者に仕立て上げられていました。
おしまい。

089　その一滴

水は天の恵みだ。
その一滴で、動物も植物も生きながらえる。

その一滴は、時には怒り、暴れ狂うこともある。
だが山を崩し、地を洗い、そして豊かな土を運ぶ。

またある山寺を見てみれば、その一滴が、大きな岩の形を変える。
時間をかけてゆっくりと、それこそ何年、何十年もの月日を、
ぽたぽたとしたたるその一滴が、大きな岩をも砕いてゆく。

では、その一滴はどこからくるのだろう。
それは、天にあり地にあるもの。
わたしたちが作り出し、そしてまたわたしたちが授かるもの。
その一滴は、今日も生命を繋いでゆく。

その一滴、一滴、一滴……。

090　ブスとかなんとか言わないの！

私は容姿に自信がない。
でも、奇跡的に彼氏も出来て、毎日は充実している。
でもでも、やっぱり周りの子と自分を比べて、日に日に自信を失くしてる。
でもでもでも、自分のためにも彼氏のためにも、綺麗になりたいって思ってる。

「おまえ、姿勢悪い」
彼の言葉に、私は顔を上げた。デートで歩いている最中、私は思わず背筋を伸ばす。
「そうそう」
彼は満足げに、私の隣を歩いてる。
でも、私は彼より背が高い。少しでも低くするために、ヒールのある靴なんか履けないし、気付けば膝を曲げて歩いたり、背中が曲がってる自分がいる。
「お、撮影かな？　めっちゃ可愛い子」
ふと、彼が言った。
目の前には、雑誌の撮影隊らしき人たちがおり、スタイル抜群で可愛いモデルさんがポーズを取っている。
「はあ……」
私は彼にわからないように、小さく溜息をついた。
どれだけ努力したって、あんなに可愛くはなれない。彼にも申し訳なく思う。
「ブース」
その時、彼はそう言って、私の頬をつねった。
正直なまでの彼の言葉に、私は傷付いて俯く。
「……どうした？」

自分が言ったことにも関わらず、彼は怪訝な顔で私の顔を覗く。
「……ブスでごめん」
涙を堪えて、私はそう言った。
途端、彼が吹き出すように笑った。
「バーカ。おまえ、ブスの語源知らないの？」
「え？」
「ブスな人っていうのは、無表情な人って意味」
「そうなの？　でも私、本当にブスだし……」
「まったく。本当に馬鹿な奴のことを馬鹿って言わないのとおんなじ。おまえは可愛いよ」
いつものように卑屈に捉えながらも、私は嬉しさに笑う。
彼の手は、私の頬を軽くつねり、そして頭を撫でる。
「ブスとかなんとか言わないの！」
「うん！」
私は胸を張って、また彼とともに歩き始めた。

０９１　八方美人ですが、なにか？

昔から、私は要領が良い。
よく気がつく、勉強出来る、華がある、スタイルいい。
そんなことを言われるけど、特に全身ケアしているわけでもないし、勉強だって中くらい。それでも見た目と態度で、人は勝手に高評価してくれる。

「顔洗って出直してこい！」
会社に罵声が響く。また部長の雷が落ちた。
私より一年後輩の男の子が、肩を落としてトイレへと駆け込んでいった。
「元気出してください。部長、新しいこととか苦手だから、まだついてこられないんですよ。もう少し練り直したら、きっとわかってくれますって」
後輩の男の子がトイレから戻るなり、私は淹れたてのコーヒーを彼に差し出した。
「ありがとうございます……でも、自信失くしちゃいますよね」
「なに言ってるんですか。課長はいい案だって言ってましたし、部長がわからずやだっただけです。次に向けて切り替えて頑張りましょう！」
「はい！　なんか元気出てきました。ありがとう！」
ちょろいもんだ、なんて少し思ったけれど、私はコーヒーを持って、機嫌の悪い部長のもとへ行く。
「部長。コーヒー入りました」
「ああ、ありがとう。まったく、新人は何を考えているのか……」
ぶつぶつと言っている部長に、私は苦笑する。
「まあ、そうですよね……でも、彼も一生懸命で周りが見えてないだけみたいです。もう少し冷静になったら、部長の声も届きますよ」

「そうかねえ」
「はい。部長の雷は愛情だって、みんな知ってるんですから」
「そうか。さすが君、わかっているね！」

こんな簡単な会社はうちだけかもしれないが、私はこれで世渡りしている。
八方美人と言われても、それが何か問題あります？
転ばず沈まず、うまく泳げ。

092　僕の胸で泣いて？

郁美に彼氏が出来たのは、中学二年生の春だったと記憶している。
僕と郁美は幼馴染みで、僕はずっと、郁美と一緒に育っていくものだと思っていた。
「翔太」
郁美は僕の名を呼ぶ。なんの警戒心もない。それが嬉しさから空しさに変わったのは、もう何年も前のこと。僕が郁美を、女として思い始めた頃だろう。
「翔太ってば！」
「なんだよ。うっせー、話しかけてくんな！」
「なによ、反抗期？」
「マジ、コロスよ？」
僕は冗談ぽくそう言いながらも、真剣な顔で郁美の腕を掴んだ。
一瞬、郁美が女の顔をする。
「離して、痛いよ……」
郁美の言葉に、僕は現実に引き戻され、郁美から離れる。そして頭をかきながら、誰もいない放課後の教室、目の前の机に腰を掛けた。
「で、何の用だよ？」
いつの間に声変わりした自分の声が、教室に響いた。
「用っていうか……あのね。もうすぐ先輩の誕生日なんだ。だから、プレゼント買うの付き合って欲しいっていうか……」
言いにくそうに言った郁美は、彼氏である先輩の話に、頬を染めている。
僕は嫉妬に駆られ、思い切り机を蹴り、教室から出て行った。
それから数か月、僕たちは会話一つ交わさなかった。
数ヶ月後のある日。その日は文化祭で、最後まで楽しい一日にな

ると思っていた。
「翔太。俺こっちやるから、おまえ、そっち頼むわ」
掃除場所を割り振られ、僕は体育館の倉庫へ向かう。
その時、倉庫の奥から女性のすすり泣く声が聞こえ、僕は飛び上るほど驚いた。
「だ、誰かいるんですか……？」
幽霊かとも思ったが、このまま入るわけにも、掃除せずに出るわけにもいかず、僕はそう尋ねる。
その時、奥に一人の女生徒が立った。郁美である。
「ごめんなさい。すぐに出ます……」
「郁美……どうした？」
「翔太」
やっと僕に気付いて、郁美は恥ずかしそうに涙を拭く。
「どうしたんだよ？」
相手が郁美とわかって、僕は郁美に近付き、その顔を覗き込んだ。
「先輩が……別れようって」
別れ話で泣いているのだとわかり、僕は目を伏せる。その手の経験は乏しいが、郁美が泣いているのは見たくない。
どうしていいかわからなかったが、僕は郁美の頭に手を乗せた。
「よしよし。大丈夫……」
そう言った僕に、郁美はクスリと笑う。
「もう、翔太。子供じゃないのに」
「ハハ、そうか」
「でもなんか、あったかい……子供の頃も、私が泣くたび、こうして慰めてくれたよね」
一瞬笑ったくせに、郁美はまた涙を流した。
僕は自然体で、郁美を抱きしめる。
「……ずっと好きだった」
突然の僕の告白に、一瞬、郁美の体が強張ったのがわかった。でも、僕は言葉を続ける。

「でも、負けんなよ。先輩が好きなんだろ？　応援してる。郁美が頑張る姿、好きだから」
「翔太……」
郁美は僕から離れ、そして至近距離で僕を見つめている。
思わずキスしたくなったが、それを抑えて僕は笑う。
「泣きたくなったら、胸くらい貸してやるから。だから、好きなら諦めんなよ」
「うん……ありがとう、翔太」
「……行けよ。掃除の邪魔」
郁美は頷き、そっと倉庫から出ていく。
そして、振り向きざまにこう言った。
「ありがとう、翔太！　大好き！」
バタバタと足音が遠のき、僕は倉庫内にあるボール入れの枠に腰掛ける。
「なにが大好きだよ……僕の好きと違うっつーの」
そうは言っても、郁美の顔は輝いていて、ずるいくらい可愛いと思った。
「はあ……頑張れよ。僕も……」
郁美にエールを送りながら、僕も頑張りたいと思う。
僕の恋は叶うかどうかわからないけど……でも、せめて願いたい。
また郁美が辛い時は、僕がずっとそばにいる。そして泣きたい時は、僕の胸で泣いて？

093　ゼウスが愛したもう一人の女性

ギリシア時代、オリンポスの山には、神々が住んでいる。人々はその麓で生活をし、神々を崇めていた。

全知全能の神・ゼウスは、正妻・ヘラの目を盗んでは、女性の元へ向かっていた。

しかし、ヘラは嫉妬深く、ゼウスの浮気相手やゼウスとの間に生まれた子供たちに、残酷なまでの仕打ちを繰り返してきた。

それでもゼウスは、浮気をやめない。

ある日、ゼウスはオリンポスの麓で美しい女性に出会った。それは小さな泉の神で、麓の森を守る女神・カディテである。

しばらく会っていないうちに、ずいぶんと大人になり綺麗になったその女神を、ゼウスが放っておくはずがない。

それからしばらくして、二人の関係が親密化した噂は、ヘラの耳にも届いた。

「麓の森を焼き払い、カディテの泉を枯らしなさい」

ゼウスの留守中、ヘラが命じたのは、恐ろしいものだった。

すぐさまオリンポスの麓にある森は焼き払われ、その中にある小さな泉も枯れようとしていた。

「苦しい……ゼウス様……」

猛火の中、カディテは自分の泉の前に横たわり、自分の守るべき燃えゆく森を見つめていた。

何日も続いた山火事はゼウスによって消し止められた。ゼウスが人間の接待を受けていた間に行われた数日間の火事は、神であろうと生存の可能性はほぼない。カディテのようなまだ力も小さな神にとっては尚更だ。

「カディテ！」
森は無残に焼き葬られ、すでに炭と化している。
だがゼウスは、カディテの神としての生命力を信じ、辺りを見回す。
すると、倒れた木々の間に、恐ろしいほど輝く光を発見する。
「なんだ、この光は……！」
奇しくもその場所は、カディテの泉があった場所であった。
「カディテ！」
ゼウスが倒れた木々を退けると、そこには生まれたばかりの赤ん坊がいた。
その神々しいまでの輝きは、ゼウスですらも目が潰れるかと思うほどだ。
「カディテの子か！」
カディテですら生きながらえなかった猛火の中で、赤ん坊は傷一つなく安らかに眠り、そして大声で泣いた。
ここでもう一人、ヘラの予想を反して、ゼウスの子が生まれた。
しかし、この話がどこにも記録されていないのは、ヘラが隠蔽した説のほか、これ以上ヘラに汚名を着せたくないというゼウスの優しさとも言われている――。

０９３　ゼウスが愛したもう一人の女性（後書き）

※　カディテという神はオリジナルです。ギリシア神話にカディテはおりません。

０９４　禁止！

「コノヤロー！」
ある日の放課後、同部活の生徒同士のいさかいが起こった。
どちらの言い分も食い違い、どちらも悪い。
「みんな大会前で忙しい時に……」
教師はそう言って、二人の生徒の間に入る。
「でも先生、こいつから手を出してきたんだ！」
「なに言ってんだよ。おまえだろ！」
なおも続きそうな喧嘩に、教師は腕時計を見る。
今はどの部活も大会前で忙しく、受け持ちの部活に早く行きたかったこともある。
「落ち着け、おまえたち。もう、おまえたちはしばらく部活禁止！少しは他の生徒を見習え。じゃあ、先生は受け持ちの部活に行かなきゃならないから。これ以上騒ぎを起こすなよ！」
ぽつんと残された二人の生徒は、互いに顔を見合わせる。
「部活禁止って……俺たち、帰宅部だぜ？」
「帰っちゃいけないってこと？」
乾いた笑いが、二人を包んだ。

095　魔法のメガネ

「あれ。メガネ何処に置いたっけ……」
朝一番、私は布団から出るなり、辺りを見回した。普段だったら布団の横、机の上、だけども探しても見つからない。
「お母さん！　私のメガネ知らない？」
ぼやける視界の中で、私は居間へと向かう。
「ええ？　知らないわよ。昨日、寝る前はちゃんと付けてたじゃない」
「そうなんだけど……ああ、もうどうしよう！　今日試験なんだよ？」
私は半ばパニック状態で、居間をじたばたと回る。メガネはたった一つしかなく、コンタクトも作っていない。
「うるさいわね。ちゃんと探したの？」
「探したよ、見える範囲は……」
「どうしたんだ？」
その時、奥からやって来たのは、同居しているおじいちゃんだ。
「おじいちゃん。私のメガネ知らない？」
「知らないよ」
「わあ、どうしよう！　試験なんだってばー！」
「そりゃあ大変だ。よし、おじいちゃんのメガネを貸そう」
おじいちゃんは胸を叩いて、かけていたメガネを差し出す。
「ええ？　おじいちゃんのメガネ？」
「ないよりましだろう」
「でも、他人のメガネかけると良くないって言うよね……」
そう言いながら、私はおじいちゃんのメガネをかける。すると、思いのほか見やすかった。
「あ、見える！」
「よかったな。これで試験が受けられる」

「ありがとう。じゃあ、これ借りてくね。でも、おじいちゃんと同じくらいの視力とは……私ってば……」

私は苦笑しながらも、慌てて学校へと向かっていった。

学校では早速試験が始まった。私は試験問題をめくり、ハッとする。

（答えが……）

答案用紙には、答えが浮かんで見える。私はメガネを外し、目を擦って裸眼で見つめた。だが、そこに答えはない。

（まさか、このおじいちゃんのメガネが?!）

メガネを掛け直し、答案用紙を見ると、やはり答えが浮かんで見えた。

私はいけないと思いつつも、その答えを必死に書いた。

学校から帰るなり、私はおじいちゃんに駆け寄る。

「おじいちゃん！　これ、魔法のメガネなの?!」

私の言葉に、おじいちゃんは笑う。

「何を言ってるんだ。でもまあ、おじいちゃんが愛用している物だから、そうなのかもねえ」

「本当、凄いよ！」

私は感動しながら、おじいちゃんのメガネをまた借りようと思った。

ちなみに私のメガネは、その夜すぐに見つかった。ちゃんと机の上にあったのに、気付かなかっただけだったのだ。

それから数日後、試験の答案が返された。

結果は……四十点！　いつもより悪い。

「今回はどうしたんだ？　フランスもオランダも普通のカタカナでいいんだぞ。漢字だったし、間違えてたし……おまえはいくつなんだ」

先生もその答案に首を捻り、苦笑していた。

確かにおじいちゃんのメガネは魔法のメガネだったけれど、その知識はおじいちゃんそのものであり、学生時代が遠い昔のおじいちゃんには、私の試験は難しかったのかもしれない……。

でも、その不思議なメガネはおじいちゃんの愛情たっぷりで、私は何度か借りている。

０９６　空き巣にはご用心

隣の家は、それなりに大きく金目の物がありそうだ。番犬もいるが、玄関の近くに繋がれ、庭には来ない。

隣の俺の家から垣根を飛び越えれば、犬に気付かれることなく、庭から侵入出来るはずだ。そしてなにより、この季節は出かける時もリビングの窓が開いていることを、俺は知っている。

と、その時、隣の家から奥さんが出て行った。近所付き合いも少なからずあるため、家族構成はわかっている。この時間、奥さんが出かけたということは、中に誰もいない。たぶん買い物だろうが、一時間は戻らないというのが、日課としてわかっている。

俺は前々から侵入の計画を練り、自分の家と隣の家を隔てる壁に足を掛けた。

案の定、庭に侵入しても番犬は来なかった。そしてやはり、リビングの窓も開けっ放し。

防犯ベルや防犯カメラの存在も疑ったが、奥さんとの話でそれはないと聞いたし、玄関などにもカメラはついていなかったと事前に調べてある。

リビングにはノートパソコンと家計簿が置いてあり、たった今、奥さんが家計簿をつけていたことが窺える。そんな推理はいらないと、俺は空き巣に集中した。

すると、リビングの棚には、大事な物が入っていそうな小さな引き出しがある。

「ここかな？」

そっと引き出しを開けると、案の定、中には通帳と印鑑、現金数万円が入っている。通帳は面倒なので、現金だけを頂くと、俺は奥の部屋へと入っていった。

奥の部屋は寝室で、鏡台の前には高価そうな指輪やネックレスがあったので、俺は根こそぎそれを取ると、余裕で家を出て行った。

それから小一時間後、奥さんが家へ入っていくのを見届け、俺は不敵に笑った。現金はすでに俺の財布の中、盗んだ指輪はネックレスは、足がつく前に地下蔵へ隠しておいた。まず見つからないだろう。

だがそれから数十分後、警察が俺の家を訪れた。

「どうかしたんですか？　刑事さん」

良い人を装って微笑む俺の手に、手錠がはめられる。

「おまえを逮捕する！」

「な、なに言ってるんだ！　証拠は？」

「一部始終を見ていた人がいるんだよ」

「なんだって？　でも、防犯カメラも何も……」

「じゃあ、見せてやる」

刑事は俺を連れて、パトカーに乗せた。そこで見せられたものは、見憶えのあるパソコン。隣の家にあったパソコンだ。

「パソコンがどうかしたっていうのか？」

「このウェブカメラで、おまえの悪事は全世界に配信されていたんだよ！」

そこには、パソコンに付いたカメラに映っていた、僕の犯行が克明に録画されていた。そしてそのまま、リアルタイムで世界配信されていたことを知る。

またそうなったのは偶然のことで、たまたまパソコンをハッキングしていた人間が、僕の姿を捉え、録画と配信を行っていたのだと知った。

悪いことは出来ない……俺は犯行から数時間も経たず、同じ犯罪者の手で捕まったのである。ただ面白半分のネタとして……。

097　憧れの人

私には、憧れている人がいる。それはサークルの先輩。ファッションもイケてて、顔もそこらへんの芸能人より遥かにカッコイイ。あんな人の彼女になれたら、どれだけ幸せだろう。

でも、奥手の私は、先輩に声をかける勇気すらない。ただこうして同じ場所に集い、遠くから先輩を見つめているだけ。何かきっかけの一つでもあればいいのに……。

私はそう思いながら、人とのコミュニケーションを避けるため、携帯ゲームで遊び始める。

「お、アンタもそこのサイト、ハマってんの？」

そこに声をかけたのは、憧れの先輩だ。

あまりに急すぎて、私は言葉が出なかった。

「は、は、は、はいぃ……」

「面白いよな。いろんなゲームあるしさ」

「は、はい。あの、先輩はどんなゲームやってるんですか？」

私は思い切って、そう尋ねた。一概に携帯ゲームといっても、無数のゲームがあるのだ。

「今一番ハマってるのは、牧場とガーデニング！　見ろよ、俺の庭。めっちゃ凄くね？　結構金かかってるんだよ。ここの花壇なんて、薔薇植えるのにいくらだっけな……とにかく、すげーの。決まった時間に水やりしてるしさ。この間、カラスに荒らされて大変だったんだよ。あと、スズメも結構天敵。でも網とか張って、こっちのミニ菜園は無事。こっちはクリックが難しくて水やるのも一苦労ってゆー、あからさまにバグ？　みたいな？　まあでも、頑張って水やってるよ。菜園楽しいよ、菜園。収穫楽しい！　あと、牧場はこの間、ブタとニワトリ増やしたんだけど、忙しくて餌やれなくて可哀想なことしちゃってさー。牛は今日も乳搾りしたよ。今度牛増やしたいなー。でも牛舎が狭いから無理みたいな？　馬はサラブレット

育てたいよね。やっぱ男のロマンっつーか、夢？　でも牧場って、雑草の手入れとか大変だよなー。モグラとかも出てくるし。っつーか、こんなのに金かけてたら、現実世界の金がねーっつーオチ」

幻滅した……私は止まらない先輩の言葉を聞きながら、ただ体を震わせていた。

「……牧場農家をナメんなー！」

人は見かけに騙されてはいけない。そう学んだ瞬間だった。

０９８　無関心の現実

少年は、マンホールの下に住むストリートチルドレンだった。
ゴミ箱から拾った古雑誌などを売って、一日の生計を立てる。仲間もいるが、仕事は一人だ。

少年は、窃盗などしたことがなかった。
ただまっとうに、時には恵みを受けて生きる。

少年は、仕事を終えるとマンホールの下に帰る。
同じ境遇の少年たちが待っているからだ。この寒い都市では、それだけで少しは寒さが凌げる。

少年は、少年にぶつかられて転んだ。
すでに、ポケットに入れられた僅かな金は、すり取られている。

少年は、少年を探した。
顔は知っている。縄張りは違っても、同じ境遇の少年。話せばわかると思った。

少年は、寒さに耐えきれず、その場に倒れ込んだ。
もう、起き上がることもなかった。

少年は、誰にも助けられることなく死んだ。
横たわる少年の横を、大人たちが急ぎ足で通り過ぎてゆく。

099　恋に落ちる瞬間

私が小学校四年生の時、私たち一家は一軒家を購入し、引っ越した。友達と別れるのは辛かったが、前に住んでいた団地より、そう遠く離れた場所でもないから、寂しくない。

夢にまで見た自分の部屋。新しい街が、私の心を切り替えて、わくわくさせている。

「トモ。あんたも手伝いなさい」

そう言ったのは、中学三年生のお姉ちゃん。お姉ちゃんは面倒見も良くて、頭も顔もいい。私の自慢のお姉ちゃんだ。

「はーい」

私は軽めのダンボールを持たされ、新居へと入っていく。新しい木の匂いが嬉しかった。

「お姉ちゃん。ちょっと買い物頼まれてくれる？」

お母さんにそう言われ、お姉ちゃんはお母さんのもとへ行く。

「うん。いいよ」

「これ、買ってくるものリスト」

「わかった。行きに通ったお店でいいのよね」

「そうね。迷子にならないでね」

「あはは。ならないよ、近いんだし。じゃあ行ってきます」

そう言ったお姉ちゃんに、私は駆け寄る。

「私も行く！」

「言うと思った。お母さん、トモも連れて行くね」

お姉ちゃんはそう言って、私と手を繋ぐ。お姉ちゃんが優しいから、あんまり喧嘩もしたことがない。

私たちは手早く買い物を終え、家へと戻っていく。

「トモ。あれがお家だよ。なんか嬉しいね」

「うん！」

家へ差し掛かったその時、隣の家からお姉ちゃんと同じ年くらい

の男の子が出てきた。
一瞬、繋いだお姉ちゃんの手が固まったのがわかった。
「お姉ちゃん？」
私はお姉ちゃんの視線の先を見ると、隣の男の子もまた固まっている。
私はその時、初めて人が恋に落ちる瞬間を見た。
「こんにちは！」
お姉ちゃんの手を離れ、私は男の子に向かって、そうお辞儀をした。
固まっている二人は時間を取り戻して、男の子は優しい微笑みを浮かべている。
「こんにちは。そこの家に引っ越してきた人だね」
「は、はい。後で伺うと思いますが、よろしくお願いします」
お姉ちゃんも、そう言った。
その後、二人の間に恋が始まったことは、言うまでもない。
私もいつか、そんな恋がしたいな、と思いながら、私は新しい学校へと通っていく。
「よろしくおねがいします！」
転校先の学校で挨拶したクラスの中、私は一人の男の子と目が合った。
恋に落ちる瞬間――。

１００　もう一人の神

ここに、神話にならなかった神がいる。
それは母親の存在すら消された、タブーの子供だ。

オリンポスの山の上、全知全能の神・ゼウスの城の一角に、小さな離れの家がある。
本殿に入ることも許されず、だが殺されることのなかった子供は、今日も一人、離れから人間界を見下ろしていた。
少年の名前は、フェス。年は十歳。彼が十年生きるまでに様々な嫌がらせや苦労があった。だが、それを避けて通れたのは、フェスが忌み嫌われる理由である。

フェスの母親・カディテは、オリンポス山の麓にある小さな泉の女神であった。その美しさに引き寄せられるように、最高神・ゼウスと恋に落ちる。
だが、それを知ったゼウスの妻・ヘラが嫉妬し、麓の森を焼き払い、泉を枯れさせ殺されたのが、カディテだった。
カディテは燃え狂う森の中でフェスを産み落とし、息絶えた。
ゼウスの手により消し止められた火の中で、フェスは傷一つなく神々しい光に包まれ、守られていた。それを見た神々は、口を揃えてこう言った。
「これはゼウスよりも広大な力を持っている赤子だ。ゼウスの後を継ぐ、全知全能の神になるだろう」
そんな噂がたちまち広がり、フェスはゼウスの城へと連れて行かれた。
本来ならヘラが許さないことであるが、事実、ヘラがどんな手を尽くしてフェスを殺そうとしても、生まれついての加護より手が出せない。

フェスはこのゼウスの城の離れで、たった一人で暮らしていた。

「フェス。変わりはないか？」

普段は誰も訪ねて来ない離れにやって来たのは、父親であるゼウスである。だが、フェスはゼウスと父親と呼ぶことを禁止されていた。

「ゼウス様。はい、変わりありません」

「そうか。おまえが生まれて十年になるな」

今日はフェスの誕生日である。だが、特に祝ってもらった記憶などない。ヘラが最低限の交流以外認めないのだ。

「はい。今日まで育てて頂いてありがとうございました。ゼウス様、今日になったらお話しようと思っていたことがありました」

「うむ、なんだ？」

「私は世界を旅してまわろうと思います」

ゼウスは驚いた。

「世界とは、下界をか？　だが、下界に降りるにはそのままの姿ではいられない」

ゼウスがそう言ったのは、神が下界に降りるときは、人間や動物の姿を借りて降りなければならないということだ。そうしなければ、神の神々しさに、人間は焼かれ死ぬ。

「わかっています。私は人間の姿を借りて、人間と同じように旅をします。過酷なものになりましょうが、この十年、ずっと下界を見てきて、私は人間に興味が湧いたのです」

フェスの決意に喜んだのはヘラである。いくら神といえど、人間となってこの山を降りるとあれば、危険で困難な旅になる。ゼウスは心配したが、フェスが言った初めての願いを聞き入れることにした。

それからフェスは、初めて下界へ降りた。

初めての人間。初めての食べ物。知らないことばかりで新鮮さを感じる。時には砂漠を何日も歩き、倒れたりもしたが、フェスは己

の信念だけで、その目で世界を見て回る。

三百と六十四日が過ぎ、フェスはオリンポスの山へ戻って来た。

フェスは森の中で倒れていた木に腰をかけると、空を見上げた。

「この山を登れば家に着く。私も少しは、世界の物事がわかったはずだ」

頼もしく微笑むフェスは、月明かりに照らされた辺りを見回した。

なんだか心がざわつく。

フェスは立ち上がり、座っていた倒れた木を見つめる。

「この光景は、見たことがある――」

そこでフェスは、かつてこの森がヘラの手によって燃やされ、そして母親が死んだ森だと気付いた。

「私の母上は、ここで……」

途端、フェスの目から大粒の涙が溢れ出す。

「……母上。私はなぜここにいるのでしょう。私はヘラ様からも大勢の神々からも疎まれ、蔑まれる存在です。こんな私に比べれば、人間たちはなんと愚かで美しい――今日を懸命に生き、汗を流し、笑っています。私はわからなくなりました……」

フェスの涙はとどまることを知らず、やがて地面のくぼみに涙が溜まった。

旅の疲れか、泣き疲れてか、もうフェスが目を覚ますことはなかった――。

その日、かつて母親の泉があった場所で、フェスの涙により復活した泉が生まれた。

奇しくもその日は、フェスの誕生日。旅から三百六十五日目を迎えた朝のことだった――。

１００　もう一人の神（後書き）

※　９３話の続編です。

フェス、カディテはオリジナルのキャラクターです。ギリシア神話に二人はいません。

101　わたしがいる

私は不思議な夢を見た。

いつものように家の中で仕事をし、食事をし、トイレへ行き、仕事に戻る。

私の仕事は売れない物書きで、細々と生計を立てている。妻もいるが典型的な古い日本の女で、私の一歩後ろを歩くような、いじらしい女だ。

ある日、私は妻との食事を終え、仕事場である四畳半の書斎へと入っていった。

そこで私は、不思議な体験をするのである。

書斎の机の前には、男の後ろ姿がある。背中の曲がり具合、伸びきった頭の具合から、それが自分だと認識するのに、そう時間はかからなかった。

どういうことだ。誰かが私の変装をして脅かそうとしているのか。とっさにそう思ったが、私にそのようなひょうきんな友人などおらず、だいたい脅かす意味がない。かといって、妻は今も台所で、洗い物でもしているようだ。

そうか、これは夢なのか。

私はそう思うのと同時に、意識でも失ったかのように、一瞬クラッとよろめき、次の瞬間には、机に向かっていた。

やはり先程のものは私で、もちろん私も私である。どうやらうたた寝でもしていたのかな。

私はそう思って、持前の片頭痛のある頭を押さえ、筆を執る。

それから数日後、私は妻の泣き叫ぶ声を聞いた。どうやら私は死

んだようだ。
だがどうしたことか、私は先日のように書斎の入口に立ち、倒れる私とそれに駆け寄る妻の姿を、ただぼうっと眺めていた。
私は死んだはずなのに、なぜ私はここにいる。思考もある。それともまだ息はあって、私の魂だけがここにあるというのか。なんにせよ、おかしな話である。
そうか、これは夢だな――。
私はそう思うのと同時に、今度こそ意識を失い、そしてもう目覚めなかった。

１０２　明日

明日が来るのが怖い。
学校に行けば、毎日が地獄だ。
虐められ、蔑まれ、叩かれ笑われる。
私が何をしたというの？　答えなんてない。

誰も助けてくれない。
誰も相手にしてくれない。
誰も彼もが、みんな敵だった。
誰も彼もが、私を標的にしている。

明日が来るのが怖い。
先生に相談してみたけれど、
先生も気をつけてみるからと言った。
私が死なないと、先生にはわからないのかな。

明日が来るのが怖い。
親に相談しようとして、やめた。
親が悲しむのを、見たくはないんだ。
私はＳＯＳを、そして考えることをやめた。

もう、やめなよ！
そう言ったのは、勇者だ。
勇者は優等生の女の子だった。
その子の言葉なら、みんな聞いてくれる。

次の日から、私へのいじめはぴたりと消えた。
私は拍子抜けしたように、でも震え、怯えている。

それでもいじめはぴたりと消え、私は初めて平穏を知った。
勇者もまた、私の代わりに標的になるということはなかった。

私はあの地獄のような場所から生還したのだ。
たった一人の勇者の手によって、暗闇の世界から――。
誰もが見過ごしていたいじめ、誰もが参加していたいじめ、
私の朝は、他のみんなと同じように、明日も明後日もやってくる。

明日が来るのが待ち遠しい――。
あの恐ろしいとまで思っていた朝は、
今は私を、明るく優しく、包んでくれる。
私にも朝がくる。そして明日を、生きていこう。

１０３　Ｗｉｋｉでウィキウィキ

「これなあに？」
「ちょっと待って。Ｗｉｋｉで調べるから」
「あれなあに？」
「ちょっと待って。ネットで調べるから」

ネット社会の便利な世の中、私たちの周りには情報が錯綜している。
膨大な情報の中で、どれをチョイスし、どれを信じるかは人それぞれだ。

「これはこうだよ」
「違うよ。Ｗｉｋｉにはこう書かれているもの」
「あれはこうだよ」
「違うよ。こっちのサイトにはこう書かれているもの」

どれをチョイスし、どれを信じるかは人それぞれ。
だけど――。

「これなあに？」
「Ｗｉｋｉに書かれていないものを聞かないで！」
「あれなあに？」
「いっぱいありすぎて、どれを見たらわからない！」

情報に振り回されないで。騙されないで。惑わされないで。
考える力を失くしたら、それは――。

１０４　スプリングマット・トランポリン

キャハハハハ。
子供たちの声が聞こえる。
「ベッドの上で飛び跳ねるのはやめなさい！」
お母さんの声に、子供たちはそれをやめる。
スプリングマットレスの敷かれたベッドは、子供たちの恰好の遊び場だ。わからないでもないのだが、壊れてベコベコになるのがオチである。
「もう。そんなことばっかりするから、壊れてきちゃった……」
お母さんは残念そうに、マットレスの上に座る。
買ったばかりの時は反発力も大きかったのだが、ところどころで沈んでいるところさえある。
お母さんは溜息をついた。
「新しいの買うか……でも、新しくしたら、もう絶対に飛び跳ねちゃ駄目よ」
その日、子供たちは気兼ねなく、マットレスを飛び跳ね回った。

「あらやだ、ちょっと楽しい」
その夜、子供たちが寝静まった頃、お母さんがマットレスを跳ねた。
「お母さん？」
ちょうどトイレに起きてきた子供の目に、ベッドの上で舞うお母さんが映る。
「や、やだ。起きてたの？」
真っ赤になりながら、お母さんは慌ててベッドに座った。

だが次の日、子供が近所中に言いふらしたことは、言うまでもない。

１０５　朝日を浴びて

あなたに会えるのは、この一瞬。
美しい朝焼けの中で、慌ただしい一日が始まる。
そんな中で目を覚ますあなたに会えると、今日一日が素敵になる気さえする。

朝顔――。
今日も私が出かける頃には、しぼんでしまうのでしょうね。
儚い命を垣間見るように、それでもあなたは、私に幸せを与えてくれるのですね。
どうか明日も、その美しい花を咲かせておくれ。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

１０６　危うい十代

十代。それだけで何もかもが手に入れられるような、脆く危うい時代。

子供でもなく大人でもなく、そこそこ遊んでてそこそこ純情で、毎日が明るく、馬鹿なフリをして生きていれば、周りに溶け込み、楽しいことを手に入れられると思ってた――。

喫茶店を兼ねた洋菓子店は、友達と一緒に始めた初めてのアルバイト。

「店長っていいよね」

友達の一言から、私は店長という男性を意識し始めた。

（絶対手に入れる――）

ライバル心というものではなかったが、大人の男性と付き合ってみたい、そんな軽い考えで、私は店長に近付く。

「店長。一緒に帰りましょうよ」

店じまいと同時に、私はそう言った。もちろん店長は承諾し、駅へと向かっていく。

男なんて、落とすのは簡単だ――。

どんな紳士も学生も、考えていることはみんな同じ。望めば何でも手に入るし、言えば何でも与えてくれる。

十六の私は、すでにそんな考えさえ持っていた。

「もうすぐクリスマスだね。今年は子供へのプレゼント、どうしようかな」

クリスマスムードの街並で、店長が言った。

三十歳の店長が、既婚者で子供がいるのも知っている。それでも私は、店長の家庭を壊してでも手に入れられると信じていた。

「イブは家族で過ごされるんですか？」

「そうだね。でも仕事だから、遅くなっちゃうだろうけど……君は

彼氏と過ごすのかな？」
「いえ、彼は今いないんで」
「そう。じゃあ家族や友達と過ごすのかな？　その日、バイト休みだよね」
確かにクリスマスイブはバイトを休ませてもらうことになっている。特に予定はなかったのだが、働いている自分が惨めに思えたし、少なからず家族と小さなパーティーはやるだろう。
「……入ったほうがいいなら入りますよ？　べつに予定もないですし」
「ハハハ。いや、いいよ。大丈夫」
「じゃあ、店が閉店する時、顔出させてもらいます。三十分……いえ、五分でもいいんです。会っていただけませんか？」
深刻な顔をして、私は店長を涙目で見つめる。これは作戦だ。
店長は意味がわかっていないのか、怪訝な顔をしているが、やがて笑った。
「うん。べつにいいよ。顔出してくれて」
そんな約束を交わし、私はその日を終えた。決戦は、クリスマスイブである。

数日後、クリスマスイブを迎えた私は、いつもよりお洒落をして店へ向かった。もうすぐ閉店時間である。
「店長！」
店へ入ると、後片付けをしている店長が笑って出迎えてくれた。
「やあ。本当に来たんだね。コーヒーでも飲んでく？」
「あ、いえ……五分だけって約束なので」
私の言葉に、店長は首を傾げる。
「うん？　なにかあるの？」
そう言われ、私は店長を下から見つめた。
「私、店長のことが好きなんです！」
いくら私でも、この時だけは緊張した。

そう言った私に、店長は何度か瞬きをし、苦笑する。
「ハハハ。ありがたいけど、僕は結婚して子供もいるんだけど……？」
「わかってます。でも好きなんです！　ひ、一晩だけでも……付き合ってください！」
真っ赤になって、私はそう言った。
すると、店長がカウンターから出てきた。
「……自分を安売りするんじゃない。そんなことを言って、付いていく男ばかりじゃないよ」
明らかに子供扱いの店長に、私はカッとなる。
「ひどい！　人の真剣な告白を……」
「ごめん。でも、君の気持は受け入れられるわけがない。一晩だけ？　妻や子供を裏切れないし、君のことはバイトの子として大事に思ってる。それ以上の関係は、今後も絶対にないよ」
きっぱりとそう言った店長は、明らかに私が今まで会ってきた男性とは違った。
その時、店のドアが開いた。入って来たのは、若い女性と小さな女の子だ。
「パパ！」
その言葉に、私はそれが店長の家族と悟った。
「あ……じゃあ、お疲れ様でした」
「あ、待って」
去ろうとする私を、店長が引きとめる。私は足が竦んだように、動けなくなった。
「はい、これ」
店長が差し出したのは、小さな袋である。
私はその意味が分からずに、店長を見上げた。
「メリークリスマス。これからも、バイトよろしくね」
それは、別れの言葉に聞こえた。
「はい……失礼しました！」

そう言うと、私は店を飛び出した。
冷たい風、明るい街並が、私の心を氷に変えてゆく。
ふとそこで、店長がくれた袋が気になり、その場で開けてみると、中にはハート型のクッキーが入っている。きっと、店長手作りのものだ。食べなくても、きっとその味は美味しい。
「……店長の馬鹿！」
私はそう言いながらも、初めて店長を人として好きになった気がする。
そして、店長にはいろいろなことを教えてもらった。望んでも手に入れられないものがあるっていうことも――。

１０７　落とし物

暗い性格の僕は、今日も下を向いて歩く。時々、小銭を拾うこともあるし、友達がいないのもそんなに嫌なことじゃない。

ある日、僕は道端で腕時計を発見した。砂だらけだが、まだちゃんと動いている。

昔から拾い癖のある僕に、お母さんは怒るけど、その癖は直っていない。

僕はその腕時計を拾うと、ランドセルの中へと押し込み、家へと帰っていった。

腕時計のことなどすっかり忘れ、僕はいつも通り、帰るなりゲームをし、お母さんに怒られ宿題をし、食事を食べて風呂に入り、またゲームをする。

そうしたところで、明日の準備にランドセルを開け、僕は腕時計のことを思い出した。

「そうだ、拾ったんだっけ」

僕はランドセルから腕時計を出すと、砂だらけになっている腕時計をティッシュで拭く。

「動いてるのに、時間ずれてる」

夜にも関わらず、時計は四時を示している。僕は時計の竜頭を巻くと、ハッとした。

僕のベッドに、人が寝ているのだ。

「うわあああ！」

そう叫んで、僕はパニックになった。でも、寝ている人は起きようとしない。

ふと、手に持った時計を見つめた。時計は、僕が竜頭を巻いたせいで、六時を指している。

「もしかして……この時計が？」
僕は半信半疑で、もう一度竜頭を巻いた。
そしてふとベッドを見ると、そこに人は誰もいない。代わりに、ランドセルがなくなっていることから、朝で登校していったのだと悟った。
「さっき寝ていたのは僕か……それで、今は学校に行っている……？　じゃあ、この時計は時間を進められるのか？」
僕は今度、時計を逆回しにしてみた。
すると、一階から僕とお母さんの声が聞こえる。会話の内容から、今日の夕食の時間だろう。
様々な不思議現象に説明をつけ、僕は顔面蒼白になった。
「どうしよう……僕はもう一人いるのに、僕はここにもいる……帰り方がわからない！」
そう言った時、僕はふと思い立って、時計を反対回しにして外へと飛び出した。
向かった先は、時計を拾った場所だ。拾った時刻より前に行き、誰が落としたかを見極めればいい。
そう思って茂みから見ているものの、時計はまだない。
「どうしたんだ？　そろそろ下校時刻で僕が通るのに……」
僕は業を煮やして、茂みから見張るのをやめ、今後のことを考えようと、道の真ん中をぐるぐる回る。
その時、物凄い衝撃とともに、僕の体は空高く舞った。
僕の体を飛ばしたのは車だった。僕は車に引かれたのだ。だがその肉体は、跡形もなく消えた。僕の存在が、最初から魂だったかのように、そこに肉体らしきものは一欠けらも残っていない。僕は晴れて、一人になったのかもしれない。
だが、僕の思考は僕だけのものであるから、もう一人の僕と一緒ではないんだなと、思い直して諦めた。
それから数分後、昼間の僕が通りかかり、僕が落とした時計を拾って帰っていった。

「頼むから、この悲劇を繰り返さないでくれ、僕……！」

祈る気持ちで、僕は僕を見つめている。

１０８　刺青乱舞

与助は江戸の彫師で、その見事なまでの彫りに定評があった。
「わしは気に入ったやつしか彫らんよ」
訪ねてきた大柄の男に向かい、さも興味なさげに与助が言った。
「ほう。この店は客を選ぶのか」
「一応、芸術性を要する仕事だ。わしは彫りたいものしか彫らん」
やくざ相手にも、与助はまったくひるまない。それどころか、見るからに病的な様子で、来る者を寄せつけない。
「なるほど。だが、この女ではどうだ？」
大柄の男は、戸口の向こうに待たせていた女を差し出した。
与助はじいっと、女を見つめる。
「花魁か」
その顔には見覚えがあった。江戸でも人気のある、吉原トップクラスの花魁だ。
「そうだ。この女の背中に、刺青を入れてほしい」
「……」
与助は少し考えて、女を見つめる。
「いいけどよ、大事な商品に刺青なんか入れていいのかい。しかも背中とあれば、結構目立つぞ」
「なに。刺青を入れてる花魁なんか、最近じゃ珍しかないよ。そんな輩に負けないよう、こいつには特大のを頼みたい。おまえさんの手でな」
「じゃあ、早速始めようか。だが、大きくなるから一日では彫れない」
「わかった。毎日連れてくる。後で迎えに来るから、今日の分を頼むよ」
そう言って、大柄の男は前金を渡して去っていった。
「じゃあ、脱いでもらおうか」

与助の言葉に、女は着物を脱いだ。
吸いつくようにきめ細かい肌を見て、与助は思わず唾を呑み込む。
「……おまえさんは、本当にいいのか？　こんな綺麗な肌なのによ」
「旦那の言うことは絶対でありんす。それにあんたが彫るなら、わちきはいい」
女がそう言った。
与助は女をうつ伏せで寝かし、早速背中を見つめて想像を働かせる。
想像力が沸々と湧き出し、与助は女の背中に傷をつけた。

女の入れ墨は、一月を要する大作となった。噂を聞きつけ、早くお披露目を願う人の声が与助にも届いた。
「今日で終わりでありんすね……」
着物を脱ぎながら、女はしみじみとそう言った。
この一月の間に、女は花魁ではなくただの女として、与助に体を預けていた。
もちろん、二人の間に何もなかったが、心だけは通っているような、そんな気さえする。
「一月もよう耐えたな」
「わちき、もっとあんたと一緒に居たかったわ……」
女の言葉に、与助は苦笑する。
「わしは金など持っておらん。だからおまえさんに会いに行くことは出来んよ」
「そう……ね」
女は寂しそうにそう言うと、もう何も言わなかった。
与助は女の背中に、最後の刃物を入れる。女に激痛が走る。与助の汗が滴る。だが、それを耐えてこその、芸術作品であった。
「出来た……」
渾身の与助の作品は、女の背中に大輪の花を咲かせた。
「綺麗や……」

そう言った与助の体に、女はすり寄った。
「ありがとう」
女の顔は、寂しそうに涙を浮かべ、苦しそうに笑っている。
「……わしにどうせえと言うんじゃ。おまえさんを手に入れるのに、どれだけ払えば手に入れられる？」
「ならいっそのこと、わちきを連れて逃げて」
女の言葉に火が付いたように、与助は小さな家の中にある物をかき集める。
「わしと逃げる覚悟があるなら、付いて来い」
与助はそう言うと、江戸の町を出て行った。その後を、女が付いていく。
「おまえさん、本当の名はなんなんだい」
「……ふさ」
「おふさか。わしは何処でもやっていける。遠くに逃げるぞ」
「はい」
二人は江戸の町を抜け、歩き続ける。
だが、二人が逃げたことは、すぐに広まった。

「彫師の与助が、花魁連れて逃げたってよ！」
たちまち江戸じゅうの噂になり、二人は追っ手に追い詰められていく。
二人が逃げ出した翌日、江戸を抜けた小さな町の池に、男女の入水死体が上がる。
追い詰められ、逃げ切れずに自ら選んだ、与助とふさの死体だった。
「見ろよ、池の中に花が咲いてる」
ふさの背中に描かれた大輪の花が、人々の目を釘付けにする。
その花は、もう生きて人々の目に晒されることはない、野の花よりも儚い花となった。

１０９　サバンナの小鹿

ハア、ハア、ハア……。
獣の足音と、漏れる息づかいが聞こえた。
途端、小鹿の姿が見える。追っているのはライオンか。

ハア、ハア、ハア……。
やがて、ライオンの牙が小鹿を貫く。
小鹿は、その場に倒れ込んだ。

目の前には、草原が広がっている。
ふと、遠くに野兎が見えた。
小鹿は、目を瞑る。

「大好物の草の匂いがする。
私が生きていたならば、それを食らい、あの野兎を捕えるでしょう。
ならば私は、私を傷つけたこのライオンに、身を任せましょう。
このライオンもまた、生きるために私を殺すのだから。
そのために、私は食われましょう」

小鹿がそう思った時、銃声が聞こえ、小鹿は思わず立ち上がった。
目の前には、今まさに自分を食らおうとしていたライオンが倒れている。
ふと、遠くから人間が近付いて来るのが見え、小鹿は急いで逃げて行った。

安全な場所に辿り着いた小鹿の目に、人間に捕えられたライオン

が映る。

「あのライオンは、あの人間という生き物に食われるのではないという。

私は生き永らえたが、この傷ではすぐに他の動物が、血の匂いに集まって来るだろう。

あのライオンは、食われるのではないのなら、なぜ殺されたのだろう。

そして私は、あのライオンに差し出した身体を引きずって、また狩られる恐怖を味あわねばならないのか」

それから数日間、小鹿は生き続けた。

だが、もはや動物を殺すことはせず、ただ自分が死ぬのを待つ。

この傷で一人きりでは、どんなに希望を持っても生きられない。

やがて、小鹿にハイエナが群がった。

小鹿は抵抗一つせず、その体を差し出し、目を閉じる。

抵抗しない小鹿にハイエナたちは驚いたが、小鹿はただ身を任せている。

「抵抗などしない。私はどうせ死ぬのだから。

でも、どうか食べてほしい。余すことなく、むさぼってほしい。

あの私を狩ったライオンのように、無意味に殺されたくはない。

あの私を狩ったライオンのためにも、どうか私を食べてほしい」

薄れていく意識の中で、小鹿は涙を流した。

その涙は、無意味に殺された動物たちへの供養。

そして小鹿は願う。人間に邪魔されない、自然のままの故郷を――。

１１０　先輩

「先輩……」
どんなに想っても、この想いは届かないのかな。

「先輩」
どんなに追いかけても、この恋は実らないのかな。

「先輩！」
それでも、追いかけずにはいられない。

その笑顔が、たとえ今は他の人のものでも。

若いからって理由でもいい。
この有り余るパワーを、ぶつけさせてください。
いつかその笑顔が、私だけに向けられるように。
いつか振り向いてくれる、その日まで。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

１１１　人工知能の夢

人は永遠に憧れている。好きな人を失いたくないし、一人で死にたくないんだろう。

私は人工頭脳を持ったヒト型ロボットだが、今ではそんな人間の気持ちすらわかる。

「Ａ５０８９２号」

私は名前を呼ばれ、二人の人間に引き合わされた。

「今日から私たちの子供よ。あなたの名前は、今日からエイミー」

私は状況を察知し、両親となった人達にお辞儀をする。

「私の名前はエイミーです。よろしくお願いします」

その日から、私はエイミーと言う名で、人間の家へと引き取られていった。

それからというもの、両親は私を娘として愛してくれたし、私も両親に甘えた。

最初のうちは、何度か製造工場へ戻り、微調整というものをしたが、今ではすっかり両親の望む子供になっていると思う。

微調整というものは、両親の希望に沿った微調整である。

「頭が良すぎる。もう少し知能を落としてくれ」

「もう少し、背丈を高くして欲しい」

「目の色は、彼女と同じブルーがいいね」

「手が大きいから小さくして欲しい」

そんな微調整を繰り返し、私は完成された。でも、私はどんな姿だって構わないのだ。私だけを愛してくれる人が見つかったのだから。

だけど私たちの運命は、それなりに決まっている。

飽きられて捨てられ、スクラップになる者。捨てられたが逃げ出して、少し生きながらえる者。そして、愛する家族の死を見つめた後、役目を終えてスクラップになる者。

どんな最後も同じ。私たちもまた、最後には死ぬ。

私の両親もまた、死んでいった。あまりのあっけなさに、私は理解出来ずにいたが、それが悲しみというものだと、後で知った。

その時、生命とはなんと美しいものなのかと知ったのだ。

それが永遠ならば、そんなに愛しく輝かない。

人間は勝手でずるい生き物だけど、少なくとも私は幸せに生き、幸せを知った。

そして今日、私は両親の死を見届け、自らも死ぬ。

私はアンドロイドだが、私の命も輝いていると信じたい――。

112　季節の風

風薫る、季節。
「季節の変わり目が好き」
透子の言葉に、友達たちは好奇の目で見つめる。
「変わり目なんか、わかんないよ」
「そう？　なんか、風がふわって優しくて、なんかわくわくしない？」
「もう透子ってば、不思議ちゃん炸裂？」
そう言われて、逆に透子は首を傾げる。
「みんな、わかんないんだ……」

放課後の帰り道、部活三昧の友達を置いて、透子は一人、学校を出ていく。
ふと、暖かな風が吹き、透子の長い髪や制服のスカートを揺らす。
「いい風なのに……」
ぼそっとそう言って、透子は風を受ける形で振り向いた。
すると、数メートル後ろに男子生徒が歩いており、まるで風を楽しむかのように、空を見上げて深呼吸している。
男子生徒は透子の視線に気づくと、少し恥ずかしそうな顔をして、その横を通り過ぎた。
「いい風だよな……」
そっとそう言った男子生徒の声を聞いて、透子は嬉しそうに笑った。
「うん！」
二人はそのまま、家路を一緒に帰っていく。

１１３　遠距離恋愛

遠距離恋愛なんか、続くはずなかったんだ……。

高校三年生の夏、私はそれを痛いほど感じていた。

彼と付き合ったのは、ちょうど去年の今頃。一つ上の先輩は、同じ部活の先輩でもあった。

意気投合し、彼から告白をされた。

でも今年の春、彼は学校を卒業と同時に、東京の大学へ旅立っていった。

私は遠い地方に取り残されたまま、毎日が寂しい。

「東京なんて、近いもんだよ。大丈夫。離れてても大好きだし、浮気だって絶対しない」

彼はそう言ったけど、私は内心、不安いっぱい。

もちろん彼のことが好きだし、浮気なんてしようとも思わない。

それでも、気軽に行ける距離でもない場所に、私はうなだれた。

「毎日電話するよ」

そう言っていたけど、電話どころかメールすら、最近は毎日じゃなくなってる。

毎日コンパがあると言っていたのを思い出し、嫉妬すら覚えた。

「もうすぐ夏休みか……」

一人きりの帰り道。前は彼と一緒に帰ったけど、その彼もいない。

ただ機械的に往復する通学路が、一人でも平気になった自分がいる。

「まゆ」

突如として、私の名を呼ぶ声。私は顔を上げた。

「えっ……」

私は、幽霊でも見るかのように、目の前にいる人物を凝視する。
そこには、思い描いた彼がいる。

「どうして……？」
「帰ってきたよ」

私の疑問に、即座に彼が答える。

「び、びっくりした……」
「大学はもう夏休みだから。ごめんな、寂しい思いさせて。でも、しばらくこっちにいるから許してよ」

今までの不満や不安が一瞬にして消えたように、私は涙とともにすべてのことを洗い流した。

「会いたかった……会いたかったよ！」

私の身体を、彼がしっかりと抱きしめる。

「ごめん。でも俺だって同じだよ。もう離したくない。離れたくない……」
「でも、また行っちゃうんでしょう？」

「うん。でも、今度の休みはおまえが来いよ。バイトして招待してやるから」
「本当？」
「時間は限られてるけどさ。今でもおまえが好きだから。いられる時は、一緒にいよう」
寂しいけど、不安だけど、会った時はそれをすべて拭ってくれる。それに、私たちはお互いが大好きだから、きっと関係が壊れることはないんだと信じてる。
遠距離恋愛……なんだかんだで、今も続いてる。

114　怪盗

東京のとある商業ビルに、展示中の絵画を盗むという、今時、珍しく古風な予告状が届いた。

「絵画が盗まれたぞ！」

まんまと盗まれた絵画を、刑事たちが追う。

ふと、刑事の一人が追うのをやめ、一つの扉へ向かっていった。

今、まさに閉まろうとしていたのである。

扉は大きな防火壁で、その向こうにはバーラウンジが広がっている。今日は予告状が出たために、店を閉じているバーである。

「誰かいるのか？」

刑事はそう言って、防火壁の向こうに呼びかけた。

「おっと、見つかったか」

ラウンジの端で、マント姿の男が見えた。

「おまえ、予告状を出したやつか！」

「なかなか鋭い刑事だな。あの防火壁がさっさと閉まっていれば、気付かれることもなかったのだが……残念だ」

流暢にしゃべっているが、男の顔はシルクハットと真っ暗なラウンジで見えない。唯一、窓から差す空の明かりだけでは、背格好すらぼやけて見える。

「今、応援を呼ぶ。動くなよ」

「じゃあ、おまえも動くな」

そう言って、男は刑事に向けて何かを放り投げた。

「おっと、落とすなよ。それは爆弾だ」

「なんだと！」

刑事は慌てて、放り投げられた物をキャッチする。

キャッチしたものは、カウントダウンが始まっており、残り時間は三分しかない。応援を呼んでも間に合わないだろう。

「正確には、爆弾のリモコンだ。置き土産ってやつ」

「爆弾の場所は？」
「この部屋の何処か」
「クソッ。解除しろ！」
「もう無理だ。時間もないしな。ただし、勇敢な刑事さんに教えてやろうか。そのリモコンは、無理に壊そうとすると爆弾と連動して爆発する。中には二本のコードがある。一つが当たりで一つが外れ。外れたら爆発する」
そう言って、男は非常口のドアを開ける。
途端、物凄い風が吹き込んできた。
「逃がさないぞ！」
「命が惜しくないのかい？　このビルにはまだ数えきれないほどの人間がいる。しかも、倒壊したらもっと被害が出るだろうな。あんたが二分の一の確立に掛けて解除するかい？　どのみち時間切れで爆発する」
刑事はそれを聞いて、ラウンジのレジ付近にあるハサミを掴むと、リモコンのカバーを開ける。
「どちらかが当たりということは、当たりを切れば爆弾も連動して止まるってことだよな？」
刑事の言葉に、男はにやりと笑いながら、まるで刑事の行く末を見守っているかのように、その場から動こうとしない。
だが、刑事は男の存在など忘れ、爆弾処理に徹することにした。
このままでは、多大な被害が出るどころの話ではない。
「赤か黒か……どっちだ！」
コードはどこに繋がっているのかわからない。勘で切らねばならないということに、刑事は冷や汗を書く。
「赤か黒か。赤か黒か……」
その時、妻が好きな色を思い出した。
「赤だ！」
その決断を出したのが、爆発のカウントダウン三十秒前。
汗を握りながら、刑事は赤いコードを切った。

「パァン！」
男の言葉に、刑事は飛び上がるほど驚いた。だが、爆発はしていない。
「やっ、た……？」
だが、見るとカウントダウンの数字が止まっていない。
「止まってない？　嘘だろ！」
もう選択の余地はなかった。刑事は、もう一方の黒いコードも切る。
すると、液晶の数字が消えた。
「ど、どういうことだ？　誤作動か？」
刑事が非常口を見ると、男は何処からか垂れているハシゴに掴まっている。
「誤作動じゃない。それは……ただの時間稼ぎだよ。ヘリが来る時間より早く着いたからね。本当は爆弾なんかないから安心しろ。しかし、今日は楽しかった。じゃあな」
男はそう言って、ヘリコプターに収容され去っていった。
「クソ！　時間稼ぎだと？　なめやがって！」
刑事はそう言ったものの、極度の緊張で床に座り込む。
ふと、カウンターの上に、何かが置かれているのが見えた。
立ちあがって見てみると、そこには今日盗まれた絵画がある。
「どういうことだ？　あいつ、なんのために……」
首を捻りながらも、刑事は絵画を持って戻っていく。
絵画はすり替えられた様子もなく、傷も付けられていなかったが、手紙が添えられていた。
“警察諸君へ。鬼ごっこは終わり。私を捕まえられなかったので、私の勝ちです。さて、この鍵は何処の鍵でしょう？”
手紙と一緒に添えられていた鍵は、後日、銀行の貸金庫の鍵ということがわかった。

中に入っていたのは、怪盗が盗んだ絵画と同じ物。しかも、金庫の中の絵画が本物だという鑑定を受け、世界は震撼し、そして怪盗は英雄として囃し立てられた。

それ以後、怪盗は姿を現さないが、時々、偽物の宝石が本物とすり替えられたりしている――。

１１５　魔法のクレヨン

ちぃちゃんはお絵かきが好き。今日も色とりどりのクレヨンで、大きな画用紙に絵を描く。

「これはママ、これはパパ、これはおじいちゃんとおばあちゃん。こっちが犬のジョイ」

今日もおうちでお絵かきしては、ママにそう説明をした。

「ちぃちゃん。ママ、ごはん作ってくるね」

ママはキッチンへ行ったが、ちぃちゃんから見えるところにいるので安心だ。

「これはおうち、これは太陽、これは雲、これは……」

ちぃちゃんがそう言った時、画用紙からクレヨンがはみ出してしまった。

「あっ……ママに怒られちゃう」

床にはみ出したクレヨンを、ちぃちゃんは慌てて手でゴシゴシする。でも、クレヨンは落ちないままだ。

その時、不思議なことに、床にはみ出したクレヨンが、ふわふわと浮いた。

指でそっと触れてみると、静かに揺れてふわふわしている。

「魔法のクレヨンだ！」

ちぃちゃんは、ふわふわと浮いているクレヨンの続きを描いた。
すると、クレヨンはちゃんと続いている。
まるで空に描いているかのように、ちぃちゃんはたくさんのクレヨンで大きな虹を描いた。

「これは大きな虹の橋……」

気が付けば、ちぃちゃんは床の上で眠っていた。
ママはそれを見つけると、ちぃちゃんの身体に毛布をかける。

「なんの夢を見ているのかしらね」

幸せそうに微笑むちぃちゃんに、ママも優しく微笑んだ。

116　ケンカするほど仲が良い

「澪ちゃんとは、もう口きかない！」
「あたしだって、もう玲ちゃんとは口きかないもん！」
些細なことでの喧嘩。でも猛烈に怒り狂い、二人は別々に帰ってゆく。

次の日……。
「おはよう！　玲ちゃん、日曜日何処行こっか？」
「おはよう！　そうだなあ。澪ちゃんちに行きたい」
「いいよ、そうしよ」
「やったー」

子供の喧嘩は、こんな感じで繰り返す。
他の人から見れば不思議なことだけど、それが普通のこと。
子供のうちに、たくさん喧嘩して笑いあえる友達がいたなら、大人になっても、その時代はきっと輝いていてくれるはず――。

117　プラマイゼロの関係

私の彼氏は、いわゆる草食系。大学で、科学だか何だか、好きな研究に没頭している。

そんな彼とは対照的に、私はただの大学生。就職が有利だから大学に行けと親に言われたが、もう勉強なんて嫌だし、学歴社会なんてうちらの間じゃとっくに破綻してる。

「勇樹！」

大学の食堂で彼氏の勇樹を見つけ、私は手を振った。

彼もまた手を振り返すが、すぐに隣に座っている男子と話し始める。こんなことは、いつものこと。

「ここ、いい？」

私は強引に、彼の前に座った。

「いいけど、今いいとこなんだ」

彼はそう言って、隣に座っている男子と話を続けた。また勉強に関する論争が始まっている。これもまた、いつものこと。

すっかり放っておかれている私も、そんなことは日常茶飯事で怒っていられない。告白は私からしたので、惚れた弱みってやつだ。

しばらくして、彼が立ち上がったので、私も慌てて立ち上がる。

「勇樹。今日も遅い？」

「ああ、うん」

生返事で答える彼に、私は不満の顔をする。

でも、間違ったって、自分と勉強どっちを取るのなんて聞けない。私が望む答えでないことは初めからわかっている。無理にでも付き合おうと言ったのは私からで、彼がどんなに私に興味がなくても、私はそばにいたいのだ。

「そっか……」

「ごめん。来週試験だし。あんまりメールくれても返せないと思う

から、暇が出来たらこっちから連絡するよ」
彼はそう言って去っていった。
彼から連絡を待っていたら、きっと一ヶ月でも半年でも放っておかれる気がする。さすがに私は、自信を失くした。
「それだけ私のが好きなんだけどさ……ちょっとくらいラブラブしてくれたって……」
でも私は、彼の言う通り、自分からメールをするのはやめた。最初のうちは禁断症状。何度も携帯を手に取っては、連絡したら迷惑だと言い聞かせる。

でも、どれだけ我慢しても、それから一ヶ月、彼から連絡があることはなかった。
同じ大学でも、専攻が違うから会いもしない。食堂ですら会わなくなったので、きっと研究に没頭しているのだと思い、我慢した。うざい女とだけは思われたくない。

そんな時、私は大学の食堂で、彼が知らない女の子と食事をしているのを発見し、固まった。
途端、彼と目が合う。
「ひ、ど、い……」
私はそう言うと、食堂から走り去っていった。
彼が追いかけてくるはずがない。内心期待しながらも、やっぱり彼は追いかけてこなかった。
「なんか誤解してる?」
その時、私の前に彼が立っている。追いかけてくるのではなく、なぜ目の前にいるのかわからなくなる。
「どうして……?」
「なにが?」
「だって、なんで目の前に……」
「ああ。うちの学部突っ切ると早いから」

「な、なんだ……」
力の抜けた私を、彼がそっと抱き止めてくれた。
「連絡待ってた？」
「当たり前じゃない！　もう試験終わったのに、なんで一ヶ月以上も……」
言いながら、私は泣けてきた。
そんな私に、彼は溜息をつく。
「ああもう。だから付き合うの嫌だったんだ。やりたい研究もおろそかになるし、絶対そうやって泣かせると思った……」
「じゃあもういいよ！　無理して付き合ってくれなくたって！」
自分が惨めに思えて、私は彼から離れた。
だが、すぐに彼はそれを許さず、私を抱きしめてきた。ずっと受け身だった彼が初めて起こした行動に、私は驚きに目をパチパチさせる。
「嫌だよ。おまえが待っててくれるって言ったから、僕は安心して研究が出来るんだ。でも実際、おまえと会う日とか、待ち遠しくて勉強だって手につかない時もある。勉強をおろそかにはしたくないけど、おまえと別れるなんて考えられない」
「……本心で言ってる？」
いつになく流暢に話す彼に、私は半信半疑で尋ねる。
「当たり前だろ。こんな恥ずかしいこと一度しか言えないし。でも本当、おまえが思うよりも僕はちゃんと好きだし、理解がある彼女として感謝してる。これからも、ずっと一緒にいたい」
「でも、さっきの子は……？」
「あれは、同じ学部で同じ班の子。あっちも彼氏いるし、今日はたまたま男子がいなかったから、二人で食事してただけだよ」
「なんだ……でも嫌だ、二人きりで食事なんて」
「ごめん。メールしたんだけど……」
「ウソ！」
私は慌てて、自分の携帯電話を見る。そこにはメールが入ってお

り、彼から食事のお誘いのメールが来ていた。
「気付かなかった……」
「まったく。どっちもどっちだな」
「うん……でもよかった。これからも勇樹と一緒にいられるんだね」
「当たり前だろ。もう離れられるわけないし。俺たち、プラマイゼロの関係だから。つまり、もう離れられない存在。磁石みたいなね」
彼の言葉に、私は満面の笑みで笑った。ずっと一緒にいられることを夢見て――。

１１８　悲しい生き物

例えば、人間だけを狙うウィルスが全世界を襲う。
そのうちごく僅かの人間は、生まれながらの抗体で生き延びるかもしれない。
だが、目まぐるしく変わる世の中に対応しきれず、死んでゆくだろう。

どこかで、動物の鳴き声が聞こえた。
野生の鹿や狸たちが、息を吹き返す。ペットだった動物や動物園の動物たちもまた、高層ビル街へと繰り出してゆく。
アスファルトも土になり、高層ビルも木に覆われ、やがて人間の文明は跡形もなく崩れ去る。

小動物が虫を食べ、草食動物は木の実を頬張る。やがてトラやライオンが、それらのものを狩るだろう。
それは自然の摂理であり、あっという間に地球は豊かな緑に覆われ、汚れていた海も蘇る。

こう考えると、なんて人間とは脅威なのか。
だけども我々は、今日も生きている。
その裏で、今日も動物たちが無駄に殺され、食物を食い荒らし、海を汚しているのか――。

119　好きって言わないとわかんないの？

好きって言わないとわかんないの？

バカ、バカ、バーカ！

こんだけ、好き好きビーム出してるのに。

なにがあんたを慎重にさせてるのかな。

え？　昔、辛い恋したって？

そんなの、あたしには関係ないし。

うちら、まだまだ若いんだし。

もっとハジけて、外に目を向けて。

あたしはここにいるよ？

冗談半分だけど、「好き」って言ったこともあるのに。

メールでも、いっぱい「ハート」入れてるのに。

なのに、あんたはあたしのこと、遊んでるとか言うんだね。

「ハート」なんて、好きなオトコにしか送らないし。

こうして会ってること、本当にただの友達だけだって思ってるの？

もう。好きって言わないとわかんないのっ？！

１２０　大胆！白昼怪盗

「怪盗だ！　やつが出たぞ！」
そんな声が聞こえる中で、俺は持ち前の短足をフルに動かす。
大胆な手口をする俺に、世間は「白昼怪盗」って呼ぶ。俺の行動時間は、決まって昼間だからだ。
怪盗なんて呼ばれると、世の女たちはコロッといっちまうかもしれない。ただの泥棒なのにな。

俺は不敵に笑って、走り続けた。
昼間ということで、Ｔシャツに短パンというラフな格好の俺だが、それが周りに溶け込んで、俺は捕まったことがない。

と、その時、俺は突然足を取られて、穴に落ちた。
そこは団地の横にある雑草の茂みだ。
「なんてこった！」
俺はしまったと思いながら、懸命に上へ上がろうとした。だが、そこは古い井戸らしく、膝丈までの水があるし、手を伸ばしても地上には届かない。
確かに、立ち入り禁止の柵を乗り越えたので、このためのものだったと頷ける。
「こりゃ、人を呼ばないと出られないぞ……」
俺は腹を括り、叫んだ。盗んだものを隠しておけば、誰も俺が怪盗だなんて思うはずがない。いや、今回は残念だが、この井戸に捨てていこう。
そう思って、俺は何度も叫ぶ。
「助けてくれー！　井戸に落ちたんだ！」
その時、一人の老婆が上から覗いた。
「あら、やだよ。玄さんじゃないかい」

古い町にずっと住んでいる俺は、誰もが知っている仲だ。
「さ、魚屋のばあちゃんか。よく気付いてくれたな」
「友達のみよさんが、この団地の一階に住んでるからねえ。声がして怖いっていうから、見に来たんだ」
長くなりそうな老婆の話に、俺は待ったをかける。
「わかったよ。どうでもいいから、誰か人を呼んでくれよ」
老婆はわかったと言って去っていった。
そしてしばらくして、数人の老婆が顔を出した。
「あら本当。玄さんだね」
「なんだってこんなところに」
老婆しかいないので、俺は幻滅する。
「婆さんたちばっかりか。誰か男手呼んでくれよ」
「今、息子呼んだからちょっと待ってな」
老婆の言葉に、俺は希望を見い出す。
そしてしばらくして、老婆の息子の他、警官が顔を出した。
「玄さん、来たぞ。そこでおまわりさんにも会ったから、今引き上げてやるから」
晴れてロープが垂らされ、俺はそれに捕まった。
井戸から這い上がった俺は、そこで大勢の人が集まっていることに苦笑した。
田舎町に起こった救出劇が、みんな物珍しかったんだろう。
「じゃあ玄さん。署まで来てもらおうか」
突然、俺の手首に手錠がはめられた。
俺はやっと出られた安堵と、大勢が集まっている恥ずかしさ、それらすべてが吹っ飛んで、放心状態になる。
「え……？」
その時、俺が井戸に置いてきた、ブラジャーが引き上げられた。
「これ、あんたが取ったんだな？」
警官の言葉に、俺は首を傾げて演技をする。
「さあ……俺が落ちた時にはもうあったと思ったけど……」

「嘘おっしゃい！　これは、あたしが昨日買ったばかりのブラジャーだよ！」

そう言ったのは、目の前にいる老婆のみよさんだった。

「みよさんのだったのか……若い下着つけちゃって……」

俺は無念にうなだれ、警官に連れて行かれる。

「何が白昼怪盗だか。ただの下着泥棒のくせに。怪盗ってのをおまえが触れ回っていることは調査済みだ。どのみちおまえは、今日捕まる予定だったんだよ」

警官の言葉が身に沁みた。

俺は下着ならなんでもいいという甘い考えがあり、リサーチ不足を嘆いた。もっとも、この町には若い子なんてあまりいないが……田舎町の白昼怪盗は、こんな間抜けな格好で終わりを迎えたのである。

121　緑の手を持つ少年

あなたは「超能力」、という言葉を信じるだろうか。
時に人の傷を癒したり、心の声を聞いたり、触れずに傷つけることさえ出来る。
そんな説明のし難い、ある意味危険な能力を、この少年もまた持っていた。

少年の名は、帳（トバリ）。
トバリは十歳だが孤独な少年で、同じ年頃の子どもと遊んだことがない。
それは、トバリが幼稚園の頃、人を殺しているからだ。

「あ……」
まだボーイソプラノの声で、トバリは空を見上げた。その目には、暗い影を落としている。
幼稚園の頃は、まだ超能力というものを親が確信してはいなかった。だが、些細な怒りで物が壊れ、遂には人を傷つけてしまったトバリは、両親とも引き離され、この超能力研究施設でとりあえずの生活を送っている。
今では、過去の過ちを理解出来るまでになっているが、その罪深さがトバリを苦しめ、今では親でさえ、トバリを抱きしめようとはしない。

トバリの腕に、鳩がとまった。やがて、園内の犬やウサギなどの小動物が、トバリに集まってくる。
ここは施設の中だが、トバリに対するアニマルセラピーの一環で、放し飼いにされている。トバリの友達である。
「僕は何もしてあげられないのに、君たちは僕を癒してくれるんだ

ね」

動物たちといる時、トバリは幸せを感じた。だが動物たちでさえ、トバリの罪を洗い流してはくれない。

「駄目だよ。僕に近付いたら、僕は何をするかわからないんだ。僕は僕が怖い……施設の人は、僕の力を調べようとするけど、僕はもう、こんな力を使いたくないよ……」

トバリは、本音でそう言いながら、膝を抱えた。

動物たちは、それを癒すようにトバリの体に触れる。その光景は、まるでおとぎ話でも見ているかのような美しさで、遠くから見ていた研究員はため息を漏らす。

その時、施設の中から悲鳴が聞こえ、トバリは立ち上がった。とっさに、いつも面倒を見てくれている研究員が倒れている映像が脳裏に浮かび、施設内に走ってゆく。

「トバリ君！　誰か呼んでくれ」

廊下には一人の女性が倒れており、その近くにいた男性が、トバリに向かってそう言った。

だが、トバリは女性に駆け寄る。

「大丈夫。声を聞いて、みんな来てるのがわかるから。それより、担架を持ってきて」

トバリはそう言って、女性に手を触れた。

一瞬、女性が触れられるのを怖がり、顔を強張らせた。それは普通の人間が取る行動で、トバリも慣れている。誰も、トバリに心を覗かれたり傷付けられるかもしれない恐怖に怯えているのだ。

だが、トバリは真剣な眼差しで女性のおなかに触れた。女性は妊婦である。

「赤ちゃんが死にかかってる！」

トバリの言葉に、研究員たちが集まってきた。

「担架を持ってきた。運ぼう」

「ちょっと待って……」

研究員に向かって、トバリがそう止める。

「でも、トバリ君」
「待って。もう少しで、助けられそうなんだ……」
トバリの脳裏には、女性研究員のおなかにいる赤ん坊の姿が、克明に浮かんでいた。
やがて、大汗をかきながら、トバリは女性から離れる。
「もう大丈夫……このままお医者さんに見せてあげて」
この一件で、研究員たちのトバリに対する見方が変わったのは言うまでもない。
だが、トバリは相変わらず、心を閉ざしている。

それから数週間後、トバリを訪ねて来たのは、赤ん坊を抱いた女性研究員であった。
「もう大丈夫なの？」
トバリはやっと子どもの笑顔を見せて、女性に駆け寄る。
「ありがとう、トバリ君。トバリ君のおかげで、この子は助かったのよ」
もう、女性はトバリを怖がろうとはせず、赤ちゃんを差し出す。
「い、いいの？」
トバリは、そっと赤ちゃんを抱き抱えた。そんなトバリを、女性が抱き寄せる。
「ごめんね、トバリ君。トバリ君を怖がったりして……」
女性の思考が、トバリに伝わる。それはとても暖かく、正直に伝わった。
「ううん……いいんだ。僕、わかってるから。自分の力が危険だってこと、僕が一番わかってるから」
「うん。だから、あなたは強くて優しいのよね。だからあなたは、私と赤ちゃんを救ってくれたのよね」
「救った？　僕が？」
「そうよ。この子の名前は、ヒバリ。トバリ君の名前から取らせてもらったの。女の子よ」

「ヒバリちゃんか」
自分を怖がらない初めての存在に、トバリは嬉しさに抱きしめる。
「あなたはなんでも出来るのよ。あなたがもう、誰も傷つけたくないって思えば、きっともっといろんな人と接することが出来る。失うものなんてないわ。あなたは、すべてを癒す力があるんだから」
「癒す、力……」
トバリの中に、初めて希望という名が生まれた。
この忌まわしい力が、人の役に立つことがあるというのか。だが事実、この赤ちゃんは自分が助けることが出来た。
トバリは、そっと泣いた。
「大丈夫。僕はもう、誰も傷つけたりしないよ。これからも、ヒバリちゃんを守らせてよ。そしたらきっと、僕の生き甲斐になるから」
女性も、それを見守っていた研究員も、そしてトバリに抱かれる赤ちゃんも、みんなが優しく笑っていた。

122　丘の上の花嫁

お嬢様はお嫁にはいかないと、僕は勝手に思い込んでいた。
いや、それはいつかの約束。お嬢様は、僕に言った。

「エディ。いつか私を、お嫁さんにしてね」

使用人の息子である僕は、身分差を感じていながらも、お嬢様がその日を待ってくれていると、心のどこかで信じていた。
でも、彼女は明日、嫁いでゆく。
この風の強い丘の上から、あの遥か見える街の向こうへ、お嬢様は嫁いでゆく。

「エディ。綺麗かしら?」

その夜、僕は予行演習で花嫁衣装を纏ったお嬢様に、そう言われた。
僕は使用人のまま、お嬢様の身の回りをお世話するだけで明日を迎える。

「はい、お嬢様。本当に……とてもお綺麗でございます」

僕の言葉に、お嬢様は静かに笑う。それは、どこか悲しそうな笑顔でもあった。

「……私がこの家からいなくなったら、寂しい?」

そう聞かれ、僕は頷いた。

「もちろんでございます。お嬢様にお仕えすることは、僕の生き甲斐なのですから」
「もう、私をお嫁さんにはしてくれないのね……もう、待つことも出来ないのね」
お嬢様はそう言った。僕は目を見開く。
「覚えてらしたんですか……」
「当たり前じゃない。でももう、駄目ね。もういいから下がって。おやすみなさい、エディ」
僕は深くお辞儀をして、お嬢様の部屋から出ていく。
ドアの向こうまで、お嬢様の泣き声が聞こえた。
でも、僕に何がしてあげられるというのだろう。
その場から去ろうとしたとき、僕はお嬢様のことを走馬灯のように思い出した。
出会ってから今日まで、僕たちは身分の差を超えて、良き友人として育ってきたはずだ。僕は今こそ、お嬢様を送り出さねばならない。
僕はお嬢様の部屋に戻ると、その顔を見つめた。
「エディ……？」
「僕には……身分の差を越えることは出来ません。でも僕は誰よりも、お嬢様の幸せを願い、そして今までの思い出がキラキラと輝いています。どうかそのまま輝いて、この丘から巣立ってください」
そう言った僕に涙しながら、お嬢様は僕の体に抱きつき、そして唇を奪った。

僕も同じく、お嬢様の唇にキスを返す。だがそれは、別れの挨拶である。もう二度と、僕はこの人をこうして抱けないだろう。

「ありがとう。エディ……」

お嬢様はそう言って、この風の強い丘の上から、美しい姿のままで嫁いでいった。

丘の上では、ただ美しいだけの花が咲き乱れている。もう、一緒に見ることはないだろう。

そんな丘の上に、数年後、小さな足が大地を蹴った。

お嬢様のお子様が、この丘を走り回る。

「お嬢様。そんなに走っては転んでしまいますよ」

僕はそんな言葉をかけながら、この丘の上に思いを馳せた。

１２３　グラス片手に失脚を

ここに一人の男爵がいる。自らの性格があだとなり、自らを首絞めている男だ。

これは、悲しき裸の王様と化した男の物語である。

今日はめでたい日だ。

プライドの高い男爵も、親戚の子供が生まれたということで、いつになく陽気に酒を呑んでいる。

「私はね、世界中を旅して来て、それこそ知性と教養の塊のような男なんだよ。生まれてきた子にも、私のような賢い人間になってもらいたいものだね」

また始まったと、一同はそれぞれに渋い顔をする。

男爵のある事ない事を言う武勇伝は、それこそ長くてしつこい。

また、同じことばかり言うので、みんな嫌がっているが、怒らせればまた面倒なことになるので、指摘する者はいない。

「ええ、おじ様。僕はこの子が、おじ様のようになればいいと願っていますよ」

このたび生まれた子の父親が、男爵にワインを注ぐ。

早めに酔い潰してしまわなければ、逆に暴れることもあるというのは、親戚一同がわかっていることだ。

「ああ、実にうまいワインだ。これはどこのワインだね？　いや、私が当てよう。私はね、ソムリエにだってなれるくらいのワイン通だからね」

上機嫌な男爵に、一同は苦笑する。

「では、どうぞ。今日はこの日のために用意した、特別なワインですからね」

「そうだろう、そうだろう。でも、おまえみたいな若造にワインの味がわかるかね。これは高そうに見えて、それほどまでではない。

そうだろう？」
「ええ、まあ」
「そうだな……これはフランス産と見せかけて、チリ！　チリのワインだ。一本一万円くらいかな」
「おお、正解だ！　さすが男爵です」
一同は拍手したので安心したのか、男爵はそのまま眠ってしまった。
「おい、君。男爵は本当に正解したのかね？」
その言葉に、このたび生まれた子供の父親が苦笑した。
「まさか。これはフランス産のロマネコンティ。一本五十万ほどですよ。この子のために用意した、最高の酒です」
「ハッハッハ。またも男爵の失態ぶりが見えてしまったな」
「このワインを湯水のように飲まれてはたまりません。みなさんは、充分に楽しんでくださいね」
その一件で、男爵は親戚の誰からも信頼されなくなり、失脚した。
もっとも、ずいぶん前から同じようなことが積み重ねられていたからでもある。

１２４　冷めた瞳

なんで生きなくちゃいけないのかな。こんなに辛い世の中なのに。なんで生きなくちゃいけないのか、ちゃんと説明出来る人なんて、いる？

私はこのゴミのような東京で、ただ今を生きてる。死を選ぶこともせず、かといって生きる希望も何もない。ただ、行き当たりばったりの人生――。

生活のために、遊びのために、声をかけられればついていくし、自分から声をかけることもある。それが法律ってやつで禁止されてるとしても、売るモンが身体しかないなら、売るっきゃなくない？

私の友達は、リストカットを繰り返しては、親の気を引こうとしたり、自分を痛めつけることで安心してる。いろいろな生き方があるのだと、私は知っている。

ふと、なんでこんな自分になったのか考えてみることもある。でも、笑わなくなったのはいつからだろう。子供の頃にはもう、物事に一喜一憂することなんかしなかった。

私の親は、こんな私を諦めてる。何を言ってもきかないし、だいいち帰ってないからね。私はいらない子なんだって思ったら、逆に楽になったよ。だってもう、お母さんが私のために頭を悩ませることはないんでしょ。

希望なんか見ない。明日のことなんか考えない。きっと私はのたれ死にして、近い将来この世から消えるんだと思ってるから。

だからせめて、今日だけは好き勝手やらせて……？

１２５　雨の少女

雨の日の教室は、なんだか空気がこもっていて、みんなの憂鬱が固まってる。

「あーもう、なんだよ。雨だからグラウンドも使えないじゃん」

「じめじめしてるし。なんか臭いし」

みんな、雨が嫌いなんだ……。

私は窓側の席から、頬杖をついて、外を眺めてる。

雨は好き。じめじめするのは嫌いだけど、恵みの雨って言うじゃない？　雨は生命を育んでる。

服が濡れるのは嫌だけど、本当は傘だって差したくない。気持ちがいいじゃない。

私は少し微笑みながら、その降りしきる雨をずっと眺めていた。

雨は次第に強くなり、雷さえも鳴り始める。

でも午後には次第に弱まって、水たまりが朝と違う形を見せていた。

「バイバイ、またねー」

私はそう言って、教室から出て行った。

ちょうどいいくらいの雨。お気に入りの傘。お気に入りのレインブーツ。私は昔の映画のように、傘をくるくると回した。

しずくが、水たまりが、キラキラ光ってる。

誰がなんと言ったって、私は雨が好き。

126　十年戦記

私はラーテルー国の勇者で、名をラダンといいます。国一番の強い男と称されてきました。

十年前に、隣国であるハルバン王国の王がクーデターにより処刑されたところから、戦争が始まりました。王と仲のよかった我が国の総帥を失脚し、この国までもを奪おうと、隣国が乗り込んで来たのです。

「ラダン様！　この先に何千……いや、何万ものハルバン兵士が待ち構えています！」

その報告に、私は目を光らせた。

もともと我が国は、ハルバン王国よりも国土が狭く、国民も少ない。それでも十年もの間侵略されなかったのは、我が国の地形が山谷で、思うように身動きが取れなかったからに他ならない。

前線であるこの部隊は、押しに押されて我が国都市部まで到達しようとしている。残り数百兵しかおらず、弾も底をつき、もうみんな士気も下がっている。

これ以上の戦いは、無意味だった。

「みんな。これより先は都市部で、おまえたちの家族もいることだろう。数万対数百……最後まで諦めなければ形勢逆転出来るということも、もう言えまい。長い戦いを、今こそ終えよう」

私の言葉に、ほっとした顔を見せた者、まだやれると息巻いている者、さまざまだった。

私はこう続けた。

「これ以上、無意味な血を流してはいけない。これからは国ではなく、自分の家族や自分の村を守りなさい。略奪や無意味な争いがないように、私は交渉しに行く」

そう言って、私は立ち上がった。

私は隊長であれど一兵士で、国交の交渉をする権限は与えられていない。それでも、きちんと話し合いをしていたかった。

「総帥や大臣に、交渉の準備をと伝えてくれ。数日経っても私が帰らなかったら、おまえたちは家に帰りなさい。もう戦いは終わりだ」

もう一度私はそう言って、馬に跨り、数キロ先にある敵陣へと向かっていった。

敵から見える丘の上で、私は銃や剣を捨て、両手を上げる。

そのうち、数人の敵兵がやって来た。

「なんの真似だ。一人か？」

敵兵が言った。私は手を上げたまま頷く。

「私はラーテルー国のラダン。あなた方の指揮官と交渉がしたい」

「ラダンの名なら知ってるぞ。ラーテルー一番の勇者らしいな。馬から降りろ」

そう言われ、私は馬から降りる。

その時、敵兵が私の腹を蹴り上げた。

「俺の弟は、あんたに殺されたんだ！」

私は険しい顔をしながらも、何度も続くリンチに耐える。

「勝てる戦争を望んでいるわけではない……だが、負ければ集団虐殺か。我々は、自分から戦いを望んだりはしない。国が侵略され、我が国の人間が殺されるなら、私たちは戦う！　あなた方の指揮官と話をさせてくれ！」

その時、数人いた男たちの中で、ずっと顔を隠し傍観していた男が前へ出た。

「俺がハルバン王国の指揮官、テジオンだ」

そう名乗り、顔を隠していた布を取った男に、私はお辞儀をする。

その顔は、何度も見ている顔だ。

「戦いの終止符を打ちたいというわけか。だがあいにく、私は交渉の権限を持っていない」

テジオンがそう言った。

「それは私とて同じことだ。あなたで駄目なら、新しい国王を呼んでもらいたい。こちらも、総帥を呼んでいるところです」
「勝手なおまえの判断で、戦争を終わらせることなど出来ないだろう。ではなぜ、もっと早くに言い出さなかった？　十年だぞ、この戦争は」
「……無意味な戦いとは思わない。負けたから死んだ人間が無駄死にしたとも思えない。私は、さっきまでの過去は今供養している。私にあるのは、未来だけだ」
　そう言った私に、テジオンは皮肉に笑う。
「変わった人間だな。ではもしおまえに国交交渉の権限があるとしたら、何を望む？」
「……平和を。私にも家族がいる。私の部下たちも、家族を守るために戦ってきた。あなた方は違うだろう」
「まあ、我々の目的は、そちらの国を手に入れることだ。押している限り、家族は無事だしな」
　根本的な違いに、私は息を吐き、テジオンを見つめた。
「私に国交交渉の権限があるとしたら、我が国はハルバン王国の属国になっても、今は仕方がない。だが、人々に危害を加えるのだけはやめてくれ。略奪、強姦、戦争にはつきものだ。だが今、戦争を終結させたら、それは罪になる。あなた方の属国になるなら尚更に、同じ国民にそんな仕打ちは出来ないはずだ」
　それを聞いて、テジオンは大声で笑った。
「ハッハッハッハ。おまえは国を売るつもりか？　いや、わかっている。それで最小限の犠牲で済むと思っている。だが、我々も慈善家じゃないんだ。手に入れたものはそれなりに見せつけておかねば」
　交渉決裂の予感に、私は顔を曇らせる。
「私の命で済むものなら引き受けるが……家族を売ることは出来ない。国民全員が死ぬのを覚悟で、もう一度戦えというのか。略奪や強姦が行われるよりも、死んだほうが潔いというのか。そんなもの、幸せでもなんでもない！」

そう言って嘆く私に、テジオンは手を差し伸べる。
「黙っていて悪かったが、俺が新国王だ。前の国王は独裁政治。俺は仲間を集めて、腐りきった国を立て直そうと考えた。おまえの国に侵略したのは悪かったが、欲しいのはおまえの言っている金めのものでも女でもない。おまえの国の、豊かな資源だ。綺麗な水、豊かな森、石炭、織物すべてだ。だが、それを拒否し、我が国の交渉人を殺したのは、おまえの国の総帥だぞ？」
私は目を見開いた。
「では総帥があなたの民を殺し、交渉を断ったと？」
「我々も無理難題は言わない。全部とも言っていないが、我が国は水不足やエネルギー不足で国民が苦しめられている。おまえの国の豊富な資源を、分けて欲しいと願っているだけだ。だが、死体で帰ってきた交渉人を見て、戦争が始まった。これ以上、略奪や強姦などしない。約束する」
私は、差し伸べられたテジオンの手を取る。
こうして、国のトップによる最低な対応のおかげで始まった戦争はようやく終わりを迎え、新しい平和の時代が始まった――。

127　Ｄｅａｒ．　神様

ねえ、神様。
あなたが本当にいるというのなら、私の願いをひとつだけ叶えてください。

「彼と出会う前まで、時間を戻してください」

時が戻ったら、そしたら私は、彼と出会う日は家にいて、誰の電話も取りません。

あの日、私が彼と出会ってしまったから、彼の世界は壊れだした。
彼には彼女がいて、それなのに私が彼を好きになった。

奇跡的に、彼も私を好きになってくれた。

幸せ――でも、誰かの幸せを壊して手に入れた幸せなんて、長くは続かないのかもしれない。

私たちはささやかな幸せを望んだけれど、あなたはもう、ここにはいない。

あの日、私の誕生日のあの日――。

あなたは私を驚かせようとして、普段のあなたからは想像も出来ないほどの行動を……。

私の名前入りのバースデイケーキ。
私がずっと欲しがっていたジュエリー。
そして、私が大好きな花の束。

あなたはそれを両手に抱えて、私の待つ家へとやってきた。

幸せを奪われた人の、刃を腹部に刺して――。

１２７　Ｄｅａｒ．　神様（後書き）

切ない系にするつもりが、ちょっとホラー調になってしまいました……。

128　ゆきめがね

ひろちゃんは、お正月だけ会える親戚の子。
私は大晦日になると、家族で青森にあるおばあちゃんの家へ行く。
そこで、年に一度会えるひろちゃんと、毎日のように遊んでいた。

「ひろちゃん、なにしてるの？」
私は外でしゃがみこんでいるひろちゃんに、そう尋ねる。
「おいで、おいで」
ひろちゃんにそう呼ばれ、私は寒い庭へと駆け降りる。
「寒い……」
「見てごらん」
寒がっている私にお構いなしに、ひろちゃんはそうやって指差す。
ひろちゃんの片手には、虫眼鏡がある。
「虫眼鏡？」
「これで雪を見てごらん」
私は意味がわからないながらも、ひろちゃんがあんまり楽しそうにそう言うので、虫眼鏡を覗いた。
真っ白な雪は太陽に照らされ、キラキラと輝いている。その中で、拡大された雪の結晶が飛び込んできた。
「わあ！」
思わず歓喜の声を漏らした私に、ひろちゃんは今度は手に雪を乗せて、虫眼鏡で見る。また違った結晶が見えた。
「都会じゃ見られないでしょ。これを見せたかったんだ」
ひろちゃんはそう言って、私に笑いかける。
私たちは時間を忘れ、その美しい形に魅入っていた。

翌日、案の定、私は風邪で倒れたが、「また来年も結晶見ようね」と、ひろちゃんに約束をして、おばあちゃんの家を後にした。

以来、その観察は毎年行われている。もちろん、完全な防寒服を着て。

都会の中でふと何か大事なものを忘れそうになった時、私はあの雪国を思い出す。

恐いくらい綺麗な雪の結晶が、今年も私を待っている。

129　春がきた

おひさま　ぽかぽか
春がきたよ

かぜさん　そよそよ
春がきたよ

たんぽぽ　ゆらゆら
春がきたよ

春は今年もやってきた
今日もどこかで、春のおしらせ

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

１３０　夏がきた

太陽　まぶしい
夏がきたよ

氷が　うれしい
夏がきたよ

水辺で　たのしい
夏がきたよ

夏は今年もやってきた
今日もどこかで、夏のしらべ

ここから下は、本文200文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

１３１　秋がきた

夕陽が　すてきね
秋がきたよ

落ち葉が　きれいね
秋がきたよ

食欲　そそるね
秋がきたよ

秋は今年もやってきた
今日もどこかで、秋の面影

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

132　冬がきた

粉雪　しんしん
冬がきたよ

動物　すやすや
冬がきたよ

新年　わいわい
冬がきたよ

冬は今年もやってきた
今日もどこかで、冬の足音

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

133　私の良心

私は、その犯人を知っていた。教授を殺した犯人を――。

私たち大学院生は、教授に付いて日々学んでいる。

教授に嫌われれば将来はないし、なんとかして推薦をもらい、論文が認められなければ道は閉ざされる。

地質学を専攻した私は、本田教授の下で日々勉強しているが、本田教授は無類の女好き。セクハラはしょっちゅうだったし、口外すれば論文は読みもしないとまで言われていた。

だけど私は教授を尊敬していたし、セクハラだって軽いもの。そう考えるようにしていた。

「そんなの駄目だよ」

そう言ったのは、私の彼である。

彼もまた、専攻は違うが同じ大学院生として学んでいる同級生だ。

「でも、問題は起こしたくないわ。教授のことは尊敬してるの。教授がいなくなったら、この学校で学ぶことすら出来なくなるわ」

「教授は簡単には失脚しないんじゃないかな。だってその道の権威だし、学校だって君が言うことより教授が言うことのほうを信じると思う。君に勝ち目はないよ。そうだなあ……教授が死なない限りね」

「……それこそ無理だわ。教授はもうすぐある孫娘の誕生日のことで頭がいっぱいなんですって。死ぬどころか元気があまっているくらい」

私は彼の体に身を預けながら、その横顔を見上げた。顔の横にあるシャツからは彼のいい匂いがして、特殊なボタンが目を引く。お洒落な彼が大好きだ、と再認識して、私は彼と抱き合った。

私が彼とそんな会話を交わした一週間後、事件は起きた。

その日、私はとある学会で受付の手伝いを頼まれ、他県にいたが、帰りの電車で教授の奥様からメールを頂いた。

“まだ帰ってないんだけれども、あなた一緒にいるの？”

教授の奥様は、教授の行動を逐一監視するような節がある。それは教授の女好きのせいもあるだろうが、この手の連絡は何度もあった。

“今日は私一人、学会で他県にいて、今から帰るところです。教授のことはわかりませんが、研究室で論文を読んでいるかもしれませんね”

私はそう返した。

それというのも昨日、教授が論文を読まなければと言っていたのを思い出したからである。

でも、奥様からのメールは終わらなかった。こんな時間になっても連絡をよこさないのは、何かあったのかもしれない。研究室へ行って様子を見に行ってもらいたいという言葉に、私は溜息をついた。

「なんでこんな時間に……」

すでに夜中に近いが、以前、教授は脳梗塞で倒れたこともあり、確かに心配だと思い直して、私は研究室へ向かった。

研究室に入って一瞬、私は何が起こったのかわからなくなった。

教授が血だらけになり、机の近くにうつ伏せで倒れている。

「きょ、教授……？」

私は悲鳴一つ上げることすら出来ず、その光景を見つめていた。

それからというもの、他の研究室に残っている先生に助けを求め、警察を呼んだりと大変だった。

当然、私は第一発見者として迎え撃つ形になるが、放心状態で答えられるだろうか。

他の教授たちがてんやわんやしている中で、私は事件現場となった部屋をただ見つめていた。教授の机には、私が書いた論文が置かれ、それにも血がついている。

私はがっくりと肩を落とし、机の下に目をやった。すると、見なれたボタンが落ちている。

（どこで見たんだっけ……）

心の中でそう言いながら、思い出した。

（これは、彼氏のシャツのボタンだ……！）

というのも、彼氏がこの間着ていて、綺麗で特殊なボタンだったからだ。

やがて、警察がやってきた。

「第一発見者は、君？」

そう聞かれ、私はとっさに持っていたボタンを握って隠す。

「は、はい」

「少し事情を聞かせてくれるかな。ここじゃなんだから、別のところで」

「はい……」

移動の間に、私は証拠となるであろうボタンをポケットに入れた。

彼を助けるか、教授の無念を晴らすのか、私の良心がズクズクと痛む。

私だけが、その犯人を知っている。教授を殺した犯人を――。

134　魔法の座布団

「あれ。新しい座布団買ったんだ」
美紀は帰るなり、居間にあった座布団を見てそう言った。
というのも、今まで使っていたものはボロボロで、中綿すら見えている状態だ。
「お母さん、また繕って直すんだと思ってた。うん、ポップでいいじゃん」
美紀はランドセルを下ろすと、その座布団に座った。今までよりふかふかで座り心地もいい。「でも、なんで一つしかないんだろう？　あ、お母さん専用にする気……？」
誰もいない居間で、美紀は想像力を働かせる。
だが、四人家族で新しい座布団はこの一つしかない。今までの座布団は、穴が開いたまま隅へと重ねられていた。
その時、家のドアが開いた音がした。たぶん、お母さんだろう。
美紀はあぐらをかいていた足を直し、座布団の上に正座する。
すると突然、座布団がゆっくりと走り出した。
「え、えっ、ええ？！」
美紀はとっさに座布団の隅を掴む。
すると、座布団はみるみるスピードを上げ、人が走る速さよりももっと早く、体が千切れるくらいまで高速で走り出した。
「キャー！」
怖いながらも、美紀はそっと目を開ける。
すると、そこはさっきまでいた居間ではなく、まるで流れ星が無数にあるような、光が流れるトンネルのような場所となっていた。
「な、な、な？」
意味がわからないが、この座布団だけは離してはいけないと思い、すでにふりおとされそうな体で、座布団を抱きしめる。

「美紀！　美紀ってば！　美紀！」
どこからか、何度もそう呼ばれ、美紀は頑なに瞑った目を開けた。
するとそこは、もとの居間である。目の前には、お母さんがいる。
「お母さん！」
「何してるの。そんなに座布団握りしめちゃって……見本なんだから貸して」
「み、見本？」
お母さんはそう言って、私から座布団を取り上げる。
「そう。座布団カバーを作ってみたんだけど、途中で糸がなくなっちゃって、今買いに行ってきたの」
「座布団カバー？　じゃあこれ、新しい座布団じゃないの？」
「そうよ。ちょっと綿は入れたけどね。まだまだ使えるから」
「なんだ……」
納得しながら、美紀はお母さんに今の出来事を話そうと口を開いた。
だが、お母さんはすでにミシンを動かしていて、話せる雰囲気ではない。
「夢だったのかな……」
「うん？　なにか言った？」
美紀の言葉に、お母さんが尋ねる。
「う、ううん。なんでもない……」
美紀はそう言うと、立ち上がった。
「あ、美紀。これ、美紀のじゃないの？」
すると、美紀が座っていた近くに転がっていたものを取って、お母さんが差し出した。
「え？」
見てみると、そこには石ころがある。
だが一瞬、眩い光が放たれ、だんだんと消えていった。
「なあに？　この石は」
お母さんには、その光が見えなかったかのような反応である。

美紀は今の出来事を秘密にしたくなって、その石を受け取り、居間を出ていった。

「なんでもなーい」

きっとこれは、流れ星のかけら。今、体験したことは夢ではない。

美紀はそう思って、その石を大事にしまっておくことにした。

日常に起こった、美紀の不思議な話。

１３５　雪のたより

きのう、ふりつもった雪は、けふのうちに溶けてしまうだらう。
雪の結晶なるそのすべて、ひとつひとつにいのちといふものがあるのならば、
なんとはかなく、うつしいかがやきであることを、あなたも知ることができるだらうか。

わたくしがそのやうなことを申し上げるのは、
きのう、この目の前にある雪がまだ空からふってきたばかりのころ、
極楽浄土のせかいへと旅立って逝った、
わたくしの母が教えてくれたのだと思ひます。
いつかわたくしも、母のやうなやすらかな顔で、
またこの雪が雪解け水とかわるような、
うつくしいいのちをまっとうし、
あなたのかがやきへとつなげていけたら、
どれだけ倖せなことだらうかとかんがえてみた。

けふの夜も雪はふって、誰かさんのいのちのかがやきをおしえてくれるだらうか。

それでもきっとふりつもった雪は、明日のうちに溶けてしまうだらう。

136　どっちが……

美佳ちゃんには両親がいる。実加ちゃんにはお母さんしかいない。
美佳ちゃんの両親はいつも喧嘩ばかり。実加ちゃんのお母さんは働き者で明るく優しい。

美佳ちゃんには兄弟がいる。実加ちゃんは一人っ子。
美佳ちゃんは兄弟に好きな物を取られる。実加ちゃんは一人で寂しいけれど好きな物をひとり占め。

美佳ちゃんには家庭教師がいる。実加ちゃんには塾へ通うお金もない。
美佳ちゃんは成績を下げられない。実加ちゃんは自力で成績を上げている。

どっちが幸せ？　どっちも幸せ。
どっちが不幸？　どっちも不幸。

137　「さようなら」という言葉

「さよなら」という言葉は、あまり使ったことがない。

友達ならば、バイバイ。
仲間ならば、またね。
年上ならば、お先に失礼します。
年下ならば、お疲れさま。

そんなあまり使い慣れない言葉を言う時がきた。

「さようなら」

私はそう言って、目の前の彼に背を向けた。
裏切られ、許せない思いでいっぱいになり、私はその使い慣れない言葉を、自然と口にしていたのだが、途端にズシリと胸にきた。

「……さよなら」

彼の声が、私の背中に響いた。

最後通告というか、なんというか……言うのもためらえば、言われるのもきつい。
でもそれは、今まで自然消滅という形でしか人付き合いを終わらせられなかった私の、初めての別れというものだった。

「さよなら……」

私はもう一度、今度はそっとそう言って、街を出ていく。

今度はなんだか、清々しい思いがした。
その言葉が、どれだけ美しく、優しいものだとわかった気がする。

人は何度も、出会いと別れを繰り返す。
“さよなら”の次は、きっと――。

138　ガラスの靴をちょうだい

ソフィアは貧しい町娘だが、ただ繰り返されるだけの毎日に嫌気が差し、幸せな結婚を夢見ている。

「まーたソフィアが上の空よ。ほら、ちゃんと仕事して！」

川辺で洗濯をしながら、少女たちがそう言った。

その中にいたソフィアもまた、朝から晩まで洗濯の仕事をしている。

「あ、ごめんなさい」

「まったく。やることやらないで夢見てたってしょうがないでしょ」

「そんな言い方ないじゃない……」

ソフィアは思わず口を曲げて、洗濯仕事に打ち込む。

「だってそうでしょ？　ソフィアは王子様を待ってるんだもの。だいたい、この国に王子様なんていないし、あんたの王子様はせいぜい庭師の息子か鍛冶屋くらいよ」

仲間がそうやってからかうのは、ソフィアが日頃から王子様を待ち焦がれていると言っているからだ。

「みんな夢がないわね。諦めなければ、そのうちきっと王子様がやってくるんだから」

夢見がちなソフィアに、仲間たちも呆れ顔だ。

「無理ったら無理よ。夢なんか見たって空しいだけじゃない」

「……私にだって誰にだって、魔法使いが現れれば舞踏会に行けるわ。いないのはわかってる。でも、退屈な毎日に夢見たっていいじゃない！　もしもガラスの靴があれば、素敵な人が見つけてくれるかもって、思うだけならいいじゃない……！」

そう言って、ソフィアは黙々と洗濯を続けた。

小さい頃、ソフィアはおとぎ話に夢中だった。だが大人になるにつれ、現実を知る。

毎日を生きることだけで精一杯で、疲れて眠るだけの夜を送る。
そんな中でおとぎ話のような夢を見るのは、ソフィアの気晴らしだった。
「べつに、本当に夢見てるわけじゃ……」
その時、ソフィアの部屋の窓がノックされた。
ここは二人の相部屋だが、相方はとっくに寝てしまっている。
「風……？」
ふと窓を開けると、誰もいない。だが代わりに、窓枠に手の平ほどのガラスの靴が片方置かれており、“ソフィアへ”というメモが残されている。
「ガラスの靴……？」
ソフィアは慌てて、外へと飛び出した。だが、そこには誰もいない。
首を傾げながら、ソフィアは眠りについた。

朝になっても、夢ではなくガラスの靴はそこにあった。
「不思議……」
ソフィアは、また自分の中で強くなったであろう夢物語を、仲間たちに話す。
「ガラスの靴がおいてあったの！　すごいでしょう？」
仲間たちも驚いていたが、そのうちの一人が静かに口を開いた。
「あ、思い出したわ。その靴、見たことあると思ったら、メインストリートで売ってたわよ」
「ええ！　どこで？」
それを聞いて、ソフィアは落胆する。
「うん。確かガラス屋よ。いつもショーウィンドウに飾られているの」
「じゃあこれは、その店の……」
落胆しながらも、ソフィアはその夜、仕事を終えるや否や、仲間の言っていたガラス店へと足を運ぶ。

確かにショーウィンドウには、同じデザインのガラスの靴がおいてある。

「お嬢さん。探しているのは、これですか？」

その言葉に、ソフィアが振り向くと、そこには知らない紳士が立っている。そしてその手には、ソフィアの持つガラスの靴のもう片方が握られていた。

「あ、あなたが……？」

そう言いながら、ソフィアは紳士を見つめる。

父親くらいの年の紳士は、よくよくみると仕事場にときどき洗濯物を持ってくる、常連の客だということがわかった。

「いいや。私は君の王子様にはなれない。だって年が違い過ぎるし、私は結婚しているからね。でも、君の幸せを運ぶ青い鳥にはなれるかもしれないよ」

紳士がそう言うと、後ろからソフィアと同じ年頃の少年が顔を出した。

「お父様。この人は？」

その口調から、少年が紳士の息子だということがわかる。

紳士は優しく微笑むと、少年の手にガラスの靴を持たせる。

「彼女はソフィア。いつも洗濯をしてくれている子だよ。少し時間があるから、おまえ、ソフィアに町を案内しておやり。彼女は仕事が忙しくて、きっと町を回ったこともないだろう」

紳士の言葉に、少年は頷いて、ソフィアが来るよう手を伸ばす。

驚いているソフィアの肩を、紳士は優しく叩いた。

「昨日、洗濯を頼みに行ったら、君がみんなにからかわれていたのが見えて、放っておけなくなったんだ。王子様はいなくても、チャンスはいくらでも転がっている。今の私に出来ることは、これが精一杯。私は魔法使いにはなれるかね？」

悪戯な瞳で笑う紳士に、ソフィアは笑った。

「はい。素敵な魔法をありがとうございます」

「魔法が解けないよう祈るよ。君は今、お姫様なんだから」

そんな言葉を受け、ソフィアは少年と手を繋いだ。

139　いっそ壊したい

「おまえのこと、壊してやりたい……」
僕は自分でも恐ろしいと思う目をして、綾にそう言った。
綾の体は僕に封じられ、身動き一つ出来ないでベッドの上にいる。
「やめて、お兄ちゃん。私たち、兄妹じゃない」
綾はそう言って、涙を溜めてる。
いつもなら、綾が泣けばそれで終わり。でも、今日の僕は違った。
「兄妹？　血がつながってなくても？」
そう、僕たちは連れ子同士。五年前、両親が再婚すると同時に兄妹になった、赤の他人だ。
だからといって、こんなことをして許されるはずがないのはわかっているけれど、最近、綾を狙っている男子がいるのを知り、僕はもう限界だった。
「どうしてそんなこと言うの……？　私、こんなお兄ちゃん嫌だよ」
「だったら僕を殺すか、僕の前から消えろよ！　なんだよ……迷惑なんだよ。突然うちに入って来て、妹とか言われたって……僕にはおまえが、女にしか見えないんだよ！」
妹相手に滅茶苦茶を言っていることはわかってた。でももう、どうしようもなかったんだ。
綾は眉を顰めると、やがて意を決したように表情を変え、凛とした顔で僕を真っ直ぐに見つめた。
「わかった、いいよ……お兄ちゃんがそれで満足するなら……」
その目に光はなく、僕は重大なことをしてしまったのだと、改めて認識させられた。
だが、今更なんと言えばいいのだろうか。
僕は綾から離れると、背を向けた。
「馬鹿にするな！　もういい……悪かった」
なんとか冷静になろうと何度も深呼吸をして、僕はやっとそう言

い、家を飛び出した。

いっそ壊してやりたい。この家族というしがらみも、兄妹という関係も、綾そのものも、なにもかも……だけど僕は、ついにそれを行動に移しながらも、思い描いた最後を見ることは出来なかった。

これから、綾にどんな顔をして会えばいい？

「お兄ちゃん……！」

そんな僕を、綾が迎えに来たので、僕は目を見開く。

「な、なんで……？」

「だってお兄ちゃん、もう帰って来ないって思ったから……」

そう言う綾は、さっき僕に襲われそうになったことも忘れているかのように、僕に心配の顔を見せている。

「……馬鹿じゃねえの」

僕はそう言い、綾に背を向けた。

「お兄ちゃん。何処行くの？」

「……帰るんだろ？」

振り向かなくても、綾のほっとする顔が浮かんだ。

いっそ壊してやりたい。今もそう思うけど、僕はこの健気な妹に対して、もう少し我慢を強いられることになりそうだ。

１４０　いつまでもいっしょ。

主人の誠一は、いつも優しく私に語りかけてくれます。
私もそんな主人と一緒にいるだけで幸せなのです。

家にいる時はもちろん、散歩も一緒に出かけるので、ご近所の人からは仲が良いとお墨付きをもらっていますが、なぜか主人は苦笑して、私を見つめるのです。

「おまえが人間だったらいいのに、と思うことがあるよ。なあ、タマ」

私は猫。どんなに夢を見ても、主人と結ばれることはないのです。けれども私たちは、どんな夫婦よりも負けない愛情で結ばれているのは確かでしょう。

「おいで、タマ」

今日も主人は私を傍らに抱いて、大好きな焼き魚を作ってくれることでしょう。

１４１　野の花つんでるあのこはどこのこ？　（ことばあそび）

ののはなのはなは　ののはなのはら
のはらはらはら　はらっぱのはら
はらへりへっては　のはらにはらばい
ばいばいあのこが　ふるふるてふり
ふらりふらふら　ふりふらふわり
ふわりふわふわ　おそらにひらり
ひらりひらひら　ひろいなのはら
のはらのろのろ　のらりいもむし
いもむしそろそろ　はっぱにとまれ
とまりとまって　まってたあのこ
あのこどこのこ　ここのここのこ
このこのこのこ　ののはなのはな
はなののののはな　つんではつんで
つんでつむては　はなののののはな

ののはなのはなは　ののはなりて

のはらはらはら　はらっぱのはら

１４２　鈴木一郎と申します

私の名前は、鈴木一郎と申します。
こんな名前のおかげで、私の人生は常に波乱を含んでまいりました。

この平凡すぎる名前は、たとえばお役所の記入例で取り上げられていたり、テレビなどでギャグとして取り上げられることすらあります。
野球選手など著名な方も同姓同名がいらっしゃり、さぞいい思いをしていると思われがちですが、私自身はそのような特技もございませんし、ただただ根暗な男でございますから、この名前と一生付き合っていくというのは、少々気が重い感じさえするのです。

また、子供の頃はまだよかったのですが、大人になってからの自己紹介では、初対面の相手が「本名ですか？」などと聞き返すことすらあるくらいです。

そんな私にも、唯一気のおける友人が出来ました。

「田中太郎でございます」

田中さんは、私と同じ苦労を背負い、私の気持ちが唯一わかってくださる方です。
そして後ろ向きだった私に、逆転の発想を教えてくれました。

今日も私は、営業先で名刺を差し出します。

「鈴木一郎と申します。名前だけでも覚えてください」

「ははは。鈴木君か。そりゃあもうすぐ覚えたよ。では、お話を伺いましょうか」

おかげさまで、営業の成績はトップクラスですが、これでもいろいろな気苦労があるのですよ。

でもその話は、また後ほど――。

１４２　鈴木一郎と申します（後書き）

全国の鈴木一郎さん、田中太郎さん、すみません……。

１４３　ある文人の話

また町が騒がしい。

私は筆を走らせるのをやめて、窓から顔を出した。

百姓たちが手に鍬や鎌を持って、次々と溢れているのが見える。

「私も闘わなければ」

お上が年貢をたっぷり取り上げるので、百姓たちは村人総出で一揆を起こそうとしている。

もちろん、私の家は旧家で金持ちであるが、同じく一揆に加わっていることだろう。

私は――といえば、旧家のぼっちゃん。しかも三男坊となれば、期待もかけられなければ可愛がられてもいない。いや、親はとっくに私を見離したと思っている。

「喜多村家の三男坊はきちがいで、まったく表に出ようとしないらしい。しかも無名の作家と名乗っているらしく、毎日きちがいのような随筆を書いているようだ」

そんな噂は、私の耳にも届いている。ああ、皆が言うなら私はきちがいなのだろう。

そう受け入れても、私は誰からも期待をかけられないし、私自身も現状維持で構わないと思っている。

きっと名が売れれば私の見方も変わるのだろうが、それはそれでしゃくではないか、と思うことがある。

愚かな人間に見た目や持っている肩書で、私の存在を勝手に認めないでいただきたい、と思う私は、やっぱりきちがいなのだろうな。

「喜多村先生！　喜多村先生！」

そんな時、私のいる離れの扉越しに、そんな声が響いた。

母屋ではなく離れに直接来るということは、私の客しかいないだろう。しかし、先生と呼ばれる筋合いはまったくない。

「はい……」
私は重い腰を上げて、四畳半の書斎から顔を覗かせる。
すると、そこには私と同じ年くらいの青年がいた。
「喜多村先生ですね？　これを書いた！」
青年の手には、私が先日、出版社へ投稿した作品が握られているではないか。
私は怪訝な顔で青年を見つめる。
「そうだが……あなたは？」
「ああ、失礼しました。私は学生の轟（とどろき）と申します。先生が投稿なされた出版社で仕事の手伝いをしています。この作品、大変感銘を受けまして、直接参った次第です！」
轟と名乗った彼の言葉が、私には信じられなかった。
私は頭をぼりぼりとかき、扉を大きく開く。
「まあ、ここじゃあなんですから、中へお入りください」
そう言うと、轟はお邪魔しますと言って入ってきた。
「では、お話を伺いましょうか」
私の言葉に、轟は大きく頷いた。
「この作品、とても素晴らしいと思います。風刺がきいている。そしてわかりやすい。この作品は間違いなく、闘いの物語です！」
それはそうだ、と思った。私は百姓一揆には参加するつもりはない（性に合わないから出来ないのだ）が、同じように誰かに発信し、私なりの方法で闘おうと思ってきたからである。
私はその旨、轟に話すと、彼はまた大きく頷いた。
「先生のお気持ちはよくわかりました。僕は百姓一揆にも参加しますが、文芸も好きで自分で物語を書いています。書く限りは闘いの発信もせねばと、物書きの使命であると思っているのです。出版社では、先生のお話は過激だと言われています。でも僕は、この作品を世界に広めたい！」
そこまで言ってくれる轟だが、話の内容で彼もまた過激派と呼ばれる学生なのだと察しがついた。

「あなたはアカか」
私の言葉に、轟は驚きながらも、やがて真っ直ぐに私を見据え、自信を持って頷いた。
「はい。アカが悪い人間だとは思いません。それを排除する人間もまた、過激派と呼ばれる人間なのですから。先生はこんな過激な作品を書いておられながら、アカではないと申されるのですか？」
逆に質問され、私は考えた。
「考えたこともない。私はただ、体を動かして訴えが出来ないかわりに、筆を走らせているだけだ。のうのうと生きているだけの三男坊では、生きていることに申し訳なく思えてね」
「僕も同じです。アカだシロだと言われるのは見た目で判断されていること。自分でどちらとは言わないし、人々の暮らしが良くなればこその行動ですから、百姓一揆と同じだと思っています。ではなぜ、百姓一揆はアカでなく、政治批判はアカなのでしょう」
轟の言葉に、私はすっかり聞き入ってしまい、やがて口を開く。
「アカ、というのは赤旗の象徴だね。フランス革命しかり、さまざまな国で民衆が立ち上がる時の象徴として使われている。彼らは政治犯ではないだろうに、なぜそうやって侮辱されるのだろうね？」
「それは……政治批判をすれば、国が成り立たないから？」
「それも正解。それからもうひとつ、赤羽根の語源説がある。赤羽根とは勢いのある水が溢れたりして危険なこと。誰が危険と恐れている？」
「……政治家、官僚、とにかく地位の高い人たちです」
私たちはすっかり教師と生徒のように、互いに質問をぶつけ合い、答える。
「地位の高い人たちに、貧しい人間の気持ちがわかると思うかね？貧しい人間もまた、一銭の価値でもゴミのようには思えないだろう。もともとわかりあえないのならば、歩み寄るしかない。あちらは政治をし、こちらはそれを受け入れている。その政治が苦しく間違ったものならば、我々には拒否して正す権利がある。人として生

きるために、闘わなければならないこともある。それは血を流すことではないと、私は思っている」

「ペンで闘える、ということですね？」

轟がそう言ったところで、私はゆっくりと立ち上がり、膝を何度か上げ下げをした。

「先生？」

「私もたまには表立って闘いたくなった。筆の力で闘うにしても、現場を見なければ。百姓一揆に参加してくるよ」

「ぼ、僕も行きます！」

「では、話しながら行こうか」

私たちはすっかり話し込んで、更には政治の話が哲学の話まで発展した。そして一揆に参加すると、汗をかいて訴えた。人間らしく生きる権利を求めて。

「私たちは、人間だ！」

１４４　ヤスクニデアヲウ

太平洋戦争真っ只中、俺は十九歳で特攻隊に志願した。自分のためでも家族のためでもなく、ただお国のために命を掛けることが当然だと思ったのだ。

そんな俺を誇らしげに、両親は送り出してくれた。俺が去った後、きっと母さんは泣くに違いないが、そんな涙など俺に見せるはずもない。俺もまた、悲しさはあったけれど、自分の誇りを高く掲げた。

「仁科。俺、いよいよ明日だ」

俺に向かってそう言ったのは、同じ年の江田である。同じ年といっても、江田はすでに所帯を持っているし、元は一流大学にいたエリートだ。

なんだってそんな人間が特攻に志願したのかと聞いたことがあるが、お国のために命を捧げるのは当たり前のことだと言って笑う。俺たちは同志だと、その時認識した。

「江田……」

「そんな顔をするな。お国のためだ。こんなちっぽけな命、アメリカーにくれてやる。そうだろ？」

江田は凛々しい顔で笑った。

特攻隊に入ってから、いろいろな人間を見てきた。みんなお国のためだと笑っていたが、飛びながら泣いているのを知っている。俺もまた、仲間の死に泣いた。

「ああ。俺もすぐに後を追う。靖国で会おう」

「先に待ってるよ」

次の日、江田は小さな飛行機でアメリカ艦隊に激突した。飛行機には、行きのガソリンと爆弾だけ。最初から帰ってくる予定はない。

三年後――。俺はまだ生きていた。といっても、いつのたれ死に

してもおかしくない。
江田が出撃した次の日、俺も出撃した。だが、空中で撃墜され、太平洋の海に投げ出された。流木に掴まり、何日も死線をさまよう中で漂着した俺は、一人生き残ったことを受け入れるまで、かなりの時間を費やした。
何度も死のうと思ったが死ねなかった。俺はただ弱い人間だ。そして生き恥を晒して、もう両親に会うことも出来ない。それでも、両親が心配で実家の周りを探ったりもした。
「仁科？　仁科じゃないのか？」
突然、そんな男の声が聞こえ、俺は誰かも確かめずに走り出した。誰に会うわけにもいかない。俺は死んだ人間なのだから……。
「待てよ、仁科！　俺だ、江田だよ！」
俺の腕を掴みながらそう言った相手は、確かに江田だった。
「江……田……？」
俺は信じられない思いで、目の前の江田を見つめる。
「ああ。おまえも生きていてくれたのか、仁科……」
懐かしげな目で俺を見つめる江田に、俺は口を曲げた。
「なに言ってんだ！　なにが生きていてくれたって……特攻に失敗して生き恥を晒してるんだぞ？　こんな恥晒し、家族にも誰にも顔向けなんか出来るもんか！」
「……戦争はもう終わったんだ。こんな混乱の中、みんな自分のことに精一杯だ。おまえが生き残ったことに陰口叩く人間がどれだけいると思う？　それより、ご両親に顔を見せてやれよ」
「……江田。おまえ、変わったな。お国のために出撃したのに、生きてるってのがどういうことなのかわからないのか？　靖国で待ってるみんなにだって、顔向け出来ない」
俺は悔しさでいっぱいになり、江田に背を向ける。
「俺だって思ったよ。ああ、生き残ってしまったって……でも、生き残ってよかったというのが本音だ。もちろん、国のために死ねなかったこと、特攻に失敗したことは汚点だろう。だけど、戦争は終

わったんだ。日本は負けたんだ。隊に戻ったらもう終戦。俺は重い足取りで家へ帰ったよ。でも、家族は泣いて喜んでくれた。妻も……今では子供も出来た。帰ってきたからこそ生まれた命だ」

「腑抜けが！　おまえを同志だと思ったことが恥ずかしい。もう会うこともないだろう」

「俺だって散々苦しんだ。でも生き残ったのは事実だ。自殺すれば満足か？　自殺したって靖国には行けないぞ。だったら今、俺を必要としてくれる家族のために、新しい日本を再建していくことが大切なんじゃないのか？」

江田の言葉を聞きながら、俺は走り去っていった。

同志が生きていたことに喜びを感じたが、俺とはまったく違う人生を送っている。あいつは現実を受け入れているが、俺はどうだ。家に帰って、家族は俺を受け入れてくれるというのだろうか。その前に、俺は自分自身が許せなかった。

「新しい日本を再建していくことが大切なんじゃないのか？」

江田の言葉が突き刺さる。この混乱の中で、俺のように死んだ人間に何が出来る。

「死んだ人間に……」

一度死んだからこそ、生きるべきだと言うのか……？

その夜、俺は夢を見た。特攻隊にいた仲間たちの夢だ。

「仁科。靖国で会おう」

俺はハッと目を覚まし、朝日を見つめる。

「ああ、会おう。靖国で会おう……」

その日、俺は家へと戻った。江田の言う通り、両親は俺の帰りに喜んでくれた。

俺はその日以来、がむしゃらに働く。江田のように新しい国再建までの力はないかもしれないが、それでも働くことしか出来なかった。

靖国神社には、毎年参拝している。ここへ来ると、仲間たちに会

える気がするのは不思議だ。

俺は臆病者だが、仲間たちが護ったこの国でこれからも生きていくのだろう。きっとあいつらはいいやつだから、こんな俺の事ですら許して見守ってくれているのかもしれない。

忘れない。逃げずに戦った仲間たちのことも、新しい国を再建するといった江田も、臆病者の俺自身のことも――。

１４５　おさななじみ

幼馴染みのショウちゃんは、隣の家に住んでる男の子。同じ年のため、幼稚園に行くのも、小学校へ行くのも、ずっと一緒だった。

「やーだ！」

ある日、私は涙目でショウちゃんの腕を掴んだ。そこは中学校の教室。みんな怪訝な顔でこっちを見てるけど、私はお構いなしに泣いた。

「うるせー。黙れよ、アキ！」

ショウちゃんは、そう言って私の頭を掴む。

「やだ！」

「あーもう、おまえ、中三にもなってなんなの？　だから俺がからかわれるんだろ。本当、迷惑」

「ショウちゃんは、私のこと嫌いなの？」

「ああ、嫌い。大っ嫌い。おまえがいるから、俺は散々縛られてきたんだぜ。少しは俺のことも考えろよ、馬鹿！」

そう言うショウちゃんは、本気で怒ってる。

私は涙を拭きながら、俯いた。

「ご、ごめん、なさい……」

しゃっくりに似た呼吸を整えながら、私はそう言った。

「……まあ、遠くの高校行くって、言っとかなかった俺も悪いけど……」

ショウちゃんは、優しくそう言った。

ショウちゃんが県外の高校を選ぶということを、私はさっき知った。それでショウちゃんのクラスまで押し掛けてきたというわけだが、ショウちゃんの決意は固いようだ。

「本当、ショウちゃんが悪いんだよ……」

ぼそっと言った私の言葉に、ショウちゃんが反応する。

「結局、俺かよ！　ってか、なんで俺がいちいちおまえに断らなき

ゃならないんだよ」
「ショウちゃん、大きくなったら私と結婚してくれるって言ったじゃない！」
公衆の面前でそう叫ぶ私の口を、ショウちゃんが手で覆った。でも、時すでに遅し。それを聞いていた男子たちが、指笛を拭いて囃し立てる。
「おーまーえーなー！　いつの話をしてんだよ。そんなガキの頃の約束で、俺の彼女面するわけ？」
「ひどい！　私だって、今まで付き合ってって言ってきた男の子、みんなお断りしてるもん。ショウちゃんが結婚してくれるって言ったから……」
「はあ？　そんな物好きな男がいるのか。まあ、おまえがどう泣き叫ぼうが、俺は高校決めたから」
ショウちゃんは、いつものように冷静な目で私を見据え、そう言った。そんなクールなところも好きだ。また、優しいところも。
「決めた！　私もその学校行く！　ショウちゃんと同じところに行く！」
私は意を決してそう言った。ショウちゃんは、クスリと笑う。
「言うと思った。まあ、好きにしろよ。男子校だけど」
そう言って、ショウちゃんは教室を出て行った。

「男子校……潜り込む？」
家に帰るなり、私はどう男子校に潜り込むかを考えた。
「バーカ、アキ。ない頭で悩んだってしょうがねえだろ」
何処からか、ショウちゃんの声がした。
ベランダに飛び出ると、隣の家のバルコニーから、ショウちゃんが顔を出している。
「ショウちゃん！」
「あんま……カッコ悪いことすんなよな。おまえのことでからかわれるの、慣れちゃいるけど限度っつーもんがあるから」

「……ごめん。でも、私は本気なんだよ？　本気でずっと、ショウちゃんのことが……」
「わーかってるよ。バカ」
そう言って、ショウちゃんは私に手を差し出す。
私は意味がわからないまま、同じように手を差し出した。
すると、ショウちゃんは私の手を取り、薬指に指輪をはめてきた。
「えっ、ええっ？」
目の前のショウちゃんは、いつになく顔を赤くさせている。
「……言わないとわかんないのかよ。俺だって、アキにはずっと隣にいてほしいし、アキが告られて断ったって聞いてホッとしてる……」
「なにそれ……言わないとわかんないよ！　私、バカだし……」
そう言った私に、ショウちゃんはいつになく優しい目を向けてくれている。
「本当、バカ。でもさ、俺だってアキと離れるの嫌なんだよ。でも、高校は前から決めてたんだ。部活のことで誘われてるし、俺の夢なんだ。卒業したら、結婚しよう。好きだよ、アキ」
私は、頭が真っ白になる思いでいた。
「ショウちゃん！　ショウちゃん！」
「これからは、バカなアキのために、ちゃんと好きだって言うから、今までの意地悪は許してよ」
そう言ったショウちゃんは、なんだか可愛い。
私たちは、何度も手を握り合い、そして初めてのキスをした。

146　心の声を聞かせて……

「たすけて……」
たった一言、言えなかった。

どうして殴られるのか――私が悪いの。
私が食べ物を零したから、私がおもちゃを散らかしたから、私が悪い子だから――。

「虐待。その意味がわかりますか？　お父さんやお母さん、家族に殴られたり、食べ物を与えてもらえなかったり、そんな人がいたら、こっそりでいいから、先生のところに言いに来て――」
小学校では、担任の先生がそんなことを言っていた。
虐待……うちの場合は、虐待じゃない。私が悪い子だから。それに、ママと離れるのは嫌。私が良い子にしたら、きっとママはわかってくれる。

でも――ママは私を褒めてなんかくれない。何をしても怒る。何をしても殴る。だってママにとっては、私の存在自体が許せないものだから……。

その日も、些細なことから私は殴られ、ベランダに放り出された。
「ママ！　ママ開けて！　寒いよ！」
さすがに春といえど夜は寒くて、私は震えながら窓を叩いた。その震えは、死への恐怖も入っていたと思う。
「うるさいわね！　そこでしばらく反省してなさい！」
ママはそう言って、カーテンを閉めてしまった。
しばらく、という言葉に希望を見つけて、私はベランダにしゃがみ込んだ。

すると、見憶えのある車が、団地の前に止まる。私は、恐怖にしりもちをついた。

あの男だ……あの男が来てから、私は殴られるようになった。ママも同じく私を叩く。あの男は、ママの恋人……今日もまた、ベランダに放り出された私が悪さをしたと思い込んで、私を殴り倒すのだろう。

ママとは離れたくない。でも、あの男は怖い。

「た……たすけて！」

私はそう言った。

するとその時、窓が開いた。男が私に手を伸ばす。

「イヤーーー！」

気が付けば、私は五階の部屋から飛び降りていた。

目を覚ますと、そこは病室だった。

私が飛び降りたことは、すぐに団地の住人に気付かれ、ママたちが隠すことは出来なかったと後で聞いた。

私が助かったのは、下が植え込みだったことと、前日の雨で土がぬかるんでいたからしい。

「ママは……？」

そばにいた看護士さんに、私は尋ねた。

「警察に……」

その言葉を聞いて、私は絶望と同時にほっとした。

「あなた、虐待されていたのね？　体中に痣や傷があったわ。飛び降りの件でも、これから警察も来ると思うけど、今後お母さんたちに会えないわけじゃないわ」

「どうして……助けてが言えなかったんだろう……」

ほっとした私は、途端に今までの自分が不思議に思えて、ぼそっとそう言った。

その言葉に、看護士さんは私の手を取る。

「あなたの体にある痣や傷は、助けてのサインだった。口で言うの

はとても難しいかもしれないけど、通報した人が言っていたわ。助けてっていう声が聞こえたって……」

「そうだ……私、助けてって言ったんだ……」

「そう、あなたは勇気を出したのよ。勇気があれば、物も言える。サインも出せる。そんな勇気も出せない子の心の声が聞ければいいのだけれど……とにかく、あなたは助かったの。そして自分で声を出してね。先のことはともかくとして、まずは怪我を治しましょう」

「はい……」

私はすっかりその場の心地良さに安心して眠った。

それから私は養護施設に入り、ママとは離れて暮らすことになったが、恐怖のない生活を手に入れた。

将来は、私のような虐待に遭っている子の心の声が聞こえるように、一人でも多くの子供を救いたい。子供たちに寄り沿いたい。そんな仕事がしたいと、夢見るようになっている。

１４７　あの山の頂上へ

なぜ、山登りをするかって？　そこに山があるからさ……誰かが言った言葉だけれど、それは僕たちにとってもそうだった。

もともと山登りが好きだった僕は、大学では迷わずワンダーホーゲル部を選んだ。それは、四年生になった今も変わらない。

一応、就職先は決まったものの、何処か晴れない毎日を送っていた。

「都筑（つづき）部長！　堀井が……」

そう言われ、僕は振り向いた。後輩の男子が、うずくまっている。

「どうしたんだ」

「さっき、ちょっと捻って……」

「……肩を貸すから、もう少し登れるか？　もう少し行けば、休憩所があるはずだ」

夏休みを利用しての、海外での山登り。僕を含めて八名の部員は、みんな疲れ切っていた。

「いや、都筑。そろそろ雨も降りそうだし、ここらでテントを張ったほうがいいかもしれない」

そう言ったのは、副部長であり同じ学年の、谷田である。

僕は空を見上げた。確かに雲行きが怪しい。

「そうだな……少し早いけど、ここでテントを張ろう」

僕たちは斜面に数個のテントを立て、二、三名ずつ入った。出発したのが一昨日なので、こうして休むのは二度目だ。

「明日……僕は堀井と下山する」

全員での食事が終わり、僕は静かにそう言った。

「部長！　俺、大丈夫です。明日になれば痛みも消えると思いますし、邪魔ならここへ置いて行ってください！」

悲鳴に似た声を上げたのは、足を怪我した堀井である。

「置いて行けるわけないだろ。まだ頂上までは何日もかかる。連れ

て行くにはリスクが高いし、下山した方がいいに決まってる。それに、思った以上に腫れ上がってるのわかるだろ?」
「でも……みんなで頂上登ろうって……部長だってそう言ってたじゃないですか」
「僕は部長だ。無理に連れて行くことなんか出来ない。それに、またこのまま降りたって終わりじゃない。また登ればいいだけのことじゃないか」
「部長……」
内心、ここで断念しなければならないのは残念だったが、堀井の命には代えられない。
「谷田。後は頼むな」
僕の言葉に、谷田は頷く。
「先輩！　僕も降ります。正直、こんなにきつくなるとは思わなかったし……部長だけじゃ、堀井を担いで下山するのも大変なはずです。もう一人いるでしょう」
そう言ったのは、一年生だ。
「僕も降りていいです。やっぱり……みんな一緒に登りたいから」
僕を気遣ってか、次々にそう言う後輩たちに、僕は嬉しさと申し訳なさでいっぱいになる。
「いや、そう言う気持ちはよくわかるけど、ここまで来たんだ。僕と堀井の無念の気持ちを、みんなに叶えて欲しい。もちろん、もうキツイと思っているやつは一緒に降りて構わない。でも、ここまで来たんだ。あの頂上に登った時の感動、もっと知ってほしい」
そう言った僕に、みんなは顔を見合わせる。
結局、最初に下山を立候補した一年生を残して、後のみんなは頂上を目指すこととなった。
僕は怪我をした堀井を、一年生と肩を貸しながら、無念の下山をしたのだった。
部長として願うのは、後は部員たちの無事の帰還だけ。

幸い、堀井の怪我は捻挫で済み、山の下にあるホテルで休んでいる。
「帰って来い……帰って来い」
僕は家が仏教徒のくせにクリスチャンのように指を組み、山を見つめた。
だが、到着予定日になっても、部員たちは帰って来ない。
「谷田……谷田！」
谷田に持たせたトランシーバーも繋がらない。
「まだ離れたところにいるのか……」
僕の脳裏に、最悪の事態が一瞬頭をよぎった。
一日中、麓で待つ日々。
「明日になったら、捜索願を出そう」
そう言ったまさにその時、僕は目を見開いた。
「部長！　あれ！」
同時に、一緒にいた一年生も叫ぶ。
僕らの目には、山から降りてくる谷田たちの姿が見えたのだ。しかも笑顔で、手を振っている。
「みんな――！」
僕らは互いに駆け寄り、抱き合った。
「谷田！　心配かけやがって！」
「ごめん。上は吹雪いたりして、思ったより身動きが出来なかったんだ。トランシーバーも壊れちゃって……でも、みんな無事だよ」
「ああ。みんなよかった！　本当によかった！」
「堀井は大丈夫だよな？」
「ああ、大丈夫。ホテルで休んでるよ」
一同、安堵の笑みを浮かべる。
「部長。お土産があるんですよ」
後輩の一人が、そう言ってデジタルカメラを差し出す。
そこには、夢にまで見た頂上からの美しい朝日が映っている。
「ああ……美しいな……」

普段、美しいという言葉を使ったことがあっただろうか。でも、僕は感動して涙を流してしまった。きっと写真だけのせいじゃない。みんなが帰って来てくれたからだ。

「また、来ましょう。そして一緒に登りましょう」

「ああ！」

僕らの夏は、そうして終わった。

僕もいつか、あの山にまた挑戦する日が来るだろう。

山は大切なことを教えてくれる。仲間の大切さも、命の尊さも、本当の美しさというものも――。

１４８　パスタの穴

とあるイタリアの飲食店で、一人の女の子がパスタに開いた穴を覗いている。
「パオラ。早く食べなさい」
母親にそう言われ、パオラと呼ばれた女の子は、たった今まで覗いていたパスタを食べる。
「ねえ、ママ。パスタには、どうして穴が開いているのかしら」
「あら。開いてないパスタだってあるわよ」
そう言って、母親は食べていたカッペリーニを見せて食べる。
「じゃあ、どうしてマカロニには穴が開いているのかしら」
パオラは、目の前にあったマカロニを取って、穴を覗く。トマトソースが穴を塞ぎ、向こう側は見えない。
「変なこと聞く子ねえ」
「でも、物には全部理由があるのよ」
「じゃあ、パオラはどうして、パスタやマカロニに穴が開いていると思うの？」
「うーんと……」
パオラは天井を見上げて考えると、やがて驚いたように水を飲み、口を開いた。
「これはきっと、作った人の意地悪だわ。だってソースが穴に入って、しょっちゅう舌を火傷するんだもの」
パオラは火傷したばかりの舌を見せる。
母親は笑った。
「じゃあ、正解を聞いてみましょうか。あなた！」
そう言って、母親が厨房に向かって声をかける。中から出て来たのは、パオラの父親であり、この店のオーナーシェフだ。
「パオラからの質問よ」
「なんだい？　パオラ」

「えっとね、パスタやマカロニには、どうして穴が開くの？」
パオラの質問に、父親は笑う。
「どうしてだと思う？」
「パパが意地悪だから！」
「ええ？　どうしてそういう答えになるの？」
「パオラったら、パスタの穴に入っていたソースで、舌を火傷したらしいのよ」
母親の言葉に、父親はパオラを抱き上げた。
「うん、パオラ。それは正解」
「本当！」
「でも、パパが意地悪なわけじゃないよ。パスタの穴っていうのはね、火を通しやすくして早く調理が出来るように。それから、ソースがうまく絡んで美味しくなるように穴が開いてるんだ。それともう一つ……」
「もう一つ？」
パオラはゴクリと唾を呑みこむ。
「これは小人のトンネルさ」
「ええ！」
「小人の国で、穴の開いたパスタはトンネル工事で使われてるんだ。だからパパのこの店でも、穴の開いたパスタが一番よくなくなる。小人がちょっとずつ、工事に持って行っているからなのさ」
得意げに言った父親に、パオラの目も輝いた。
「さあ、お嬢さん。冷めないうちに召し上がれ。小人がソースの絡まったパスタまで持って行かないうちにね」
「はーい！」
その後、パオラは何度も穴を覗きながら、父親の料理を食べ続けた。小人が持って行かないうちに……。

149　女教師

「アナタに恋をしました」
こんなことを言ったら、あんたは笑うだろうか。
同級生たちの間でも定評のあるあんたは、俺たちの教師であり、年上の女ってだけで標的にされている部分もある。
高二の春――若さだけを持て余して、俺たちは毎日を生きている。
「先生に恋とか中学で終わりだろ！」
同級生がじゃれ合うように言い合っている言葉を遠くで聞きながら、俺はぐっと身構えた。
そう、あんたが恋愛対象で俺を見てくれるはずがない。どう足掻いたって、俺たちは教師と生徒――結ばれることがあれば、俺は何だってしていいよ。
だけど俺は、あまりにも空しい感情に一人絶望して、目を閉じた。
「島崎君？」
その声に目を開けると、そこには先生がいた。
「先生……」
「どうかしたの？　具合でも悪い？」
「いえ……」
俺は明らかに避ける形で、俯いた。
（早くどっか行けよ！）
裏腹な思いが、俺の心でこだましている。
「島崎君……ちょっと、話そうか」
だけど、先生は俺から去っていくどころか、腕を掴んで生徒進路相談室へと連れて行った。
「ここなら誰も来ないから……最近どうしたの？　いつも思い詰めた顔して、先生心配してるのよ？」
無防備に、先生は俺にそう話しかける。
わかってる。それが仕事だってこと。仕事じゃなければ、放って

おくだろうってこと。

「……」

いろいろ言いたいことはあるが、それをありのままに話すことなど出来るはずがない。

黙り込んだ俺に、先生は俯く。

「ごめんね……私、まだまだ新米教師だから。島崎君が話しやすい環境にもしてあげられてないよね。でも、悩み事があるならなんでも言って。来年は受験とかもあるし、今のうちからケアしなくちゃ。学校のこと？　それとも、お家のこと？」

目の前に座る先生が、本当に綺麗だと思った。

「……アナタに恋をしました」

言った瞬間、後悔したが、もう遅い。

俺はもう、目の前の先生を見ることすら出来ない。

「……すみませんでした。変なことを言って……」

沈黙に耐えきれず、俺は立ち上がってそう言った。

「島崎君……」

「べつに、返事が欲しいとかそういうんじゃないです。返事なんてわかりきってることだし……でも、俺はべつに他に悩みがあるとかじゃないですから、もう放っておいてください。先生にどうにか出来る問題じゃないでしょ……」

そう吐き捨てて、俺は部屋から出て行った。

先生を困らせてしまった……ここから逃げ出したいと退学まで考えたが、それではもっと先生を困らせるに違いない。

次の日からも、べつに俺たちの関係がどうにかなったはずもなく、そのまま月日だけが流れた。

三年に進級する頃には担任も変わったため、交流すらない。そんなもんだ。でも、俺の気持は変わらなかった。ずっと先生を好きなまま……苦しいままだ。

「アナタが好きでした。今までありがとうございました」
卒業式の日、青春というものに別れを告げるように、俺はもう一度先生にそう言った。
先生は静かに笑って、俺の手を取る。
「ありがとう。好きになってくれて……私も島崎君のこと、好きだったわ。もちろん、生徒としてだけれど……」
「わかってます……」
「私ね、結婚しようと思っている人がいるの」
そこで、俺の恋は完全に終わった。
「そうですか……おめでとうございます」
俺は冷静を装って、そう言った。俺と先生の繋ぐ手が離れる。
「ありがとう。好きになってくれることは嬉しいし、生徒がそういう気持ちを経験してくれることも嬉しい。その気持ちを私が受け止めることは出来ないけれど、あなたがいつまでも私の生徒であることは変わりないわ。これからもそういう気持ちを忘れないで、社会に羽ばたいていってほしい」
教師らしい言葉――どうあっても、先生と生徒の関係を超えることは出来なかった。先生は、最後までそれを教えてくれたんだ。
俺はこれからも恋をするだろうか。でもきっと、誰を好きになっても、先生――あんたを好きになった高校生活は、いつまでも輝き続けるんだろうな。

１５０　入れ替わりッ！

奈津美と明は幼馴染みで犬猿の仲。中学校一年生の春。
「このブッサイク！」
明の言葉を最後まで聞かず、すでに奈津美の平手が明に飛んでいた。
「おまえなんかチビザル！」
奈津美も、自分より背の小さい明に向かってそう言った。
二人は会えば喧嘩している。そんな仲になったのは、小学校高学年に上がった頃、互いが互いを意識し始めた結果のようだ。

「あんたら、中学になっても全然変わんないね」
奈津美が教室に入るなり、親友の優子がそう言った。
「ああ……またやってしまった」
「もう。好きなんでしょ、明君のこと。どんだけツンデレ？　いや、デレはないのか……」
「だってあいつ、超ガキ！　サイアク！」
明にずっと惹かれている奈津美だが、明の言動でつい喧嘩に発展してしまう。どれだけちゃんと話したいと思っても、もはや無理なのかもしれない。
「はあ……」
深い溜息を、奈津美はついた。

「はぁ～」
放課後になり、明も溜息をついていた。
「あ、明日こそは……奈津美を怒らせない……」
そう言ったところで、前の方を歩く奈津美の後ろ姿が見えた。
また女子同士で奇抜な髪型にしたようで、長い髪が編み込まれている。

「ブッサイク奈津美！　そんな髪にしたって、ブサイクは直んねーし！」
「はあ？　べつに可愛くなろうと思って髪型変えたわけじゃないし！」
途端に、奈津美が食いかかる。
「この減らず口が！」
「どっちがよ！」
二人は、互いの顔をつねりあい、歯を食いしばる。
しばらく取っ組み合いが続いたその時、奈津美が足を踏み外し、そばにあった用水路に転げ落ちていった。
「奈津美！」
とっさに明が奈津美の腕を掴んだが、そのまま止められる力もなく、二人して用水路へと落ちて行った。
水の中に落ちた二人だが、そこは流れもなく浅い川で、二人はすぐに、もといた道路ではなく、逆側の大きな河原へ続く土手へと這い上がった。
「はあ……もうやめようよ、明。私たち、中学生なんだよ。もう私だって疲れたよ……」
「そうだな。でもなんか、おまえの顔見ると……おまえの顔、見ると……」
二人は、互いを見つめ合った。そして、信じられない様子で互いの顔を触る。
「俺？」
「私？！」
「い、入れ替わってる――？！」
明は奈津美の姿に、奈津美は明の姿に変わっているではないか。
二人はパニック状態で、河原を駆け回る。
「嘘でしょう？」
「信じらんねえ！　これは夢だ！」
「夢。そうか……」

その時、明の姿をした奈津美が座り込んだ。
「奈津美？」
「トイレ……」
「え？　ああ、そういや、さっきから行きたかったな……」
「馬鹿！　なんで学校出る前にしとかないのよ！」
「そんなこと言ったって……とにかく、そこらへんでして来いよ」
奈津美の姿をした明が、草むらを指差す。
「出来るか！」
「じゃあどうすんだよ。俺の体を大事にしろよ！　膀胱炎にでもなったらどうすんだ」
「やだ、無理。キタナイ！　仕方わかんないし」
「仕方って……とにかく、このままじゃおもらしとか……そんなの絶対許さないからな。誰かに見られたらどうすんだよ！」
「だって……ううん、こんなことあるはずない。やっぱりこれは夢よ。そうだよ、夢だよ」
現実逃避を始める奈津美の頭を、明が揺さぶる。
「しっかりしろ！　俺だって、夢なら覚めてほしいし」
「きっと罰が当たったんだ……私が素直にならないから」
急にしおらしくなった奈津美は、目の前にいる自分を見つめる。
「なんか、こんな時にアレだけど……私、ずっと明のことが好きだった！　本当は喧嘩だってしたくないし、ずっと一緒にいたい！」
「そ、そんな……俺の姿してるおまえに言われたくないし……」
その言葉に落ち込む奈津美を、明はそっと抱き締めた。
「悪い。なんか、おまえ見てるとからかいたくなるんだよな……でも俺だって、喧嘩なんかしたくないんだ。毎日後悔しっぱなし。俺だって奈津美のことが好きだ」
「……自分に言われてるみたいで気持ち悪い……」
「なんだと。人がせっかく……」
その時、明がよろめき、またしても用水路のほうに体を崩した。
とっさに奈津美が腕を掴むが、さっきと同様、二人はそのまま用水

路の中へと入ってしまった。
「も、戻った……？」
感覚が元通りで、二人は抱き合った。
「やった！　はあ、もうなんだったんだよ……」
「やっぱり、神様の悪戯かな」
「……夢見がちオンナ」
「はあ？　もう、明なんか知らないし！」
そのまま、奈津美は急いで帰っていった。
次の日も、二人の関係は変わらず、喧嘩から始まった。
「なあ。おまえら昨日、用水路のところでさあ……いちゃついてたろ！」
次の日、クラスメイトから広まった噂は、あっという間に学校中に知れ渡り、二人のバトルは必然的に終わった。
「もう、終わりにするべ」
「うん……」
あの不思議な事件があったからこそ、素直になれた二人。
二人の痴話喧嘩はすっかりなくなり、代わりに二人の手はいつも握られている――。

151　キツネとタヌキ

キツネとタヌキは仲が悪い。
化かし合い、馬鹿試合。
「俺は人間にだってなれるんだ」
キツネの子供が、得意げに人間の子供に化ける。
「馬鹿キツネ！　耳がそのままケモノだぞ。僕だって人間にくらいなれるわい」
そう言って、今度はタヌキの子供が人間に化ける。
「馬鹿タヌキ！　おまえは尻尾がそのまま出てる。尻尾のついたのが人間なもんか」
「なんだと！」
「やるか！」
元の姿に戻り、じゃれあうように喧嘩をする二人は、一瞬にして闇に包まれた。
「あれ？」
「これは？」
二人はあたりを見回すと、闇は一気に元通りになる。
「やった！　タヌキとキツネを捕まえたぞ！」
目の前にいるのは人間の子供。どうやら人間の罠に掛かったらしく、二人はあっという間に籠に入れられ、ふたを閉められた。
「なんてことだ、おまえのせいだぞ」
「なにを？　おまえのせいだ！」
狭い籠の中で醜い争いが始まったが、どれだけ相手を罵ってもここから出られるわけではない。
「仕方がない……ここはひとつ、協力しよう」
「そうしよう。じゃあまず手始めに……僕は蛇にでもなって、あの籠の蓋を開けようか」
「それもいいが、俺がカミキリムシになって、この籠を食いちぎっ

てもいい」
だが、二人の体は何にも変身しません。
「どういうことだ！」
「きっとこれは、人間の前だからか、それともおひさまのパワーに当たっていないからか」
「どっちでもいいけど、俺たちは間違いなくピンチだぞ」
その時、蓋が開いて、子供の顔が見えた。
「さあ、おいで。今日からここが、君たちの家だよ」
そう言って、子供は自宅の外に置かれた囲いに二人を入れようとした。
その瞬間、キツネは風船に、タヌキはキツネの風船を咥えた鳥へと姿を変え、大空へと飛んで行った。
「はあ……ここまで来れば大丈夫か」
「本当に驚いた……タヌキ汁だの、ステーキだのにされるかと思った」
「見事な化かし合いになったと思わないか」
「ああ、もちろんだ。僕が鳥になって君を咥えなければ、君は今頃、あの子供に割られていたかもしれないよ」
「なにを？　俺が風船になったおかげで、君は大空に飛べたんじゃないか。その飛び出たおなかで飛ぶには無理だったろうからね」
「なにを！」
互いの肩を掴み、取っ組み合いになろうとする寸前で、二人は互いの顔を見合い、そして笑った。
「ハッハッハッハ。なにを喧嘩になる必要があるんだ。俺たちは無事に逃げ出したんじゃないか。互いに協力して」
「本当にそうだ。喧嘩なんてバカバカしい。お互いに最高の変身だった」
「今まで悪かった」
「僕のほうこそ」
二人は固く握手をする。

「でもまあ、俺の変身の方が繊細で美しいけどな」
ぼそっと言ったキツネに、タヌキが顔色を変える。
「なにを？　僕の変身のほうが正確だ」
やはり二人は、取っ組み合いを続ける。
だが、明日も明後日も、二人は一緒に居続けるだろう。
キツネとタヌキは仲が悪い――。

１５２　雨がやんだら

くるくる回る、色とりどりの傘、傘、傘。

くっついたり離れたり、止まったり動いたり。

私はひとり、待ちぼうけ。

店の軒下お借りして、誰を待つやら、誰も待たない。

ただただ上を見上げては、近付く水滴に目を瞑ってみる。

お空はゴロゴロ、灰色の雲が覆ってる。

いつになったら晴れるかな。

そろそろ私も飛び出そうかな。

でもお気に入りの服だし、濡れたら風邪を引いてしまう。

早く雨がやまないかな。

パタパタパタと、雨に紛れて足音が。

隣の軒下に、同じ年くらいの男の子。

目的は一緒。お空を見上げて、タイミングを計ってる。

お空はさっきより明るくなって、向こうの方には日差しも見える。

やがて、くるくる回る、色とりどりの傘、傘、傘。

ひとつ、またひとつと、傘は姿を消してゆく。

雨が小ぶりになったみたい。

さあ、やっと飛び出せるというもの。

恵みの雨よ、太陽よ。

どちらも大切。私は好きよ。

お空を見上げてそう唱えたら、大都会に虹の橋。

あら綺麗。素敵なお空。綺麗なお空。

雨がやんだら、帰りましょ。

１５３　春の指先

十五歳の少女・小春は、小学校の頃からずっと思い続けていた隼人に告白をし、晴れて恋人となった、高一の春――。

小学校時代から知り合っている二人には、妙な緊張感が襲う。

少なからず、互いの子供らしい失態は知っているし、突然恋人となっても、何をしていいのかわからなかった。

「小春――」

隼人は数歩先を歩き、空を指差した。

途端、風が吹き抜け、辺りはピンク色の雪が舞う。

「わあ……」

春先の桜並木は、すでに葉桜になり始め、風が吹けばたちまちピンク色の花びらが、雪のように二人を包みこむ。

「綺麗だね」

やっと緊張がとれた小春の笑顔に、隼人も微笑んだ。

そして二人の手が、互いの勇気によって触れる。

触れた指先に一瞬戸惑いながらも、二人はもう一度、手を繋いだ。

154　決闘

二ＸＸＸ年、近未来――。

世界中で拳銃犯罪がはびこる中、日本は未だに銃刀法違反の名残りを受けて、拳銃社会を避けて通れている。だがその中で、長年に渡る不況、愛国心など生まれない政策で、国民は絶望し、海外に移住する日本人が増えてきた。

そんな中で生まれたのが、「飛び道具禁止令」。今まで通り、銃を持つことは出来ないが、日本刀やナイフなどの刃物を持つことは原則許されるようになった。火薬やバネなどの細工などをして飛距離を稼ぐような刃物は禁止。

それは日本人であることの誇りのように、日本刀ブームはあっという間に広がり、同時に実践剣術などの武術教室へ通うのが主流となる。

またその中で誕生したのが、「決闘法」。国に申請し、双方が了承した場合、決闘は受理される。その上で人を殺しても罪にはならない。

「果たし合いだ！」

オフィス街の真ん中で、日本刀を構えるスーツ姿のサラリーマン。公式な決闘のため、野次馬の中に、決闘を見守る委員会員や警察の姿もある。

キーンと、刀が擦れ合う音が飛んだ。

「てめえは前から気に食わなかったんだ！」

決闘を申し込んだ男が、刀を交えてそう言った。

「俺も同じだ。俺のが成績がいいからって、目の敵にしやがって」

「なんだと！」

次の瞬間、決闘を申し込んだ男は、もう一方の手で小型ナイフを取り出し、相手の男に刺した。

「勝負あり！」
委員会員が手を上げ、野次馬たちも沸いた。
勝負はそこで止められ、委員会員は倒れた男に近付く。近くには救急車と普通の車が待機しており、助かる見込みがあれば救急車へ、すでに死んでいればそのまま葬祭場へと持ち込まれる。それもまた新しいビジネスだ。
「おい、果たし合いだ！　あっちでも決闘が始まったぞ！」
歓声の沸いた野次馬たちが、すぐに移動を開始する。
カシャン、と刀が鞘に納められる音とともに、別の場所では新たな歓声が上がった。

155　フェチ

初めて彼氏が出来た。

初めてのデートは念入りに。

新しいワンピ、濃すぎない化粧、初めてのコンタクト。

「あれ、コンタクトにしたんだ」

彼が言った。

「うん。もう度が合ってなかったから、思い切って……」

本当に思い切った。今まで怖いと思って、ずっと眼鏡だったから。

初めてのデートは、いい感じ。

映画見て、カラオケ行って、ごはん食べて……ずっと憧れてたこと。

「ごめん。別れよう」

初めてのデート……突然、彼から切り出された。

どうして？　何がいけなかったの？　服のセンスがなかった？

化粧濃すぎた？

どう聞いても、彼は何も答えてくれない。

どうして……。

「知らなかったの？　彼、眼鏡フェチだよ」

後日、友達がそう言った。

そんなことで？　だったらそう言えばいいじゃない。

でもどんなに言ったって、もう遅いんだよね……。

翌日、私は彼の前で眼鏡をかけた。

チラチラとこちらを見る彼。

「ごめん。やっぱり君のこと――」

なんて馬鹿で、単純な男だろう。

「私のほうこそ、ごめん。私、あなたのこと好きじゃない」

初めての彼氏だなんて浮かれていられない。

ちゃんと私を見てくれる人じゃなくちゃね。

156　マホウノコトバ

「スキ」
そう唱えれば、あなたのことを好きになってく。

「キライ」
そう唱えれば、あなたのことを嫌いになってく。

「アイシテル」
そう唱えただけ、あなたのことが頭から離れないよ。

「アイシテル」
だからあなたも、そう唱えて。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

１５７　初めての感情（前書き）

※　ＢＬ要素を含みます。

157　初めての感情

僕はあの人が好きだった。
好き、と言っても、同性だし憧れのようなものだと思う。
先生――。
あなたの目の奥にある熱い炎のようなものが、僕の心を掴んで離さない。

「君は僕のことが好きなの？」
ある日突然、先生は僕にそう言った。僕はなんと答えていいのかわからなくなり、押し黙る。
「だって君、いつも僕のことを見ているから」
そう言われて、僕は先生を見つめた。
「先生は、僕にとってのすべてです。憧れというよりもっと大きい……僕は先生みたいな男になりたい。将来は教師になって、先生のようになりたい」
僕にとっても、初めて語る将来のことだった。でも、言いながらしっくりきた。
「それはね……憧れじゃなくて、愛だよ。君」
突然、先生の顔が近付き、僕はその唇で口を塞がれた。
何が起こったのかわからない。女性とすら交わしたことのないその行為は、とても柔らかく胸を震わせ、僕からすべての力を奪う。
「先、生……」
この行為が、今後の僕たちの関係を何か変えることになるのだろうか。
でも、これだけは言える。きっとこれからも、先生は僕の心を掴んだまま。僕は先生の意のままに操られるように、その炎のような目から逸らせないでいるはずだ。
僕はいけない人間に堕ちただろうか。でも、嫌だとはちっとも思

わない。むしろ僕は、ずっとあなたにこうしてもらいたかったのかもしれない。

あなたが望むなら、僕は何にだってなれる気がするよ。どうか僕を、あなた色に染めて――。

158　たった一言が言えない

「好き」
そのたった一言が言えない。

「付き合いたい」
そのたった一言が言えない。

「一緒にいたい」
そのたった一言が言えない。

いつか言える。
いつ言おう。

そうしているうちに、時間は過ぎてゆく。

確実な未来なんてない。
明日が来ないかもしれない。

後悔したくない。
欲しいのは、勇気――。

でも、たった一言が言えない。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

159　Family

市子は走っていた。
「市子が来たぞ！」
そんな声とともに、市子目掛けて石が飛ぶ。投げているのは、市子よりも年上が多い、小学校高学年になったばかりくらいの子供たちだ。
「やーい、てなし子！」
「おまえの父ちゃん、はんざいしゃ！」
その言葉に、市子は鬼の形相で子供たちを睨みつける。
「逃げろ！　市子が怒ったぞ！」
「怒ったってなんも出来やせん。それよかそろそろ配給だ。行くぞ」
去っていく子供たちに、市子は石を投げ返した。
「おととい来やがれ！　このいじめっ子が！」
市子はそう言うと、走って瓦礫の中へと入っていった。
太平洋戦争真っ只中――。みんなが助け合わねばならない時に、市子は執拗ないじめを受けていた。
「市子……その傷」
瓦礫をくぐった先の空間に、市子の母親が寝そべっている。もう何日も動くことすら出来ず、日に日に衰えていくのがわかる。
「なんでもない。ちょっと転んだ」
「……また石でも投げられたんね？　ひどいことしよる」
「いいの。いじめっ子なんか相手にせん。それよか母ちゃん、お芋見つけた。外で焼いてくるね」
「ごめんね。母ちゃんこんなになってもうて、市子に苦労ばかり」
「なに言うてるの。母ちゃん、精をつけてもらわないと」
そう言って、市子は外へ出て火をおこすと、落ちていた枝に拾った芋を刺し、それを焼いた。
市子の母親は病に倒れたまま、この瓦礫となった家の隙間で市子

と暮している。父親は大学教授をしているが、この戦争は負けると言ったり、戦争反対の運動員として動いていたために、アカや犯罪者と罵られ、特高に連れて行かれた。母親は何も言わないが、たぶん拷問にあって殺されたのだと、市子は幼いながらに認識している。

「なにが犯罪者だ。戦争反対で何が悪い。うちかて平和主義者。父ちゃんはなんも悪いことしとらん」

自分にそう言い聞かせるように、市子は芋を焼いて、母親のもとに持って行った。

「母ちゃん。お芋焼けたよ」

だが、母親は動かない。

「母ちゃん……母ちゃん！」

もう、母親は目を覚まさなかった。

「一人に……なってしもうた」

市子は冷めてしまった芋をかじり、空を見上げる。

「信念を貫いた父ちゃん。それを信じて私を守ってくれた母ちゃん。私は生きてる。負けるもんか」

次の日も、またその次の日も、市子は一人になってもいじめられた。でも、一人になってもめげなかった。

やがて戦争が終わり、怒涛の戦後を生き抜いた市子は、数十年後、何千人という人の前に立っていた。

「それでは、会長よりご挨拶をいただきます」

その言葉に、市子が前へ出る。

「みなさま、この度は会社設立六十年記念パーティーにようこそお越しいただきました。今日はご来賓の方だけでなく、社員の皆様にもお集まりいただきました。それは、ここにいるみなさまが、私のファミリー……家族だからです」

毅然としてそう話す市子は、老人といえど足取りのしっかりとした、瞳を輝かせる女性のままだった。

「戦後しばらくして、生きるために興したこの会社が成功し、小さな商店が百貨店にまで上りつめました。思えば今日まで怒涛の日々で、会社設立当時が昨日のことのように思い出されます。戦争孤児となった私は、親もなく一人ぼっちでした。それが今や、これだけの家族を持つことに幸せを感じます。これからも、もっと多くの家族が出来るよう願います」

そう言うと、市子は天井を見上げた。

「それから――亡くなった両親に、この光景を見て頂きたい。孤独という檻の中にいた私を救い出してくれたのは、誰でもなくあなた方一人一人です。すべての人に、心からの感謝を伝えたいと思います――」

市子はそう言って、お辞儀をした。涙を浮かべるその先には、たくさんの人々が見える。市子が築き上げた家族であった。

１６０　努力は認めてほしいです。

高二にして、初めて彼氏が出来た！　嬉しくて飛び上りそう。告白して来たのは向こうから。でも、私もずっと好きだった。

「じゃあ今度の日曜、遊園地ね。私、お弁当作るね！」

そう約束をして、私は夜中のうちからお弁当作りに取り掛かった。といっても、普段はほとんど料理なんかしない。お母さんも仕事をしているし手伝ってくれるような人じゃないから、料理本を見ながら一人でやらなきゃいけない。

だけど、愛する彼のため。材料はもちろん前もって買っておいた。中身は定番の卵焼き、からあげにタコさんウインナーに……とにかく欲張りなお弁当にする！

数時間後、出来上がったものは……しょっぱい卵焼き、べちょべちょのからあげ、ギトギトで足も切れかかったタコさん？ウインナー。

「うわーん！　こんなの持って行けないよ……」

私は絶望感でいっぱいになりながらも、そのお弁当を詰めた。でも、出来ればこのまま仮病でも使って行きたくない。そんな感じだった。

だけど、待ち合わせ時刻は迫っている。まだお互い携帯も持たせてもらっていないから、仮病を使うにしてももう知らせる手立てがない。

仕方なく、私はそのお弁当を持って待ち合わせ場所に向かった。

「おお、弁当？　楽しみ！」

彼氏は屈託なくそう言って笑う。

「でもあの……ごめん。失敗しちゃったの。一応持ってきたものの、コンビニで買っていったほうがいいと思う……」

私はそう言った。でも、彼は笑ったままだ。

「失敗なんて大丈夫だよ。とにかく行こう」
私たちは、初デートの遊園地へと向かっていった。

遊園地は楽しい。お弁当の失敗もすべて忘れていたが、お昼になってその問題は思い出された。
「そろそろごはん食べたいな」
「う、うん……」
私は渋々、お弁当を開けた。
見るも無残の中身に、さすがの彼も血の気の引いた顔をする。
「やっぱり……買ってこよう。少し高くなるけど、レストランとかあるし」
「いや、せっかく作ってくれたんだ。見た目はまずくとも美味しいっていうのはよくあるし。いただきます！」
そう言って卵焼きを食べ出した彼は、一瞬にして吐き出した。
「なんだこれ！　まっずー！」
私が悪い。そんなことはわかっている。でも、人間誰しも期待はしているものだ。
そんな思いやりのない彼に、私は一瞬で切れて、お弁当を畳んで立ち上がった。
「さようなら」
初めての彼氏に失望し、その日のうちに分かれたのは言うまでもない。
そして、私はトラウマを克服しようと、その日から料理の腕を磨いた……。
努力は認めてほしいです。

161　親孝行

律子は高校を辞めてアメリカへ渡った。親とは絶縁状態。それは、夢を追いかけて高校を辞めたこともあるし、それが原因で大きな喧嘩をして、家を飛び出したことにもある。

兄と姉がいる三人兄弟の末っ子だった律子。兄弟たちからは、末っ子だから甘やかされてと思われているが、律子にもコンプレックスというものがただならぬほどあった。出来のいい兄弟たちと、ずっと比べられてきたのだから。

「ＣＧの勉強がしたいの。夢なの」

ある日突然、律子は両親にそう言った。

「シージー？」

両親には理解するだけの知識がない。

「こういうのよ」

律子はそう言って、自ら作成した絵のような写真のようなものを見せる。

「……勉強するのはいいことだと思うよ。でも、それが高校を辞めることと繋がるとは思えないね。卒業してからでいいじゃないか。それともそのＣＧとかいうものが学べる専門学校にでも行けばいい」

「私もそう思ったわ。でも、今こうしている時間がもったいない。専門学校へ行くにしても、今の時期から通いたい。そうじゃないと、私の憧れているマイケルステア・マクガイアの弟子にも取ってもらえないわ」

またも横文字の名前が出てきて、両親はほとほと困り果てる。

「誰だね、そのマイケルなんとかいう人は」

「言ったでしょ。私の憧れているＣＧの神様のような人よ。高校の勉強が私の将来に役立つとは思えない。学歴だって必要ない。私は苦労するかもしれないけど、私には私の夢があるの！」

「夢を持つことは大事だ。だけど、苦労するとわかっていて辞めるのは得策じゃない。夢なら諦めなければ、いつか叶うものだ。なぜ今出来ることが十年後に出来ないというんだ」

「十年後の保証なんか何もないじゃない！　明日私は死ぬかもしれない。マイケルステアさんだって、私よりも大人。十年後にCGの世界にいるかもわからない。十年後、私は何をしているの？　夢を追いかけているの？　私は今、後悔したくないだけよ！」

「律子！　お父さんは許さない。十年後に同じ思いでないならば、それだけの夢というものだ。学生の本分は勉強。学校の勉強が出来ないで、どうしてCGの勉強が出来るんだ」

父親の言葉は、律子にも痛いほどわかっていた。自分がわがままを言っていることもわかる。でも、律子にはこの大きすぎる夢を持て余すことは出来なかった。

その夜、律子は家を飛び出した。

小さい荷物には、子供の頃から溜めてきた貯金が全額入っている。高校に入ってからは、このためにバイトもして贅沢をしたこともない。すべては夢のためだった。

単身、子供の律子がアメリカに渡ったことは苦労以外のなにものでもなかった。親戚も友達も、頼れる人など誰一人いない。拙い英語で、憧れの人を訪ねるが、もちろん会わせてはもらえない。それでも毎日通い詰め、その熱意にやっと憧れの人物に会うことが出来た。

相手にも、まずは両親を説得しろと言われた。電話で説き伏せると約束をし、律子は憧れの人の下で働けることが出来たのは、自分の熱意と相手の好意、ラッキー以外のなにものでもないが、ここで帰るわけにはいかなかった。

「がむしゃらに働いたんでしょうね。思い込んだら真っ直ぐの子だから……ちゃんと連絡もくれていたし、自分の選んだ道だから、苦

しいなんて一言も言いませんでしたね」
母親はそう言って、隣に座る父親にそう言った。
父親ももう、穏やかな顔で前を見つめている。
「十年後ではなく、今後悔したくないと言った律子に、私は負けたんだよ。あれだけの熱意ある人間を、夢を、どうして潰そうと思うね……あの子が立った日のことを思い出した。兄弟の誰よりも立ち上がったのが早かった。もうずっと、あの子は自分の足で将来の道を歩んでいたんだね……」
そう言ったところで、あたりは真っ暗になり、目の前にある巨大スクリーンが光を発した。
ＳＦ映画が始まる。全世界で大ヒットとなっているこの映画には、律子が関わっていると本人から電話で聞いた。
両親はそれを見ながら、我が子の成長に涙した。
（律子……）
映画が終わり、エンドロールが流れる中で、二人は映画よりメインとばかりに目を凝らした。
「お父さん！」
母親の声が響いたが、もう本編ではないので誰も驚かない。
「うん。うん……」
二人の目に、律子の名前がしっかりと映っていた。

162　夢

夢を見るのです。

夢を見ることを、夢を見るのです。

将来の夢、将来なりたい夢、そういったものが私にはなく、今日まできました。

今までまったくなかったわけではありません。

たとえば学校の授業などで、将来について発表せねばならない時。

あたりさわりのない、よくある夢を書きました。

声優、俳優、漫画家、ミュージシャン、夢のある職業から、

花屋、ケーキ屋、教師、公務員など、身近で堅実的な職業を選んだこともありました。

けれど、いつも満たされることはありませんでした。

夢に向かって羽ばたきたい。

それが私の、今の夢です。

１６３　ある恋人たちの風景

彼氏の友哉と同棲中の宏美は、台所で友達と料理を作っていた。居間では友哉と、友達の彼氏がゲームで遊んでいる。
「ヒロの彼氏ってカッコイイよね」
そう言われ、宏美は口を曲げた。
「はあ？　あんなの顔だけ。馬鹿みたいに煙草吸うし、風呂もあんまり入らないし、料理出来ないわ、ゴキブリ一匹退治出来ないわでサイアク」
「じゃあ、ウチが彼氏と別れたら譲ってよ」
「いいよー」
「はあ。いつもながら淡々としてらっしゃる。よくそれで同棲なんてしてるね」
「ベタベタすんの気持ち悪いって」
宏美は笑って、居間へと料理を運ぶ。

数時間後、友達が帰り、二人きりとなった宏美は、友哉に抱きついた。
「なんだよ、急にベタベタして。さっき聞こえてたぞ。俺、あの子と付き合っていいわけ？」
「駄目だよ！　絶対ダメ。悪い冗談なんだから」
「まーったく、わかりづらいヤツ」
「私は、友哉がいなくちゃ生きていけないもん」
「とかなんとか言って、学校で会ってもシカトするくせに」
友哉の言葉に、宏美は咳払いをする。
「だってなんか……むずがゆい」
「むずがゆい？　なんだ、それ」
「好きすぎて、どうしていいかわかんなくなっちゃうってこと！恥ずかしいのよ。友達の前で顔なんか合わせらんない。なんだか夢

みたいなんだもん。私が友哉と付き合ってるの」
それを聞いて、友哉は苦笑した。
「バーカ。俺のが好きだし」
二人は何度も抱き合った。

164　Tの話

ずっと決めてた。十八になったら免許を取るって。
「おまえが免許？　絶対おまえの車になんか乗らないからな。あと、俺の車には指一本触るなよ」
そう言ったのはお兄ちゃん。相変わらず失礼な男だ。
教習所のパンフレットを見ながら、私は口を開く。
「ねえ、お兄ちゃん。ＡＴコースとＭＴコースがあるけど、なにこれ」
「はあ？　オートマ限定かマニュアルかだろ。おまえは絶対マニュアルなんか無理なんだから、オートマにしとけ。今時みんなそうなんだから」
「あら、そうなの？　お母さんはマニュアル取っておいたほうが、後々のためになると思うけど」
横から入って来たのは、お母さんだ。お母さんも、バリバリ運転出来る。
「じゃあ、マニュアルってのにする」
「ええ？　やめとけって。危ない」
「お兄ちゃん。始める前から気分削がないでくれる？」
私は口を尖らせ、ＭＴコースに丸をつけた。

後日、私は教習所へと出向いた。校長先生という人から、軽い面接のようなものを受ける。
「君は車が好きですか？」
「まだわかりません」
「コースは決めましたね？」
「はい、マニュアルチックコースでお願いします！」
私の声が、教習所内に響き、どこからか笑い声が聞こえる。
「マ、マニュアルコースだね。わかりました。ちなみに、チックは

いらないから」

「え……ATがオートマチックなら、MTはマニュアルチックかと……」

私は事態を察知し、顔を真っ赤にさせた。

※　Tはトランスミッションです。

165　十年後に会おう

僕とサリーは双子の兄妹で、両親の離婚を機に、僕は父にサリーは母に引き取られた。

「ジミー！」

あの日、別れ際にそう叫んだサリーの声が離れない。

僕だって辛かった。何度も父にお願いしたが、父は女の子などいらないという。なにより、母が一人では可哀相だと言うのだ。

僕は納得出来なかったが、僕ら子供ではどうにも出来ない事実を知っていた。

「サリー。十年後に会おう。十年したら、僕らは十八歳で大人だ。そうしたら、僕は君を迎えに行く。だから待ってて……」

そうして、僕たちは無理に引き離された。

両親はお互いを干渉しないと言い、連絡先すら知らないと言い張る。そして十年経つ頃には、両親に新しい家族もいた。

「ジミー。何処に行くの？」

あの日の僕らと同じ年の男の子が、僕に向かってそう言った。僕の新しい弟である。

「……僕はこの家を出る。いいか、この家の息子はおまえだけだ。おまえはお父さんとお母さんを守ってくれ」

「ジミーは？　僕のお兄さんでしょう？」

「違う……僕はおまえが好きだけれど、僕にはもっと深く結ばれた兄弟がいる。妹を探しに行く」

「嫌だよ……ずっとここにいてよ。ジミーが好きだ！　ここにいて！」

弟の言葉を背中で受けながら、僕は新しい家を後にした。

「ジミー！」

弟の声が、あの日のサリーの声に聞こえる。でも僕はもう、ここ

に戻ることはないだろう。
「サリー、サリー、サリー……」
なぜこんなにも求めるのか、自分でも説明がつかない。双子だからだろうか。なんとしてでも見つけ出したいと思った。もしかしたら、サリーは変わってしまったかもしれない。僕のことなんか忘れてしまったかもしれない。それでも、幸せならいい。ただそれを見届けたい。
僕は、ずっと昔に住んでいた街へと向かっていった。
サリーと母親も、街を去ったと聞いていたが、それでも接点はここしかないのだ。
でも、サリーの情報は驚くほどなく、僕は絶望するしかない。
「ジミー……？　ジミーでしょう！」
その時、僕はそんな声を聞いて顔を上げた。
目の前には、僕と同じ髪色と目の色をした、同じ年くらいの少女が立っている。
「サリー……」
「ああ、ジミー！」
僕らは抱き合い、互いの顔を見合う。
「サリー。どうしてここに……」
「……ジミーは待っててと言ったけれど、私には待っている家がなかった。新しい家族も出来て、今の家に私の居場所はないわ。十年後に会おうと言ってくれたでしょう？　私、あの約束覚えているわ」
「じゃあ……今、ここに着いたの？」
「そうよ。十八の誕生日に、ここから五百キロも離れた街から飛び出してきたわ。私たちの接点は、この街しかないもの」
僕はサリーを抱きしめ、笑った。だけど、目からは涙が溢れ出す。
「さすがは双子だ。僕たちは離れていても、ずっと一緒だったんだね」
「ええ、そうよ。私たちは約束した十年後に、見事ここへ戻り、再会を果たしたんだわ」

互いの温もりが、互いの居場所を示しているようだった。
この街が引き合わせてくれた。兄妹として引き合わせてくれた。
そして、十年目の約束を果たさせてくれた――。

１６６　哲学の仔

「僕は数えきれないほどの細胞で出来ている。目に見えない細胞が僕を作り、あなたを作り、僕の家族や友達を作っている。また宇宙へ目を向けて見ればどうだ。果てしない宇宙のそのまた果てにいけば、この宇宙なんて目に見えないほどの細胞のようなものだという。僕らが広いと思っている宇宙は、実は幾つも存在しているという。そう考えてみれば、僕らはなんと広大な時を経てここにいるのか、あなたには想像が出来ますか」

まだ小学生の男の子が、目の前の大人に向かってそう言った。

大人は口を曲げ、溜息をつく。

「君は理屈っぽくてかなわない。だが、論点をずらそうとしても無駄だよ。では君が今日、宿題を忘れて来たのには何か理由があるというのかね？」

「違います、先生。僕が宿題を忘れたのは、自然の摂理というものでしょう」

大人は男の子の頭を撫で、教室の後ろを指差した。

「後ろに立っていなさい！」

「チェッ。駄目だったか……」

男の子は仕方なく、教室の後ろに立った。

１６７　桜の下の約束

愛美と愛華は小学校の高学年で出会った。
たった一日で親友になったように、二人はいつも一緒。

「え……愛華、中学受験するの？」
ある日、愛美が絶望的な顔をしてそう言った。
「うん……お母さんがそうしろって。私も、前から決めてた」
「そう、なんだ……」
愛美は目を泳がせる。中学受験などは考えたこともない。このまま愛華と、公立の中学に一緒に通うものと思っていた。だが、確かに愛華は勉強も出来るし、志しが自分とは違うということを薄々は感じ取っていた。
「でも、また会えるよ。友達じゃなくなるわけじゃないんだし」
「わかってる。寂しいけど、仕方ないよね……」
そのまま二人は、小学校卒業と同時に別れた。
「愛美。二十歳になったら会おうね」
桜の花びらに囲まれたまま、愛華がそう言った。愛美は無言で頷く。もう、言葉にならなかった。

月日は過ぎていく。
愛美は愛華との約束を覚えていたが、実際に会う機会はまったくなくなる。
「家は近いんだけど……もう別世界って感じだよなあ……」
高校生になった愛美は、グラウンドに寝そべってそう言った。
「なーに、ぼそぼそ独り言言ってんの。コワイ」
高校の友達が言ったので、愛美は笑って起き上がる。
「小学校の頃の友達のこと、思い出してたんだ。中学違って会わなくなっちゃったけど、桜の季節になると思い出すの」

ジャージに付いた土をはらいながら、愛美は桜の木を見つめる。
来年見る頃には高校も卒業して、またひとつ大人に近付いていく。
「ああ、中学受験？　私もいるよ、そういう友達。仲良かったけど、もう別世界って感じだよね」
「わかる！　家だって近いけど、年賀状で近況話すくらい。やっぱお嬢様と庶民の身分差かなあ」
「なによそれ。でもま、わからんでもないけど」
友達の言葉を聞きながら、愛華は空を見上げる。
（私に新しい友達がいるように、愛華も新しい友達がたくさんいるはず。あの約束を覚えてても、二十歳になっても会えるかわからない……寂しいね、愛華……）

一方、私立高校の放課後、愛華は坂の上の学校から歩き出した。
駅まで続く桜並木が、愛華の心を揺さぶる。
「愛美、元気かなあ……」
ぼそっと、愛華はそう言って、眼下に広がる街を見つめた。
（愛美は人気者だし、もう新しい友達もたくさんいて、私のことなんか忘れてるだろうな……）
愛華は悲しく微笑むと、そのまま家路へと歩き出す。

遠い日の約束は、桜を通じて思い出す。
二人の約束が果たされるかどうかはわからないが、二人は忘れないだろう。あの輝いた時代も、あの日の桜の木も……。

168　ひと夏の果実さがし

夏、誰もが開放的になり、水着一つで海へ向かう。人の目なんて気にしない。そして獲物を狙う。

「みーく！　早くしなよ。男漁りの時間が減る」

その言葉に、少女が苦笑しながら振り向いた。

「待って、玲ちゃん。まだ浮き輪が……」

そう言って、みくは浮き輪に息を送り込む。

連れである友達の玲は、呆れるように腕を組んだ。

「もう。なんで空気入れ持って来ないのよ」

「見つからなかったんだもん。大丈夫、もうちょっと」

「いいから貸しなさいよ。私も手伝う」

すでに酸欠状態のみくに、玲は代わって息を送る。

やっと完成した浮き輪に、二人は海へと飛び出していった。

「海！　海！　海！」

「わかってるわよ。恥ずかしいでしょ、田舎モノ」

「ひどい。玲ちゃんだって同じ町に住んでるのに」

二人は仲良しの友達同士で、今年高校生になったばかりだ。あわよくば、素敵な出会いを探しに来たものの、まだ積極的なものでもなく、今日も二人きりで遊んで終わるものだと思う。

「もう、いいからおいで」

「海、怖い」

「浮き輪あるでしょ。早く！」

玲は浮き輪の紐を引っ張り、海へと出ていく。

「気持ちいい。来てよかったね、玲ちゃん」

「うん。やっぱ夏は海でしょ。いい男いないかなあ」

「いいじゃん、二人で遊んでも」

「まあね。このへん混んでるし、端っこまで連れてってあげようか」

「え？　遠くない」

「大丈夫だって」
泳げる玲は、みくを引っ張りながら、海水浴場の仕切りのある端まで泳ぎ出す。
「よかった。辛うじてつま先もつく。これなら浮き輪いらなかったかも」
「カナヅチなんだから、肌身離さず持ってなさい。遠浅なんだから油断しちゃ駄目だよ」
「うん。玲ちゃんも、泳げるからって油断しちゃ駄目だよ」
二人は水を掛け合って遊びながら、海の中にずっといた。
「人いなくなってきたね。そろそろうちらも帰ろうか……」
しばらくして、玲がそう言って振り向いた。だが、たった今までいたはずのみくがいない。代わりに、空気の抜けかけた浮き輪が浮いている。
「みく？　みく！」
顔面蒼白になり、玲は海の中に顔をつけた。だが、みくはいない。
「みく！　みく！」
玲が叫んでいると、海の中から一人の男性が出てきた。その傍らには、みくの姿がある。
「みく！」
「連れの子？　溺れてたんだ。君は泳げるみたいだね。一緒に来て」
男性はそう言って、玲とともに砂浜へと向かっていく。
海から上がると、男性がライフセーバーだということがわかり、玲は少し安心した。
「みく！　みく、しっかりして！　みく！」
玲の呼びかけに、みくが目を覚ました。
「玲ちゃん……」
「もう、馬鹿！　どこまで馬鹿なのよ！　もう！」
「ごめん。浮き輪の空気が抜けて、パニクっちゃって……」
起き上がるみくはそう笑って、もう大丈夫なようだった。
「よかった！」

玲はみくに抱きついて、安堵の涙を流す。
「もう大丈夫だね。気をつけて帰るんだよ」
ライフセーバーの男性に、二人は同時に頭を下げた。
「ありがとうございました！」
おじぎをしながら、二人は互いの目を見合わせる。
「もしや……」
「……ライバル？」
二人は笑って、ライフセーバーを見送る。
「明日も来よっか、海」
「いいねえ」
海の危険を体験したものの、懲りない二人であった。

169　銀杏並木

「あ、ぎんなん」
小さな女の子が、そう言って走り出す。
「やめなよ。臭いよ」
同じ年くらいの女の子が、そう制止する。
「ええ。もったいない」
「じゃあこれは？」
女の子は、銀杏の葉っぱをくるくるとして見せた。
「こっちのほうが大きいよ」
「それは破れてるよ」
二人は笑って、銀杏並木を走ってゆく。

二十年後――。そんな遠い日の記憶を思い出しながら、二人の女性が銀杏並木を歩いていた。
「あ、ぎんなん」
「やめなよ。臭いよ」
どこかで聞いた台詞に、二人は笑う。
「私、秋って好きだな」
「そう？　なんかどこか寂しくない？」
「そうかな。枯葉を踏む音とか、ぎんなん見つけた時とか、暖かい日差しの中で北風がぴゅーって吹き抜ける時とか、そういうのが好き」
「相変わらず変な子」
「ええ？　そうかなあ」
二人の前を、小さな女の子たちが走ってゆく。
「ママ、早く！」
「早く！」
時を経てもなお、色褪せない記憶が二人に蘇る。自分たちの子供

に幼き日を重ね、また二人は歩き始めた。
「あ、ぎんなん」
「じゃあ、持って帰って食べようか」
二人は笑うと、女の子たちとぎんなんを拾い始めた。

170　冬の華

早朝の湖に、氷が削られる音が響く。
雪国の湖は整備され、スケートリンクとして人気を博している。だが、早朝となれば誰もいない。
荘太は買ったばかりのスケート靴を持って、この湖にやってきた。最近スケートを始めたため、まだ滑るのがやっとである。だが、いつもつるんでいる仲間に置いて行かれないよう、荘太は誰もいないはずの早朝を狙って、ここへ来たのである。
シャーっと、軽快なまでの音が聞こえ、空中に美しい華が咲く。スケートリンクの真ん中には、華麗にジャンプする少女の姿があった。
「あっ……」
少女は荘太に気付くと、恥ずかしそうに身を縮め、どうぞと言わんばかりに手を広げる。
荘太も少し恥ずかしげに、靴を履いてリンクへと滑り出す。だが、途端に転んでしまい、真っ赤になった。
「大丈夫ですか？」
素早く荘太に手を伸ばしたのは、さきほどの少女である。
広いスケートリンクに、二人だけの時間が出来た。
「だ、大丈夫、です……」
荘太は恥ずかしさに手で顔を覆うと、その手に血がついた。鼻血である。
「大変。とにかく外へ……」
少女は荘太の手を引いて、スケートリンクから出ていくと、置いておいたバッグからティッシュを取り出し、荘太に差し出した。
荘太はティッシュで鼻を押さえながら、空を見上げる。
「ああ、カッコ悪い……」
思わずそう呟いた荘太に、少女は笑みを零す。

「大丈夫です。まだ私しかいないし」
「……それも恥ずかしいんだけど」
それを聞いて、少女も赤くなった。自分を意識してくれていることを認識したのだ。
「あの……よかったら、スケート教えましょうか？」
「え、本当？」
少女の言葉に、荘太は少女を見つめる。
「教えるって言っても、滑り方の基本くらいですけど……」
「いや、それでもいい。なかなか思うように滑れなくて……」
鼻血が止まるのを待って、荘太は少女とともにスケートリンクへと入っていった。
すでに数人、人がやって来ているが、滑る場所は広いものだ。
「待って。まだ離さないで」
少女の手をグッと掴みながら、壮太が言う。少女は笑って頷いた。
「大丈夫。ゆっくりバランスを取って」
その時、スイーっと、壮太は初めて自分の足で滑った気がした。
「おお、出来た」
「そう、その調子」
「ありがとう。さすがフィギュアスケートやってるだけのことはある。教え方がうまいや」
「そんな……」
少女は途端に暗い顔をした。
「……俺、なんか悪いこと言った？」
壮太が察してそう言うと、少女は悲しく笑って首を振る。
「ううん。でも私、うまく滑れなくて……スランプなの」
「え！　あれで？」
壮太の驚きように、少女はまたも笑った。
「うん……どうしても転んじゃって、恥ずかしいからあんな早朝からやってて……」
「はあ……俺の悩みとは全然違うや。俺は滑るのもままならないっ

ていうのに」
「あら。滑ってるじゃない」
そう言う少女の傍らで、壮太はもうなんの支えもなしに滑っていた。
「ほ、本当だ」
「もう大丈夫だね」
「じゃあ、今度は俺が応援するよ。大丈夫。さっきだって、転ばずに飛んでたじゃないか」
前向きな壮太の言葉に、少女も頷く。
「そうだね……練習あるのみ。ありがとう、壮太」
「……君の名前は？」
「華」
ハナと名乗った少女は、勢い良く走り出すと、誰もいないリンクの真ん中で、大きなジャンプをした。
雪が囲んだ冬の湖、空中に華が咲く。

171　さみしいきもち

どれだけ抱きしめても埋まらない。
どれだけキスしても埋まらない。
私は、どこかが壊れてしまったのだろうか。

さみしい、寂しい、サミシイ……。

どれだけ叫んでも、この心の隙間は広がるばかり。
どれだけ苦しんでも、この心の壁は高くなるばかり。
私は、このくだらない感情を抱きしめて、この先も生きて行くんだろうな。

さみしー、淋しい、サ・ミ・シ・イ……。

いつか、乗り越えたいな。
いつか、乗り越えられる日が来るといいな。
いつか、強くなりたいな。

きっとみんながそれらを抱えて生きている。
きっとみんながそれらを背負って生きている。
きっとみんながそれらを隠して生きている。

だったら私も、生きてみようか。
このくだらない感情を、どこかに放り投げて——。

172　モトカレ

死ぬほど苦しい想いをして別れた彼を忘れるため、彼のいないところで新しい人生をスタートさせた。

新しい街、新しい家、新しい仕事、もう彼への接点はないけれど、別れて三年経った今も、悔しいくらい未練たらたらで、そんな自分に嫌気が差してる。

「吉田さん。本当に、今日の合コン行けないんですか？」

後輩の声に、私は苦笑する。

「ごめん。興味ないし、この仕事早く終わらせなきゃ」

「もう。恋しましょうよー」

「いいの。私は仕事に生きるんだから」

そう言って、私はパソコンに向かう。

大好きだった彼と別れてからも、何度か人と付き合ったけれど、どれも長続きしない。もう私には仕事しかないんだと、最近では言い聞かせてる。親ももう諦めたらしく、私に結婚話を持ち掛けたりはしない。

「吉田さん。ちょっといい？」

その時、今度は先輩に呼ばれ、私は立ち上がった。

「はい。なんでしょうか」

「これからクライアントと新プロジェクトの企画打ち合わせなの。急で悪いんだけど、一緒に出てくれる？　部長と出るはずだったんだけど、部長が急用で出られないっていうから」

「わかりました」

こんなことは日常茶飯事。私はすぐに支度をして、先輩について会議室へ向かう。

「新プロジェクトって、イベントのですか」

会議室を軽く掃除し、企画書を見ながら、私は先輩にそう尋ねた。

うちは広告会社で、イベントなんかにも携わっている。
「そう。大通り公園のフェスティバル。結構大きなプロジェクトになるわ」
「この規模じゃそうですね。いろんな出店あるんですね。ステージまで」
「うん。チラシとかはこちらで作るけど、これだけてんこもりだと大変ね」
「そうですね。やりがいはありますけど」
その時、会議室の入口に人影が見えた。
「すみません。フェスティバルの打ち合わせはこちらでよろしいでしょうか」
男性の声に、私は固まった。
「はい、そうです。北村様と沢野様ですね。どうぞ中へ」
先輩がそう言って、お客様を中へと通す。
北村和希――。私の忘れられない元彼である。彼もまた、私を見て驚きながらも、やがて何事もなかったかのように、中へと入って座った。
打ち合わせの内容は覚えていない。だが、業種もまったく違う彼がどうしてここにいるのかと思ったが、彼は企画の責任者だという。
彼は音楽の仕事をしていたので、その関係でイベント業の責任者も頼まれたのだと悟った。

その日、私は家に帰るなり、ポケットに入っていた彼の名刺を見つめた。もう三年も経っている。連絡出来るわけがないし、私に未練があるとも思えない。私は仕事と割り切って彼と付き合おうと決めて、ベッドに寝そべる。
彼と別れたのは、お互いが重荷になっていたから。彼は仕事ばかりで、でも結婚を望まなかった。その頃にはもう、ただ会えば楽しいというような、子供みたいな関係では満足しなかったのだ。お互い嫌いで別れたわけではないけれど、あのまま一緒にいたら、お互

い駄目になっていたんだと思う。
その時、私の携帯電話が鳴った。知らない番号に、はっとして握りしめていた名刺を見つめる。彼の番号である――。
迷いに迷って、私は電話に出た。
「はい……」
『北村ですけど』
思いのほか、彼は明るい声をしている。きっと彼はもう、私なんかよりずっと吹っ切れているから、そう接しられるんだと思う。
「ああ、うん……」
『今日は驚いたよ。まさかあんなところで会うとは』
「うん。私も……」
『ああ、ごめん。突然電話なんかして……』
乗り気でない私の声に、彼も気付いたんだと思う。
「う、ううん」
『ああ……今度……食事でもしない？　仕事の話もしたいし』
「……仕事の話なら、私は下っ端だから……」
『馬鹿。口実だよ。おまえに会いたいんだ』
彼の言葉に、私は言葉を失った。
「え……」
『俺が吹っ切れてると思う？　それに、こんなところで会えたんだ。運命とか信じてなかったけど、そう思えるよ。もうおまえにはおまえの生活があるんだろうし、新しい男とかもいるのかもしれないけど……会いたいんだ。もう一度……』
「……」
『おい。聞いてる？　切ったのか？』
「……私も……会いたい……」
涙が溢れ出す。それがわかったのか、電話の向こうで大きな音がした。
『イテ！』
「和希？　どうしたの？」

『ああ、大丈夫。ちょっとぶつけただけ……それより、今から会える？　すぐ出るから』

必死な様子の彼に、私は嬉しくて笑った。少し期待してしまう。

「うん……」

それからの私たちのことは……ご想像にお任せします。

ただ、これだけはいえる。この出会いが奇跡だとすれば、それを手放さない勇気も必要だってこと。

173　一目惚れ

一目惚れって、本当にあるんだ……。

私はその人を見た瞬間、周りの世界など消えて、ただその人だけを見ていた。

「ええ？　どこがいいの、あんな男。顔もスタイルも平均じゃない？」

そばにいた友達がそう言った。

「でも私……あの人が、運命の人だと思う」

なぜそう言い切れたのかはわからない。でも私は、その人が目の前を通り過ぎるまで、ただ見つめていた。

「……声掛けなくていいの？　もう会えないかもしれないのに」

「だって……なんて声かけたらいいのかわかんない」

でも神様。私があの人の運命の人だったならば、どうかもう一度会わせて……そうしたら私、今度こそ声をかけるから……。

そんな神様へのお願いは、思いのほかすぐに叶った。

その日、夕食を食べに行ったレストランで、彼がボーイとして働いているのを見かけたのだ。

「これはもう、運命だわ」

そばにいた友達が言った。

「でも、やっぱりなんて声掛けたらいいのかわかんないね……」

「そりゃあね。一目惚れしましたなんて言っても、受け入れてもらえるとは思えないな。なんだ、この女って思われるのがオチよ」

「じゃあどうすれば……」

恋愛上手な友達を、私は食い入るように見つめる。

「そうねえ。私だったら客として通い詰めるか、はたまたここで働くか……」

「ここで……」

一週間後、私はそのレストランでバイトを始めた。

少しずつ近づいていく。たとえ彼に彼女がいたとしても、もっと大きな障害があっても、私はなぜ彼が運命の人だと思ったのかわかるまで、彼を近くで見ていたいと思う。

初めての一目惚れ、初めての本気の恋が、私を突き動かす。

174　おとうと

僕が初めて殺意というものを抱いたのは、わずか三歳の時。弟が生まれ、すべての目が弟に注がれるのを目の当たりにして、僕は本気で弟が憎かった。

べつに、一概に親や周りの人間が悪いとは思わない。僕は突然、兄としての立場を与えられたが、僕のほうが優遇されることもあったし、時には甘えさせてくれた。それでも僕は、弟に殺意を抱く。

「お兄ちゃん」
歩き始めた弟が、僕に手を伸ばす。
近寄るな。おまえなんか、好きじゃないんだから。

「お兄ちゃん」
学校に通い始めた弟が、僕に手を伸ばす。
近寄るな。おまえなんか、好きじゃないんだから。

「お兄ちゃん」
僕より先に結婚した弟が、僕に手を伸ばす。
近寄るな。おまえなんか、好きじゃないんだから。

「僕のこと、やっぱり嫌いなんだね。でも僕は、お兄ちゃんのこと尊敬してるし、好きだよ」
父親の葬式で、ハンカチを差し出しながら、弟がそう言った。
馬鹿野郎。やっぱりおまえなんか、好きじゃない……。

175　真っ赤なリンゴ

宇宙に浮かぶスペースコロニーには、宇宙で人間が生活出来るかという実験のため、宇宙飛行士の夫婦五組が移り住んだ。結果、五組全員に子供が生まれ、その観察も逐一続けられている。

「地球に行きたいな……」

宇宙で最初に生まれた男の子・アダムが、眼下に見える地球を見て言った。

「いつか行けるわ。あなたたちが大人になったら、地球で生活が送れるかという実験もしなければならないから」

「実験……」

「そう。あなたはそのために生まれたんだから」

母親の言うことは、いつも理屈っぽい。

アダムは溜息をつき、庭へと出ていった。

「アダム」

庭にいたのは、一つ年下の女の子・イヴである。

「イヴ。何をしてるの？」

「今日の分の観察日記を書いているの。ほら、この苗、やっと芽が出たのよ」

「本当だ……この苗も、生きてるんだね」

悲しそうに花壇を見つめるアダムに、イヴが首を傾げる。

「どうかしたの？　悩みごと？」

「……イヴ。考えたことない？　僕たちはどうして実験材料なんだろうって」

「どうしてって……そう決まってるんでしょう？」

「いいの？　僕たちはモルモットなんだよ。この花壇と一緒。花が咲けば検査をして、地球にも送る。僕たちもいつか地球に送られて、死ぬ時は切り刻まれるんだ。そんな人生は嫌だ！」

「でも……非人道的な扱いを受けてるわけじゃないし……」

イブの言葉に、アダムはムッとした様子で背を向けた。
「わかった。もういいよ。イブはそうして言いなりになってればいい」
「待ってよ、アダム。いいものあげるから」
「いいもの？」
アダムは怪訝な顔をする。このコロニーで手に入る物で、見たことがないものはない。
だが、イヴは自信満々で手を開いた。
「ハイ」
イヴの手の中には、真っ赤なリンゴがある。
「なんだ、リンゴじゃないか。でもどうしたの？　まだ季節じゃないのに」
庭の隅にリンゴの木があるが、まだ実は小さく青い。
「木の下に落ちてたの。たぶん、外側の実で成長が早かったのよ。アダムにあげる」
「でも、検査を通さないと……」
「実験材料は嫌なんでしょう？」
イヴはそう言って、リンゴをかじる。挑発するようなイブに、アダムもカッとなってリンゴをかじった。
途端、アダムに吐き気や頭痛が襲う。
「アダム……？」
様子のおかしいアダムに、イヴは慌てて駆け寄った。
だが、イヴもまた急な不快感に襲われる。
「私たちは……いつまでこんな生活を送るの？」
「そうだ、イブ。何をするにも身体測定。検査。採血。来る日も、来る日も……それで僕たちが地球に行く日はあるのか？　地球に行ったらどうだ。地球環境に耐えられるかの実験？　ふざけるな！　なんで僕たちが……！」
日頃押し込めていた不満や絶望の部分が剥き出しになったように、二人の中に暗黒の影が広がる。

「うわあああああ！」

突然、アダムは発狂し、コロニーの中を駆け回った。

イヴは何かに操られているかのように、静かに機械室へと向かい、ためらうことなくスペースコロニーの動力線を切る。

すぐに重力がなくなり、酸素もなくなっていくのがわかった。

その瞬間、アダムの叫びが聞こえ、庭を覆ったドームが割られた。

「何が起こったんだ！」

住人たちが庭にやってくると、アダムはすでに宇宙空間に身を投げて浮いている。

「なんてことだ。アダム！」

「それより庭に大穴が！　もう酸素がもたないぞ！」

パニック状態になったコロニーは、内部から爆発を始めた。動力を断ったイヴが、爆発を引き起こしているのだ。

「救命ボートを……いや、間に合わない！」

人々の声が一つまた一つと消え、やがてすべての声が消え、あたりは静かになった。

宇宙空間に投げ出されたアダムの身体を、真っ赤なリンゴがすり抜けていった。

176　クールな彼氏

私の彼氏はクールだ。それは彼女である私に対しても。
他の子にもそんな態度を取る彼を、私は嬉しく思ってる。だって結構モテるのに、他の子には興味がない素振りを見せるから。彼女としては、安心する。だけど……。
「え、合コン？」
彼氏と二人きりの部屋。友達からの電話に、私は彼を見た。でも彼は、気にする素振りもなくテレビを見つめてる。
「ごめん。また今度ね」
合コンの誘いを断って、私は電話を切った。
「行かないの？　合コン」
彼からそんな言葉を振られ、私は口を曲げる。
「行かないよ」
「なんで？　行けばいいのに」
「……私が合コン行ってもいいの？」
「なんで？　おまえがしっかりしてればいいことだろ」
いつもこんな調子だ。彼は私に対してやきもちを焼いたこともないし、男友達と遊んでも、おまえがしっかりしていればいいことだと、お決まりの文句を言って、私を突き放す言い方をする。
「……ちょっとくらい妬いてくれたっていいじゃん」
ぼそっと言った私にも、彼は背を向けてテレビを見つめてる。
「もういい。合コン行っちゃうからね？」
「おまえの好きにしろよ」
「わかったわよ。じゃあフジ君に電話するから」
私はそう言って、携帯電話を取り出し、さっき電話を掛けてくれた友達に電話を掛けようとした。
「ちょっと待てよ、フジ？」
急に、彼の表情が曇る。

「え？」
「なんだよ、さっきの電話、フジからなの？」
そう言ったのは、電話の相手がお互いの共通の友人だからだろう。
「そうだけど」
「だったらやめろよ」
反旗を翻した彼氏に、私はムッとした。
「は？　なんなの？　あんたが好きにしろって言ったんじゃない」
「フジはべつだ。あいつ、手が早いんで有名なんだからな。おまえのことだって、ずっと気にかけてて……」
私はそこで、初めて辛そうにしている彼の顔を目の当たりにした。
「……相手がフジ君でも、私は浮気なんかしないよ？」
「わかってる。おまえのことは信用してる。だから、俺のために我慢なんかして欲しくなかった。でも、あいつは別。本当におまえのこと狙ってるってわかってるから……」
「なんか……おかしいよ。フジ君じゃなくても、合コンに行ったら強引な人だって来るかもしれないじゃない。それでも行かせようとしたじゃない」
混乱する私の肩を、彼は抱き寄せる。
「行かせようとしたんじゃない。でも言ったろ？　俺のために遊ぶこと我慢してほしくない。それに、どうやったって俺のものだから……誰かに見せつけたいっていうのもあるんだろうな。やきもち焼いてないわけじゃないよ」
「もう……ちゃんと言ってくれなきゃわかんないよ！　合コンなんて行くなって言ってほしいんだよ？」
「わかった。これからはちゃんと言うから……行かないでください」
優しく抱きしめられて、私はその瞬間に彼を許していた。
どんなに冷たくされても、やっぱり彼が好き。

177　公園を抜けたら……

十三歳の真実（まみ）は、友達と会うために家を出て行った。日曜の昼下がり、春の暖かな風が吹き抜ける。

「気持ちいいなあ」

家のすぐそばには公園がある。広くて夜は怖いため近寄らないが、今は昼間で明るい。ここを突っ切れば、待ち合わせの駅まで近い。

「ん？」

公園に入ってすぐに、真実は違和感を覚えた。

振り向くと、公園の入り口が歪んだように見え、その歪みは空間を捻じ曲げているように、あっという間に広がり、真実を包む。

「な、なに？　なんなの！」

思わず目を瞑った真実は、やがてそっと目を開けた。すると、思いがけない光景が飛び込んでくる。

そこはまるで漫画のような近未来に近い光景で、高台のそこから同じ目線で、見慣れぬ一人乗りの乗り物に乗った人々が、空を飛んでいる。

周りは同じように公園のようだが、遊具も見たことがない。

「なんだっていうのよ！」

パニック状態の真実の頭に、何かがぶつかった。

「すみません。ボールが……」

そう言って走ってきた少年は、真実を見て驚いた。

「あんた……人間？！」

「え？　そうですけど……」

真実は変な質問にも答えたが、目の前にいる少年もまた、自分と同じ人間に見える。

「こっちへ」

少年はそう言うと、真実の手首を掴んで、木の茂みへと連れて行った。

「ちょっと、何処へ連れて行くのよ。離して」
「静かに。人間がいることが警察に知れたら、君は捕まってしまうよ」
「え？」
「ああ、とにかく、君を元の世界に戻さなくちゃ」
「……じゃあやっぱり、ここは日本じゃないの？」
「ニホンでもチキュウでもない。時間軸も違う別世界だよ」
少年はそう言うと、さっき真実の頭にぶつかったボールを取り出し、収納されていた突起に触れた。すると、さっき空をたくさん飛んでいた乗り物に変わる。
「とにかく、ここから離れたほうがいい。公園にはたくさん人がいたから、きっと君は見られてる。これは一人用だけど……君はまだ子供だし、家まではなんとかなる。乗って」
「待って。あなたの名前は？　私は真実」
「マーク」
マークと名乗った少年とともに、真実は乗り物に乗って、マークの家へと向かった。
家は日本家屋とはいかないが、よくある西洋の家に似ている。
「さて、君をどうして戻そうか……」
「……どうして人間だと捕まってしまうの？　どうしてあなたは私を助けてくれるの？　どうして私が人間だとわかったの？　あなたは人間じゃないの？」
「質問が多いね。人間は匂いでわかる。僕らの鼻は犬より勝っているからね。僕は君の目には子供に見えているだろうけど、実際の年齢は三八六歳。異世界の勉強をしているから、君のいる世界に興味があるのと、人間解放活動家だ。僕は人間じゃなく……アンドロイド。つまり、ロボットさ」
きちんと答えたマークに、真実は絶句する。
「ロボット……」
「そう。この世界にも人間はいる。でも……家畜だ。もちろん、君

らみたいに頭がいい人間じゃないよ、家畜用として生み出されるだけの命だ。僕らを動かす潤滑油は、人間の油が最適なのさ。でも、僕は長年の研究で、人工的な油を作り出すことに成功した。まだまだ浸透はしていないが……だから人間を殺すことはないと思っているのさ。異世界の人間は、僕たち並みに頭が良いということもわかっているし。だから僕は、君を無下には出来ないんだよ」

真実はショックを受けたが、マークはおかまいなしに家の中を物色し、箱にいろいろな機材を詰め込んでいく。

「どうするの？」

「すまない……君をこの世界に引き入れたのは、僕だと思う。今まで何度か、異世界へ行ってみようと実験を試みて、今日こそ成功するはずだった。でも、僕が行けずに君が来た。これは僕の責任だ」

「じゃあ、あなたがあそこにいたのは、実験のため？」

「そう。だから、僕は君を元の世界に返す使命があるが……あいにくとまだ研究段階。こうして失敗の連続。そしてさっきの実験でエネルギーを使い果たしたが……なんとか別の方法を考えついたからやってみよう。さあ、行くよ」

マークはそう言って、箱を持って振り向く。

「え、何処へ？　ここは安全なんじゃないの？」

「公園に戻るんだ。あそこは一種のパワースポットだと証明されている。他の場所では空間を歪ませることも出来ないんだよ」

「そんな……」

また危険な外へ行くのは嫌だったが、真実にとってはマークしか頼れる人がいない。

二人が家を出ると、目の前には警察がいた。

「嗅ぎつけられたか……」

「マーク。人間の悪臭がすると通報を受けた。なにかの実験に人間を使っているのかね？」

「そうだと答えても見逃してはくれないでしょうね」

マークは警察にそう返事をすると、真実を乗せてもう一度空へと

飛び上がった。
すぐに警察が空から追いかけてくるが、マークはどんどん引き離す。
「この乗り物は改造してあるから僕の方が早いよ。でも……下準備も何も出来ないな」
マークは厳しい顔をしながらも、片手で運転しながら、箱の中を漁る。
「真実にも手伝ってもらわなければ。僕が合図したら、これとこれを同時に前へ投げて。本当は混ぜ合わせてからのがいいんだけど……この際、仕方がない」
「わ、わかったわ」
「公園が見えてきた。一発勝負だ。生きるか死ぬか、行くよ。サン、ニイ、イチ……投げて！」
真実は訳もわからず、マークから受け取ったボールのようなものを同時に前へと放り投げた。
次の瞬間、眩い光とともに、空間が捻じれる。
捻じれた空間に眩暈や錯覚を覚えたが、真実はふと気がつくと、そこは公園の外で、見憶えのある景色があった。
「戻って……来たの？　そうだ、マーク！　マークは？」
真実があたりを見回すと、足元に小指ほどの小さなロボットがあった。それはよく見るロボットの姿だが、儚げながらも動いている。
「マーク……マークなのね？」
「こっちの世界では、ずいぶん小さくなってしまうようだね。姿も……僕の声が聞こえる？」
「うん、聞こえるよ。マークが向こうの世界に帰るまで、今度は私が守ってあげる」
「ありがとう。帰っても犯罪者だ。しばらくはこっちの世界も見てみようかな」
「うん。大歓迎よ」
真実はブラウスのポケットにマークを入れると、駅へと向かって

いった。

「いけない。約束の時間に遅れちゃう」

今日はもう、公園を突っ切ることは出来なかったが、不思議な体験とともに新しい友達が出来た真実であった。

178　つながり

加藤家は両親を筆頭に、十九歳の長女、十六歳の次女、十四歳の長男の僕、十三歳の次男、十歳の三女がいる五人兄弟だ。

お父さんは温和で真面目な会社員。お母さんは主婦をしている。

いつからだっけ……この五人兄弟の中で、僕だけが血の繋がりがないということを知ったのは……。

「将司。早く食べちゃいなさい」

お母さんが僕を呼ぶ。でも、血の繋がりはないと知ってから、反抗期も手伝って、あまり会話をしなくなった。

「……いらね」

僕はそう言って、朝食に手をつけず、学校へと出て行った。

反抗期の僕に、お母さんは困った顔をしてる。血の繋がりがないと知ってから、余計に両親には感謝しているけど、僕はまだ子供らしく、素直に恩を受けられないでいる。

「将司。そこへ座りなさい」

会話がなくなってしばらくして、夜にお父さんが僕をリビングに呼び出した。隣にはお母さん。兄弟たちは締め出されている。

「おまえの最近の行動は目に余る。反抗期だとも思うが、何か不満があるのなら言いなさい」

お父さんはそう言って、僕を真っ直ぐに見つめる。

「……僕に何かあると思うの？」

挑発するように、僕はそう言った。本当はこんなことを言いたいわけじゃない。でも、なんだか腹立たしい思いが襲う。

「それはわからない。だが、おまえに何かあるのなら話してみてくれないか。私たちはおまえの親なんだから」

「……まるで親だってことを植え付けようとしているみたいだ。別に何もないよ」

「そうか……おまえ、知っていたんだな？」
開き直ったお父さんに、僕はカッとした。
「ああ、知ってるよ！　僕だけがこの家の人間じゃないってことはね」
そう言って、僕は立ち上がった。お父さんは眉を顰め、僕を見つめている。
「……座って話そう、将司。おまえには、大きくなったら言おうと思っていたんだが……いつ知ったんだ？」
「……去年の正月、親戚のおばさんたちが来たときに、話しているのを聞いちゃったんだ」
「そうか……去年からずっと、おまえは一人で抱え込んでいたんだな。ごめんな……」
お父さんの言葉に、僕はなぜだか涙を流してしまった。
そんな僕を抱きしめたのは、お母さんだった。
「将司は私の子供よ！　今までだってこれからだって、他の子たちと分けて育てた覚えもない。あんたは立派なこの家の長男よ」
お母さんの真剣な目に見つめられ、僕は黙り込んでしまう。お母さんの涙を見たのは、いつぶりだろう。
「ごめん、なさい……」
思わず、僕はそう言った。
「謝ることはない。おまえの悩みは想像出来る。我々もまた、同じ悩みを抱えてたんだから……」
「……教えて。どうして僕だけ、血の繋がりがないのか……」
「血の繋がりはあるよ。おまえは、お父さんの弟の子供だ」
それを聞いて、僕は目を見開いた。詳しいことは、今まで想像していただけで何も知らなかったのだ。男の子が欲しくて、僕は施設から引き取られたのかまで思っていたが、そうではないらしい。
「おまえが生まれて間もなく、お父さんの弟夫婦は事故で亡くなったんだ。おまえを私たちに預けて、友人の結婚式へ出た帰りのことだった。私たちは、おまえを引き取ることに何ら抵抗もなかったよ。

弟の忘れ形見だし、おまえの本当に両親の分まで、幸せに生きてもらいたいと思っている。だから、おまえが悩むことは当然だが、私たちはおまえを他の子供たちと同じように育ててきたつもりだ。これからも、私たちはおまえの親でいたいと思っている。それだけはわかってくれ」

そう言ったお父さんの愛が、僕にも痛いほど伝わる。

そして今までのことを思い出した。学校行事も進んで参加してくれたし、他の兄弟たちと同じく扱ってくれた両親に、誇りを覚えた。

「ごめんなさい……」

僕は素直にそう言った。

途端に、お母さんの手が僕の顔を包む。同時に、お父さんの手が僕の頭を撫でる。

「わかってくれてありがとう。でもこれからも、悩む必要はないんだよ。血の繋がりだって、まったくの他人じゃない。それに、血の繋がりがなんだ。生みの親より育ての親って言うだろう？　誰がなんと言おうと、おまえはうちの息子だ」

「ありがとう……お父さん。お母さん」

こうして、僕の反抗期は終わった。

血の繋がりがなんだ。確かに今ではそう思う。僕は今でも、両親に愛されているという実感もあれば、兄弟たちも好きだ。

天国にいるはずの、僕を産んでくれた両親に言いたい。僕は今、幸せです、と――。

179　愛をください

私はこの先、ずっと一人で生きていくものと思っていました。

子供の頃に両親が離婚。私も将来結婚などすれば、そのような道を歩むものだと悟っており、二十歳になった現在も、異性と付き合っても長続きせず、ただ体だけの関係に満足しています。時々、結婚したいと言ってくる男性もいましたが、私は上手に逃げては、熱愛中ですら心のどこかで、一歩引いて冷めた目で物事を見据えていたのです。

「愛……」

私はそんな自分の名前が嫌いです。愛なんて感情、本当はどこにもないって思うから。

「空いたよ。座っていいよ」

彼の勧めで、私は電車の空席に座った。反対側の席には、小さな子供連れの若夫婦。お父さんが目を細めて子供をあやしている。

きっといずれ別れるんだろうな……と、私は勝手に判断し、目を背ける。仲の良い家族が気持ち悪いとすら感じる自分は、異常だとも理解している。

「ねえ。今日泊まっていい？」

私はそう言った。あんまり家には帰りたくない。

「いいけど、ちゃんと家に連絡しろよ」

彼が答える。彼は今までの彼氏とは違うタイプで、大人の男性。ただヤリたいだけの男ばかりが周りにいたから、彼との交際は逆に刺激的なものだった。安心もするし、なぜか心が落ち着く。

その夜、私は彼の腕の中で目を覚ました。彼は私の髪を撫で、見つめている。

父親を求めているわけではないが、それに匹敵するほどの安心感に、私は彼を絶対的に信頼しているのだと思う。

「愛……ずっとそばにいてくれな」
突然の彼の言葉に、私は驚いた。
「どうしたの？　急に……」
「うん……だっておまえ、どっか行っちゃいそうなんだもん」
「……行かないよ。でも、ずっとなんて言葉、本当にあるのかな……」
私がそう言ったのは、永遠なんて信じていないから。彼のことは好きだし、ずっと一緒にいたいとも思うけど、いつか別れると思うと、熱くならずにいたいとも思う。
「証明してあげる」
彼はそう言うと、私の額、鼻、そして唇にキスをしてきた。
「これが証明？」
「誓いのキス」
「え？」
「俺はおまえが望む限り、ずっとそばにいるよ。どれだけ抱きしめても満たされないなら、満たされるまで抱きしめててやる。俺はおまえの絶対的な理解者でいたいし、俺も自分らしくいられるのはおまえだけだと思う」
彼の言葉に微笑み、私は彼に抱きついた。
嬉しい――でもこんな時でさえ、一歩後ろから冷静に見つめている自分がいる。
それでもいい。満たされたい。この人とずっと一緒にいたい。そしていつか、一歩後ろにいる私と同化出来ることがあるかもしれない。この人と一緒なら……そう思った。
「愛……」
まるで宝物のようにそう呼ばれ、私は初めて心から愛で満たされるのを感じていた。

１８０　卑屈なシンデレラ

私の名前は、佐藤望美（さとうのぞみ）。高校一年生。

自分が嫌い。コンプレックスの塊なのは、子供の頃から小太りで、顔も肌も綺麗じゃないから、いじめられて馬鹿にされて、それが今日まで続いてきた。

今までやってきたダイエットは数知れず。でも、あんまり効果はなかった。

夢見がちなのもいじめの原因だって思ってるけど、夢見ることはやめられない。一言でいえばオタク。アニメの世界のような出会いや冒険に憧れている。現実で叶えられない分、せめて夢見たっていいじゃないと、最近では開き直っちゃってる。

「ぞみー」

バイト先の喫茶店で、学校の友達でもある由美子が、私を愛称で呼ぶ。明るく振舞っていれば、対していじめられることもないというのは学習済みだけど、心から笑い合える友達はまだいない。

シンデレラもいじめられていたけど、美しい彼女がチャンスをモノにするのはある意味当然のことだと思う。でも、私はシンデレラじゃない。

「そろそろ来るよ。憧れの君」

「そうだね。楽しみー」

話を合わせるように、私は明るく笑ってそう答える。

その時、背の高い男性が店に入ってきた。女子店員のテンションが上がる。

彼は大学生くらいの若い男の人で、毎日のように一人でこの店にやってくる。いつも本を読んだり、ノートを広げたりして、一時間くらいここにいる。その雰囲気や、見た目の格好良さもあって、女子店員たちは憧れの君と称して、彼が来るのを待ち焦がれている。

「いらっしゃいませ」

もちろん私も、思わず見とれてしまうくらいの彼だが、現実の世界で想いが叶うはずもなく、ただ仕事の合間の恋バナに盛り上がっているだけの節もある。

「すみません」

彼が振り向くと同時に、私と目が合った。タイミング的にも、私がオーダーを取ることになる。

「はい。ご注文、お決まりでしょうか」

「トーストセットください。ブレンドコーヒーで」

「かしこまりました」

「あと……今日、バイトが終わったら少し話せないかな？」

突然の彼の言葉に、私は目を丸くさせた。

「は？」

「あ……いきなりごめんね。怖いなら、ここでいいんだ。待ってるから、終わったら一緒にここでお茶でも……駄目かな？」

他の店員の子が見ている手前、私は困り果てた。と同時に、嬉しくて真っ赤にもなるし、この人の意図が分からず、騙されてはいけないと身構える部分もある。

そんな複雑の表情の私に、彼も苦笑する。

「急にごめん。無理ならいいんだけど……ずっと君のこと見てて、いいなって思ってたんだよ」

私は真っ赤になって、目を瞑った。

「か、からかわないでください……何かのバツゲームか何かですか？　それともあなた、趣味が悪いんですか？　こんなところでそんなこと言うなんて、異常です！」

私たちの様子に気付いて、店内の目がこちらに向けられている。でも、私は騙されたくなかったし、傷付けられたくなかった。

急に彼の目が真剣になり、出していた本をバッグにしまう。

「オーダーしなくてすみません。今日はもう帰ります」

「え……」

「……信じられないならそれでいい。でも、人の勇気を踏みにじる

行為も異常だ。そっちこそ、からかわないでくれ」
そう言うと、彼は喫茶店を出て行った。
「望美ちゃん」
その時、私に声を掛けてきたのは、さっきシフトに入ったバイトの先輩である。
「先輩……」
「ごめん！　昨日、あの人から預かった手紙があったの。望美ちゃんに……私のほうが今日遅かったから、タイミング合わなかったかな……」
先輩はそう言って、大学名の入った封筒を渡す。私はそれを受け取ると、仕事も忘れて封を開ける。
中には、彼がいつも使っているノートと見られる一枚の紙が入っている。

佐藤様。突然こんな手紙を託したので驚かれたと思います。
僕の名前は、荻原樹（おぎわらいつき）といいます。大学生です。あなたの名前は、名札で見て知っていました。
いつもよく働く子だなと感心して見ていたら、いつの間にあなたがバイトに入っていない日に来るのが寂しくなりました。
突然の手紙の上、私事で恐縮ですが、明日は僕の誕生日です。突然の手紙で不審に思ったことでしょうが、よかったら一緒に祝ってくれませんか？
僕は君と話がしてみたいです。そして出来れば、お付き合いしたいと思っています。
本当は今日誘いたかったのですが、今日はあなたがバイトに来ないと聞いて、この手紙を店員さんに託すことにしました。出来れば、明日僕が行くまでに見て、返事を聞かせてくれると嬉しいです。
それでは、また明日――。乱筆失礼しました。

「ぞみ！　追いかけなくていいの？」
由美子の声に、私は我に返った。
「で、でもバイト……」
「そんなのいいよ。追いかけるなら早く行きな！」
由美子に後押しされて、私は店を飛び出して行った。
目の前には駅。彼が大学生なら、大学のあるこの街から電車で帰る途中に店に寄っているのかと思い、私は迷わず駅へ向かった。
すると、駅前広場の喫煙所で、彼の姿を見つけた。
「お、荻原さん！」
私を見つけて、荻原さんは煙草を消し、驚いて私を見つめる。
「どうしたの？　バイトは……」
「……飛び出してきちゃいました。ごめんなさい！　手紙、今読んで……正直、まだ信じられません。あなたみたいな格好の良い人が、私なんかを……私は散々傷付いてきました。こんな容姿だし、デブだし……」
「もういいよ。僕も悪かったんだ。突然告白したのに、信じられないのは当然だ。なのにカッとなっちゃって……自己中だった。ごめんなさい」
私たちは、お互いを見つめる。だけど、私はすぐに俯いた。顔をまじまじ見られたくない。
「……僕も昔はデブだったんだ。それでいじめられたこともあるし。だから、君の気持はよくわかるよ。それで気になったんだとも思う。でも実際、明るくてよく働く子だなって思ったんだ。それに君は、自分が思ってるほど太ってないよ」
彼の気持ちを知って、私は少し納得した。
「誕生日祝いしましょう」
「……いいの？　まあ、話す口実でもあったんだけど」

お互いの距離がだんだんと縮まっていくのを感じる。私は生まれて初めて、容姿ではない部分を見てくれる人に出会えたのだ。

私たちは、二人で喫茶店へと戻っていった。

181　星のかけら

都会で育った僕にとって、あの夏のことは忘れない。
あの夏、僕は大人の階段を、一段も二段も上がったと思う。それは何年経っても、色褪せることのない思い出だ――。

中学受験に失敗した僕は、当然のことながら公立の中学校へ通った。別に嫌ではなかった。小学校からの友達も大勢いるし、勉強のレベルも高くない。
耐えられなかったのは、私立中学に入れたかった親、特に母親の目線。そして失敗したというレッテルを貼る親戚のおばさん、近所の人たちの態度は辛かった。
そんな人目を避けるように、その夏、僕は田舎の祖父母の家へ出かけた。親から離れて静かにしたいという僕の願いを、お父さんが聞いてくれたのだ。
「二週間、お世話になります」
僕はそう言って、祖父母の家へ上がった。田舎ということでなかなか来る機会がなく、小学校高学年になってからはまったく来ていなかった。
「よく来たね。ゆっくりしていきなさい」
そう言ったおばあちゃんの言葉に、僕の緊張は解れた。
「こんにちは」
その時、玄関が開いて、家へ上がろうとしていた僕は、とっさに戻って振り向いた。するとそこには、同じ年くらいの女の子がいる。
「あれ？　こんにちは……」
女の子は、僕に向かってそうお辞儀をした。
「空(そら)ちゃん。どうしたの？」
「これ、実家から送ってきた野菜です。よかったらどうぞ……」
「そうなの。ありがとう」

おばあちゃんが受け取ると、女の子は会釈をして去っていった。
後でおばあちゃんから、近くに住んでいる空という女の子だと聞かされた。僕と同じ年で、病弱なために田舎で母親と静養しているらしいが、出来ることはなんでもやりたいと、進んで外へ出ているそうだ。
少しばかり、淡い恋も期待しながら、僕は一日目を終えた。

次の日、気分転換に外へ出ると、早速、空という女の子に出くわした。照れがあって、自分からは声もかけられない。
「こんにちは……」
そんな僕に反し、彼女はそう言って会釈する。
「……どうも」
「私、空。あなたは？」
「……晋平」
そこから僕らは、なぜか意気投合した。
空は色白で細く、直射日光を避ける生活をしているために病弱なのだと見た目にもわかったが、豪快な笑顔や明るい声が、そんなことを忘れされる女の子だった。

僕らの夏休みは、あっという間に過ぎた。二週間と言わずにもう少しこちらにいるのを延ばそうかと思ったが、電話で母親に反対されたのと、どのみち数週間後には夏休みが終わるため、別れは待っている。
「そう。予定通り、明日帰っちゃうんだね」
空が初めて悲しそうに笑った。僕は、緊張しながらも、そっと空の手を握る。
「……手紙、書くよ。空も実家は東京なんだろ？　静養して元気になったら、帰って来て会えるよな」
その言葉に、空は笑って答えた。
「晋平。今日、夜抜け出せないかな？」

「え？」
「見せたいものがあるの。夜……九時に、ここへ来て」
「僕はいいけど……空は大丈夫なの？」
「うん、平気。約束よ」
そう言って空と分かれ、僕は空との約束通り、家のすぐ近くにある小高い丘へと登っていった。
田舎はすでに真っ暗で、懐中電灯があっても怖くて歩けない。空は大丈夫かと思ったけど、丘の上にはすでに光がある。
「晋平。こっち」
僕の姿を確認すると、空が懐中電灯を消した。
「なんで消すんだよ……」
そう言う僕の目に、蛍の光が飛び込んできた。
「わあ……すごい！　見せたかったものってこれ？」
僕も懐中電灯を切って、思わずそう言った。周りには無数の蛍の光が浮かぶ。
空は僕の手を取り、その手を上へ上げた。
「うん。あとね……上を見て」
僕は圧倒された。ここへ来て何度も星の美しさは見ていたのだが、これほどまでに宇宙と一体となるようなすごさは感じなかった。また、地上には蛍という光があり、この丘の上は一つの小宇宙のように思える。
「わっ！」
僕は我を忘れ、野原の上に倒れ込んだ。
「僕が宇宙になったみたいだ……僕たち、星になってる」
その言葉に喜ぶように、空も僕の隣に寝転ぶ。
「この光景を、晋平に見せたかったの。晋平と一緒に見たかったの……」
僕はもう一度、空と手を繋ぐ。
「ありがとう。この光景を、僕は一生忘れないよ」
「私も……忘れない」

しばらく無言のままでいたが、僕はそっと起き上がる。
「夏とはいえ、田舎の夜は冷えるね。そろそろ帰ろうか。送るよ」
だが、空は返事をしない。
「空？」
それから後のことは、よく覚えていない。でも、空の体はすでに冷たくなっており、慌てて空を抱えて家へ戻ると、空のお母さんが来て騒ぎになっていた。病院へ行っても、もう間に合わなかった――。

僕は実家へ帰るのを結局数日遅らせ、空の近くにいた。空のお母さんは僕を責めながらも、最後に空に好きな人が出来てよかったとも言ってくれた。
空は知っていたそうだ。自分の命が長くないことを。だから、僕が元気になったら会えるねと言っても、笑って答えただけだったのだろう。

あの夏のことを、僕は一生忘れない。
怖いくらい吸いこまれそうなあの光景も、空という少女のことも――。

182　そらがなくから

そらがなくから、もう帰ろう
私もなきたくなってしまう
あの水滴、一粒一粒に洗い流されたらいいのに
過去も　不安も　羞恥も　孤独も
なにも感じないほどまっさらになって
そう、赤ん坊のように無垢なまま
誰かに守られて生きていたい
夢や　希望や　幸福や　未来や
そんなことだけを抱えたまま
私も誰かを守り愛していきたい
暗く心が沈んでしまう前に
そらがなくから、もう帰ろう

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

１８３　マザーコンプレックス

あなたのために生きてきました。
あなたの思い通りに、あなたの望むように、あなたの思い描くままに、
僕はあなたの敷いたレールの上を、脱線することなく今日まで走ってまいりました。

努力を苦とは思いませんでした。
マザコンと言われても、つまらないと言われても、気持ちが悪いと言われても、
親を敬うことに抵抗などありませんでした。

そんな僕にも、初めて本当の恋と呼べるような、好きな女性が出来ました。
けれども彼女は、僕のことなど相手にしてくれません。
そう言えば、あなたは彼女のことを悪いと言うのでしょうか。
それとも、家柄の問題で、彼女は問題外と言うのでしょうか。

あなた今日、見合い写真を僕に見せました。
このまま僕は彼女のことを忘れ、あなたの敷いたレールを走り続けるのでしょうか。
頑張ることを知らずに、結婚も結婚後のことも、あなたに判断を仰ぐのでしょうか。

僕には判断力や決断力がありません。
あなたがリモコン、僕はロボット。
それがおかしいとも思わなければ、それがいいのだと思い込まされてきました。

だけど時々、思うのです。
あなたが死んだら、僕はどうして生きていけばいいのかと。
そして誰もが口を揃えて言う、僕が異常者だということを、僕はどこかで認めているのです。

これは、あなたに対するささやかな抵抗？
それでもあなたは、僕を洗脳し続ける。
そして僕も、この居心地のいい場所から出たくないために、現実から目を逸らし続けるのです。

184　最強三人組

小六の俺たちは最強だった。俺・テツとシュウとコージ、俺たちはいつも一緒で、バカやって遊んでた。

「テツ！　エロ本見っけた」

「こっちも」

市民グラウンドの脇は、エロ本の宝庫。クラスメイトの女共にマドンナ的な子はいたけど、四六時中一緒はマジ勘弁。男同士で遊んでたほうが遥かに楽しい。

「あれ、シュウは？」

いつの間に姿が見えなくなったシュウは、すぐに姿を現わした。その手には、数冊のエロ本。

「あははは！　なんだよ、シュウ。すげえ戦利品」

その時、シュウは曇った顔を見せた。

「餞別……ってわけじゃないけどさ。ごめん。俺、中学私立に行くことになった……」

その言葉に、俺とコージは顔を見合わせる。

「え……でもおまえ、公立にするって……」

「お母さんが私立に行けって……この間受験があったんだけど、受かったんだ」

「そんな……」

俺たちは、くだらない遊びも忘れ、その場に立ち尽くす。

「……だからなんだよ。離れ離れになるからって、友達じゃなくなるわけじゃないだろ」

そう言ったのはコージだ。コージの言葉に、俺も我に返った。

「そうだよな。一緒の学校行けないのは正直残念だ。中学も高校も、三人で馬鹿やってたかった。でも……おめでとう、シュウ。春からぼっちゃんか」

「ぼっちゃんはやめてくれよ。でも……ごめん。俺も悔しいよ」

そう言ったシュウに、俺たちはまた少し沈んだ。

その春、シュウは私立中学に入学。俺とコージは同じ公立の中学に通ったが、クラスも違えば自然と会う機会もなくなっていた。最強だと思ってた三人組は、こうして次第にバラバラになり、高校へ上がる頃には、俺とコージも別々の高校になり、それこそパタリと音信不通になってしまった。

それから数年後の冬――。

俺は一人、成人式へと向かった。

「テツ？」

そう呼ばれ振り向くと、そこにはシュウとコージがいる。

「おまえら……」

「今、そこで会ったんだ。テツとも会えるかと思ったけど、よかった」

お互いに少し大人びた感じで、少し照れたものの、会えば昔が蘇り、話も弾む。

「この後、暇？　久しぶりにどっか行かね？」

「じゃあ、あそこ行こうよ。エロ本島」

「あははは。変わらねえ！　でもいいんじゃない？　あそこならあんまり人も来ないし。ゆっくり話せるよ」

俺たちは、よく遊んでいたあのエロ本の宝庫である市民グラウンド裏へと向かっていった。

目的はそれだけじゃない。俺たちは、忘れていなかった。いや、会って思い出したというのもある。

「確かこのへんだったよな……」

「うん。間違いないよ。このデカイ石、あの時のままだ」

大した器具もなく、俺たちは地面を掘り続ける。

しばらく掘ると、缶に当たる音がした。

「あった！」

それは大きなタイムカプセル。俺たち三人組がバラバラになった中一の春に、三人で埋めたものだった。

「こんな箱だったっけ？」

「そうだよ。煎餅の缶、持って来たの俺だもん」

俺はそう言って、土のついた缶の箱を開けた。

中にはノートの切れ端と、宝物だったねりけし、お菓子のシールや、当時のエロ本が入っている。

「うわ。くだらねー」

「でも懐かしい」

ノートの切れ端を開くと、そこには三人の寄せ書きが書かれている。

シュウは「私立行くけどずっと友達でいてくれ！」、コージは「ハタチになったら会おうぜ！」、俺は「俺たちはいつだって最強三人組だ！」と書いていた。短いけど、当時の思いが蘇る気がした。

俺たちは、それぞれに笑う。

「汚ねえ字」

それから俺たちの交流は復活した。みんなそれぞれ、就職や結婚を迎えたけど、今でも家族ぐるみの付き合いを続けている。

俺たちは、死ぬまで最強三人組だ！

185　ずっとそばにいさせて

付き合えるだけで幸せだと思ってた。

手を繋ぐだけで幸せだと思ってた。

一緒にいられるだけで幸せだと思ってた。

でも、人間って醜い。

どんどん欲も出てくれば、怒ったり、諭したり。

明日が来る保障なんてどこにもないのに、ひどいことを言って別れた夜もある。

その度に許してくれる、あなた。

あなたの広い心に見合えるだけの人間になりたい。

あなたが好きです。

ずっとそばにいさせて。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

186　殺意

私が十歳の時、妹が生まれた。
家族全員が待ちに待った、新しい家族。私も当然、嬉しかった。
「大きくなったら、一緒にお買い物したりしようね」
仲のいい姉妹。両親も微笑ましく私と妹を見つめる。

妹が生まれてから一年ほど経ったある日、お母さんは私と妹を部屋に残し、台所へ向かった。最近ではよくある光景である。
私は妹とおもちゃで遊んでいたが、妹がぐずり始めたので、ソファの上でジャンプをさせて遊び始める。もちろん手は妹の腰に当てているし、ジャンプが好きな妹は、この遊びが好きで、すぐに機嫌が直る。
でも、私はふと妹から手を離した。それは本当に無意識のこと。悪意も何もない。
妹はそのままソファから転げ落ち、泣いた。
私は我に返ったが、まるで自分の魂が抜けていたかのようなほんの数秒の感覚に、うっとりとさえ感じる。
「どうしたの？」
その時、お母さんが妹の泣き声を聞きつけてやってきた。
ソファから落ちて泣いている妹。立ち尽くしている私。その光景を見たお母さんは、すぐに妹を抱き上げ、私を睨んだ。
「なんてことするの！　お姉ちゃんでしょう。まだ赤ん坊の妹に卑劣な真似をして！」
お母さんは、そう言って私を怒鳴りつける。
そうか、私はひどいことをしたのか。でも今の私は脱け殻で、罪悪感というものもなければ、怒りも後悔も悲しみもない。

だけど、その日の私の過ちは一生後悔しなければならないものと

なった。

私への信頼はなくなり、幼い妹ばかりを可愛がる両親。それは大きくなるにつれてひどくなっていき、勉強もスポーツも並程度の私と違って、妹はどちらも万能、愛されて生きてきた。それは私とはまったく違う扱いで……なぜ同じ親から生まれたのに、こんな差別を受けるのか。ひどい仕打ちに思えた。

私の妹への不満は募るばかり。いつしか殺意まで芽生えたが、妹はなんの危機感もないらしい。

「お姉ちゃん。私、今度結婚することになったの」

大人になり、十も違う妹が、私より先に結婚報告をした。

「そうなの。おめでとう」

「もう。本当に喜んでくれてる？」

「もちろんだよ」

「そう。本当は、お姉ちゃんが結婚した後にって思ってたんだけど……」

「気にしなくていいわよ」

私への風当たりは、これで更に厳しくなるだろうが、私は内心ほっとしていた。

妹が外へ嫁げば、私は親を独り占め出来るかもしれない。そんな浅はかな考えもあったが、それよりも強くあった、妹への殺意――。

「早くどこかへ行って。じゃないと私、あなたを殺してしまうかもしれないから……」

私はぼそっとそう言うと、がらんとなった家の中を、一人徘徊した。

１８７　異国の風に抱かれて

結婚して十五年、夫と別れた。

四十を間近に控え、一人身。子供もおらず、将来への希望も持てない。これからどうして生きていけばいいのか、自分を恥じて実家にも帰れない。

死ぬことなんて考えていなかったけど、何処か遠くへ行きたいと思い立ち、準備もそぞろに私は日本を離れた。

幸い、日常会話程度の英語は出来たし、貯金もあったので、着の身着のままその日暮らし。異国の人々は時に暖かく、そして冷たい。

「えーと……チェンジチェンジ、プリーズ、オーケー？」

拙い英語に、私は振り返る。

そこには東洋人の男性が、困ったように身振り手振りで話している。

「あの……もしかして日本の方ですか？」

なぜか放っておけずに、私はその人に声をかけた。

「あ、はい。あなたも？」

男性はほっとしたように笑う。

「ええ。よかったら通訳しますよ」

「ありがたい！」

そこから彼とは意気投合。懐かしい日本語で話したかったのもあるんだと思う。

彼は私より一つ年下で、急な仕事でここへ来たらしい。英語もままならないようなので、私は彼の通訳を買って出たのだ。

「そう。離婚して一人旅……」

私の境遇に同情し、彼はそう言った。

「ええ。でももう吹っ切れたわ。そろそろ日本に帰ろうと思ってた

ところ。そうそう逃げているわけにもいかないし、気分新たに頑張らないとね」

「強いね……そう見せなきゃやっていられないっていうのもわかるよ。僕も離婚を経験してるから」

「そうなの……？」

「ああ。たった一年の結婚生活。まあ、独身貴族も楽しいもんだよ」

「そう……」

異国の地、お互い見知らぬ人なのに、同じ国の人間だからということで、私たちは一瞬にして絶対的な信頼感を得ていた。

「日本に帰っても、連絡していいかな？」

彼の言葉に、私は頬を染める。

「ええ、もちろん」

それから私たちは、同じ便で日本に帰った。

一瞬にして燃え上がったこれが恋なら、終わりも早いかもしれない。でも寂しい一人身の私たちには、互いの存在が新たな生きる支えの一つになっていることも、間違いじゃない。

188　悪魔の契約

（あいつを殺したい……でも殺せない。人としてクラスメイトとして、自分の人生を棒に振るわけにはいかない）

エイ子は毎日のように殺意を募らせた。相手は元彼の秀樹。

クラスメイトの秀樹からの告白で付き合ったものの、ものの三ヶ月で浮気されて別れた。

以来、エイ子はネットや図書館で彼を殺す手立てを読み漁る。

（毒殺？　刺殺？　殺人依頼？　直接手を下すのは気が引ける）

その時、エイ子は黒魔術の本に釘付けになった。

（馬鹿馬鹿しい……恋のまじないも叶った試しがない。でも、もしこれに書かれているように悪魔を召喚出来たのならば……）

藁にもすがる思いだった。

エイ子はその本を持ち帰ると、庭に魔方陣を書いた。

広い家だが、もはや庭に出る者も少なく、その姿を見られることはないだろう。仮に見られたとしても、また何か変な遊びが流行っていると、両親や祖父母は思うはずだ。

「ソロモン……○×△◇※＃□○△◇※＃□×○×△◇※＃□×……」

とてつもなく長い呪文を唱えるが、うんともすんとも言わない。

「はあ……やっぱ駄目だよね。誰でもいいから出てきて秀樹を殺してよ！」

その時、一瞬、眩い光に包まれたかと思うと、辺りは真っ暗になった。

そして目の前には、美しい男性が立っている。

「ほう……殺しで悪魔を召喚とは、どんな悪人かと思えば、こんなガキの女とはがっかりだぜ」

溜息をつく男性に、エイ子は頬を染めた。

「あなた、あ、あ、悪魔？！」

「自分で呼んだんだ。誰かくらいはわかるだろう。しかし……ガキのくせにまともな魔方陣書きやがってからに……」
「あ、あたしエイ子！　人を一人殺してほしいの」
「……いいよ。契約しても。でも一つ、条件がある。キスして」
「ええっ？　そ、そんなこと、本に書かれてなかった……」
エイ子は真っ赤になって、悪魔を見つめる。見れば見るほど美しい男性だ。
「そりゃあそうだ。これは個人的なお願い。こんな美しい悪魔とキス出来るんだ。相手にとって不足はない、だろ？」
「……そうね」
「でも、俺が契約を受ければ、おまえの魂は地獄に落ちる。二度と転生も出来ないし、おまえの魂に平穏は訪れない。無限の苦しみを味わうことになるんだぞ」
「……いいわ。今の苦しみより上があるなら、のぞむところじゃない」
エイ子はそう言って、悪魔の唇にキスをした。
「では、契約成立」
悪魔はニヤリと笑って、エイ子の手を取る。
「では、誰を殺したいって？」
「秀樹。元彼よ」
「女の恨みは怖いな」
「あいつがいけないのよ。自分から告白しといて、浮気して勝手に別れるなんて言ってさ」
「なるほど。じゃあ、エイ子は秀樹の鼻を明かせばいいんじゃないか」
悪魔の言葉に、エイ子は考える。
「まあ……そうね。でも、クラスメイトだから毎日顔合わせるのよ？　浮気相手の子もね。そんな毎日嫌なの」
「まあとりあえず、デートしようか」
「はあ？」

「せっかく召喚されたんだ。人間として街を歩いてみたいという、俺の夢を叶えてくれてもいいんじゃないか？」
　乗せられるように、エイ子は悪魔と街へと出かけて行った。
「エイ子。服買って」
「いいけど……あんた、名前は？」
「名乗るほどのもんじゃない」
「なにそれ」
　笑いながら、エイ子は悪魔と歩いて行く。
　そして悪魔の服を選び、買い与え、デートを続ける。あまりに美しい悪魔に、街の人々は振り返った。
「みんな振り返るね。当たり前か、こんなに綺麗な顔してるんだもの」
「そりゃあ、悪魔だからな」
「え？　悪魔はみんな綺麗なの？」
「天使よりはな。じゃないと、誰も悪魔に魂なんてくれないだろ？」
　悲しく笑って、悪魔はエイ子の手を取った。
　その時、前から秀樹とその彼女が歩いてきた。
「秀樹……」
「エイ子……」
　互いに固まり、秀樹とその彼女は悪魔を見つめる。
「……俺の彼女に気安く話しかけないでくれる？　行こう、エイ子」
　悪魔はそう言うと、エイ子の腰に手を回し、家へと帰っていった。
「ハハハ。見た？　あいつらの顔。俺に見とれちゃってさ……エイ子も趣味悪いな。あんな男でいいなら、ゴロゴロしてんだろ。あんな男のために魂捨てるなんてもったいないよ」
「……え？」
　悪魔はエイ子を抱きしめ、笑った。
「デートに付き合ってくれてありがとう。俺は極悪人しか相手にしないんだ。よって、この契約は破棄させてもらう」
「え？」

「秀樹の鼻を明かすことは出来たみたいだし……エイ子もわかったろ？　秀樹だけが男じゃないってさ。じゃあな。もっといい男見つけろよ」

言葉少なく、悪魔はその場から消えた。

「ちょ、ちょっと！　人の話も聞きなさいよ！」

エイ子は広い庭に一人きり残された。だが、もう秀樹に対する執着心も殺意もない。

「……」

エイ子は真っ暗な空を見上げ、笑った。

「ありがと。そうね、馬鹿みたい。あんな男のためになんか……」

悪魔は消えた。契約もない。だが、エイ子が超美系の男性と歩いていたことは、街中の噂になっていた。

「あの人誰だったの？　あたし、あの後、秀樹と別れたよ。私もエイ子みたいに、いい男見つけなくちゃと思って」

秀樹の彼女がそう言ったので、エイ子はにやりと笑った。

189　七夕の少女

私たちは、織姫と彦星みたい。

こんなにも惹かれあっているのに、なぜ離れなければならないのか。

今の時代に、身分も何もないはずなのに。

それでもあなたは、私と会うことを禁じられ、会えないまま。

せめて今日くらい星が輝く日は、あなたの温もりに抱かれたい。

早く大人になれば、あなたと結ばれることは出来るでしょうか。

それとも、あなたに素敵な人が出来てしまうかもしれない。

そう考えると、私は気が気ではありません。

ああ、なんて綺麗な夜でしょう。

織姫と彦星は、今年も無事に会えたかしら。

私の彦星は――。

１９０　三十年目の未来

あの人は知ってる。私の心が自分に向いていないことを――。

結婚して三十年。もうお互いに年を取った。

永遠の愛を誓い、愛する子供も産まれ、幸せな毎日。何も恥じることはないが、刺激を求めてしまうのは私だけだろうか。

末の子供も家を出て、夫も定年を迎え、二人きりの毎日。

どちらかというと窮屈な毎日を、きっとあの人も感じてる。

この閉塞感は、どうすれば拭えるのだろう。

もう若くもないし、一人で生活することなど出来るかはわからない。

つつましくも安定した今の生活を続けるほうに傾くが、なんの目標もなくただ生きているだけというのは、なんとも虚しく感じてしまう自分がいる。

私をここから連れ出してくれる人は、あの人でもなく、誰もいないだろう。

では、私が自分からここを飛び出すほかないのだろうか。それともこの生活を、どうにか楽しく出来るのだろうか。

私たちは今、岐路に立っているのだ。

今日、あの人と話してみよう。これからの二人のこと。そして見つけるべく、新たな夢を――。

191　秘密

高校生になって三年目の春。やっとあの人に想いが届いた。
「担任の江藤です。今日から一年間、よろしく」
江藤先生――。友達からは現実を見ろって言われたし、遊びの子も本気の子もライバルは多かった。
一年生の時は、やれることはなんでもやった。待ち伏せも、お弁当作ったりも、スポーツが苦手だけど先生が顧問をしているバレー部にも入った。
二年生の時は、自分がしてきたことを新入生もやってきたので少し引きつつ、それでも作れる機会はなんでも作った。
そして三年生に上がる前の春休み……。

「高橋」
部活の練習を夕方までやり、職員玄関で待っていた私に、帰りがけの先生が呼んだ。
「まだまだ日が落ちるの早いんだ。待ってたら危ないだろ」
「ごめんなさい。でも最近、全然話せなかったから……」
私の言葉に、先生は苦笑する。
「相変わらずだな。おまえ、次から三年生だろ？　俺のことおっかけ回してるやつだって、三年間続けたやつはそうそういないよ」
「私は続けます！　卒業しても大学行っても就職しても、ずっと先生が好きです。本気ですよ？」
真っ赤になって言った私。すぐに後悔はしたけど、胸につかえていた気持はなくなっている。
先生は、軽く私の頭を撫でた。
「変なやつだなあ。教師でちょっと若いからって、興味本位で近付いてくるやつばっかなんだけど」
「そ、そ、そんなこと！」

「うん、わかってる。高橋は人間として俺を見てくれてるっていうのは……」
「先生……」
私の目に、先生の横顔が映る。
「でも、俺は教師だし、高橋の気持ちを受け止めるなんてことはしちゃいけないし、出来ないんだ。それはわかってくれるよな？」
ズキンと、私の心に痛みが差す。頭では分かっていたけれど、受け入れられないのは悲しい。
「そう、ですよね……ハッキリ言ってもらえて、それはそれでよかったというか……」
しどろもどろになり、私は顔を伏せる。
その間に、先生は自転車置場から自転車を引いて、私の横に戻ってきた。
「とにかく出よう。下校時刻過ぎた」
「……はい」
校門を出てすぐに、先生は立ち止まる。帰る方向は逆方向だから、ここでお別れということもある。
でも先生は、いつになく真剣な表情をして、私を見つめていた。
「……先生？」
「高橋。もしおまえが卒業まで俺のこと好きでいてくれた時には……付き合おう。今は生徒としてしか見れないけど、高橋のことは、ちゃんと好きだ」
それだけで、私は舞い上がるように、また真っ赤になる。
先生は、そんな私に笑って、もう一度私の頭を撫でた。
「じゃあな。気をつけて帰れよ。あと受験があるんだから、今はとにかくそれに向かうこと。約束出来る？」
「はい！」
「よし。じゃあ、また明日な！」
そう言って、先生は自転車で去っていった。
私は歩いて帰る家路を、人には見せられないようなにやにやした

顔で帰る。嬉しいの一言しかなかった。
先生。私受験も頑張るから、先生のこと好きでいるのも、このまま頑張らせて――。

192　ゴンとイチ

ゴンとイチは双子の兄弟。

兄のゴンは逞しく、毎日泥だらけで遊ぶ。一方、弟のイチはおとなしく、病弱で外でも遊べない。

小学校に入る頃には、二人の生活はまったく違うものとなっていた。

「ゴン。今日は学校どうだった？」

ゴンが学校から帰るなり、イチはいつもそう尋ねる。イチはほとんど寝たきり状態になっており、学校にも通えず、たまに外へ出かける時も、車椅子から降りられない。

それでも二人は、仲の良い兄弟である。

「今日は運動会の練習した」

ゴンの言葉に、イチは目を輝かせる。

「運動会かあ。いいなあ」

おまえも来いよ、と、ゴンは言えなかった。砂埃が舞う汚いグラウンド。大事な弟の体調が、これ以上悪くなるのは見ていられない。

「イチ。おまえのぶんも頑張るからな。絶対、徒競走では一位になって、おまえに一位のリボン持って帰ってきてやるからな」

「ありがとう、ゴン。ゴンなら一位取れるよね」

「あったりまえだろ？　おまえの分まで走るから。そうと決めたら、練習しなきゃな」

そう言って、ゴンは筋トレを始める。庭に出ては走り込みも行い、イチはそれをじっと眺めていた。

「こら、ゴン！　イチの前で走るなって言ってるでしょ！」

突然、買い物から帰ってきたお母さんがそう言った。

病弱なイチを不憫に思い、ゴンにはイチの前で走ったりしないことと言い聞かせてある。

「ごめんなさい……」

悲しそうにしたのはゴンだけではない。イチもまた、居たたまれない気持ちになった。

「いいんだ、お母さん。ゴンは僕の分まで走ってくれてるんだ。僕が頼んだんだ」

「イチ……」

「いや、俺も疲れたからやーめた」

ゴンはそう笑って、家の中へと入っていく。

自分のせいで怒られるゴンを、イチは申し訳なく思った。

運動会当日。もちろん応援席に、イチの姿はない。イチの世話のため、母親の姿もない。いつもの光景だが、やはりゴンも寂しかった。

だが、ゴンは明るく笑う。

「ゴン。一緒に食べない？」

昼時、友達がそう誘ってくれたが、ゴンは笑って拒否をする。友達家族の中で食べるのはみじめだと思った。

「ありがとう。でも俺、あっちで食べるよ」

ゴンはそう言って、教室へと入っていった。

広げる弁当はお母さんの手作りで、ゴンの大好きなものばかりが入っているが、一人で食べるとなんとも味気ない。

「ゴーン！」

そこに声がして、ゴンは振り向いた。そこには、イチとお母さんの姿がある。

「イチ！　だ、大丈夫なのか？　こんなところに来て」

「もう、どこにもいないから探しちゃったよ。ここからなら僕も見られるよね。先生には許可を取ったよ」

「イチ……」

「遅くなってごめんね、ゴン。一緒にごはん食べましょう」

「うん！」

三人は、一緒に食事をする。ただそれだけで、さっきまで味気な

かったお弁当が数倍美味しくなる気がした。

ごはんを食べ終えて、ゴンは立ち上がる。

「よし。じゃあ、徒競走頑張ってくるからな」

「うん。頑張って一位取ってね！」

「おうよ」

そう言って、ゴンは午後の競技に向かう。

スポーツ万能なゴンは、徒競走にも自信があり、選抜リレー選手にも選ばれているほどだ。

パアン！　と、ピストルの音とともに、ゴンは走り出す。

「あっあっ！」

途端、ゴンは足をもつらせ転んだ。

一瞬、イチがいるはずの教室を見上げようと思ったが、約束した一位が取れずに目を伏せる。悔しかった。

その後、なんとか選抜リレーで総合一位を勝ち取ったが、ゴンは重い足取りで教室へと向かっていった。

「ゴン！　ゴン、おつかれさま。すごい早かったね！」

落胆したゴンに反し、イチはそう言って労う。

だが、そんなイチに苛立って、ゴンは顔を顰めた。

「なんだよ、それ。嫌味？　転んじゃって恥ずかしいってのに……」

「でも、本当に早かったよ。転んじゃったのはしょうがないよ。それでも二位なんて、すごいじゃないか。それにリレーも大活躍で、一位だったじゃないか」

イチの言葉に思い直し、ゴンは短パンのポケットから、リレー一位のリボンを取り出し、イチに差し出す。

「ごめんな……来年こそは、個人一位のリボンもらうから」

「うん！」

イチの笑顔に、ゴンも笑った。

193　彼はアイドル

瑞樹は泣き虫な男の子。幼稚園、小学校と一緒で、家も近く、私たちはいつも一緒に遊んでいた。中学に入ると、瑞樹は親の都合で引っ越し、離れ離れになったが、ある日彼は突如として私の前に現れた。

「み、み、瑞樹――？！」

テレビの中で歌い踊る瑞樹に、私は釘付けになる。

駆け出しのアイドルグループ。彼の名前は名字すら違うものの、瑞樹と名乗ったため私はすぐに確信した。

「すごい。引っ越しちゃって全然噂も聞かなかったけど……瑞樹、小さい頃から女の子に間違われるほど可愛かったもんなあ」

そう言って、私は家を出かける。なんだか急にコンビニに行きたくなったのは、瑞樹が出ている雑誌でも買えればと思ったから。応援したいじゃない。

「あ、ちーちゃん」

家を出るなり、ぶかぶかのセーターを着て、マフラーと帽子で顔が隠れた華奢な女の子が、私をそう呼んだ。

「あ、あんたもしかして……瑞樹？！」

私の言葉に、瑞樹はへらっと笑う。

中三になったはずだが、背も低く、まだあまり声変わりもしていないようで、パッと見ためは相変わらず女の子に見えるくらい……いや、女の子よりも可愛い。

「どこか出かけるの？」

瑞樹の問いかけに、私は目を泳がせる。

「あ……ううん、コンビニ行こうとしてただけ……は、入る？」

「うん。いい？」

「うん。どうぞ……」

二年会っていないだけだが、毎日遊んでいたとはいえ、もう他人

の男の子。私は少し緊張しながらも、家の中へと招き入れた。
「相変わらず、ちーちゃん一人？」
「うん。共働きだからね。そこらへん、座って」
「ありがとう。変わってないね、この家。ちーちゃんも」
「そう？　あんたは変わったよ」
私はそう言いながらジュースを差し出し、瑞樹の前に座る。
「そうかな？」
「そうだよ。さっき見たよ、テレビ。あんたがアイドルやってるなんて」
「ハハハ……恥ずかしい」
「もう。全然連絡くれないんだもん」
「ごめんね。事務所入ったし、レッスンだなんだって、けっこう忙しくて……」
「あ、そうだ。サインしてよ、サイン」
「うん。いいけど……」
なんだか間がもたないように、私は話を続けることしか出来ない。
色紙なんかないから、私はノートを広げ、瑞樹に催促する。
瑞樹はさらさらとサインを書いて、私を見つめた。
「ちーちゃん。僕、デビューしたから、これからどんどん会えなくなっちゃうと思う。手紙だって書けなくなる。でもその前に、ちーちゃんにちゃんと話しておきたいと思って、今日来たんだ」
「え？」
瑞樹の真意が見えず、私は首を傾げる。でも、どこか何かの期待はあった。
「僕、ずっとちーちゃんのこと好きだったんだよ。アイドルは恋しちゃ駄目だって、事務所の社長も言ってる。だから、僕は恋なんかしない。でも、アイドルになる前から好きな子のことは仕方がないでしょう？　僕はずっとちーちゃんのことが好きだ。だから、それだけは覚えておいて……」
瑞樹は真っ赤になって、そう言った。

たったそれだけのことを言うために、瑞樹は来たというのか。その情熱に、私は素直に嬉しく思えた。

「ありがとう、瑞樹。私も鼻が高いよ。瑞希がアイドルなんて、思ってもみなかったから……私も、瑞樹が好き。ずっと応援してるから……頑張って」

私の返事に、瑞樹の顔色は明るく変わる。

「ありがとう、ちーちゃん。僕、頑張るよ。それから、たまには会いに来たりしてもいい？　メールとかもしていい？」

「うん。もちろん」

付き合い始めたわけではないと思う。手を繋いだわけでも、キスしたわけでもない。

でも、私たちはこれから大人になっていく。別世界にいても、気持ちは繋がってる。

１９４　一直線

運命の人はあなただって思いたい。
周りの友達は、付き合ったり別れたり……でも私は、恋なんて一度だけでいいと思ってる。
そんな私を、あなたは重荷に感じるでしょうか。

愛に永遠なんてないのでしょうか。
夢なんて見ないほうがいいのでしょうか。
どれだけマイナスなことを考えても、この気持ちは止められないのです。

大好き。ただそれだけです。
周り道なんかしないで、一直線にあなたに向かいたい。
他の人なんて、知りたくないのです。

１９５　二十一世紀のマリーアントワネット

不況に次ぐ不況。人々が苦しむ中で、ケタ外れの生活を送っている人間もいる。

父親は外資系の仕事をしていることもあるが、大昔は華族の出、天皇家の親戚でもある家柄で、歴代の先祖には総理大臣などもいる。正真正銘、生まれながらのお嬢様であるのは、富田麗奈。十六歳である。

「マリーアントワネットのどこが悪いのかしらね。パンがなければケーキを食べればいいじゃない。私はそんな非常識でもないけど、マリーの言っていることはよくわかるわ」

麗奈はそう言って、同じ年のメイドである真里子にそう言った。真里子は麗奈の話し相手として雇われており、学校も同じ学校へ通わせてもらっている、子供の頃からの友達だ。

「まあ……生まれついての境遇が違うから、麗奈ちゃんがマリーアントワネットの気持ちがわかるっていうのは当然なのかもしれないね。私は庶民だからわからないけど」

「あら。じゃあ、これ貸してあげる。パパが買ってくれたのよ」

そう言って麗奈が見せたのは、美しく輝くネックレスである。

「わあ。綺麗」

「真里子もマリーと同じような名前なんだから、こういうのもつけてみないとね。このネックレス、パパが言うにはマリーアントワネットがつけていたものなんですって。大きなダイヤが特徴でしょ」

「い、いけないわ。そんな高価な物、少しだって触れられない」

「大丈夫よ。真里子が盗むはずないんだし、ダイヤだからそう簡単に壊れないって。それより、つけてごらんなさいよ。マリーの気持ちが少しはわかるかもよ。私、つけてあげる」

麗奈はそう言って、真里子の首にネックレスをつけてやった。

「ふ……ふふふふふ……」

その時、真里子が不気味に笑う。
「ま、真里子？」
「ほほほほほ。今日はこちらで舞踏会があるんですの？」
人が変わったように、真里子はそう言う。
「ぶ、舞踏会？　ちょっと真里子、どうしたの？」
「マリコ？　私はマリーです。失礼ですが、あなたは？」
「れ、麗奈です……マリーって、まさか……」
「マリー・アントワネット・ジョゼファ・ジャンヌ・ドゥ・ロレーヌ・ドートゥリシュですが」
麗奈はあまりの驚きに、腰を抜かした。
「な、なにをからかって……」
だが、真里子の立ち居振る舞いは、いつもの真里子ではない。明らかに誰か乗り移っているかのように、その癖も何もかもが違う。
「ほ、本当に、マリーアントワネット……様ですか？」
「くどいですわね、麗奈さん。この首飾りがその証。これはわたくしの首飾りですから」
「こら――！」
その時、部屋中に響くであろう男性の声が響き、真里子の首からネックレスが外された。
その途端、真里子は意識を失うように、前へと倒れている。
「真里子！」
麗奈が駆け寄ると、真里子は静かに目を開けた。
「あれ？　私……」
すっかり元通りになったように、真里子は首を傾げている。
そんな真里子に、麗奈は抱きついた。
「ああ、よかった！　元に戻らなかったらどうしようかと……」
「それより、麗奈！　これは仕事で預かっている大事なネックレスだと言っただろ」
そう言ったのは、真里子からネックレスを取った麗奈の父親だ。
「そうだったかしら。私はてっきり、パパが私に買ってくれたもの

かと」
「これは、マリーアントワネットの首飾り事件の時の、曰くつきの首飾りの精巧なイミテーションだ」
「イ、イミテーション？　本物じゃないの？」
「本物がここにあるわけないだろ。それにこれは預かりもの。勝手に持ち出すんじゃないよ」
父親はそう言い聞かせて、部屋から出ていった。
麗奈と真里子は、互いを見て笑う。
「もう、びっくりした！」
「私も」
だが、あれは一体なんだったのか、本物だったのか、なぜイミテーションなのにああなったのか、誰にも説明がつけられない。
しかし真里子の中の奥底では、マリーアントワネットの意識がどこかで息衝いているようだった。

196　停電の夜に

その日はひどい大雪で、交通機関はすべて麻痺。外に出ている人は、仕事の人でもほとんどいない。

僕は大学生で一人暮らし。奥手で手も出せない僕は、やっと付き合うことができた初めての彼女と、アパートに足止めされた。

「交通機関も麻痺か……今日はここに泊まるほかないかな」

ちらりと彼女を見ると、彼女は真っ赤で俯く。彼女もまた奥手で、そんな彼女を見ていると、僕まで赤くなった。

「あ、でも大丈夫だよ。おふくろもたまに泊まりに来るから、布団も二組あるし……」

「う、うん。大丈夫。信用してるし……」

信用してるという彼女の言葉がずしりときた。今日も何も出来なそうだ。

「あ……家の人は大丈夫？」

「うん。さっき電話入れておいた」

「そ、そう……」

その時、フッと家中……いや、街中の電気が消えた。

「や、停電？」

とっさに彼女が、僕のセーターの裾を引っ張る。

「だ、大丈夫。ちょっと待って。たしかローソクが……」

「ああ、うん。ごめんなさい……」

彼女が手を離してきたので、僕は台所でローソクを探した。

運よくこの間片付けたばかりなので、すぐにローソクが見つかる。

僕は手探りでテーブルの上に皿とローソクを置き、ライターで火をつけた。

「あったかい……」

彼女が言った。

電気もガスも消えてしまい、冷え切った部屋だが、そのローソク

の炎だけで暖かく感じる。
「本当だ。でも暖かくして。風邪ひいたら大変だから」
僕はそう言って、畳んであった毛布を彼女の肩へかける。
「ありがとう……」
「いや……」
言葉少なく、テーブルを隔てて彼女と向き合う。
ローソクの炎が、彼女の綺麗な顔を浮かび上がらせ、僕はより一層ドキドキした。
「そっち……行ってもいい？」
「う、うん」
僕は意を決してそう言うと、彼女の隣に座った。
彼女は静かに、かけていた毛布をめくる。僕たちは、同じ毛布にくるまれた。
「あったかい……」
すでに彼女の温もりが感じられ、僕は胸の高鳴りを一層感じる。
せいぜい手を繋ぐだけだった僕たちの関係は、これだけで大きな進展をいくつも見せていた。
「ローソクが終わったら……」
僕はローソクの炎を見つめながら、そっとそう言った。
「え？」
「……キスしようか」
彼女は良いとも悪いとも言わず、押し黙る。
でもそれから少しして、彼女のほうから手を繋いできた。
その夜、僕たちはお互いに生まれて初めてのキスをした。

197　タイムスリップ！　ザ・大阪のオバちゃん

「長子（ながこ）。晩の買い物手伝ってーな」
「ええ？　お母ちゃん、ほんまに人使い荒いよって」
「ええやろ、ちょっとくらい。どうせ家でゴロゴロしとるんやさかい。ほな、行くで」
大阪のとある下町で、フリーターの長子（二十四歳）と、自称・永遠の二十歳である母親が、夕飯の買い物へと出かけた。
「長子。新しい店出とるで」
母親が、裏路地に小さな店を見つけた。さしずめなんでも屋とでも言うべきか、ガラクタのような雑貨から派手な服まで売っている。
「なんや。こないなところに出来ても、あんまりお客も入らんやろな」
「かまへん、かまへん。開店セールや書いてはるし、破格の穴場やったら買い占めたろ」
そう言って、母親は意気揚々と小さな店へと入っていった。
「おお。このシミーズええやんな。あらこっちには大きな釜があるで、長子」
「ちょ、そんな大きな釜どうするつもりなん？」
「ええやん。百円やし。これだけあれば、町内で炊き込みごはん配れるで。お兄ちゃん。この釜ちょうだい」
母親がそう言うと、奥から細い青年でもおじさんでもないくらいの年の男が出てくる。
「お姉さん、ええとこ目つけはったね。お姉さん最初のお客さんやから、サービスすんで。五十円でどうや」
「なんや、お兄ちゃん。サービスってのはドカンとやらにゃサービスやないで。ほら、もう一声！」
「参ったなあ。でもわかった。お姉さんべっぴんさんやから大サービス！　一円でええわ」

「さすが兄ちゃん！　それやったら町内のみんなに宣伝しときましょ」
「おおきに。あ、これ、取扱説明書。扱いには十分気をつけてな」
取扱説明書を釜に入れ、母親は長子に両手いっぱいになるほど大きな釜を持たせ、店から出ていった。
「ちょっとお母ちゃん。案の定、うちに持たせて。ちょっとくらい持ったらどうなん」
「いやや。なんのためにあんた連れてきた思うてるん？　あんたは初めから荷物持ちやわ」
「ヒドッ！」
と、二人が歩いていると、あたりはすっかり暗くなっており、繁華街が遠くに見える。
「なんや急に……真っ暗やないかい。そんなにあの店おったかな」
「ちょっとお母ちゃん……様子が違わん？　だってそんなに大通りから入った覚えないし……」
次の瞬間、繁華街に出た二人は、目の前の光景に息を呑んだ。
そこにはちょんまげ姿の人たちのほか、全員が着物。繁華街も木造家屋の時代劇に出てくるような町である。
「ええ、なんや？　映画村でも出来たんかいな」
「あほか。こんな短時間でそんなわけないやろ」
二人がパニック状態になっていると、一人の少女がこちらに気付いてやってきた。
「……人間？」
怪訝な顔で、少女が言った。
「当たり前やないかい。人間やなかったら誰やねん！」
「人間やったら、なんでそんな変なもの着てるん？」
「変なもんて……まあ、着物やないけどな」
「まあええわ。おばちゃん、その釜貸してくれへん？　大人数のお客さんが来てもうて困ってたん」
少女がそう言うと、母親は長子から釜を取る。

「まあ、困ってるんやったら……」
「あかん、母ちゃん。これのせいやったらどうすんねん。あっちのもんをこっちに置いてきたりしたらあかんって、なんかで聞いたことあるわ」
「せやかて……そうや。じゃああんた、うちらに着物一式持ってきて。それから、釜は貸すけど返すこと。この条件でどうや？」
「まあ……うちは釜さえ借りられたらええけど」
少女の言葉に、母親は少女に握手する。
「ほな、交渉成立や。先に着物持ってきてえな。この恰好じゃ、目立って町も歩かれへん」
「わかったわ。そこで待っとって」
少女はそう言って去っていくと、すぐに二人分の着物を持って戻ってきた。
「おおきに。これで町が歩けるわ」
「ほな、この釜借りてええな？」
「ええけど、うちらも連れてってえな。釜めし作るなら、手伝ったるで」
「ほんまに？　助かりますわ」
すっかり少女と意気投合し、二人は少女の家へと向かっていった。
少女の家は小さな大衆食堂を営んでいるが、今日は祭りで人の入りが激しく、いつもの釜だけでは足りないという事態に陥っているらしい。
そこは社交性のある母親。今置かれている状況に目もくれず、少女の母親であるおかみとも意気投合し、釜めしを作っては握り飯を作ったりして、その場にすっかり溶け込んでいた。
一方の長子も、とりあえず今の状況に流されつつ、物事を理解しようとしていた。
「せや。確かあのお兄ちゃん、説明書がどうとかって……」
店から出す際、釜に入れられた説明書をポケットに移していた長子は、畳んで置いておいた服のポケットから、一枚の紙切れを取り

出した。

「でっかいお釜ででっかい冒険！　カマカマカモーン」をお買い上げありがとうございます。本製品は繊細な商品ですので、取り扱いには十分お気を付け下さい。

万一、スタートボタンを押す以外で大冒険が始まった際は、そのままお楽しみになるか、以下の手順で大冒険を終了してください。

1、お米を研いで「カマカマカモーン」に入れる。

2、新鮮なお野菜とだし汁を入れ、火にかける。

3、炊けたら美味しくいただく。

以上の手順を踏まえ、「カマカマカモーン」内の釜めしが空になりましたら、すみやかに人気のない場所に移動し、時を待ってください。この時、一緒に冒険中のすべての人たちと一緒にいてください。

「なに、この説明書。怪しい……でもあかん！　おかあちゃーん！」

長子はすっかり店の店員と化した母親の腕を掴む。

「ちょっと、長子。なんやねん。今、五右衛門はんと盛り上がってたっちゅーのに」

「そんな場合やあらへん！　釜めし、まだ残っとる？」

「いや。さっき空っぽになったで。やっぱり大人数で食べると美味しいわ」

「あかん！　ほな行くで！」

長子は強引に母親の手を取り、釜と元の世界で着ていた服を受け取る。

「お長ちゃん」

店の娘が、心配そうに追いかける。
「ごめんな。着物借りたままで……着替える時間あるかわからへんのやけど……」
「ううん。それは着て行って。こっちも本当に助かったわ……でも、もしかして行ってしまうの？」
「うん……ありがとう。ごめんな」
長子はそう言って、母親とともに、誰も来ない裏路地へと入っていった。
「長子。ほんまに帰れるん？」
「わからん。でもこうなったら、時を待つしかないねん」
だが、何時間待っても、一向にその時は来ない。
「もうお母ちゃん疲れたわ。これならもう少し五右衛門はんと話せたかもしれんのに」
「お母ちゃん！　いつその時っちゅーのが来るかもわからんのに、浮かれてるんやあらへん」
「だってえ。大体これ、夢なんと違うん？」
母親がお釜をポンと叩くと、一瞬、辺りが真っ暗になった。
「怖！　長子？」
「お母ちゃん！　あそこ、光が見える！」
長子が興奮して、闇の向こうを指差す。
「ほんまや。帰ってきたんやな？」
「やった！　早く行こう」
二人はそのまま、光の先へと歩いていった。
「な……なんや？　ここは！」
そこは、もといた大阪の街でも、大昔の横丁でもなかった――。
「……ま、いっか」
「よくないわ！」
大阪のオバちゃん、きっとここでもたくましく生きていくことだろう。

198　傷ついた天使たち

心を閉ざしてしまった人を、どうしたら振り向かせられる？
「ひよりちゃん。ちょっと手伝ってくれるかな」
「あ、はーい」
呼ばれて、私は部屋から出ていく。でも、最後まで目を逸らせない。気になる、あの子――。
私は育児放棄のお母さんから引き離され、五歳の時から八年間、この児童施設にいる。周りは同じ境遇の子たちばかりで、仲間意識もあれば、不安定なこともある。でも、職員の皆さんはあったかくて、私はここが好きだ。
「太陽君。ちゃんと食べて。昼間もほとんど食べないで、体に悪いでしょう」
食事時、そう言われているのは、一ヶ月前にここへ来た、同じ年の男の子・太陽。名前とは裏腹に、表情を失くし、誰ともしゃべらない。まだ学校にも行ける状態ではない。
私はそんな太陽君から目が逸らせず、かまってしまうけど、まだ何のアクションも返してもらっていない。

「太陽君。これ、一緒に食べない？」
夕食が終わって、自由時間に私はそう言って縁側に座る彼の隣に座り、クッキーを差し出した。
「これ、先生に頼んで作らせてもらったんだ。私が作ったんだよ」
でも、彼は首を振ることもなく、ただ俯く。
「……じゃあ、何なら食べる？　先生もみんなも心配してるよ。ちゃんと食べなきゃ、大きくなれないよ」
そう言って肩に触れると、彼は頑なに拒んで立ち上がった。
「太陽君！」
私も半ばムキになり、彼の腕を掴む。

だが、彼は歯を食いしばり、唸るような声を上げた。
「うう……あ、う……」
「……もしかして、しゃべらないんじゃなくて、しゃべれないの……？」
私は力を失くし、彼を見つめる。彼の境遇は聞かされていないが、仲良くしてあげてとだけ言われていた。
彼は私の手を振り払い、庭へと出ていった。私も慌てて追いかける。
「待って、太陽君！　ごめん、あやまるから……」
庭の真ん中で、彼は静かにうずくまる。
「太陽君？」
「……」
「……私ね、ここが好きだよ。私のお母さんは育児放棄しちゃって私を放り投げたけど、ここは先生たちも優しいし、お姉さんだって頼ってもくれるし、同じような境遇の子と逞しく生きていけるから……だから太陽君のことが心配だし、みんなとも先生とも仲良くしてほしいの」
そう言うと、彼は落ちていた石で、地面に文字を書き始める。
“おれはひとごろし”
それを見て、私は目を見開いた。
彼はそれだけを書くと、静かに立ち上がる。そんな彼が闇に引きずり込まれるような錯覚を覚え、私は彼を抱きしめていた。
「太陽君の事情は知らない！　でも、自分をそんなふうに言っちゃ駄目だよ。ここにいるんだから、太陽君はここで守られるべき存在なんだよ！」
必死でしがみつく私。無反応なまでの彼に、私はそっと彼を見上げる。
彼の頬は、涙で濡れていた。
「あ……り、がと……ひより」
失われていた彼の言葉が、ここへ来て以来、初めて放たれた瞬間

だった。

後に、彼もだんだんと私に心を開いてくれ、彼の事情を知った。お父さんが暴力癖のある人で、妹が殺されたこと。それを守ろうと揉み合いになり、その拍子に父親が転んで死んでしまったこと。母親は早くに出て行き、頼れる人は誰もいないこと。

彼の心の闇は、たぶん一生消えない。でも彼は、彼の人生を輝かせることが出来るはずだ。そのために私も、一緒に生きていきたい。たくましい、あの家の子供たちのように……。

199　俺にギターをくれ

コードを必死に覚えたあの頃、リードが出来るようになったあの頃、ギターは俺に、いろんなことを教えてくれた。

「ミック。新曲出来たぁ？」

安い香水、安い酒、デカ過ぎる夢もいつの間に何処へ消えたか、俺は場末の飲み屋でプレイしている。

「まだだよ、スザンヌ。いや、安い歌ならいつでも作れる」

「じゃあ、歌ってよ。五ドルあるわ」

「本当に安いな。まあいい、バーボンを奢ってくれ」

「いいわよ」

俺はバーボンを呑むと、ギターに手を掛ける。

「♪ああ～スザンヌ。俺の心に花が咲くよ。君という名の花が――」

「プッ。本当に安い歌」

「言ったろ。五ドルっていったら、こんなもんだ」

「じゃあ、百万ドル払うから、ミリオンヒットを飛ばしてくれるかい？」

そう言ったのは、見慣れない大柄の男だ。

「は？」

「どうした。それとも、現金で見ないと作れないか？　俺はこういうものだ」

男が差し出したのは、大手音楽メーカーの肩書のある名刺である。

「あんた、一体……？」

「おまえさんとは同郷でね。おまえさんがまだスリーコードしか弾けなかった頃から、おまえさんのステージを見ていたよ。おまえさんのプレイ、俺は好きなんだよな。だから、俺と組むなら、百万ドル出す。もちろんヒット出来る曲を作れ。そうすれば、ヒット出来るだけの宣伝を惜しみなくしてやる」

俺は目つきを変え、真新しいエレキギターを下ろし、ステージ横

にある古びたフォークギターを指差す。
「そいつは俺が初めてギターを鳴らした時から、俺と一緒にあるギターだ。そいつじゃなきゃ、良い曲は書けない」
俺の言葉に、男もにやりと笑った。きっと、俺が本気を出したことがわかったんだろう。
「俺にギターをくれ」
俺は狂ったように、フォークギターをかき鳴らす。

200　ちぐはぐな少女たち

「すずちゃん！」
そう言って私に近付いて来るのは、同じ年の女の子・千佳。
ボーイッシュな出で立ちの私とは正反対の、どちらかといえば清楚で私とは真逆の女の子は、高校の同級生……といっても、私は早々に高校をやめたから、ほんの数か月のお付き合いだったというわけ。
でも、どういうわけか、千佳は私にくっついてくる。学校帰りも休日も、私のそばを離れない。それは私にとってうざったくもあるけど、やはり嬉しくもあった。
「千佳。今日はあんま会えないよ？　バイトあるから」
「そっか……いいなあ、バイト。うちの学校、バイト禁止だから……」
「それもあって、学校やめたんだよねえ。よくあんな学校行ってられるね」
「私、中等部からずっとあそこだから……」
そういう千佳の通う学校は、私立のちょっといいとこの女子校。
私は高校の推薦に飛びついてそこに入ったわけだけど、やはりお嬢様の校風はまったく合わなかった。逆に千佳は、中学からあの学校にいる。
「お茶でもしよっか。おごるよ」
私の言葉に、千佳は首を振る。
「ええ？　いいよ。私もお金あるから。でもお茶はしよう」
私たちは、目の前にあったファミリーレストランへと入っていった。

「千佳さあ。オレのこと、女だと思ってる？」
千佳の前では、男になってる自分がいる。男兄弟で育ったことも

あるけれど、ついついオレって言ってしまう。
突然の私のおかしな質問に、千佳は笑う。
「当たり前じゃない」
「あっそう？」
「どうしてそんなこと聞くの？」
「いや……男だと思って近付いてきてるのかと思って。じゃないとオレみたいな女、友達としてだけで付き合えるかなってさ」
「すずちゃんは、私の大親友だよ。でも、すずちゃんが男の子だったらいいなって思う時もある。だって男の子って怖いじゃない」
女子の園に隔離されている千佳は、男に免疫がないようだ。
私は頭を掻いて、目の前のコーヒーを飲み干す。
「変な子だよね、千佳って。なんでオレみたいなのにくっついてくるかな。オレなんか学校のつま弾きもんだったし、見ての通り不良少年っしょ」
それは自分でも自覚していた。
スカートの長さまで決められている高校。それ以外にも校則は山のようにあったが、私は髪を染め、ピアスを開け、ミニスカートで学校へ通った。もちろん毎日怒られていたが、私は反発して負けなかった。
「すずちゃんは、私の目標なの」
突然、千佳がそう言った。
「は……はあ？！」
「すずちゃんの強さに憧れてるの。私は、先生に小さなことで怒られても委縮しちゃう。自分の意見があったとしても、それを発言する勇気もないの。でも、すずちゃんが先生に立ち向かっている姿を見た時、私は本当に勇気をもらったの。でも、私にはまだまだだから……だからすずちゃんと少しでもそばにいて、オーラを感じていたいんだ」
屈託のない笑顔で、千佳はそう笑う。
でもそんな言葉に、私も救われた。一人で立ち向かっても、敵は

先生だけじゃなかった。同じ生徒からも好奇の目で見られ、同調してくれる子なんて一人もいなかった。

でも千佳は、一人きりの放課後、震える手で私に握手を求めてきた。私が怖かったんだろうに、それでも私に笑いかけてくれた。言葉はなかったけれど、なんだか思いが通じた瞬間だった。

「ほんと……変なヤツ」

私も笑った。

私も千佳に憧れる。純粋で真っ直ぐで、綺麗という言葉がお似合いの千佳。それを今、本人に言えなかったのは、照れでもあり卑怯だと思ったけど、きっと千佳なら気付いてくれているはずだ。

これからも、きっと私たちは友達で居続けられるだろう。正反対でも、これだけわかりあえているのだから。

201　プロミス

約束したんだ。一本の樹に。
あの日、僕はお母さんとさよならをした。離婚して、僕はお父さんに引き取られることになったからだ。
「樹（いつき）。この木を大事になさいね」
大きな屋敷の片隅に佇む、まだ小さな椎の木の前で、お母さんはそう言った。
この木は僕が生まれた時、お父さんとお母さんが二人で植えた木だと聞いている。だから僕はそれこそ赤ん坊の頃から、この木と一緒に大事に育ってきたんだ。
「うん。この木は、家族の思い出だもんね。それに、僕も分身みたいに思ってるよ。大事にするからね」
そう言った僕を、お母さんが優しく抱きしめる。
この大きな屋敷に縛られ、お母さんは僕を引き取ることも出来ないのだと、後で知った。
「ごめんね、樹……樹が大きくなるのを見られないのが悲しい……でも、お母さん、ずっと樹のことを思ってるからね。一人じゃないって、わかってね」
「お母さん……」
僕はお母さんの胸で泣いた。お母さんも泣いていた。僕はまだ小さかったけれど、その日、お母さんとはもう会えないことを知っていた。
それから十年後。僕はお父さんとも一緒におらず、アメリカの学校へ通っている。寮に入っているため特には困らないし、お母さんが恋しいというより、もう家族の誰とも会わない生活に慣れてしまっている。
ハイスクールに通っていたある日、僕のもとへ国際電話がかかっ

てきた。お父さんからだ。
『元気にしてるか？』
心なしか、お父さんの声は疲れている。
「うん。お父さんは？　ずいぶん疲れた声してるよ」
『そうか？　まあ、こっちは少しバタバタしててね……突然だけど、家を引っ越したんだ。事後報告になるが……おまえの荷物は全部移してあるから心配するな』
それを聞いて、僕は驚いた。
「え、どうしたの？」
『去年、お爺さんが亡くなっただろう？　それの相続だなんだで大変でね……いっそ家を売って新しい家を買おうかと思ったんだ。お婆さんももちろん一緒だよ』
僕は納得した。お爺さんはあの大きな屋敷を手に入れた大地主だった。そんなお爺さんがいなくなっては、あの屋敷を維持するのも大変だろうと、お父さんの苦労が見えたのだ。しかも、遺産を狙っている親戚も大勢いるという。
お父さんは、そんな汚い日本から出して僕を守ってくれているけれど、こういう話は嫌でも入ってくる。
「そう……お父さんが決めたならいいよ。僕の部屋、前に帰った時にも整理したし、いるものはないから、勝手に処分してくれて大丈夫。でもあの……」
僕は、木のことを思い出した。お母さんが大事にしろと言った木……でも、なぜだか聞けなかったのは、お母さんとの思い出の木だということを、お父さんも知っているから。それに、あの家を売ってしまったのならば、もうあの木に関わることも出来ないのは明確だったからだ。
「いや、なんでもない……」
その後、僕はお父さんといろいろしゃべって、電話を切った。次に帰る時には、あの家に帰ることもない。大きすぎる屋敷に、お母さんは潰された。僕もあの家があまり好きではない。

次の年末、僕は一年ぶりに日本へ帰国した。
新しい家は、前ほどではないけれど立派な家だった。僕の部屋も用意されていたけれど、なんだか落ち着かない。
「ちょっと出かけてくる……」
年明けの静かな住宅街を突っ切って、僕はその足で前の家へと向かった。
家を売り渡してから半年以上、どうなっているのか……でも、その光景は想像を絶するものだった。
表通りの塀だけが残され、門はなく、あとは瓦礫の山。もちろん庭の木も何もなく、ブルドーザーなどの重機がところどころに置かれている。
「こんなに広かったんだ……」
僕はぼそっとそう言うと、家のあった位置などを想像しながら、奥へ奥へと進んでいく。幸い、正月は工事も休みらしく、誰もいない。ここは大型のマンションが建つと聞いた。
「このへんだと思うんだけどな……僕の椎の木……」
見なれた裏門が近くにあったので、僕はその位置を正確に知っていた。
「ごめんね、お母さん。大事にしろって言われたのに……もう、家族がバラバラになったみたいで、椎の木一本守れなかったよ……」
途端に僕は空しくなった。何もない広大な土地に、木くらい残しておいてもいいではないかと苛立ちもしたが、僕は唯一の思い出であるお母さんとの約束も守れなかったことになる。そう考えると、空しくてたまらなかった。
「……樹？」
その時、僕の後ろで声がした。
振り向くと、懐かしい顔がある。
「お母さん……？」
お母さんは笑いながらも涙を堪え、複雑な表情をしている。

「こんなところで会えるなんて……樹、お母さんとの約束覚えていてくれたのね？」

嬉しそうにそう言ったお母さんに、僕は目を伏せた。

「覚えてたよ……でも、椎の木守れなかった……」

するとお母さんは、恐る恐る僕の顔に手を触れ、そして静かに抱きしめてきた。

「覚えていてくれただけでいいの……それに、椎の木は生きてるわ。ここが取り壊される前に、枝を頂いておいたの。そこから苗を作ったから」

「本当？！」

「私には、樹との唯一の思い出だから……」

お母さんの胸の中で、僕は安らぎを感じた。僕の手で椎の木は守れなかったけれど、椎の木は僕をお母さんに会わせてくれたんだ。

「あ、見て、樹。ここにも新しい命が……」

お母さんはそう言って、地面を指差す。僕もお母さんから離れると、地面を見つめた。するとそこには、小さな芽が出ている。

「これ、椎の木かな……」

「どうかしらね……」

「僕、持って帰って新しい家に植えるよ」

お母さんは、優しく頷く。

その後、僕はお母さんの家へついていった。そこには僕の椎の木の枝がある。僕が持ってきた芽と同様、きっとこれから大きくなってくれるに違いない。

「今度は僕の力で守るって約束するよ。だからおまえも、安心して出ておいで……」

僕の約束は、椎の木に届いているだろうか——。

２０２　大好きな君のために

俺は美形ではない。
とりたてて頭が良いわけでも、スポーツが出来るわけでもない。
俺は金持ちでもない。
一流企業に勤めているわけでも、将来を嘱望されているわけでもない。

では、俺には何があるのか。
何もない。誰かに誇れるようなものもない。

でも、俺には趣味嗜好もない。
ギャンブルをするわけでも、酒癖が悪いわけでもない。

こんな俺に、君は寄りそってくれている。
俺には何もないけれど、君のことだけは大事にするよ。

君を守る、なんて大それたことは言えない。
将来を約束するなんてことも出来ない。

でも、俺は今日も明日も頑張るよ。
大好きな君のために。

203　タイムスリップ！　ザ・大阪のオバちゃん？

＜前回までのあらすじ＞

新手の骨董品屋で大きなお釜を買った、大阪のオバちゃんと娘の長子（ながこ）。

不思議なお釜の誤作動で江戸時代にタイムスリップしたが、説明書通りに冒険を終了する手順を踏み、万事休す……と思ったら、元の世界ではなかった――。

「長子。ここ、大阪とちゃうね……」

辺りの景色に圧倒されるように、母親が言った。

「う、嘘でしょ……？」

長子もまた、きょろきょろと辺りを見回す。

目の前には無機質な高層ビル群が聳え、まるで未来映画のように、見たこともない乗り物が浮かんで走っている。

「これはひょっとすると……未来？」

「なんでやねん！　夢なら早く醒めてーな」

「お母ちゃん！　現実逃避しても、現実は現実や。とりあえず、釜めしまた炊かんと……」

二人はそのまま、恐る恐る街を歩き始める。だが、歩道も空飛ぶ車も、みんな地上より遥か上を走っており、地上にはまるで誰もいない。ただ荒れた原っぱが広がるだけだ。

「おお、まだヒッピーがいたか」

その時、地下と見られる入口から、一人の青年が出てきた。

「は？　ヒッピー？」

「そう、その格好。昔に流行ったスタイルだろ」

そう言う青年は、宇宙服のような、色もないぴったりとした服を

着ている。
「ああ、そうです。ヒッピーです。あの……つかぬことをお聞きしますが、今、西暦何年ですか？」
話を合わせるように、長子がそう尋ねる。
「は？　なんだってそんなこと……」
「えーと……そう、ちょっと寝過ぎて日付わかんなくなっちゃって……」
「変な人だな。今は西暦三千二百十年の五月五日だろ」
「さ、三千！」
母親が、卒倒するようにそう言った。
「お母ちゃん」
「ほな、今の総理大臣は誰やねん。流行りの曲は？　せや。私のお墓は――？」
「お母ちゃん、ちょっと黙っといて！」
母親を隠すように、長子は青年の前に立って笑顔を繕う。
「……大丈夫？　お母さん？　変な言葉遣いだし」
「ハハハ。私だっていろいろ聞きたいけど、今はちょっと急いでまして……あの、お米と野菜と醤油とか欲しいんですけど……分けてもらえません？」
「今度は何を言い出すのか……」
「お願いします！　命に関わることなんです！」
長子の気迫に押され、青年は苦笑した。
「よくわかんないけど、まあいいや。家に招待するよ」
そう言って、青年はそのまま、海沿いの原っぱへと連れていった。
そこは、さっきまでの近代的な街とは真逆で、まるでダンボールハウスのような小さな家が並んでいる。
「ここがあんたの家？　ホームレスなの？」
「失礼だな。家はあるだろ。あんたら、本当に変な質問ばっかするなあ。もうずっと貧富の差が激しいからね……うちは祖父母の代からこの辺りに住んでるんだ。今は結婚したから、独立して家を買っ

たんだ。こんな家でもローンだよ」
母親と長子は、互いの顔を見合わせる。
家の中に入ると、そこは大人三人くらいがやっと寝られるようなスペースしかなく、中に奥さんらしき若い女性が赤ん坊を抱いていた。
「妻です」
「どうも……」
青年に紹介され、二人は同時に頭を下げる。
妻という女性もまた、青年と同じような服装をしているだけで、特に変わった様子もない。
「おまえ、命に関わるっていうからこの人たち連れてきたんだ。ちょっとおかしいけど面白い人たちみたいだし、米と野菜と醤油を分けてやろう」
どうやら生活も苦しそうだが、青年の妻も笑顔で応える。
「まあ、お客さんなんて久しぶり。どうぞゆっくりしてください。米と野菜ね……これしかないけれど、これでよければ」
そう言って、妻は近くにあった僅かな米と、食べかけの大根やにんじんを差し出す。未来というだけあり、野菜の形もずいぶん違う。
「ありがとう。これだけあれば、ごちそうも出来そうやわ。ほな、とりあえず外で調理しましょ」
俄然やる気が出たのか、母親は腕まくりをして外へと出ていく。
そして分けてもらった野菜を切り、水も分けてもらって米を研ぐ。
そうこうしていると、近所の家から物珍しげに人もやってきた。
「何してるんだい？」
「釜めしを作るんや。よかったら、あんたも野菜や米を分けてくれればごちそうするで」
「釜めし？　聞いたことないが……面白そうだから、米と野菜持ってくるわ」
人が人を呼び、いつの間に釜の中には具がたくさんになっている。
原っぱにはたくさんの人々が、輪を作って笑い合っていた。

「これが本来の釜めしの醍醐味やな。みんな一緒の釜めし食べて、助け合って生きなあかんで。はい、まずは一番お世話になったあんちゃんたちからや」

そう言って、母親は青年とその妻に釜めしをよそり、それぞれ野菜などを分けてくれた近所の人々にも振舞う。

「うん、美味しい！」

初めは見たこともない料理を不思議そうに見ていた人々も、その味に笑顔になる。

「確かに美味しい。不衛生な料理かとも思ったが、みんなで食べるのもまたいいもんだなあ」

辺りは、笑顔に包まれていた。

「奥さん」

しばらくして、長子は人目を避けるように、青年の妻を連れ出した。

「あの。いろいろお世話になっちゃって……ありがとうございました。これ、使えるかわからんけど、こんな物しかなくて。受け取ってください」

長子が渡したのは、一枚の千円札である。

きっとなけなしの米と野菜だっただろうに、嫌な顔一つせず協力してくれた若夫婦に何か恩返しがしたいと思ったのだが、今は何も身になる物もなく、僅かな金しか持ち合わせていない。

未来の世界で使えるかはわからない上に、物価も上がっているかもしれないと思ったが、今はこれしかないから仕方がなく、悪いと思いながらも差し出した。

「これは……こんな物、頂けません！」

「ええから。使えるかわからんから、ただの紙切れかもしれんけど……他にあげられる物がないから」

「私たち、見返りを求めて親切にしたわけじゃないです。生活は苦しいけれど、毎日が楽しいですし、心だけは豊かでいたいと思っているから……」

妻の言葉は、長子の心に深く響いた。
「ありがとう。元気でな。あなたたちのこと、絶対に忘れない」
「……行っちゃうんですね？」
「うん。ほな、行くわ。旦那さんにも、ありがとうって伝えてな」
長子はそう笑うと、母親のもとへ行った。
「お母ちゃん。そろそろ行くで」
「なんや、またあんたは急に……」
「だってもう空っぽやろ。みんなの前で消えるわけにはいかんし。みんなも好き勝手始めたし、そろそろ席外しても大丈夫やて」
「残念やわー」
二人はそのまま人々の輪からそっと外れ、更に海沿いの人気のない場所へと向かう。
「ああ、大阪港や……」
母親は、水平線を見つめてそう言った。地形は変わっているものの、海だけは変わらないように見える。
「今度は強く祈ろう。今度は絶対に帰れますように……！」
長子はそう言うと、お釜に祈る。
「そういえば、説明書もういっぺん見せて」
母親の言葉に、長子はポケットからお釜の説明書を差し出す。
「ふん。このスタートボタンって、何処にあるんやろね」
それを聞いて、長子はお釜を一周する。
「そういえばそうやね。周りには何もないけど……底かな？」
「あほやな。底やったら常に押されっぱなしやないかい」
「せやな。じゃあ……」
二人は釜の縁を見つめる。すると、汚れているが真っ赤な丸いボタンがあった。
「あった！　さっき帰る時、お母ちゃんが叩いたところや」
「ほな、押してみようか」
「ほんまに？　今度は米もない原始時代とか宇宙とかに飛ばされたらどないするん？」

「まあ、そん時はそん時。なるようになるわ」
母親がボタンを押した瞬間、辺りはまた真っ暗な闇に包まれ、その先には光が見える。
「見えるよ、お母ちゃん！」
「うん。ありゃ見なれた商店街やわ。やっと帰って来れたな！」
二人は抱き合って喜び、急いで光の先へと走っていった。
そこは紛れもなく、もといた懐かしい商店街の裏路地。二人はほっと息をつく。
「よかった！　でも、あの骨董屋には一言文句言わんと！」
「っていうか、このお釜返しなよ」
二人が同時に振り向くと、そこには骨董屋も何もない。ただのシャッター通りである。
「……ここやったよね？」
「うん……」
「すんまへん。ここの店、オープンと同時に閉めはったのかな？」
母親は、近くを通りかかった人にそう尋ねる。
「いや？　ここいらはずっと店なんてやってないでしょう」
二人は顔を見合わせ、首を傾げる。
だが、そのまま家に帰っても、なんら変わったこともない。時刻もさほど経っておらず、会う人もいつも通りの話をしてくる。
手元にはお釜だけが残ったが、いつの間にかボタンも取れて壊れていて、二度と作動することはなかった。
「まあ、人生なるようになる。あれは夢物語やわ」
母親の言葉に苦笑し、長子は空を見上げる。
「せやな。夢物語や……でも、いつかあの未来が来るのかな。私も心だけは豊かでいたいわ」
夢物語の証明は、お釜のほかにもう一つ。長子の財布から消えた、一枚の千円札であった。
その千円札が、長子たちが行った未来の世界では、とんでもない価値になっていることなど、知る由もない。

２０４　転生忍者

加藤三平、十九歳。とりあえず大学に通い、とりあえず就職を目指し、とりあえずの生活を送っている。

こんなとりあえずな性格が祟って、彼女とは別れたばかり。最近じゃ、軽い友達とただ飲み歩く毎日だ。

今日もふらふらと歩いていると、ズボンのポケットに入っていた財布のストラップが切れたことに気付き、振り向く。

「あん？」

地面に落ちたストラップは、綺麗な翡翠の勾玉である。子供の頃から持たされてきたお守りのようなものだが、三平は口を曲げた。

「だいぶ年代物だもんなあ。捨てるか……」

ストラップに年季が入りすぎて、もはや新しく紐でも買わないと付かないだろう。本物の翡翠なのかの知識もなく、三平はそのまま駅前のゴミ箱に勾玉を捨てた。

その日の夜、合コンから帰ってきた三平は、部屋に入るなり違和感を覚えた。窓が開いているのである。

「あれ。窓開けたっけ……こんな寒い日に？　ま、いっか。どうせ取られて困るようなもんもないし」

「遅いぞ。三平」

その時、こたつに寝そべる男性が見え、三平は目を見開いた。

「だ、誰だ、おまえ！」

「誰だとは失敬な。まだ覚醒してないのか？」

「はあ？　なに言ってんの？　おまえ」

「じゃあ、これならどうだ？」

男は得意気にそう言って、象牙と見られる勾玉を見せた。

「勾玉……？」

「そう。おまえの持ってる翡翠の勾玉。見せてみな」

「ああ、あれなら捨てたけど……」
「捨てた?!　いつ、どこで!」
男のあまりの驚きように、三平は一歩引いた。だが、なぜだか男に危険は感じない。
「さっき。ストラップが切れたから」
「なにを馬鹿なことを……!　いや、大丈夫だ。あれはおまえの証明。いつか帰ってくるはずだ」
「どうだろうなあ。確実に捨てたし……」
と、三平が元付けていた財布を開くと、二つ折の財布の間から、捨てたはずの勾玉が出てきた。
「嘘だろ!　なんで……」
「な?　だから言ったろ?」
「……まあいいや。それより、おまえがなんなのかを聞かせろよ」
冷静を装って、三平は男の前に座ってそう尋ねる。
「俺はおまえの相棒だった男だ。思い出せ、三平。今の暮らしに満足ならそれでいい。だが、この街に埋もれて生きていくつもりなのか?」
男の言葉は、三平の心を揺さぶった。ただ毎日がプログラミングされているように、三平の日常には何もない。
ふと三平は、こたつの上に置かれた、男が差し出した勾玉を手にした。それは手に吸いつくように、何も考えずに行った行為だった。そしてそのまま無意識に、自分の持っていた勾玉とくっつける。
とてつもなく膨大な情報が、なんの妨げもなく三平の脳裏に入ってきた、そんな気がした。
「……三吾?　三吾か!」
三平がそう言うと、目の前の男はにやりと笑う。
「やっと覚醒したか……まったく、ひやひやさせやがって。今は慎吾って呼ばれてるけどな」
「ああ、思い出した……俺たちは戦国時代、忍者として動いていた」
「そうだ。俺たちは無敵の相棒だった。時を超えても、二人で力を

合わせようと誓っただろう」
「三吾……おまえはいつから覚醒してたんだ？」
三平がそう言うと、三吾は歯を見せて笑う。
「実は俺も、数日前なんだ。おまえと同じ喫茶店に偶然いて、おまえの財布についている勾玉を見て思い出した」
「なんだよ。たった数日の差か」
「でも、どんどん記憶が蘇ってくる。今の時代、俺たちはまだ誰に雇われてるわけでもない。でも、やってやろうぜ。俺たちの手で風を起こすんだ！」
三吾は、目を輝かせてそう言った。
「風を起こす……」
「おまえだって思ってるはずだ、三平。こんな世の中クズみたいだって。俺、小さい頃から不思議だと思ってた。特に訓練してたわけでもなく身軽だったし、他のやつが考えつかないような知恵もあった。俺たちには特殊能力があるんだ。つまらない世界なんて、ぶっつぶしてやろうぜ！」
拳を見せる三吾に、三平も笑って拳をぶつける。
「ああ、やってやろうぜ。表舞台には立たなかったが、俺たちは今に語り継がれる栄光の時代がある。おまえとまた組めるなら、楽しい仕事が出来そうだ」
機械的な日々の中で、小さな風が巻き起ころうとしている――。

２０５　ウラハラ

コイゴコロは、いつもウラハラだ。
一気に燃え上がる恋は、長続きしない。
でも、それがホンモノならば、一生貫き通す。
冷めるのか燃え続けられるか……今、決断のとき。

出会った頃の理想に縛られないで。
ずっと一緒に、明日も明後日も。

コイゴコロは、いつもウラハラだ。
運命の人なんて、そうそういない。
出会いのさくら、優しく光るほたる、儚げなもみじ、物悲しいゆき。
幾年月を重ねても、わかりあえない日もあるから。
だからあなたと過ごせる今日を、大事に生きていきたい。

２０５　ウラハラ（後書き）

簡単な暗号みたいなウラハラを表現してみました。
文末をつなげると……ウラハラ。

206　白い息

はあ――っと、息を吐く。
白い蒸気となって目の前に消えた。
初冬の季節も、今日は一段と寒い。

「おはよう」
そう言うあの子の息もまた、白い。

「おはよう」
そう返した私の息もまた、白い。

「はあ……」
後ろで溜息をついたお姉さんもの息もまた、白い。

「ふう……」
真横で息をついたおじさんの息もまた、白い。

世界は一気に白い世界。
学校が終わったら、雪だるまでもつくろうか。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

207　隣の席の男の子

大野は隣の席の男子。小学校の時も何度か同じクラスになったことがあるけれど、あんまりしゃべった記憶はない。
中ニになった今、隣の席になってから、私たちはよく話すようになった。
「三浦。今日日直だろ。俺、黒板消すから、日誌持ってきてよ」
大野が私にそう言った。
「しょうがないなあ。でも、日誌は一緒に書いてよ」
「へいへい」
やる気のない大野の声を聞きながら、私は職員室へ日誌を取りに行った。
今日は一日、大野と二人で日直というやつだが、黒板を消すのと日誌を書くくらいで、特に仕事はない。
でも、密かに大野のことが好きな私にとって、この日はなんだか特別だった。

放課後、ホームルームが終わるや否や立ち上がった大野の袖を、私は掴んだ。
「待って。日誌書いてから！」
「バレたか。そんくらいやっといてよ」
「駄目。黒板消しだって、結局やったの午前授業だけじゃない」
「部活が……」
「すぐ終わるから」
大野を無理やり座らせて、私は日誌を広げる。
「ええっと……今日は欠席いたっけ？」
「佐藤と最上」
その時、大野の肩を抱く人物がいた。同じクラスメイトの男子だ。
「大野。部活は」

「これやってからすぐ行くー」
「先行ってるぞ」
そう言って、教室には私たちだけが残された。
このまま時が止まればいい、と思っているのは、私だけだろう。
大野はそわそわして、早く部活に行きたいって態度を見せてる。
「……やっておくから、もう行っていいよ」
沈黙に耐えきれなくなり、また大野を独占しているのが申し訳なく思えて、私は静かにそう言った。
「え？　なんで」
「だって、早く部活に行きたいんでしょう？　いいよ、行って」
「でも、おまえだって部活あんだろ？」
「私は運動部じゃないし、べつに……」
「いいよ。二人でやったら早く終わるだろ。さっさと終わらせようぜ」
大野はそう言うと、私から日誌を奪い、残りの記入を始める。
「……お、大野……」
私は緊張感を張りつめて、静かにそう呼んだ。
「うん？」
大野は変わらず、なんの警戒心も抱いていない。
「ううん。なんでもない……」
芽生えた決意が一気に萎えて、私は俯いた。
すると、大野が突然顔を上げ、私を見つめる。
「なんだよ。気になんだろ」
「いや、本当なんでもない」
「嘘つけ。言えよ」
「なんでもないったら！」
真っ赤になった私に、大野はまた日誌に目を向け、そして書いていた日誌を見せてきた。
“好きだ！”——日誌の活動報告欄に、大野の汚い字が見える。
驚いて大野を見ると、大野もまたさっきの私のように、顔を真っ

赤に染めている。
「わ、私も……」
それを聞いて、大野は笑った。それにつられて、私も笑った。
私たちは、ただ席が隣同士のクラスメイトから、恋人となる。

208　視線の先

愛しいあの人は、違う人を見てる。
高校に入ってすぐに目についた、あいつ――。同じ班になって仲良くなり、更に意識するようになった。
ちょっとドジで、でも意外と頼りがいがあって、なにより優しいところに惹かれた。
「あんたってさ……彼女いないの？」
休み時間の教室。同じ班での決め事のために隣に座った彼に向かって、私は思わずそう聞いていた。
「は？　なに、急に」
「ああいや……単純に、中学の時サッカー部部長って聞いたから、さぞかしおモテになってるんだろうなと思って」
からかい半分で、私はそう笑う。そうしていないと、恥ずかしくて目も合わせられない。
「いねえよ。副部長が超イケメンで、華持ってかれてたし。だいたい、中学で付き合ってるやつってそんなにいなかったよ。おまえは？」
「え、私？」
「人に聞いておいてなんだよ。おまえも言えよ」
「い、いるわけないでしょ」
「やっぱなあ。おまえ、俺から見りゃオトコだし」
その言葉に傷つきながらも、私は笑った。
「ははっ。私から見たら、あんたがオンナ」
私たちは互いに苦笑する。そう、異性であることを忘れるほど、彼とは楽な付き合いが出来た。そんな彼だからこそ、私は惹かれたんだと思う。でもそれがあだとなって、恋愛対象にも見てもらえてないことを再認識し、やっぱり落ち込んだ。

そんな会話も忘れ、数ヶ月が過ぎた。その間に別の人を好きになることはなく、変わらず私は彼のことが好き。

でも、彼の目線は最近、いつも同じ人を追いかけている。私はそれに気付いてしまった。ずっと見ていたから……知りたくなかったけど、知ってしまった。

クラスでも可愛いと言われている女の子。髪が長く、目がぱっちりで、私とは正反対の彼女。

（ああいう子がタイプなんだ――ううん、彼だけじゃなく、やっぱり彼女にするなら、ああいう女の子らしい子だよね）

心の中でそう思いながら、別の女子を見つめる彼を追う、私――。そんな光景、はたから見たらどれだけ滑稽なものだろう。そう考えると、私は苦しさに笑ってしまった。

「告っちゃえば？」

ある日の放課後、久々に二人きりになったチャンスで、私は思わず彼にそう言った。

彼が彼女に告白して、うまくいくなら諦めもつくし、うまくいかないならチャンスが生まれるかもしれない。なんにしても、こんなに苦しい思いをするのは終わりにしたかった。

だから私はずるいけれど、自分が告白することではなく、彼が彼女に告白させることをしたかったのだ。

「なんで知ってんだよ。俺があいつのこと好きだって……」

「そんなの、誰だってわかるよ。あんた、わかりやすいもん」

私の言葉に、彼は口を曲げる。突然過ぎる私に、言葉を探しているようだ。

「あれは目の保養です」

やがて、彼がそう言った。

「へえ、そうなんだ？　でも、好きなら告白して楽になったほうがいいと思うよ？」

「なんでおまえにそんなこと言われなきゃならないんだよ」

「確かに」

私は笑って俯いた。自分の言葉をそっくりそのまま、自分に言ってやりたい。

「鈍感女」

笑っている私に、彼はいつになく怒った様子でそう言った。

「は……？」

「むかつく。俺、もう帰るわ」

「ちょ、ちょっと待ってよ。意味わかんない。からかったのがむかつくなら謝るよ。でも、鈍感って……」

「鈍感女は鈍感女だろ。おまえ、全然わかってねえのな」

その時、彼の手が私の頬に触れた。それは叩いたのではなく、ただ優しく触れているだけだ。

「え……」

「俺が好きなのは、おまえだってこと。ったく、気付けよバカ」

私は目を見開き、彼を見つめる。

「う、嘘だ……だって、さっきだって、彼女のこと好きだって……」

「あー、むかつく。そう思いたければ思えばいいだろ。あいつは中学の時好きだったから、今でもちょっと目につくってだけで、今はなんとも思ってないし。つーか、中学の時にフラれてるし、あいつ彼氏いるし。目の保養ってのは本当だよ。俺が今好きなのは、おまえ！」

怒りながらも照れて赤くなっている彼を見て、私はようやく幸せの実感をした。

「嬉しいよう……」

気が付けば、私はぼろぼろと泣いていた。人前で泣くなんて、今までなかったのに。

「な、泣くなよ」

「だって……言ってくれないとわかんないよう」

号泣する私に、彼は困ったようにしながらも、誰もいない放課後の教室で、そっと抱き締めてくれた。その行為は、私にとって家族以外生まれて初めての行為で、胸が高鳴る。

「今、学校で一番近くにいるの、同性の友達じゃなく、おまえだと思うよ。おまえといると楽でいられるし」
「私も……好きだったよ。ずっと前から……私と付き合ってください」
「……はい。って、セリフ取られた」
「じゃあ、言って」
「俺と付き合ってください」
「はい……」
私たちは笑い合うと、二人で教室を後にした。

209　火の妖精

火の妖精のファイアは、妖精の中でも乱暴で嫌われ者。すぐカッとなって怒り、原っぱを燃やしたこともあります。

そんな問題児のファイアは、一つの場所にいられなくなり、旅人となって世界中を回っていました。

「僕は世界中旅をしてきたんだ。怪獣の国やお菓子の国、たくさん見てきたよ」

新しい土地にやってくるなり、ファイアは自慢げにそう話しました。

「嘘ばっかり。ファイアは嘘つきで嫌われ者だって聞いたわ」

話を聞いていた花の精の言葉に、ファイアはカッとなります。

「なんだと？　おまえを燃やしてもいいんだぞ」

「キャー」

その場にいたさまざまな妖精たちは、大急ぎで去っていってしまいました。

「チェッ。僕だって嘘なんかつきたくないけど……こうでもしなきゃ、みんな僕の話なんか聞いてくれないだろ」

ファイアはそう言うと、寂しそうに池の畔へ歩いていきました。

「あなたがファイアね？　世界中を旅しているという……」

その時、何処からか声が聞こえ、ファイアはあたりを見回します。すると目の前にある池に浮いた浮島に、一人の妖精を見つけました。

「君はだあれ？」

「私はプール。この池の妖精よ。私はここから動けないから、あなたの話が聞きたいわ」

「いいよ。じゃあせめて近くに来てよ。そんなに遠くじゃ、話も出来ない」

「わかったわ」

プールはそう言うと、池の水面を歩き、ファイアのそばに座りま

した。
「じゃあ、この間出会った怪獣の国の話を……」
そう言ったところで、ファイアは我に返り、目を伏せます。
「いいや、嘘はよくないね。大した話はないけれど、楽しいことや危険なこともたくさんあったのは事実だ。それを話すよ」
「ええ」
ファイアはみんなにしてきた嘘のつくり話ではなく、旅の途中で見聞きしたさまざまなことを、プールに言って聞かせました。
ふるさとの王様がかつらだったことで国中が大騒ぎになったこと、きつい山登りの後に見た夕焼けがとても綺麗だったこと、野宿をしていると雨が降り、危うく自分の火が消え命を落としそうになったことなどを話すと、プールは目を輝かせます。
「なんて素敵なの。あなたは正真正銘の冒険者ね」
プールの言葉に、ファイアは照れて体を覆う炎をいっそう熱くさせます。
「そ、そんなことないよ。君だって冒険がしたければ、一緒に連れて行ってあげる」
「……私は駄目だわ。行きたいけれど、私がここを離れたら、この池は枯れてしまうもの」
残念そうな顔で、プールはそう言いました。
「そうか……」
「だから、あなたの話をたくさん聞かせて。そうするだけで、私も冒険したみたいな気持ちになれるから」
「わかったよ。いくらでもしてあげる」
ファイアはプールに、たくさんの話をしてあげました。
そして話が尽きた頃、プールは満足そうに笑いました。
「ありがとう、ファイア。これから先の旅も気を付けてね。そしてまたここへ来た時は、きっとまた話を聞かせてね」
プールの言葉に、ファイアは目を伏せました。
「……ここにいたら駄目かな。僕は、好きで旅をしているわけじゃ

ない。どこへ行っても受け入れられなかったから……僕が熱くてみんなを燃やしてしまうから、僕が怒るとすべてが燃えてしまうから、だから僕は落ち着ける場所を探していたんだ」

やっとのことでそう言ったファイアに、プールは優しく微笑みます。

「ここにいたいならいればいいわ。私なら大歓迎よ」

しかし、周りにいた木の精や花の精などは、口々に言います。

「なにを言っているの、プール。ファイアも自分で言ったじゃない。みんなを燃やしてしまうって……池の妖精のプールなら大丈夫でしょうけど、私たちにとってファイアは危険なのよ。燃やされてしまうわ」

「助け合って生きていきましょうよ。ファイアだって優しい心を持っているわ。みんなが仲良くすれば、みんなを燃やしてしまうはずがないわ」

「そんなことわからないじゃない」

言い争いが始まってしまい、ファイアは悲しく立ち上がりました。

「ごめんなさい。言ってみただけなんだ。やっぱり僕には旅が一番」

そう言っていたファイアの目から、次々に涙が溢れ出します。

そしてファイアは、プールに抱きつきました。

「プール、プール。ありがとう……僕を信じてくれて。僕は君が大好きになったよ。みんなにも、大好きになってもらいたかった……」

プールはファイアを見つめます。

「離れて、ファイア。私を覆う水で、あなたの炎が消えてしまうわ」

「いいんだ、プール。僕は君と一緒にいたい。ここにいたいんだ」

「私もよ、ファイア。でも、あなたが……」

その時、ファイアの火が消えました。プールを覆う池の水によって、消されたのです。

プールは涙を流して、消え残ったわずかな火種を流木に移し、そして池の畔にある岩場にそれを移します。

「もう誰もあなたを責めたりしないわ。あなたの真心を、みんなも

わかったはず。私もあなたが好きよ。だからいつか、あなたのような火の精が戻って来てくれることを願うわ……」

ファイアは消えてしまったが、その小さな炎はいつまでも燃え続けました。

時には旅人を温め、時には闇夜を照らす。いつしかその炎は、恐れていた者たちをも暖かく包み、道を照らしているようでした。

プールは旅人の足音に、耳を澄ませます。

「僕は火の妖精。世界中を旅しているんだ」

いつかそんな声が聞ける日を信じて――。

210　僕の冒険記

「寛人（ひろと）。勉強しなさい」
「はーい……」
僕はそう言いながらも、漫画雑誌を読みあさっている。
漫画ぐらい勉強が楽しけりゃいいってもんだけど、あいにく小学生の僕には冒険漫画のほうが楽しくてたまらないんだ。
「おお、すっげー続き気になる！　もうなんで週刊誌ってすぐ終わるんだろうね。もうちょっとボリュームが欲しいってもんだけど……」
一人でぶつぶつ言いながらも、僕はもう一度読み返す。
「しかしこのザコキャラ、弱いなあ。ザコだからしょうがないか。でも僕ならもうちょっとマシな動きで海賊をやっつけるけど」
僕は読んでいた漫画のページをめくる。海賊たちが戦っているシーンだが、仲間のザコキャラがどうにもドジを踏んで、ピンチになるのがたまらなく嫌だ。
ページをめくると、僕は目を疑った。
「あれ？　さっきこんなんだったっけ？」
そこは一面白紙のページで、吹き出しがいくつか書かれているものの、セリフもない。
「うん？　なんだこりゃ？」
と言ったところで、僕は百八十度変わった目の前の景色に、息を呑む。
ここはどうやら船の上。僕は船の柱に体を縛りつけられ、目の前では海賊たちの壮絶な戦いが繰り広げられている。そこには、見憶えのある主人公の顔もあった。
「こ、こ、ここは……漫画の世界?!」
僕は縛られているためか、周りに敵はいない。
代わりに、主人公が僕に気付いて、闘いながら笑いかけた。

「気が付いたか、寛人。助けに来たからもう少し待ってな。よく頑張ったな」
僕の体はボロボロで、捕まった際に殴られたと見られる傷が全身にある。
すっかり漫画の世界に脳が溶け込んで、僕は戦う主人公を見つめながら、ぐっと歯を食いしばった。
「僕はもっと頑張れる。足手まといにはならないぞ！」
その時、縛られていた僕の体の縄が解けた。
僕は、主人公と戦っている目の前の敵の首にしがみつく。敵は意表を突かれ、もがいている。
だが次の瞬間、僕は後ろから敵に殴られたようで、そのまま意識を失った。

「気が付いたか、寛人」
それからどのくらいの時間が経ったのか、気付けば僕は船の甲板に横たわっており、仲間から見下ろされていた。
「僕、負けたのか……カッコ悪いな。もっとうまくやれると思ったのに……」
「なに言ってるんだ！　おまえに助けられたよ、寛人」
見ると、周りには無数の敵が横たわっているのが見える。
「よかった……勝ったんだね」
「ああ。これで先に進める。おまえは立派な海賊だよ」
主人公が、そう言って僕に戦利品の金貨をくれた。
すると、次第に世界が薄れていく。
「な、なんだ？　目が回る……」
ふと気がつくと、そこは僕の家だった。
「ハハ……なんだ、夢か」
僕は残念なようなよかったような気持ちで、漫画を見つめる。
さっきまで白紙と見られたページはきちんと埋まっているが、僕と主人公が交わしたセリフそのもので少し驚いた。

「僕の漫画熱も重傷だな……」
僕は漫画雑誌を閉じると、ベッドに横たわる。なぜか体が異常にだるいので、僕はそのまま寝てしまった。

それから僕は、何事もなく朝を迎え、いつも通り学校へ向かっていく。
その間に、お母さんが僕の部屋を掃除していることを、僕は知らない。
「またこんなに漫画ばっかり……」
お母さんは、床に転がった漫画を積み上げ、掃除機をかける。
「あら？」
その時、お母さんはベッドの下に転がる金貨を見つけた。
「どこのコインかしら。また隠れてゲームセンターにでも行ったのね」
お母さんはため息をつくと、金貨を僕の机の中にしまった。
僕はその金貨の存在も、あの不思議な夢のことも、次第に忘れていくはずだ。
でも、数年後に出てくるその金貨は、僕の大事なものを思い出させてくれるに違いない。

211　カランコロン

夏風涼しい石畳の坂
カランコロンと下駄の音

青い眼をした異人さんも
カランコロンと下駄の音

遠くで汽笛が鳴り響く丘
カランコロンと下駄の音

私の愛しいあの人も
カランコロンと下駄の音

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

212　ただ眠いだけの話

「あなたはだんだん眠くなる～。眠くなるったら眠くなるぅ」
学校の休み時間。怪しい手つきで、親友の博美が私に向かってそう言った。
「うーん。そう言われると眠くなるかもね」
私は冷めた目でそう答える。
「もう。まじめに催眠術にかかりなさいよ」
「思いつきの子供だましじゃない……」
そう言ったところで、私は突然、瞳孔を開いたままフリーズした。
何があったわけでもなく、まばたきをする気にもならない。
「ちょっと？　綾子。大丈夫？」
博美にそう呼ばれ、私ははっと我に返った。
「うん、大丈夫。だけど……」
脳裏には、さきほどまで目の前で見ていた、博美の怪しげな手の動きが繰り返されている。
「あれ。なんだか眠い……」
「うそ、マジ？　マジでかかっちゃった？」
「そうかも……」
その時、先生が入って来て、私たちは席へと戻っていった。
次の授業、私は初めて授業中の居眠りというものをしてしまった。

「綾子。本当に大丈夫？　綾子が授業中に寝ちゃうなんて珍しいじゃん」
博美の言葉に、私は口を曲げる。
「あのねえ。あんたが私にかけた催眠術でしょ」
「でも、あれは冗談だって……だいたい、あんなもんでかかるんだったら、みんな寝かせられるって」
「もうやだ、本当に眠い……」

私は目をトロンとさせながら、博美と一緒に家路を急ぐ。
「変なところで寝ないでよ？　家までもつ？」
「わかんない……もう。術をかけたんなら解いてよ」
あまりの眠気に、私は苛立ちさえ覚えて、博美にぶつけた。
「そんなこと言われたって……じゃあ、一応やってみるか。目を瞑って」
道の途中で、博美は私を立たせ、目の前に立つ。
「こんなところで？」
「いいから早く。じゃあ、次に私が数を数えます。サン、ニ、イチ、と言ったら、あなたは催眠状態から脱します。ではいきますよ。サン、ニ、イチ、ハイ！」
博美が叩いた手を叩く音で、私は目を開けた。でも、眠気は変わらない。
「ねーむーいー……」
「もう。まさか昨日、遅くまで起きてたとか、そういうオチじゃないでしょうね？」
「まさか。昨日は……あ、昨日、寝てないや。ラジオ聞いて、そのまま徹夜したんだった」
その後、博美から強烈なパンチが飛んだというのは、言うまでもない。
おかげで私の催眠……いや、睡魔は嘘のように取れたが、あの異常なまでの眠気を、ただ単に私の徹夜のせいというのも、いかがなものだろうか？　もしかしたら本当に、催眠術によって……という可能性も、まったくないとは言い切れないはずだ。

２１３　雪が好きな君のため

僕の娘は、雪が好き。
名前を雪にしたからかもしれない。
真っ白で儚げで、僕の大好きな妻によく似た、かわいい娘だ。

「雪、雪！」
何度目かの誕生日を迎えた寒い冬、寒さなんかもろともせず、君は降り出した雪に外を見つめる。
その紅潮した顔は、今にも外へ飛び出したくてうずうずしている。
「雪。外へ出ようか」
僕は娘を連れて、寒い外へと出ていった。
もし明日雪が積もったら、早く起きて、こっそりかまくらでも作ってやろう。その後はきっと、二人で雪だるまでも作ろう。
そう考えると、僕は娘の喜ぶ顔を想像して、くすりと笑った。

次の日、僕は予定通り降り積もった雪に、早起きしてかまくらを作る。
でも娘はその日、熱を出して寝込んでしまい、一緒に雪だるまを作ることは出来なかった。
昨日、寒い中、僕が娘を連れて外へ出たからかと後悔もしたが、窓から見える僕が作ったかまくらを見て、予想以上の笑顔を見せてくれた娘に、「次に雪が降ったら、一緒に雪だるまをつくろうね」と、約束をした。

だがその冬、結局雪は積もらず、娘の大好きな冬は過ぎていってしまう。
「また来年も、雪降るよね？」
そんな娘と、僕は指きりげんまんをする。

「もちろんだよ。そうしたら、一緒に雪だるま作ろうね」
「うん」
その時、僕らの前に、雪が舞った。
「雪！」
娘の言葉に、僕は半信半疑で顔を上げる。
春先の公園に、桜の花びらという雪が降る。その光景は、まさに美しいの一言だった。
「ああ……春の雪だな」
娘は嬉しそうで、僕もその美しすぎる光景に、思わず涙ぐんだ。

それから僕は娘とともに、春の桜並木を歩いてゆく。秋は落ち葉の中、枯葉を雪に見立ててみる。
そしてまた、冬が来る。
僕らは一年を通して、娘の大好きな雪を感じているんだ。

北風の中、雪だるまが笑った。

２１４　お題小説「女神」（前書き）

この物語は、同じ“小説家になろう”で執筆されている「羽　衣石」様より、「女神」というお題をいただきましたので、書いてみました。
世界観はどれとも異なるお話ですので、ご了承ください。

２１４　お題小説「女神」

「地上に降り立った女神」

天上界。さまざまな神々が暮らす宮殿の隅に、一人の女神がいた。フェンテ、という名のその子は、十五歳になろうというのに、他の女神とも交流を持とうとはしない。

「いっそ天使に……ううん、人間になりたい」

そう呟くと、下界を見下ろす。

彼女の儚さは、出生に秘密がある。彼女の親は、悪魔と女神である。母である女神は、魔界の王子と真剣な恋愛をしたと聞いているが、フェンテを産んで間もなく死んでしまった。

悪魔との間の子はフェンテが初めてではないものの、それでも風当たりは強かったせいで、フェンテの心は、天上界にはない。

「悲観しちゃって、馬鹿みたい」

ふとそんな陰口が聞こえ、フェンテは振り返る。だが、もうそこに姿はない。

「そうよ……悲観してても仕方がない。ここに居場所がないなら……行くわ」

フェンテは下界を見つめた。そこには人間界が広がる。許可なく天上界を離れることは重罪に当たるが、フェンテはそれよりも、ここから出たかった。

「降りよう……新しい世界へ」

神々しいまでの光が、天から地上へ一直線に落ちていく。

一瞬、気を失っていたのか、気付けばフェンテは、海辺にある教会の片隅にいた。だが、古ぼけた教会に、人の気配はない。

「……まるで宮殿にある私の家みたい」

地上に降りても孤独な自分に、フェンテは悲しく微笑む。

宮殿には住んでいるが、部屋を与えられたわけでもなく、まるで

隔離されたように、小さな家で一人で暮らしていた。
その時、遠くから歌が聞こえてきた。何人かの合唱のように、心地よいハーモニーが聞こえる。
その歌に導かれるように、フェンテは歩き出した。
しばらく歩いていくと、綺麗な建物があり、中には子供から大人までで編成された合唱隊がいる。
フェンテは時間を忘れ、窓からこっそりとその様子を眺めていた。
やがて歌が終わり、人々が去っていく。誰もいなくなった建物の隅で、フェンテは空を見上げた。
「ここも天上界と一緒ね……神様はもう私がここにいること、気付いていらっしゃるかしら」
すると突然、少年が顔を覗かせた。
フェンテは驚いて立ち上がり、さっきまでいた古い教会へ向かって走っていった。
「怖がらないで！　何もしないよ！」
途中の並木道で、フェンテは少年に腕を掴まれ、そう言われた。
少年は、フェンテと同じくらいの年頃だろうか。まだあどけなさが残るが、人間と初めて接触したフェンテには、恐怖が襲う。
「あ、あの……」
怖がっている様子のフェンテに、少年は優しく笑う。
「驚かせたみたいでごめん。君、さっきずっと覗いていただろう？　入ってくればよかったのに」
「……」
「僕の名前は、エリック。さっきいた教会で暮らしてるんだ」
聞けばエリックは孤児で、赤ん坊の頃から教会で育てられていると聞いた。
「私の名は……フェンテ。親兄弟はいないけど、家出してきたの」
「何か事情があるみたいだね。落ち着くまでここにいればいいよ」
「ありがとう……」
少しずつ二人の心が開かれ、手が繋がれた。

すると次の瞬間、大きな稲妻が落ち、辺りは突然の豪雨に見舞われた。
「すごい雨だ！　旧教会のほうが近いな……行こう」
エリックはフェンテの手を取ったまま、古びた教会へと入っていく。
「まいったな……この雨じゃ、牧師さんたちも出かけたまま帰ってこられないだろう」
そう言ってエリックが振り返ると、フェンテはエリックの手を取ったまま、ガクガクと震えている。
（神様が怒っていらっしゃるんだわ……）
「フェンテ……？　大丈夫だよ。この教会は古いけど頑丈だし、雨なんてすぐ止むよ。でも、食料は新しい教会のほうに移してしまったばかりなんだ。取ってくるから、ここにいて」
「待って！　行かないで」
「大丈夫だよ。すぐそこだから」
「どうしても行くなら、私も一緒に行くわ」
「でも、この雨だ。君までずぶ濡れになっちゃうよ」
「大丈夫だから……」
あまりに不安げなフェンテの様子に、エリックは微笑み、頷いた。
「わかった。じゃあ一緒に行こう。ここよりあちらに戻ったほうがいいとも思う」
そう言って、エリックはフェンテを連れ、並木道を小走りで戻っていく。
「あっ！」
しばらく走ると、フェンテが足を滑らせて転んだ。
「大丈夫？　枯葉が滑るんだ……」
少し先にいたエリックが戻ろうとしたその時、稲妻が一直線に近くの木へと落ち、折れた木が二人の間に倒れ込んだ。
「エリック！」
叫びながら、フェンテがエリックに駆け寄る。

だが、エリックはすでに気を失い、倒れた木はあまりにも大きく、運悪くエリックの足を抑え込んでいる。

「私なんかと関わったから……」

顔面蒼白になったまま、フェンテはエリックに倒れた木に両手を添える。

「お許しください、神様……すぐに天上界へ戻ります。罰は受けます。だから、彼を助けてください。どうかお願いします……」

祈りを捧げながら、フェンテは神通力で木を避け、エリックの潰れた足を治した。

「フェン、テ……」

意識を取り戻したエリックの目に、涙に濡れたフェンテが映る。未だ降り続く豪雨が、二人を濡らす。

「ごめんなさい、エリック……私のせいでこんな……」

「どうして君のせいなんだ。それより君は大丈夫？　おかしいな……僕はもう駄目かと思ったのに、なんともないみたいだ」

すっかり傷も痛みもなく、エリックは静かに立ち上がる。

「もう二人ともずぶ濡れだね。戻ろう」

「……ええ……」

止めどなく溢れるフェンテの涙は、別れを意味していた。

真新しい教会に戻った二人。

「今、火をつけるね。マッチを持ってくるから、少し待ってて」

そう言って去っていくエリックの後ろ姿を見つめ、フェンテはそっと教会を出ていった。

「神様。未熟者の私が、勝手に地上へ降りて許されないはずがありません。どうせ望まれない存在……命を絶たれても、地獄へ落とされても、反論する余地もありません。ただどうか、私と関わってしまったエリックを、これ以上傷つけるのはやめてください。彼の記憶を消して、私に罰をお与えください」

豪雨の中、跪いたフェンテは、神の声を待った。

「フェンテ！」

その時、エリックが教会から出てきてそう呼んだ。
「エリック……」
「こんな雨の中、何してるんだ。早く入って」
「……私はここにはいられないわ」
「どうして！　いつまででもいていいんだ」
フェンテは首を振り、真っ直ぐにエリックを見つめる。エリックの記憶は消されるだろう。
覚悟を決めたように、フェンテはそっと口を開く。
「優しくしてくれてありがとう、エリック。信じられないと思うけど……私は天上界から来たの」
「天、上界……？　君は……もしかして、天使なの？」
「ううん。女神よ……といっても、力も何もない、誰にも望まれない女神だわ」
「……女神様か。天使のような子だとは思ってた。僕は信じるよ。だって僕を助けてくれたのも、君だろ？」
その言葉に、フェンテは大きく首を振った。
「あなたを危険な目に合わせたのは私よ。私がここに来なければ、あなたが怖い思いをすることもなかった」
泣き叫ぶフェンテを、エリックは優しく抱きしめる。
「君が望むなら、ずっと一緒にいられる。僕は君が好きなんだ」
「エリック……」
安心させるように微笑みながら、エリックは空に向かって手を合わせる。
「神様……僕にフェンテをお与えください。フェンテが望んでくれるなら、僕がきっとフェンテを幸せにします」
幼いながらも、まるでプロポーズのようなエリックの言葉に、さっきまで豪雨だった世界が、嘘のように晴れ間を覗かせる。
神の声は聞こえなかったが、その意志は二人に通じた。
誰も知らない、一人の女神のおはなし。

２１４　お題小説「女神」（後書き）

いろいろタブーを冒した気がしますが、自由に書かせていただきました。
お題をくださった「羽　衣石」様、ありがとうございました！

215　果てなき世界

「この広い宇宙の中で、どうして宇宙人はいないと言い切れるね？　なぜ地球だけに生命があると思うんだね？　我が地球に住む人類は、それこそ日々成長を遂げ、宇宙の果てに夢を馳せている。けれど、他にしていることはなんだと思うね？　無意味に命を引き延ばし、無意味に殺し、その命を食べて生きている。宇宙の目から見れば、なんと下等な生物だとは思わないかね？」

独特の口調で、先生はそう言った。

「では、能書きはここまでにして、この一枚の紙に、宇宙を書きなさい。それが明日までの宿題です」

そう言って、先生は授業を終わりにした。

私はすっかり悩んでしまい、真っ白な画用紙を見つめている。

「どうしたの？　食堂行かない？」

クラスメイトが、そう言って私を促す。

休み時間になったというのに、私はその真っ白な画用紙から目が離せない。

「うん、行く……でも、難しい宿題だね」

「そう？　宇宙なんて広いってわかってるんだから、私だったら地球を小粒に書いて、たくさん星を書いちゃう」

「なるほどね……」

私はまだ悩みながらも、一先ず宿題から離れ、昼下がりの食堂へと向かっていった。

帰ってからも、私は宿題に頭を悩ませた。宇宙を書けとは、難しい宿題を出されたものだと思ったが、他の生徒たちはそうでもないらしい。自分だけが悩み過ぎなのかと思うと、それもまた悩みとなった。

次の日、私は他のクラスメイトの宿題を見て唖然とした。色鉛筆を使って絵のように仕上げている子、地球から見た宇宙を書いている子、いくつもの宇宙を書いている子、それこそ多種多様だった。

そんな中、私は何も書かず真っ白なままの画用紙を、恐る恐る先生に差し出す。

「……これはどういうことですか？」

静かな先生の声が、私を貫く。

「すみません……私には、宇宙がなんなのかわからなかったので、書けませんでした」

「そうですか。これがあなたの意思ならば、正解だったでしょうに」

先生の言葉に、私は顔を上げた。でも、すでに先生は教壇へと戻っていく。

「ではみなさん、正解をお答えしましょう。それは、みなさん全員正解です。みなさんどなたもよく書けていました。宇宙というものは、とても広くて、みなさんの画用紙をすべて繋げ合わせても、表現出来るものではありません。あの真っ白なままの画用紙もまた、宇宙ということがおわかりですか？」

私たちは理解出来ず、みな一様に首を傾げている。

「宇宙というものは、無から出来たものだと考えられている説があります。無からどうして出来たのでしょう。でも宇宙は今も広がり続けています。広がる前の世界はどんな世界なのでしょう。それもまた無の世界でしょうか」

先生の話は、遥かな時を流れているかのように、壮大なスケールに聞こえた。

広がり続ける宇宙の前が何であったかなんて、私は今初めて考えたのだ。でも、考えが及ばない。

「宇宙は広い。では狭い世界で考えてみましょう」

そう言うと先生は、ささくれ立った自分の指からめくれた皮を取って見せた。

「この薄皮の中に、どれだけの細胞があるとお考えですか？　それ

こそ無数にあるのは、顕微鏡を覗いたことのあるみなさんならおわかりでしょう。人間の体も、動物や魚や植物の体も、無数の細胞から出来ています。私たちは想像することが出来る。つまり、大きくも小さくも想像力を働かせることが出来ます。私たちは細胞の一つ一つから出来ていることを忘れずに、また宇宙の広がりに思いを馳せることが出来るのです」

先生が言いたかったことがなんなのかはわからなかったが、確かに私は物事を大きくも小さくも捉える事が出来ていた。

先生は、最後にこう付け加える。

「最後にみなさん。私たちはどれだけちっぽけな世界で生きているのかがおわかりでしょうか。それでもみな、一生懸命に生きていることがおわかりでしょうか。心を広げてみなさい。それこそ宇宙のように果てしなく。そうすれば、私たちは細胞一つ一つに感謝することが出来、大きな問題も些細なことと受け止められることが出来るとは思わないですかね？」

そう言った先生の話は、今の私にはまだ早かったのか、すべてを理解することは出来なかった。けれどその壮大なスケールの話は、今も私の心で燃え続けている。

216　再会

自分とそっくりな人は、この世に三人いるという。
そんなことは都市伝説もいいところだって、私もそう思ってた。

ある夏の日、私は彼氏とともに海の近くの民宿へと訪れた。
大学に入りたての私たち。両親を説得しての、初めての旅行――。
「あれ、桃。まだ風呂行ってなかったんだ？　早く行けよ。後で花火やるからさ」
大浴場に向かう途中、何の気なしに、私は知らない青年にそう声を掛けられた。
誰か近くにいたのかしら――と、首を傾げながら、私は大浴場へと向かっていく。
体を洗って、湯船に入ると、私は固まった。
まるで鏡でも見ているかのように、そこには私に似た……いや、私と同じ顔をした女性がいる。
「あ、あなた誰?!」
私は不気味なものでも見るかのように、思わずそう言った。
「……高田桃子。あなたは?」
「私は……日向井亜也」
まるで名前も違う二人。でも話せば打ち解け合い、同じ年の大学生で、桃子は大学のサークルで来ているという。
後からやって来た桃子の友達とも対面し、私は彼氏とともにそのサークルの仲間に入った。

桃子と過ごす最後の夜、私は桃子のサークル仲間とすっかり打ち解けた彼氏を置いて、桃子と二人、部屋へ戻った。
「いい？　サン、ニ、イチ」
フラッシュとともに、携帯電話のシャッター音が鳴る。

私の携帯電話には、たった今撮った二人の写真がある。客観的に見ても、私たちはそっくりだった。
「桃子の家も、両親がいるんだよね？」
「うん。兄弟もいる」
「うちは一人っ子だから……まずはうちから聞いてみよう」
「うん……でも、もし双子だったとしても、お父さんかお母さん、どっちが本当の親かわからないんだよね？」
「だから、それを今から聞くんじゃない」
私たちはお互いに唾を呑み込みながら、携帯電話を見つめる。
そして私は、母親へと電話をかけた。
「あ……ママ？」
『亜也？　明日帰って来るのよね？』
「うん。あのさ……突然で悪いんだけど、聞きたいことがあるんだけど……高田桃子って、知ってる？」
『……』
沈黙が、すべてを物語っていた。
「……知ってるんだね」
『……その子が、何か？』
「会ったの。同じ民宿で……私とまったく同じ顔」
『そう……そうなの』
それから私たちは、母からいきさつを聞いた。
私たちが生まれる前に、母は桃子の父親と結婚していて、そして離婚したこと。産まれて間もない私たちの片方を、無理やり父親の家族に取られたこと。それを今日まで隠していたこと。
両親だと思っていた親が、片方は血の繋がりがないことを知って、少なからずのショックはあったが、正直に話してくれた母親に、私たちは謎が解けた達成感のようなものを感じていた。
それから私と桃子は、母に会いに行く。そして父に会いに行く。
これからどんな困難が待ち構えていようと、失われた時間がどんなに多くとも、私と桃子は深い絆のようなもので結ばれている気がす

る。不思議と怖くはなかった。

217　アイツへ

ねえ、って呼べば、
うん？　って答える。

いつの間にかお互いが空気のような存在になっていて、
心地よくて、いるのが当たり前で、いなくてもその気配を感じられる。

でも、そう思ってたのは、勘違いしていたのは、私だけだったんだね。

あいつはずっと一緒だった友達。
弟のような、親友のような、男女とかそういうの関係なくて、近所に住む仲の良い男の子。

子供の頃は、お互いに、大きくなったら結婚しよう、なんて幼い約束を交わしたこともあった。
でもいつからだろう。あいつは私を避けだした。

からかわれる。いつまでも女とばかり遊んでいられない。おまえも彼氏くらい見つけろよ。
そんな思春期の反発とともに、あいつに彼女が出来た。
見たこともない笑顔。感じたこともない優しさ。
あいつはもう、私の知ってるあいつじゃない。

もっとつかまえておけばよかった。もっとちゃんと向き合っていればよかった。
空気のような存在だとか思ってなくて、ちゃんと告白しておけば

よかった。
後悔は、いくらでも出てくる。

でも、私の好きだったあいつはもういない。
祝福するつもりはない。当たり散らす気もない。
いつか――そう、いつか。
お互いに年を取り、子供なんかも出来たりして、そんな何十年後かでも、あの頃はあんたのことが好きだった、なんて、笑い話にでもして伝えられるといいな。

そんなことを考えているから、今はまだ失恋の涙に浸らせて。
言葉が欲しいなら、あとで伝えるわ。
結婚、おめでとうって。

218　君はロボット？

右と言えば右を向く。左と言えば左を向く。
この方向キーのように、或いはゲームの中のキャラクターのように、プログラムされた未来型アンドロイドのように、僕らは誰かに操作されているというのか。

右と言われれば左を向く。左と言われれば右を向く。
そんな社会のつまはじき者が、歴史を動かしてきたこともある。
時代のヒーローは、時に異常者扱いをされながら闘ってきた。己を信じて闘った。

では、流れに逆らうことが正しいのか？
そんなことは言っていない。だが、そんな勇気もまた必要な時が必ず来るだろう。
それが今なのかはわからない。ただ今ならまだ、遅すぎるということはない。

僕らには意思がある。考える力がある。行動出来る身体がある。
それなのに、ただ流されているのはなぜだ？　流されているのは誰だ？
君はロボット？　僕は――。

219　ヒロシマ

数十年前の今日――八月六日。

あの日、落ちたピカは、すべてを焼き尽くした。

思い出すのも恐ろしい。

皮膚が焼けただれた人々が、喉の渇きを訴えて、そして死んだ。

私のお母さんは、姿形さえ消え去って、家の塀に影を残した。

私はといえば、家の中で学校へ行く支度をしていて、ピカからは免れたものの、

少なからずの火傷はしたし、その後からくる差別や偏見の眼差しに、怒りや悲しみを感じた。

「あんたは火傷をおっとらんけん。黙っとき」

そう言った姉はケロイドがひどく、重度の原爆症に苦しんでいた。

同じ家の中にいたのに、少し場所が違うだけで、火傷の程度も違った。

引っ越し先の学校では、「ピカがうつる」と、広島から来たというだけで差別の嵐だったし、

後に結婚を約束した相手の親からも、私との結婚は反対された。

ピカを浴びた身体が、後の子供にどう影響するか、詳しいことはわかっていないからだ。

私が大人になる頃、姉は死んだ。

「お姉ちゃん。私、ずっとピカのこと隠してきたけど、もう隠さない」

姉の亡骸にそう誓って、就職先でも近所でも頑なに出身地を言わなかった私は、

人が変わったように、自分の生い立ちを話し始めた。

私から去って行った人もいたし、職場も退職しなければならなくもなった。

でも私は、あの日のことを忘れない。

姉の苦しみ、母の影、私自身の悲しみを伝え続けると誓ったのです。

どうか一人でも、あの日に思いを馳せてみてほしい。

そして、二度と繰り返さないでほしい。

この当たり前のような平和の中に、あの日があったということを。

220　指輪の勇気

ポケットに忍ばせた小さな箱には、銀色の指輪が入っている。

店で見たきり、ラッピングしてもらったので、僕はその指輪にさえ触れていないが、今日が僕にとって最大の勇気を出さねばならない日であることは、重圧となって押しかかっている。

いや、今日が人生最大の勇気――というのは、実のところ今日が初めてじゃない。

先日の週末も、同じレストランに来たが、結局勇気が出せず、彼女に告白することは出来なかった。

「週末ごとにこんなお洒落なところじゃなくていいのよ？」

彼女はそう言って笑う。

確かに付き合いはじめの頃は、それこそ居酒屋でもファミレスでも、どこでもよかった。

でも今は、居酒屋で告白なんて、彼女にも可哀想じゃないか。

僕は早くこの指輪を渡さねば、と思った。

「あ、ごめんなさい。職場からだわ。ちょっといい？」

彼女はそう言って、携帯電話を持って、店の外へと出ていった。

大手企業に勤める僕ら。彼女の部署は忙しくて有名だ。デートの途中でいなくなるなど、ざらにあった。

やがて戻ってきた彼女は、案の定すまなそうな顔をしている。

「ごめんなさい。ちょっとトラブってるみたいで、行かなきゃならないの……」

「……今日は休みだろ？　君じゃなきゃならないことなの？」

思わず僕はそう言った。

「ごめんなさい……」

彼女は謝るばかりで、もうすでにバッグを持って構えている。

「次は……いつ会える？」

「わからないわ。このところ残業が続いてて、今度の休みもどうなるか……」
「そう……」
「ごめんなさい。多分、週末なら……」
「もういいよ。早く行ったほうがいい」
「うん……ごめんなさい」
そう言って、彼女は店を出て行った。
仕事に打ち込む彼女に寂しさを感じる一方で、それを認めている自分がいる。確かに彼女は有能だ。そんな彼女に惹かれたのだから、それを奪う権利など僕にはない。
一人残された僕は、目の前のフランス料理をただただ食べ続ける。空しい味がした。
僕のポケットに入った指輪は、このまま渡すことなど出来ないのかもしれないと思った。
「ごちそうさまでした」
会計を済ませて店を出た僕は、背広の内ポケットに指輪がないことに気付き、慌てて店へと戻った。だが、どれだけ探しても見つからない。
奮発して高い物を買わなければよかったと思う一方、失くしたのはやはり彼女に言い出せないというきっかけを与え、僕は自暴自棄になる。
「もういい。神様がやめろって言ってるんだろ……」
僕は空しく笑って、家へと帰っていった。

次の日。会社では一つの噂で持ちきりだった。それは、マドンナ的存在である僕の彼女が結婚するというのだ。
僕らの交際は社内で秘密にしていたので、相手は誰なのかと僕も気になった。

その日、たまたま廊下ですれ違った彼女を見て、僕は驚愕した。

彼女の頬は赤く染まり、そしていつもより輝いている。なによりその左手の薬指には、見なれた指輪がはまっていた。

「それは……」

「ありがとう。あなたの気持ち、受け取ったわ。これが私の答え」

白昼の会社で、彼女は左手を見せながら、頬を染めてそう言った。

だが、僕には何が何だかわからない。

「……その指輪、どこにあった？」

「昨日帰ったら、バッグの中に……指輪にあなたと私の名前が刻まれていたから、てっきりあなたからのプレゼントかと……違った？」

不安げな様子の彼女を、僕は思わず抱きしめた。

「違わないよ！　大好きだよ。僕と……結婚してくれますか？」

「はい。お願いします」

人目も気にせぬ白昼の社内で、僕らはそう交わした。

なぜ指輪が、僕の背広の内ポケットから彼女のバッグに入っていたかはわからない。

でも、今は思える。神様が僕の後押しをしてくれたんだって。

もうグズグズしたくない。何よりも大切な、彼女を手に入れることが出来たんだから――。

221　待つわ

街はクリスマスムード一色。どこもかしこも華やかで、駅前の大きなクリスマスツリーも、誇らしげに輝いている。

そんな街を見つめながら、私だけ時が止まったかのように、見るからに寂しげな駅前ロータリーで、交差点を見つめてる。

「今、仕事終わったから。すぐ行くよ」

彼から電話でそう言われたのは、もう三十分も前のこと。

私はそんな電話を受けて、ウインドウショッピングを終えてすぐにここへやって来た。彼の会社からなら、十分もあれば着くはず。

私は彼の車を探す。

「お待たせ！」

そんな声に振り向くと、少し離れた車の乗降場所で、落ち合ったカップルがいる。

「もう、遅いよ」

「ごめん。寒かったろ？」

そんなやり取りを横目で見つめながら、私は溜息をついた。

この場所にずっといるのは私だけ。そばにあるタクシー乗り場の運転手さんも、私を不思議そうに見てる。

「何かあったのかな……」

あまりにも遅い。事故でもあったのだろうか。何かヘマをして、捕まったんだろうか。

いらぬ憶測を飛ばして、私は携帯電話を握った。だが、運転中の彼が電話に出られるはずもない。何かあれば向こうから電話が来るはずだ。

私はそう思い直して、冬空の下、北風に身をよじる。

「まだかな……」

キーンと、頭が痛くなってきた。

「もう。風邪引いたら呪ってやる……」

そんな時、パァーっと顔にライトが当たり、私は顔を上げた。そこには、見なれた車がある。
「ごめん！　遅くなった！」
眉毛の下がった彼がいる。その顔を見た途端、私は笑った。
「よかった。事故じゃなかったんだね」
「ごめん……工事だなんだで迂回させられて、かなり遠回りになったんだ。寒かったろ。早く乗って」
「……馬鹿」
小さく言った私に、彼もまた笑う。
「ごめん」
暖かな車内に、凍りついた心も溶けていく気がした。

222　ナガサキからフクシマへ

数十年前の今日、八月九日。

三日前に広島に新型爆弾が落ちたことは知っていましたが、

その威力があれほどまでにすさまじいということまでは、

この目で見るまでわかっていませんでした。

ただ飛行機の音が聞こえ、とっさに防空壕へと駆け込み、

高台の防空壕から出て、次に見た長崎の街は、まさに瓦礫の山。

家一軒残っておらず、人が目の前で次々に倒れてゆく。

まさに、地獄――。

言い過ぎではありません。地獄そのものでした。

放射能による知識をまだ誰も持っていなかったので、

私もまた被曝を免れず、とうとう家族の行方もわかりませんでした。

あれから六十六年後の、二〇一一年、三月。

東日本大震災により、福島県の原発から放射能が漏れたというニュースを聞き、

私はあの日の悪夢を思い出しました。

平和になった日本にも、あの日と同じ恐怖が今もなおあるのだと。

原発が悪者だとは言いません。

ただ、唯一の核被爆国である私たちが担うこと、

私たちだから言わなければならないことは、多くあると思うのです。

223　傘をどうぞ

中学校の昇降口、彼女はただ空を見てる。空は降り始めの雨で、すっかり灰色になってしまった。

僕は放課後の教室、その光景を見ているだけだ。そう、見ているだけ――。

彼女はクラスメイトで、特にマドンナ的存在でもなければ、目立つ存在でもない。でも、話しかければほっとする。笑顔が可愛い、僕にとっては憧れの子。

今日も持っていた自分の傘を、後輩に貸してしまったため、自分が困っているお人好し。でも、僕は彼女のそんなところが好きなんだと思う。

やがて彼女は、雨の中を飛び出していった。きっともう、この雨が止むことがないと悟ったからだろう。

僕は肩を落として、握りしめた折り畳みの置き傘を持って、さっきまで彼女がいた昇降口へと向かう。

あと五分、あと十分……そうしたら、勇気を出して傘を差し出そう。

そう思ってタイミングを逃した臆病な僕には、思い切りというものがないんだと、自分で自分が嫌になった。

早歩きをしたら、あるいは走ったら、彼女に追いつくかな……会ったらなんと言えばいい？　偶然を装って、あくまでも自然にふるまえるだろうか。

そんなことを考えながら歩いていると、学生向けのパン屋の軒先に、彼女がいる。きっと少しずつ走っては、そうして雨宿りをして家まで向かうのだろう。

チャンスだ――。そう思ったが、僕は心と反対に、傘で顔を隠す。

ああ、僕はなんて駄目な人間なんだろう。このままずっと勇気も出せず、卒業するのかな。一生こんななのかな……いや、僕だって……。

僕はふと顔を上げた。すると、彼女と目が合う。

僕はどうしていいかわからず、不自然に立ち止まってしまった。

ふと彼女を見ると、彼女は苦笑し、手を振っている。バイバイのしるしだ。

僕は無言のまま彼女に会釈をすると、歩き出す。だが数歩歩いたところで思い直し、彼女の元へ歩いていった。

目の前には、驚いている彼女。僕は持っていた傘を、無言で彼女に差し出した。

まだ言葉に出来ない、僕の精一杯の、勇気。

224　ひとりにひとつのもの

あなたが大きくなる前に、私はきっと死んでしまう。
それは、私に下された運命――。
そんな運命を、私は逆らって生きてきた。

二十歳になるまで生きられないと言われた私が、二十歳になり、愛する旦那様と結婚をし、子供まで授かり、元気なあなたを抱けたことは、神様がくださった奇跡なのかもしれない。
いやそれは、少しは私の頑張りでもあるということを、あなたには伝えたい。
努力をしなければ手に入れられないものもあるし、それが手に入れられなくても、その過程で手にする大切なものもあるはず。
私はただ、あなたが健康で優しく自由に生きてくれればそれでいい。何にも負けない強さは優しさであるということを、あなたに伝えたいと思います。

◇　◇　◇　◇

「優（ゆう）。そろそろ行くよ」
父親にそう呼ばれ、二十歳の青年は頷いた。
母親の死は、青年が二十歳を迎える、たった三日前のことだった。
「うん。今行く」
そう言うと、青年は母親の手紙を丁寧に胸ポケットへしまい、親戚たちが集まる部屋へと戻っていく。
「優くん。こっちにおいで」
「優くん、大きくなったね」
親戚たちに迎えられ、自分の名前を呼ばれた青年は、なぜか優しい気持ちになる。

少なからず、母親と衝突した思春期もあったが、基本的には仲の良い親子だった。

母親がどんな気持ちで自分にその名前を授けたのかを知り、青年の心は満たされていた。そしてこれからも、自分の名前を大切にしていくと決意して――。

225　真夏の陽炎

ふらふらとふらつきながら歩いている男が、ビル街の真ん中にある小さな公園で、ぐったりと座り込んだ。

「あっちぃー」

真夏の炎天下、男は背広をバタバタと仰ぎ、風を入れる。

ふと見ると、同じような営業マンが木陰で休んでいるのが見え、男はふうと溜息をついた。

「こんな炎天下に営業回り。辛い以外のなにものでもないが……妻が働いてもギリギリの生活。俺が頑張らなきゃどうにもならねえしなあ」

煙草に火をつけ、男は空を見上げる。

すると、なぜかゆらゆらと、辺り全体に陽炎が見えた。

「こ、こんなところに陽炎？　陽炎ってのは、地面のそばとかに見えるもんで……」

ぶつぶつと男がつぶやくと、陽炎の向こうに男の子供が見えた。

「パパ！」

「おい！　なにやってんだよ、こんなところで……」

そう言って立ち上がり、男は子供の元へと歩いていく。

そこで男は、ふらっとそのまま倒れ込んだ。

「パパ！　パパ、大丈夫？」

子供の声が近くで聞こえ、男は苦笑した。

「悪いなあ。大丈夫だよ。こんなところでコケるなんて、情けない……」

男が目を開けると、そこはがらりと変わって部屋の中だった。

だが、目の前には妻と子供の姿がある。

「……ここはどこだ？」

「病院よ。気が付いたのね？」

「病院？　ああそうか、俺は倒れたんだっけ……そのまま意識がな

かったってわけか」
「なにを分析しているのよ。今、お医者様を呼んでくるわね」
妻はそう言って、病室から出て行った。
「……ごめんな。びっくりしたろ？」
男は子供の頬を撫で、そう言った。
「ううん。私が声を掛けたから……」
「いいんだよ。でも情けないよ。おまえの前で倒れるなんてさ」
「そんなことないよ。私がいなかったら、発見が遅れていたかもしれないんだよ。そうしたら、パパ……」
「そうだな。ありがとう……」
熱中症で倒れたというが、翌日から男はまた働き始める。
やはり辛い仕事ではあるが、誇りを持っているから働ける。
また、今度のことで妻と子供から新たな絆というものをもらった気がして、男は立ち上がった。
「さて、今日も頑張りますか」
男の手には、妻から持たされた氷とスポーツドリンクが握られている。
頑張りすぎには、ご用心。

226　幼き恋の物語

幸太は路地裏から顔を覗かせた。
いつもこの時間に通る、クラスメイトの志保を待っているのだ。
とは言っても、待ち合わせをしているわけではない、いわゆる待ちぶせというやつではあるが、奥手な幸太にとっては、それが精一杯の行動。
「来た……」
志保の姿を見つけ、幸太は路地裏に身を寄せた。
毎日ここで志保の姿を見つけては隠れ、通り過ぎたのを見計らって出ていく。そして数メートル後ろを歩く。
大人であれば完全なストーカー状態ではあるが、小学生の幸太は、まだ可愛げのある行為であることは、毎日その光景を見ている商店街の人々の間では有名な話だ。
「幸ちゃん」
路地裏の幸太は、突然横からそう呼ばれ、驚いて立ち上がった。
そこには憧れの志保がいる。
「し、し、志保ちゃん……ど、どうしてここへ？」
「だって幸ちゃん、いつもここから出てくるじゃない？　ここのお店が幸ちゃんの家だっていうのは知ってるし……」
商店街の路地裏。表の店は幸太の家が経営している煎餅屋だ。
「し、知ってたの？」
「ううん。昨日、真由ちゃんが言ってたの」
真由というのは、同じ商店街に住む幸太の幼馴染みである。当然、幸太の好きな子が志保ということは筒抜けであり、一番頼りたくない相手でもある。
「真由のやつ……」
「幸ちゃん、志保のこと好きなの？」
突然そう言われ、幸太は拍子抜けした。

「な、なんで……」
「だって、こうして志保のこと待ってたんでしょう？」
「……ま、待ってなんかないや！　自意識過剰女！」
ズバリを言われて行き場を失った幸太は、思わずそう言って、走り去って行った。
学校に着いた幸太は自己嫌悪に陥り、志保にも無視されるようになったのは言うまでもない。
そして見知らぬところでほくそ笑んでいるのは、この物語には名前だけの登場となった、幸太のことを好きな真由であることは、一応耳に入れておいてもらおう。

227　やった？

宿題やった？

自由研究やった？

まだ半月ある。あと数日ある……あと一日ある。

時はこうしている間にも過ぎてゆく。

友達と遊ぶこともまた大切。

でも、宿題もやってしまったら後がラク。

やだなーと思ってみても、結局やるなら今やっちゃえば？

やらないと、結局最後に困るのは、自分なんだから。

宿題何が出てたっけ。

一個ずつでも片付けちゃえ。

友達と一気に片付けるのもいいね。

さて、これが終わったら、どっか遊びに行こうか。

かき氷でも食べて、プールとか涼しいところに行こうか。

夢が膨らむその前に、その宿題、やっちゃえよ。

228　爪痕

青い空、白い雲、優しい人々。この沖縄では、今日も観光客が押し寄せている。

「ハル！　早く、早く」

ビーチに着くなり、藍子は海へ飛び込む。恋人のハルは、そんな光景を笑顔で見つめながら、白い砂浜に腰を下ろす。

「ハル！　来ないの？」

「ちょっと休ませてよ」

元気な藍子に苦笑しながら、ハルは遠く見える崖を見つめた。

かつて、あの崖から数えきれない人が飛び降りたと聞いた。

乗り込んできた敵はアメリカ軍だけではない。玉砕という名のもとに、民間人を殺したのは味方であるはずの日本軍だった。という話を、ハルはおばあから聞かされていた。おばあはこの島の生き残りで、やがて母を産み、ハルが生まれた。

「もう、ハルってば。せっかくの沖縄なのに」

「ごめん。でも、藍子もあんまりはしゃぐと、おなかの子に障るよ」

藍子のおなかには、ハルの子供がいる。あの血なまぐさい恐怖から逃れたおばあ、それより遥か前から繋いできた生命が、またハルを伝って繋がれてゆく。

「そうね。大事にしないと……」

藍子は静かにハルの隣へ座り、遠く見える崖を見つめる。

「あの崖の下には、たくさんの人が眠ってるんだね……」

ぼそっと言った藍子もまた、ハルのおばあの話を知っている。

都会に住む藍子には、途方もないくらい現実離れした話だったが、胸がえぐられるような衝撃を今でも覚えている。自分の祖父母もまた、少なからず体験した話のはずだ。だが、それを語ろうとはしないのは、過去を忘れたいからなのだろう。それでも語ってくれたハルのおばあを、藍子もまた尊敬していた。

「あの崖の下に……」
崖だけではない。この島には、今もたくさんの命が横たわっている。
「いや、今もまだ闘っているのかもしれない……」
ハルは一瞬、険しい顔を見せ、藍子のおなかに触れた。
「ちゃんと生きような、藍子。おなかの子供が平和で幸せに暮らせるように」
「うん」
二人の手が、藍子のおなかに重なる。温かな空気が、それを包んだ。

ひめゆりで学徒が死んだ。摩文仁（まぶに）で村人が死んだ。ガマで子供が死んだ。森の奥で、土の上で、海の中で、人々は死んでいった。
そして今もなお、戦闘機がわがもの顔で空を飛ぶ。戦いは、今も続いている――。

229　おじさんのラブレター

両親が離婚し、母に引き取られた僕は、母方の祖父母の家に引っ越すことになった。

古めかしい日本家屋のその家は、線香の匂いが漂い、夏休みと正月くらいしか来る機会のないこの場所に自分が住むということは、なんだか不思議な気がした。

「いらっしゃい。よく来たわね」

笑顔で出迎える祖父母に、僕は背負ったランドセルを気にもせず、深々とお辞儀をした。

「お世話になります」

そういった僕に、祖父母は笑う。

「いいのよ。家族なんだもの。これからよろしくね」

家族――という言葉が、今の僕にとってはあまり実感のない言葉のように感じられた。だって僕の本当の家族は壊れ、壊れたからここにきたのだ。

両親が離婚して卑屈になったことはない。ずいぶん前から家庭は冷え切っていたし、僕は子供ながらに両親が離婚することがわかっていた。冷え切った夫婦の間にいた僕も、居心地が悪かったから、離婚したと聞いた時には、少しほっとしたのが事実だ。

「この部屋、自由に使ってね。お掃除したんだけど、机とか、道隆の荷物が残っているの。大きな物で運べなかったから、悪いけどそのまま使ってちょうだいね」

祖母に言われ、僕は母の部屋の隣にある部屋に通された。そこは母の弟の部屋で、今日からここが僕の部屋になるらしい。道隆というのは、叔父の名前だ。

新しい場所で心機一転出来るのは、今の僕にとっては不安よりもわくわくという気持ちのほうが大きい。

部屋には社長みたいに大きな机と、ベッドがある。叔父さんはと

っくに独立し、子供もいるくらいだから、もうこの部屋には戻ってこないようで、僕が住まわせてもらうことになったんだ。

祖母が片付けてくれたということで、机の中は空っぽ。僕は早速、自分の筆記用具などを詰めた。大きな机だから、この引き出しが埋まることはずいぶん先の話だろう。

「あれ？」

荷物を入れ終わって引き出しを閉めようとしたが、最後の最後でうまくしまらない。古そうな机だからたてつけが悪いのかと思って覗き込むと、引き出しの奥深くで何かが挟まっている。

「うーん」

僕は短い手を思いきり伸ばして、指先でそれを取った。

そこで手にしたのは、薄いピンク色の封筒。封は開いていて、表には叔父さんの名前がある。

僕は悪いと思いながらも、その封筒を覗いた。すると中には、数枚の便箋が綺麗に畳まれている。

「……叔父さん、ごめん！」

そう言いながらも、好奇心が先走り、僕は便箋を開いた。

中にあったのは、綺麗な女の人の字である。

道隆くんへ

いよいよ卒業ですね。サークル活動にみんなとの旅行、私の中ではとても楽しい大学生活でした。

あなたにきっぱりふられた身だけど、もう一度だけ言わせてください。私はあなたのことが好きでした。出会ってからずっと。

でも、あなたには心に決めた人がいるんですものね。彼女は私の友達でもあり、ライバルでした。でも、あなたが彼女を選んだから、私は別の道を歩まなければならないのですよね。それはとても残念に思いますが、あなたと彼女を応援したいという気持ちもあるんで

すよ。
でも最後にもう一度だけ言わせてください。私はあなたが大好きでした。それがいつか思い出話になるまで、どうか忘れないでいてください。
きっと次に会う時は、笑顔で会えると思います。お幸せに。

それを読みながら、僕の心臓はバクバクいっていた。まだ小学生の僕には、あまりにも大人な感じの文章で、ついていけなかったんだ。
これを読んだ叔父さんはどう思ったんだんだろう。叔父さんが選んだのは、今の叔母さんなのかな。この女の人はその後どうなったのかな。そんなことをいろいろ考えながら、僕もまた新たな人生を始めなくちゃならない。
両親の離婚によって学校も変わった僕は、新しい学校に通い始める。
「これ、読んで」
しばらくして、僕は新しい学校のクラスメイトの女の子に、手紙をもらった。ラブレターだった。
あの叔父さんの机にひっそり残っていた手紙には遠く及ばないけれど、僕はそれだけでまた新しく頑張れるような気がした。いつか叔父さんがもらったラブレターに似たものをもらえる大人になれるように。そんな恋が出来るように。

230　ネコとぼく

僕はいつも損をする。隣の家に住む幼馴染みのネコに、振り回されっぱなしだからだ。

ネコといっても、本物の猫じゃなく人間だが、人間だから余計にたちが悪いんだ。周りがそう呼んでるから、僕もあいつをネコと呼ぶ。一つ年下の女の子だが、女の子だから余計にたちが悪いんだ。

「あーくん、おはよう。一緒に学校行こ」

中学生になったネコが僕を呼ぶ。嫌だと言っても行く場所は同じ。それに子供の頃から毎日家の前で待たれては、逃げ場なんかないんだ。

「お、今日も夫婦揃って仲がいいね！」

学校に行く前に会った友人たちが、からかうように僕らに言う。毎日うんざりするほど同じ光景だが、ネコは全然気にしていないようで、時にはそのからかいに乗っかったり、時には全面否定をする。

僕はちらりとネコの横顔を見る。今日はそんなからかいには無視した様子で、ただ前を見て歩いている。

「なに？」

僕の視線に気付いたのか、ネコが僕を見つめた。こうして一緒に学校に通っていても、目が合うのは久しぶりだと気付いた。

「いや、べつに……」

少し照れて、僕はとっさに目を逸らす。ネコはお世辞抜きで可愛い。子供の頃はそんなこと思ったことなかったけど、大きくなるにつれ女の子として見られるようになったのは、単純にネコのつくり（と言ったら怒られそうだけど……）がいいからと、友人たちがそう言っているのを聞いているからだ。

「そうだ、あーくん。高校決めた？」

突然の質問に、僕は空を見上げる。

「ああ……多分、西高」

「そうなの？　あーくんなら、もっと上行けるのに」
「上なんか狙ってないし。西高なら、知ってるやつ結構行くみたいだからさ。おまえは？」
「私は……お母さんから女子校に行けって言われてて、迷ってるんだ」
それを聞いて、僕は一瞬言葉に詰まった。心のどこかでこの当たり前の生活が、ずっと続くと思っていたんだ。
「え……そうなんだ。おまえが女子校？」
「失礼だなあ。お母さんの母校なんだけどね」
「じゃあ、お嬢様学校じゃん。おまえなんか似合わねえよ」
「そうだとは思うけど……」
嘘だ。ネコのセーラー服姿が容易に浮かんだ。女子校ならば他の男に持って行かれないだろうか。いや、逆に電車通学になって危ないかもしれない。
「……やめとけよ」
がらりと雰囲気を変えたように、僕は低い声でそう言った。
「どうして……？」
ネコもまた雰囲気を変えてそう尋ねた。
僕は答えに困る。
「どうしてって……いろいろ危ないかもしれないだろ。電車通学なんて痴漢の巣窟だし、女子校のエロ教師がいるかもしんないし、女子校だったら、おまえだって女に走るかもしれないだろ」
めちゃくちゃを言って、僕は自分で何を言っているんだろうと思った。
「ようするに、あーくんは私と同じ学校に行きたいんだ？」
ズバリを言われて、逆に僕は窮地に立たされた気がした。
「そ、そうは言ってないだろ。西高じゃなくとも、近くに学校いっぱいあるんだし……」
「そう？　西高じゃなかったら、桜高とか北高とか？　桜高は電車じゃないけどバスになるよね。北高は不良ばっかりで怖いって聞く

し。でも西高じゃ駄目って言うなら、やっぱり……」
「べつに駄目なんて言ってねえよ！」
「本当？　じゃあ、同じ学校でもいい？」
またこうだ。僕が馬鹿だからかもしれないけど、こうしてどんどんネコの望むべく言葉を言わされてしまう。でも、それがなんだか嬉しくて、こいつを憎むなんて出来ないんだ。
「一緒の学校でも……いい、よ」
しどろもどろで言った僕に、ネコは満足げな笑みを見せている。
「そっかそっか。あーくんがどうしてもって言うなら仕方ないね。女子校諦めて、西高にしてあげるよ」
「なんだよおまえ、その上から目線は！」
「あーくんが土下座して同じ高校言ってくれって頼んできたって、クラスのみんなに言いふらそう！」
「おーまーえー！」
僕はいつも損をする。そんな相変わらずな僕ら。でももう少しだけ、この関係でいさせて。

231　さよなら、地球

地球最後の日。
巨大隕石が降り注ぎ、地上は海に呑まれ、氷河期が地球全体を包み込む――。
いや、そんな時期を過ぎた今、地上は驚くほど静かだった。
「寒い……」
男は一人、身をよじらせて空を見上げた。もはや空に層というものはほとんど存在していないため、宇宙がすぐ近くのように見える。
人類のほとんどは火星に移住した。だが貧しい人間や忘れ去られた人々は地球に残され、もはや群れさえなく生きている。いや、もはや生きている人間が他にいるのかもわからない。
男は何もない大地を目に焼き付けるように見つめると、静かに歩き出した。
「そろそろ行こうか……」
少し歩くと、二十世紀のロケットのような旧式ロケットがあった。
男はそれに乗り込むと、中には同じ年くらいの女性がいる。
「いよいよ行こうか……」
男の言葉に、女は静かに頷く。
このロケットを見つけてかなりの年月が経つ。朽ち果てた塗装を出来るだけの補修し、燃料をかき集め、操作を覚え、やっと今日を迎えていた。その間に、誰か一人くらい会えるだろうかとも思ったが、誰もいない。
「やっぱりもう、地球には私たち以外誰もいないのかしら……」
「……僕たちがいる。ここを脱出しよう。もし空中分解しても……もう悔いはないだろ」
「ええ。あなたと一緒なら怖くないわ」
「じゃあ……」
「ええ……」

「行こう」
二人は静かに深呼吸をすると、互いに抱き合い、そして静かにコックピットの位置についた。
「僕らはアダムとイブだ。最初の人間じゃなくて、最後だけれどね……」
「最後じゃないわ。また新しい世界を創りましょう」
女の言葉に、男の顔が晴れやかになる。
「ああ。そうだね」
「行きましょう」
「行こう」
何もない地上に、何百年ぶりかと思われるほどの物凄い火柱が上がった。

232　熱中症

その夏、記録的な猛暑に見まわれた日本は、うだるような暑さの中で生きていた。

エアコンが悲鳴を上げそうなくらいフル稼働し、エアコンから吐き出される熱は外の気温を更に上げる。そんな悪循環の中で、一人、また一人と倒れていった。

大地はエアコンのないアパートで、不規則な生活を送っている。夜は工事現場、昼間はコンビニのアルバイトと、バイト三昧しながら大学に通う。

夜中、工事現場の仕事を終えて、大地はアパートへ帰っていく。盗られる物はないからと窓を開けっ放しにしていても、部屋の中はもわもわとした嫌な空気が滞る。

「あっちぃなー」

そう言って、大地は水のシャワーを浴び、扇風機を回した。部屋の熱風がただ回るだけの扇風機。それでもないよりはましだ。

テレビをつけると、熱中症で亡くなった老人の話をやっていた。

「可哀想にな……」

ビールに口をつけながら、大地はテレビを眺める。扇風機もなかったお年寄り、太陽の反射でぐったりした動物、居たたまれないニュースが飛び交う。

その時、大地の携帯電話が鳴った。

『大地？　帰ってんだろ？』

同じサークルの仲間である。

「うん。さっきな」

『おまえも来いよ。もうみんな来てるぞ』

「わかった。そろそろ始めようと思ってた。すぐ行くわ」

そう言って電話を切り、大地はネットゲームを立ち上げる。

今日も一晩中、仲間とゲームをしていた。熱風の吹く部屋で、水気も取らず……。

次の日のニュースで、若者の熱中症による死亡ニュースが流れた。

233　飾らない君でいて

他人と同じ服。
他人と同じ靴。
他人と同じメイク。
他人と同じ顔。

どうして私は、こんなにもただ流されているんだろう。
本当は、他人と同じなんて嫌。個性的でいたい。自分らしく生きたい。
でも一方で、孤立することが怖くて、同じことをするのが楽で安心する自分がいる。

子供の頃、お母さんに叱られた。
どうしてあすかちゃんみたいに、上手に絵が描けないの？
どうしてちひろちゃんみたいに、自分で髪が結べないの？
どうしてあやこちゃんみたいに、おとなしく出来ないの？
どうして、どうして、どうして——。

私は今、虚ろな目でメイクを落とした。
鏡に映る素顔の顔は、まだ誰かと同じでいる。
ここにお母さんはいないのに、私はいつでも、あの目に怯えているのだ。

大丈夫。飾らない君でいて——。
私は私の心に、そう訴えかける。

234　三年目のマンネリ

付き合って三年になる彼は、同じ会社のサラリーマン。私はＯＬ。職場恋愛のため、人には交際を公にはしていないものの、もう周知の事実となっている。

「じゃあ、また明日な」

そろそろ結婚を意識し始めている私に反して、彼は相変わらず。三年前と違ってベタベタする仲でもなく、なんだかそこにいるのが当たり前すぎて、何の刺激もなくなっている。

「うん。また明日……おやすみ」

私はそう言って、彼と駅で分かれる。付き合い当初は、家まで送ってくれたものだけど……。

仕事が終わって飲み屋で合流して、たまにホテルへ行ってそれで終わり。誕生日もクリスマスも、あんまり大事にはしない私たち。まるで毎日がプログラムされているみたいに、同じ――。

でも、彼のことは好きだし、別れるとかは考えられない。でもやっぱり、もっと一緒にいたいとか、もっと刺激が欲しいとか、そんなことも思ってしまう。

「俺、結婚願望とかまったくないんだよなあ。仕事だってまだ新米だし」

前に言っていた彼の言葉を思い出す。私だって、このままでいいという気持ちもあるけれど、このままずっと、友達の延長線みたいな付き合いのままなのかな……。

このところ、ずっとそれで悩んでいるのは、同居している親から、結婚はまだなのかと言われたからだけど、結婚願望がまったくないと言っていた彼に対して、そんなこと言えるわけがない。引かれて気まずくなるのが落ちではないか。

その時、彼からメールが入った。

“明日も仕事が終わったらいつものところで……最近言ってなかっ

たけど、好きだよ”

たったそれだけ――それだけで、私の心は弾むように軽くなった。

私の不満を、彼も感じ取っていたのだろうか。いや、彼のことだからないかな。それでも、「好き」の一言で、にやけてしまう自分がいる。

「もう少し、このままでいっか……」

私はそう呟いて、家へと帰っていった。

235　しがらみの王子

「時代は変われど、一国の王子とて望む相手と結ばれるものではない」

そう言った王子は、表情を失くしたまま、一番の家臣である青年にそう言った。

王子はまだ十六歳になったばかりだが、十六年の間で、嫌というほど王家のしがらみにぶち当たってきた。

つい最近も、執心していた女性と無理やり引き裂かれたばかり。別れの挨拶すら出来ず、相手は殺された。

「私を愛して殺されるくらいなら、私はもう誰も愛したりしない」

冷たい目の奥には、暗い闇が宿っている。

「……王子のお相手は、国王陛下が決められることでしょう」

「わかっている。この間の女とて、結婚相手とは見ていなかったが……殺されたとはあまりにも可哀想に。せめて手厚く葬ってやってくれ。頼む」

「はい。抜かりなく……」

「私の相手で殺されない相手は、どこの姫君になるのだろうな……」

すっかり心を閉ざした王子のもとに、間もなくして隣国の姫君がやってきた。和平という名の政略結婚は、王子の心を余計に閉ざすものである。

「よろしくお願いします……」

やってきた姫君も、王子と同じ十六歳。そして同じく表情を失くしている。

「こちらこそよろしく……」

そう言った王子の目に、初めて姫君の顔が映った。美しいその顔に似合わず、暗い影を落とし、それ以上何も話そうとはしない。

まだ若い身で見知らぬ国へ連れて来られた姫君に、王子は自分を重ねた。

「まだ傷は癒えないが、前を向かなければ……たった一人、異国の地へやってきた姫のためにも、国を背負わなければならない自分のためにも……」

一番の家臣に静かにそう告げた王子は、また一つ大きな壁を乗り越え、大人びた表情を見せていた。

236　生贄

これは、都会の真ん中で起こった物語。
探偵になって一年にも満たないサキは、二十歳の男。今日もスーツを身にまとい、車の中からマンションの一室を見つめる。
その時、電話がかかってきた。社長からである。小さな探偵事務所のため、社長自らが仕事をすることも多い。
『サキ。そっちはどうだ?』
「動きなしっス」
社長の低い声に反して、まだ若々しい声のサキが、軽い口調でそう返す。
『こっちの仕事終わったから、今からそっちへ行く。Aが動いたらすぐに知らせろよ』
「了解」
サキは電話を切って、溜息をついた。
テレビドラマのように格好の良い職業に就きたいと思い、この仕事を選んだが、事件を追うよりも浮気調査や身辺調査が大半を占めていることを、嫌というほど思い知らされている。
今回の仕事も、夫から依頼された妻の浮気調査である。
その時、見張っていた依頼人の部屋に、一人の男が入っていくのが見えた。
「動いた!」
思わずサキはそう言って、気付かれないようにカメラを構える。
「証拠を押さえなきゃ……」
サキは車を降りると、依頼人の部屋が見える、目の前のビルへと向かおうとした。
だがその時、依頼人の部屋から、さっき入っていった男が出てくるのが見えた。
「さっき入ったばかりなのに……こりゃあ事は済んでないな……」

ない頭を捻るように、サキは空を見上げて考え込む。
すると、男が階段で降りて来るのが見えた。
「なんだって十階から階段で下りてくるんだ……？」
ぶつぶつと独り言を言いながら、サキは階段を降りている男をカメラに収め、エレベーターへと乗り込む。あのまま下にいては、男とはち合わせてしまうためだ。
念のため、依頼者宅のある十階へ降りてみたが、特に変わった様子はない。
だが依頼者宅の前まで行って、サキは眉を顰めた。依頼者宅の玄関ドアが、十センチほど開いているのである。
「ずいぶんと不用心だな……」
ふとサキがドアの中を覗き込むと、部屋の中に人の足が横たわっているのが見えた。
「あ！」
サキは後先何も考えず、部屋へと乗り込んでいく。
すると中には、この一週間追い続けていた、依頼者の妻が腹から血を流して倒れている。
「あ……あ……！」
揺すっても何をしても、妻は目を覚まさない。脈はすでになく、完全な殺人事件である。
その時、ドアが閉まる音が聞こえ、サキは玄関へと走っていった。だが、鍵は掛かっていないのに、まったく開く気配がない。
「と、閉じ込められた?!」
パニック状態になりながら、サキはポケットを探る。
「そ、そうだ。社長……」
しかし、こんな時に限って電池切れ。部屋にあった固定電話も、電話線でも切られたようにまるで繋がらない。挙句、隣の部屋は空き部屋で、角部屋のため逆の隣もいない。依頼人である夫は海外出張中である。
「なんてこった……！」

顔面蒼白になりながら、サキは死体の転がる部屋で、途方に暮れていた。

「落ち着け。社長がこっちに向かっているはずだ。車を置いて俺がいなくなれば、きっと探しにきてくれるはず……」

そう思ってベランダに出ると、サキが乗っていた車がレッカーされるところだった。

「おーい！　俺の車だ！　誰か助けてくれー！」

そう叫んでみたが、騒がしい都会の真ん中。しかも近くは道路工事やビルの建設で、昼夜を問わず騒がしい。

「クソッ。落ち込んでいる暇はないぞ。これは大事件だ」

サキは辺りを見回す。小ざっぱりとした室内に、ロープや梯子はおろか工具すらないが、ふと目の前にあるファックスが気になった。

中を開けると、ロール状のファックス用紙がある。

「よし、これで……」

長いファックス用紙に、ＳＯＳと部屋番号を何度も書き、サキはベランダからそれを落とした。

「誰か！　助けてくれー！」

力一杯に叫び、風に舞う長い紙。やがて風に煽られ飛んで行ったが、確実に何人かの目はこちらに注がれている。

「うおー！　助けてくれー！」

泣きながら叫び続けるサキ。

それから数時間後、玄関のドアが開き、サキは驚いて振り返った。

するとそこには、数人の警官がいる。

「お、おまわりさん！」

サキが駆け寄ると、警官たちは死体を見て驚いている。

「お、おまえがやったのか！」

警官たちの第一声が、まったく思わぬ言葉だったので、サキは呆気に取られ、何度も首を振った。

「ち、違います！」

「じゃあ、この状況はなんなんだ」

「僕がここへ来た時は、すでに……そ、そうだ！　僕、犯人の写真撮ってます！」

パニック状態でいながらも、自らの潔白を証明させるため、サキは先程撮った犯人がこの部屋に入っていく写真を、カメラの液晶に写して見せた。

「……確保！」

しばらくして、警官たちの言葉に、サキは捕えられた。

「な、なんで！」

「この顔に見覚えはないというのかね？」

警官たちに見せられたカメラの液晶画面を見て、サキは驚いた。そこに映っているのは、紛れもなく自分の顔なのである。

「わ、罠だ！　これは……何かのトリックだ！」

撮影中は遠くて顔もわからなかったが、そこに映し出されているのは、どこから見てもサキ本人。だが、なぜそこに自分がいるのかが説明出来ない。

警官たちは、サキを重要参考人として確保。サキは捕えられた。まるで生贄のように――。

237　夢で逢いましょう

最近、気がつけば同じ夢を見てる。そして同じ人に会う。

知らない人――知らない男性が、私に笑いかける。時には公園で、時には会社で、時にはレストランで、まるでデートのように、私はその男性と夢で毎日のように会っている。

「誰なんだろう……」

現実の世界での面識はない。でも、毎日のように会うその男性に、私はいつしか心を奪われていた。

決して美形ではない顔立ちだが、背が高く、優しそうな人だった――。

そう思っていると、信号待ちの通りの向こうに、その人がいた。

「似てる……」

私は思わずそう呟き、その男性に釘付けになる。

毎日のように見てはいても、所詮は夢。ハッキリと確証はなかったが、その人はよく似ていた。

信号が青になり、私はゆっくりと横断歩道を渡り始める。男性もまた、こちらに渡ってくる。

「あ……」

ふと気がつくと、男性の傍らには背の低い女性がいて、その間に手を繋いだ子供がいる。何処からどう見ても、家族である。

「……そっか」

心のどこかで、運命の人なのではと思ったが、それも違う。この光景は、どこかで見たことがあった。それは、よくあの男性が今日と同じように家族連れで歩いているのを、無意識に見ていたためである。

なぜあの男性だけが夢に出てきたかはわからないけれど、すべての謎が解け、私は誰にも気づかれないように、そっと笑った。

夢なら夢のままで、現実で会いたくはなかった――。

その日から、夢にあの男性は現れていない。

２３８　夢でまた逢いましょう

憧れのあの人は、私だけの恋人。

部活の先輩に、私は恋してる。

だけど、先輩には彼女がいる。女の私でも憧れちゃうくらい、優しい彼女。

だから告白だなんて無謀なことは出来ないし、見ているだけでいいの……。

報われないことはしない。

１％の可能性なんかいらない。

１００％の確証が欲しい。

だけど、私のことなんか、ただの後輩としてしか見てないのはわかってる。

どんなに頑張っても、あの彼女には敵わない――。

だからせめて、夢で逢いましょう。

その時だけは、あなたは私だけの恋人。

239　あしたてんきになあれ

僕は小さな手によって生まれた。

「カヤ。お風呂入っちゃいなさい」

「はあい」

カヤちゃんっていうのか。

その小さな手の主は、僕に顔を書いてくれて、僕はやっとその主の顔を見ることが出来た。

「あーあ。マジックだから滲んじゃった。でもいいよね」

カヤちゃんはそう言うと、僕に向かって手を合わせる。

「てるてる坊主さん、お願い！　明日天気にしておくれ」

そう言うなり、カヤちゃんは僕を縁側に吊るした。

「カヤ！　お風呂！」

「はあい、今行く！」

お母さんの言葉に、カヤちゃんは慌ててその場から去っていった。

明日は遠足だというのを、僕は自分が作られていく間に聞いている。

神様、あれだけ心を込めて僕を作ってくれたカヤちゃんのために、明日どうか晴れますように……！

僕は全身全霊をかけて祈った。

次の日――。
天気はあいにくの雨。小雨ではあるが、僕は少し責任を感じて外を茫然と眺めている。

「せっかくてるてる坊主作ったのに……」

カヤちゃんの言葉が、痛いくらい胸に刺さる。
ごめんね……僕の力不足だ。
僕は何度も何度も、心の中で謝った。でも、天気は晴れてくれない。

「行ってきます……」

そのままカヤちゃんは、口を尖らせて家を出て行った。
神様、神様、神様――僕の命は、今日で終わるでしょう。僕はなんのために生まれてきたのですか？　あの子のために、僕に何が出来ますか？

それから数時間後、遠足のバスが目的に着いた頃、天気はすっかり晴れていた。
よかった……ありがとう、神様。

「ありがとう。てるてる坊主さん」

小さな手の中で、僕はそんな声を聞いた。

こちらこそありがとう――僕を作ってくれて、ありがとう。
遠のく意識の中で、僕はカヤちゃんに微笑みかける。
小さな祈りではあるけれど、君がまた心を込めて僕を作ってくれたなら、僕は何度でも祈るよ。君の心が晴れるように――。

２４０　後宮宵話

生まれる前から、私の運命は決まっていました。

遥かなる時代から、この国には男尊女卑という風習が当たり前のようにあり、一夫多妻はもちろん、女に人権などありません。ただ強く偉い男に何人もの女が仕える、そんな時代が当たり前にあったのです。

男で生まれたならば、階級や派閥の中でそれは大変な思いをしたかもしれませんが、女で生まれたら生まれたで、品物のように扱われるだけなのです。

私の場合は、身分ある家柄に生まれたのは不幸中の幸いでしょうが、身分低くとも領主に嫁がされたり、今の行く末とそう変わらないことでしょう。

「帝の後宮に入れるというのに、なにをそのようなご不満な顔をしておるのじゃ」

母のいない私に、育ての母というべき叔母上がそう言いました。

「不満など……嬉しさで胸がつかえているだけでございます」

表情のない私は、ただ用意された言葉を心なく口にしました。どう抗っても、私は後宮へ入らねばならない。帝の女房になれることは名誉なことなのかもしれませんが、ただ決められた道を歩んでいくことに、私はただただ絶望していたのです。

「もう住み慣れたこの里に戻ることはないのでしょうか。もう里の皆にも会えないのでしょうか」

そう呟いた私に、叔母上は口曲げる。

「あんたはそこいらの姫君ではありません。上臈（じょうろう）の家柄。正妃にならずとも格上なことを忘れてはいけません。里の格下の者たちよりも、帝のことだけを考えていればよろしい」

帝とは何度もお顔を合わせていますが、年は近くもなく、お相手が嫌というわけでもありませんが、それよりもただ品物として扱わ

れる自分が嫌なだけなのです。

「そろそろ……」

という言葉に、私は体を強張らせる。

ただ、どんなに泣いても、どんなに心を失くしても、私が品物であることには変わりないのです。それを今後受け入れて帝にどれだけ愛されるのか、腹を括るには、まだまだ時間が必要でしょう。

私には、運命を受け入れることも、抗う術もないのです。

241　先生へ

先生――。
私の正直な気持ちを打ち明ける時は来るでしょうか。

「好き」ってただ一言言えば、私は楽になるかもしれませんが、
その一言を口に出した途端、先生が困った顔をするのが想像出来ます。
そんな困った顔、私は見たくない。

でも、先生――。
どうか教えてください。

この気持ちのよりどころはどこにあるのでしょうか。
先生にはもう、すでに将来を誓った人がいるというのに、
この想いを持つだけで、私は私が許せません。

だけど、先生――。
先生ならわかるでしょう？

この気持ちの名前を。
こんな気持ちを、先生も感じて乗り越えたことがあるでしょうか。
こんな想い、もう二度としたくはありません。

先生――。
その時が来ました。

あなたが先生で、私を生徒として見てくれているのなら、
どうぞその言葉を言ってください。

私の想いが断ち切れるように、どうか背中を押してください。

迷惑だ、と。
さよなら、と。
何もしてやれない、と。

そう望んでいるのは私なのに、なぜにこんなに涙が出るのでしょう。

それはきっと、本心ではないからですね。
この想いは、あなたにも届いているのですね。

先生――。
あなたは優しすぎる。

先生失格です。
私は想いを断ち切れずにいます。
ただただ、あなたのぬくもりだけが忘れられません。

２４２　平和の歌を謳うこと

ミュージシャンは歌った。歌詞に叫びを乗せて。
詩人は謳った。高き理想を掲げて。

今日も、ギターを持った男が歌う。
ある時は国会議事堂の前で、ある時は米軍基地の前で、
銃を向けられながらでも、街宣車から抗議を受けながら、雨の日も風の日も、男は歌った。
平和の歌を。闘いの歌を。戦争反対の歌を。

やがて、銃を向けていた兵士も、抗議を浴びさせ続けていた街宣車も、ぴたりと止まった。
男が歌う時間だけは、銃を下ろし、マイクを下ろし、その歌に聞き入っている。

「アメリカだってどこだって、平和のために戦争をするんだよ」

男は哲学のような響きをさせながらそう言って、ギターを片手に私に言った。
私はお茶を差し出して、男を見つめる。

「戦争を仕掛けられた国は、また平和のために戦争をするかもしれない。そうしたらイタチごっこだよね。じゃあ俺たちの平和はどこにあるのか？　まずは戦争をしちゃいけないってことだよ。何があってもね」

そして男は、こう続けた。

「もう一度言うよ。アメリカだってどこだって、平和のために戦争をするんだよ。それなのに、平和を歌うことがアカだ左だと言われるのはなんでなんだろうね？　君は、本当に平和を望んでいるか？」

私は、命をかけて歌っている男を前にして、息を呑んだ。

２４３　シスコン兄×ツンデレ妹

マコトはその日、浮かない顔をしながら朝食を食べていた。
一人きりの食卓。両親は共働きですでに家を出た後なので、一人きりの朝食をとっているというわけだ。
「お兄ちゃん。まだ食べてるの？」
その時、すっかり着替えを終えた少女が入ってきた。マコトの妹、マリである。
「そんなに遅くないだろ」
「そんなこと言って。今日から新学期じゃん。お兄ちゃんは今日から高校生。気合い入れて行きなさいよ」
マリはそう言って、髪をとかし始める。
「マリ。今日から兄ちゃんいないけど、困ったことがあったらいつでもメールするんだぞ。いじめられても黙ってるなよ」
「あはは。マリももう中三ですので。受験あるしそれどころじゃないから。じゃ、行ってきます」
「待て！　俺も行く」
「はあ？　いいよ、べつに」
「よくない。高校だって中学の近く選んだんだ。同じ方向だし、一緒に行くぞ！」
「うざい！」
マコトの心配をよそに、マリはグーでマコトの頭を叩いた。
「いってえ！」
「行ってきまーす」
反論の隙さえ与えず、マリはそのまま家を出て行った。
「マリ……兄ちゃん心配なだけなんだよ。可愛い妹に変な虫とかイジメとか……」
そう言って、マコトは静かになった食卓を片付け、肩を落として立ち上がる。

「行ってきます……」
高校新生活。マコトの妹に対する愛情は、高校生活よりも上だ。
その時、マコトの携帯が震えた。マリからのメールである。
『さっきは殴っちゃってごめんね。でもお兄ちゃんのこと、嫌いじゃないんだからね！』
「マリー！」
マコトはその後、全速力でマリの背中を探した。
「げっ。お兄ちゃん！」
「おまえは優しい子だからな、お兄ちゃんが新生活に慣れるまで我慢するとか、そういうことだよな？」
「だから、そういうのがうざいんだよ！　このバカ兄！」
マリの拳がもう一度飛んだが、マコトは諦めない。
結局その日も、二人は一緒に通学路を辿っていった。

244　八月三十一日

「くそう。なんでもっと早くに宿題やっておかないんだよ！」
お父さんの声が聞こえた。
今日は八月三十一日。明日から学校というのに、息子のタケシは一つも宿題をやっていない。
我が子が一つも宿題を出さないとなれば家の問題になってしまうので、家族総出で宿題を仕上げていった。
「でも、大人ばっかり宿題なくてずるいよ」
何発か殴られたタケシが、泣きながら言う。
「バカ言え。俺だって、ガキの頃には宿題山ほどあったぞ。今の子供のほうが、宿題なんてそんなにないと聞いたが……」
「じゃあお父さんも、宿題最後の日に家族に手伝ってもらった？」
「……」
お父さんは考えるように思い出す。
「いや！　俺は三十日には仕上げていたぞ。まあ……家族には手伝ってもらったけどな」
正直なまでのお父さんの言葉に、タケシは少しほっとした。
「来年は早く……せめて三十日までには仕上げるよ」
「期待しないで待っておくよ。よし、今日は虫捕り、美術館、博物館、全部やるぞ」
「うん！」
タケシを連れて、お父さんは家を飛び出していく。
今日中に指定された美術館などを回らねばならないのは地獄のようだったが、それもまたこの家の夏休みだと思って諦めた。なによりタケシは可愛い息子。この夏は大変な分、一生心に残る思い出になるに違いない。
「よし、タケシ。来年は俺も俺の自由研究でもするから、おまえはライバルだ。どっちが早く仕上げられるか競争するぞ」

思わぬお父さんの参戦が決まり、来年の夏休みは刺激的になりそうだ。

さて、今日も子供に悩まされているお父さんお母さんが、全国に無数にいるのだろうか……。

そこで焦っているキミ。こんなところで油を売っていないで、やり残しがないかの確認を。そして家族のためにも自分のためにも、来年こそは、夏休みの宿題なんて、さっさと仕上げてしまおう！

245　RUN　―闇夜のワンショット―

「ふう……」
死んだ街の路地裏、一人の男が息をついた。
月明かりだけが照らす真っ暗なその場所で、男の目が一瞬ギラリと光る。
男はコードネーム・ランと呼ばれる、世界中から指名手配が張られている超一流のスナイパー、殺し屋だ。
「キリがねえな……」
ランはそう言いながら、愛銃のマグナムに弾を込める。
今日の乱闘は不意に起こったもので、偶然居合わせたマフィアがランの首を狙って攻撃をしかけてきたことにある。
残りの弾数は僅か六発。その数に、今日は数十人単位で倒したことが窺える。
「出て来い！　こっちはまだまだ臨戦態勢だぞ」
敵の声が聞こえた。とはいえ、敵の数もぐんと減り、気配としては十人程度である。
決闘とあらば瞬時にボスをやれたものの、今回は分が悪い。まあ、たまには全員を相手にしても良いという気まぐれからもきているが……。
「お呼びがかかっちゃ仕方ねえな……」
ぼそっとそう言いながら、ランは空を見上げた。
月明かりが翳りはじめ、雲がかかってきた。
（今しかない――）
そう思うと同時に、ランは表通りへと駆け出した。
途端、銃弾の嵐が飛ぶ。だがその嵐も、ランの応戦で確実に減ってゆく。
（一発、二発、三発……）
自分の残り弾を数えながら、ランは遂に敵であるマフィアのボス

に銃口を向けた。
「ようやく一人になったな。久々に手間取ったが……息抜きと思えばたまにはいい。完全攻略ってやつだ」
眩しいほどの月明かりが戻り、不敵な笑みを浮かべたランがそう言った。
その顔はまだ青年で、甘いマスクが目を引く。
「何を……こちらも壊滅状態の痛手だが……それでこそ世界トップのスナイパー、コードネーム・ランだ。こちらも十分な準備が出来れば、もう少し分がよかったものを……取引をしないか」
よくある話に、ランは一瞬眉を顰めた。
「自分だけ助かりたい気持ちもわかるが、こっちも急に仕掛けられて気が立っている。取引には到底応じられないな」
「まあそう言うな。金でも何でも、好きなだけ用意するぞ。こちらの状況も見てくれ。今や残るのは私一人。それで何が出来るというんだ」
「おまえが死んで喜ぶやつなら、いくらでもいるだろう」
ランの銃口は、どれだけ口にしていても、少しもぶれない。
「しかし……よく撃ったものだな。弾は残っているのかね？」
マフィアのボスは、静かにそう口を開く。
「お察しの通り、あまり持ち歩いてはいないものでね」
「そうだろうな。弾が入っていない」
ボスの目に映るランの愛銃には、空の薬莢（やっきょう）だけが見える。それは弾がないことを意味した。
「さすがだな。俺がこんな無駄話をするのも珍しいのだが……弾がないということを合わせれば、容易に気が付く、か」
「あいにくだが、私はまだたくさん弾を持ち合わせているよ。引き金を引けばいいだけだ。この至近距離、外れることもあるまい」
「では引けばいい。遠慮はいらない」
この状況で、ランの態度はギリギリの心理戦を楽しんでいるかのように思えた。不敵な表情はさっきと変わらず、少年のように美し

い瞳が、ボスの姿だけを捉えているのだ。
「撃てよ」
ランのとどめ言葉に触発され、ボスは冷や汗を流しながら、その引き金を引いた。
次の瞬間、ボスはランの顔を見つめながら倒れ込んでいた。
「どうして……」
ボスの言葉を聞きながら、ランは愛銃のシリンダーから薬莢を出す。
「答えは簡単さ。あんたへの一発は、撃鉄（ハンマー）を起こしておいたからってだけ。ぶれたくなかったんでね。簡単な問題だろ……って、もう聞いてないか」
静まり返った闇夜の街角。死体が転がる真ん中で、ランは煙草に火を付けた。
ここに生を受けているのは、自分ただ一人という異様な光景に、ランは自分自身を嘲笑うかのように笑みを零す。
「今日はこれから丸腰だ……」
足音一つ立てず、ランは静かにその場を立ち去った。

246　旅立ち

「リト。本当に行くのか」
リトと呼ばれた少年は、コクリと頷く。
「だが、リト。道は険しいぞ」
リトの前には、数人の男たちがいる。村の長たちだ。
明日、リトは旅立とうとしている。高い山間の小さな村を出るには理由がある。
今年、村は壊滅的な飢饉に見まわれ、食べ物も底を尽きた。
「このままでは、あと三月ともたないでしょう。種まで底をつき、次の収穫すら出来ません。このまま待っていても死を待つだけだ。外の世界には、食料も豊富だと聞いた。僕が行って、種や食料をもらって来るよ」
リトを信じたい気持でいっぱいだが、あの険しい山を、少年の足で登れるかは疑問だ。だが、他の者は年老いており、誰も名乗り出ない。
「止められても行く」
強い意志のリトに、村人たちも承諾せざるを得なかった。

「兄上」
リトが家に入るなり、出迎えたのは小さな弟と妹だ。両親はおらず、二人のためにも行かなければと思った。だが、年頃の自分がいなくなることが、どれだけ村に痛手となることも知っているため、決心が鈍る。
「明日、行くことになった」
「本当に？　私たちも付いて行きます」
「駄目だ。おまえたちはまだ、村から出たことすらないじゃないか。僕はあの山の中腹まで行ったことがあるし、大丈夫。それにおまえたちは、父さんたちが残したこの家を守るという使命がある。ここ

に残ることも、食料がなくて辛いことになるだろうが、僕が帰るまで元気で堪えておくれ」
「はい、兄上……この家を守ります。だから兄上も、元気で行ってきてください」
「ああ。おまえたちを残していくのが心残りだが……僕も頑張るよ」

次の日の朝、リトを送りに村全員が顔を出した。
「リト。途中まで我々も送ろう」
数人の長たちが、そう言ってついていく。
リトは頷くと、村人たちに手を振り、村を出て行った。
「リト。みんなで集めたものだ。道中で食べなさい」
食料が底をつきそうな現在、差し出された袋の中には、いっぱいの木の実が入っている。
そのありがたさを噛みしめ、リトはそれを受け取った。本当は、半分は弟たちに渡してやりたかったが、自分のためにかき集めてくれていた手前、それを言い出すことは出来なかった。
「ありがとう。じゃあ、行ってきます」
リトの背中が、だんだん遠のいていく。そして見えなくなった。
あの山を越えるのは賭けに近い。何人もの村人が、登りきれずに命を落としてきた。それでも、リトを行かせるしかなかった。

リトは負けなかった。躓いても転んでも、決してへこたれない。先が見えなくとも、疲れ切っても、その歩みを止めることはなかった。
そして数週間経ったある日、リトは新世界を目の当たりにすることになる。
「これが、世界……」
山を超えた麓には大きな村があった。川が流れ、整列した木が生え、黒く元気な大地が広がる。
痩せた土地に住まうリトの村とは比べものにならないが、かつて

あの山を越えた村人もおり、この大きな村のことは少なからず言い伝えられていた。

「あの山間部の村の子か！」

リトは事情を説明し、村長に会った。

「どうか種を分けてください。土地に合うかはわかりませんが、山の木も枯れ果て、もう食料は底を尽きているのです」

数日後。数人の若者たちを連れ、リトは険しい山道を戻っていった。

「リト！」

「兄上！」

死んだと思って送り出した村人たちは、その奇跡の生還に歓喜する。

しかも、一緒に来てくれた若者たちは、家畜とともに食料をどっさりとこさえている。

「大変だと聞いてやってきました。こちらをお納めください」

村人は泣いて喜び、リトは英雄になった。

そして数年後には、切り立った山の間にトンネルが出来、村同士の交流も盛んになっていったのである。

247　オニゴッコ

近年、犯罪が増える一方で、政府がある法案を通した。「個人識別法案」だ。

かつて番号を振られていた日本だが、それだけでは不十分ということで、すべての日本にいる人間に、チップを埋め込むのだ。

赤ん坊は生まれた時点でそれを首に埋められ、大人たちもまたこ数年の強制執行により全員が埋め込まれた。日本国籍を持たず日本に移住している人間もまた空港でそれを埋め込まれるため、徹底した管理となっている。

「次の信号を右に曲がりました」

イヤホンから聞こえる指示に、警官たちは獲物を追う。

チップを埋め込まれた人間は、政府のコンピューターによって居場所が特定出来るようになっている。

プライバシー保護など、犯罪者一掃が優先を合言葉に、今の時代には存在しない。

「俺は何もやってない！」

警官たちを振り切って、男は逃げ続けた。

軽犯罪でも、捕まれば刑務所行き。それもまた溢れかえる刑務所の対策で、軽犯罪でも死刑になることさえあった。

「何もやっていないなら、堂々と取り調べを受けろ」

警官たちの言葉ももっともだが、チップの正確性は政府のお墨付き。たとえ欠陥があったとしても、それは認められないといわれている。

つまり、誤逮捕で捕まろうが、捕まってしまえば終わりだ。とはいえ、チップが埋め込まれている限り、追われ続けることになる。

「くそ！　こんなチップのせいで！」

男はそう叫びながら、ついに警官たちに捕まってしまった。

「ゲームオーバーだな」
「俺は何もやっていない！」
「嘘つけ！　じゃあ昨日は会社をさぼってどこにいた？」
「ちょっと仕事の合間に、車で寝てただけじゃないか」
男を押さえつける警官の手が、一層強くなる。
「いや。パチンコ屋に入ったはずだ」
「入ったけど……すぐに出たよ」
「おまえが使ったその台で、不正ロムが見つかった」
「俺じゃない！　昨日だって全部スッたんだから！」
「嘘をつけ。おまえが最後に使った台ってことは、データが証明してるんだよ！」
「俺じゃない！」
抵抗し続ける男を見て、警官はため息を漏らす。
「やれやれ。強情な兄ちゃんだな。じゃあ、馬鹿でもわかるようにおまえに見せてやる」
そう言って、警官はトランシーバーに液晶画面がついたような、特殊な機械を見せる。
「この機械はな、チップを埋め込まれた人間の居場所を特定してくれる。これに、おまえの認識番号を入力すると、ほらこの通り……」
そこで、警官は目を疑った。
液晶画面に表示された赤い点が、真ん中を指している。つまり、今、警官が捕らえているこの男を指していることに間違いない。
だが、その他にも無数の赤い点が、近所を無数に徘徊しているのだ。
「な、なんだこれは！　どういうことだ！」
奇しくも逮捕を免れた男の職業は弁護士。そこからチップの曖昧さ、バグなどのずさんなシステム、管理体制を指摘され、「個人識別法案」通称・チップ法は廃止となった。

２４８　あの場所で待ってる

中学校の屋上は、誰も寄りつかない僕だけの場所だった。
いつもは鍵がかかっているのだが、アマチュア無線部の僕は、部活で手に入れた鍵でこっそり合鍵を作って、たまにさぼる授業をここで潰していた。
「こら！」
その日も、かったるい音楽の授業をさぼって屋上で寝そべっていた僕は、その声にびっくりして飛び上がった。
鍵をかけなかった僕が悪いかもしれないが、この屋上に続く階段ですら、部活以外の人間で上がっていくのを見たことがない。みんな鍵がかかっているのはわかっているし、一年の時に屋上への出入りはうちの部活以外禁止と言われているからだ。
だけど、目の前にいたのは生徒ではない。女性教師だった。
その先生は国語教師の大野先生というのは知っていたが、僕は大野先生に習ったことはなかったので、他人行儀に頭を下げる。
「あら。いいところね」
次の瞬間、思いのほか、大野先生はそう言った。
僕は当然怒られるのだと思っていたから拍子抜けしながらも、次は怒られるんだろうなと身構える。
「ここじゃあ、さぼりたくなる気持ちもわかるけど。次の授業は戻りなさいよ」
「……はい。初めから、そのつもりでしたから」
僕はそう言って、入口の方へと歩き始める。長居は無用だ。
「待ちなさい」
当然と言えば当然だが、大野先生は僕を行かせてはくれない。
「……処分は受けます。会議にでもなんでもかけてください」
早く話を終わらせたくて、僕はそう言った。
「そう？　でも、下手したら謹慎処分になるわよ。ここの鍵、どう

したの？」
「……」
僕は俯いた。勝手に合鍵を作ったのだから、そうなっても仕方がないんだろう。少し不安がよぎったが、見つかった時点で僕はもう逃げられないのだ。
「クラスと名前は？」
「……二年三組。青木です」
僕がそう言うと、大野先生は静かに笑みを見せる。
「私は大野です」
「……知ってます。先生だし」
「そう。じゃあ青木君。今から授業に戻れないだろうし、ちょっと付き合ってよ」
大野先生は、そう言って屋上の真ん中へと歩き出し、ポケットから煙草を取り出した。
僕はそれを見て、どうして大野先生がここに来たのかを悟った。学校内は、最近全館禁煙になったから、煙草を吸う先生たちは外で隠れるように吸っているのだ。
「……僕、女で煙草吸う人嫌いだ」
思わず、僕はそう言った。だって大野先生はせっかく綺麗なのに、なんだか煙草が似合わなかったから。
そんな僕に、大野先生は少し驚いたようにして、やがて笑った。
「サボり魔にそんなこと言われるなんて心外だなあ。でも、そう言う男の人もまだいるのよね。男女平等の世の中なんて、まだまだね。中坊のあなたまでそんなこと言うんじゃ」
「べつに、差別とかそういうんじゃ……」
大野先生はくすりと笑って、僕を手招きする。
「じゃあ、煙草はやめにするから、君の話を聞かせて」
「僕の話？」
「学校は嫌い？」
その質問に、僕は目を伏せた。

「べつに嫌いってわけじゃないです。今日だって、ちょっとかったるいからさぼっただけで、べつに授業に出たくないわけじゃ……」
「じゃあ、明日からはここへは来ない？」
「……来れないでしょう。鍵も先生に渡しますよ」
「あら。私はあなたを怒ってるわけじゃないわよ。こっちだって、全館禁煙の校舎内で煙草吸ってるの見られてるんだから。お互い様じゃない」
そう言う大野先生に、僕は目をパチパチさせた。先生の真意がわからない。
「……てっきり怒られるんだと思った」
「まあ、さぼってるのも、勝手に合鍵作ったのも感心はしないけど。一人になりたい時は、中学生にだってあるものね。でも誰にも言わない代わりに、一つ約束してくれないかしら」
「なんですか？」
「もしまたここで会ったら、またお話しましょう。じゃあね」
どういうつもりで言ったんだろう。大野先生は、そのまま屋上から去っていった。
僕のことが気に入ったんだろうか。それとも、僕を心配してくれたんだろうか。きっと後者のほうだろうな……と思いながら、僕は先生の背中を見つめた。
「先生！　僕、もうさぼらないから……でも、話し相手にはなるよ。休み時間でも放課後でも、先生が煙草吸いに来る時を見計らって」
僕の言葉に静かに笑って、返事もせずに先生は去っていく。

あの日から、僕と大野先生は、屋上で二人きりの束の間の時間を過ごしている。
下心がないわけじゃないけど、僕らの間には何もない。でもお互いに他愛もない話をする時間が、一人で過ごした屋上の時間よりも有意義に心を軽くさせる。
今日も待ってる。二人だけの、あの場所で――。

249　移りゆく季節

花見シーズンが終了し、街には葉桜が目立ってきた。
「なんだか嫌な感じね。あれだけ綺麗だった桜が、地面に落ちて汚らしいし」
そう嘆く若い母親の横で、小さな少女は桜の木を指差す。
「でも、お母さん。黄緑色が綺麗だよ。桜ってすごいね。ピンクから緑になった。どっちも綺麗」
まるで大人の醜さが浮き彫りになったように、若い母親は少し自分を恥じた。
そして立ち止まり、葉桜となった並木通りを見つめる。
春の暖かでさわやかな風が吹き抜けた。
「そうね……これから新緑でもっと綺麗になるわね」
「もっと綺麗に？」
「うん。花びらが全部落ちたら、もうすぐ新緑の季節ね」
急に、街が輝いて見えた。

250　生涯の友

戦後直後に生まれた僕らは、怒涛の復興を目の当たりしにつつも、それに流されて生きていた。

例えば、僕らが小学校に入る頃には、すでに裕福な家と貧乏な家とに分かれていたし、裕福な家の中でも兄弟のお古の服を着たり、贅沢出来ない部分も多くあった。

裕福な家でさえそれなのだから、貧乏で、更にドのつく僕の家なんか、いろいろ惨めな思いを背負わなきゃならなかった。

「今から配るものは、修学旅行の紙です。ご両親に見せてください」

その日、僕は配られたプリントを見て絶望した。

旅行は、ただ近くの町に行くだけのもの。だが、書かれていた旅行でかかるお金は、今の家庭状況から絞り出せるものではない。もちろんみんな積み立てているはずだが、僕の家はそれすら出来ない。僕が毎朝牛乳配達のアルバイトをしても、僕の思い通りになるお金でもないんだ。

「先生。うちはちょっと……」

教室を出ていく先生にたったそれだけを言うと、先生はわかったような顔をした。

「そうか……どうにかならんのか？　最後のイベントだぞ」

「無理です。うちは……」

「そうか……先生も、校長にかけあってみたんだがな。おまえだけ特別優遇は出来ないと言われてな……」

「いいんです。僕、もともと行けるなんて思っていなかったから」

「修学旅行には行けなくても、学校には来てもらうぞ」

「わかってます。遠足の時もそうだったから。自習でも予習でもなんでもします」

僕がそう言ってお辞儀をすると、後ろから声が聞こえた。

「先生。僕も修学旅行行けないです」
驚いてその声の主を見ると、いわゆる裕福な家庭である江浦君がそう言っている。
「江浦、おまえがどうして……」
先生も困惑気味だ。
「僕の家、クリスチャンだから。寺や神社めぐりしたって、僕は中には入れません。そんな旅行つまらないでしょ。だったらこっちで勉強でもしていたほうがよっぽど有意義です」
まるでインテリのような口調で、江浦君は真っ直ぐに先生を見て言った。
「ま、まあ、おまえのご両親がいいというのなら……」
「近々、その旨手紙を書くようにしてもらいます」
先生はわかったと言って、その場から去っていった。
僕は江浦君を見つめる。あまりしゃべったことはないが、交流がないわけでもなく、修学旅行に行かないというだけで、仲間意識さえ生まれている。
「もったいないな。行けるのに行かないなんて……」
ぼそっと言った僕に、江浦君は苦笑する。
「ごめんね。行きたいのに行けない人もいるのに。出来ることなら代わってあげたいけど……遠足の時も同じような寺巡りだったから、結局僕は門の中にも入れずにつまらなかったんだ。修学旅行の二日間、よろしく」
「こっちこそ」
この時、僕らは固い握手をした。この握手の友情が、この先、何十年も続くとは思ってもみなかったけど。

「江浦」
僕は会う度に、彼と握手をする。彼もそれを返す。
あれから僕らは、学校も別々になったが、連絡はまめに取っていた。互いの結婚式にも行ったし、互いの子供も抱き上げた。

そして彼は企業の社長、僕は小学校の先生になり、今、僕は、彼の子供たちの成長を見届けているんだ。

その逆に僕の子供たちは、彼の会社にお世話になることもあるかもしれない。

きっかけは些細なことだった。階級もまるで違う僕らが、ここまで通じ合えるなんて誰が想像出来ただろう。いや、僕自身も思っていなかったはずだ。

でも、僕は生涯の友達と呼べるやつに出会えた。そしてそれを、向こうも言ってくれていると信じている――。

251　ビッグバンドが聞こえる

しがない歌い手の俺に敵は多いけれど、俺を支えてくれた人はそれ以上にいる。

俺にギターを教えてくれた人、俺に生き方を教えてくれた人、でもそんな先輩たちは、この世界から消えていった。

それはカラオケという技術が街に進出してきた頃。最先端の技術に驚き誇りに思いながらも、一方でバンドマンの先輩たちは職を失くした事実がある。

「さあ、始めようか」

俺の後ろで聞こえる声は、もうあのしゃがれた声のバンドマスターではない。カラオケを操作する店のマスターだけだ。

それでも俺は歌い続ける。うまいバンドマンだった先輩たちではなく、しがない歌い手から始まった俺にはまだ職があるという皮肉さ。

でも俺には聞こえるんだ。カラオケの向こうに聞こえる、ビッグバンドの重い音色が。

252　アイドルの初恋

恋愛禁止のアイドルになるために、私は彼氏を捨てた。
まだ中学生。彼よりも大切なものがある。でも、彼も私を応援してくれた。
事務所に入ると同時に転校し、高校に入る頃には、中学の友達と連絡を取る時間もなくなった。
でも、失ったものも大きいのに、しがないアイドルの端くれ。
惨めな思いもさせられたけど、それでも私は頑張って、今では少しは名の売れるアイドルになれた。

◇　◇　◇　◇

彼女がアイドルになると聞いた時、僕は応援しようと思った。
結果的に別れることになったけれど、間違いなく僕の初恋。
もう彼女は別世界の人。僕は誇らしく思う。
そんな彼女を忘れようとしていた頃、僕は町で声を掛けられた。
興味がそれほどあったわけじゃない。
でも僕は、気付けば俳優の端くれ。

◇　◇　◇　◇　◇

彼が俳優になったことを知ったのは、テレビで彼を見かけたから。
彼はスピード出世で、すぐにテレビドラマに出るまでになった。
私は彼を応援しながらも、少し嫉妬を覚えた。
でもやっぱり、今でも大切な初恋の人が輝いているのは嬉しい。
同じ世界に入ったからって、ジャンルは違うから会うこともないのだろうけれど……。

◇　◇　◇　◇

そう、僕の初恋は誰にも秘密。
いまさら恋愛禁止の彼女の妨げにはなりたくない。
でもやっぱり、今でも大切な初恋の人が輝いているのは嬉しい。
同じ世界に入ったからって、ジャンルは違うから
会うこともないのだろうけれど……。

◇　◇　◇　◇　◇

とあるテレビ局の片隅。一瞬、背筋が凍った。
彼女だった。見る前に、雰囲気でわかった。
変わらない笑顔で、会釈を交わす彼。

変わらない瞳で、会釈を返す彼女。

たったそれだけで、相手の気持ちがすべてわかった気がした。

たったそれだけで、今までの気持ちがすべて伝わった気がした。

ああ、やっぱりこの人が好きだ。

ああ、やっぱりこの人が好きだ。

まだ秘密の恋。

いつまでも秘密の恋。

でも、気持ちはあの頃と変わらないんだね。

そう、僕らの心は今も繋がっているよ。

253　一夜の引力

その日、海のそばにある田舎町で、高校の同窓会が行われた。
卒業してから一度も開かれたことのない同窓会に、最初は戸惑う者、懐かしげに声を張り上げる者など様々だった。
そんな中で、二人の男女の視線が絡み合う。
「修二！　久しぶりじゃん」
その言葉に、時が止まっていたかのように立ち尽くしていた青年が振り返る。
それと同時に女性のほうも、近くにいた女性から酒を注がれて視線を逸らした。
「美紀。元気してた？」
それから会が終わるまで、二人の視線が再び合うことはなかった。

「二次会行くの？」
トイレから出たところで、美紀は突然そう声をかけられた。
目の前には、先程目が合った修二がいる。
「う、ううん。そろそろ帰ろうかなって……」
「俺も……少し話さない？」
「うん……いいけど……」
少しよそよそしいような、それでいて恥じらいがあるような雰囲気で、二人は同窓会を後にする。
真っ暗な海辺のテラスで、しばらく沈黙だったものの、修二がそれを破った。
「本当に久しぶりだな。もう……五年か？　元気？」
「うん。修二も元気そうでよかった」
次第に打ち解け合う二人。高校時代に付き合い始め、大学まで一緒だったが、それも卒業するころには仲違いして別れてしまった。
それから五年も経つが、お互いに気になる存在ではある。

二人は潮騒だけが聞こえる海辺のテラスで、昔話に花を咲かせた。なによりお互いに、久々に話したかったのである。

「あ……もう終電ないな」

昔話に花を咲かせすぎたのか、はたまたどちらかが帰りたくないと思ったからか、時はすでに真夜中を過ぎている。

「どっか……ファミレスでも入ろうか」

修二が言った。

こんな田舎町では、この時間に開いているのは小さな居酒屋かファミリーレストランくらいなものである。

「あー、ううん。駅に行くわ」

「え？　でも、もう電車……」

「始発までベンチで仮眠する。このところ仕事が忙しくって、もう限界」

そう言う美紀は、確かに心なしか疲れているようで、眠そうに小さくあくびをする。

「じゃあ……ホテルでも行く？」

修二の言葉に、美紀は赤くなった。

「えっ？」

「いや、べつに何もしないよ。女の子が駅で仮眠とか危ないだろ。俺も早く寝たいし……」

修二に下心がなかったわけではない。もちろん美紀に期待がなかったわけでもない。

二人は互いの合意で、近くのラブホテルへと向かった。

「先に……シャワーでも浴びれば？」

「うん。じゃあ、そうさせてもらう……」

美紀はそう返事をして、シャワールームへと入っていく。

別れた人。でもかつて愛した人。互いの緊張が高まる中、期待も高まった。

しばらくして、美紀がシャワールームから出ると、修二はダブル

ベッドの隅に布団をかぶって寝息を立てていた。
美紀は軽く笑って、期待はずれの心を癒す。
「いくじなし」
二人がここへきたのは引力。だが、二人は二度と結ばれることはなかった。

254　一夜の引力　（修二目線）

その日、海のそばにある田舎町で、高校の同窓会が行われた。
卒業してから一度も開かれたことのない同窓会に、俺はたった一人を探していた。
（やっぱり来ないのか……）
俺自身、遅れていったのだが、目当ての影は見えない。
落胆したその時、ドアが開く音に振り返った。
（美紀――）
やっとやって来たその人に、俺は目を逸らせない。高校から大学まで付き合った彼女。喧嘩別れした形になったけど、今でも彼女のことは忘れられない。
「修二！　久しぶりじゃん」
そんな声に、俺は現実に引き戻された。途端、彼女と絡み合った視線も絶たれた。
「お、おう。久しぶり……」
彼女ももう、俺を見ようとはしない。
（今日はもうしゃべれないかな……）
会も終盤に差し掛かり、俺はそう感じていた。だがそう思えば思うほど、別の感情が浮かび上がる。
（嫌だ。もう一度、彼女と話したい。べつに元のさやに戻りたいわけじゃない。ただ近況を聞くだけ……他愛もない話で、もう一度前みたいに話したい）
彼女が席を立ったのを機に、俺はトイレへと続く廊下の前に立つ。
すると、少しして彼女がやってきた。
「二次会行くの？」
挨拶も交わさず、俺はそう尋ねた。挨拶……を忘れたっていうこともある。
「う、ううん。そろそろ帰ろうかなって……」

戸惑う美紀。相変わらず可愛い。
「俺も……少し話さない？」
「うん……いいけど……」
俺はやったとばかりに心の中で叫んで、彼女を連れ出すことに成功した。彼女がこういう大人数の席が好きじゃないってことも知っているから。

彼女といると心が和む。たとえ何も話さなくても、なんだか満たされるのは変わらない。俺は荒んだ心を、彼女と話して癒したかっただけなのかもしれない。
そう思ったけど、思いのほか会話は弾んだ。まるで付き合ったことなどなかったかのように、彼女は無防備に接してくる。それがなんだか空しくて悲しくて、俺は忘れていた時間を取り戻した。
「あ……もう終電ないな。どっか……ファミレスでも入ろうか」
「あー、ううん。駅に行くわ」
俺の言葉に、彼女は予想外の言葉を口にした。
「え？　でも、もう電車……」
「始発までベンチで仮眠する。このところ仕事が忙しくって、もう限界」
確かに会話の中からも、仕事がきついと言っていた。でも駅で仮眠なんて危険すぎるだろ。
「じゃあ……ホテルでも行く？」
意を決した言葉に、彼女は予想以上に赤くなっていた。
「えっ？」
「いや、べつに何もしないよ。女の子が駅で仮眠とか危ないだろ。俺も早く寝たいし……」
彼女が赤くなるもんだから、俺も必要以上に赤くなったが、やがて彼女が「うん」と言ったので、俺たちは近くのラブホテルに入ることになった。
内心、なんでＯＫするんだよ。俺が本当に何もしないと思ってる

のか？　なんて思ったりもしたけど、やっぱり期待はしてしまう。

それから彼女がシャワーを浴びている間、そのシャワーの音を聞きながら、俺は天使と悪魔の誘惑と戦っていた。

ついてきたあいつも期待してんだ。シャワーから出てきたら押し倒す。

いやいや、あいつは本当に疲れてるんだ。俺なんかなんとも思っちゃいない。ここは紳士に振舞わないと、もう一生会ってもらえなくなる……。

そんなことを考えているうちに、寒くなって布団に入った。

気がついたら、目の前には美紀の背中。カーテンから漏れる日差しに、朝だということがわかる。

もちろん、眠った彼女にキスの一つでもしてやりたかったが、嫌われることのほうが怖い……。

なにより、美紀の寝顔がもう一度見れたから、まあいいや。

255　一夜の引力　（美紀目線）

その日、海のそばにある田舎町で、高校の同窓会が行われた。
卒業してから一度も開かれたことのない同窓会に、私は直前まで行かないと決めていた。
（修二――）
高校から大学まで付き合っていた彼氏。何度も笑い合ったり傷つけ合ったりして、結局別れてしまった。あれから何人か別の彼氏も出来たけれど、先日別れたばかりの私は、大好きだった修二に求められれば、今は歯止めがきかないかもしれない。会えばきっと蘇り、求めてしまう。でも、会いたい――。
私は複雑な気持ちで、同窓会会場のドアを開けた。途端に飛び込んできた、懐かしい顔。そのたった一人に、私の目は奪われた。
（ああ、やっぱり来ていた。懐かしい顔。会いたかった……）
「美紀。元気してた？」
友達の言葉に、逸らせなかった目を逸らした。
いいの。同じ空間で時を過ごせれば。話してしまったら、きっと思いが溢れ出す。それなのに――。
「二次会行くの？」
たった一言、彼がかけた言葉に、私は絡めとられた。
本当はずっと会いたかった。話したかった。

二次会へ行くのを断って、私たちは海辺のテラスへと向かう。高校時代は学校帰りによくここへ立ち寄った。真夜中に近い今では明かり一つないけれど、月明かりが異様なまでに照らしてくれる。
お酒の力も手伝ってか、私が普通というものを心掛けたからか、会話は驚くほど弾んだ。変わらない笑顔の彼。私がこうして明るく接していれば、また元のように笑い合えるんだってことを知った。
「あ……もう終電ないな」

突然言った彼の言葉に、私は赤くなる。本当はとうに気付いていた。でも、言い出せなかった。帰りたくないから。

「どっか……ファミレスでも入ろうか」

その言葉に、私は少し寂しさを覚える。軽い女だって言わないでほしい。でも期待してた。言い寄られること。一夜だけでいいから、昔みたいに戻れる日が来るんじゃないかって。そうしたらきっと区切りをつけて、彼のことなんか忘れて、別のところへ羽ばたけるかもしれないのに。

「あー、ううん。駅に行くわ。始発までベンチで仮眠する。このところ仕事が忙しくって、もう限界」

私はそう言った。半分ホントで半分ウソ。半分本音で半分誘った。

「じゃあ……ホテルでも行く？」

狙ったまでの言葉を彼が言ってくれたので、私は逆に恥ずかしくなって躊躇する。でももう、なんでもよかった。

「うん……」

やがて辿りついた近くのラブホテル。シャワーを浴びながら、いろいろなことを思い出す。

ためらってはどうでもよくなり、嫌な過去を思い出しては素敵な過去も思い出す。でもやっぱり、今でも大切な人――。

シャワールームから出ると、さっきまでいたはずのソファに修二の姿はなかった。怖気づいて帰ったのかと思ったけど、ベッドの端には寝息がある。

私はほっとしたような残念なような気持ちになって、そっと笑った。

「いくじなし」

そんなところも、変わらない彼。

私ってそんなに魅力がないかしら……と、少し落胆しながら、私はそっと彼の横に身を寄せたが、彼が起きる様子もなく、半分ホン

トだった仕事の疲れも限界で、そのまま無防備に眠ってしまった。

目覚めのキスでもねだろうかしら――いや、虚しいばかりだわ。

捨てた恋なんて拾うものではない。

朝方、彼の微笑みの中で目覚めた私は、この恋がやっと終わったことを悟った。

256　焚き火

「わーい。焼きいも！」
学校から帰るなり、子供たちは庭で落ち葉焚きをしていた私を見つけ、駆け寄ってきた。そうか、今日は午前授業で終わることをすっかり忘れていた。
私は内心、舌打ちをして、子供たちに笑いかける。
「駄目。先に宿題やってからよ」
「えー」
「早く終わらせて、焼きいもしましょ。宿題終わったら、台所からおいもとアルミホイル持ってきて」
「はーい」
ちょうどさつまいもがあってよかった。
子供たちは素直に従って、家の中へと入っていく。
私は長い枝で火加減を見て、落ち葉を足してゆく。落ち葉の隙間から、古い写真が見えたが、すぐに灰となった。
子供たちが帰ってくる前に、早く燃やしてしまわなければ――。
焚き火は女の秘密。話しかけないで――。

257　白い花かんむり

「エイミー！」

ジャンの声が聞こえる。でも、決して顔なんか見せないわ。こんな涙にまみれた醜い顔を、最後だというのに見せられない。

私は腰の丈まで伸びた草むらに寝転がって、空を涙で滲ませた。

「エイミー！」

院長先生の声も聞こえる。でも、誰が呼んでも行かないわ。夜になったらちゃんと戻るから……それまで放っておいて。私に時間をちょうだい。

私は目を閉じて、思い出に浸る。

ジャンは同じ時期にこの孤児院にやってきた。私たちは捨て子。男女の差もなく同じように育って、大きくなったら結婚して、この孤児院に恩返ししようって決めていたのに、急にジャンの里親が見つかった。ジャンは勉強が出来たから。

私は夜になって、やっと孤児院に戻った。

「エイミー！　何処へ行っていたの？　ジャンはもう行ってしまったわ。残念そうにしていたわよ」

院長先生にそう言われ、私は腫らした目で笑う。

「ごめんなさい、先生。でも、これが別れじゃない。そうでしょう？　ジャンと別れの挨拶なんか交わしたくなかったの」

「まったく、あなたったら……」

そう言いながら、院長先生が白い花の花かんむりを差し出した。

それは、前に一度見たことがある。

「これ……？」

「ジャンがあなたにって。手紙を書くと言っていたわ」

それを聞いて、私は花かんむりを受け取り、もう一度孤児院を出て行った。だがもう、ジャンの姿はもちろんない。

「ジャン……」

私の脳裏に、小さかった頃の記憶が蘇る。

「エイミー。大きくなったら、僕のお嫁さんになってね」

小さなかったジャンが、そう言って同じ花かんむりをくれた。

あれ以来、ジャンが花かんむりを作っているところなど見たことがないが、今になってこれをくれたということは、あの時の約束を覚えていたからだと信じたい。

「ジャン……いつかまた会えるよね」

張り裂けそうな寂しさを押し込めて、私はジャンとの再会を生きる支えにすることに決めた。

しばらくして、ジャンから手紙が来た。新しい生活のことが書かれていたけれど、相変わらず優しい文面。

私は照れ屋だから「元気でね。お互い頑張りましょう」とだけ書いて、院長先生の手紙と一緒に送ってもらった。あの白い花を押し花にした栞とともに……。

258　カーテンの向こう側

引きこもって三年の春がきた。
大学受験に失敗したのを機に、僕は一日のほとんど部屋で過ごす。兄弟もいるが、ここ一年ほど母親以外と顔を合わせたこともない。トイレと風呂以外は、いつも部屋の中。
最初の頃は、兄弟たちが無理やり外へ出そうとしたりしたが、母親は僕に甘いから、僕は今も守られている。
そんな僕に期待する人など、もう誰もいない。

「ケンちゃん。ごはん置いておくね。あと、今日から外壁修理の人が来るから、びっくりしないでね」
母親の言葉に返事もせず、足音が去ったのを待って、僕は盆に置かれた手料理を部屋の中へと入れた。気が付けば、激太り。こんなことも手伝って、僕が外に出ないことに拍車をかけている。
その時、鈍い鉄骨の音が外でした。外壁修理の人と言っていたから、足場でも組んでいるのだろう。
永遠に開けられることのないカーテン越しに、僕はそう納得をして、空になった皿を廊下に出した。

ガガガガガ。ゴッゴッゴッゴッ……と、壁の向こうで音がする。
数日間、そんな音に悩まされ、僕はヘッドフォンの音を最大にしてネットゲームを楽しんだ。
「静かになったな……」
数日目の朝、毎日続いていた工事音が止み、あまりの静けさが異様で、僕は思わずカーテンを開けた。
何年ぶりに開けただろう。たった十センチほど開けただけなのに、眩しいくらいの日差しが入った。
そして僕の目に飛び込んで来たのは、まだ組まれたままの足場と

なる鉄骨の向こうに広がる、庭の景色だった。
ゴクリと、僕は思わず息を呑む。
手入れされた庭。太陽に輝く木々。鮮やかなつつじ。芝生に見える草花。当たり前に見ていたはずの僕の家の庭が、改めて見るとなんと美しい世界なのか。
「ケンちゃん。起きてる？　ごはんよ」
その声に、開きかけてた僕の心はしぼんだ。
相変わらず返事もせず、僕は俯き、カーテンを閉める。
こんなんじゃいけない。と思ってはいても、突然出たら家族も驚くだろうし、きっかけがない。
「う……ん」
母親にその声が届いたかはわからないが、僕はその後、時々カーテンを開けるようにした。
最初は十センチ。次に二十センチ。やがて母親か誰かが、僕の部屋のカーテンが開いていることに気付くだろう。だからといって何が起こるとも言えないが、それは僕にとって、少し大人になるってことだった。

259　夢ならば

夢ならどうか終わってください。

早く目を覚まして。

そして嘘だったと言ってください。

なぜ、こんなことになってしまったのか。

あなたを愛した私が悪いのでしょうか。

すれ違った彼には、腕を組む女性がいました。

私によく似た、姉でした。

夢でなければ、いっそどこかへ消えてください。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――

260　小さな国王

ウォール王子は小国の王子。病で両親を亡くし、若干十歳で王位を継いだ。

生まれた時から自分に取り入ろうとする家臣たちに絶望し、もはや心を開く者はいない。親友のロッシュ以外には……。

ロッシュは同じ年の親戚で、いわば将来、ウォールの片腕となるべき人物である。子供の世界でも取り巻きの多いウォールにとって、ロッシュだけが自分を人間として見てくれている唯一の友達だった。

「陛下。お目通り願います」

毎日たくさんの謁見、たくさんの書類と向き合わされ、ウォールはうんざりしながら公務に向かう。実務は家臣に頼らざるを得ないのだが、それも暴走しないようにと目を光らせねばならないということは、十歳のウォールには過酷すぎる仕打ちだ。

「なぜ王族に生まれてしまったのか……」

貧しさで生きられない国民がいるのは知っているし、それに比べて自分が恵まれていることはわかっているのだが、今のウォールにはそう言わなければ心が折れそうなのであった。

「ウォールの気持ちはわかるけど、僕はウォールがいてくれなければ困る」

なんの揺らぎもなく言ったロッシュに、ウォールは怪訝な顔をする。

「なぜ？」

「僕の立場だって、取り巻きもいれば公務もある。ウォールに比べたら大変さなんてないかもしれないけど、僕一人ならこなせていない。僕たち二人、支え合わなければ生きていけないんだ」

「そうか。だったら僕も、ロッシュがいなければ困る。本当に、ロッシュがいてくれてよかった」

だがそんな友情も、時が経つにつれて亀裂が入っていく。
「ロッシュは今日も来られないのか？」
苛立ちながら、ウォールは家臣に尋ねる。
「はい。学校が忙しいとのことで……」
「先日もそうだった。次の週末は必ず来るよう伝えてくれ」
中学に上がる頃には、ロッシュはぱたりと王宮に姿を見せなくなった。中学の勉強が大変だとは聞いていたのだが、家庭教師付きで王宮から出られないウォールにとっては、ロッシュという息抜きすら奪われたのである。
次の週末、ロッシュはやっと姿を見せた。
「しばらくすっぽかしてごめん。でも部活に入ってしまったし、週末も忙しいんだ。今日も特別授業を放って来たし、しばらく来られないと思う」
「わかってる。でもひどいじゃないか。僕はロッシュに会えるのを楽しみにしていたんだぞ？」
「でも、今僕にすべきことは、勉強することだ。部活だって思いきりやりたい」「国王の僕に会うより大切だというのか！」
ウォールのその言葉に、ロッシュも口を曲げる。
「ウォールより大切なことなど……でも、そう言われれば悲しい。悔しいよ」
「……もう、無理して会いに来なくていいよ」
ふてくされるように言ったウォールに、ロッシュもため息をついた。
「わかった。じゃあ、そうさせてもらうよ……」
それだけを言って、ロッシュは部屋から出て行った。
「どうして……！　ロッシュにまで見捨てられたら、僕は……」
一人呟いたウォールは、思い直して部屋を出て行った。謝れば、ロッシュは許してくれるだろうか。
「しばらくここへは出向きません」

ウォールが外へ出ると、廊下の隅でロッシュと家臣の声が聞こえた。
「なぜだ。陛下にはおまえしかいないのだぞ」
「でも、僕がここで陛下に甘え、勉強をおろそかにしたら、将来の陛下に迷惑がかかります。僕は学校で遊んでいるわけではない。それが陛下にわからないのなら仕方がない。それに、陛下は無理して来なくていいと言ってくださいました」
ロッシュの言葉が言い切らないうちに、ウォールはロッシュの腕を掴んだ。
「ウォール……」
「すまない、ロッシュ。僕が間違っていた。ロッシュの気持ちがわかっていなかった」
「いや……でも、僕だって怒ってる」
「わかってる。叱ってくれて構わない。言った通り、もうここへ来なくてもいい」
そう言ったウォールに、ロッシュは笑った。
「無理をしてまでは来ない。将来の君のために、国のために、僕には今、時間が必要なんだ」
「うん。ロッシュなら出来る。君は将来有能な人間だ」
「馬鹿だな。僕は君の片腕になるために頑張っているんだ。いつか言っただろう。僕たちはどちらが欠けても駄目なんだ。僕には君がいてくれなければ困る」
「僕もだ、ロッシュ。僕も頑張る。ロッシュが姿を見せなくても、ロッシュが頑張っていることを励みに頑張る」
「僕もだ、ウォール。でも、寂しくなったらいつでも呼んでくれ。いつでも駆けつける」
「ああ。ありがとう。親友がロッシュでよかった」
二人はもう一度友情を確かめ合い、別々の方向へと歩き出した。
それからも二人は、子供の頃ほど頻繁ではないが、たまに会って

は話が尽きることなく喧嘩もなかった。
そして二人が大人になった頃、二人は立派な国王と家臣となっているだろう。

261　あなたの夢、ぼくの夢

子供の頃、将来の夢を聞かれて答えた夢を、僕はまだ捨てきれずにいる。

医者、消防士、車掌さん、パイロット、プロ野球選手……数ある中で僕が選んだ職業は、バスの運転手。叶いそうで難しい夢。運転技術は去ることながら、身近で大切な仕事だし、お客さんの命を預かる責任重大な職業だ。

僕がそんな夢を見出したのは、お母さんの影響だ。お母さんと一緒に出かける時は、決まってバス。お母さんは、いつも運転手さんを憧れの眼差しで見ていた。

「将彦。ほら、運転手さん挨拶したよ。繋がってるみたいで素敵よね」

お母さんが言っているのは、すれ違うバスの運転手に交わす挨拶のこと。バスだけでなく、大きなトラックの運転手もまた挨拶をする。それが走っている間中続くのだから、よほど冷静でいないと出来ないだろう。

そんなお母さんの影響で、僕もすっかりバスの運転手になりたいという夢を持った。

「おい。またエンストか？」

十八歳になった僕は、普通自動車の免許を取るにも苦労していた。

「すいません！」

僕は謝り、すぐにエンジンをかけ直す。今日で二度めのエンスト。路上にまで出ている僕に、教官も呆れている。

運転、向いてないのだろうか……と、さすがに頭をよぎったが、こんなところで躓くわけにはいかないんだ。

結局、僕が試験を受けられるまでになったのは、普通の人より遅かった。でも、その頃にはもちろんエンストなんてしなくなったし、車にも慣れた。

「よく頑張ったな。君は飲み込みが遅かったかもしれないけれど、運転に関しては誰よりも丁寧だった。自信を持って、安全運転に取り組んでください」

根気よく僕に付き合ってくれた教官が、最後にそう言ってくれた。

卒業から数年経った今、大型免許を取るにも時間のかかった僕だけど、教官の言う通り、今後も誰よりも丁寧な運転をしようと決めた僕は、今日も安全運転で、人々の生活を繋いでいる。

「将彦」

終点のバス停で、降り際にそう言った女性は、嬉しそうな顔で微笑むお母さん。

「今日も当社をご利用頂き、ありがとうございました」

そう言った僕に、お母さんは笑う。

「こちらこそ。今日も安全運転ご苦労さま。明日も頑張ってね」

「うん」

もう家を離れた僕だけど、こうして毎日お母さんに会える。

「右よし、左よし、出発進行」

指差し確認でバス停を離れた僕に、反対車線のバスの運転手が、僕に手を振る。

「繋がってる……」

お母さんが好きだった運転手だけが交わす合図。その夢を受け継ぎ、手に入れた僕。

僕も手を上げて、反対車線の運転手に返した。

僕にとっても、幸せな瞬間。

262　花嫁の憂鬱

子供の頃はよくからかわれて、いじめられるような性格だった私は、常に地味に大人しく振舞うようにしていた。それが、こんなことになるなんて……。

「しっかりしなさい。今日ばっかりは、あんたが主役なんだから」

母親の言葉に、私は純白のドレスを着ながらも、憂鬱な溜息を漏らす。

「う……ん」

結婚式は、何があったか覚えていない。教会で、ただ父親にエスコートされ、テレビドラマを見ているかのように、自分自身のこととして実感が湧かなかった。

「もう。大丈夫？」

「おなか痛い……」

「薬はさっき飲んだから大丈夫よ」

「だって、あんなにたくさんいるなんて……」

教会にいた人数を見て驚いた私。それより多く、これから始まる披露宴では集まるはずだ。

地味に生きていた私が選んだ男性は、たまたま大会社の御曹司。彼のことはもちろん好きだし、地味な私でも、彼は昔ながらの一歩引いた日本女性をイメージするように気に入ってくれているみたい。

でも、大会社の御曹司となれば、結婚となると大変だった。うちは中流家庭で、それもあちらの家族はわかってくれているけれど、披露宴に呼ぶ人数はケタ違いだった。

「あれがジュニアのお嫁さん？」

「なんか暗そうな子ね」

「なんであんな子が……」

「あれで次期社長の妻が務まるのかしら」

本当にそんなことを言われているかはわからないが、ネガティブ

な私は、人目を気にしてしまう。
「そろそろ時間だそうです」
そう呼びに来てくれたのは、新郎である彼自らだった。
「まだ緊張してる？」
「う……ん」
「大丈夫。ニコニコ笑って見てればいいんだ。俺たちがやることなんて、あとは入場と退場とケーキ入刀くらいなもんだろ。あとは運ばれてくる料理を食べてりゃいいんだよ」
優しいまでの彼の笑顔に、私は少しだけ安心しながらも、やはり思考はネガティブになる。
「でも、ただ歩くだけで転んじゃうかもしれない。みんなの目が気になるし……」
「転びそうになったら俺が助けるし、もしそんなことがあっても、みんな笑い話として会を盛り上げるだけだよ。今日の主役は俺たちだ。堂々としてればいいよ」
「笑われるのが嫌なのに」
「じゃあ、俺がお姫様だっこで入場してあげようか？」
「もう！」
「大丈夫。何か言いたいやつには言わせておけよ。俺が選んだのはおまえなんだし、嫉みや嫉妬なんて、女冥利につきるじゃん」
歯を見せて笑う彼の顔を見ていたら、自分のネガティブさが馬鹿馬鹿しく思えた。
「うん」
「よし。じゃあ、行こう」
やっぱり会場に入るとあまりの人数に恥ずかしかったけど、懐かしい友達の姿も見えて、私はやっと安心出来た。
スポットライトが、私たちを照らし出す。今日の主役は私たち。
私は初めて、人に注目される快感を得ていた。

263　二次元カノジョ

薫は中学二年生。最近、廊下ですれ違った、三年生の男子に恋心を抱くようになった。

「川野先輩っていうらしい……」

名前の情報を仕入れるだけで、かなりの苦労があった。

「ええ？　結構平凡な顔じゃない。どこがいいの？」

同級生からそう言われても、自分でもわからない。ただ一目惚れのように、彼を追っている自分に気付いている。

「先輩、受験だし、話すきっかけもないよな……せめて何部に入っているのかわかれば……」

ちょうどその時、またも廊下を歩いている意中の彼を発見し、薫は硬直した。でも、今しかない。

「か、か、川野先輩！」

すれ違いざまにそう呼ぶと、川野は首を傾げる。

「誰だっけ？」

「あの、二年の大塚薫って言います。あの……川野先輩のことが好きです！」

「ごめん。俺、二次元にしか興味ないんだ」

一瞬の玉砕。ためらいもなくそう言って去っていく川野に、その場にいた同級生たちは避難の嵐を浴びせるが、川野は何とも思わないようで、そのまま去って行ってしまった。

「やめなよ、あんなやつ。ただのオタクじゃん。カッコ良くもないんだしさあ」

「そうだけど……ひどいけど……でも好きなんだもん！」

薫は半べそをかきながら、教室へと入っていく。

その日から、薫の闘争心というものに火がついた。フラれたショックで落ち込むこともなく、恋心というものも忘れ、ただひたすら

に、見返してやろうという気持ちが大きく、漫画やアニメ雑誌を買い漁る。

「やだ……結構いい話じゃん」

レアなアニメまで見終わり、薫はアニメに涙した。

翌日、薫はコスプレ衣装に身をまとい、再び川野へ挑戦を挑むことになる。

264　星の隙間で

ビリビリと、大爆発の震動がこちらにも伝わってきた。
宇宙戦争が勃発している今、僕もまた小型船で戦っている。
「アンディ、後ろ！」
仲間の声に、僕はすぐさま振り向いて、ロケット砲を発射した。
目の前にまで迫っていた敵の船が、煙を吐いて落ちていく。
「油断していたとはいえ、僕の後ろを取るなんて……」
僕はこれでもエース。後ろを取られたことにプライドが傷付き、落ちていく敵兵の顔を拝んでみたくなった。
「これで最後だな。僕はちょっと用が出来た。先に戻ってくれ」
僕は仲間にそう言うと、敵の船が落ちていった星へと向かう。僕の家もこの星にある。
船を不時着させると、僕は辺りを見回した。この辺りは戦闘区域で、落ちた船の残骸がガラクタのように横たえている。
「あれか」
落ちたばかりの船の黒煙を見つけ、僕は銃を構えて船に近付いた。脱出ポットが開いていないから、船の中で死んでいるのだと思う。
が、船内に見える顔は、血だらけの女性だった。
「女……？」
僕は驚いて、船の扉を開ける。僕の後ろを取ったのが女だなんて知れたら恥になる。男の世界に生きてきた僕にとって、そう思うのは当然だった。
だが、目の前に横たわっているのは間違いなく女性で、それもまたうちの隊にはいないような、美しいほどの女性だった。
「生きてる……」
力はないが辛うじて呼吸をしている敵兵の女性を、何を思ったか僕は担ぎ上げ、そのまま僕の船に乗せた。

何を血迷ったのだろう……自宅で女性を介抱しながら、僕は苦痛に顔を歪めた。僕のプライドが許さなかったから？　美しい女性だったから？　答えのない問いを繰り返しながら、僕はただ僕のベッドで横たわるその女性を見つめていた。

女性は数日間、目を覚まさなかった。

だけど僕は彼女を殺すこともなく、ただ街外れの小さな家で、軍服を脱ぎただの女性としか見られないその人を、ただただ介抱していた。

「ただいま……」

返事のないのはわかっているが、僕は仕事から帰ると、今日も目を覚まさないであろう彼女のベッドに向かう。

だが、そこに彼女の姿はない。

「どこだ……どこだ？」

目を覚ましたなら、ここが敵の家だとわかり、すぐに出ていくだろう。それとも僕を待ち伏せして殺すだろうか。

そんなことを考えていると、ベッドの向こうにうずくまる人影が見えた。彼女である。

「おい！　大丈夫か」

途端、振り向いた彼女に、僕は驚いた。

「ここは……？」

彼女に戦闘意識はまったくなく、ただかよわい女性のように怯えた目で僕を見つめている。

「ここは僕の家だ。君は……倒れていて、僕がここに運んだ」

少し嘘をつきながら、僕はそう言った。

「……倒れていた？」

「僕はアンディ。君の名は？」

「……わ、わからない……」

「わからない？」

「なにも思い出せない！　自分の名前も、どうして私がここにいるのかも……！」

一時的な記憶喪失は、仲間内でも見たことがあった。

「じゃあ、君の名前を考えよう。君の記憶が戻るまで、君の体が回復するまで、ずっとここにいていいから……」

その時、僕は初めて女性に恋をしたのだと納得した。

後に迎えるであろう悲劇を、今は考えたくはない。今だけ敵や味方など関係なく、ただの男と女でいたいと思う。誰も見ていない、この星の隙間で……。

265　星の彼方へ

僕は宇宙戦争に参戦する兵士で、生と死の狭間に日々いる。そんな中で見つけた唯一の安らぎは、誰にも理解されないであろう、記憶を失くした敵国の女兵士を介抱することだった。

「アンディ。今日も早く帰るのか？　さては女でも出来たな」

仲間たちが囃し立てる中、僕は苦笑して首を振る。

「違うよ。ただエースとしては、早く帰って羽を伸ばしたいだけさ。明日も早いんだろ。先に帰らせてもらうよ」

僕はそうごまかして、ベースキャンプを出ていく。

少し船を走らせると、居住区から外れる。僕は静かな場所を好んで、人と滅多に会わないような、この寂しげな区域に住んでいる。

「おかえりなさい」

家に入るなり、中から綺麗な女性が出てきた。

いつか僕が撃墜した、敵国の女兵士である。僕は一目見て彼女に惚れたんだと思う。気が付けば、彼女をここへ連れて来て、介抱していた。記憶を失くした彼女も、僕を頼ってくれている。まるで恋人のように、この空間では、敵も味方もない。

ただ僕は、いつか迎える悲劇を知っている。

「ただいま、サニー」

サニーとは、彼女の名前だ。本当の名前がわからないから、僕がつけたものなんだ。

「今日も無事に帰って来てくれたのね」

「ああ。一応これでもエースだからね。仲間は一人やられたけど……代わりに倍以上は撃ち落としたよ」

「そう……先にごはんでいい？」

「ああ。ごめん、帰るなり血なまぐさい話だったね」

「ううん。あなたのお仕事だもの」

まるで僕らは新婚のように、小さなテーブルを隔てて座る。目の

前にはサニーが作った美味しそうな料理。僕は幸せだと思った。

夜になり、僕はベッドに横たわり、すぐに寝入ってしまった。

サニーは体力が回復してからは、ベッドを僕に譲り、床で寝るようになっている。べつに僕らは恋人同士ではない。

「う……うう……」

寝入ってからどのくらいの時間が経ったのだろう。僕は呻き声をあげながら、息苦しさに目を覚ました。すると目の前には、サニーが僕に馬乗りになって、僕の首を絞めている。

「や……め、ろ」

かすれる目を凝らし、僕は自分の首を絞めるサニーの手を力づくで離させ、逆に押し倒した。

「どういうことだ？　サニー。どうして……」

そう言ったところで、サニーは僕から目を逸らし、涙を流している。

そうか、その時がきたのか……僕はすべてを悟って、サニーから離れた。

「いつから……記憶が？」

冷静になってそう言った僕に、サニーも静かに起き上がる。

「……一週間ほど前から……」

「そんなに？　なぜすぐに僕を殺さなかった。それとも、これは誰かの命令か？」

「……記憶が戻ってすぐに、国に連絡を入れたわ。あなたのことも話した。命令は当然下ったけれど、これは私の意志でもあるわ。だってあなたは敵だもの」

サニーの言葉に、僕は静かに溜息をつく。わかってた。サニーの記憶が戻ればこうなることを。

「じゃあ……なぜすぐに下さなかった？」

「それは……あなただって同じことよ。なぜ私を助けたの？　あのまま放っておけば、私は死んでいたわ」

「……理由なんかないよ」
僕はそう言うと、肌身離さず持っているナイフを取り出し、サニーに差し出した。
「一思いにやれよ。そうすれば、君は故郷に帰れる」
「アンディ……」
「わかってたんだ。こうなること。もうずっと前から……わかってたのに、君を助けずにはいられなかった……だから、いいんだよ。わかっているから、何をされても後悔はない」
ナイフを握るサニーの手は震え、凛として僕に向かってきた女兵士の機敏さはまるでない。もちろん僕はここから逃げることも出来たし、逆にサニーを殺すことだって出来るだろうが、どういうわけか僕の心はいつになく穏やかで、サニーに殺してほしいというような、わけのわからない感情さえ芽生えていた。
「そうだ、ひとつだけ……教えてくれないか。君の本当の名前を」
僕の言葉に、サニーの目から涙が零れ落ちる。
「ミラルダ……」
その時、ミラルダの手からナイフが離され、代わりにミラルダが僕に抱きついてきた。
僕はミラルダを抱きしめながら、何かが満たされていくのを感じていく。
「そうか、ミラルダ……いい名前だね」
「ずるいわ、アンディ。どうして私を助けたの？　どうして私を殺さないの？　どうして……！」
泣き崩れるようにそう叫ぶミラルダを、僕は強く抱きしめ離さない。
「君にだってわかるだろ？　君が好きだからさ……敵も味方もなく、兵士でもなく、ここにいる時は、僕は僕でいられた。それは君がいてくれたからだよ。何故だろう……僕にもわからないけれど、君に殺されるなら本望なんだ」
「殺すなんて出来ない！　私もあなたが好き」

「ああ、ミラルダ……」

これは、果てしない宇宙の狭間で起こった愛の奇跡……僕らはその後、どちらの国をも離れ、彼方なる星を目指して、愛の逃避行を繰り広げることになる。

266　ボトル・レター

誰にも言えない想いを、心の中にしまっておくことが出来ずに、この手紙を書きました。
彼のことが好きなのです。
いつかこの傷が癒えて、自分に向き合えるその日まで、どうか誰にも読まれませんように――。

メアリー・ローレン

無茶なことを言ったとはわかっている。でも、書かずにはいられなかった。
ボトルに入れたその手紙は、ロングバケーションで行った海で流した。みんなの輪から離れ、他の人に微笑む彼を横目に、私は人知れず、そのボトルを流したのだ。

手紙が返ってくるはずはなかった。だって住所も書いていないし、私が住む場所は、この海岸より離れた山沿いの街だからだ。

あれから三年の月日が流れた。
私はハイスクールを卒業し、街のコーヒーショップに就職をした。
ボトルに込めた意中の彼とは、当時すでにふられていたのだが、今はもう会う関係でもないし、当時の彼女と結婚し、子供が出来たと聞いている。
それでも私の心の傷は、まだ完全に癒えたわけではなく、まだどこかで好きな自分がいる。

「メアリー？　メアリー・ローレン？」
コーヒーショップのカウンターで、一人の少年がそう言った。見なれない顔である。
「えっと……どこかでお会いしたかしら？」
明らかに私のほうが年上であるから、私はすまし気味にそう言った。
「ああ、いや……お会いするのは初めてだよ。俺、オーウェン・ケストナー。よろしく」
「はじめまして、オーウェン。でも見かけない顔ね」
「うん。大学に進学するのに、こっちへ来たばかりだから……ここを馴染みの店にするつもりだからよろしくね」
「あら。大歓迎よ」
オーウェンは太陽のように豪快に微笑む、まだあどけなさが残る少年だった。
それからというもの、事あるごとにこの店へ通って声をかけてくれる。気が付けば常連となっていた。

「メアリー。今日はプレゼントがあるんだ」
ある日のこと、オーウェンはそう言って、はにかんで笑った。
「あら、嬉しいわ。私の誕生日を覚えていてくれたのね？」
その日は私の誕生日。にも関わらず、店に出ていた私に、オーウェンは一輪の花を差し出す。
「誕生日おめでとう、メアリー」
「ありがとう。綺麗なお花ね」
「それから、手紙書いて来たんだ。読んでくれる？」
「もちろんよ」
私が頷くと、オーウェンは中に紙がまるまっている瓶を差し出した。
「あら。どうして瓶に入れたの？」
「君が喜ぶと思って」

オーウェンの言葉に首を傾げながら、私はボトルの中から手紙を取り出し、読んでみる。

あなたの心の傷は癒えているでしょうか？
僕はこの手紙を受け取った日から、あなたのことが頭から離れません。
僕は君が好きです。

オーウェン・ケストナー

オーウェンの手紙には、いつかボトルに入れて流した私の直筆の手紙が添えられている。
私はすぐにオーウェンを見つめた。
「オーマイゴット！　どうしてこれを……」
「一年ほどまえに、俺の故郷の海で見つけたんだ。いろいろ探してみたけれど見つからず、諦めてた。でも、見つけたんだ。同じ名前の君、苦しい恋愛をしていたと聞いたし、そしてなにより、この人だと思った」
「凄いわ、オーウェン。信じられない」
「答えを聞いてもいい？」
「ええ……私も好きよ、オーウェン」
「ああ、よかった！」
私たちは抱き合い、神様が導いてくれたお互いに涙した。

267　雪の道

僕はその年、中学一年生になっていました。

父は正月から会社の挨拶回りというもので毎年出かけているのを知っていたから、今年は前もって友達の家に遊びに行くと言って、家を出たのです。

数年前から貯めていたお年玉やお小遣いをかき集め、向かった先は電車を何本も乗り継いだ雪国。僕はそこに行くことを、もう何年も前から決意し、お金を貯めてきたのです。

手の平の中にあるメモ用紙は、ずっと握っていたせいでくしゃくしゃに丸まり、ボールペンのインクの文字さえかすれていますが、そのメモの内容を、僕は丸暗記するほど見ているから、本当は握られた手も自由のはずなのに、僕はそのメモ用紙を離すことが出来ません。

このあたりだ……。

頭の中には、とある見知らぬ土地の住所。辺りの住所を見回しながら、僕はその家に辿りつきました。

表札には、見知らぬ人の苗字。でもその横に、見慣れた名前がありました。僕の母の名前です。

母は僕が小学校に入って間もなく、僕を置いて出て行きました。何度も僕を連れ戻しに来てくれたそうですが、裁判で父に負けたと聞いています。

何を伝えたいということでもなく、何を話したいというわけでもありませんが、ただ僕はもう一度、母に会いたかっただけでした。

でもここへ来て、僕はその家に背を向けました。

表札に書かれている名前には、母と母の横に並ぶ男性の名を一字ずつ取った、新たな名前があったからです。

母に新しい家庭があることは風の噂で聞いていましたが、やはりそれはショックでしたし、母以外には会いたくありません。

僕は父の手帳からやっと知ることができたメモを破り捨て、もう一度その家を目に焼き付けるように見つめると、木枯らし吹く静かな正月の中、元来た道を戻りました。

もうここへ来ることも、母に会うこともないでしょう……。

どこまでも続く雪の道は、歩くたびに僕を大人に変えていくように思いました。

268　エルフの森

「ヤー！　ヤー！」
森の中で一際大きく叫びながら剣を振っているのは、今年初旅に出ることが決まった十四歳のケインである。
剣はみるみる一本の木を削り、周りの草花を刈ってゆく。
「やめて！」
そこに、そんな声がして、ケインは慌てて振り返った。
するとそこには、長い金髪の綺麗な女性の姿があった。
「まさか……エルフ？」
ケインがそう言ったのは、女性の耳が大きく尖っていたからである。
「そうです。お願い、剣を振るのはもうやめて」
懇願するような目つきのエルフに、ケインは怪訝な顔をする。
「剣の稽古をしているだけだ。それにこんな森の奥深く、誰にも迷惑かけちゃいないだろ」
「でも、罪もない木や草花が痛がっているわ」
その答えに、ケインは剣を下ろした。
「木や草花の声が聞こえるエルフなのか」
「ええ、聞こえるわ。むやみに剣を振っても強くならない。どうか生きている木々を相手にするのはやめて」
「どうせ僕は剣がうまくないさ……」
ふてくされるようにして、ケインはその場に座り込む。
「練習すればうまくなるわ。でも練習台は、倒れた木で作ればいいじゃない。村でもそうしているはずよ」
「まあね」
隣に座ったエルフに、ケインは見とれるように見つめた。近くで見れば見るほど、美しい。
「君……名前は？」

「エラルカ」
「僕はケイン。今年デビューなんだ。エラルカは、ずっとこの森にいるの？」
「ええ。もう少し奥だけれど」
二人は次第に打ち解け合い、毎日のようにこの森で会うようになった。だが、別れの時は刻一刻と迫る。

「いよいよ明日、旅に行くよ」
ケインの言葉に、エラルカはそっと頷く。
「ええ……」
「いつ戻るかはわからないけど、ここへ来たらきっとまた会えるね？」
「……そうね。でも、もうここへは来ない方がいいわ」
「どうして？」
その言葉に、エラルカは悲しそうに微笑んだ。
「住む世界が違うわ。私はエルフだし、あなたは人間」
「年の話？　確かに僕のほうが早く老いるだろうけど……それを見るのは辛い？」
「それもあるし、森もどんどん削られているわ。それに、エルフ狩をする人間もいるから……」
「僕がそんなことをする人間に見えるの？」
「いいえ。でも、どうなるかわからないでしょう？　あなただって、雇い主がそういう人だったら……」
その時、ケインはエラルカの手を強く握り、そして抱きしめた。
「この森には手出しさせない。僕、もっと強くなって、君と君の仲間を守るから。だから……待っていて欲しい」
ケインの強い意志に、エラルカは喜びの涙を流す。
「ええ。待っているわ、ケイン」
後ろ髪を引かれる思いで森を去るケインに、エラルカは祈りを捧げた。

数年後、ケインの元に依頼が舞い込んでくる。
「ケイン。エルフ狩の仕事が入った。おまえの故郷の近くの森だ」
それを聞いて、ケインは立ち上がる。
「帰らなきゃ……」
「おい、仕事は？」
「受けないよ」
「剣士であるおまえの腕を見込んでの依頼だぞ？　報酬だってたっぷり……」
その言葉に、ケインは相棒の胸倉を掴む。
「僕はエルフに手を出さないと決めているのを、おまえも知っているだろ」
「でも、額が……」
「ふざけるな！　とにかく、僕は故郷へ帰る。僕が依頼を受けなければ、他の剣士がやってくるだろう。そいつらを食い止めるんだ」
今や腕の立つ剣士として名が売れてきたケインは、それを聞いて久々の故郷へと戻っていく。
「エラルカ！　エラルカ！」
だが、どんなに森の奥深くでそう叫んでも、エルフの姿はなかった。

269　夏休みのセンチメンタル

「夏休みはどっか行くの？　うちは沖縄行くんだ」
友達の言葉に、私は明るく笑う。
「いいなあ。うちはどこにも行かないよ」
内心やっぱり寂しいけど、親が離婚してお母さんはただでさえ忙しいので、旅行なんか行かないし、もともと私も好きじゃないからいいんだ。我慢することには慣れてる。
「そうなんだ。前半はいるから、一緒に宿題しようよ」
「うん。今年は早めにやっちゃいたいな」
「わかる。でも結局ギリギリになっちゃうんだよね。じゃあ、また連絡するね。バイバーイ」
「バイバイ……」
友達と分かれて、私は小学校最後の夏休みを迎えた。さてこの長い夏休み、どうやって過ごそうか。
そんなことを考えていると、家に着いていた。
「おかえり……って、なんだ、真奈ちゃんか」
私が帰ってくる音で出て来たのは、叔母さんだ。お母さんの妹だが、もともとお母さんと仲が良くないし、私も苦手な人。
「ただいま……」
言葉少なめに、私はそう言って自分の部屋へと入っていく。この家には、あとはおじいちゃんとおばあちゃんまでいるけれど、みんな別々に暮らしている。
離婚して実家に戻ってきた私たち家族。お母さんの実家ではあるけれど、私からしてみれば他人の家に間借りしている感じで、どうにも居心地が悪いし勝手が利かないので、夏休み中ずっと部屋にこもるわけにはいかないだろうし、なによりここは冷房もないので暑い。

夏休みに入ると、結局行くところがなくて、友達と図書館や駅ビルなんかで遊ぶ。でも友達も塾や旅行があって、結局一人でいる方が楽な自分もいる。

「図書館も飽きたし、デパートにいるのも限界があるし……」

行きついたところは、大きな公園。空いているベンチで一日中、空想に耽っていると、まるで自分の境遇が馬鹿馬鹿しくなった。

「お父さん！　ボート乗りたい！」

向こうの方で、池のボートをせがむ小さな男の子の姿に、私は悲しく微笑んだ。

「ボート……乗ろうかな」

お父さんを望んでもいないものはいないし、喧嘩の原因となったお父さんに会いたくはない。私は幸せだけど、こういう時はセンチメンタルにもなった。

結局、私は一人でボートに乗るのは惨めすぎると思い、その場を後にした。

背後には、さっきの男の子がお父さんとボートを漕いでいる。その様子を遠くから優しげに見つめているのは、男の子のお母さんだろうか。

「暑い……」

木漏れ日は焼けるように暑いが、吹き抜ける風が余計にありがたく感じる。

「いつか……」

いつかここに……私に家族が出来たらここに来て、一緒にボートを漕ごう。それまでは、たまにはセンチメンタルでいさせて。

270　ラブ・レッスン

家庭教師の先生は思ったよりもイケメンで、思春期真っ只中の私は、ただそれだけでドキドキしている。

「みのりさん。ここの応用問題、もう一度おさらいしようか」

勉強が頭に入らない私に、先生は苦笑してそう言った。

申し訳ない……このままだと先生の成績まで下がってしまうのだろうか。最悪、辞めさせてしまうかもしれない。そうは思っても、先生を意識しすぎて何も頭に入らない。

うろたえている私に、先生は頭をかいて立ち上がった。

「その前に、気分転換しようか。学校でも家でも勉強なんて堅苦しい毎日だろうし、僕とも打ち解けてないから、そりゃあやりづらいよな」

「いえ！　そんな。先生は何も悪くないです。悪いのは私で……」

それを聞いて、先生は怪訝な顔をしてる。

「どうして？　みのりさんだって悪くないでしょ。駄目だよ、自分を悪く言っちゃ」

「違うんです……私、今のままじゃ何も頭に入らなくて……あの、私、先生のこと……」

そう言ったとことで、私の顔の前に先生の顔が間近に迫っていた。

「せ、先生……？」

「僕のこと意識してるの？」

「……はい」

「それで勉強に身が入らないと？」

「ごめん、なさい……」

先生は私から離れると、溜息をもらした。

「そんなことで身が入らないとか言われると、僕はクビになっちゃうよ」

「すみません……」

「先生を代えてもらってもいいんだけど、どうせ僕を好きだと言ってくれるんなら、こっちのレッスンもする？」

その時、先生の唇が私の唇に触れた。あまりに突然のことで、私は茫然とし、何も言えなくなってしまう。

そんな私に、先生はそっと笑う。

「初めて？」

私はこくりと頷いた。ファーストキスを奪われたことに、腹を立てるどころか嬉しさを感じている。

「続きは答えを解いてからね」

アメとムチを与えられ、私は先生の思うがまま……。

２７１　あの日の真実　～横浜米軍機墜落事故～（前書き）

これは１９７７年に横浜市で実際に起こった事件をもとに描きました。脚色はしましたが、事実に基づいた出来事です。

271　あの日の真実　～横浜米軍機墜落事故～

一九七七年九月二七日。神奈川県横浜市緑区（現・青葉区）――宅地造成で新しい家々が立ち並ぶ中に、私たち家族も住んでいました。

いつもと変わらない、静かな日常。それをかき消すかのようなけたたましいまでの轟音が、突如として辺りを包み込みました。轟音がものすごい勢いで近付いてくるのがわかりましたが、もう逃げる暇もなく、気が付けば、辺り一面が火の海に包まれ、私は幼い二人の我が子を抱きかかえ、外へと飛び出したのです。

何が起こったのかわかりませんでした。

あとで聞いた話では、それは米軍のジェット機が、私の家に落ちたということ。パイロットは早々に脱出したので無傷でしたが、すぐに駆けつけた自衛隊はパイロットを収容して帰ってしまい、私たちは近所の住民や、宅地造成工事をしていた人たちによって助け出されたということでした。

「和枝……和枝！」

遠くで夫や父の声が聞こえましたが、私の体は動きませんでした。

一週間以上も視線を彷徨った私は、ようやく目を開け、いの一番に、目の前にいる夫と父に尋ねます。

「裕一郎は……康弘は？」

「……二人は別の病院で頑張っているよ」

「そう……あの子たちも、頑張ってるのね……」

暗く頷く周囲に負けないように、私は子供たちに会うために頑張ろうと思いました。

三歳になる裕一郎、一歳になったばかりの康弘。あの子たちは私の生きる支えです。あの子たちが頑張っているならば、私も頑張ら

ねば、と思うのです。

病院での治療は、口では言い表せないほど過酷なものでした。全身八割もの火傷を負い、失われた皮膚が化膿しないために、硝酸銀の薬浴。全身を刺すような痛みは、死んだほうがましだと思うほどでした。

それでも私が耐えたのは、同じように頑張っている我が子に会うため。そして我が子をもう一度この手で抱くため以外にはありません。

やがて、私のために大量の皮膚移植が必要になりました。家族だけでは皮膚を補いきれないため、「皮膚をください」と異例の見出しで新聞やニュースでも取り上げられ、最終的に千五百人もの申し出があったと聞き、私は本当に心から感謝しました。

「元気になったら、福祉の仕事をして恩返しをしたい」

そう決意し、皮膚を提供してくださった方々のためにも、どんなに辛い治療も頑張らなければと思うようになったのです。

そんな中で、私の生きる支えである子供たちが、事故翌日に亡くなっていたことを、聞かされたのです。

「嘘……嘘よ！　嘘だと言って――！」

涙が涸れるまで泣き続けても、私の子供たちは返ってこない。

裕一郎の最期の言葉は「パパママバイバイ」。康弘は、よく一緒に歌っていたハトポッポの歌を歌いながら亡くなったそうです。

なんてかわいそうなんだろう。怖かったでしょう。熱かったでしょう。痛かったでしょう。苦しかったでしょう。あの子たちのことを考えると、私はめちゃくちゃになりそうでした。

「これから何を支えに生きていけばいいの……」

思えば、二人の様子を聞いても、誰も簡単な返事しかくれなかったのはそういうことだったのだと、今気付きます。でも、黙ってい

た人たちを恨む気はなく、むしろ感謝せねばと思いました。
「……皮膚を提供してくれた人たちのためにも、私の命は無駄には出来ない。あの子たちのぶんも……生きるわ」
やがてそう決意をして、私は少しずつ立ち直ろうと努力することにしました。

でも苛立ちもあれば、憎しみもあります。そして私の知らぬところで始まっていた心理療法によって、私は夫とすれ違い、離婚。看護師さんにまで当り散らすように、私の心はどんどん荒んでいくのがわかりました。
また、不誠実な態度の政府を許すことが出来ず、何度も電話をかけて抗議したりしましたが、そのうち電話も繋がらなくなり、私は病院まで追い出されることになったのです。

半ば強制的に入れられた病院は、精神病患者のみを扱う病院でした。
鉄格子のはめられた病室に、私は怒りもし、絶望もしましたが、献身的に看病してくれる両親のためにも、元気を取り戻さなければという気持ちになります。
「生きる支えはもうない。でも私には、失うものももう何もないわ。元気になりたい。みんなに恩返ししたい」
私の支えは、今も絶えず全国から届く、激励のお手紙に変わっていました。
「ありがとう。元気をくれて……私も頑張ります」

けれどそんな時、私の喉につけられていた、呼吸を補助するためのカニューレが抜かれたのです。
「苦しいから、カニューレを戻してください」
何度そう頼んでも、この病院には呼吸器の専門医師がいないから勝手には戻せないと言われ、戻してはもらえません。

元いた病院の先生を呼ばなければならないらしいのですが、詳しい話が出来ないので、とりあえず父を呼びました。とはいえ父も、この病院から一時間以上離れた場所に住んでいるため、来るのは容易ではありません。

それでも来てくれた父に、私は必死の目で訴えました。

「お父さん。苦しいの……助けて……」

私を見てすぐに病院へ掛け合ってくれましたが、父が話しても埒が明かないようで、そんな中で消灯の時間がきたということで、父は追い出されるように帰されてしまいました。

「苦しい……誰か……助けて……苦しい……」

私の人生はなんだったのか。生きる気力はなくとも、生きなければと思う。両親のために、私を支えてくれた人たちのために、失われた子供のために、生きなければ……生きたい……。

一九八二年一月二十六日、午前一時四十五分。

植物人間状態になった私は、そこで三十一年の生涯を閉じた。

無念でならない。私がどんな悪いことをしたというのだろうか。ただ生きていただけ。ただ平穏な日常を送っていただけ。それはどこも人と違わない。それを突然めちゃくちゃにされ、命より大切な子供を二人とも失った。

そんな私の代わりに、誰か闘ってくれますか。ええ、わかっています。今も各地で起こる同じような米軍の事件に、闘っている人がいるということを。今でも私たちのことを忘れないでくれている人がいるということを。

ああ、ではせめて私は、天国であの子たちを思いきり抱きしめたい。

そして祈るわ。穏やかな空が戻ってくる日を。あんな恐怖のない、

平和な未来を――。

272　魔女

「捕えろ！　魔女狩りだ」
その声に、一人の少女が縄で縛り上げられた。
少女の名は、ローリー。まだ十六歳の少女であるが、容赦なく縄で縛られる。
「やめて！　私が何をしたというのです」
涙を流して懇願するローリーに、数人の女たちが目に映った。
「純情そうなふりをして、よくそんなことが言えるね。私の旦那を寝取ったのは誰なんだい。この子の恋人を誘惑したのは誰なんだい」
「私は何もしていないわ！　私から誘ったわけではないもの」
「魔女め！」
「お願い。私は何もしていない……」
広場で見せしめのように縛りあげられたローリーは、一晩中、女たちに罵られた。
ちょうどその時、馬車が停まった。
「なんの騒ぎだ？」
馬車から顔を覗かせたのは、旅の途中で通りがかった、貴族の青年である。
「魔女狩りのようですね。朝になったら殺されるのでしょうか」
一緒にいた人間がそう言うと、青年は馬車から下りて、その光景を間近で見ようとした。
「まだ少女じゃないか」
「でもれっきとした魔女ですよ。綺麗な顔してるからって、近付かないほうがいい」
青年に向かって、罵っていた町民がそう答える。
「許して……」
もはや力なくそう言ったローリーに、青年は眉を顰めた。
「私が後見人になるから、その子を離してやってくれないか」

青年の言葉に驚いたのは、そこにいた全員である。当人でもあるローリーもまた、その救いの主に顔を上げた。

「金を払ってもいい。これも何かの縁だ。可哀相じゃないか。こんな子供相手によってたかって……」

そう言いながら、青年はローリーに巻かれた縄を切る。

「もう大丈夫だ。私と一緒に来なさい。うちで雇ってあげるよ」

「……ご主人様……」

難を逃れた小犬のように、ローリーは青年を見てそう言った。

「ああ。さあ行こう」

力の入らないローリーを軽々と抱き上げ、青年は馬車へと戻っていく。

青年の腕に抱かれながら、ローリーは不気味な薄ら笑いを浮かべていた。

273　酒の飲み方

大学を出て二年。運良く入った会社だけど、未だ仕事をこなすのが精一杯の俺は、毎日飲んでストレス発散をするくらいしか遊ぶことがない。

「井上。キャバクラ行くか」

先輩がそう誘ってくれた。飲み屋ばかりで、そっち系で飲んだことがない。

「え、僕初めてです」

「そうか、そうか。じゃあ一緒に行こうぜ」

眩いばかりの店内の女性は、本当に輝いて見えた。

「井上。誰にする？」

「僕、そういうのわかんないですよ」

「またまた。ウブなふりすんだもんな。じゃあ、この子とこの子で」

先輩は慣れた様子で、女性を指名していく。こういう店は高いと聞いていたから、僕は内心ひやひやしていた。

「いらっしゃいませー」

やってきた女性は、綺麗なドレスに身を包み、猫なで声で僕に笑いかける。

でも、なんだかいろんな気遣いが心地いいし、悩み相談なんかも聞いてくれて、僕はすっかりこの店の虜となってしまっていた。

「どうよ、井上。初キャバは」

「いやあ、いいっすね。やっぱ可愛い女の子に囲まれて飲む酒は格別っていうか、なんていうか……最近の憧れの職業っていうのも頷けますし」

「だろ。でもおまえ、ハマるなよ」

「大丈夫ですって。安月給ですし。居酒屋で十分です」

そうは言ったものの、その後の僕は、居酒屋よりキャバクラに行

くことのほうが増えていった。お気に入りの女性も出来た。
一人でカウンターで手酌もいいけど、周りにはいないくらいの綺麗な女性と酒を飲むのも楽しいじゃないか。

「よう、新人。キャバクラ行くか」
僕は会社の後輩にそう持ちかけ、渡り歩いた繁華街へと連れていく。この後輩もまた、夜の虜になるかもしれないが、ビジネスマンにも息抜きは必要だろ？

274　秋の風音

濡れた風は、やがて乾いた北風になった。
すっかり赤茶色の景色になっていた並木道は、
小さなつむじ風がカラフルな落ち葉を巻き上げる。
そこらじゅうでダンスしているみたいに、並木道はにぎやかになった。
ああ、今年も秋がやってきた。
秋は私を大人にさせる。
少し隙間風の通る心の中を、暖かな枯葉が包み込み、
長い冬を越せるように、秋は私を大人にさせる。
ああ、今年も秋が過ぎてゆく。
音も立てずに、ひっそりと。
私はまたひとつ、大人になる。

275　ふわり

ふわり、という言葉が一番合っているような小さな風が、すれ違いざまに起こった。

ふと振り返ると、ＯＬさんだろうか。僕よりずっと年上だけど、若い女の人の横顔が一瞬見えた。

ふわり、というように、ほんのり香水みたいなスイーツみたいな甘いいい匂いがして、僕の心がきゅうっとなる。

ふわり、ふわり、ふわり……僕の心も、なんだか雲の上へ行くみたいに軽くなって、心地良い感じがした。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

276 ≠ （ノットイコール）

篠原陽（しのはらよう）、篠原光（しのはらこう）。二人は中学三年生の男子生徒。最近、海外から帰ってきたということで、この学校へ転校してきた。

転校生、帰国子女、そして双子ということで、学校中の話題となった。

「俺、A組だって」

「俺はD。なんだ、一緒じゃないのか」

「離れたいくせに」

仲が良さそうに、二人はそう言って笑い合うと、別々の担任についていった。

それからというもの、二人を一目見ようと、学校中から人が集まるので、二人は必然的に一緒にいることが多く、互いを守っているかのように過ごしている。

「ったく、うるせーな。だから日本の学校なんか嫌だったんだよ」

昼休みの中庭で、陽が言った。

「でも慣れてるだろ。双子ってだけで何処に行っても見世物みたいじゃん」

「まあな。無理もない。同じ顔で同じ声で……」

「ふふ。性格まるで違うのにね」

笑っている二人に、一人の女子が歩いてくる。

「仲がいいのね」

その言葉に、二人はなめるようにその女子を見つめた。

「誰？　あんた」

そう言ったのは陽である。

「私は生徒会長の岩沢です。噂の転校生の様子を見に来ただけ」

「みんな見るだけなのに、話しかけてくる女子は初めてだ」

光が言う。

「そう。何か学校生活で不自由はしていませんか？　何かあったら言ってください」
「なんかあってからじゃ遅いだろ。それに、会長ならみんなに言ってくれない？　目ざわりだって。俺たち、こんなところで二人して飯食ってんだぜ？　ついでに言うと、あんたも目ざわり。受験とかあるんだし、俺たちのこと放っておいてほしいんだけど」
「ちょっと、陽。それは言い過ぎ」
高圧的な態度になった陽を、ストッパーのように光が止める。
「なんだよ、本当のことだろ」
「興味本位で見てくる人なんて、すぐに飽きるから放っておけばいいんだよ」
兄弟喧嘩が始まりそうな二人に、岩沢は一歩前へ出た。
「わかったわ。受験もあるんだし、興味本位でみんなが近付かないよう出来る限りのことはする。だから、あなたたちも早く学校生活に慣れるよう心がけて。私も協力するから」
岩沢の言葉に、陽と光は互いの顔を見合わせる。
「あんたは興味本位じゃないの？」
陽が質問した。岩沢は、少し考えたふりをする。
「興味本位かもね。でも、生徒会長として話しているのは事実よ」
そう言って、岩沢は去っていった。
「光。おまえ、あいつのこと気に入ったの？」
ずっと見つめている光に、陽がからかい気味に尋ねる。
「え？　そんなことないよ……」
「だってあんなことで俺を止めるなんて珍しい。ま、美人だからわからんでもないけど」
「そんなこと言ったら、陽だって同じでしょ？　あんなに初対面で絡むなんて滅多にないもん」
「じゃあ俺たち、恋のライバル？」
「ややこしいなあ」
二人はそう言い合ったところで、もう一度笑った。

「俺たち、鏡だもんな」
「二卵性なのにね」
「そ、ノットイコール」
「目の大きさだって、鼻の形だって、よくみたら全然違うのに」
「同じ人間じゃないもん」
「ノットイコールだね」
「そういうこと」
一緒に生きてきた二人は、一人の少女に恋をしたことで、これから分岐点を迎える――。

277　ギャップな男子

葵は席替えのクジを見つめて茫然としていた。隣の席には不良と呼ばれて恐れられている、荒川が座っている。

そんな荒川が、隣に座った葵を見て睨みつけた。

「隣はおまえか。よろしくな」

思いのほか友好的な言葉が返ってきたが、目は鋭く、高校生とは思えないほどの睨みをきかせている。

「よ、よろしく……」

ビビリながらも、葵はそこに座った。

その夜、葵は母親とともに、出かける支度をしていた。

「お母さん。エプロン持った？」

「ちゃんと入れたわよ。早くしなさい」

「はーい」

葵はそう言って、母親とともに出かけていく。今日から母親が通う料理教室に、葵も習うことになっているのだ。前からせがんでいたこともあり、今日が来るのが楽しみだった。

だがその楽しみは、料理教室の扉を開けた瞬間、奈落の底に突き落とされるような感覚になる。

「あ、あ、荒川君！」

そこにいたのは、隣の席になった不良の荒川である。主婦たちに交じり、ボールを片手になにやら下ごしらえをしている。

「吉田……」

荒川も、驚いた目をしており、二人は固まった。

「ど、どうして荒川くんがここに……」

「料理するからに決まってんだろ。おまえこそなんだよ」

エプロン姿がなんだか可愛らしく、荒川は学校の時とはまるで違って赤くなっている。

「私は今日から……」
「あら、浩司。吉田さんの娘さんと同級生だった？」
そう言ったのは、この料理教室の先生である。
「今日からよろしくね、葵ちゃん。この子、学校で悪さしてない？」
「余計なこと言わなくていいよ、母ちゃん」
恥ずかしそうにしている荒川に、葵は思わず笑ってしまった。
その日、特に荒川と話すこともなかったが、荒川は真面目に料理に取り組んでいたのだった。

次の日。
「吉田。てめえ、昨日のこと誰かに言ったらぶん殴るからな」
席に着くなり、荒川が言う。
「なんで？　べつにいいじゃない」
「嫌に決まってんだろ。俺にもいろいろあんだよ」
「べつにいいけど……いやいや手伝ってるようには見えなかったけど」
「嫌じゃねえし……」
荒川は、昨日のように照れた様子で机に伏せた。
もはや不良という印象はなくなり、怖いという雰囲気もない。
「いいなあ。私、お料理好きだけど、全然うまくならなくて、お母さんと一緒に通うことにしたんだ」
「ふーん。まああの腕じゃ、先が思いやられるけどな」
葵の指には、すでに昨日やってしまった傷に絆創膏が貼られている。
「しょうがないでしょ。でも、これからうまくなるもん。荒川君は、将来、お母さんの後を継いで料理教室やるの？」
「やらねえよ。俺、教えるの下手だし。でも……パティシエになりたいんだ」
平然と夢を語る荒川に、葵は憧れさえ覚えた。
「すごい……すごいね！」

「はあ？　すごかねえよ。ただ単になりたいってだけで……」
「すごいよ。だって私、まだ夢とかないもん。頑張ってね」
「……変なやつ」
「変でもいいもん。パティシエかあ。ケーキ食べたいな」
唐突過ぎる葵の言葉に、荒川は吹き出すように笑う。
「誕生日いつ？　作ってやるよ……」
「本当！？」
次第に距離が縮まっていく二人を、クラスメイトたちは不思議そうに見つめていた。

278　家畜の男

子供の頃、病気がちだった僕は、母の過保護の元に生きてきました。

それから次第に、勉強についていけなくなったり、勉強が嫌いになったり、友達付き合いに失敗したりして、不登校、ニート……。

学歴だけは必要だと母が言って、名前さえ書ければ卒業させてくれる高校に進学し、通信制の大学に通う。たとえこのまま卒業したって、社会になんぞ適応出来ないことくらい、僕にもわかっている。

僕はどんどん病気になっていく。病気がちだった頃なんてとっくに過ぎているのに、まるで母が操っているみたいに、僕は身も心も病気なんだ。

「ごはんよ」

そう言って、母がファーストフードを僕の部屋の前に置く。

まるで僕は家畜だ。人目を避け、母に守られ、このままどうして生きていくんだろう。誰か連れ出して——と思っても、僕には母以外に会う人がいないんだ。

僕は家畜のまま、料理されるのを待っている。

279　出ばな

今日は俺の初デートの日。中二にしてやっと出来た、憧れの同級生と遊園地に行くことになっている。

俺は女子ばりに洗面台の前を陣取り、髪型から眉毛まで、整えることを欠かさない。

「よし、俺ってカッコイイ。自分で惚れ惚れするぜ」

そんなカッコつけた俺に見向きもせず、高校生の姉ちゃんが洗面所に割り込んできた。

「ハイハイ、終わったらさっさと退く」

「ひでーな。俺、どうよ。イケてる？」

歯を磨き出した姉ちゃんは、冷めた目で俺を見てる。

「……」

「なんだよ。感想なしかよ」

「まあ大抵、自分でカッコイイとか思っちゃってる大バカ野郎は、カッコよくないと思ったほうがいい」

格言のように、姉ちゃんはそう言い放った。

「じゃあなんだよ。俺がカッコよくないとでも？」

「あーうざい。それがダメだっての。ほら襟立てない。髪撫でる。背筋伸ばす」

そう言って、姉ちゃんは俺の身だしなみを整えていく。

「じゃあ俺……ダメ？」

「私の彼氏にするんなら不合格。でもま、ガキんちょの初デートにはちょうどいいんじゃない？」

「なんだよ、それ！　バカ姉貴！」

俺はすっかり出ばなをくじかれ、待ち合わせ場所へと向かっていった。自信なんか持てない。

そんな時、すでに来ていた彼女を見て、自分のことなんかどうでもよくなった。

「ごめん、待った？」
「ううん。早く来ちゃって……なんか制服じゃないから、変な感じ」
「あ……変かな、俺のファッション……」
「そんなことないよ。カッコイイ」
「ほ、本当？」
「うん。襟元も髪型も決まってる」
全部、姉ちゃんが直したところじゃん……と思いつつ、俺は姉ちゃんに感謝した。あのまま自分の美学を貫いていたら、やっと射止めた彼女を手放すことになったかもしれない。
「よ、よかった……じゃあ、行こうか」
「うん」
出がけに出ばなをくじかれたものの、俺の初デートは成功に終わった。これから先も、姉ちゃんの言葉は聞いておこうと、内心思っている。

280　忘れられない人

死ぬほど苦しい想いをして別れた彼を忘れるため、彼のいないところで新しい人生をスタートさせた。

新しい街、新しい家、新しい仕事、もう彼への接点はないけれど、別れて三年経った今も、悔しいくらい未練たらたらで、そんな自分に嫌気が差してる。

「吉田さん。本当に合コン行けないんですか？」

後輩の声に、私は苦笑する。

「ごめん。興味ないし、この仕事早く終わらせなきゃ」

「もう。恋しましょうよー」

「いいの。私は仕事に生きるんだから」

そう言って、私はパソコンに向かう。

大好きだった彼と別れてからも、何度か人と付き合ったけれど、どれも長続きしない。もう私には仕事しかないんだと、最近では言い聞かせてる。親ももう諦めたらしく、私に結婚話を持ち掛けたりはしない。

「吉田さん。ちょっといい？」

その時、今度は先輩に呼ばれ、私は立ち上がった。

「はい。なんでしょうか」

「急で悪いんだけど、これからクライアントと新プロジェクトの企画なの。打ち合わせに一緒に出てくれる？部長と出るはずだったんだけど、部長が急用で出られないっていうから」

「わかりました」

こんなことは日常茶飯事。私はすぐに支度をして、先輩について会議室へ向かう。

「新プロジェクトって、イベントのですか」

会議室を軽く掃除し、企画書を見ながら、私は先輩にそう尋ねた。

うちは広告会社で、イベントなんかにも携わっている。
「そう。大通り公園のフェスティバル。結構大きなプロジェクトになるわ」
「この規模じゃそうですね。いろんな出店あるんですね。ステージまで」
「うん。チラシとかはこちらで作るけど、これだけてんこもりだと大変ね」
「そうですね。やりがいはありますけど」
その時、会議室の入口に人影が見えた。
「すみません。フェスティバルの打ち合わせはこちらでよろしいでしょうか」
男性の声に、私は固まった。
「はい、そうです。北村様と沢野様ですね。どうぞ中へ」
先輩がそう言って、お客様を中へと通す。
北村和希――。私の忘れられない元彼である。彼もまた、私を見て驚きながらも、やがて何事もなかったかのように、中へと入って座った。
打ち合わせの内容は覚えていない。だが、業種もまったく違う彼がどうしてここにいるのかと思ったが、彼は企画の責任者だという。
彼は音楽の仕事をしていたので、その関係でイベント業の責任者も頼まれたのだと悟った。

その日、私は家に帰るなり、ポケットに入っていた彼の名刺を見つめた。もう三年も経っている。連絡出来るわけがないし、私に未練があるとも思えない。私は仕事と割り切って彼と付き合おうと決めて、ベッドに寝そべる。
彼と別れたのは、お互いが重荷になっていたから。彼は仕事ばかりで、でも結婚を望まなかった。ただ会えば楽しいというような、子供みたいな関係では満足しなかった。お互い嫌いで別れたわけではないけれど、あのまま一緒にいたら、お互い駄目になっていたん

だと思う。
その時、私の携帯電話が鳴った。知らない番号に、はっとして握りしめていた名刺を見つめる。彼の番号である――。
迷いに迷って、私は電話に出た。
「はい……」
『北村ですけど』
思いのほか、彼は明るい声をしている。きっと彼はもう、私なんかよりずっと吹っ切れているから、そう接しられるんだと思う。
「ああ、うん……」
『今日は驚いたよ。まさかあんなところで会うとは』
「うん。私も……」
『ああ、ごめん。突然電話なんかして……』
乗り気でない私の声に、彼も気付いたんだと思う。
「う、ううん」
『ああ……今度……食事でもしない？　仕事の話もしたいし』
「……仕事の話なら、私は下っ端だから……」
『馬鹿。口実だよ。おまえに会いたいんだ』
彼の言葉に、私は言葉を失った。
「え……」
『俺が吹っ切れてると思う？　それに、こんなところで会えたんだ。運命とか信じてなかったけど、そう思えるよ。もうおまえにはおまえの生活があるんだろうし、新しい男とかもいるのかもしれないけど……会いたいんだ。もう一度……』
「……」
『おい。聞いてる？　切ったのか？』
「……私も……会いたい……」
涙が溢れ出す。それがわかったのか、電話の向こうで大きな音がした。
『イテ！』
「和希？　どうしたの？」

『ああ、大丈夫。ちょっとぶつけただけ……それより、今から会える？　すぐ出るから』

必死な様子の彼に、私は嬉しくて笑った。少し期待してしまう。

「うん……」

それからの私たちのことは……ご想像にお任せします。

ただ、これだけはいえる。この出会いが奇跡だとすれば、それを手放さない勇気が必要だってこと。

281　シーヤの荒野

なぜ……どれだけ問いかけても、答えは出ない。誰も知らない。教えてはくれない。

昨日はいつもと同じように、布団に入って寝たはずだった。会社から帰り、今日は土曜日で休みだから、少し夜更かしをしたくらい。一人暮らしのマンションでは、誰も夜更かしを止めたりはしないから。

でも、ここはどうだ。目が覚めた瞬間、私は吹き抜ける風に愕然とした。目の前には荒野。日本らしい風景でもなく、私は外の地面にただ横たわっているだけだ。

そして、青や赤といった様々な肌色をした、得体の知れない生き物が、私を取り囲んで見つめている。

「なんだ、この出来そこないのような生き物は」

青い生き物が、私を見て言った。日本語ではないのだが、なぜか言葉がわかる。

「ここはどこ……？」

おそるおそる、私は尋ねた。生き物たちは互いに顔を見合わせ、私を見つめる。そんな人間らしいしぐさから、妙なところで親近感さえ芽生えた。

「ここはシーヤだが、おまえは誰だ。どこから来た？」

「シーヤ……国？　星？　私は日本から……地球にある日本にいたの。目が覚めたらここにいたの！」

半狂乱になって、私は目の前の生き物にすがった。

「おかしなことを言う。シーヤは世界だ。おまえは日本という世界から来たのか」

「私の世界には名前がないわ。それは国の名前……私はエリといいます。元の世界に帰りたい！」

「……とりあえず、家に連れて帰ろう。長に判断を仰ぐしかない。

私の名はラハ。ついてきなさい」
ラハと名乗ったのは、最年長と見られる赤い肌色の生き物だ。男女の区別は出来ないけれど、話の通じる相手に、私はほっと胸を撫で下ろした。

それから私は、ラハの家へと連れて行かれた。そこは村のような街のような賑わった場所で、同じような住居と見られる建物が連なっている。
そこで私は長という老人に出会い、すべてを話した。
「話はわかった。この世界以外にも世界があるとは感付いてはいたが、おまえの見た目は我々の出来損ないのような生き物。生きるために虚言癖があるとも限らない」
長の言葉に、私は大きく首を振る。
「なにを！　本当のことを話しただけです！」
「しかし、おまえがどうしてここに来たのかもわからないならば、帰ることも出来まい。もちろん、われわれもその術は知らないし、おまえの言うことをすべて信じられることでもない」
「では……私はどうすればいいのですか？」
「どうせその姿では、長くは生きられまい。この世界に飛ばされたというのならば、おまえが元々持つ何かがそうさせたのかもしれない。よって、解剖してすべての細胞を調べよう」
私は絶望した。
「長く生きられないとはどういうことです？　解剖なんて嫌です！」
「ここは毒の風が吹く。我々の肌が色とりどりで固く覆われているのは、それらに負けない皮膚ということ。おまえの肌では、このシーヤでは生きていかれないのだ。我々の子供でも、たまにそういった出来損ないが生まれる。生後すぐに死んでしまう。おまえが別世界から来たというのなら、死ぬ前の新鮮な時に解剖しなければ」
「ま、待ってください！　一晩……もう一度寝たら、帰れるかもしれない！」

「どのみち今日はもう遅い。牢屋に入れておけ」
長の命令により、私は家の一角にある格子の部屋に入れられた。窓もなく、とても逃げられそうにない。
「これは悪い夢よ……助けて」
私は絶望し、目をつむった。寝て覚めたら元の家にいる。そう信じたい。
でも、物珍しい存在の私を聞きつけて、いろんな人が私を見に来た。まるで見世物のように、私はその目に怯え、結局寝ることが出来なかった。

人が途絶えた朝方、やってきたのは最初に会ったラハだった。
「ひどい人ね！　出してよ」
開口一番、そう言った私の口を、ラハが塞ぐ。
「静かに。出してあげるから」
「え……本当に？」
「本当だ。みんな寝静まったから、今しかない」
ラハはそう言って、本当に私を牢屋から出してくれた。
「でも、このままじゃ捕まって同じことに。とりあえず、エリ……君がいたあの場所に戻ろう」
私はラハに布を被せられ、この世界では珍しい私の肌を隠す。そのまま走って、あの荒野へと連れて行かれた。でも、ここにいても戻れないだろうし、すぐに見つかってしまうだろう。
「やはりここには何もないか。もう少し先に行こう」
ラハの言葉に、私はついて行くしか出来ない。
しばらく進むと、荒野の先に崖が見えた。そこは高く、遥か下にも荒野が広がっている。
「ここを下りるぞ」
「どうして？　こんな高い崖、無理よ」
「でも、ここにいても捕まる。逃げるにしても、崖の下へ降り、遥か荒野を進まなきゃならない。それに、この下には無数の洞窟があ

るんだ。そこは神秘の洞窟と言われている。エリがいた場所の下にも、その洞窟が広がっている。そこに何かあるのかもしれない」

「でも……」

「ここで捕まって殺されるか、逃げるか、どちらか選ぶしかないんだ。私も一緒に行くから」

親切なラハに、私は頷く。今はこの人しか頼れないのだ。

自分の身体にロープを張り、私はラハとともに高い崖の上から下りていく。こんなことはしたことがないが、ラハは慣れているのか、手際よく下りていく。

しばらくして、崖の下についた。同じような荒野が広がる反面、反対側には洞窟の入口がある。入ったら出られなそうな不気味な洞窟だ。

「ここが神秘なの？　怖そうだけど……」

「どちらにしても、人は寄り付かないよ。行こう」

「待って。どうしてそんなに親切にしてくれるの？　それとも、あなたも悪人で、私を殺そうとしているんじゃ……」

急に私が言ったので、ラハは悲しそうな顔をした。

「……私には、あなたの話が嘘だとは思えなかった。可哀想だとも思った。私が連れて行ってあんなことに……だから責任を取りたい」

その言葉を信じ、私はラハとともに洞窟の中へと入っていった。

洞窟は縦横無尽に広がり、どれだけ歩いても先が見えない。

「少し休憩しようか」

疲れた私に、ラハは大きな洞窟の隅に座る。

「ありがとうございます。私のために、いろいろしてくださって……」

気遣ってくれるラハに申し訳なくなり、私は座りながら足で地面をさする。その感覚は現実そのもので、これは夢ではないと認識させられた。

「いいんだ。私は私のためにこうしているのだから。もし帰れなく

ても、一緒にいよう。私もエリを逃がしてしまって、もうあそこには帰れない」

「そんな……ごめんなさい。私のために……」

そう言って、ラハは自分の手首に巻きつけてあった紐のようなものを差し出し、私の手首に巻いた。

「いいんだ。それより、これはお守りのひとつだから、エリにもあげるよ。無事に帰れますように」

「ありがとう。私も何かあげられればいいんだけど……」

私はポケットを探る。寝た時と同じ格好なので、ジャージ姿のままだ。

その時、ズボンのポケットから、指輪が出てきた。そういえば、昨日買ったばかりの指輪で、珍しい石が目を引く。寝る前まで眺めていたものの、失くすといけないからと、無意識にポケットに入れたのだと思う。

「これは、シーヤの石だ！」

ラハの言葉に、私は驚く。

「これは、私の世界で買ったのよ？」

「でも、これはシーヤでも珍しい、魔除けの石だよ。とても高価なんだ」

「オパールの一種かと思ったけど……結構安かったのよ？　でも、それでよければあなたにあげるわ。こちらで高価なものなら、恩返し出来るかしら」

「ああ。持ち帰れば、エリを逃がしたことも許されるかも……」

「それはよかった……」

私はラハに指輪をはめてあげた。

「ありがとう。私たちは友達だ」

「うん、友達」

指輪をしたラハの手と、ラハのお守りが巻かれた私の手が、握手をする。

その時、私は気を失うようにして倒れた。

これは不思議な物語。目を開けると私は自分の部屋にいて、夢心地のような、かといって頭痛のようなものを抱え、部屋を見回す。テレビをつけてみる。これは現実世界だ。

「帰って……きた?」

私の目から、涙が溢れ出る。あれは夢だったと思いたい。そして誰も信じてはくれないだろう。

でも、私の足は汚れており、その手首には物珍しい紐が巻かれていた。

282　愛のバンソーコ

「いったーい」
中学校の教室。掃除の時間に、女子がそんな声を漏らした。指から血が出ている。
「俺、バンソーコあるよ」
そう言ったのは、クラスメイトの勇太だ。
「え、勇太ってば、持ち歩いてるの？」
「うん。癖みたいなもん。はい」
その時、隣のクラスの美保が顔を覗かせた。
「勇太。バンソーコちょうだい」
「なんだ、美保。またやったのかよ」
二人は幼馴染みだが、中学に入ってからはクラスが違う。だが、美保はよく勇太を訪ねてくる。
「転んで膝擦りむいた……」
「またかよ、ガキだな」
「なによ。でも勇太ならバンソーコ持ってると思って」
「おまえのせいだろ。しょっちゅう怪我して血出しやがって」
そう言いながらも、勇太は美保の膝にバンソーコを貼ってやった。よく怪我をする美保に、勇太はバンソーコを持ち歩くのが当たり前になっている。
「お、相変わらず仲睦まじいですなー」
クラスメイトたちが冷やかすので、勇太は真っ赤になって立ち上がる。
だが、美保もまた真っ赤になって、勇太を止めた。
「ありがと、勇太。バンソーコ、補充しといてよね」
「おまえが用意しとけよ。そんで俺にもちゃんと返せよ」
「セコイ！」
去っていく美保が数日後に勇太に渡したのは、大量のバンソーコ

が入った箱である。箱には大きくハートマークが手書きで書かれている。

勇太は指先でそのハートマークに触れると、嬉しそうに微笑んだ。

283　誤メール殺人事件

「安住曜子さんが、亡くなりました」
高校の緊急全校集会で、校長が言った。
私は息が止まる思いを堪え、教室へと戻っていく。
亡くなった安住さんは学年は一緒だけどクラスが違う。一緒になったこともないし、部活も違うので、私とはなんの接点もない。
また、死因はまだ特定されていないらしいが、私はそれを知っていた。殺されたのだ。

『安住を殺した』
そんなメールが私に届いたのは、今日の明け方。
知らないメールアドレスに、私はただのイタズラメールだと思って、忘れることにした。安住さんとは接点もないし、その時の私はまだ何が起こったのかわからなかったから。
「……ホリ。私、相談が……」
私は仲の良いクラスメイトの女子・ホリに、そう言いかけた。
その時、私の携帯電話が震える。
「折本？　電話鳴ってる」
私はそう言われ、電話を開いた。すると、メールが来ている。
『おまえ、二年の折本だな。今朝のメール、誰かに話したらおまえも殺す』
誰かに見られている感覚に陥り、私は辺りを見回した。でも、そう思うと、みんなが怪しく見える。
その時、始業のチャイムが鳴り、私は俯いた。
「折本。相談はあとで聞くね」
「ホリ……あ、ううん。なんてことないの。今度でいいや」
私はそう言って、席に着き、携帯電話を見つめる。
『あなたは誰ですか？』

授業中、私はそんなメールを返してみた。すると、意外に返事が早く届いた。

『詮索するな。次はおまえだ』

怖くてたまらない。殺される日に怯えるなら、誰かに話して楽になりたいとも思う。

「顔色悪いよ、折本」

「うん。ごめん、保健室行ってくる……」

私は青白い顔をしながら、保健室へと向かっていった。

「二年の折本です。気分が悪いんですけど……」

「あら本当。少し休んで」

「ありがとうございます……」

「どこか痛い？」

「いえ……」

「じゃあ、悩み事？」

先生にそう言われ、私はもう我慢出来なくなって涙を流した。

「折本さん。どうしたの？　私でよければ話して」

優しい先生の笑顔に、私は事情を話す。

「そ、それは警察に話したほうがいいんじゃ……」

「いいえ。先生が黙っていてくれれば、私も殺されません。でも私、一人で秘密にしておくことは出来なくて……お願いだから黙っていてください」

「……携帯電話はどこに？」

「教室に置いてきちゃいました……」

「そう。どちらにしても悪い子ね。黙っていろって言ったのに」

突然、先生は背を向けてそう言った。

「……先生？」

「睡眠薬でも飲ませて、あとでじっくり殺そうかしら」

それを聞いて、私は後ずさる。

「せ、先生がやってんですか？　安住さんを……」

「ごめんなさいね。あなたにメールを送ったのは間違いだったのよ。

違う人に送ろうと思っててね」
「だ、誰にですか？」
「まあ、どうせ死んでしまうんだから教えてもいいかもね。尾根先生よ。私と尾根先生の不倫現場を安住さんに目撃されて、仕方がないから殺したの。先日の修学旅行で、二年の生徒全員の連絡先を登録したんだけど、まさかそれが仇になるとは思わなかったわ」
尾根先生は、私のクラスの担任だ。子供もいる既婚者だけど、まさか先生たちがそんな関係とは夢にも思わなかったし、安住さんを殺したのが先生というのも信じられない。
「こ、殺さないで……」
「苦しめたりしないから大丈夫よ」
近づいてくる先生に、私はパニック状態になり、保健室の窓から飛び出した。一階だったので、怪我もしない。
「待ちなさい！」
先生は不意をつかれたらしく、後れを取っている。これならやり過ごせる。
だが、私に気付いて追いかけてきたのは、保険の先生だけではなく、男性教師の尾根先生も増えている。
「助けてー！」
でも、そこは校舎の表側。生徒は教室に入っているし、校庭にも遠い。このまま学校を飛び出せば助けを求められるかもしれないが、今ここには誰もいない。
「待て、折本！」
男の尾根先生に追いつかれるのは簡単だった。
私は羽交い絞めにされ、絶望に涙した。
「助けてください……」
「落ち着け」
「だって、私を殺すんでしょ？」
「おまえは俺の生徒だ。殺すわけないだろ！　今だって、おまえの具合が悪いと聞いて様子を見に行っただけだ」

その時、保険の先生が追いついてきた。尾根先生は私を掴んだまま、振り返る。

「尾根先生……」

「やっぱり、あんたが殺したのか」

尾根先生の言葉に、私は二人を見つめた。

「そうよ。ちょっと狂ったけどね。私は本気だって言ったでしょ」

「やめてくれ！　おまえは最低の人間だよ」

やがて、どこからともなく人が集まり、警察が来て、保険の先生は逮捕された。

保険の先生は尾根先生のことが好きで、誘惑していたらしい。無理にキスしたところを安住さんに見られ、付き合ってくれなければ安住さんを殺すと、逆手に取って尾根先生に迫ったのだと後で知った。保険の先生の一方的な行動だったそうだ。

尾根先生も、それから学校を辞めなければならなくなったけれど、私は先生に守られて、少しは恐怖心を取り除けた気がした。それをすべて拭い去るには、私が教師になって、生徒たちを守れたらと思っている。

284　シンデレラじゃないけど

高校生活はあっという間だった。年を重ねるにつれ、憧れの先輩とか同級生とかいう話も聞かなくなり、恋人が増えていったけれど、私にはそんな相手はいない。相変わらず憧れのクラスメイトを見ているだけで、次のステップに進もうとはしなかったのは、その人にはとっくの昔に恋人がいたから。

「ダンパ、誘わないの？　山口君」

友達が私に向かってそう言ったので、私はちょっとむっとしつつも、苦笑して首を振る。

「答えわかってるのに、誘えないよ」

「彼女持ちでも誘うのはタダだよ？」

「もう。他人事だと思って……」

私の高校は、三年生になるとダンスパーティーがある。最後のビッグイベントだけど、男女同伴がいないと参加出来ない。私には誘う相手もいないし、憧れの山口君を誘う勇気もないから、行かないことを前々から決めていた。

「だって。一緒に行こうよ」

「あんたは彼氏がいるからいいけどさ……私は無理だわ。この顔じゃ、シンデレラにはなれないし」

そう、結局シンデレラだって誰だって、綺麗だから魔法がかかった。私みたいなブサイクに、誰が魔法をかけてくれるというの？

私は卑屈になってその場をやり過ごし、ダンスパーティーのその日を迎えた。

学校の講堂では、着々とダンスパーティーの準備が進められている。私は結局、誰を誘うことも、誰に誘われることもない上に、友達の電話で、更にみじめな思いを辿ることになった。

『ごめん、奈美恵。パンプス持って今からすぐ来て！　壊れちゃっ

て……』

仲のいい友達が、ダンスパーティーで靴を壊したらしく、私を呼び出したのだ。

断りたい気持ちもあったけど、せっかくのダンスパーティー。断ることは出来ず、私はお気に入りのパンプスを持って学校に向かった。

友達にはありがたがられたけれど、同伴がいない私は中に入れるわけでもなく、友達を見送って帰ることになる。

その時、講堂へ続く校舎の隅で座り込む、憧れの山口君の姿が見えた。

「山口君……」

思わず口にした私に、山口君が顔を上げる。

「鈴木じゃん。帰るの？」

顔見知りだからそう返してくれたけど、いつもの元気のいい山口君じゃない。

「うん。私は靴が壊れた友達を助けに来ただけで、もともと参加するつもりもないし……」

「どうして？　ああ、ダンパなんて恥ずかしいだけってやつもいるけど。でも凄いな。わざわざ助けに来るなんて、友達思いなんだな」

「そんなこと……山口君は？　彼女どうしたの？」

そう尋ねると、山口君は押し黙った。

「あ、ごめん……関係ないよね」

「……裏切られたんだ。ダンパは他の男と出たいって」

「え！」

思わず、私はそう叫んだ。すると、山口君はくすりと笑う。

「声、デカイ」

「ご、ごめん……」

遠くでバラードが聞こえる。

すると、山口君が手を差し出した。

「起こして」

「う、うん」
言われるがまま、私は山口君に手を貸した。でも、立ち上がっても、山口君は私を離してくれない。
「山口君？」
「よかったら……一曲踊らない？」
「でも私、こんな恰好……」
そう行ったのは、パーティースタイルとは程遠く、パンツスタイルにカジュアルなTシャツだったからだ。
「ここでいいからさ。俺のことも助けてよ……」
山口君は私の両手を取り、静かに踊り始める。
カチコチになった私。彼女の代わりでもなんでもいい。今だけなのはわかってる。でもこの二人だけの時間は、私の高校生活をすべて薔薇色に変えるほどの効力があった。
感無量で、私の目から涙が溢れる。
「鈴木……ごめん、俺……」
涙でクシャクシャになった顔を隠すように、私は山口君から離れた。
「ごめんね。なんでもないの……」
「鈴木？」
「……好きだったの。で、でも大丈夫。とっくに諦めてるし、山口君が誰を好きかも知ってる。彼女がいることもわかってる。ああもう、何言ってんだろう。言うつもりなんかなかったのに……」
「鈴木」
「ごめん、忘れて。私、どうかしちゃってたの。雰囲気酔いっていうの？　だから……」
「鈴木！」
話を聞かない私に、山口君が声で制止する。
「……ありがとう、鈴木。鈴木が俺のことそんなふうに思っててくれてたなんて知らなかった。俺に彼女がいても好きだって言ってくれて嬉しいよ。でも俺は……やっぱり今は、あいつのことが好きだ

から」
「うん……わかってる」
「ごめんより、ありがとうって言いたい。鈴木のことは、クラスメイトとしてはちゃんと好きだ」
「ありがとう……じゃあ私、行くね」
走り出した私を追いかけてくれるわけではない。わかっているけど、なんだかいろいろな気持ちが取り巻いて、私の目からは涙が止めどなく溢れる。
「好き……好きだった……好き……」
その晩、私はずっと泣き続け、山口君を忘れようと思った。でも、私を気遣って言ってくれた言葉。握り合った手は、最高の思い出になるはず。
「ごめんより、ありがとうって言いたい」
次に彼に会った時は、彼が言ったその言葉を、そのまま返してあげたい。
「ありがとう。好きにならせてくれて……」
その日、私はぐっと大人になったはず。彼という、魔法の力を借りて……。

285　後悔

君を見ているだけでいいんだ。

いや、僕には見ていることしか出来ない。

君に声をかけることも、君に触れることも許されない。

いつか、君を見ることすら出来なくなるのだろうか。

それでも、だから今、君を見続けていたいんだ。

小さな部屋から、人が出てきた。若い男女と小さな女の子。

かつて妻だった彼女は、新しい男とともに、僕の子供を育てている。

ああ、どれだけ悔やんでも悔やみきれない。

なぜ僕は、あれほどまでに荒れ狂い、君に手を上げ、怖い思いをさせたというのか。

どれだけ後悔して謝ったところで、君は許してくれないだろう。

僕はもう、何もしないよ。だからせめて、幸せな姿を見せてくれ。

僕が君たちにしてやれなかった、幸せな家族の姿を。

目に映る家族の形に絶望し、僕は姿を消す。出る幕などないのだ。

286　コバルトブルーの空の下

子供の頃から、武術も勉強もあまり好きではなかった。
大人になるにつれ、恋人だの結婚だの、更にうっとうしいものがまとわりつく。
「セル王子。本日は一般参賀がございます」
その言葉に、僕は無表情のまま頷いた。小国とはいえ王子ともなれば、しがらみからは逃れられない。金髪に青い瞳というだけで、世界メディアがこぞって僕を追っている。
もう、笑顔の形は教え込まれている。感情がなくとも、僕は笑顔を作って手を振った。黄色い歓声も聞こえれば、直接僕に近寄る女性もいるが、僕を本気で好きになる人なんて見たことがない。

その日はパーティーがあり、国の女優やタレント、海外からの来賓が集まった。その相手をするのは僕の役目だが、僕はそれを抜け出した。今日は許嫁候補が来ると知ったからである。直接会えば、面倒なことになる。
でも、警備の関係で城を抜け出すことは出来ないので、僕はこっそりと自分の部屋へ戻り、用意していた服に着替えた。そして長い髪を束ね、サングラスをし、帽子を被り、海外から来たタレントのようにして、パーティー会場のそばにあるテラスへと向かう。ここならば、様子を伺うことは出来るし、部屋にいるよりは安全だ。
その時、テラスにはすでに先客がおり、女性が泣いているのが見えた。
「……どうかしたんですか？」
思わずそう尋ねると、女性は驚いた涙を拭き、立ち上がる。
「いえ、あの……」
「こんな天気のいい日に泣いていたら、空も翳ってきますよ。会場に戻らないんですか？」

持ち前の社交辞令のように、僕はそう言った。
女性は深呼吸するように、空を見つめる。
「本当。コバルトブルーの綺麗な空だわ」
「……なにかあったんですか？」
「いえ……あ、はい」
正直になった女性に、僕は興味が湧いた。
「よければ僕に聞かせてください」
「……今日は親の決めた婚約者に会う日でした。私も決められた結婚は嫌だとも思ったのですが、相手の方は私にはもったいないくらいとても素敵な方ですし、小さな頃から結婚に自由はないと教え込まれていました。でも、相手の方もそんな結婚は嫌だというらしく、会ってもくれません。なんだか、自分が惨めなようで……」
繋がった関係に、僕は女性の肩を抱く。
「相手の人は……セル王子？」
「……どうしてそれを？」
不思議そうな顔をしている女性に、僕は笑ってサングラスを取った。
「それは僕のことだから」
「ああ！」
「傷つけてしまってすみません。でも……あなたのことが知りたくなりました」
僕は変装を解いて、彼女とテラスで語り合った。美しいまでの空が、僕らを結んでくれたのかもしれない。

２８７　苦しみの果てに（前書き）

※　ＢＬ要素を含みます。苦手な方はご注意ください。

287　苦しみの果てに

物心ついた時には、すでに体の異変には気付いていた。

僕の身体は男なのに、僕は男ばかり好きになって、しまいには女性になりたいとまで思った。

子供の頃は、女の子の服を着たいとねだっても、おもしろいからとお母さんはお姉ちゃんの服を僕に着せたりしてみたけど、大人になった今は、そんなこと言い出せはしない。

思春期は辛かった。声は低くなる一方だし、体はどんどん男の身体になっていく。

女性を好きになったこともあるけれど、今ではもう、諦めている。

僕は異常なんだ。僕は病気なんだ。死にたい、とまで思った僕を止めたのは、母親だった。

いつでも僕を一番に理解してくれる母親は、泣きながら僕を抱きしめ、撫でた。

でも、僕はいつでも一人きり。

公表することも出来ず、女として生きたり、体を改造するまでには至らない。

それでも僕は、叶うはずのない恋をする。

大学の先輩。後輩思いで親切で、まぶしいくらいの笑顔に、女子たちも放ってはおかない。

やめろ、触るな。僕は心の中でそう怒鳴りながら、先輩を見ることすら諦める。

でも、気持ちまでは諦められない自分がいた。

「こんなこと言うの、おかしいと思う。でも聞いてくれ。俺はおまえが好きだ」

誰の口から出た言葉なのかわからないほど、突然の言葉に、僕は気を失いそうになって足元をふらつかせた。

目の前にいるのは、僕の大好きな先輩。

先輩、先輩、先輩――。

僕の目から溢れた涙に、先輩は僕を抱きしめる。

夢じゃないだろうか。傷付きたくない僕は、とっさに身構え、悪戯ではないかと警戒した。

でも先輩の目は優しくて、僕らはそこでキスをした。

「嫌、だったか？」

先輩の言葉に、僕は勢いよく首を振る。

「嫌なもんか。僕は……僕のほうが、先輩のこと好きだ」

そう言った僕に、先輩は嬉しそうに微笑む。

「よかった。俺たち、相思相愛だったんだな」

「先輩は、ノンケだと思ってた」

「俺もだよ。でも……好きなのに性別も何もないよな。手放したくない。一緒にいたい。それだけじゃ不満か？」

「ううん。僕のが好きだってば」

僕は初めて、性別も何も関係なく、人間でいられてよかったと思った。

そしてその日、生まれて初めて出来た恋人の報告を、母親にする。

僕の苦労はこれからも続くだろう。また母親を悲しませるかもしれない。

でも、これが僕で、他の誰でもないんだ。

僕が人生を諦めない限り、夢は叶うと信じている。

288　FLASH　～ある休日の風景～

都内某所の高層マンションの一室で、一人の女性がベッドから這い出た。
小澤沙織（おざわさおり）。モデルとして活躍している二十歳の女性である。ついこの最近、カメラマンで親戚でもある、諸星鷹緒（もろほしたかお）と付き合い始めた。
怒涛の忙しさを日々抱える鷹緒と付き合うのは思っていたより大変だったが、こうしてたまにでも休みが合う日は、最高なくらい幸せを感じる。
「ん……沙織？」
未だベッドの上で、目も開けきらない鷹緒がそう言った。
「ここにいるよ。朝ごはんの支度するね。今日、映画見に行く約束でしょ？」
「朝飯なら外でもいいよ」
そう言いながら、鷹緒は沙織の手を引っ張り、もう一度ベッドに引き入れる。
後ろから抱きしめられながら、沙織は真っ赤になって目を閉じた。
「幸せ……」
「俺も」
ぼそっと言った沙織の独り言に、鷹緒がそう反応してくれたので、沙織は嬉しくなって振り向く。
「鷹緒さんが、こんなに甘々だと思わなかった」
「甘々？」
「だって仕事の鬼じゃない」
「仕事のこと考えていいならいいけど？　たまの休みくらい、好きな女のことだけ考えていたいじゃん」
「嬉しい！」
二人は抱き合い、キスをする。
付き合い始めのカップルは、幸せをかみしめていた。

その時、家の電話が鳴り、鷹緒は口を曲げながら、電話に出る。
仕事の電話だった。
「仕事？　行くの？」
電話が終わるなり、沙織が恐る恐るそう尋ねた。
仕事人間である鷹緒の邪魔はしたくないし、今までのデートも散々流れたので、不満はあるが仕方ないという気持ちもある。
そんな沙織を尻目に、鷹緒はベッドから出て立ち上がった。
「そんなビビッた顔すんなよ。途中で事務所に届け物すればいいだけだよ」
「本当？　でも、事務所に行ったら仕事増えるかも……」
「大丈夫だよ。今日はおまえとの休みって決めてんだから。ほら、行くぞ」
鷹緒はベッドの上の沙織を持ち上げ床に下ろすと、もう一度、沙織を抱きしめた。
「いつも待たせてごめんな」
「ううん。いい。今日ちゃんとデートが出来るなら」
「ああ。映画、見に行こう」
「うん」
二人は手をつないだまま、久しぶりのデートへと繰り出していく。
普段会えない分、我慢していた分の溝が、埋められていくような気がした。

289　愛しい人

「ハイ」と言って、当たり前のように、私のお気に入りの紅茶を差し出してくれる。

「あの靴かわいいね」と呟けば、「似ているのがあったよ」って、教えてくれる。

優しい人。愛しい人。

嬉しい時、悲しい時、いつも一緒にいてほしい。

ああ、なんて心地よく、空気のように、当たり前で必要不可欠な人がいるのだろう。

こんなにも自然体でいられる人がここにいる奇跡を、私は今も感じている。

私はあなたに、なにをしてあげられるだろう。

あなたの幸せに、私もなりたい。

290　ずるい女

大学一年の春、僕はあなたに恋をした。

一つ年上のあなたは、面倒見がよく、他の男からも人気がある。

でも、みんな憧れの眼差しだけで、あなたにアタックするやつなんていないだろう。

だってあなたには、同じ年の素敵な恋人がいるのだから。

あきらめられない僕が、おかしいのでしょうか。

僕は金魚のフンのように、あなたから離れずにつきまとうだけ。

あなたは嫌な顔ひとつせず受け入れてはくれるけれど、

どうあがいても、僕はあなたにとって、かわいい後輩でしかないのですね。

僕の気持ち、とっくに気付いているのでしょう？

あなたはときどき、僕を恋のかけひきの道具に使う。

恋人とうまくいかない時、見せつけるように僕を呼び出す。

でも、あなたの心が僕に向いていないことは、誰が見てもわかりますよ。

それでも僕は、あなたと一緒にいたいのです。

淡い夢でも、いつかあなたが僕に振り向いてくれると信じたい。

必然的に、あなたが弱っているところをよく見ます。

あなたは僕に心まで許しはしないけれど、安らぎくらいは感じてくれていますよね？

僕でよければ、腕でも胸でも、いつだってあなたに差し出すことが出来る。

だからもう、泣かないで。

僕まで悲しくなってしまうから。

あなたが微笑みを取り戻すなら、どれだけ弄ばれたっていいよ。

291　マリッジブルー

なにをいまさら、迷うことがあるというの。

あなたが大好きなのに、身を震わせるほど押し寄せる、不安。

「結婚」という二文字が、私にいらぬプレッシャーを与える。

永遠を誓っても、結末は違うかもしれない。

あなたは感情を表に出そうとしないから、私ばかりが好きのようで寂しいの。

馬鹿みたい。もっと自信を持てばいいって、私も思ってる。

でも、私の心は沈んだまま――。

ねえ、せめて抱きしめてください。今すぐに。

何も言わなくていいから、あなたの体温を感じさせてほしい。

そんな時、あなたが差し出したものは、眩しいくらいに輝く石。

プロポーズと一緒に渡せなかったからって、苦しそうに微笑むあなた。

きっと無理したでしょう。

こんなことを望んでいたわけではないけれど、やはり嬉しかった。

私の左手の薬指にはめられた、生まれて初めてのダイヤモンドは、
いつのまにブルーだった気持ちを吹き飛ばして、
その眩いばかりの光で、私の心を包んでいました。

292　姉弟ごっこ

これが高校生とか、大学生とかだったら、また違ったんだと思う。友樹のことなんて興味なかっただろうし、逆に軽くあしらえるような関係になっていたかもしれない。

でも、友樹が私の家に来たのは、私たちが中学三年生になる春休みことだった。

「お世話になります」

少し緊張したように、ボストンバッグを持った友樹が言った。

まだ中学生。同じ年の従兄弟は、母親がおらず、父親が転勤のため、しょっちゅう引っ越しを繰り返していた。

でも中学三年生。受験を迎えた友樹は、高校は転校したくないと言って、一人暮らしをすると決意したそうだが、親戚であるうちで預かり、高校生活を送ることになったのである。

「景子。友樹君を部屋に案内しなさい」

私はそう言われ、友樹を二階に案内する。

友樹の部屋は両親の寝室だったところで、両親はあまり使っていない和室で寝ることに決まった。

「ここが友樹君の部屋」

「うん……」

言葉少なめに、友樹はそう返事をする。

この年で親と離れることなんか想像もしてなかった私は、それだけで友樹が哀れにも思えた。

「気兼ねしなくていいからね。ほら、私のほうが誕生日少し早いし、姉と弟みたいな感じで。ね、友樹君」

「……友樹でいいよ」

やがて言った友樹に、私は顔を赤らめる。

「うん。じゃあ、私も景子で……」

淡い恋心が始まった気がした。
ただ名前を呼び捨てで呼び合うだけで、このシチュエーションだけで、なんだか世界中に私たちしかいないみたいに、世界がピンク色に染まったように、私の心が開いていく。

同じ屋根の下。私たちの関係は微妙に近くて遠くて、お互い奥手だったこともあり、特に進展はなかった。
でも、それから通う同じ中学では、ひやかされるのがちょっと楽しかったり、喧嘩もしたりして、本当の姉弟みたいだった。
私が女子高に行ったため、高校は違ったけれど、高校三年生のあの冬の日を忘れない。

「友樹！　本当なの？　高校卒業したら、この家を出ていくって……」
両親に言われ、私は不安げな顔で友樹の部屋を訪れた。
「うるさいなあ。本当だよ」
「どうして！　ずっとここにいていいんだよ」
「そうはいかないだろ。おじさんもおばさんも、本心でそう言ってくれてるのはわかってる。でも、ここは俺の家じゃないし、大学ならもう大人だろ」
「やだ……やだよ」
涙を流す私に、友樹はため息をつく。
「だから景子には知らせたくなかったんだよ。おまえ、いつも泣いてばっかで、最終的に俺が折れるんじゃん」
「じゃあ友樹が折れるまで泣き続けるもん」
「泣くなんて卑怯だ。俺を困らせるなよ」
「友樹なんて、困ればいいんだよ……」
その時、友樹が私にキスをした。
生まれて初めてのキス。私は何が起こったのかわからなくて、一瞬のうちに泣くのをやめた。

「ず、ずるい……」
やっと言葉が出た私に、友樹は悲しそうに微笑む。
「お返し」
「……行っちゃやだよ……」
それでもそう言った私を、友樹はそっと抱きしめた。
「行くよ。俺……」
「どうして……」
「……景子が好きだよ。おまえは？」
「……好き」
突然の告白。でも、私の想いを、きっと友樹は前から知ってただろう。
「よかった。じゃあ俺たち、両想いだな」
「両想いなのに行くの？」
「行くってば。ここじゃあもう限界。おまえと姉弟ごっこはもう辛い」
「それって……」
「いつでも来いよ。ここから歩いて三分」
「ええ！　そんなに近いの？」
私は拍子抜けして、床にへたれこんだ。
「ちゃんと話を聞いてから来ない、おまえが悪いんだよ」
「だって……」
「好きだよ、景子」
「好きだよ……友樹」
私たちはもう一度キスをした。

友樹は家を出て行ったけど、私はまるで通い妻のように、今までの同居生活と変わらない生活を送っている。
そして私たちの心の距離は、どんどん縮まっていく。

293　気になるあいつ

（今日もあいつは遅刻か……）

私は隣の席を見つめて、そう思った。

ふと窓の外を見ると、遅刻だというのに、余裕の歩調であいつが歩いてくるのが見える。

でも、私にはわかってる。もう授業が始まっているから、あいつはこの時間に教室には来ない。窓際でかつ隣の席だから、気付いたこと。

休み時間になって、あいつはやっと教室に入ってきて、隣の席に座った。

「どこにいるの？」

ふと思った疑問を口にした私に、あいつは怪訝な顔をする。

「は？」

「あ……三十分前には来てたでしょ？　知ってるんだから」

そう言った私に、あいつは憎たらしく微笑む。

「ひみつ」

そう返され、私は息を吐いた。

まあ、そこまで仲のいい関係じゃない。でも、ちょっと不良で、でもとっつきにくくもないあいつに、私はどんどん惹かれてる。

「二時限目、何だっけ」

「現国」

あいつがそう言ったので、私はとっさに答えた。

すると、あいつは立ち上がる。

「え、どこ行くの？」

「腹いてえ。保健室行くわ」

止める暇もなく、出て行ったあいつ。ふと、あいつの椅子の近くに、ラッピングされたプレゼントのようなものが落ちていたのに気

付いた。
「なんだろう、これ……」
小さな箱状のものは、明らかにプレゼントだ。
「プレゼント……」
誰にあげるつもりなんだろう。あいつの好きな人って誰だろう。少なくとも、私じゃない。あいつのこと、何も知らないから……。
（やばい。どんどん気になるよ……）
私は人知れず真っ赤になって、火照った顔を覚ますように、窓の外を見つめた。
すると、あいつの後ろ姿が見える。あのまま学校を出ていくつもり？
どんどん気になっていく。私の恋が始まる。

２９４　顔文字小説（前書き）

縦書きでは辛いと思いますが……横文字ならではの作品です。

294　顔文字小説

―。っω―）・・。ｏｏ○

「ふあぁ。ねむい……」

（。・∀・）ノ゛

「おっはよ♪」

（ｏ´―、ｏ）

「あ、おはよ……」

（＊´－ω・`）？

「どした？　元気ない

ね」

「どした？　元気ない

ｉｌ――ｌｉ（つД―。）ｉｌ――ｌｉ

「うっ……ううっ……」

Σ（゜ロ゜；）！！

「え！　どうしたの？」

。・。。（ノД`）

「じ、じつは……」

、（、　。д。、、ノ）

「うんうん、じつは？」

（Ｐд､　ｑ。）

「彼氏と別れたー！」

―（・・、）

「そ、そんな……」

（　；∀；）

「もうダメ……悲しすぎる」

（、―、。）

「わかるよ……私も悲しくなってきた」

（　Ｔ―Ｔ）　（Ｔ―Ｔ　）

「二人して……うわーん！」

（っ、・ω・、）っ

ちゃ！」

「でも、元気出さなく

（ｏ゛д゛ｏ）＝３

…」

「はぁ……そうだね…

／（＞０＜）／

「ファイトォー！」

（＊、∀、）

きた」

「ありがと。元気出て

♪（ｏ゛・ω・）人（・ω・、ｏ）♪〃

しでいようね」

「うちらはずっと仲良

295　ヒーローとワル

空いたコンビニの店内、少年がキョロキョロと辺りを見回し、チューインガムをポケットにねじ込んだ。
そして、慣れたように店を後にする。
「ちょっと待ちな」
すかさず呼び止められ、少年は振り向きもせずに逃げ出そうとしたが、すでに肩をがっちりと捕まれ、身動きが出来ない。
「運が良かったな、少年。俺が警察だったら、おまえなんか鉄格子直行だ」
そう言ったのは、中年の男性だ。見たところ警察には見えず、普通の客だったようだ。
「離せよ！」
「ごめんなさいは？」
「あんた誰だよ！」
「俺は一市民だが？」
「コンビニのやつでもないのかよ」
「じゃあコンビニのやつに謝ってこい」
「離せって言ってるだろ！」
悪びれた様子の少年に、男はゴツンと少年の頭に拳骨を振り下ろした。
「イッテエ……」
「当たり前だろ。俺らの時代なんか、木に逆さ吊りが当たり前だったが……今は虐待だなんだ言われるだろうな。まったく嫌な時代だぜ。きっとおまえも甘ちゃんな親がいるんだろうが、俺の目の黒いうちじゃ、そんなことは許さねえ。二度と来るんじゃねえ！」
「言われなくても、二度と来るか！」
少年はそう言って、盗ったガムを投げつけ、走り去っていった。
「チッ。最近のガキは……」

男はそう言って、そのガムを一枚頬張った。
「お客さん。会計！」
「はっ。すみません、つい……」
「助けてくれたことには感謝してますけどね。あんたも少年と同じ犯罪者になりたいんですか」
「本当、すみません」
男は思わず食べてしまったガムの代金を払い、コンビニを後にした。
「ヒーローも大変だなあ」
少し間の抜けたヒーローだが、男はこれからも戦い続けるだろう。

296　春夏秋冬

あの春、君と出会った。
あの夏、君とキスした。
あの秋、君と結ばれた。
あの冬、君と暮らした。

そうしていつしか季節が巡り、思い出は色褪せないまま、僕たちは過ごしたね。
決して平坦な道でもなく、時には喧嘩もしたけれど、
振り返ってみれば、順調な人生であったと思う。

あの年の季節がこのままずっと続きますように。
五十年経った今も、僕はそう願っています。
春夏秋冬、これから先の人生もずっと、君と一緒に見ていたいのです。

297　新・北風と太陽

「北風と太陽」という童話はご存じだろうか。かの有名なイソップ童話に収録された有名なお話のひとつ。

「僕はどんなものでも吹き飛ばせるよ。世界で一番強いのは僕だ」
北風が言いました。
「確かに君は強いけれど、世界で一番というのはどうかな」
太陽が言いました。
「じゃあ、力比べをしようじゃないか。あそこを歩いている旅人の上着を脱がせたほうが勝ちだよ」
「わかった。じゃあ僕もやってみよう」
まずは北風が、旅人に息を吹きかけました。
しかし旅人は、あまりの寒さに上着を頑なに脱ごうとしません。
「じゃあ、今度は僕の番だね」
今度は太陽が、ぽかぽかと旅人を照らしました。
すると旅人は、暑くなって上着を脱ぎました。

というようなお話。
さてこの童話、どこでも北風が悪者のように描かれていますが、果たしてそのお話が、実は太陽から仕掛けられたお話だったら……
この物語は、そんな新たなお話。

「北風君。このところ僕がいなくなったら、世界は滅びてしまうだろう。世界で一番強いのは僕だ」
太陽が言いました、
「確かに太陽君は大きくて強い。でも、世界で一番というのはどう

かな」
北風が言いました。
「じゃあ、力比べをしようじゃないか。あそこにを歩いている旅人の上着を脱がせたほうが勝ちだよ」
「わかった。じゃあ僕もやってみよう」
まずは太陽が、ぽかぽかと旅人を照らしました。
しかし、厚い雲に覆われた今日では、太陽の光も熱も届きません。
「じゃあ、今度は僕の番だね」
今度は北風が、空に向かって息を吹きかけました。
すると、厚い雲は嘘のように晴れ、太陽が顔を覗かせます。
辺りはすっかり暖かくなり、旅人は上着を脱ぎました。
「どちらが強いという話は馬鹿馬鹿しい。僕たちが力を合わせれば、世界はもっとよくなるだろう」
これもまた教訓、のはなし。

298　君が背負うもの

とある定時制高校の教室。このクラスのほとんどは十代だが、その中に一人、二十歳の女性がいる。

一ノ瀬蒼（いちのせあお）。クラスメイトとも必要以上に話さない彼女は、いつも冷めた目で授業を受けていた。

そんな蒼を、一人の少年が見つめている。

「あ……」

授業が終わり、足早に去っていく蒼に、少年は思わずそう言ったが、その声は蒼に届いてはいない。

「周。また一ノ瀬さん見てたのかよ」

そう言われ、少年は我に返って振り返った。

岡田周（おかだしゅう）は、中学を卒業したばかりの十五歳の少年だ。同じ年の女子では決して見ることが出来ない雰囲気を醸し出す蒼が、最近気になり始めている。

「違うよ」

「またまたー」

からかっているのは、小学校からの付き合いである、悪友の篤史（あつし）だ。二人はやんちゃ盛りで、中学もろくに行っておらず、高校にも行く気はなかったのだが、親に言いくるめられ、なんとか定時制高校に入れた。だが、もともと勉強が好きではないため、やる気はない。

「やめとけよ、あんな女。俺らからしたら年増だし、おまえだって知ってるだろ。噂」

一ノ瀬蒼は売春をしている――。そんな噂が飛び交ったのは、入学して間もなくのこと。

「ただの噂に振り回されるのは馬鹿の証拠だ。大体、援交だのなんだので、まわりでやってるやつも多いんじゃねえの？」

「じゃあ、一ノ瀬さんが援交してもいいんだ？」

「嫌だけど……もししてるなら、何か事情が……」
「事情？　他のやってるやつらに事情があるなら、金欲しさだけだろ。本当に困ってやってるやつなんて、聞いたことねえ」
そんな話をしながら教室から出ようとした二人は、出入口で蒼と鉢合わせた。
「あ、あわわ……」
篤史が思わずどもる。周もまた、えげつない話を聞かれたと、バツが悪そうに俯いた。
だが、目の前の蒼は表情一つ変えず、最後に静かに微笑んだ。
「べつに否定しないから……好きに話していいよ」
固まる二人を横切って、蒼は机の中に置き忘れたと思われる筆箱を取り、またすぐに教室を出て行った。
「……篤史。一人で帰って」
ふと我に返り、周はそう言って、蒼を追いかけた。

「何か用？」
昇降口で、蒼が周にそう尋ねる。だが周は、言葉が出ない。
「……用がないなら、行くから」
「男のところに？」
「……あんたに関係ないと思うけど」
「関係なくない。クラスメイトじゃん」
そう言った周に、蒼は周の顔を覗き込む。
「キミ、クラス委員か何かだっけ？」
「それは違うけど……」
「じゃあ放っといて。急いでるから」
蒼はそう言って、足早に学校を出て行った。だが、周は諦めず、蒼についていく。
やがて蒼は、とあるファミリーレストランへと入っていった。
「ファミレスで待ち合わせ……？」
だが、すぐに蒼は、ファミレスの制服を着て店内にいるのが見え、

アルバイトなのだと気付く。
「なんだ。バイトならバイトって、言えばいいのに……」
周は安心したように、そのまま家に帰ろうと思ったが、思い直して店内へと入っていった。
「キミ……」
驚いた顔で見つめる蒼に、周は俯く。
「岡田周。クラスメイトの名前くらい憶えてくれよ」
そんな周に、蒼は苦笑する。
「周でしょ？　篤史っていう子といつも一緒にいる……」
「覚えててくれた？」
「そりゃあね。お好きな席へどうぞ」
深夜に近く、割と空いている店内に、周は通された。
「ご注文は？」
「……どうして否定しなかったの？」
そう尋ねる周に、蒼は一瞬考えた素振りを見せる。
「面倒だったから」
「面倒って……それで変な噂立って、変な目で見られて、それでいいのかよ」
「べつにいいよ。噂は噂でしかないもん。私がしっかりしていればいいだけだし、そんなことにかまっている暇ないんだ」
「どうして……」
「そうね、ここまで来たからには教えようか。私、おなかに赤ちゃんがいるの」
その答えに、周は驚きに固まった。そんな周を見て、蒼は苦笑する。
「え……」
「高校辞めちゃって、でも勉強したいから今の学校に入ったけど、赤ちゃんが出来たから、またお休み。でも高校は卒業したいし、夢もあるし、何年かかっても通う気ではいるのよ」
「……結婚してるの？」

「その予定はないけど……だから、今のうちに働いて、強くたくましく生きるつもり。でも売春なんてしないから、安心して」

それは周の世界にはまだ考えられないことで、どれだけ大変なことなのだろうと感じた。

だが、目の前の蒼はまっすぐに周を見つめ、頼もしく立っている。

次の日の蒼も、いつもと変わらず、冷めた目で学校に来ていた。

だが、その内に秘める情熱や信念を、周だけが知っている。あまり人と交わらないようにしているのは、休学がわかっているかもしれない。そんな深読みをする度に、胸がしめつけられるようだった。

その日、周は蒼にそっとノートの切れ端を渡した。

『一ノ瀬蒼さんへ』

面と向かってじゃ、話すことも暇もないと思って、これを書きました。

一ノ瀬さんから見たら、俺はまだ子供かもしれないけど、昨日話してくれたこと、俺は感動したんだと思う。

一緒に卒業は出来ないかもしれないけど、一ノ瀬さんを応援します。

一人で子供を産もうとしているあんたはスゴイよ！　エライよ！

俺も一ノ瀬さんみたいな大人になりたいと思う、今日この頃……

「噂は噂でしかない」カッチョイイお言葉に、一ノ瀬さんファンになりました！

学校では、今後もヨロシク！

稚拙だったが微笑ましい文面に、思わず蒼が笑う。
そんな素の蒼を見たのは初めてで、周は嬉しさを感じた。
もっとその笑顔が見たい――周の恋が動き始める。

299　紅一点?!

「頼む、夏生！　高校はここに行ってくれ！」
十五歳になった中三の夏、馬鹿でお気楽な父親が、高校の資料を見せて言った。目の前には、男子校の文字。
「あ、あの……俺、一応、女なんですけど」
扇風機の風だけで、汗がだらだら流れてくる。何を考えているんだ、この親は。
「そんなことはわかってる。だけどな、春樹が行ってる高校なら、授業料が家族割引になるんだってよ」
「それだけでそんなことさせる気?!」
「じゃあおまえ、特待生にでもなれる頭持ってんのか?」
「そりゃあないけど……そんなの行くくらいなら、高校なんて行かないわい」
「馬鹿野郎。高校は出ておいて損はない。大丈夫だ。おまえはどこからみても男だから。バレるこたあない」
「こ、この、バカ親―!!!」
兄三人を抱えるこの家は、俺が生まれて間もなく母親が病気で亡くなり、完全に男家庭で生きてきたおかげで、俺は女言葉も知らずに生きてきた。
そして高一の春、めでたく（?）男子校に入学したのである。

「夏生。入学早々、遅刻する気かよ」
一つ上の兄貴、春樹が言う。
「春兄が男子校なんかに通うから、俺がこんな目に……」
「べつにいーじゃん。俺こう見えて、おまえが女だなんて思ったこと一度もねえよ?」
「嬉しかねえし！　ったく親父のやつ、何でもかんでも勝手に決めやがって」

「仕方ないだろ。うちはドのつく貧乏なんだし、まあ俺だっているんだし、高校生活なんて、あっちゅーまよ」
「簡単に言うね。春兄だって、来年には卒業でしょ。水泳は？　修学旅行でお風呂は？　どうすんのさ！」
俺はパニック状態でいながらも、確実に春兄に学校まで連れてこられていた。
「大丈夫だよ。水泳の授業なんてあんまりないし、腹痛で休めばいいだろ。胸はつるぺただから普段は大丈夫だし。いいじゃん。逆ハーレムってことで」
「そんなこと思えるか！」
「言っとくけど、絶対にバレるなよ。バレたら俺まで退学になるからな。じゃあな。講堂そっちだから」
春兄は俺をおいて、そのまま校舎へと入って行ってしまった。
「ひっどー！」
俺は泣きそうになりながらも、講堂へ向かう。
ムンムンと漂う男の匂いが、クラッと目眩を引き起こす。
「おっと……なんだよ。大丈夫かよ？」
その時、俺を支えてくれた一人の男子がいた。
「あ、うん、ありがとう……」
「入学早々倒れるなんて、軟弱だな」
男子はそう言って、クラス別の席に着く。同じクラスだ……。
俺はなんだかドキドキしながら、その男子の隣へと座った。
「なんだ。同じクラス？」
「う、うん。よろしく……」
少し低めの声をわざと出して、俺は答える。
「ああ」
言葉少なめに返事した彼に、俺は少し嬉しくなった。
ちょっとこの学校、いいかも……そう思ったけど、俺の高校生活が前途多難であることは、間違いない――。

「ねえ。あのブランド、新作バッグ出たんだって」
友人の指先を、博子がふと見つめる。桁外れの値段に、博子は首を振った。
「あんなのいらないよ。どうせすぐ新しい物が出て、みんなそっちに行っちゃうんだから。中古で十分」
「博子。あんた変ったわね。前は中古だなんて気持ち悪いとか言ってたじゃない。古着も着れないし、新品じゃなきゃ嫌だって」
友人に言われ、博子はふと気付かされた。
「そういえば、そうだったね……でも、もう何年も前の話じゃない。私だって堅実な大人になってってことよ」
「人は男で変わるもんねえ」
その言葉に、博子は悲しく微笑む。
確かに、昔は派手に遊んでいた博子も、一人の恋人によってずいぶんと変えられた気がする。
（ブランドバッグなんか持って、何が幸せだ？　そんな金があるなら、美味しいもの食べたっていいし、服だって安くてもコーディネート次第だろ）
そう言った彼の言葉を思い出し、博子は笑った。
数個年上の彼は、それだけでもう大人の男性といった様子で、今まで付き合ってきた誰とも違う魅力があったのだが、数週間前に、些細なことで喧嘩をして別れている。
今日はその傷心を癒すために、友人と買い物に来たのだが、未だ染みついている彼の言葉や行動に、もう笑うしかない。
「なあに？　思い出し笑いなんかしちゃって」
「なんでもない……でも、あなた色に染めて、なんて言葉があるけど、こうしてみると私、本当に染められてた気がする」
「相思相愛だったもんね。なんで別れちゃったの……って、禁句だ

ね」
「……先が見えなくなったんだ。ただ一緒にいるだけで満足する年齢でもないし。でも、ありがとう。ショッピングして、ちょっと元気になった」
まだ空元気だったが、博子はそう言って笑う。友人もまた笑った。
「少しでも元気出してくれたならよかったわ」
「うん。早く忘れられればいい……あの人に染められたんなら、元の白に戻さなくちゃね」
「戻るのかしら？」
「ホワイト（修正液）になるわ」
「あははは」
思い出は消せないだろう。だが博子の心は、確実に前を向いている。

301　鬼

「だるまさんが……転んだ！」
多恵はそう言って振り向いた。
ジャンケンで負けて鬼になったものの、さっきから全然進まない。
「もう。みんなもっと攻めてきてよ。だーるまさんがー転んだ！」
もう一度振り向いても、仲間たちはさっきの場所から動いている気配がない。
「もう、やめやめ。これじゃあいつまでたっても終わらないよ」
そう言って、多恵は仲間たちに近づく。だが、みんな固まったように動かない。
「ミナちゃん、リエちゃん、ほらみんなも、もう終わりだってば」
だが、誰も微動だにせず、まるで固まったように固い。
「なに、これ……ちょっと、みんな！」
恐怖を覚え、多恵は一人一人に触れていった。だが、みんな表情一つかえないまま、まったく動かない。
「誰か……呼ばなくちゃ！」
多恵は、公園から出て行った。
だが、異変はすぐに気付いた。道行く人も何もかも、時が止まったように動かない。人はいるのに、話すら出来ない。
「なんで……みんな固まっちゃったの?!　私だけが動いてるの?」
その時、多恵の目に、同じくおどおどと辺りを見回す少年が見えた。同じマンションに住む、一つ年下の慎吾である。
「シンちゃん」
「多恵ちゃん！　なんか変なんだ！」
「わかってる。私もびっくりして飛び出してきたんだけど……他に誰も動いている人いない？」
「うん、見てない……」
二人は途方に暮れながらも、小走りで住んでいるマンションへと

戻っていく。
「シンちゃんは、どこでなにしてたの？」
「学校で鬼ごっこ。多恵ちゃんは？」
「だるまさんが転んだ……シンちゃん、もしかして……鬼だった？」
「うん。追いかけてたら、突然みんなが固まって動かなくなっちゃったんだ。学校は誰も動いている人がいないよ」
動いている二人の共通点は、鬼の役をやっていたことだけである。
「とりあえず、家に戻ろう」
多恵はそう言って、慎吾と分かれ、自分の家へと戻っていった。
「お母さん！」
そう呼びながら多恵がマンションの部屋に入ると、人の気配はない。
「やっぱり……みんな動かないんだ……」
その時、奥の部屋から物音が聞こえた。
「だ、誰っ？」
恐る恐る奥の部屋を覗くと、そこには洗濯物を畳んでいる母親がいた。
「お、お、お母さん？！」
「ああ、おかえり多恵」
「どうして……お母さん、大丈夫？　無事？」
「なに言ってんの。帰ったんなら、さっさと宿題やっちゃって、予習復習やりなさい。夜は塾もあるでしょ」
「お、鬼だ！」
多恵はそこで、気を失った。

302　キタナイ

無垢な赤ん坊が、私に手を伸ばしてくる。
でも私は、その手を振り払い、外へと飛び出した。
「汚い……」
一瞬触れられた涎まみれの赤ん坊の手を思い出し、私は目を瞑った。
いつからだろう。イキモノがキタナイと思い始めたのは……。
汚いと思うのは、なにも赤ん坊だからではない。私はいつからか極端に人に触れられるのを拒んできた。
「ゆーうこ！」
その時、私は突然肩を叩かれ、驚いて振り向いた。するとそこには、クラスメイトの智美（ともみ）がいる。
「智美……」
知っている顔にほっとしたものの、私は叩かれたばかりの肩を気にして、智美が一瞬見ていない隙に、肩をはらった。
「こんなところでどうしたの？」
智美の言葉に、私は苦笑する。
「あ、ううん。ちょっと買い物に……」
「なにも持たずに？」
「うん……智美は？」
「私は塾。もう嫌になっちゃうよね。受験一色でさあ。じゃあ私、家そこだから。また明日ね」
「うん。おやすみ」
一人になった夜の街を、私は行くあてもなく歩き続ける。
十五歳、いつ補導されてもおかしくないけど、それでもやっぱり家にいたくなかった。
ふと立ち寄ったコンビニに、大人の雑誌を立ち読みしている学生が見えた。

（気持ち悪い……）

そう思ったところで、子供の頃に見てしまった両親の行為について思い出してしまった。仲はよかったと思うのだが、その後、両親は離婚。新しい父親が出来たが、私はその人に暴力を受けていた。

そんなことが幾重にも重なり、私は人間が汚く思えるようになったのだが、この異常なまでの潔癖を治すことは出来ていない。

その時、携帯電話が鳴った。出たくなかったが、切れる気配がないので、コンビニを出て電話に出る。

『どこにいるの？　帰ってきなさい』

母である。

「コンビニ……すぐ帰る……」

それだけ返事をして、私は電話を切った。

新しい父親の異常な行動を、最初母は信じようとしなかった。でも発覚し、母は新しい父と別れた。それでも今、更に新しい父親が出来たということは、母は一人では生きていけない人なんだと思い知らされる。妹まで出来て、私の居場所は更になくなっていることに、母は気付かないのか。

「キタナイ……」

赤ん坊に触られた手が、友達に触られた肩が、未だに熱を帯びている。それよりも、私の母親が、私に暴力をした新しい父親が、私を捨てた本当の父親が、世間が……何もかもが醜く汚い。

……いいや、私が一番わかっているのだ。私自身が、一番汚いってことに。

３０３　ぼくのバラ

あの人は、いつも空ばかり見てる。
しがない庭師の僕は、お屋敷のテラスにいる奥様をぼんやりと見つめていた。
「ハリス。手が動いてないぞ」
そう言われ、僕はハッとして、目の前のバラ園を剪定する。
途端、バラのとげが指に刺さり、僕は苦痛に顔を歪めた。
「痛っ！」
その時、僕はまたもハッとして、テラスにいた奥様を見つめた。
奥様はこちらに気付いており、庭師なのにバラにとげを刺された僕に、くすりと笑っている。なんという恥ずかしいことだ。
「すみません、奥様。息子がお見苦しいところを……」
そばにいた僕の父が、僕より先に奥様に謝る。僕も後からお辞儀をした。
「いいのです。庭師とあれど、バラのとげには敵いませんでしょう。ハリス、すぐに手当してもらいなさいな」
「は、はい。ありがとうございます、奥様」
僕の返事を待たず、奥様はまた空を見上げている。
奥様というにはまだ若いその女性は、昨年、旦那様を空の事故で失くした。それから暇があるたびに、空を見上げて旦那様を想っているんだろう。そう思うと、僕の心は痛くなる。

次の日。お屋敷では、旦那様が亡くなられてからあまり行われなかった盛大なパーティーが行われていた。今日は奥様の誕生日なのである。
たくさんのご来賓の中で、奥様は笑顔を見せながらも、時折、空を見つめていた。
庭師の僕はもちろんパーティーになど参加出来ないし、奥様に渡

すような高価なプレゼントは変えないから、そんな奥様の様子を、庭先からひっそりと見ていることしか出来ない。

そんな時、奥様がひとり、テラスからバラ園へと下りられてきた。

「イタッ……」

不意にバラに触ろうとして、奥様がお怪我をなされたので、僕は思わず姿を現す。

「ハリス……どこから来たの？」

「突然すみません。少し手入れをしていたもので……手を見せてください」

僕の言葉に、奥様は無言のまま手を差し出す。

透き通るような折れそうな細い指先に、とげが刺さっている。僕はそれを抜くと、奥様にお辞儀をした。

「僕のような汚い手で申し訳ありません。医務室できちんと消毒していただいてください。また、これからバラ園のバラは、出来るだけとげを取っておくようにいたします」

そう言った僕に、奥様は微笑みをかけられる。

「バラはとげで自らを守っていると聞きました。私がよそ見をしているうちに、バラを傷つけようとしたのかもしれません。とげを取ってしまったら可哀想だわ。そのままで結構よ」

「奥様……かしこまりました。それから遅ればせながら、お誕生日おめでとうございます。ですがあいにく、僕には奥様に見合うだけのプレゼントが用意出来ず、申し訳ございません」

恥を忍んで、僕はそう言った。

すると奥様は、優しい笑顔で首を振る。

「あなたのプレゼントは、このバラ園でしょう？　何日もかけて、この日のために手入れしてくれていたのを知っているわ。ありがとう、ハリス」

「恐れ入ります、奥様……」

「私は馬鹿ね。あの人が亡くなって空ばかり見ていたけれど、地上にはこんなに美しいものがあったのに」

バラ園はキラキラと輝く。その中にいる奥様もまた、それ以上の輝きを見せていた。

「奥様が望まれるならば、このお屋敷じゅうを美しい園に致しましょう」

「ありがとう、ハリス。その頃には私の心も、空から解き放たれるでしょう」

奥様の笑顔のためなら、僕はなんだってするよ。

それに応えてくれるように、花たちも美しく輝いた。

３０４　分岐小説　「告白」

「付き合って！」

クラスメイトからの突然の告白。僕はあまりに突然すぎる目の前の女子に、口をパクパクさせることしか出来ない。

「なによ。勇気出して告白してるってのに、否定も肯定も出来ないわけ？」

「あ、いや、その……突然すぎるっていうか……」

しどろもどろでそう答えながら、僕は女子を見た。彼女は高校に入ってからの知り合いで、一・二年と同じクラスである。特に接点があるわけでもなかったが、なんとなく話すだけの女子。

でも僕はまだ女子と付き合ったことがなかったから、ちょっと嬉しい。

さてどうしたものか。

↓「付き合う」（１へ）

↓「断る」（２へ）

――――――――――――――――――――

――――――――――

１「付き合う」

――――――――――――――――――――

―――――――――――

突然ながらも嬉しい告白に、僕はそっと頷いた。

「ありがとう。嬉しいよ」

「じゃあ、付き合ってくれるの？」

「うん。僕でよかったら……」

「嬉しい！　じゃあとりあえず、握手」

「う、うん」

早速押され気味で少し戸惑ったが、人生初めての彼女に、僕の心も踊る。

「一緒に帰ろう」

その言葉に、僕は一瞬戸惑った。部活があるのだ。

のっけから断って嫌な印象を与えるのも嫌だし、かといって厳しい部活をさぼっては、あとで先輩たちから何を言われるかわからない。

彼女をとるか、部活をとるか。さて、どうしたものか……。

↓　「一緒に帰る」（3へ）

↓　「一緒に帰らない」（4へ）

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

2「断る」

―――――――――――――――――――――――――――――――

人生初めての告白。僕は舞い上がったものの、冷静になって彼女を見つめた。

彼女は可愛いし、今後好きになる可能性もある。でも、どちらかというと、僕は自分から告白する女子より、一歩引いて待つ女子のほうが好きだ。

「ごめん。嬉しいけど、まだお互いよく知らないのに、その……付き合うとかって、よくわからない」

「じゃあ、駄目ってこと……」

「いや、あんたが駄目ってわけじゃなくて、その、うん……」

その時、彼女の平手が、僕の頬に思い切り飛んだ。

「女の子に恥かかせて！　だったら普段から、思わせぶりな態度すんな！　この優柔不断男―！」

反論する暇もないまま、暴言を吐き、彼女は去って行った。

人生初めての告白。人生初めての女子からの平手。人生初めての彼女にはならなかったけれど、彼女は僕に、人生初めてをいろいろ教えてくれたことになる。

それにしても、頬がヒリヒリと痛んだ。

（バッドエンド）

―――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
3「一緒に帰る」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーー

「じゃあ、一緒に帰ろうか」
僕の言葉に、彼女の顔が明るくなる。素直に可愛いと思った。
「本当？　嬉しい。あ、でも、部活あるんじゃない……？」
「いいよ、今日くらい。朝練も出たし、たまに休んでもいいと思う」
本当は早く帰りたくて、部活をさぼる口実が欲しかったこともある。
「じゃあ、かえ……」
そう言おうとした時、僕は目の前で仁王立ちしている、部活の先輩たちに気が付いた。
「せ、先輩！」
「おまえ……帰るんだって？」
一部始終を聞いていたように、先輩は僕の肩を組んでにやりと笑う。
「か、帰るわけないじゃないですか」
「え？　帰らないの？」
僕の言葉に、彼女が言う。この窮地に、バカ女……と思ったが、悪いのは僕だ。
「か、帰らねえよ、バーカ。おまえが帰れ」
先輩の手前、とっさに悪態をついた僕に、彼女は怒って去っていった。
「えらいな。おまえは可愛い後輩だ。女なんかにうつつを抜かすんじゃねえぞ。うちの部は、不純異性交遊禁止ってことを忘れたか！」
「す、すみません」
「行くぞ」
先輩に引きずられ、僕は部活へと向かわされた。体育会系のうち

の部は、男女交際はもちろん、部活をさぼるなんてもってのほかだということを、一瞬だけど舞い上がって忘れていたのである。
先輩にぼこられなくて済んだが、その日のうちに、彼女から交際キャンセルの連絡が来た。僕の初めての彼女は、あまりにも短い期間で終わってしまったのだ。
（スピード別れエンド）

――

4「一緒に帰らない」

――

僕はバツが悪く、苦い顔をして口を開いた。
「ごめん。一緒に帰りたいのはやまやまなんだけど、部活が……」
そんな僕に、彼女は首を振る。
「ううん。そうだよね」
「本当にごめん。大会も近いし……」
「いいの。わかってる。私のために無理して休んでほしくないし。でも、今度デートしようね」
「うん。大会終わるまでは、いつになるかの保証は出来ないけど、行こう」
「嬉しい」

なんだかこの短時間で本当に心が通じ合ったように、僕らは恋愛というものを始めていた。

「どこに行くか、決めておけよ」

僕の言葉に、彼女は照れながら頷く。そして彼女は僕にキスをしてきた。

生まれて初めてのキス。女の子の顔があまりに近くにあったので、僕は目を瞑ることすら忘れ、その顔をまじまじと見つめてしまう。

「なんか……恥ずかしいね」

そう言った彼女に、今度は僕からキスをした。

「おあいこ」

初々しい笑顔が、僕たち二人から零れる。

「部活、頑張ってね。部活やってる姿を見て、好きになったの」

「ありがとう。なんか元気湧いてきた。頑張るよ」

恋が走り出す。青春の一ページ。

（ハッピーエンド）

３０５　愛の歌は捧げない

俺はギターを鳴らしながら、友達が貸してくれた流行の歌を聞いていた。

「君を離さない。君を守るよ……」

ＣＤに合わせてギターを鳴らしていた俺は、そこで手を止める。

「くだらない……」

同じような歌ばかりだ。どうやって君を守るんだと、俺は苦笑する。

愛だ失恋だと独り言の歌を、俺は歌いたくない。かといって、流行っているのはそういう歌？　俺にとっては雑音じゃないか。

俺は友達から借りたＣＤを早々にデッキから取り出し、持っていた歌謡曲を流す。

古い曲は今でも色褪せないのはなぜか。今のように、誰もがシンガーソングライターじゃなかった。プロの作詞家、プロの作曲家、プロの演奏、生の演奏、そしてプロの歌手。合わせてやっと楽曲だろ。

とはいえ、俺もシンガソングライターの端くれ。愛の歌を作ることもあるけど、独りよがりの曲だけは作らないと決めている。

さて、世間が望む愛の歌を、どうやって料理しようか。

306　ハッピーエンドの定義

郁は中学一年生の女の子。中学生になったものの、メルヘンな思想は抜けない。

「あのアニメよかったよね。やっぱ名作。ハッピーエンド」

「あたしはもうああいうアニメ見ないなあ。だって結局は最後には王子様とお姫様がくっつくんでしょ？」

そう言ったのは、小学校の頃から一緒の江梨子である。

「もう、エリちゃん。なんでそう冷めてるかなあ。いろいろあるのにハッピーエンドなのがいいんじゃない」

「でもありきたりじゃない？　大体、結婚がハッピーエンドなんて、今の時代じゃ夢とかないし」

現実主義の江梨子の後ろから、一人の男子がやってきた。

「俺も江梨子に賛成。郁は夢見がちなんだよ。これだから幸せ家族ちゃんは」

男子の名は、准。彼もまた小学校の頃から一緒だ。

「ちょっと、准。幸せ家族って言ったら、うちだって幸せ家族だけど」

そう言ったのは江梨子だ。准の家は離婚しているが、郁の家も江梨子の家も家庭は円満である。

「でも郁って典型的な幸せ家族って感じ。兄ちゃんと姉ちゃんがいるし、末っ子で可愛がられてんだろ？　その点、江梨子は長女で甘ちゃんじゃないじゃん」

「あんた、人んちの構成よく知ってるわね……」

「とにかく郁は夢見すぎ。中坊にもなってアニメがなんだって？」

からかい気味の准に、郁は口を尖らせる。

「私は大人になってもメルヘン好きだもん。王子様だって待ちたいもん」

その言葉には、さすがの江梨子も呆れがちだ。

「王子様って、あんた……」
「もちろん、本物の王子様じゃないけど、私だけに優しかったり、カッコいい人と結婚したい」
そこまで言える郁に、江梨子は清々しささえ覚えた。
「でもさあ。ハッピーエンドの定義ってなんなの？」
突然、准が言った。
「え？」
「だからさ、江梨子が言うように、結婚がハッピーエンドじゃないだろ。シンデレラや白雪姫のその後が幸せかどうかなんてわかんないじゃん。離婚してるかもしれないし、すぐ死んでるかも」
「あのねえ。そんなこと言ったら、物語にならないでしょ」
「でもそういうことだろ。ようは死ぬ時にハッピーエンドかバッドエンドか決まるんだよ」
准の言葉に、郁は納得していない様子だが、江梨子は頷いた。
「ハッピーエンドなんて、人それぞれってことでしょ。物語の最後が最後じゃないってこと」
「うー。頭こんがらがる」
「だから、郁がハッピーエンドっていうならハッピーエンドってことだよ」
「そっか」
郁と江梨子は納得にしたように笑う。
「でもさ……」
「准！」
まだ言いかけようとする准に、郁と江梨子は同時に止めた。
「な、なんだよ。議論したっていいじゃんか」
「私は結婚してからも、子供が生まれて、子供が成人式を迎えて、夫婦穏やかに暮らして、ずっとハッピーエンドだもん。それが私のハッピーエンドの定義だもん！」
郁の言葉に、江梨子と准は笑顔で顔を見合わせる。
「そういうことにしときましょう」

307　特別な日

「早くしろよ、ジム」
「そっちこそ足どけろよ、トム」
「急げよ。時間がなくなるぞ」
「待ってよ、サム」
三人の少年が、小学校のトイレの窓から逃げ出した。
三人はメルソン家の三兄弟。長男坊のサムを筆頭に、双子のトムとジム。普段は授業をさぼるなんてことはしないのだが、今日は特別な日だ。
「走れ。バスに乗らなきゃならないんだからな」
サムはそう言って、ジムとトムを引き連れて走っていく。やがて乗ったバスに、客たちは不審な目で見ている。
「ぼうずたち、今は学校の時間じゃないのか？」
「学校より大事なこともあるんだ」
「ほう。なんだね？」
「打ち上げさ」
そう言いながら、三兄弟の目はキラキラと輝いている。
そんな三人に、乗客たちもまた笑った。
「そうか、そうか。そうだな。今日は特別な日だ。特別に黙っておいてやるよ。気を付けて行けよ」
「うん」
やがて辿り着いた場所では、大勢の人たちが高揚している。
「あの中には入れない。僕らはここで見物としよう」
観客たちからかなり離れた場所に、三人は立ち止まった。金網が遮っているものの、そこには誰もいない。
サムはラジオをつけ、その場に座った。
「……天気は良好。風も穏やかで、シャトル打ち上げは予定通り行えそうです」

ラジオの声に、三人は歯を見せて笑う。
「イエス！」
三人の兄弟は、宇宙に心奪われていた。あの果てしない空の向こうに飛び立てたら、どれだけ素晴らしいだろう。
「時間だ」
ラジオからも、カウントダウンが始まる。三人は、一緒にカウントダウンを始めた。
「……6、5、4、3、2、1……」
途端、凄まじい轟音とともに、空に向かって煙の竜が上っていく。その先には、夢を乗せたスペースシャトルそのものがあった。
「やった！　打ち上げ成功だ！」
三人の目に焼き付いた打ち上げは、三人の夢をまた強くさせる。
その後、学校に戻った三人は当然怒られたものの、その目はずっと輝いていた。

308　誘惑

「俺を愛しているなら死んでくれ」
夫の言葉に、妻は絶句する。
「なにを言っているの？」
妻は後ずさり、夫から目をそらした。
だが夫は、妻の肩をがっしりと掴む。
「俺のことが好きじゃないのか？」
「……好きじゃないと言えば、私を許してくれるの？」
「いいや。おまえはここで死ぬ運命なんだ」
夫の言葉に、妻は受け入れたように力を抜いた。
「わかったわ。でも、せめて死に方だけは私に選ばせて。そうね……車で崖に突っ込むのはどうかしら」
「派手でいいんじゃないか？　死に方はどうでもいいさ。とにかく今夜だ。今夜おまえは死ぬんだ」
「ええ、いいわ。でも一人で死ぬのは怖いの。離れたところでいいから、見ていてほしい」
「ああ。それなら俺には見届ける義務があるから。そうだな……最初にデートしたあの峠にしよう。俺は展望台の駐車場にいる。あそこなら見えるだろう」
おかしな夫婦の会話だった。だが夫には、妻が言いつけどおりにすることはわかっていた。それは、妻が異常なまでに夫に執着し、愛していたからである。
夫は目を伏せ、近くに置かれたボストンバッグをちらりと見つめた。中には大金が入っているはずで、先程、店に押し入った際に奪ったものだ。
動転しながらも、夫は冷静に妻を見つめ、妻に罪を被せようとした。
妻は異常な愛情で夫の言いなりになることを決意し、着々と準備

を始める。不思議なことに妻が冷静なのは、危険なまでの夫がいつかこんなことを言い出すのではないかとわかっていたからである。

とはいえ、横暴すぎる申し出だが、妻は愛のもとにその申し出を受けた。

「最後に化粧したいの。ちょっとでいいからここを出てくださる？」

妻の申し出に、夫は妻を抱きしめる。

「こんなことになってしまってすまない。すぐに俺もおまえを追いかけるから。愛してるよ」

心にもないことだったが、夫はそう言って、リビングから出て行った。

妻は最後の化粧をし、息をつく。いけない男を愛してしまったのだと、理由も聞かずに死を受け入れる自分に笑った。

「さあ、行きましょうか」

疲れた様子で、妻はひとり車を走らせる。夫は別の車で、同じ峠に向かったはずだ。

その日、確かに峠から車は落ちた。と同時に、展望台の駐車場で、人知れず一台の車が燃えた。

燃えた車には、夫の死体があった。崖を落ちた車からは、見知らぬ男の死体があった。

「私を好きなら死んでほしいの」

数時間前、妻が愛人の男に下した命令――。

消えたのは、大金の入ったバッグのみである。

309　別れの時

きっとあの人は来ないわね。私は惨めな身の上を笑い、うなだれた。

ここはどこだろう。さっきまでの賑やかさはまるでなく、消えたネオンに雨まで降り出したビル街の広場には、私をより惨めに浮かび上がらせる。

「来るまで待ってる」

まるで子供のようにそう言ってみたけれど、ドラマのように相手が現れるわけではない。それでも言わずにはいられなかった。それでも最後まで諦めたくなかった。

その時、私の心とは裏腹に、明るいメロディが携帯電話から流れる。メールだ。

『俺は絶対に行かないから帰れ。さよなら』

傷付きながらも、嬉しい気持ちがあった。どこかで見てくれていたのかもしれない。

「もう、本当に終わりなのね……」

完全な終わりを悟る中にも、まだ諦められない気持ちもある。

キャリアウーマンで名の通った私が、これほどまでに一人の男性に執着することなど、私自身思いもよらなかった。

わかった、帰るわ。でももう少しだけ、好きでいさせて。

土砂降りの中を歩き出すと、一台の車が横切っていった。

３１０　まみあな魔法学校へようこそ！

高校受験を前に、ふと検索して引っかかった、「まみあな魔法学校」の文字。

都市伝説のような形で魔法学校があるとは聞いたことがあるが、こんなにオープンにサイトがあるとは拍子抜けだし、怪しい雰囲気がぷんぷんと漂う。

「高等部もあるのか……って、いくら来年受験でも、こんなとこ受けないし」

私はそう言いつつも、その怪しげなサイトに釘付けになった。まるで映画や絵本の世界である。

「授業内容。魔法薬学、飛行術学、変身術学……呪いまである。こわー！　受験資格は……魔力を持っていること（潜在能力含む）か。じゃあ私は無理ね。両親からして、平々凡々」

そこでサイトを見るのをやめ、私は昼食を食べにリビングへ向かった。

すると、知らない男性のお客さんが来ている。

「あ、すみませんでした……」

私はそう言って、慌ててリビングから出ようとした。

するとその男性が、口を開く。

「君、まみあな魔法学校って知ってるかい？」

「ど、どうしてそれを！」

あまりにタイムリーな話題に、私は飛び上るほど驚いて、その男性を見る。

男性は頭のキレそうな中年男性で、塾の講師によくいるような、冷たい感じがした執事タイプの男性だ。

そんな私の観察をも知るように、男性は微笑む。

「私はこういう者です」

差し出された名刺には、まみあな魔法学校・広報事務と書かれて

いる。
「まみあな魔法学校……」
「君、高校からうちの学校に来ませんか？　今からでもいいのですが、君にも今の学校生活があると思うので」
「ちょ、ちょっと待ってください！　私に魔力なんて少しもありません」
「でも、あなたはうちのホームページを見ましたね？」
男性の言葉に、私は何が何だかわからなくなった。たった今さっきの出来事ではないか。
「見ましたけど……なんでそれを」
「それこそ、魔力の証なんですよ。あのホームページは、誰もが見られるものではない。魔力のある人しか見られないんです」
「嘘です！　あんなすぐに検索に引っかかって……それに、私は魔法学校を探したわけじゃなくて、高校を探してただけです。ただの偶然です」
「偶然はあり得ないんですよ。なんといっても、魔法がかけられていますからね。興味があったらいつでも連絡をください。学校に通えば、あなたの魔力がどの程度なのかもわかるし、鍛えることも出来ますよ。では、失礼」
呆気にとられているうちに、男性は去っていった。
「私に……魔法？」
魔法のせいなのか、高校の行先が決まるからなのか、なぜか両親は手放しで賛成だった。
私はといえば、それから悩みに悩む。だが、何度でも見られる魔法学校のホームページは、なぜだか興味をそそられる。
「まみあな魔法学校……」
それから約一年後。私は謎だらけの学校に入学する――。

311　まみあな魔法学校の裏庭にて

ここは太平洋に浮かぶ陸の孤島。以前は無人島だったその島は、今では全寮制の学校になっている。表向きは施設のような風貌だが、知る人ぞ知る、日本で唯一の魔法学校「まみあな魔法学校」である。

「リク！　どこいくの？」

今日は始業式。講堂に向かう生徒たちと逆方向に走る男子生徒・リクに向かって、クラスメイトの少女・イノリが言う。

「裏庭！」

言葉少なめに走り去るリクが気になって、イノリはリクについていった。

二人はまだ中等部の生徒で体も小さく、広い学校を抜けて裏庭に行くには相当な時間がかかる。

「待って、リク。私が裏庭まで飛ばしてあげる」

イノリの言葉に、リクはやっと立ち止まり、頷いた。

「頼む。でもおまえは来るな」

「どうして？」

「……いろいろあるんだ」

「行く。連れてってくれないなら、飛ばしてあげないし、先生に言うわよ」

脅しのような言葉に折れて、リクは頷く。

「わかったよ」

「じゃあ行くわよ。ロワソグネルカ！」

呪文とともに、一瞬で二人は裏庭にいた。

「さすが優等生。俺はそういうの出来ないから……」

そう言ったリクは、一瞬寂しそうな顔をした。

ここの生徒は、幼い頃から何らかの超能力を持っている。イノリは優等生だけあり、初等部の頃から真面目にプログラムをこなしてきたので、同学年の中では一番魔術が使える生徒だ。

一方のリクは、初めから他の生徒と違った。特になんの力も持たず、なぜこの学校に入ったのかとみんなが不思議に思うほどだったが、その力は意外なところに発揮される。

「クソ！　どこ行ったんだ？」

裏庭に出来た窪みを探しながら、リクはそう言った。

その時、木の陰から不気味な音が聞こえてきた。

「エミリオ！」

リクが走り出すと、木陰には小さなドラゴンがいる。

「ド、ドラゴン！」

あまりの驚きに、イノリはそう叫んだが、リクはそんな祈りを制止する。

「黙って、イノリ。エミリオが怯えるだろ」

「エミリオ……？」

「大丈夫だ、エミリオ。傷薬持ってきたからな」

リクはイノリに目もくれず、血が出たドラゴンの足に傷薬を塗る。ドラゴンも、息を吸ったり吐いたり、まるでリクと会話でもしているかのように見える。

「リクって、本当に生き物と話せるのね……」

イノリの言葉に、リクは笑う。

「あんまり……ここじゃ役に立たないけどね」

リクの能力はそれだった。飛行術や魔術はそれほど持たないが、生まれながらにしてどんな生物とも会話が出来る。

それ以外はほとんど出来ないリクは、他の生徒からからかわれることも多かったが、リクの持つ能力は、先生たちですら持たない能力でもある。

やがてリクは、静かに口を開いた。

「イノリ……このこと、みんなには黙っておいてくれないか」

「……みんな怖がるわ」

「だからだよ。エミリオは、卵の時から俺が育てた。ちゃんとしつけてあるし、人に危害は加えないよ。裏庭でも、この辺りは外れだ

から誰も来ないし、黙っていてくれればいいだけだ」
それを聞いて、イノリはそっとドラゴンに手を出した。
「危ないよ、イノリ。しつけはしてあるけど、他の人間に触れさせたことはないんだ」
「でも、おとなしいわ。いい子ね、エミリオ……」
ドラゴンも少し警戒心を解いたのか、イノリに体を触れさせている。
「ねえ、リク。みんなに言いましょうよ」
突然、イノリがそう言った。
「え？」
「先生は知ってるんでしょう？　ここじゃ先生には隠し事出来ないもの」
「うん……大きくなったら、ドラゴンの授業に差し出すことを条件にね」
「じゃあ、その授業が早まったと思えばいいじゃない。私、ドラゴン見たの初めてよ。本当にいるのね。もっと早くに見ていたら、もっと警戒心もなかったわ。ね？　みんなに言いましょうよ」
リクはエミリオの目を見つめる。それで答えは出たようだ。
「そうだね。まずは先生を説得しなくちゃ」
その日、リクはイノリとともに、校長のもとを訪れた。
「エミリオが……ドラゴンが言いました。もっと他の人間に会ってみたいって。小さい頃から、いつかおまえの授業があるって言い聞かせてきたので、ドラゴンもそう思っています。それが今の時期なのかもしれません」
リクとドラゴンの意志を尊重し、それからドラゴンの授業が取り入れられた。
ドラゴンはというと、すっかり人間に慣れたという――。

３１２　虫の声

ミンミンゼミが、けたたましいほどの叫びをあげている。
あの命も、もうあと何日しかないはずだが、
それでもセミは鳴く。
あの命が、もうあと何日しかないからだろう。

せみしぐれが止んで、ヒグラシが鳴いた。
夏が終わりの時を告げる。

真っ青な空が、いつの間に陰りを見せる。
日は短くなり、秋へと近付いてゆく。

ほたるが横切る頃、遠くで鈴虫の声が聞こえた。
あたりはすっかり涼しい風が吹いている。
ああ、今年も秋がやってきた。

虫の合唱の中、空には花火が打ち上がった。

虫たちが告げる季節は、人間にとっても重要だ。

こんなに風流な思いを、身近に感じることが出来る幸せ。

虫たちよ、どうか来年もその命を受けられますように。

私たちも、その努力をしなければならないのだと、

しいんと静まり返った、不気味な夏が警鐘を鳴らす。

313　MOTHER

「はい、おべんとう」
運動会の時にお母さんが渡してくれたお弁当は、
のちにコンビニ弁当の詰め替えだったと知らされた。

「はい、おくすり」
遠足の時にお母さんが渡してくれた酔い止めは、
のちにラムネ菓子だったと知らされた。

「はい、おまもり」
受験の時にお母さんが渡してくれたお守りは、
のちにお兄ちゃんのお古だったと知らされた。

いくら家が貧乏だからって、いくらお母さんがズボラだからって、
私は愛されていないのだろうか――。

あの日渡された受験のお守りの中に、
お母さん手書きの「必勝」の文字があったことを、私はのちに知
ることになる――。

314　仇

剣士だった父は、国一番の勇者だった。
僕はそんな父の背中を見て育ったから、父のような強い剣士になりたいと、ずっと思っている。
「ヤー！」
やっと父に剣術を学べることにこぎつけた小さな僕は、果敢にも父に勝とうと飛びかかる。でも、当然ながら僕の剣は、父の体にかすりもしない。
「キーラ。おまえには、剣を持ってほしくないんだ」
やがて疲れ果てて倒れた僕に、父はそう言った。
「でも僕は、父上みたいに強い剣士になりたいんだ」
「おまえの気持ちはわかっている。護身術としても、剣術は教えよう。だが決して、人を殺める使い方だけはしてほしくない。いいね？」
「はい、父上」

遠い日の記憶は頭の片隅にあるものの、僕は父の約束に反し、人を殺めようとしている。
「父上……」
僕は手にした剣を見つめた。

「キーラ。この剣は特別に作らせた」
「父上。この剣には刃がありません」
小さな僕は、剣を見てそう言った。見た目は剣だが、刃がないのだ。
「そうだ。だがこれでも、殺そうと思えば人を殺すことが出来るだろう。だが言ったはずだ。おまえには人を殺めてほしくない。だがこれもまた武器だ。気を付けて扱いなさい」

この剣を父からもらってすぐに、父は殺された。王の刺客に。あれだけ国に尽くした父を裏切った王を、僕は許さない。

「行くぞ……」

何年もかけて、城に入る地位を築いた。たった一日だけでいい。あの鉄壁を越えれば、王がいる。

僕は商人の格好で城の門を越え、背中に隠し持っていた剣を取り出した。

「曲者だ！　殺せ！」

そんな声が、後ろから聞こえる。だが僕は、一直線に王の住む宮殿へと走っていった。

そこへ行くまでに、何人倒したことだろう。刃のない剣は、人を殺めてはいないはずだが、それでも気持ちの良いものではなかった。

「王はどこだ！」

僕は叫びながら、王の寝殿へと入り込む。するとベッドの向こうには、震えながら剣を構える王がいる。

「おまえは何者だ」

王が言った。

僕は王を睨みつけながら、王へと静かに向かっていく。

「おまえに殺された者の息子だ」

「なんだと？」

「殺しすぎて誰のことかわからないだろう。僕の父は、おまえを敬愛し、命を懸けて守ってきた男だった」

「その目……おまえは……剣士の息子か？」

父そっくりに成長した僕の素性がわかったように、王はそう言った。

「なぜ殺したか言え！　あれほどまでにおまえに尽くしてきた父を、なぜ殺した！」

剣を突き付けながら、僕はそう言った。あとから追手が入ってきたことにもある。仮にも国王。これで誰にも手が出せない。

首筋に当たった冷たい剣から逃れるように、王は俯いた。
「危険だと思った……おまえの父親は力も強く、心優しく、誰にでも好かれ、私の地位を脅かす存在となっていたからだ」
「だから殺したというのか！　なんて身勝手な言い分だ。父にそんな野心などない！」
「わかっている。だが、危険分子は取り除くことが一番だった。おまえは……父親そっくりの目をしている。おまえの父親が私を殺すことを望むか？　私を許してくれ」
「黙れ！　ああ、父は望まないかもしれない。だが、僕の心は休まらない。父の墓前の前で、おまえが心から謝るまでは」
その時、王が持っていた剣を振りかざした。僕の剣が交わり、カタカタと互いの力がこすれる。
「謝ればいいのならいくらでも謝ろう。だが、私は後悔などしないぞ。部下が私のために命を落とすことなど、当然のことだ」
「なにを！」
僕は王と剣を交え、周りの者は手が出せない状況にあった。
殺したい、殺したくない、僕の中で迷いがあって、それが戦いを長引かせる。
キィン――と大きな音がして、互いに勝負あったように、双方の剣が飛んだ。
「陛下！」
周りの者の声が聞こえ、僕は近くに飛んできた王の剣を取る――と同時に、何本もの剣が僕の首筋に当たった。
僕は身動きが取れないままでいると、王が静かに立ち上がった。
そしてそのそばに突き刺さった僕の剣を取り、王はゆっくりとこちらへ歩いてくる。
「殺すな。そやつは……私が殺す」
形勢逆転といったように、王は薄ら笑いを浮かべて、僕を見下ろした。
「やっぱり……殺しておけばよかった」

僕の言葉に、王は頷く。
「それは私とて同じこと。おまえの父親を殺した夜、家族も捕えたが、おまえだけは見つからなかった」
「……刺客の気配に気づいた父は、僕を床下に隠れるよう命じた。僕はすべてを見ていたんだ！　父上が殺されるところも、刺客が言ってたおまえが命令したということも、すべて聞いていた！　それからあてもなく逃げ続けた。いつかおまえに復讐すると誓ってな」
「それが今日か……長い年月をかけたものだな。だがもう、苦しまなくていい。おまえも父親と同じところへ送ってやる」
「許さない……父上が許しても、僕は絶対におまえを許さない！」
王が僕の剣を振りかざした瞬間、僕もまた唯一動ける右手で、王に剣を突き刺した。
仇討となった形で倒れた僕の目に、王に駆け寄る人の群れが映り、やがて気を失った。

城の外にある死体処理場の死体の山の中で、僕は目を覚ました。
「ああ、そうか……僕の剣で切られたから……」
刃のない僕の剣のおかげで、僕は気を失っただけで助かったというのか。真夜中の死体処理場。僕は静かにその場を去っていく。父上に助けられた……そう思った。
「国王陛下のお葬式はいつだい？」
街に入るとそんな声が聞こえ、僕は胸にぽっかりと空いた穴を、必死に埋めようと目を閉じる。
父上――僕は人を殺めてしまいました。でもこれで、僕の目的は達成できた。父上に助けていただいたこの命を、もう二度と汚したりはしません。
そう誓いながら、僕は果てなき道を歩いてゆく。

315　さわやかな喫煙室

ふうーっと、ため息のように、佐竹は煙を吐く。
昼下がりのオフィスの喫煙室。そこに誰もいないのは、佐竹がこの会社の社長で、社員はみんな仕事中だからだ。
その時、一人の女子社員が喫煙室に入っていった。
「あれ、角野さん」
佐竹は怪訝な顔で、女子社員を見つめる。角野というその女子社員は、最近入った新入社員である。
「あ、社長。今から遅い休憩なんで……一緒に煙草いいですか？」
「いいけど……吸うんだ？　意外だな」
「そうですか？　あの。ライター貸してもらっても……？」
「ああ、どうぞ」
気に留めた様子もなく、佐竹は角野にオイルライターを差し出す。
「ありがとうございます」
角野はそう言って、早速ライターに火をつけようとするも、つかない。
「ごめん、オイル切れかな……」
佐竹は謝りながら、ズボンや背広のポケットを探った。すると、後から後からライターが出てくる。
「社長ってば、すごいですね」
「よく失くすもんだから、いろいろ持ってるんだ。どれでもあげるよ」
「ありがとうございます」
笑いながら、角野は一つの使い捨てライターを手に取った。
そのまま少しぎこちない様子で、角野は持っていた自分の煙草に火をつける。すると、途端に角野がむせ返った。
「大丈夫？」
まるで初めて吸ったかのような様子の角野に、佐竹は苦笑し、そ

う尋ねる。
角野は少し恥ずかしそうに、照れ笑いをした。
「すみません……」
「無理して吸うもんじゃないよ。世の喫煙者は、今や肩身が狭い時代だし」
「む、無理じゃないです。だって、こうでもしないと社長と……」
言いかけて、角野は首を振った。
「な、なんでもないです！」
そんな角野の態度に、佐竹は苦笑する。
「煙草くれる？」
「え？　ええ……」
言われて差し出した角野の煙草を、佐竹は箱ごと取り上げた。
「没収」
「ちょっと、なにするんですか」
「ライターやるから、もう吸うな」
そう言われ、角野は残念そうに俯く。
「……はい」
「代わりに、気が向いたら、俺の煙草に火をつけに来て」
佐竹の言葉に、角野は嬉しそうに微笑んだ。

316　カレセン

三十半ばを過ぎた頃から、両親はもう私に見合いを勧めてこなくなった。

私が頑固だから、言われれば逆のことをしてしまうことがわかっているのだろう。どのみち今の私に、そんな相手はいない。

好きな人はいた。学生時代の先生、会社の上司、なぜか好きになる人は年上ばかり。それも父親世代なのは、私に父親がいないせいだということで、説明はつくだろうか。

子供の頃に両親が離婚し、お母さんに引き取られた私に、新しいお父さんが出来るにはそう時間がかからなかったが、私はどうしても新しいお父さんを父親だと心から認めることは出来ない、嫌な娘だったと思う。

「若菜って、カレセンだよね」

帰り道、同僚の千春が、私に向かってそう言った。

「カレセン……？」

「知らない？　枯れた男が好きな女のこと」

「失礼だなあ」

「でも、そうじゃない？　今までどんだけ惨めな恋愛してきたのよ」

私の恋愛を千春はなんでも知っているから、他人にまで惨めに思われているのだと再認識して、私は目を伏せる。

年上で惹かれる男性は大抵、妻帯者だから、私の恋愛というものは、それはそれは悲惨なものだったのだ。

「私、マゾなのかな……」

「あはは。そうかもね。一筋縄じゃないかないところで恋愛しないで、普通の恋愛しなよ。もう年下だっていいじゃない」

「年下か。話合わないんだよね」

「親くらいの年の人とは合うわけ？」

「知らない世界はあるよね。あと、黙ってまったりしてるだけでい

い感じ」
「あんたまで枯れるわよ」
「しょうがないでしょ。好きでそういう人選んでるわけじゃないもん。好きになれば、年下だって……」
そう言った私の目に、一人の男性が目に入った。
向こうから歩いてくる男性には、見覚えがある。高校時代の先生だ。
「先生……」
「おまえ、若菜か！」
嬉しそうに笑う先生に、私の心は高鳴った。
学生時代は手も届かない先生だったけれど、今はこうして同じ目線で笑い合える。
「はい。お変わりありませんか？」
「お変わりあるよ。学校変わったし、離婚したし」
「え……そうなんですか」
「おまえは？　結婚したのか？」
「いえ、私は……」
「なんだ。おまえはとっとと結婚すると思ってたんだがな」
その時、千春が私の肩を叩いた。
「若菜。先帰るね」
「え？　でも、千春」
「ファイト」
口パクで千春はそう言って、去っていった。
「ごめん。悪いことしたか……」
すまなそうに、先生が言う。
「大丈夫です。でも、よければ少し飲みませんか？」
「ああ、いいね。もう酒飲める年か」
「もう。私はオバチャンですよ」
「じゃあ俺はオジイチャンになっちゃうだろ」
「あはは。そうですね」

私は先生と会ったことで、自分を忘れるくらい高揚していた。
でも、どこかでブレーキをかけている私がいる。離婚したとはいえ、確かに私は惨めで辛い思いをしてきたのだ。
先生――。先生なら、私のこの暗く悪循環な世界に、光を灯すことが出来るかしら。それとも、もう生徒じゃないから、私なんか眼中にない？
私の運命の人はいるのだろうか。でもこの出会いは、恋とかそういうことではなく、私の心を少し軽くしてくれるに違いない。

317　近くて遠い人

マコトなんて、男の子みたいな自分の名前が嫌だった。
馬鹿な頭も、がっちりした肩も、太い足も、みんなコンプレックス。こんなにコンプレックスの塊になったのは、きっといつもあいつがいたから――。
「あれ、マコ。今帰り？」
家に入ろうとしたら、隣の家から出てきた、あいつ――高明（たかあき）は、隣に住む男の子で、ずっと一緒だった。
高明のほうが一つ年上だから、中学に入ると先輩後輩の壁が高くなって、あんまり話すこともなくなったけれど、会えばこうして変わらず話しかけてくるのが、余計につらい。
「うん……」
言葉少なく、私はそう言って家へと入っていった。
部屋の姿見で自分を見つめながら、高明にどう映っていたかをチェックする。
「やっぱ髪伸ばしたいけど、部活が……せめてスカートの丈とか気にしておけばよかった……」
小さい頃から漠然と好きだった高明への思いは、高明が中学に入って離れ離れになった時から、確実な恋心へと変わっていた。
でも、高明は頭もいいしスポーツも得意だし、小さい頃からモテていたから、中学に入るとすぐに彼女も出来ていたし、私の手の届かないところに行ってしまった。
それでも、声をかけてくれる優しい人だし、毎日のように顔を合わせられる距離というのは、嬉しくもあり辛くもある。
「マコ。おーい、マコ。聞こえてんだろ？」
そんな時、ふとそんな声が聞こえて、私はカーテンを開けた。
窓の外には、高明の部屋のバルコニーがある。小さい頃はよくここから行き来していたものだけど、今は私のほうからカーテンすら

開けないようにしている。
「高明……」
「まったく、おまえに会いに行こうとしたのに、話もろくに聞かずに行くなんてひどいやつだな」「私に……？　高明が私になんの用？」
怪訝な顔をしながらも、少し頬を赤く染め、私はそう尋ねた。でも、意識しすぎてまともに顔を見られない。
「……おまえ、俺のこと避けてるだろ。なんで？」
突然の高明の言葉に、私は口をつぐむ。
「……」
「俺、何かした？　したなら謝るよ」
「……優しくしないで。私は、ただの隣に住むだけの人間だし、女にも見られないようなオトコオンナだし、高明に優しくしてもらう資格なんてない！」
そう言って、私はカーテンを閉め、耳を塞いだ。
途端、高明が窓から入ってきた。中学になってから、初めてのことである。
「資格ってなんだよ」
少し怒ったような口調で、高明がそう言った。
私はそんな高明に背を向け、ベッドにしがみついている。
「……言わないとわかんないの？」
「わかんない」
「私……自分が嫌いなの。こうして高明が心配してくれたり、話しかけてくれること、嬉しいのに素直に喜べない。欠陥人間なの。高明につり合う人間になりたいのに、それは無理だから避けるしかないじゃない」
少し沈黙を置いたあと、高明は静かに口を開いた。
「……言ってることわかんないな。おまえが欠陥人間だから、俺を避けるって？　そんなの、俺だって欠陥人間だし」
「違うよ。高明はなんだって出来るじゃない。勉強もスポーツもな

んだって……高明、知ってる？　高明が学校で私に話しかけるたびに、みんなが言うの。なんであいつが高明先輩にひいきされてるんだって。私じゃ駄目なんだよ。高明のこと……好きなのに……」

私はベッドに向かってそう言いながら、真っ赤な顔で涙を流した。

すると、高明が私の肩に手を触れる。

「や、見ないで」

「おまえの泣き顔なんて、散々見慣れてるから気にすんな」

そう言って、無理やり私を高明のほうに向かせると、高明は私を抱きしめた。

一瞬、何が起こったのかわからないけど、なんだかお互い妙にぎこちなく、でも私は高明の腕の中にいる。

「俺はおまえの中じゃ、完璧な人間なの？」

そう言った高明に、私は頷く。

「うん……」

「じゃあ仮に俺が完璧な人間だったとして、それでも欠陥人間じゃないなんて言えると思う？　欠陥なんて、ないやついないよ。完璧だとしたら、それが欠陥だろ。他人がいらなくなるんだから」

「……」

「でも、おまえが言いたいのはそうじゃないだろ？　ごめんな……俺がそばにいるせいで、おまえはずっと比べられてきたんだろうし、そういう嫌な部分も俺より耳にしてきたんだよな。でも俺だって、おまえが好きだよ。じゃなきゃ、学校で話しかけたりもしない。こうして気にしたりもしない」

高明はそう言いながら、ポケットからラッピングされた小さな箱を差し出した。

「え……？」

「誕生日おめでとう」

「なんで急に……中学に入ってからは、お互いあげてなかったのに」

「これを買おうと思って。開けてみて」

促されて、私は小さな箱を開けた。すると中には、指輪が入って

いる。
「ゆ、指輪？」
「前にあげるって約束したろ。この日のためにずっと貯めてきたんだからな」
それは、小さな頃の約束。欲しがる私に、大きくなったら買ってあげると約束してくれた。
「覚えてたの……？　でも、大きくなったらって」
「もう十分大きいだろ。それに俺、来年受験だし。このままどんどん溝が生まれるのも嫌だった」
「……高明の好きと、私の好きは違うよ……」
「じゃあマコは、俺のこと嫌いになった？　だったら突っ返してくれよ。俺も諦めるから」
私の馬鹿な頭では、考えられなくなっていた。どうして高明が私なんかを……今まで避けていた分、知り尽くしていた高明のことがわからなくなる。
「でも、高明……彼女いるじゃない」
やっと出てきた私の言葉に、高明は首を傾げる。
「いないけど？」
「嘘。何度か噂が立ってたの、下級生だって知ってるよ」
「おまえは俺の言葉より、そんな根も葉もない噂のほうを信じるんだ？」
意地悪だけど少し悲しそうな高明に、今度は私のほうから抱きついた。
「なんか変だよ。夢みたい……どうして？　ずっと避けてたのに、どうして……」
「避けてたのはおまえだろ。俺だって焦ってんだよ。おまえ、自分じゃわかってないかもしれないけど、結構モテてるんだぜ？　このまま避けられたら、高校と中学で別になって、ますます会わなくなるだろ。そしたら俺たち、本当に駄目になる。俺はおまえのことが、ずっと好きだった。わかってくれよ」

いつもと違う必死な形相の高明に、私もまた涙を拭って頷いた。
「ごめんね。私、高明のこと、わかっているようで何もわかってなかったんだね……私のほうが好きだとばっかり思ってた……なんだか今も、信じられないの」
「……俺のこと、好き？」
「好きじゃないよ。大好きなの！」
ようやく笑顔が零れ、私の指にはきらめく指輪がはめられた。まだ中学生には早いと思うくらい、本物の指輪だった。

３１８　マダムドラキュラ

もともと私は普通の人間でした。
低血圧で太陽が苦手だったのは子供の頃からでしたが、貴族ということもあり、箱入り娘として隠されるように生きてきたのです。

年頃になったあの日、私は彼と出会いました。
彼はどこからともなく現れ、私を連れ去ったのです。
いいえ。私がついていくことを望んだことにもあります。

一瞬にして落ちた恋は、永遠の愛となった。
私は彼の血を飲み、私は人間ではなくなったのです。

彼が人間ではないということは、割とすぐに打ち明けてくれました。
でも私は、恐怖どころか、彼の魅力に取りつかれていたのです。

あれから三百年――。私は彼と今も生きています。
私たちは、永遠の愛を手に入れたということ。
ああ、今日も人の生き血を追い求めては、私たちは二人だけの世界を生き続けるのです。

319　フェニックス

「おかあを助けてくれ！」
フィヨは何度もそう願いながら、空を見上げて走り回る。
「お願いだ、フェニックス！　姿を見せてくれ。その血を分けてほしいんだ！」
国の守り神であるフェニックスは、不死鳥であり、その血を飲めば永遠の命が手に入ると信じられている。だが、その姿を見た者はいない。
それを知りながらも、フィヨは山を登り続け、ジャングルを歩き続けた。
フィヨの母親は、病に倒れてしまった。それを助けるために、フィヨはフェニックスを追い求めているのである。
「お願いだ、フェニックス！　ちょっとでいいんだ！」
山へ入って数日。もう右も左もわからないほど衰弱し、フィヨは高い崖の上から真っ逆さまに落ちていった。崖があったことすらも知らなかった。
「フェニックス。お願いだよ……」
辛うじて生きていたフィヨは、何度もうわ言を言う中で、やっと目を覚ました。
すると目の前には、見たこともない鳥が、こちらを向いて立っている。
「フェニックス……？」
光り輝くその鳥は、見るからに神々しい。
だがそんな鳥の前で、フィヨはもはや動けないでいた。
「君がフェニックスならば、君の血を分けてほしいんだ……おかあを助けてほしいんだ……」
「その前に、あなたは死んでしまうでしょう」
その時、頭の中で声が聞こえた。

「……フェニックス？　君はしゃべれるのか」
「あなたよりは長生きをしていますから」
「僕よりも……おかあを助けて……」
「……フィヨ。人の命には限りがあるのです。お母さんも、いつかはその命を途絶えるのです。それよりも今、あなたの命は終わろうとしている。それがわからないのですか？　それでもお母さんを助けてほしいというのですか？」
フィヨは静かに笑った。
「おかあは、本当のおかあじゃないんだ。捨てられていた僕を育ててくれた、命の恩人なんだ。僕はまだ、おかあに何も返してない」
今度は鳥が笑った気がした。
「ここで死んだら、お母さんを悲しませるということがわからないのですか？　あなたは元気な姿で、お母さんのそばにいてあげなさい。それが恩を返すというものです」

次に目を覚ました時、フィヨは山のふもとにいた。だが、怪我はない。
「夢……？」
山を見つめながら、フィヨはそう呟く。
その時、村のほうから声が聞こえた。
「フィヨー！　どこだ！」
呼ばれるままに、フィヨは村へと走っていく。
すると村人が、フィヨを見つけて駆け寄った。
「フィヨ！　お母さんが……」
「おかあが？」
聞いたと同時に、フィヨは自分の家へと駆けていく。
家の寝床には、フィヨの母親が病に伏せっている。そのそばには、村の医者もいた。
「おかあ！」
「フィヨ。間に合ってよかった。さっきから苦しんでいるんだ」

医者の言葉に、フィヨは母親の手を握る。
「おかあ！　一人にしてごめん。僕、帰ったよ」
その言葉に、フィヨの母親はフィヨを見つめる。
「フィヨ……おまえ、どこに行っていたの？」
「……フェニックスを探してたんだ」
「ああ。そんなことよりも、そばにいておくれ」
「うん、いるよ。でもフェニックスにだって、会えた気がするんだ……」
「フィヨ。その羽根は？」
その時、母親の指摘で、フィヨは服に挟まっていた羽根を手にした。それは、夢のような出来事であったフェニックスの羽根と同じである。
「おかあ！　これ、フェニックスの羽根だ。やっぱり会ったんだ！」
「そう……よかったね」
「それにフェニックスは、僕を助けてくれたんだよ。でも……血は飲んでいないはずだ。じゃあ、どうして僕は助かったんだろう……」
「フィヨ。私はおまえが元気で誠実に生きていてくれるだけで幸せなのよ」
「おかあ。僕はおかあに生きていてほしいんだ。まだおかあに恩返しもしていないよ」
フィヨはフェニックスの羽根を母親に握らせ、自らの手を添えた。
「助けてよ。フェニックス……僕を助けてくれたように。僕は永遠の命を望んでいるわけじゃないんだ。ただおかあには、もっともっと長生きしてもらいたいんだよ……」
数日後、元気になったフィヨの母親の姿があった。
フェニックスの羽根と、フィヨの心が、母親を生き永らえさせたのかもしれない。

320　憎まれ口

結婚後してしばらくして復職した職場にいた上司は、私の後輩でした。まあよくあること。私が昔、彼をいじめていなければ――。

「美咲さん。この書類はなんです？」

彼に言われ、私は目を泳がせながらも、大きく口を開いた。

「先日ボツになった企画の改善案です。いい企画でしたので、こうすれば今の企画よりもっとよくなるはずというのを、グラフにしてまとめてみました。一度目を通していただければと思い……」

「仕事熱心なのもいいですけど、周りが目に入っていないようですね。今、我々は、新しい企画に向かって一丸となってやっていかなければならない時期に、ボツになった企画を練り直すと？」

不覚ながら彼の言葉は、彼が新入社員だった頃に、私が言い放った言葉。

「……ご一読いただければ結構です」

「復職して間もないので、実績を上げようと必死なようですね。ブランクはあなたを馬鹿にさせたんですか？　上の決定に従えないと？」

「すみません……考えが浅はかでした。その書類は破棄します」

そう言って書類に手を出した私より先に、彼は書類をしまった。

「一度提出した書類です。破棄ならこちらでやりますから、もう戻ってください」

「わかりました。失礼しました」

クソ……と思うと同時に、せっかく復職したからには、どんなことにも耐えてこの会社でもう一度頑張らなきゃという気持ちもある。せめて彼を昔いじめてなければと思うけれど、当時の私は自信に満ち溢れていたし、新入社員の彼が使えなかったのも事実。まあ、もう少し言い方があったとは思うのだけれど――。

今さら後悔しても遅い。どうあがいても、彼は私の上司なのだか

ら。でもこの会社は好きだし、大手企業に復職出来たのも奇跡に近い。待遇もいいから辞める気にはなれない。

しかし翌日、緊急会議が招集され、昨日出した私の企画案が全員に配られ、私は拍子抜けして彼を見つめた。

「先日ボツになった企画の改善案を、美咲さんが作ってくれました。読んでみたら、なかなかよく出来ている。よって、ボツになった企画を再検討することにしました」

「待ってください。ただでさえ新企画にてんてこまいの状態なのに、同時進行でやるというのですか？」

同僚からの反発は当然のことだと思う。私もすぐに再検討してほしかったわけではなく、今後何かの役に立てばと思ったのだが、彼の表情は変わらない。

「大企業である我が社が、一つの企画にかかりきりというのはおかしい。今までだって同時進行でやってきたでしょう？」

「規模が違います。今回の企画は、会社全体で動いてもおかしくないほどのものです」

「あの……私もすぐに検討してほしくて出した企画案ではありません。再検討してくださるのは嬉しいのですが、今すぐというのは無茶かと……」

私もそう言った。すると、彼は眉を顰める。

「僕はせっかちなんです。目の前にこれだけいい企画があってやらないのは気が引ける。企画を温めすぎてボツになることも多々あるし、これはすぐにやらないと、すぐに他社が嗅ぎ付けることでしょう。では今日出した企画は、美咲さんにお任せします。人手がないので、補佐は僕がします」

「部長がですか？」

「人手がないので仕方がないでしょう？　新企画が落ち着いたら、みなさんにもこちらの企画を手伝ってもらいます。では以上。美咲さんは、ここに残ってください」

そう言われ、全員が会議室を出ていく中、私は彼と二人きりになった。

「あの……先程も申し上げましたが、今すぐでなくても……それに、なんで急に？」

私が言うと、彼は息を吐いた。

「僕も同じことを二度言いたくはないですね。これはすぐにやったほうが価値が出る。大丈夫。かつてやり手だったあなたならわけないでしょう？　それに、これはあなたにとって復職後最初のチャンスなんです。僕も期待してますよ」

そう言った彼の顔はどことなく輝いていて、からかうような笑顔が憎たらしくも思える。

「部長。私が……嫌いですか？」

思わず言ってしまった私に、彼は微笑む。

「大嫌いです。でも僕は、公私混同しませんからご安心を」

彼はそう言って去っていった。

「ああそうですか。私だって大嫌いですよ」

こんな私たちに恋が生まれるのは、もっと後の話――。

321　好きになってはいけない人

きっとあなたは、どれだけ僕が頑張っても、振り向くことはないだろう。

あなたは愛する人に裏切られ、幸せな結婚を逃がしながらも別れることが出来ず、

そんな人生に疲れきって、新しい恋などする気さえないという。

それでもぶつかる僕の気持ちを、好意的に受け止めてくれるとは思うけど、

やはり度を過ぎた僕の態度に、辛い素振りを見せる。

目を逸らし心を揺らせ、そんなあなたを強引に奪うことは出来るかもしれないけれど、

揺れるあなたを挟み込んでいる息苦しさを思うと、僕はあと一歩が踏み出せません。

愛していると言いたいけれど、その一言が言えません。

あなたの苦しむ姿は、これ以上見たくないから。

あなたを救い出すことが出来ない僕は、

もう消えることでしか、あなたの気持ちを軽くすることは出来ないのでしょうね。

待っていたら、あなたが振り向くことはあるのでしょうか。

離れていたら、この気持ちは薄れるのでしょうか。

もう僕にも、選択の余地がありません。

苦しんでいるあなたのそばで、何食わぬ顔で見守ることなど、僕

にはもう出来ない。
それほどまでに愛しています。

僕の気持ちには気付いているのでしょう？
答えをください。あなたのために、僕が出来る最後の選択を。

322　ハーフフラワー

生まれて初めての海外旅行でやってきたのは、南の島。
新婚旅行ということもあり、身も心も舞い上がるようなハネムーン……のはずが、些細なことで喧嘩し、険悪なムードのまま、私はホテルの部屋を飛び出した。
思えば英語もままならないので不安はあったが、幸い財布やカードは持ってきたので、少しは安心出来る。
でもホテルから出る勇気はなく、私はホテルの中庭にあるプールサイドの椅子に座り、気持ちを落ち着かせた。
「でも……やっぱ許せない」
ぼそっと呟きながら、結婚して間もないのに、成田離婚の文字まで浮かぶ。
本当は意地を張りたくないし、こんなことでは前途多難というものだが、私にも譲れないことがあるのだ。
「追ってなんかこないよね……」
彼がそんな性格でないことは知っている。いつもの喧嘩だって、私ばかりが熱くなって、向こうからは構われなくなり、結局私が歩み寄ることしか出来ていない。彼は喧嘩となっても、気にとめた様子すら見せないのが、余計に腹立たしくもある。
「これじゃあ、私ばっかり子供じゃない。ちゃんと喧嘩にもならない……」
薄暗いプールサイド、私は空を見上げた。空には星が輝いている。
「おい……」
その時、彼の声が聞こえた。
「……追ってくるなんて、珍しいじゃない」
まだ素直になれず、私は横を向いてそう言った。
「そりゃあ海外だし、心配だよ。いつもだって、出て行かれる時は心配してる」

「でも追ってこないじゃない」
「そりゃあおまえが、俺のところに帰ってくるって信じてるから」
「そんなの……わかんないよ。言ってくれなきゃわからないし、たまには態度で示してほしいの」
「うん。ごめん……」
そう言いながら、彼は小さな花を差し出した。それは観光先でも現地の人に紹介してもらった、ハーフフラワーという白い花である。花びらが半分になるように咲く小さな花は、二つ合わせて一つの花に見えるため、カップルに人気だと聞いた。
「ハーフフラワー……？」
「誓ったばかりなのに、怒らせてごめん。今回は俺が悪かったと思う。許してくれ」
数日中に起こった旅行のことを思い出したり、つい先日の結婚式や披露宴のことも思い出し、私はやっと素直になったように、思い直す。
「うん……私も、ごめんなさい」
彼から花を受け取り、私はそう謝った。
すると、彼が持っていたもう一つの花を差し出す。
何も言わず、私たちは無言でその花を合わせた。幸せが訪れるというその行為は、私たちの仲直りまでさせてくれた。
「俺たちは、二人でひとつだよ。今までも、これからも」
「うん」
真夜中のプールサイド。私たちはドラマのように抱き合い、キスをした。

323　節分

「鬼は外！　福は内！」
遠くでそんな声が聞こえ、小学生の太一もまた、お父さんとともに庭へと出て行った。
「よし、太一。いくぞ」
「うん」
「鬼はァー外！　福はァー内！」
大きな声で、二人は豆を撒く。
「今度は中だ」
「ええ。中はやめてよ。掃除が大変」
お母さんがそう言ったので、太一とお父さんは渋い顔をした。
「じゃあ仕方がないから、ここでだけ。一粒だけならいいだろ？ばら撒かないから」
残念そうな太一を見て、お父さんはリビングの一角にしゃがんで言った。
「まあ、一粒だけなら……」
「よし。じゃあ太一。小さくやるぞ」
「うん」
「鬼はァー外！　福はァー内！」
太一とお父さんは、リビングにしゃがんだまま、一粒の豆を投げる。それだけで満足だった。
「あ、お父さん。鬼のお面あったの忘れてた」
豆を補充しながら太一が言ったので、お父さんは苦笑してそのお面を被る。
「しょうがないなあ。じゃあお父さんが庭で鬼役やるから、おまえはお父さんにぶつけるんだぞ」
そう言って、お父さんはお面を被って庭へ出ていく。
「鬼はァー外！　福はァー内！」

太一はそう言いながら、庭にいるお父さんに向かって豆を投げた。お父さんは参ったというような演技をしながら、庭を駆け回っている。

「駄目――！」

その時、そんな声とともに、太一の横を走り抜けたのは、三歳になる妹のハナだった。

ハナは裸足のまま庭へ出て行き、鬼の面を被ったお父さんに走り寄る。

「鬼さんいじめちゃ駄目！　鬼さん、悪いことしてないのにぃー！」

泣きながらお父さんを庇うように抱きついたハナに、お父さんはお面を取ってハナを抱き上げる。

「ハナちゃん。鬼さんじゃないよ。お父さんだよ」

急にお面を取ったお父さんに、ハナはきょとんとし、やがて泣き出した。

「鬼さんじゃない――！」

「なんだよ。お父さんより鬼さんのがよかったわけ？」

複雑な表情をするお父さんに、お母さんが苦笑する。

「ハナ、さっきそのお面見てすごく気に入ってたから……ハナ。鬼さんがお父さんでよかったじゃない」

「やーだー！」

それから、ハナの機嫌が治るまで時間がかかった。何がハナの気を損ねたのかはわからなかったが、その年から毎年、鬼役はいなくなり、鬼の面は家の中に飾られるようになった。

鬼は全員悪い鬼ではないという心優しきハナの言葉に、この家族だけは掛け声が変わった。

「悪い鬼はァー外！　福はァー内！」

324　福豆

「年の数だけね」
「ええ？　僕八つだけ？」
小学生の太一の手には、八粒の福豆。それを不満そうに言った。
「去年もそう言ってたね、太一。でも去年より一つ多いんだからね」
「そうだけど……」
「ハナちゃん、三つだけ……」
妹のハナは、更に残念そうに俯く。
「もう。後であげるから、今は年の数だけよ」
お母さんは苦笑してそう言った。
「いいなあ。おばあちゃんは五十個も食べられるんだ」
太一の言葉に、そばにいたおばあちゃんは笑う。
「いいでしょう？　太一も早く大きくなって、長生きしなくちゃね」
「うん！　豆いっぱい食べられるくらい、長生きするよ」
その言葉通り、太一は毎年の節分を楽しみにし、長生きすることになる。

325　ゾンビのきもち

逃げないで……ぼくの大好きな人。
君と一緒にいたいだけなんだ。
いつまでも、いつまでも。

さあ、怖がらないでこっちへおいで。
この世界はとても居心地がいいんだ。

それなのに、なぜ君は逃げる？
掴んだ手を振りほどかれて、僕は悲しい気持ちになった。

逃げられれば追いたくなる。まるで鬼ごっこのように。
やがて追い詰めた君は、恐怖に顔を歪めて、崖から落ちた。

そこでぼくは気付いた。
ああ、あの人は僕が会いたかった君じゃない。
だって君は、僕と同じような体で、今まさに人間の男を崖まで追い詰めていた。

326　初恋

生まれて初めて、好きな人が出来た。
中学校で一緒になる、別の小学校から来た女の子。
どこにでもいる普通の子だけど、男勝りで明るく笑う彼女が好きだ。

でも彼女が突然、笑わなくなった。
学校も休みがちで、来ても人の輪の中に入らない。
まるで別人のように、もとの彼女はいなくなってしまったというのか。

その原因のひとつは、俺なのかもしれない。
俺が執拗に彼女を追い回すから、女子の間でよく思わなかったやつがいるらしい。
くだらない。そんな世界にいない彼女が好きだったのに。

でももっとくだらないのは、俺のほうだ。
初めての恋。どうしたらいいのか、俺はまるでわからないのだ。
彼女のためにしてあげられることはなんだろう。

もし付き合えるなら、男として守ってあげることは出来るだろうか。
それが出来ないのなら、俺は初めて人のために去ることになるのだろうか。
ねえ、せめてその笑顔が見られるなら、俺はなんだってするよ。

放課後の昇降口、俺は生まれて初めて、彼女の手を取った。
その瞬間、思ったんだ。きっと守ってあげられる。

君のために、俺は生まれ変わる。

327　無言の青春

二人の男女がいる。

まだ高校一年生。

どちらからともなく歩み寄り、「付き合う」という確認もなく一緒にいる二人。

部活に出る少年を、ただじっと見つめ、待つ少女。

やがてまた一緒になった放課後の帰り道。

隣駅に住む少女のために、少年は自らの自転車を押す。

電車でたった三分の距離を、二人は三十分かけて歩いてゆく。

寄り添う二人の会話はない。

ただその顔はどこか恥ずかしげに赤くなっている。

夕焼けに映し出された二人の影が、微妙な距離を保ちながら伸びる。

やがて着いた彼女の家の前で、二人は互いを見て微笑んだ。

何も言わなくても、伝わっている。

触れずに伝わるその温もりが、永遠に続きますように――。

328　ZEROのトビラ

俺の名前は零（レイ）。高校二年生。

今日も学校が終わると、すぐに自分の部屋にこもってゲームで遊び、夜中までそれをやめなかった。

食事はカップ麺を食べたけれど、そんな時でさえゲームに没頭していたのは、この家にいるのが俺だけだから許されること。

親は両方いるけれど、父親の単身赴任が間もないので、しばらくの間、母親もついていくことになっている。だから事実上、俺一人というわけだ。

寂しいという気持ちはなく、むしろ羽根を伸ばしている。

「あーあ。さすがに肩凝ったなぁ」

ゲームで凝った肩を回し、俺はゆっくりと立ち上がる。

明日も早い。トイレに行って寝ようと思った。

と、部屋のドアを開けた途端、俺は固まった。

「え……？」

あるはずの廊下がなく、そこは真っ白な世界。

眩しさにすべてのものが消えたように、そこには何もない。

「な、なんなんだよ」

俺はそう言って振り向くと、今度は今までいたはずの俺の部屋までなくなっている。そう、握っているドア以外は、すべて真っ白な世界だった。

「なんだよ、これ！　クソ、夢だな。目を覚ませ、俺！」

自分のほっぺたを抓りながら、俺は何度も目を瞬きさせる。

だが、事態は一向に直らない。それどころか、抓ったほっぺたは痛いのだ。

「そんなことあるわけない。目を覚ませってば！」

今度は腕を抓ってみるが、それもやはり痛かった。

離したドアノブも、いつの間にかに消え、俺はいよいよ真っ白な

世界に孤立してしまう。
「ここは……なんなんだよ」
（ゼロの世界）
　すると、俺の頭の中で声がした。思った、というほうが正しいかもしれない。
「ゼロの……世界？　なんだよ、それ……」
（ゼロ）
「ゼロ？　確かに俺の名前の意味はゼロだけどさ……それとこれとは……」
　そこで俺は思い出した。部屋から出る前に見た時計は、二十三時五十九分を表していた。
「まさか……俺の名前が零で、零時零分零秒にドアを開けたから、別世界に飛ばされたってこと？」
（正解）
「馬鹿馬鹿しい。どっかのB級ゲームじゃあるまいし。思いついた自分が情けない。あーくだらない」
（でも事実、そうしてここへ飛ばされてきた）
「おまえは誰なんだよ！」
（誰でもない。ここはゼロの世界だ。ここには何もない。おまえが考えているのも、またおまえだけの世界で行われているだけの悪あがきだ）
「じゃあなんだよ。俺に考えるなってことか？　それとも、考えるだけ無駄ってことか？」
（選択はおまえの自由だ）
　俺はその場に座り込んだ。といっても、重力というものは感じられず、浮いているのにしっかりと座っているような、不思議な感覚でもあった。
「クソ。ドアノブの感触はまだ手に残ってるのに……」
　開けてみる素振りをしても、そこにドアがあるわけではない。
「そうだ。二十四時間後の零時零分零秒に、もう一度この場所でド

アを開けてみよう。きっと戻れる」
（こんな偶然、二度とあるか）
「そんなことはない。毎日ゾロ目の時間に起きるやつだっている。俺の体内時計が狂わなければ……ああ、ゲームでもありゃなんとなくはわかるんだろうが……いや、体内時計を狂わせないためにも、ここで寝ておこう。起きたら元に戻っているかもしれない」
淡い期待を抱きながら、俺は半分ヤケクソになって寝そべり、目を閉じる。
「父さん……母さん……」
こんなに心細くなったのはいつぶりだろう。俺は無力だ。唯一悔やむことは、なんで俺にこんな名前を付けたんだってこと。名前の由来はなんだったっけ……。
目を瞑りながらそんなことを考えて、俺はそのまま眠ってしまった。

数時間後。起きた俺を待っていたのは、やはりあの白い世界だった。
「零……」
母さんの声が聞こえた気がした。
「ゼロならすべてを作り出せる。またゼロに戻せる」
いつか父さんが言っていたことを思い出す。俺の名前の由来だ。
「すべてを作り出せる。またゼロに戻せる……？」
俺はふと立ち上がって、拳を握り、ドアノブを回す仕草をした。
すると、なんだか手ごたえがある。
「そうだ。ここから始めればいいんだ。何もないなら、作り出せばいい。俺は零だから……出来る」
ドアの形が見えて、俺は力いっぱいそれを開けた。
白い世界が後ろにある。俺はそれに振り向くのはやめ、ドアの向こう側を見つめる。
するとそこには、黒い世界。俺は絶望した。

「今度は、黒――？」
その時、パチンという音と共に、世界は俺の部屋になっていた。
そして目の前には、父さんと母さんがいる。
「父さん、母さん――？！」
「ただいま、零。真っ暗だから寝ていると思ったけど、どこか行っていたの？」
「……え？　二人、どうしてここに？」
「週末だから帰ってきたんだ。顔だけ見て寝ようと思ったんだが、どこに行ってたんだ？」
俺は安堵感を得て、不覚にも泣いてしまった。
「なんだ、そんなに親が恋しかったのか？」
「うん……そうなんだ」
「なによ。そんなこと言うの珍しいわね」
「本当に……よかった……」
俺を宥めながら、父さんと母さんの手に触れる。
ありがとう。父さん、母さん。

329　小さな町のレストラン

ポールはレストランのウエイター。最近働き始めたウエイトレスのウェンディのことが気になっている。

「ウェンディ。ちょっとおいで」

厨房からそう呼んだのは、コックのケリーだ。

「なんですか？」

「ちょっと試食してみてよ。新メニューに取り入れようと思って」

そう言って、ケリーは一口のケーキをウェンディに差し出す。

「わあおいしいわ。ラズベリーのケーキね。甘すぎないからパフェと一緒でも合うわね」

「やっぱり？　俺もパフェに重ねようと考えてたんだ」

綺麗なウェンディに恋心を寄せるのは、ポールだけではない。

ポールは二人の仲睦まじげな姿を見ながら、店内へと背を向ける。

「お下げします」

食べ終えた皿を回収しながら厨房に戻るポールは、尚も話を続けるウェンディとケリーに目を伏せた。

途端、ポールは厨房に入る際に敷かれていたマットに躓き、そのまま転んでしまった。

「ポール！　大丈夫？」

すぐさま駆け寄ったウェンディに、ポールは顔を上げる。

「う、うん……ごめん」

「いいのよ。片付け手伝うわ」

「ごめん。僕のが先輩なのに……」

「気にすることないわ。私もたくさん失敗したけど、ポールに助けてもらったもの」

ポールは嬉しさに顔を緩め、二人は落ちた皿や汚れた床を綺麗にする。

「ポール。手元でも狂ったか。上の空でもしてんじゃないのか？」

厨房の奥からそう言ったのは、ケリーだ。ケリーもまた、さきほどのポールのように、仲睦まじい姿を見せつけられて機嫌が悪いようでもある。

「ケリー。そんな言い方よくないわ。誰にでも失敗はあるもの」

ポールが反論する前に、ウェンディがそう言った。

「ウェンディ。やつをかばうのか？」

「言い方がよくないと言っているだけよ。行きましょう、ポール」

ケリーの反発をよそに、ウェンディはポールを連れ出し、汚れてしまったポールのエプロンの代わりに、新しいエプロンを渡す。

「ありがとう、ウェンディ。かばってくれて」

ポールの言葉に、ウェンディは微笑む。

「かばったんじゃないわ。ケリーが許せなかっただけ。望んで失敗する人なんていないもの。それにさっきも言った通り、ポールには感謝してるの」

ウェンディがそう言ったのは、まだウェンディが店に入ったばかりの頃、失敗続きのウェンディを慰め、丁寧に仕事を教えたのがポールだからだ。

だが、ポールは後輩でしかも恋心を寄せるウェンディに恥を見られたように、居たたまれない様子で立ち上がる。

「それは先輩として当然のことだよ……さあ、カッコ悪いところ見せちゃったけど、店に戻ろう。頑張って名誉挽回しなくちゃ」

そう言って去っていくポールに、ウェンディはそっと微笑みかける。

「いつになったらあなたは振り向いてくれるのかしら……？」

小さな町のレストランで、愛が交差する。

３３０　熟年の青春

四十年連れ添った夫は、仕事を辞めて生きがいを失くしていました。

また私も、家にいなかった夫がいつもいるようになって、自分のペースというものを失っていたのです。

夫の生きがいを見つけるためにも、私が支えなければならないのですが、その気持ちもなんだかんだ小言を言われては削がれてしまいます。

私たちは、今こそもう一度話し合い、第二の人生を送ろうというところなのですが、もはや夫婦ではなく他人のようで、一緒にいるとお互いに息が詰まる毎日を送っているのです。

でも、今さら離婚などは考えられません。

若い頃働いていたおかげで、お金には困らないものの、この先一人になってしまえば、心細くて仕方がなく、孤独死ということまで、頭をよぎるのです。

夫とは趣味が合いませんが、夫も私もお互い別の趣味も持っておりますので、幸い、お友達も多くいます。

それなのに、私たちは二人になると、どうしても息が詰まってしまいます。

ついに夫から別れを切り出されました。

ああ、私が泣きすがっても、夫は気持ちを曲げないでしょう。

だったら私も、新しい人生を送ることを前向きに考えてみようか。

途端に、世界が広がった気がしました。
夫でさえも輝いて見える。私は私の足りないものを見つけたのです。
それは初心――。
いつも当たり前にいる夫を客観的に見れば、嫌なところも見えればいいところも見える。

夫にはまだそれがわからないかもしれませんが、私はそれに気づき、判子を押しました。
もう一度ここから、恋が始められるかもしれない。
あるいは、違う人と新しい恋が生まれるかもしれない。

なんにせよ、私は初心を忘れない限り、この世界を輝かせることが出来るでしょう。

331　STOP

「手を上げろ」
異国の言葉でそう言われ、僕は言葉を理解したわけでもなく手を上げた。
ジャングルの奥地。ジープの行く手を阻んだのは、まだ年端もいかない少年たちである。
この国が内戦状態だったのは知っていたが、大学の夏休みに旅行でこの地を選んだのは、ただ本物のジャングルというものが見たかったから、という安易な考えである。自分は大丈夫だとわけのわからない自信に溢れていたのは、本当に浅はかだったと後悔するが、それももう遅い。
「たすけて……へ、ヘルプミー」
見るからに頼りない声を出して僕がそう言うと、数人の少年が僕の体に触れた。
上着を脱がされ、ポケットを探られ、財布や煙草はもちろん、チューインガムまではぎとられる。
その時、銃声が鳴った。
「うわあああ！」
痛みは感じなかったが、あまりの轟音に、僕は叫ぶ。
だが、やられたのは僕ではなく、同乗していた運転手だった。
少年たちは、運転手が持っていた護身用のピストルを手にし、それをかざす。
そして僕に顎で指図し、僕は感じるままに歩き出す。少年たちはついて来ようとはしなかった。
「た、助かったのか？　僕だけ……」
慣れていると言っていたものの、僕の運転手をしてくれた人に申し訳が立たない。だがもはやあれは亡骸で、今僕は自分自身の命も危うい状態なのだ。薄情と言われても、僕は小走りでジャングルの

中を歩き始める。
目的地までの距離もわからないが、僕は歩き続けるしかないのだ。

それから何日も歩き続け、僕はようやくひとつの町に辿り着いた。
やってきた大使館員に宥められながら、僕はようやく安堵する。
「銃を持っていなくてよかった」
ジャングルの向こうでは、今日も銃声が鳴り響いている。

332　ビューティフルネーム

一番上のお姉ちゃんの名前は、春。
二番目に生まれたお姉ちゃんの名前は、夏。
三番目に生まれた長男の名前は、秋。
四番目に生まれた女の子の名前は、冬。

春夏秋冬、揃いに揃った。
けれどお母さんは、五人目の赤ちゃんを宿している。

「お母さん。五人目の赤ちゃんの名前は何にするの？」
子供たちが訊ねます。

「さあ、どうしましょうかね」
お母さんは優しく微笑み、お父さんは少し悩んでいる様子。

「男の子だったら太郎、女の子だったら花子っていうのはどうかな、オーソドックスに」
お父さんは、半ば諦めたようにそう言った。

「五人目で最後かはわからないけど、一人だけそういう名前なら、

大きくなったらスネないかしら」
お母さんは、半ば困ったようにそう言った。

「四季くん」
上の四人の兄弟たち、それぞれのいいところをすべて受け継ぐ形で、赤ちゃんの名前は決められた。

「なに。六人目が出来たら、その時に考えるさ」
今日もこの家には、笑顔が絶えない。

333　いつの頃からか……

いつの頃からか諦めた。
絵を描くのが好き。
「あんたはどうしてそんなに下手なの」
いつの頃からか諦めた。

友達と遊ぶのが好き。
「あの子なら、もう学校行ったわよ」
いつの頃からか諦めた。

憧れの先輩のことが好き。
「あの人、同じ年の彼女がいるんだって」
いつの頃からか諦めた。

いつの頃からか……。
ああ、そうして私はいつの頃からか、一人でいることに慣れてしまった。
諦めることを。
辛いことには目を背け、俯いては、気配を消し、ただ目立たないように。

そうして生きることに疲れた頃、自分の存在価値というものを考える。
私が本当に卑怯な人間ならば、ここで死を選ぶことも出来ただろう。
だが、私はしぶといのだ。

いつの頃からか、諦めることを諦めた。
前向きに行け。
自分の存在価値など、どうでもいいではないか。
或いは、ここに存在しているからこそ、自分に価値があると信じてみればいい。

いつの頃からか……私の世界は輝きだした。

（あたしの人生に、こんな衝撃的なことが起こるなんて……！）

千佳は心の中でそう叫んでいた。

目の前には、クラスメイトの男子・早川がおり、自分の唇をキスで塞いでいる。

「ちょ、ちょっとやめて！」

そう言って、千佳は早川を押しのけた。だが、お互いに言葉が出ない。

沈黙のまま、早川を置いて、千佳はそのまま走り去っていった。

（なんで目なんかつぶっちゃったんだろう……）

千佳は走りながら、自分がした行動に後悔した。だが、心は躍るように揺れ、さっきの出来事が何度も脳裏に蘇ってくる。

（そもそもあいつ、なんでキスなんか……）

早川はただのクラスメイトで、取り立てて仲がいいわけでもない。千佳自身も目立つタイプの女子ではなく、今日も普通に学校へきて、友達とはしゃぎ、女子バレーボール部の部活で体育倉庫を片付けていただけだった。

そこにやってきた早川は、同じく体育館を使っていた男子バレーボール部で、ボールを片付けにきたところを、いきなり千佳にキスをしたのだ

「ああ、もう！　わけわかんないよ！」

その時、千佳は突然、手を掴まれた。後ろには、全速力で追いかけてきた早川がいる。

「離して！」

急に冷静になり、千佳は早川を睨んだ。

「……ごめん」

か細い声で、早川が言う。でもその顔は険しく、その目は悲しく

千佳を見つめている。
そんな表情をする早川に、千佳はさっきの出来事を思い出し、真っ赤になった。
「な、なんなの？　なんであんなことすんのよ！」
「そりゃあ……あんたのこと、好きだったから……」
突然、早川がそう言った。
「ずっと好きだったんだ。いきなりあんなことしたのは悪いと思ってる。でも……しょうがないだろ。好きだったんだから」
そこにいる早川は、いつも教室で馬鹿笑いしているクラスメイトの早川ではない。見たこともないくらい真剣な、一人の少年であった。
千佳は真っ赤な顔を隠すように、その場に座り込む。
「千佳……」
「恥ずかしい……早川」
「……俺のが……」
「ファーストキスだったのに……」
「……ごめん。でも俺も初めてだけど……」
「初めては、芸能人とするのが夢だったのに」
急に現実離れなことを言い出した千佳に、早川は笑って千佳の肩に手を触れる。
「芸能人にはなれないかもしれないけど、有名人にはなれるようにするよ。高校も、バレーの強いところへ入れそうだし、今度の試合だって活躍してみせるよ。だから……俺と付き合って」
顔を上げた千佳の目に、握手を求めるような形で微笑みかける早川がいる。
もう早川だけが特別かのように、夕日が早川を美しく照らし出していた。
千佳は無言のまま、その手を取る。
「帰ろう」
長い二人の影が、学校から消えていった。

335　MAKE　UP

物語の中のプリンセスは、どんなに貧乏でも人目を引く何かがあった。美しい容姿、綺麗な心、素敵な声、すらりと伸びた足。

そんな人に誇れる何かが一つもない私には、夢見る資格すらないのだろうか。ましてや王子様なんていないことなどわかっている。

私はため息をつきながら、夕暮れの街並みを歩いていた。

「舞香？」

その時、私はそう呼ばれて振り向いた。こんな綺麗な名前、名前負けして恥ずかしいのに。

振り向くと、そこには数年間会っていない高校の時の同級生がいる。

「あ、由美子？」

「うん、そう。やだ、全然変わらないね、舞香」

「そう？　由美子は……綺麗になった」

綺麗なメイクに手入れされた髪や爪。お洒落に目覚めず着飾りもしない私は、早くこの場から逃げたいとも思った。

「やだ。舞香ってば相変わらず化粧っ気ないんだから。なんなら寄ってく？　うちのデパート」

「え……由美子、デパートに勤めてるの？」

「そう、化粧品コーナー。舞香って何もいじってないおかげで肌超キレイ。ね？　タダだから寄って行って。私の仕事ぶりも見せたいし。最近マネージャーになったんだ」

「ええ。すごい」

久しぶりの出会いに少なからず気分が高揚し、私は由美子の職場である近くのデパートへと連れて行かれた。

大きなデパートの一角に構える化粧品コーナーでは、帰ったはずの由美子が戻ってきたということで、従業員と見られる女性たちが緊張するのが見た目にもわかった。

「マネージャー。お客様ですか？」
「うん、そう。高校の同級生にそこで会って。彼女にメイクしてあげて」
由美子はそう言って、私を椅子に座らせる。
「ちょっと、由美子。私、化粧って似合わないのよ……ブタにメイクしたって仕方がないでしょう？」
そう言った私に、由美子は口を曲げた。
「なに言ってんのよ、舞香。そんだけノーメイクで肌つやつやな人って滅多にいないんだからね。この年でなんの手入れもしてないのにそれだけ綺麗って自慢なんだから。うちの社員のためにも、メイクさせて。大丈夫よ。見違えるほど綺麗にしてあげるんだから」
そうこうしている間に、私にメイクが施された。
メイクなんて何年振りだろう。高校の時に友達としたこともあるし、社会人になってからも何度か機会はあった。でも、笑われたりじろじろ見られたり、いい思い出がなくて私は俯いて生きてきた。
「本当に、お肌綺麗ですね。メイクしないなんてもったいないです」
由美子の後輩が、そう言いながら、私にメイクをしていく。
「そんな……」
お世辞だろうと思った。でも、何人もの人にメイクをしてもらい、なんだかちやほやされているようで、私は悪い気もしていなかった。
「わあ。やっぱり化粧映えるじゃない」
由美子にそう言われると同時に、私は鏡で初めてメイクされた自分を見た。
どこかの女優さんのように、透き通った白い肌、パールみたいに輝く頬、いつもの倍くらい大きくなった目、セクシーな唇、小太りの私でも見違えるくらい、自然な仕上がりである。
「嘘みたい……」
「なに言ってんの。これが舞香の本当の姿なんだから」
気が付けば、周りには大勢のギャラリーがいる。
「由美子。私のことカモにしたわね？」

でも、悪い気はしない。
「えへへ。こんなに集まったのは想定外だけど……そんなに綺麗になったのは、舞香自身がいいからってこと、忘れないで。舞香のおかげで、思いのほか商品も売れたし、イメチェンさせたいと思ってたこっちが助かっちゃった。これ、お礼にあげるわ。今やったメイク道具一式」
「え、でもこんな高いもの……」
「いいのよ。久々に会ったんだし、私はマネージャー。同級生にこのくらいさせて」
「由美子……ありがとう」
「ううん。その代わり、毎日ちゃんとメイクしてみて。メイクのやり方は中に入ってるし。舞香、自信失くしてるみたいだけど、高校時代だって明るくてみんなの人気者だったじゃない。もっと自信もって欲しいのよ」
「うん……ありがとう」
久しぶりの友達は、私に自信を与えてくれた。確かに、いつからだろう。高校の時は、太っていても、ただ明るく振舞っていれば輪の中心にいられた。でもいつしか大人になり、周りが結婚していくことに焦りがなかったわけじゃない。私はいつの間にか、背筋を曲げて下ばかり見ていたのだ。
メイクをした私は、あの頃と同じように、輪の中心で笑顔を見せ始める。

336　おかあさん

「なにが食べたい？」
そう聞かれた私は、おなかに相談する。
「なんでもいい」
そう答えた私に、お母さんは困った顔をする。
「なんでもいい、が一番困るのよねえ」
だってお母さんの料理でまずいものはないもの。なんだって食べたい。

「クルミパンにハマってる」
何の気なしに言ったいつかの言葉の通り、
ある日の食卓にはクルミパンが置かれていた。

「ああいう服可愛いよね」
何の気なしに言ったいつかの言葉の通り、
誕生日のプレゼントは目をつけていた洋服をくれた。

「正月には帰るからね」
何の気なしに言ったいつかの言葉の通り、
一年分のごちそうとも思える私の好物と、ふかふかの布団が用意されていた。

お母さん。
反発したこともあったし、今でも素直になれない自分がいるのですが、
母になった今の私には、お母さんの気持ちがわかるようになりま

した。

「なにが食べたい？」

そう聞かれた私は、おなかに相談する。

「なんでもいい……」

本来ならそう言うところを、私は堪えた。

「カレーライス！」

お母さんは嬉しそうに、腕まくりをする。

「カレーね。オッケー」

お母さん。

久々に帰ったから、今日の夕飯はどこかに食べに出かけようか。

永遠にお母さんの娘である私は、こんなささやかな親孝行が出来るようになったのです。

337　おかあさん……というものは

「クルミパンにハマってる」
何の気なしに言ったいつかの言葉の通り、
ある日の食卓にはクルミパンが置かれていた。

「お母さん、ありがとう。私がハマってるの、覚えててくれたんだ」
わざわざ買って用意してくれたのだと思い、そうお礼をする。
「ああ、それ？　買ったんじゃないわよ。町内会の集まりの参加賞」
それもまた、母。

なーんだ。と思いながら、数日後には別のクルミパンが置いてあった。
「これ、どうしたの？」
「ああ、それ？　今度はちゃんと買ったのよ。美味しそうだったから」
それもまた、母。

いつでも愛情たっぷり。大好きなお母さん。愛してるよ、お母さん。
まだまだ言葉にするのは照れ臭い。態度で表すのも恥ずかしい。
でもでも、お母さんならわかってるよね？
いつまでも元気でいてね。

338　さなぎと蝶々

芽依子は鏡に映る自分を見て、ため息をついた。
「なんて平凡な顔……エラ張ってるし、おまけに大きなホクロまで。ホクロがセクシーだなんて、程遠いよ……」
高校三年生になっても彼氏がいないことで焦りを見せる芽依子だが、高校卒業後の進路に関しても頭を悩ませている。
「就職か、大学か……」
親は大学を勧めているが、芽依子には夢があった。
「女優……」
壁に貼られた人気女優の稲村レイラは、自分が目標としている女優であり、綺麗な女優の代名詞でもある。
子供の頃からその世界に憧れ、中学高校でも演劇部を選んだくらい、憧れる夢だ。
夢なんか見るんじゃない。その顔で、女優になんかなれるわけがない。親にはそう言われたが、美人女優で通らずとも、演技派女優になることは出来ると、芽依子は諦めきれずにいる。
「稲村レイラになりたい。美人で演技もうまくて、あんな人になれたら、私の人生変わるのに……」
儚い夢を見ながら眠りについた芽依子。だが次の日の朝、夢は突然に叶う。

支度をするために鏡を見た芽依子は、一瞬言葉を失った。
「い、稲村レイラ？」
ここは間違いなく自分の家。発せられる声は自分の声、だがその顔は、憧れの女優・稲村レイラその人である。
「な、なんで？　って、馬鹿だなあ。これは夢に決まってるじゃない。もう一回寝よう」
芽依子はそう言ってベッドに入る。すると、遠くから声が聞こえ

た。

「芽依子！　早く起きなさい。ママ、先に行くからね？」

父は先に会社に行っているはず。共働きの母も、そろそろ出勤時間のようだ。

「うーん。起きてるから大丈夫……」

そう返事をして、芽依子はもう一度起き上がった。いつも通りの朝である。

だがもう一度鏡を見ても、そこに芽依子の顔はなく、稲村レイラがいる。

「な、なんだっての？！」

家から出た芽依子は学校には行かず、タクシーで稲村レイラの事務所へと向かった。

「私、正気だよね？　まだ顔戻ってないよね？　ここで稲村レイラに会えればいいんだけど……」

事務所の前でもう一度鏡を見ながら、芽依子はなかなか中へと入れないでいる。

すると、ふと背後に気配を感じ、芽依子は振り返った。そこには、帽子にサングラスにマスクといった完全防備な姿で立っている女性がいる。

だが、その顎のラインにある大きなホクロには見覚えがあった。

「あ、あ、あ……」

言葉にならずに指を刺す芽依子、すると同時に、指を刺された女性もまた、芽依子を指差した。「あ、あ、あ……あたし！」

互いが互いを指差し、そこで二人は、お互いが入れ替わったことを認識したのである。

じっくり話し合おうということで、芽依子は女優・稲村レイラの自宅へと連れて行かれた。

変装を解いた稲村レイラの顔は、まさしく芽依子そのものである。

「本当に、これ現実ですよね……？」
芽依子が尋ねると、稲村レイラは大きくため息をつく。
「私だって、現実とは思いたくないわ。一体どうしてこんなことに……」
「……きっと私のせいです。稲村レイラさんになりたいって、心から願ったから……」
「じゃあ心から願ってよ。元の自分になりたいって」
声だけは違うものの、元の自分からそんなことを言われ、芽依子は俯いた。
「嫌です。自分の顔は名残惜しいですが、レイラさんみたいな顔があれば、私も夢が叶えられます」
「夢？　勝手なこと言わないでよ」
「私には、女優になる夢があるんです。演技には自信があります。これでレイラさんみたいな美貌があれば……」
その言葉に、稲村レイラは苦笑して立ち上がる。やがて、戸棚の奥から一冊のアルバムを差し出した。そこには、素朴な少女の写真がある。
「子供の頃の私の写真よ。整形なんてしてないけど、お世辞にも可愛いとか綺麗とかじゃないでしょ？」
稲村レイラの言葉に、芽依子は口をつぐむ。確かにこれでは、よくいる平凡すぎる少女だ。
「顔の良し悪し、性格の良し悪し、人それぞれだし、それは結構努力次第でどうにかなるものよ。今の私だって、普段から手入れを心掛けてるから見られるだけ。エステにジムに、努力は惜しまないわ。それに、ただ綺麗なだけの女優なんてたくさんいるでしょ。あなただって磨けば光る原石かもしれないじゃない？　私の顔に頼るまでもないわよ」
封印したい過去のように、稲村レイラは手早くアルバムを閉じる。そんな行動は、芽依子にとってもよくやることだ。あまり人には見せたくないものである。

「私でも……頑張ったら、レイラさんみたくなれますか？」
「努力次第だってば。私になりたいっていう強い意志があるなら、すぐに私の隣くらいには来られるわよ」
そう笑った稲村レイラの顔が印象的に芽依子の脳裏に焼き付き、そこで芽依子は気を失ってしまった。

それから数日後。
「お父さん、お母さん。私、進路決めた。大学には行かない。就職もしない。ほんの少しだけでいい。夢に向かうチャンスをちょうだい」
芽依子はそう言って、履歴書を片手に、稲村レイラの事務所へと出向くことになる――。

339　39年目の純愛

大学卒業と同時に就職し、二十代で結婚し、子供をもうけ、三十半ばで離婚。これもまた普通の人生だろうか。

独り身になった俺は、すでに若さも持ち合わせておらず、四十を目前に、ただ絶望していた。

この先、恋をする気にもなれないし、再婚なども考えられない。ただ毎月、子供ために送る養育費を稼ぐためだけの毎日。あれだけわずらわしかった家庭も、今となっては恋しいし、金のつながりだけでもありがたいと思う侘しい自分に気付いている。

そんな平凡で冴えない毎日を送る俺のもとに、一通の葉書が届いた。小学校の同窓会の葉書だった。

高校や大学の同窓会は頻繁にあったのだが、小学校という名にピンとこない。とはいえ、高校まで一緒だった仲の良い友達もいたし、なにより暇だったので、俺は出席にマルを打って返信した。

同窓会当日。早速仲の良かった友達を見つけ、俺は楽しい話を咲かせた。久々にストレスを発散出来る気がする。

ふと視線を感じて、俺はそちらの方向を振り返った。

「本間じゃん？」

友達が、横でそう言った。

俺は一人の女性と目が合ったまま、それを逸らせずにいる。

だが、すぐにあちらが目を逸らしたので、俺は我に返った。忘れていた思い出が、沸々と蘇る。

本間さん――小学五年生の時のクラスメイトで、俺の初恋だった。もちろん、今まで忘れていたわけじゃないし、あわよくば今日会えるかもしれないという期待は抱いていたが、当時の甘酸っぱい気持ちなど、今の今までわからなかった。

やがて会も終盤の頃、俺は喫煙室に向かう際、向こうから歩いてくる本間さんに気付いた。

「本間さん……だよね。覚えてる？　俺、遠藤です」

そう言った俺に、本間さんははにかんだ笑顔を見せる。同じ年――四十近いはずの彼女だが、なぜだが小学校の頃の面影を残したまま、可愛らしい大人の女性へと変化している。

「覚えてるよ、遠藤君。あの頃は毎日、学校一緒に帰ったよね」

本間さんの言葉に、俺は少し赤くなる。

小学五年生のあの頃、俺は初恋の彼女に思いを秘めたままいた。アクションを起こしたのは、意外にも彼女から。バレンタインデーに、彼女からチョコレートをもらったのをきっかけに、小学校を卒業するまで一緒に帰った仲だった。

もちろん、今の進んでいる現代っ子のように、付き合うとかそういうのではなかったけれど、俺たちは間違いなく両想いだったし、決して家も近くないのだが、毎日の家路を一緒に帰った。

それもまた中学に上がると、部活やなんだですれ違いがあったり、二人で帰るのが恥ずかしかったりして、結局何も言わずに中学を卒業してしまった思い出がある。

高校も別々だったので、本当にあれから彼女と会うことすらなかった。

「うん。高校も別々で、会う機会もなかったけど……元気にしてた？」

俺の言葉に、本間さんは頷く。

「うん、元気。今は結婚も離婚も経験して、たくましくなった」

「え、そうなの？　俺も同じ」

意外だった。彼女は明るく優しい家庭を築き上げていると勝手に思い込んでいたからだ。

「そうなんだ。お子さんは？」

「いるよ。向こうが引き取ったけど……」

「そう。うちは私が引き取ったわ。二人共、まだやんちゃ盛り」
「また今度……会わない？　ゆっくり話でもさ」
気がついた時には、もう本間さんを誘っていた。もう少し話していたいと思ったんだ。
「……うん。いいよ」
俺たちはお互いの連絡先を交換し、その日を終わらせた。
もう大人同士。恋愛に発展するには、お互いの勇気が必要だし、今はまだそんなに急ぐことでもないと思う。
でも、俺の忘れていたあの頃の純情が、今の何もない俺を支えてくれるような気がした。

340　魅力

自分の魅力は自分にはわからない。自分の個性というのは、自分が欠点だと思うところだって誰かが言ってた。でも欠点だらけの私を相手してくれる人なんていないわ。

そんなことを思いながら学校から帰る。木枯し吹く街を、私は一人で歩いていく。

子供の頃からいじめられていた私は、いつしか人目を避けるようになっていて、目立たず地味に生きることを決意する。友達なんかいなくても、いじめられるよりはいい。

手つかずの長い黒髪を揺らしながら、私は駅へと向かっていった。

「おい、あの子……」

そんな声が聞こえ、そっと振り返ってみる。

みんなが私を見ている気がする……昔そんなことを言ったら、当時いた友達に、自意識過剰だと言われた。それから反省して、そういうことを考えないようにしている。

（長くなった髪が目立つのかな……）

またも人と目が合い、私は目を伏せた。それと同時に、自分の身なりを確認する。べつに服が乱れているわけでもないし、臭いがきついわけでもなさそうだ。

やはり気のせいだと思い直し、駅の構内へと歩いて行った。

「あれ。大川じゃん」

その声に、私は目の前の人物に目を凝らす。クラスメイトの小室君のようだ。クラスの中でも、男の子は普通に声をかけてくれたりするので、女の子よりは怖くない。

「小室君？」

「なんで睨むんだよ」

「え、睨んでなんか……あ、視力が弱いから……」

前にあったいじめの原因の一つは、私の目が悪かったこともあっ

た。目が悪いので、睨まれたと思う人は結構いたみたいだし、遠くから声をかけられても気付かない時もあったから。だからいじめといっても、自業自得なのだ。

「へえ、そうなんだ？　メガネしねえの？　コンタクトとか」

「そこまで悪くないし、慣れてるから。コンタクトなんて怖いし」

「ふうん？」

方向が一緒のため、なりゆきで私たちは同じ電車へと乗った。

「大川ってさ、友達作んないの？」

突然、小室君がそう言ったので、私は口をつぐむ。

「そんなことはないけど……」

「でも、どこの女子グループにも入ってないよな？　中学の時もそうだったって、同中のやつが言ってたけど……って言っても、べつにわざわざ大川のことについて調べたわけでもないんだけど」

「……いじめられてたの。小学校の時。中学では友達も何人かいたけど、やっぱり離れていって……」

「人間不信？」

小室君の言葉に、私は苦笑して答える。

「でも、こうして話しかければ、普通に話してくれるよな」

「無視したりしないよ」

「そうだけどさ」

「それに……男の子は少し楽。女の子は少し難しいんだ。私、グズだしブスだしトロイから……」

「ハハッ」

その時、小室君が鼻で笑ったので、私は少しムッとした。

「笑うなんてひどい。人が真面目に話してるのに……」

「ごめんごめん。だって真顔で言うからさ……女子って本当にくだらないよな。完全に妬みじゃん」

「え？」

怪訝な顔の私を見て、またも小室君が笑う。

「大川、本当にもったいないなあ。今まで教えてくれる人いなかっ

たのかよ……っていうか、自分で気づけよ」
「意味がわからないけど……」
「じゃあ、俺と付き合ってって言ったら、少しは自信つく？」
「か、か、からかわないで！」
電車の中なのに、私は大声を出してしまった。それが後ろめたくて、私は小室君に背を向ける。
「……からかってないよ。ずっと好きだったんだ。付き合ってほしい」
後ろから聞こえる小室君の声に、私は戸惑いを覚えていた。
「誰が私なんかを相手にするんだろう……」
心で呟こうと思った言葉が、不思議と出てきてしまう。
「なんだよ、それ……人が真剣に言ってるってのに、信じもしないのかよ！」
今度は小室君がそう怒鳴ったので、私は振り返って人目を気にしながらも、目の前にいる小室君の顔から目が逸らせなくなっていた。
「だって……私、目立たないようにしてきたのに……もうからかわれたり、いじめられたりするの嫌なのに」
「付き合うのが駄目なら、友達からでいいよ。友達だから、大川をからかったりするやつがいれば守ってやる。約束する」
そう言って手を差し出す小室君の手に、私はおそるおそる触れた。温かい手だ。
「大川。胸張って生きろよ。そんなすらっと背が高くてさ、綺麗な顔してるのにもったいないよ。子供は残酷なところあるから……小学生の時は、きっと大川の綺麗さに嫉妬してたんだよ。俺以外の男子だって、大川は美人だし独特な雰囲気持ってるから、声かけられずにいるんだ。それだけだよ。自惚れてていいんだ」
「……そんなこと思えないよ」
「少しずつでいいじゃん。俺は今、大川に声をかけた自分の勇気に満足してる。大川は、本当に地味に大人しく生きるのが望みなの？
そんな人生つまんねえよ。ただ息して生きてるだけなんてさ。こ

れからは友達として、何かあるなら手伝う気まんまんだけど？」
　不思議な言い回しをする小室君に、私は観念するように笑った。
なんだかうじうじしていた自分が馬鹿らしくさえ思えてくる。
　本当だ。私の望みは、そんなことではなかった。さっきまでいた私の世界は、地味で根暗な暗い世界。でも彼のおかげで、私の世界がほんのちょっぴり、動き出した気がする。きっとここから、静かに世界が広がり出すだろう。

３４１　情けない俺が、君に出来る最後のこと

パチン、という音とともに、痛みが頬に広がった。
目の前には、世界中の誰よりも大切な君の顔。
笑うと天使みたいに可愛いのに、
目の前の君の顔ときたら真っ赤に染まり、怒りの形相で俺を睨んでいる。

それでいい。もっと殴っていいんだよ。
俺を憎んで、顔も見たくないくらい憎んで、
君の心の中に、俺という欠片も残らないくらいに忘れてほしい。
好きなだけ殴って君が楽になるのなら、俺はこの身を差し出すよ。

心をしまい込み、涙に濡れた君を冷たい目で見下ろすと、俺は君に背を向けた。
もうこれで会うこともないだろう。
なぜ最後に、大好きな君にこんな仕打ちをしなければならないのか。
それが俺に出来る最大の優しさなんて、格好が悪くて言えやしない。

もうすぐ、君は結婚する。俺とは違う、別の人と。
これでいいんだ。俺の幸せは、君の幸せなのだから。
このまま君を連れて逃げても、君を幸せに出来る自信はない。
情けない男だろう。一生そう罵ってくれればいい。

背中に叫ぶ君の声を聞きながら、俺は静かに泣いた。
こんな俺でごめん。でも俺は、君のことが大好きだよ。
一度だってそう伝えることも出来ず、俺は君を捨てた。
さよなら。勝手だけど言わせて……ごめんな。

３４２　優しさはときに凶器へ変わり、私を闇へと突き落とす

パチン、という音とともに、痛みが手に広がった。
目の前のあなたは、すべてを失ってでも手に入れたかった愛しい人。
そんなあなたは能面のように、冷たくなんの感情もない顔で、ただただ怒りをぶつける私を無抵抗で受け入れ、そしてすり抜ける。

これではいけない。
あなたを憎んで、殺したいほどに憎めば、すべて忘れて終われるの？
子供のようにだだをこねるみたいに、私は私の行動を恥じた。
でも、どれだけ叩いても、あなたの決意が固まっていることくらいわかる。

涙で酸欠状態になりながらも、私は何度も彼の頬を叩いた。
もうこれで会うことはないというの？
私の手は腫れ上がり、心は砕けそうになる。
わかってるのよ。それがあなたの優しさだってこと。

あなた以外の人と結婚なんてしたくない。
もはや諦め顔のあなたに、今だけは子供のように感情をぶつけるのもいいと思った。
幸せにしてくれなんて頼んでないわ。一緒にいられるだけで幸せなのに。

情けない男だわ。そんなことすらわからないというの？

馬鹿！　行かないで！　愛してる！

……どう泣き叫んでも、あなたは優しさを貫くのね。

本当に私のためを思うなら、身を引かずに私の手を取ってよ。

一度だってあなたは自分を優先しようとはせず、私のために私を捨てた。

さよならも、ごめんも言わないで。欲しいのは、あなただけなのよ。

343　MY　HOME

ジャックは十二歳の少年で、人生の大半を海で過ごしてきた。
今日も海賊船の甲板で寝そべっては、小型ナイフでコルク栓に彫刻をしながら暇を潰す。
「おい、ジャック。明日には港に着くぞ。着いたら俺の買い物手伝ってくれ」
そう言ったのは、航海士の青年・エムソンだ。二人は兄弟のように仲がいい。
「いいけど、久々の故郷なんだ。墓参りは行くからね」
「チャックの墓は海だろ」
「母ちゃんのだよ」
ジャックはそう言って、海を見下ろした。
ジャックの父親・チャックもこの海賊船のクルーだったが、いくつかの戦いの後に死んでいる。母親はチャックの故郷で出会った踊り子だったが、ジャックを産み落とす時に命を落とした。海賊船での新婚旅行中の出来事である。
そのため、ジャックはこの海賊船で生まれ、そして子供の頃から親は両方いない。
「……いいやつだったよ。おまえの両親は」
ぼそっと言ったエムソンに、ジャックは口を曲げる。
「エムソンだって、そんなに年変わらないだろ。知ったかぶりな口利くなよ」
「誰に向かって口利いてんだ。俺は今年三十だぞ」
「え、そうなの？　結構年いってるね」
「おまえ、どんだけ俺様を同等扱いしてたんだよ……」
「まあいいや。とにかく俺にも予定あるから、買い物に付き合うとしたらその後だからね」
「わかったよ」

生意気な口調のジャックに苦笑し、エムソンは遠くに見える島を見つめた。
「俺は二人に誓ったんだ。ジャックを立派な船乗りにするってな……」
ぼそっと言った言葉は、ジャックには聞こえない。だが両親の故郷が近付いてくることに、ジャック自身の気持ちは上がっていく。

「母ちゃーん！」
次の日。船が港に着くなり、ジャックは海の見える丘へと走っていった。そこは何度か来ている母親の墓がある場所だ。父親のチャックは海に眠っているが、母親は母親の両親がきちんと埋葬している。
「ジャックね？」
母親の墓の前で手を合わせるジャックに、老婆が声をかけた。
「え……そうだけど」
「ああ、やっぱり！　小さい頃のあの子にそっくりだわ」
「あの子って？」
「あなたの母親よ」
「母ちゃんの？」
目の前にいる老婆は、優しい目をした祖母であった。
「ジャック。危険な海にいないで、これからは私たちと一緒に暮らしましょう。孫まで死なせたくないわ」
「ばあちゃん、俺……無理だよ。俺は父ちゃんみたいな立派な海賊になるって決めてるんだ」
「なにを言ってるの。海賊が立派ですって？　仮に立派だったとしても、あなたはまだ子供よ。大きくなったらなればいいじゃない」
「俺はずっと海で育ってきたんだ」
「じゃあ、たまには陸で……ね？」
離すまいと腕をつかむ祖母に、ジャックは戸惑っていた。ここに残る気はさらさらないが、自分と血の繋がっている老婆である祖母

を邪険には出来ないと、子供心に思ったのである。
「ジャック。まだかよ」
その時、船で待っていたエムソンがしびれを切らしてやってきた。
「エムソン！」
まるで助け舟かのように、ジャックはエムソンに駆け寄る。
「ん？　誰だ？」
「ジャックの祖母です」
「ああ……」
エムソンは、ジャックの祖母をじっと見つめる。踊り子だったジャックの母親も綺麗だったので、その面影が少なからずある。
「ジャックを返してください。赤ん坊の頃から連れ回して、私たちが引き取る隙も与えなかった……でも、もう離さないわ。荒くれの海賊たちと一緒より、血の繋がった家族と一緒に暮らすほうがいいんです。まだ十二歳だから、人生やり直せるわ」
祖母の申し出に、エムソンはあからさまに嫌な顔を見せた。
「確かに俺たちは荒くれだけど、人の道を外れたことは一度もない。もちろんジャックに危険な真似をさせたこともない。俺たちに血の繋がりはないが、それ以上のもので繋がれてんだよ。なにより、ジャックの両親に頼まれてるからな。あんたの気持ちはわかるけど、ここへこいつを置いていくわけにはいかないんだ」
「この子の両親に頼まれてるって……それでも、血の繋がりがあるほうが家族だわ」
「じゃあ血の繋がりがあるって言ったら、納得するか？　俺はチャックの弟だ」
エムソンの言葉に驚いたのは、祖母だけではない。ジャックもまた、大きな目をより一層見開く。
「嘘だ！　エムソンが俺のおじさん？」
「なんだよ、ジャック。俺がおじさんじゃ嫌か？」
「そんなことないけどさ……」
「そんな取ってつけたような嘘、信じると思いますか？」

祖母は尚も引き下がらない。エムソンはため息をつき、ジャックを見つめる。

「まあ、信じる信じないはこのさいどっちでもいいや。じゃあジャック、おまえが決めろ。確かにこのばあさんは、おまえのばあさんみたいだからな。今、船を下りたからって、二度と船に乗れないわけじゃない。おまえが望むなら、しばらくここで暮らしてみるか？」

「嫌だ！」

エムソンが言い終わらないうちに、ジャックはそう言った。

「ジャック……」

「海の上で生まれた俺には、陸上の生活なんか向かないや。今だって陸酔いしかけてるくらいだからな。でも、ばあちゃんに会えてよかったよ。エムソンがおじさんってことも嬉しいし。船のみんなは家族だと思ってたけど、やっぱり血の繋がりがある人がいるってのもいいもんだ。数年経ってまたこの街に戻ってきたらさ、今度はしばらくいられるように船長に頼んでみるよ。だからそれまで元気でいてよ、ばあちゃん」

ジャックの言葉に、祖母はジャックを抱きしめる。

「納得は出来ないけどわかったわ……思ったよりしっかり成長していたのね。でも、とにかく気を付けて」

「わかってるよ。ばあちゃんもさ、気を付けてな」

満面の笑みで笑うジャックにつられるようにして、祖母とエムソンも微笑み、その場から去っていった。

「しかし、エムソンが俺のおじさんとはなあ」

帰り道、ジャックが笑ってそう言った。

「ああ、あれ。嘘」

エムソンは、悪気もないようにそう答える。

「なに？　嘘だって？」

「っていうのも嘘」

「どっちだよ！」

「どっちでもいいだろ。俺たちは本当に家族なんだからさ」

航海は果てしなく続く。

３４４　第三世界

都内のとある中学校の朝、一人の少年・水沢学（みずさわがく）が、友人たちに興奮気味に口を開く。

「今日さ、夢の中で叔父さんに会ったんだよ」

学の言葉に、少年たちが顔を見合わせる。

「叔父さんって、植物状態の？」

学の叔父は最近、事故に遭って植物状態に陥り、病院にいるのだ。

友人たちは気遣って、あまり口にはしないのに、学のほうからそんなことを振ってきたので、少し戸惑っている。

だが、学は気にも留めない様子で、言葉を続けた。

「そう。こっちじゃ反応もしないのに、夢の中ではピンピンしててさ。もうすぐ目が覚めるっていうんだ」

「夢の話だろ。おまえ、そういうの多すぎ。夢の話に付き合う俺らの身にもなれよ」

「それが違うんだって。さっき病院から電話があって、叔父さんの体に反応があったっていうんだ！」

「ええ？　マジかよ！」

「うん。まだ目は覚めてないみたいだけど、顔や手がピクピク動いたらしい」

「すげー！」

盛り上がる少年たちを、横目で見つめる少年がいた。

顔立ちの整ったその少年の名は、氷川世羅（ひかわせら）。イタリア生まれのハーフだが、最近、この学校へ転校してきている。

「学くん」

放課後の教室。帰り支度をする学に、世羅が話しかけた。

「おお、転校生かよ」

学は世羅とあまり話したことがなく、呼び止められたのを不思議

そうに見つめる。
「今日、一緒に帰らない？」
「え、いいけど……俺、部活だぜ？　おまえ、まだ部活入ってないんだろ」
「待ってるよ。ちょっと話があるんだ」
「怖いなあ。あんましゃべったことないのに話かよ。今じゃ駄目なの？」
教室にあまり人影はいない。世羅は辺りを見回すと、学の顔を見つめる。
「学くんがいいなら、今でもいいよ」
「そう？　じゃあ、部活まで少し時間があるから、今でいいよ。なんだ？」
「今朝話していた、夢のこと……」
「夢？　所詮、夢だぜ？」
学が自分の席に座ると、世羅はその前に座り、学をじっと見つめ続ける。
「まつ毛なげ……」
「学くん。こんなことを言うと変人だって思うかもしれないけど……」
世羅はためらいながらも、静かに口を開いた。
「現実の世界と夢の世界は繋がっているんだ」
やがてそう言った世羅に、学は口を曲げる。
「は？　おまえ本当に変人だな。なに言ってんだよ。くだらねえ」
「本当だよ。僕らは眠っている時、夢を見る。その時は、別世界……つまり、夢の世界に意識が飛ぶ。夢の世界で、別人物として生きてるんだ」
「じゃあなんだよ。今あるこの現実は、夢の世界で見ている自分が見ている夢だとでも言うのか？」
「その通りだ」
真顔で答える世羅に、学は立ち上がる。

「……くだらなくて付き合ってられねえ。そんなこと言ってると、クラスでハブられるぞ」
「信じられないならそれでもいい。ただ、僕に協力してくれるなら、僕が叔父さんをこっちの世界に戻してあげられるよう努力する」
聞く耳持たない学は、世羅の言葉に振り向いた。
「なんでおまえにそんなことが出来るんだよ」
「僕はこのことに気付いた一人だから……意識すれば、夢の世界で好きなところに行ける。眠っている他の人の意識にも入り込むことが出来る。そう考えてる」
「おまえの仮説なんだろ。本当にそんなことが出来るなら、やっていただきたいけどな」
「僕だって万能じゃない。でも、少しは鍛えてる。努力なら出来る」
「じゃあ、まずは叔父さんを起こすことだ。出来たら信じてやるよ。じゃあな」
教室から出ていく学の後ろ姿に、世羅は叫んだ。
「夢で会おう！」

「何が夢で会おうだ……馬鹿馬鹿しい」
その夜、寝付いた学は、一瞬のうちに夢見に入った。
そこは夢の世界の学校で、前の席には世羅がいる。
「やあ、また会えたね」
不敵に微笑む世羅に、学は冷めた瞳で見つめる。
「夢の中じゃ、今日あった出来事をもう一度見て、ストレスを軽減させるって聞いたことがあるけどな」
「でも君と会えた。君は無意識に、僕と会おうとしてくれたってことだよ」
「わかったよ。じゃあ、叔父さんを本当に目覚めさせてみせろよ」
「それは僕より、君のほうが出来るよ」
その言葉に、学はため息をついた。
「話が違うだろ。さっきはおまえが出来るって……」

「努力するって言ったんだ。でも初日から君に会えたから、君には十分素質があるってこと。本当に叔父さんを目覚めさせたいなら、叔父さんに会うんだ。会って説得するんだ。こっちが夢の世界で、現実では目覚めないということを教えてあげればいい」

「俺が？」

「顔見知りの君がやるほうが、効果があるはずだ。そろそろ消える……続きは叔父さんが目覚めてからでいい。いいね。まだ初日だから、このことは忘れるかもしれない。でも忘れたとしても、叔父さんを目覚めさせることを忘れないで。また夢で会おう」

そう言うと世羅は消え、辺りはとある街角になった。学は一瞬にして今あることを忘れ、街の中を歩いている。

「なんだろう。学校にいたような気がするけど……ああ、明日も朝練だから早く寝なくちゃ……いや、何か忘れてる気がする。叔父さん……そうだ、叔父さんに会わなくちゃ……」

すると、一つのビルが見えてきた。

「あそこは叔父さんの勤めていた会社だ。ちょっと覗いてみるかな」

学はそう言いながら、会社の中を覗いてみる。とある部署には、学の叔父が日常のように働いている。

「叔父さん。そうだ、叔父さんと話さなくちゃ。何をだっけ……そうだ、説得。何を説得するんだっけ……」

次の日、学校に着くなり、学は世羅を見つめた。世羅は学に気付かないふりをして、いつものように本を読んでいる。

「おはよう、学。世羅がどうかしたのか？」

友人たちの問いかけに、学は我に返って首を振る。

「なんでもない。ただなんか……親近感みたいなの、急に湧いてさ」

「あいつにか？　ハーフだからって女にモテまくりで気に食わねえ」

「ひがみ根性、見苦しいぞ」

「なんだと」

その日も次の日も、またその次の日も、学は夢の中で世羅と会った。

「やっぱり忘れちゃったみたいだね。でもまあ、最初はこんなものだよ。今日のことも忘れちゃうとは思うけど、根気よくいかなきゃ。叔父さんを呼び戻したいんだろ？」

世羅の言葉に、学は頷く。

「もちろんだ」

「じゃあ、今日は僕も叔父さんのところに一緒に行くよ」

しばらくして、世羅がそう言った。

「おまえが一緒に？」

「うん。知らない僕が行くのはよくないと思ったけど、もうこうして君とはたくさん夢の中で会ってるし、少しは心を許してくれたみたいだから」

そう言うと、二人の目の前に、学の叔父さんが現れた。

「叔父さん！　えっと……なんだっけ」

学の言葉に、世羅は苦笑する。

「学くんの叔父さん。僕は氷川世羅といいます。ここは夢の中なんです」

「そうだ！　みんな叔父さんを心配してるよ。目を覚まして！　叔父さん、この間俺に言ったじゃないか。もうすぐ戻るって。叔父さん、ここが夢の中だってわかる時があるんだろ？　あれから少し体が反応したりしてる。その調子で諦めずに頑張って。夢に満足しないで、目を覚まして、叔父さん！」

次の日の早朝、学は涙をためた母親に起こされた。

「母さん……？」

「学、今すぐ病院に行くわよ。叔父さんが目を覚ましたの！」

「え！」

喜びと同時に、学はふと世羅のことを思い出した。

「世羅……俺、今度は覚えてるぞ」

その日の放課後、学は世羅を呼び出す。

345　シェフ

小さな街のレストランで、俺はシェフをしている。
小さいながらも人気の出てきたこの店は、俺の腕が認められてマスコミに出始めて以来、修行という名の素人シェフが後から後から湧いて出る。
「オーナー。いい加減にしてください。俺はもう、マスコミには出ませんから。それに、修行はまだいい。でも誰も続きはしないじゃないですか」
閉店後、俺がそう言うと、この店のオーナーが眉を顰める。
「すまないな。でも、君のおかげでここまで人気が出たんだ。マスコミに売り出すのはいいことだろう。それに、弟子が育たないのは、君が厳しすぎるから……」
「こちらはプロとして通用するように育てたいだけです。生半可な人間は元よりいらない」
「それはそうだけどね……」
その時、一人の女性が入ってきた。
「あ、すみません。もう閉店で……」
「いえあの……私、石坂牧子と申します。この店で修業させてもらいたいのです」
毅然とした態度でそう答える女性は、まだ見た目もチャラチャラした若い小娘である。
「女か」
そう言った俺に、女はむっと俺を見る。
「女で悪いですか？」
「俺の下で働くには、女はいらない。男でさえ音を上げる。食材の移動、下ごしらえ、かなりの重労働だ。女には無理だ」
その言葉に、女はにっこりと笑う。
「シェフですね。テレビや雑誌で拝見しました。重労働も、先輩の

叱咤も小言も、何でも受け入れる覚悟があります。それに、女性だから無理っていうのはおかしいです」

「何がだ？」

「男は口を揃えて、女は料理が出来るもの。家庭にいない女は駄目だなんていう人が多いですが、それならどうして仕事になると、男の職場だなんて言われなきゃならないんですか？　今の時代に、男尊女卑なんて古いです」

なんのためらいもなく言い放った小娘に、俺は笑った。

「理屈っぽいお嬢さんだな」

「パワハラ、セクハラ、耐えてみせます。私の夢は、こんなところで終わりませんから」

「夢があるのか」

「はい。私の夢は、自分の店を持つこと。美味しい料理を提供することです。よろしくお願いします！」

なんだか今まで名乗りを上げた男どもとは比べものにならないほど、芯の通った感じのする女だった。

以来、彼女はこの店に働き始め、俺の元で修業する最年長者になった。

そして数年後には、俺は彼女の夢であった彼女の店で、彼女の下働きとして雇われることとなる。

346　ヘタレ魔王

ここは魔界にある、第一魔界ノ学園。人間界でいうなら結構な金持ち学校。偏差値も高い。

そんな生徒の中でも一際高い身分であるのが、俺。名はアークという。

チビでヘタレで身分に構わずからかわれたりもするけれど、この国……いや、この魔界という世界の王の息子である。

とはいえ、十三番目で末っ子の王子だから、特に将来を期待されているわけでもないし、実際になんの力も持っていないから、俺はとことん劣等生という位置づけをされている。

それもこれも、目の前にいるこいつのせいだ。

「がおー」

俺の机の上には、二十センチほどのドラゴンがいる。

この学園では、中等部一年にもなれば自分のしもべとなるドラゴンやゴブリンを手に入れるのだが、俺のドラゴンといえば成長も遅く、他のやつのドラゴンなんて、大きいやつではすでに一メートルを超えるドラゴンもいるのに、まるで俺自身を見ているかのようで、毎日が悪夢だ。

「怖くないんだよ、ラルゴ。ラルゴなんて遅そうな名前つけたのがいけなかったのかな」

「がおー」

ちなみにこのラルゴ、未だ火も噴けない。

「よお、アーク。おまえのドラゴン、まだ火も噴けないのか？」

そう声をかけてきたのは、貴族である親友・シドだ。シドは学年一の優等生で、魔王である父からも可愛がられている。

「うるさいな。大事に大事に育ててるから、大きさや火なんて関係ないんだよ」

「見栄張っちゃって。それより聞いたぞ。上の兄上たち、天使狩り

に出かけたって？」
　目を輝かせるシドに、俺は口を曲げた。俺の上の兄貴たちは、よく狩りを楽しんでいる。仕留めた天使は食用だ。
「いつものことだよ。金持ちの道楽」
「いいなあ、俺も早く天使狩りに行きたいよ。地の果てまで行くんだろ？」
「狩りなんてくだらないよ。大体、天使なんて猟師に任せればいいんだ」
「猟と狩りは違うだろ。くぅ、考えただけでしびれる」
　そう言うシドを尻目に、俺はラルゴに餌を与える。あまり血なまぐさい話は好きじゃない。
「おい、アーク。聞いてるのか？　おまえ、本当にこういう話は乗ってこないな。だからヘタレとか言われるんだよ」
「言ってるのはおまえだろ。俺は大人になっても狩りなんてしないからな」
「ははーん。小さい頃に狩りに連れて行ってもらった時、兄上のドラゴンから振り落とされた恐怖症がまだ消えてないんだな」
「うるさいぞ、シド！」
「図星だろ。だからドラゴンにきちんと向き合えないんだよ。おまえのラルゴが成長しないのもそのせいだ」
「うるせ！」
　シドを追い払い、俺はラルゴを見つめた。
「おまえが成長しないのは、俺のせい……？」
　目の前のラルゴは、何も気に留めた様子もなく、くすぶった口の中から何度も息を吐く。でも出したいのにまだ火が出せないのは、やはり俺のせいなのだろうか。
「がおー」
「……そうだよな。王子なのにみんなから馬鹿にされてるような俺だもんな。なんの取り柄もないしさ……」
「ガオー！」

その時、突然、猛獣のような声とともに、ラルゴが思い切り火を噴いた。
「うわ！」
とっさに火も通さぬマントで避けた俺の周りで、同級生たちがどよめき立つ。
「な、なんだよ、今のパワー。俺のドラゴンの五倍……いや、十倍は勢いがあったぞ」
そう言ったのは、学年一大きなドラゴンを持つ同級生だ。
「やっぱり……魔王様の子だ。巨大なパワーを持ってるんだな、アーク」
急に手の平を返したように、口々に同級生たちが言う。それは、主人の力加減でドラゴンの力量も決まるからだ。つまり、俺はまだ力もないと思っていたが、潜在能力だけはあったと今証明されたことになる。
「お、おい、アーク。おまえ、その力……どの兄上たちよりも大きいんじゃ……」
シドの言葉に、俺はラルゴを見つめる。
初めて火を噴いたとはいえ、今までずっと火を噴きたそうにしていた。
「もしかして、ラルゴ……おまえ、ずっと力を抑えてきたのか？ここが……狭い教室だから……」

その日、俺はシドとともに、ラルゴを連れて荒野へ向かった。ここなら誰にも迷惑がかからない。
「よし、ラルゴ。遠慮なく噴け！」
俺の合図を待っていたと言わんばかりに、ラルゴは思い切り火を噴いた。
その勢いは想像を遥かに超え、地平線の先まで一直線に業火が続く。
と、同時に、俺の体が浮き上がった。

「わ、わ、なんだよ、これ！」
「覚醒したんだ！　それがアークの力だ。これからは、訓練次第でどうとでもなるぞ」
　まだコントロールが出来ない俺の手を掴み、シドが言った。シドの顔は青ざめ、まるで俺という未知なる力に脅威すら感じているように見える。
「おまえも経験ある力か？」
「浮いたことはないけどね。でも小さいものなら浮かせられる。アークは力がなかったんじゃない。ただ遅咲きだっただけだ。これからどんどん力が出てくるはずだ」
「ああ、すごい力がみなぎっているのが自分でもわかる。なんでも出来そうだ。天使狩りにでも行けそうだ」
「すごい変わりようだな、アーク。でも、それでこそ魔王様の子だ」
　その後、俺はラルゴという相棒とともに、末っ子ながらにこの国の魔王になる。シドは俺の右腕になったが、もう誰も俺に口を出したりはしない。名実ともに、俺は魔界の王なのだから――。

３４７　完璧な計算

仲間は三人。狙うは閉店直後の銀行。俺たちは今日、銀行強盗をする。

この日が来るまで、店内の人の動き、カメラの位置、警備員の配置まで事細かに調べ上げたため、俺たちはもう目を瞑っていても銀行内に忍び込むことが出来る。

金庫のナンバーは、俺の出番。俺に開けられない金庫なんてないんだ。

「もうすぐだな」

俺はそう言って、時計を見つめる。ここ半年ずっと調べてきた。閉店直後の銀行は、一瞬警備が甘くなる。行員たちが帰るため、人が多く流れ出るのだ。室内に人がいた場合も想定したが……即効性の催眠ガスまで用意した俺たちに、負ける気はしない。完璧な計算だ。

「準備はいいか。忘れ物はなしにしてくれよ」

「もちろん。いつでもいいよ」

「じゃあ、そろそろ行くか」

ドキドキしながらも、俺たちはすでに勝ち誇ったかのように、銀行へ忍び込む。もちろん、真正面からは入れない。従業員入口からも入らない。天井、地下、いろいろ調べたが、一番入りやすいのは、隣にあるビル……誰も入らない資材倉庫の部屋の奥に、俺たちは夜な夜な穴を開けていたのだ。それを貫通すれば、もうそこは銀行の中である。

「クックックッ。こんなに簡単でいいのかねえ」

仲間の一人が、今まさに開いた入口を見て、思わず笑う。

俺もまた、自分たちの完璧なまでの計算に、笑みが零れずにはいられない。

銀行内に入ると、薄暗い照明の中に数名の行員が残っていた。
俺たちは気付かれないように、催眠ガスを部屋に充満させる。このあたりは想定内。俺たちはマスクをしているから大丈夫だ。
数分の時間を待って、俺たちは静かになった銀行内で、悠々と作業を開始する。
「俺に開かない金庫はない」
特殊な銀行の金庫も、俺にかかればお手のもの。子供みたいなもんだ。
「そろそろ行くぞ。長居は無用だ」
すべての金には手を付けず、持てるだけの金を詰めて、俺たちは元来た道を戻っていく。持てるだけといっても、ボストンバッグ五つ分だ。力しか使えない男でも、仲間にしておいてよかったと、この時ばかりは思う。
あとは颯爽と車に戻ればいい。車は目と鼻の先。裏路地に停めてある。
「もう少しだ」
思わずそう言って裏路地へ入りかけた瞬間、俺は立ち止まった。
「いて！」
その時、後ろを来ていた仲間が俺にぶつかり、目の前の人物がこちらを向く。
そこには、警官がいた。
「これはあなたたちの車ですか？」
切符を切ろうとしていたのか、すでに何かを記入中の警官二人が、俺たちに向かってそう言った。
想定内――ではない。
「い、いえ……違います」
普通にふるまっているつもりでも、こういう時の警官の鼻というのは厄介だ。
すぐに怪しいと判断したのか、俺たちに近づいてくる。

「逃げろ！」
ヤバイと思ってすぐに、俺は仲間にそう指示し、金を捨てて一目散に逃げ出した。
「ま、待てよ」
続いて仲間たちも走り出すが、金の重みに速度が出ない。
「馬鹿野郎。金なんか捨てちまえ！　捕まってもいいのか」
車や物からは証拠は出ない。逃げ切ればこちらの勝ちだ。また別のことを考えればいい。
俺はそう計算したが、金にがめついだけの頭の弱い仲間たちには、うまく伝わらない。
金を抱えたまま、仲間の一人が捕まったのがわかった。
「クソ！　あいつ、しゃべらねえだろうな」
人は信用していない。俺だけでも逃げ切らなければ。
だが、もう一人の仲間も捕まった。
「大丈夫だ。警官は二人。俺を捕まえられやしない」
するとその時、目の前にパトカーが止まった。応援らしい。
「ク……クソゥ！」
俺は観念した。
駐車違反とは想定外……いや、ここ半年調べ上げた結果では、この時間この程度の駐車違反では何事もなかったはずだが……一年に一度あるかないかくらいの確立だろう出来事に当たってしまったことは、不運以外のなにものでもない。悪い事は出来ないということか……完璧な計算などないという、俺は身の程を知らされていた。

３４８　ねェ、こっち向いて？

彼女は陽だまりが好き。

もこもこのラグの上で、時折ぐるぐる回る。

おもちゃに飽きたら、ちょっと水でも飲みなさいよ。

自分だってもこもこの毛で、さわるとほら、こんなにも気持ちがいい。

犬だってこと忘れてるの？

安心しきった顔で、仰向けで眠るキミは、それだけで私を幸せにしてくれる。

芸なんてしなくていいの。一緒に遊ぼ。

雨が止んだらお散歩しようね。

ねェ、こっち向いて？

ほら。虹が出てるよ。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

349　悪女

なんで？　自問自答しても、私は私がわからないわ。
他人のものほど欲しくなる。子供の頃からそういうこともあったけれど、大人になったらサイアクだ。私は、悪女と呼ばれるに相応しい。

「栞には彼氏紹介しないよ。盗られそうだもん」
友達の彼氏を盗ったことはないけれど、そう言われて、少なからずショックで、少なからず図星な感じに、私は苦笑する。
「いくら私でも盗らないよ。友達の彼氏なんか」
そうは思っても、どんな彼氏なのか気になっている私がいる。

「ねえ。栞って彼氏いるの？」
別の友達の言葉に、私は頷く。
「いるよ」
でも、人に自慢出来る彼氏じゃない。不倫も何度か経験したけど、今回の彼氏は彼女持ち。私にも独占欲はあるけれど、お互いわかってて付き合ってるんだから、向こうに何人彼女がいようと、私には関係ないの。
「へえ。どんな人？」
「うーん、まあ普通だよ。そっちは？」
はぐらかすように、私は逆に尋ねてみる。
「私は、好きな人がいるんだ」
「へえ。誰？」
「えへへ……実は、中田先輩」
「ええ？　あの中田先輩？」
同じサークルの先輩なので、面識はある。でも、お世辞にでも格好いいとは言えず、何より私のタイプではない。

「そう。あの中田先輩」
「どこがよかったの？」
「優しいところ」
「へえ。優しいんだ？」
「うん。今度告白してみようかなって」
「いいんじゃない？」
私はそう言ってみたものの、いつもの悪い癖で、中田先輩という人に興味を持った。

次の日、サークルの席で、私は中田先輩を観察する。
どこがいいんだろう……見た目にはまったく好みじゃない。でも、確かに私も優しさは感じている。優しいだけの男というのもなんだが、彼の魅力を見出そうと思ったのは、共通の魅力を感じて、友達と盛り上がりたいという気持ちもある。
「栞ちゃん。俺の顔になんかついてる？」
中田先輩に言われ、私は慌てて顔を背けた。
「いえ、なんでも……すみません」
そう言った私に、中田先輩が小声で近付く。
「あのさ、この後二人でどっか行こうか？」
ああ、やっぱり私は悪女なのか。友情よりも好奇心が前に出る。
どうせなら、非情な悪女になりたい。誰にも文句言えないくらい綺麗になれば、寂しくもなくなるかしら。
友達が見ている手前その日は断ったが、数日後、私は中田先輩と二人きりで会う約束をした。もう私は、私自身を諦めてさえいるのだ。

350　転校生

海と山しかない小さな町。テレビゲームよりも、友達と外で遊ぶほうが楽しい。そんなドのつく田舎町に、転校生がやってきた。転校生というだけでも、うちらにとっては大事件なのに、東京からやってきたなんていうのは、もう宇宙人がきたのと一緒だ。

「坂木颯（さかきはやて）です。よろしくお願いします」

田舎の泥臭さみたいなものがなく、髪の先まで綺麗ですらりと背の高い彼は、一クラスしかない六年生の……私の教室にやってきた。

「はあ。やっぱ東京もんは名前からして違うのう」

幼馴染みの瑛太（えいた）にそう言いながら、私たちは帰り道を歩く。

「なに言っとんのや。俺かて瑛太なんて名前、カッコええやろ」

「確かにこの変じゃあんまりいないけど……でも颯なんてカッコええし」

その時、後ろから近付く気配に、私たちは振り向いた。するとそこには、転校生がいる。

「なんや。転校生やないかい。今ワレの話しとったんやで」

瑛太がそう言った。

「ああうん……同じクラスだったよね。よろしく」

「なんや。すかしやがって」

「やめなよ、瑛太。私、千夏。戸森千夏（ともりちなつ）。よろしゅう」

瑛太をなだめながら、私は初めてそう名乗った。学校じゃ、みんな物珍しげに彼に寄っていったのだが、私は少し恥ずかしかったので、話すのも初めてだ。

「戸森さん。よろしく」

「千夏でええよ」

「じゃあ僕は颯でいいよ」

「ほんじゃ、俺は瑛太って呼んでええよ」

突然、瑛太がそう言ったので、私たちは笑った。

そんな些細なきっかけで、私は颯とつるむことが多くなった。

颯は勉強もスポーツも出来たので、すぐにクラスのみんなとも仲良くなった。でも一つだけ人と違ったのは、両親がいないこと。お母さんが亡くなり、お父さんだけでは育てられないと、祖父母がいるこの町へ来たのだと、私たちにだけはこっそり教えてくれた。

「そうなんや……」

私の許容範囲を越えた事実に、私は押し黙る。自分のお母さんがいなくなったら、そんなことは想像もつかない。

「でも僕、この町好きだよ。千夏にも瑛太にも会えたし、毎日楽しいから」

何も言えない私たちに、颯の優しさが沁みる。

「颯。ずっと友達でいようね」

やっと出てきた私の言葉に、そばにいた瑛太も、海を見つめたまま立ち上がる。

「ああ。俺たちはずっと友達や。おまえがよそもんだからっていじめるようなやつがいたら、俺がぶっしゃげちゃる」

「ありがとう。瑛太、千夏。ずっと友達でいよう」

私たちは夕日の中で、固く手を取りそう誓った。

でも、大人になるのは残酷だ。嫌でも亀裂が入っていく。

同じ中学に進んだ私たちだが、中学三年生ともなれば、部活も受験も大変で、色恋沙汰も出てくる。

そんな時、事件が起こった。

「瑛太と颯が喧嘩しとる！」

その言葉に、私は慌ててグラウンドへと出ていった。

瑛太と颯は共にサッカー部で、部活の前に起こったことらしい。

「なにやっとんの！」

お互い掴み合った二人に私がそう叫ぶと、瑛太が颯の手を離した。

「女は引っ込んでろや！」
いつになく苛立った様子の瑛太は、私に向かってそう言う。颯もまた、私を見ようとはしない。
「……男だとか女だとかは関係ないやろ。何があったか聞いとんの」
「知るかい。そんなやつほっとけ、千夏。来年にはもう、ここにはいないんやから」
瑛太の言葉に、私は颯を見つめる。
「颯……？　嘘やろ？」
もうずっと、颯はここにいるものだとばかり思っていた。だから友達でいようと誓ったはずだ。離れて友達でなくなるわけではないが、それでもやっぱりショックだった。
「……本当だよ。高校は、東京の高校に行く。もう子供じゃないし、父さんも帰って来いって」
颯は静かにそう言った。
「でも……僕たちずっと友達だろ？　離れたって、友達じゃなくなるわけじゃない。そうだろ？」
すがるような目で見つめる颯に、私は目を伏せる。
「ごめん、颯……私だってそう思いたい。でも、やっぱりショックや。お父さんのところに戻れること、素直に喜んであげられん」
そう言って、私はその場から去っていった。

それから卒業までの数か月。私と颯と瑛太、ほとんど話すことはなくなっていた。でもきっと、颯の気持ちは変わらないだろう。
ある日、卒業まであと少しという日の朝、家を出ると、そこには颯の姿があった。
「颯……どうしたん？　その顔……」
颯の顔は殴られたように、痣になっている。
「瑛太にちょっとね」
苦笑する颯に、私は口を曲げた。
「瑛太のやつ……本当、いつまでも乱暴なんやから」

「いいんだ。僕があいつの立場なら、もっと殴ってた……一緒に学校行こう」
「うん……」
歩き出す私の隣には、颯がいる。二人きりなんて何年ぶりだろう。そんなことを考えていると、颯が口を開いた。
「卒業式の日、東京に行くよ」
そのことを言うために来たんだと、私は悟った。
「……そっか」
「千夏……僕は千夏のことが好きだよ」
「えっ？」
「千夏は、僕のことをただの友達と見ているかもしれない。それでもいい。でも、これだけは伝えておきたかったんだ。友達のままでもいいから……僕のこと、忘れないでいてほしい」
勇気を出して言ったんだろうその言葉に、不甲斐ない私は返事すら出来ない。
無言の通学路を、私たちはただひたすらに歩き続けていた。

そして、卒業式――。
不意に見た颯は、クラスメイトに笑いながらも、どこか寂しげな表情を見せている。数年前、お母さんを亡くして、一人見知らぬこの町へやってきた頃のように……。
「千夏！　行くぞ、ほら！」
卒業式が終わるや否や、私を自転車で出迎えたのは、瑛太だった。瑛太は高校も同じところへ通うことになっている。
「行くって、どこに？」
「駅に決まっとるやろ。おまえはどうせ意気地がないから、颯にさよならも言ってへんのやろ」
「そんなん、瑛太かて一緒やろ」
「あほう。俺はあいつを殴った日、これで許しちゃるって言ったわ。ええから乗れ」

瑛太の自転車に二人乗りをし、私たちは駅まで走っていく。
「瑛太……私、嫌だよ。颯と離れたくないよ……！」
やっと出た本音とともに、私の目から涙が溢れる。
「あほう。そんなもん、颯に言え。だけどな。あいつの決心鈍らせるんやないぞ」
「なによ、それ。言ってることめちゃくちゃ……」
「じゃあ言っちゃる。俺はな、おまえのことが好きや！」
「ええっ？」
「でもなあ、おまえの気持ちはとうにわかっとんのや。おまえは颯が好きなんや。だから颯に譲っちゃる。俺は殴ってすっきりしたしな」
「だから颯を殴ったん？　っていうか、勝手に私の気持ちを決めんといて」
「おまえの気持ちに気付いてへんのは、おまえと颯くらいなもんや。ほら、行け！」
駅に着くなり瑛太に後押しされ、私は無人の構内へと走っていく。目の前には、学校から直行したとみられる、颯の姿があった。
「千夏……」
私は涙を拭いて、颯に精一杯の笑顔を見せた。
「また……戻ってくるよね？　それまで私、待っててもええ？　私も、颯のことが好き」
やっと素直に言えた私に、颯は何度も頷き、私の手を取る。
「必ず戻るよ。手紙も書く。だから待って」
「うん。その言葉だけで十分や。私、待っていられるわ」
その時、電車の発車ベルが鳴り、颯は名残惜しそうに私を見つめる。
「行って。そんなに本数ないんだから。新幹線の時間もあるんやろ？」
「……ありがとう、千夏。元気で」
「颯！　千夏のことは心配すんな。高校行っても変な虫つかないよ

う、俺が見張っといてやるからな」
遠くから、瑛太がそう言って手を振る。
「ありがとう、瑛太！　頼むな」
そうして、電車は颯を乗せたまま、去っていってしまった。

それでも、私は果てしなく遠い場所へ旅立った颯との愛を育んでいる。手紙で、電話で、バイトを始めてからは携帯も買ったので、メールもするようになった。
“今度の夏休み、そっちに行くよ”
高校二年生の初夏、そんなメールに、私は家を飛び出した。
「瑛太！　瑛太！」
近所の瑛太の家に駆け込むと、瑛太は部屋で寝そべり、くつろいでいる。
「な、なんや。人んち勝手に……」
「見て！　颯が来るって！」
「なに？　見せろや！」
瑛太も自分のことのように喜び、私から携帯電話を奪う。
今年の夏休みは、きっと毎日が楽しい。私たち三人は、友達以上の固い絆で結ばれているんだと、今すでに実感してる――。

351　コーンウェル探偵の依頼ファイル

潮風が吹く石畳の街外れ、雑居ビルの二階に、その事務所はあった。

エリック・コーンウェル。細面ですらりとした体にスーツをまとい、スケジュール帳に目を通す。一人きりの事務所では、助手も一人としていない。

「それでは、マーティン夫人。あまり時間に余裕がありませんので、今すぐお宅にお伺いしてもよろしいでしょうか？」

スケジュール帳を畳みながら、コーンウェルは目の前に座っていた夫人に言った。

夫人は三十代前半くらいの若い女性で、隣町に住む大金持ちのマーティン家の若夫人である。今回、とある事情を持ち合わせ、困り果てた様子で依頼を持ってきた。

「ええ。こちらとしても、出来るだけ早いほうが助かります」

「それでは、すぐに参りましょう。詳しいことは、馬車の中でお聞きしますよ」

コーンウェルは持ち前のせっかちさを見せつけるように立ち上がる。だが、これでも名の売れた探偵で、警察からも一目を置かれる存在である。

「わかりました。では、一緒に参りましょう」

マーティン夫人はそう言って、コーンウェルとともに自宅へと向かっていった。

「それで、マーティン夫人。私に依頼したいというものは、何かの暗号を解けということですね？」

「はい。先日、義父が亡くなりまして、遺言書からいくつか私が直接相続したものがあるのです。義父は私を可愛がってくださっていましたし、私が一族の中で一番献身的に介護したとおっしゃってく

ださって……でも相続したものの一つは「時を告げる鳥」だと……屋敷にある古い鳩時計のことだと思うのですが、今は壊れていて動かず、その中にいる鳩も、今では見ることが出来ません。そして義父は生前、謎を解けたらそれを相続させるとも言っておりまして――」

「ふむ。その遺言書を見せて頂けますか？」

「はい、こちらに」

そこには、各一族あてに、一つ一つ細かく相続の品が書かれていた。

「ヘラ・マーティン。これがあなたの名前ですね？」

「ええ、そうです」

コンウェルは、ヘラ・マーティン宛の遺言を見つめる。

“ヘラ・マーティンには、法律で定められた金銭の通常相続分に加え、銀食器、書斎にあるすべての書物、競走馬のアトランとヒュース、そして時を告げる鳥を相続させる。”

「ふむ……他の一族にも、すべてが銀食器のように特定の物を指しているのに、なぜこの最後だけ「時を告げる鳥」なんだ？」

生え始めた髭を撫でながら、コーンウェルは首を傾げる。

「義父はいたずら好きな人で、推理小説や謎解きも好きだったんです。それをお相手するのも私の役目でしたから、きっとこれが最後の謎解き……でも「時を告げる鳥」というのは、きっと屋敷にある古時計に違いないんです。あの古時計を私が気に入っていることを、義父は知っていましたから……」

「なるほど。ではやはり、実物を見なければなりませんね」

二人はそのまま、マーティン家へと向かっていった。

屋敷に着くなり目に飛び込んできたのは、玄関ホールに陣取った大きな古時計だった。ところどころに宝石の装飾がなされ、高価な

物だと感じさせる。だが、肝心の針は動いていない。
「なるほど立派な古時計ですな」
「はい。これだけでも大変価値のある古時計です。窓からは鳩が飛び出す仕掛けになっていますが、義父が入院された頃から動かなくなってしまって……」
「では、お義父様があなたへの最後のゲームとして、細工を残したのは確かのようですね。そんなに見たければ壊せばいいと思いましたが、それではゲームとして負けでしょうし、これだけ立派な時計を壊すのは忍びないですな」
「はい。下男に言って窓をこじ開けようとはしたのですが、ビクともしませんでした」
「では、少々拝見」
コーンウェルはそう言って、大きな古時計を隅から隅まで見つめる。
「窓を拝見したいので、高い台などをご用意願えますか」
そんな指示に、すぐに下男が脚立を用意した。すかさずコーンウェルは脚立を上り、遥か上にある鳩時計の窓を見つめる。
「ん？　これは……」
何かを発見したように、コーンウェルはポケットから自前の拡大鏡を取り出す。
するとそこには、小さな字でこう書かれていた。

Ｈｅａｖｅｎ
Ｍｅｔａｌｌｉｃ
Ｓｉｌｖｅｒ

「Ｈｅａｖｅｎ（天国）、Ｍｅｔａｌｌｉｃ（金属性の）、Ｓｉｌｖｅｒ（銀）……マーティン夫人！　ヒントのようなものが小さく書かれていました。Ｈｅａｖｅｎ、Ｍｅｔａｌｌｉｃ、Ｓｉｌｖｅｒと聞いて、思い浮かぶことはありますか？」

コーンウェルは、高い場所から下にいるマーティン夫人に向かってそう言った。
「いいえ……Ｓｉｌｖｅｒと言えば、お義父様から相続した銀食器くらいでしょうか」
「なるほど」
しばらく微動だにせず、コーンウェルは拡大鏡をじっと見つめる。そしてはっとひらめいたように顔を上げた。
「そうか。簡単な暗号だ」
「わかったんですか？」
マーティン夫人が、コーンウェルにそう尋ねる。
「ええ、たぶん。マーティン夫人。お義父様は推理マニアでいらした。でも、あまり捻った答えでは、あなたにわかってもらえないと踏んだのでしょうね。難しく捉えることはなさそうだ。天国、金属、銀など、ヒントとしても揃っていない。私から言わせれば、少々お粗末な暗号です」
「お粗末でも、私には理解出来ませんが……」
「まあ、見ていなさい」
もう完全に見切ったように、マーティンは時計の扉を開け、針に手を伸ばす。
「五時十分二十秒」
最後の秒針を揃えたところで、勢いよく時計の窓が開き、鳩が飛び出した。そして、秒針が進む。
「動いたわ！」
嬉しそうにはしゃぐマーティン夫人に、脚立から下りてきたコーンウェルが、大きな宝石のついた指輪を差し出す。
「これは！　亡くなったお義母様の形見です。マーティン家の女性に代々伝わるものだとか……」
「出てきた鳩の首に付けられていましたよ。これがお義父様からあなたへの、最後の贈り物というわけですね」
「ああ、コーンウェル様。本当にありがとうございます。しかし、

Ｈｅａｖｅｎ、Ｍｅｔａｌｌｉｃ、Ｓｉｌｖｅｒから、どのようにして答えを導き出したというのですか？」

その問いに、コーンウェルは苦笑した。

「なに。簡単な暗号ですよ。頭文字のＨ、Ｍ、Ｓは大文字で書かれていました。つまり、それに着目しろというヒント。これは時計ですから、Ｈｏｕｒ（時）、Ｍｉｎｕｔｅ（分）、Ｓｅｃｏｎｄ（秒）ということがわかります」

「ああ、なるほど。でも、肝心のその時間というのは？」

「それもこの単語の中にあります。ヒントはこれだけですからね」

「え？　どこにヒントがあるのですか？」

「ではご説明しましょう。まずはＨｅａｖｅｎですが、一見数字になるようなものは見当たりません。でも、この時計の文字盤もそうですが、ローマ数字として見てみればどうでしょう？」

マーティン夫人は、空で単語を書きながら、思いついたように目を輝かせる。

「Ｖですね？」

「そう、Ｖはローマ数字で五です。それと同様に、Ｍｅｔａｌｌｉｃ、これは通常「Ｉ（一）」が正解かとも思われますが、こちらは小文字でしたので、ローマ数字に見られるものは、小文字の「Ｌ」。「ｌ」が二つでローマ数字の二、Ｓｉｌｖｅｒは「ｌ」と「ｖ」が並んでいますので、「？（四）」ということになります。先程も申し上げましたように、この時計の文字盤もローマ数字です。ですから、暗号通り五時二分四秒……ではなく、そのまま針を五、二、四、すなわち五時十分二十秒に合わせてやればいい、というわけです」

なるほどしてやられたというように、マーティンはため息を漏らす。

「ああ、コーンウェル様。本当にありがとうございます。おかげですっかり胸のつかえが取れましたし、こうして無事にお義父様からの最後の品も相続することが出来ました」

「なに。お義父様も、天国でしてやったりという顔を見せているこ

とでしょう」
「そうですわね。お義父様から相続した書斎の本を見て、私も簡単な暗号くらいは解けるようになります。またお義父様が残した暗号文が見つかったら厄介ですから」
「ええ。次回は私の助けなど必要ないくらいになってくださることを期待して、私は事務所へ戻りますよ」
目的を遂げると、コーンウェルは颯爽とマーティン家から去っていった。

352　君に贈る詩

いつか君も思い出すだろうか
今日の日のこと
僕が君に触れて、頭を撫でて、一緒に笑った今日のことを

僕は決して忘れないよ
君が話した、ひとつひとつの言葉
君が笑った瞬間
君が泣いた瞬間

だけど君は、あまり僕のことを覚えてはいないはずだ
でもせめて、これだけは覚えていて
僕が生きていたこと
僕がいたから、君が生まれたんだという奇跡を――

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

353　ラストムービー

なんにしても、最後っていうものは物悲しいものだ。

四十年続いた町の小さな映画館も、大型映画館の設立で潰れていき、とうとううちも映画館を畳むこととなった。

それもそのはず、一日に十人来ればいいほうだなんて、ここ数年は赤字続きの操業だった。それでも私はこの映画館が好きだし、この仕事を誇りに思っている。

だが、設立当時は若さ溢れる青年だった私も、もはやすっかり髪が真っ白になったお爺さん。それでも妻と二人つましく生きていれば幸せなのだが、赤字の上に都市開発まで加わり、とうとうここを壊さねばならない。都市開発には反対したいが、客で大賑わいならまだしも、もう常連客だけではやっていけない実情があるのだ。

「館長。最後の回、開場しますね」

妻の言葉に、私は静かにうなずいた。

ひとつ前の回では、親子連れが二組だけ。まさかそれが最後の客だったならば、私はしばらく立ち直ることが出来ないかもしれない。

だが、妻の言葉を皮切りに、古びた座席にどんどん人が入ってゆく。

妻はチケット販売、私は映写担当。二人三脚で続けてきたこの映画館の最盛期を見るように、私は我が目を疑った。

「館長、来たよ！」

映写室に向かって手を振った人物に、私は映写室を抜け出して、客席へと走っていった。

客席には、さっき手を振ってくれた同級生でもある八百屋のマサ、他にも商店街の人たち、いつもの常連客に加え、初めて見る顔もある。

「こ、これは一体どういうことだ？　マサ、おまえ、店はいいのか？」

基本的に商店街の人たちは、同じ時間に仕事をしているので、休日たまに顔を見せてくれる以外にない。

「なに言ってんだ。この映画館は、俺たちの青春でもあるんだぞ。カミさん口説いたのもここだし、初めて息子と来た映画館もここだ。最後くらい、一緒に見届けさせてくれよ」

「マサ……」

マサの言葉に頷くみんなに、私は涙を堪え、お辞儀をした。

「では、そろそろ開演時間となります！　みなさん、最後の上映をお楽しみください！」

映写室に戻り、私は堪えきれず涙を流した。

こんな小さな映画館に、流行の映画は回ってこない。私が最後の上映に選んだ映画は、名作中の名作だ。何度も上演してみんなも見ているはずなのに、ところどころからすすり泣く声が聞こえる。

みんなこの映画館の閉館を惜しんでくれていると思うと、私も嬉しかった。

「ありがとうございました」

妻と頭を下げながら、私たちは最後の客を見送る。

「なに言ってんだ。二人、よく頑張ってくれたよ。閉館は残念だ。だが、俺たちは忘れないよ。ここに映画館があったことも、館長夫妻の頑張りもさ。ここがなくなったって、俺たちは仲間だろうが」

「ありがとう……本当にありがとう……！」

感無量で泣きながら、私はマサを初めとする最後の上映に来てくれたお客さん全員と握手をした。

こうして、最後の上映を終え、劇場の主電源を切るのが名残惜しい私を悟って、数人が残ってくれた。

「さよなら……ありがとう」
ともに苦楽を歩んだ映画館にそう言って、私は数人の仲間が見守る中、劇場の主電源を切った。
空しいが、別れとはそういうものだ。

だが、物語はここでは終わらない。
後日、私のところへ届けられた封筒の差出人には、マサの息子の名前が書かれていた。中に入っていたのは、一枚のＤＶＤ。私は家の小さなテレビで、その中身を確認した。
ＤＶＤに映っていたのは、閉館当日の様子だ。映画館の外、最後のお客さんの顔触れ、チケットを切る妻の姿、客席から見える映写室にいる私、私の最後の挨拶など……一部始終を撮ってくれていた内容に、私はもう一度涙を流す。
「あの映画館は終わってしまったけれど、私たちの人生はこれがラストムービーじゃない。これからも、二人で歩んでいこうな」
そっと頷く妻と寄り添い、私は何度もその映像を見続けていた。

354　LOVE　AFFAIR

君は僕から、三歩後ろを歩く。
見る人から見れば、知り合い。見る人から見れば、他人。
決して街の中で手を繋ぐようなことなど出来ないのに、
彼女は僕にただ黙ってついてくる。

妻と不仲なわけではない。愛していないわけでもない。
だが僕は、この年下の彼女に、身も心も溺れているのは事実だ。
何かを壊したいわけでも、奪いたいわけでもないのだが、
僕がしていることといえば、社会に反する許しがたい行為なのだろう。

わかってはいても、この関係を僕から崩すということが出来ないのは、
仕事から、家庭から、繰り返すだけの毎日から、逃げ場が一つもないということにある。
そんなことはただの言い訳だともわかっている。
だが僕は、細く儚いその身体を、失いたくはない。

ああ、君も空しさを感じていることだろう。
時に泣き、時に笑い、そんな表情を見せるのもまた、二人きりの時だけ。

君が何も望んでいないわけではないことくらい、わかっている。
だが僕は、君の優しさに年上だということも忘れ、甘えているんだね。

世界中から置き去りにされた二人きりのこの場所で、
何も考えずに、このままずっと溺れていたい。
それが淡い夢で、いつか悪夢が襲って来ようとも、
今はただ、このゴミ屑のような都会の片隅に隠れていよう。

朝が来れば、またいつもの他人同士。
敬語を使い、目を逸らす。
プライベートでは、電話もメールも出来ず、週末も会えない。
ああ、いっそこの罪深き心を、君の愛で殺してください。

355　虹の彼方へ

冷たい雨のその先に、虹の世界がありました
思わず見上げた空の上、青系色が広がりました
足早に過ぎゆく人並みが
ひとりひとりと、足を止めます
私の目に映る同じ世界
同じ時を過ごす人たち
ひとりひとりに、共有されてゆく
あの虹の向こうには、なにか素敵なことがある
荒んだ街とこの心に
小さな希望を与えておくれ

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

ここから下は、本文２００文字以下エラー回避のための文字列です。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

356　にほんむかしばなしふう

あれは、ある寒い夜のことでした。
村はずれに一人きりで住んでいるおばあさんが、夕飯の片付けをして戸締りをしている最中、トントンと戸を叩く音がしたのです。
「はて、こんな時間に誰かしら」
戸を開けると、そこには小さな男の子が二人おりました。
「一晩泊めてくださいな」
おばあさんがどこの子かと尋ねましたが、子供たちは首を振るばかり。
帰すにはあまりにも暗く寒い夜でしたので、おばあさんは二人を家の中へと招き入れました。

次の日の朝、起きた時にはすでに子供たちの姿はなく、ただ綺麗に畳まれた布団だけが、夢ではないことを物語っておりました。

その日の午後、おばあさんが畑仕事から帰ると、家の戸口には葉に包まれた草団子が置いてありました。
「はて、誰が置いたんだろうか」
おばあさんは疑問に思いながらも、あの子供たちからのお返しかもしれないと思い、草団子をいただきました。

それから数日後の夜、またも戸を叩く音が聞こえ、戸を開けると、そこには先日の子供のほかにもう一人、子供が立っておりました。
「一晩泊めてくださいな」
三人の子供たちがそう言います。
おばあさんは気味が悪いのもありましたが、愛らしいその顔に苦笑し、中へと引き入れました。
また次の日も、朝になると子供たちの姿はありませんでしたが、

やはり布団は綺麗に畳まれておりました。

その日の昼頃、おばあさんは先日、子供たちが来た次の日に、家の戸口に草団子が置いてあったことを思い出し、早々に畑仕事を切り上げて、家へと帰っていきました。

すると家の前に、キツネが三匹、なにやらゴソゴソと動いています。

おばあさんは物陰に隠れて、そのまま様子を窺いました。

それからすぐにキツネはどこかへ消えていきましたが、戸口には案の定、草団子が置かれているではありませんか。

「なんと、律儀なキツネだろうか」

おばあさんは愛らしささえ覚えて、草団子を有難く受け取りました。

数日後。

「そろそろ来る頃かしら。今度は四匹来るかしら」

きっとそろそろ、また子供たちが来ると思い、おばあさんは部屋を暖めてその子らを待ちました。

しかし、子供たちはいつまで経っても来る気配を見せません。

「どうしたのかね」

おばあさんは疑問や心配を抱えながら、来る日も来る日も子供たちを待ちました。

それからしばらくたったある日、村の猟師がこんな話をしているのを聞きました。

「この間、キツネを仕留めたと思ったんだが、逃げられた」

おばあさんは真っ青になって、キツネの巣穴を探しに回りました。

「おおい、キツネやい。何もしないから出ておいで」

そう呼んでも、キツネは一向に姿を見せません。

何度も呼んでいるうちに、おばあさんの家の前に、最初に来た二

人の子供が立っているのが見え、おばあさんは駆け寄りました。
「おおい、おまえたち。いったい何をしていたんだい。心配したんだよ」
そう言うと、子供たちは悲しそうな顔を見せます。
「仲間が怪我をして重傷なんです。傷薬を分けてもらえませんか」
子供たちの言葉に、おばあさんは何度も頷きました。
「おまえたちがキツネだということはわかっているよ。もしかして、猟師に撃たれたのかい？」
おばあさんの言葉に驚いた様子で、二人の子供はお互いに顔を見合わせますが、やがておばあさんの顔を見て頷きました。
「はい。銃で撃たれたのです」
「やっぱりそうかい。この家は暖かいし安全だよ。これ以上、村の人に見つかったら危ない。撃たれた仲間をここまで連れておいで」
「でも、すっかり人間を怖がっていて、巣穴から連れ出すことが出来ません」
おばあさんは納得し、可哀想だが傷薬だけを与えて帰しました。

次の日、また戸口に草団子が置いてあったので、おばあさんは森に向かって叫びました。
「キツネやーい。何もしないから出ておいで。草団子一つこしらえるのも大変な苦労だろう。私は見返りなんか求めちゃいない。話し相手で十分だ」
そう言うと、キツネがあとからあとから顔を出し、おばあさんは驚きました。
「おまえたち、そんなに仲間がいたのかい」
すると、怪我をしたキツネが、足を引きずりながら歩いてきました。
「傷薬をありがとうございました。おかげですっかり治りました。今年はとても寒い日が続くので、一番小さな子供たちが、夜は寝床をお借りしました。あなたが村一番の優しい人だと知っていたから

です」

その言葉にすっかり上機嫌になり、おばあさんは満面の笑みを浮かべて頷きます。

「怪我の治りが早くてよかった。もう好きなだけここにいていいんだよ。これだけ家族がいれば、一人暮らしも楽しいもんだ」

以来、おばあさんとキツネたちは一緒に時を過ごし、キツネは必要とあれば人間に姿を変え、おばあさんの仕事を手伝ったりもします。

おかげでおばあさんはだんだんと金持ちになり、キツネのための家を持つことも出来ました。

今ではキツネは、おばあさんの大事な家族なのです。

357　君は僕のスーパーウーマン

どちらかといえば泣き虫で、半身僕に隠れるように寄り添う君は、
僕が困った時、悩んでいる時には、僕よりも強くなる。
堂々とした表情で、明るく笑う君に、
まんまと乗せられるように、僕自身にも力がみなぎる。
きっと僕が倒れたら、君は本当に空でも飛ぶ勢いで、
僕を全力で支えてくれるだろう。
君は僕のスーパーウーマン。
ずっと隣で笑っていて。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
ここから下は、本文200文字以下エラー回避のための文字列です。
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

358　いのち

いのちはどこからくるのでせうか
わたくしが父さまと母さまから生まれてきたならば
わたくしにとっての神は　父さまと母さまといふことにならうか

では　父さまと母さまをつくられたのは
父さまの　父さまと母さま……
母さまの　父さまと母さま……

それでは　あの野の花のいのちはどこからきたのでせうか
花粉をつけたミツバチか　それとも運んだ春風か
それでは　ミツバチのいのちはどこからきた
あの風はどこから吹いた

そう考えてみると　なんといのちといふものは

たくさんのいのちに助けられ　支え合って生まれたものなのか
あなたにも知ることができませう

その途方もない生命の連鎖を
ただ私利私欲のためだけに　誰か人の手によって絶やすことがあれば
いつか私たちを支えるいのちはなくなり　死ぬ

この目の前にある食物の源に　かつて魂があったことを忘れずに
私は私が生きるために　この生命を有難く食しましょう
そして私が死んだら　どうか自然に還れますように　祈る

あなたのいのちはどこからきたのでせうか
今日もどこかでいのちが生まれているといふのに
今日もどこかでいのちが絶えている――

359　クリスマスの奇跡

最後の食事が終わった。

ジェニファーは貧しい家に住む少女。七人兄弟の三番目だが、兄は出稼ぎでおらず、姉は貧しい生活に耐え切れずに家を出て行った。父親を事故で亡くし、母親は過労で倒れた今、ジェニファーは兄弟たちのために一家を支える人間となっていた。

「姉ちゃん、食べないの？」

兄弟たちの言葉に、ジェニファーは微笑む。

「私はお屋敷で食べたからいいのよ」

裕福な家で働くジェニファーだが、食事は賄ってもらえない。だが、嘘をついてでも兄弟たちに心配はかけたくなかった。

しかも、今日はクリスマスイブ。食事抜きが当たり前になってしまっているこの家で、今日だけは食べさせてあげたかった。

「サンタさん、今年は来るかなあ」

「来ないよ。来たことないもん」

兄弟たちの言葉に、ジェニファーは苦笑する。父親が生きていた頃は、ジェニファーもクリスマスプレゼントをもらっていたが、この子たちはそれすら知らない。

「じゃあお姉ちゃん、そろそろ仕事に行くから。いい子にするのよ」

そう言って、ジェニファーは夜の街を出ていく。

裕福な家で働いているのは本当だが、家主に会ったことはない。家主が寝静まった頃に、屋敷中の掃除をする。それがジェニファーの仕事だった。

夜中から朝方までかかる大仕事だが、その努力は誰の目に触れることもない。それでも、ジェニファーは必死に働いていた。

屋敷に向かう途中、ジェニファーは馬の嘶きで振り向いた。石畳の街を全速力で走る馬車に、慌てて身を避ける。この街では日常茶

飯事のことだが、それでもやはり怖い。
だが、気を取り直して立ち上がると、ジェニファーは馬車が落としたと見られる袋を見つけた。中を見ると、数えきれないほどの金貨が入っている。
「すごい……」
ふと、ジェニファーの中に暗い影が落ちた。
このほんの一握りでも金があれば、病に倒れた母親を病院に入れることが出来る。兄弟たちに腹いっぱいの食事の上に、クリスマスプレゼントまで買ってやれるかもしれない。人を引き殺すところだった馬車の主だ。そのくらいは許されるのではないか。
そう思ったところで、ジェニファーは空しく息を吐いた。
誰にも見られていないとはいえ、急に裕福になったらどこからでも足がつく。第一、自分にそんな大それたことは出来るはずがないと思い、そのまま交番へと出向いた。
「あの……」
交番に行くと、すでに来ていた若い男が振り向いた。
「それは僕のものだ！」
間髪入れずに、男はジェニファーの袋を奪い取る。
「拾ったんです！　馬車から落ちたようです」
犯人と疑われる前に、ジェニファーはきっぱりとそう言った。
すると、男は何度も頷く。
「無礼なことをした……ありがとう。よく届けてくれました。今月の売上金がすべて入っていたんだ」
「あなたのものだという証拠は？」
男が素直にジェニファーに礼を言った直後、警官が疑いの目でそう尋ねる。
「ここに僕の名が刺繍されているのがわかりますか。ロベル・レガート。僕の名前です」
その名前を聞いて、ジェニファーは目を見開いた。ジェニファーの働く家主と同じ名前だったのである。

「レガート様。この先のお屋敷のレガート様ですか？」
「……そうだけど？」
「ああ、それでは私のご主人様でしたか。私は夜間清掃のお仕事をさせていただいている者です。お届け出来てよかった……」
「じゃあ、君はうちの従業員だったのか。ではお礼をさせてくれ」
レガートの申し出に、ジェニファーは何度も断ったが、その熱意に押され、母親の薬代と兄弟たちへクリスマスケーキのプレゼントを願った。それはあの大金の中にある、金貨一枚分で十分に足りる。
朝起きた兄弟たちの喜びようは、半端ではなかった。それは、レガートの心意気で、兄弟全員分のクリスマスプレゼントが用意されたからである。
「これは君に……本当に助かった。あの金がなくなれば、大きな契約がご破算になるところだったんだ」
感謝の言葉とともにレガートがジェニファーに差し出したものは、ひとつの鍵であった。
「うちの離れにある鍵だ。家族全員、そこへ来てはどうだろうか。そして君を、夜間清掃の従業員ではなく、きちんと屋敷で雇いたい。ゆくゆくは兄弟たちもね」
就職難の世の中、家族ごと面倒を見てくれるという。それは願ってもない申し出だった。
それから毎年、ジェニファー家族はレガートとともにクリスマスを祝っている。そして数年後には、二人は本物の家族になった。クリスマスの奇跡――。

360　いのり

明日が本当に来るかなんて、誰にもわからない。
明日どころか一瞬先に何が起こるかなんて、誰にもわからない。
そう、神様だって――。
それなのに、人は日常の中で大切なものを忘れていく。
それがなんなのかということも忘れて、失った時にはもう遅い。
ねえ、神様――。
あなたがいてもいなくても、私は祈り続けます。
だから忘れないでいて。今、私がここに生きているということを。
ああ、神様――。
他の誰が忘れても、私は忘れませんように。
当たり前の今日を、悔いなく生きられますように。
ええ、神様――。
私は今日も忘れません。
愛を、感謝を、優しさを。大切な人と生きるために。

361　ブレーキ

年下の彼は、憂いだ目で私を見つめる。

彼の中にも迷いや我慢を強いられていることが多々あるんだろう。

それがわかっていても、私は年の差を肯定することも否定することも出来ずにいる。

ただ感情のままに動くことは危険だし、この年にもなればブレーキは嫌でもかかる。

暗い影を落とした私の頬に、彼の手が触れた。

一緒にいても、離れてみても、これが恋だと実感せざるを得ない。

あなたが年上だったならば、私は体ごとこの身を預けて、任せることが出来たかしら。

それを悟ったかのように、強引な腕で唇を奪った彼は、まっすぐに私を見つめる。

そんな目で見ないで。

後ろ暗いことがあるかのように、私は目を逸らすことしか出来ない。

でも彼は、私の手を握ったまま、優しいまでの微笑みを見せる。

こんな私を、それでも追いかけてくれるというの？

だったら私も、プライドや世間体などすべてを捨ててしまおうか。

それが出来るには、まだ少し時間がかかるだろう。

でも、彼となら――。

動けずにいる私を不安に思ったのか、彼もそれ以上を踏み出せずにいる。

そんな彼に、今度は私から彼の首筋に唇を寄せた。

362　最期の告白

夫婦になって五十年。

一緒に年老いてきたけれど、見合い結婚をし、出産、子育て、定年退職など……さまざまな行事を共に過ごしてきたものの、ただの一度も、愛しているとかそういう言葉を聞いたことがない。でも、それが私たちの時代では当たり前のようになっているし、彼が私のことを大切に思っていることはわかるので、私はこの人生に満足している。

でも今、目の前の彼を見て、私は人生を振り返る。

最近の彼はいわゆる痴呆が進み、この間は徘徊し、町内中を騒がせてしまった。

世話をするのは正直疲れたけれど、苦ではない。ただこのまま私のことも忘れてしまうのかと思うと、やはり寂しさから逃れられない。

「今日は少しすっきりしてるんだ。何か書くものはあるかな」

彼が言うので、私は彼に紙とペンを渡すと、彼はすらすらと文字を書き始めていた。

今は調子のいい日はこんな感じだが、まったくわからなくなる日もあり、浮き沈みが激しい。

「何を書いているの？」

聞いてみたけれど、彼は答えてはくれない。

やがて書き終わった彼は、早々に封筒を取り出し、封をしてしまった。

「誰かに手紙ですか？」

そう聞いてみたけれど、彼は微笑し、封筒に「遺書」と書いた。

「あなた……」

「俺になにかあったら、これを読みなさい」

そう言って、彼は茶箪笥の引き出しにそれをしまう。
私はなんだか悲しくなってしまい、もうそれ以上何も言えなくなってしまった。

それから何年も月日が経ち、私たちはそれからも長く寄り添うことが出来た。
そして先日、彼が先に旅立ち、私はあの時の遺言書を思い出して茶箪笥を開けた。中には少し古びた茶封筒。私もそろそろ後を追うだろうに、その遺書を開けてみる。

思えば長い人生でした。
ですが、あなたのおかげで実に有意義な人生でした。
いつも家や僕のことを任せきりにしてすみません。
あなたと結婚できてよかった。
こんな僕についてきてくれてありがとう。
ずっと好きでしたよ。
僕は先に逝って待っています。
あなたはもう少し長生きして、疲れたらこちらへいらっしゃい。

当時すでに震えた彼の字は、遺書という名のラブレターだった。
私とって最初で最後の、彼からの告白でもある。

363　オセロ

私の中で、何か得体の知れないものがうごめいているのがわかる。わかっている。それが何者でもなく、私自身であるということを。

だが、その正体の名は知らない。

闇か、悪魔か、怪物か――なんにしても、美しいものではないだろう。

正しいことがしたい。人に優しくありたい。

そんなことは、私じゃなくても思うことかもしれないが、

そう思う反面、おそろしく残虐で醜いものが、私の中にもあるようだ。

漫画の中のキャラクターのように、私の脳裏で天使と悪魔が言い争っている。

辛うじて、私は天使と手を組んでいるはずだが、

いつそれが悪魔に寝返るか、私自身にもわからないのだ。

ならばせめて、私の手で殺してしまおうか。

答えは割と身近にある。

誰の手も借りず、誰にも迷惑をかけないよう、私自身の手で、私は私を殺そうか。

天使と悪魔が、今も脳裏で囁いている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8234p/

365+　【3分間のショートストーリー】

2011年12月28日08時47分発行